文学部シラバス

平成28年度
［2016年度］

大阪市立大学
文学部

www.lit.osaka-cu.ac.jp

平成 28 年度学年歴

学　年　開　始	4月　1日（金）	
新入生ガイダンス	4月　1日（金）	
入　学　式	4月　4日（月）	
新入生健康診断	4月　7日（木）	
前期授業開始日	4月　8日（金）	
創　立　記　念　日	6月　1日（水）	（通常通り授業実施）
授業・試験期間	7月 25日（月）	～8月　5日（金）
夏　季　休　業	8月　5日（金）	～9月 15日（木）
研　修　期　間	9月 16日（金）	～9月 30日（金）
後期授業開始	10月　3日（月）	
振　替　授　業　日	11月　8日（火）	金曜日の授業を実施
冬　季　休　業	12月 23日（金）	～1月　7日（土）
振　替　授　業　日	1月 17日（火）	金曜日の授業を実施
授業・試験期間	2月　1日（水）	～2月 14日（火）
研　修　期　間	2月 15日（水）	～3月 19日（日）
春　季　休　業	3月 20日（月）	～

※振替授業日　―　各曜日に一定の授業回数を確保するため、授業回数が多い曜日に授業回数が少ない曜日の授業を行う。

※　研　修　期　間　―　集中講義や補講などが行われることがある。

※授業・試験期間　―　定期試験や授業を行う。

振替試験日及び試験期間について

近年、祝日の増加・変更や大学行事に伴う休講措置等により、1セメスターで授業・試験にあてることのできる日数が減少しています。そこで、本学では振替授業（・試験）日を設けるとともに、さらに回数が不足する場合は、休業期間や研修期間に授業・試験を実施する場合があります。　（平成28年度においては8月5日が夏季休業期間ですが、授業・試験を実施）

☆　参　考

・新入生歓迎祭（ふたば祭）開催に伴う休講

4月21日（木）5時限、22日（金）3～5時限

［歓迎祭開催日程：4月21日（木）5限～、22日（金）午後～、23日（土）終日］

・大学祭（銀杏祭）開催に伴う休講

11月2日（水）5時限、11月4日（金）全時限

［大学祭開催日程：11月3日（木）～11月6日（日）］

・センター入試準備に伴う休講

平成29年1月13日（金）全時限

［センター試験：1月14日（土）・15日（日）］

平成 28 年度カレンダー

〔前期〕

	日	月	火	水	木	金	土
4月						1	2
	3	4	5	6	7	8	9
	10	11	12	13	14	15	16
	17	18	19	20	21	22	23
	24	25	26	27	28	29	30

1日(金)　新入生ガイダンス
2日(土)　新入生TOEFL
4日(月)　入学式
7日(木)　新入生健康診断
8日(金)　前期授業開始
21日(木)　新歓祭5限休講
22日(金)　新歓祭午後休講

	日	月	火	水	木	金	土
5月	1	2	3	4	5	6	7
	8	9	10	11	12	13	14
	15	16	17	18	19	20	21
	22	23	24	25	26	27	28
	29	30	31				

	日	月	火	水	木	金	土
6月				1	2	3	4
	5	6	7	8	9	10	11
	12	13	14	15	16	17	18
	19	20	21	22	23	24	25
	26	27	28	29	30		

	日	月	火	水	木	金	土
7月						1	2
	3	4	5	6	7	8	9
	10	11	12	13	14	15	16
	17	18	19	20	21	22	23
	24	25	26	27	28	29	30
	31						

25日(月)～8月5日(金)
授業・試験期間

	日	月	火	水	木	金	土
8月		1	2	3	4	5	6
	7	8	9	10	11	12	13
	14	15	16	17	18	19	20
	21	22	23	24	25	26	27
	28	29	30	31			

5日(金)～9月15日(木)
夏季休業期間
(ただし5日(金)は
授業・試験を実施)

	日	月	火	水	木	金	土
9月					1	2	3
	4	5	6	7	8	9	10
	11	12	13	14	15	16	17
	18	19	20	21	22	23	24
	25	26	27	28	29	30	

16日(金)～30日(金)
研修期間

〔後期〕

	日	月	火	水	木	金	土
10月							1
	2	3	4	5	6	7	8
	9	10	11	12	13	14	15
	16	17	18	19	20	21	22
	23	24	25	26	27	28	29
	30	31					

3日(月)　後期授業開始

	日	月	火	水	木	金	土
11月			1	2	3	4	5
	6	7	8	9	10	11	12
	13	14	15	16	17	18	19
	20	21	22	23	24	25	26
	27	28	29	30			

2日(水)　大学祭5限休講
4日(金)　大学祭休講

8日(火)　振替授業
(金曜の授業を実施)

	日	月	火	水	木	金	土
12月					1	2	3
	4	5	6	7	8	9	10
	11	12	13	14	15	16	17
	18	19	20	21	22	23	24
	25	26	27	28	29	30	31

23日(金)～1月7日(土)
冬季休業期間

	日	月	火	水	木	金	土
1月	1	2	3	4	5	6	7
	8	9	10	11	12	13	14
	15	16	17	18	19	20	21
	22	23	24	25	26	27	28
	29	30	31				

13日(金)　センター試験に伴う
休講措置

17日(火)　振替授業
(金曜の授業を実施)

	日	月	火	水	木	金	土
2月				1	2	3	4
	5	6	7	8	9	10	11
	12	13	14	15	16	17	18
	19	20	21	22	23	24	25
	26	27	28				

1日(水)～14日(火)
授業・試験期間

15日(水)～3月19日(日)
研修期間

	日	月	火	水	木	金	土
3月				1	2	3	4
	5	6	7	8	9	10	11
	12	13	14	15	16	17	18
	19	20	21	22	23	24	25
	26	27	28	29	30	31	

20日(月)～春季休業期間

目　　次

平成 28 年度学年暦 …… i

平成 28 年度カレンダー …… ii

履修上の注意
―平成 27 ～ 25 年度入学生用『文学部第 1 部科目履修の手引き』以降の変更・追加説明― …… 1

「文学部専門教育科目表」および「文学部開講科目要綱」…… 4

教員名簿 …… 283

教室見取り図 …… 292

杉本キャンパスマップ …… 298

文　学　部

・哲学歴史学科専門教育科目

・人間行動学科専門教育科目

・言語文化学科専門教育科目

・共　通　専　門　教　育　科　目

・教　職　に　関　す　る　科　目

・博　物　館　に　関　す　る　科　目

平成 27 ～ 25 年度入学生用『文学部第 1 部科目履修の手引き』以降の変更・追加説明

本冊子（『平成28年度文学部開講科目要綱〈シラバス〉』）は、平成28年度に提供される授業科目の一覧とその科目要領〈シラバス〉を示すものであって、各学年のカリキュラムは掲載していない。それぞれの学生が卒業までにどの科目の単位を修得すべきかについては、平成27年、平成26年および平成25年の４月に入学した学生にあっては、それぞれ入学した年度に配布した『文学部第１部科目履修の手引き』を参照すること。

以下では、平成25年度入学生用の『文学部第１部科目履修の手引き』（以下『手引き』という）の配布以降に生じた変更や追加説明のうち主なものを挙げた。なお、平成24年度以前の入学生については、学生サポートセンター文学部教務担当に確認すること。

■平成27年度入学生用『文学部第１部科目履修の手引き』以降の変更・追加説明

・【新設科目】平成28年度より、日本史コース専門科目として「大阪の地域・文化演習」、学部共通科目として「外国大学科目Ⅰ～Ⅳ」が新設された。

・【卒業論文演習Ⅰの扱い】卒業論文を提出しなかった場合、従来抹消されていた「卒業論文演習Ⅰ」の修得単位は抹消されないことになった。そのため、４年次前期に「卒業論文演習Ⅰ」を修得し後期から海外留学等で１年間休学した場合も、翌年の後期に「卒業論文演習Ⅱ」を履修し卒業論文を作成し提出すれば５年で卒業することが可能になった。

※ただし、「卒業論文」と「卒業論文演習Ⅱ」の履修登録は、卒業論文を提出する年度の前期に行わなければならない。その際、Web履修登録システムが利用できない環境にいることが予測できる場合は、履修登録ができない可能性があるため、必ず事前に学生サポートセンター文学部教務担当へ申し出ること。

・【海外語学講習会の単位認定（新修外国語）】サンクト・ペテルブルク国立大学ロシア語夏期講習会の修了者に、ロシア語特修科目の２単位を認定することが可能になった。

・【海外の教育機関で修得した単位の認定】本学や本学部が学術交流・学生交流協定を結んだ海外の教育研究機関などで修得した単位は、新設された「外国大学科目Ⅰ～Ⅳ」など自由選択科目を中心に、本学の科目として認定することがある。担当教員に確認すること。

・【追試験に関する規定の改正】定期試験の追試験に関する規定が以下のように改められた。

「定期試験の際、①「学校において予防すべき感染症」に罹患し出席停止措置の対象になった学生には、出席停止期間に実施されたすべての科目の試験について、追試験を実施する。この場合、「「学校において予防すべき感染症」罹患証明書」と「出席停止措置による欠席科目報告書」を提出すること。

また、②卒業単位として認められる外国語科目については、上記以外の病気その他やむをえない事情により欠席し、受験できなかった学生に対しても、追試験を行うことがある。この場合、当該科目の試験終了後１週間以内に「追試験願」（所定の様式に記入し、病気のときは医師の診断書、その他の事故のときは適当な証明書を添付する）を、学生サポートセンター文学部教務担当に提出しなければならない。裁判員として裁判に参加したために欠席した場合は、別途定める

条件に従うこと。

追試験の該当者、実施期日等は、定期試験終了後に掲示等で周知する。」

・【成績異議申立制度の新設】以下のような「成績異議申立制度」が新設された。

「学生は、当該期の成績評価について、次に該当する場合に限り当該学部等へ異議を申し立てることができる。

（1）成績の誤記入等、明らかに担当教員の誤りであると思われるもの

（2）シラバスや授業時間内での指示等により周知している成績評価の方法から、明らかに逸脱した評価であると思われるもの

下記の手続きをよく読み、学生サポートセンター文学部担当へ申し出ること。異議申立書の様式は、異議申立期間にポータルサイトに掲載する。

なお、これは単に成績評価に納得が行かない者が、問い合わせ、また異議申立を行う制度ではないので、注意すること。

異議申立の手続き

（1）異議を申し立てようとする学生は、成績評価についての異議申立書を学部等に提出しなければならない。また、担当教員への直接の異議申立は認めない。

（2）異議申立期限は、成績開示日から原則として3日以内（日曜日、土曜日及び国民の祝日に関する法律に規定する休日を含めない。次項において同じ。）とする。

（3）担当教員は異議申立書受理日から原則として7日以内に、回答書により学部等へ回答する。学部等は、異議申立書受理日から原則として7日以内に、成績評価についての異議申立にかかる回答書により学生への回答を行うものとする。

（4）異議申立への回答に対しての再異議申立は認めない。

■平成26年度入学生用『文学部第1部科目履修の手引き』以降の変更・追加説明

・【新設科目】平成27年度より、日本史コース専門科目として「大阪の歴史演習」、学部共通科目として「日本文化発信のための英語」が新設された。

・【副専攻制度】平成27年度より、学部・学科で修得した専門分野の知識を、さらに広く活用する能力を養うため、「副専攻」制度を設けた。平成27年度は「グローバルコミュニケーション（GC）副専攻」「地域再生（CR）副専攻」の2つの副専攻が開設される。これら副専攻の具体的な内容については、別冊の副専攻ガイド冊子を参照すること。また、副専攻に関心をもち、積極的に受講したいと考える方のために、各副専攻にてガイダンスが開かれる。ガイダンス開催時期についても、別冊の副専攻ガイド冊子を確認すること。

■平成25年度入学生用『文学部第1部科目履修の手引き』以降の変更・追加説明

・【追試験】『手引き』54頁の追試験の実施条件を示した文章を以下のように変更し、対象科目数の制限（これまでは3科目以内）をなくした。

「卒業単位にかかわる外国語科目については定期試験の際、病気その他やむをえない事情により欠席し、受験でなかった学生に対し、追試験を行うことがある。」

・【新設および廃止科目】平成26年度より、学部共通科目として「観光文化論」「観光文化実践演習」

が新設された。

・【人間行動学科教育学コース関連科目の標準履修年次の一部変更】平成26年度から「教育方法学Ⅱ」「比較・国際教育学」の標準履修年次が「２・３年次」から「３年次」に、「教育行政学」の標準履修年次が「２～４年次」から「３・４年次」に変更になった。この原則は、平成25年４月以降に入学した学生に適用される。

・【外部試験等による外国語の単位認定】『手引き』52頁「海外語学講習会の単位認定（英語）」に追加された文言は次のとおりである（下線部分）。

「認定科目については、「ＴＯＥＦＬ 80」または「ＴＯＥＩＣ 650」を認定する。既にこの２科目を取得している場合は、ＴＯＥＩＣ80+ を除く他のＡＣＥ科目を充てることができる。」

・【外部試験等による外国語の単位認定】『手引き』52頁「海外語学講習会の単位認定（新修外国語）」に追加された文言は次のとおりである（下線部分）。

「ハンブルク大学ドイツ語夏期講習会、セルジー・ポントワーズ大学フランス語夏期講習会、サンクト・ペテルブルク国立大学ロシア語夏期講習会、華東師範大学対外漢語学院中国語研修プログラム、台湾大学国際華語研究所中国語短期研修プログラム、ソウル市立大学校サマースクールの各修了者には、申請に応じて、それぞれ新修外国語のドイツ語特修科目、フランス語特修科目、ロシア語特修科目、中国語特修科目、朝鮮語特修科目、各２単位を認定する。」

「文学部専門教育科目表」
および
「文学部開講科目要綱〈シラバス〉」

「文学部専門教育科目表」および「文学部開講科目要綱〈シラバス〉」は、哲学歴史学科、人間行動学科、言語文化学科の必修科目および選択必修科目・自由選択科目、文学部共通専門科目、教職に関する科目、博物館に関する科目の順に掲載する。なお、以下の点に注意すること。

1.「文学部専門教育科目表」について

1）「教員名」欄の＊印は特任教員、［　］は非常勤講師であることを示す。

2）「標準履修年次」欄の数字は、履修することが望ましい年次を示す。当該年次に達しない学年の学生は、他学部も含めて、その科目を履修することができない。

3）「単位数」欄の数字は、前期もしくは後期の授業を履修し、試験等に合格した場合に認定される単位数である。ただし、卒業論文欄の数字は、卒業論文の提出およびその内容に関する面接試問の結果によって与えられる単位数、卒業論文演習欄の数字は、卒業論文の単位が認定されたことによって与えられる単位数である。

4）「他学部履修」欄に「可」とある科目は、他学部学生の履修受験を認める科目である。その場合、標準履修年次に十分留意すること。

5）「備考」欄をよく参照すること。

2.「文学部開講科目要綱〈シラバス〉」について

1）**科目ごとのシラバスの「開講期」欄には開講期、曜日、時限を記載しているが、シラバスと『時間割表』が違う場合は、『時間割表』が優先する。また、時間割は変更することがあるので、必ず、学生サポートセンター１階文学部掲示板に掲示する「時間割表」で確認すること。**

2）原則として「文学部専門教育科目表」の順およびコースの順にその要綱を掲載する。

3.科目ナンバリングについて

本年度より、大阪市立大学で開講されているすべての科目に9桁のアルファベットおよび数字によるナンバーづけ（ナンバリング）が行われている。文学部専門教育科目に関するナンバリングの基本的な考え方は以下の通り。なお、教職科目については別の設定になるので注意すること。

1）最初のアルファベット2桁は、科目の提供主体である文学部・文学研究科と学科・専攻を意味するＬＡ（哲学歴史学科）・ＬＢ（人間行動学科）・ＬＣ（言語文化学科）とし、学部共通専門教育科目はＬＸとする。教職に関する科目で全学共通の科目はＫＫ、文学部提供の科目はＫＬ

とする。博物館に関する科目はＭＵとする。

２）３～５桁目のアルファベットはコースおよび専修を表す。

・哲学歴史学科:哲学＝ＰＨＬ、日本史＝ＪＰＨ、世界史＝ＷＨＥ（東洋史学）ＷＨＷ（西洋史学）

・人間行動学科:社会学＝ＳＯＣ、心理学＝ＰＳＹ、教育学＝ＥＤＵ、地理学＝ＧＥＯ

・言語文化学科:国語国文学＝ＪＰＮ、中国語中国文学＝ＣＨＮ、英米言語文化＝ＥＮＧ、ドイツ語圏言語文化領域＝ＤＦＤ、フランス語圏言語文化領域＝ＤＦＦ、言語応用＝ＬＮＧ、表現文化＝ＡＲＴ、アジア都市文化学＝ＡＳＡ

学科内で共通の基礎科目や学部共通専門教育科目はＧＥＮとする。

・教職に関する科目、博物館に関する科目は内容に応じた記号をつける。

３）６桁目は、学修マップ上の位置づけを、以下の４段階で表示する。

学科基礎科目＝１

１年次から履修可能な専門科目＝２

コースの選択必修科目など２・３年次から履修の科目＝３

４年次に**履修可能な専門**科目＝４

４）７桁目は、標準履修年次の最小学年を表す。

５）８～９桁目は科目特定番号であり、科目表の配列順になっている。

専門教育科目、共通専門教育科目、教職・博物館に関する科目

※「—」の表示がある科目は履修できないので注意すること。

掲載番号	科目名	旧課程科目名（H21年度以前入学者）	教員名	標準履修年次	単位数	他学部履修	備考
	卒業論文		担当教員	4年	10単位		
	卒業論文演習Ⅰ	卒業論文演習	担当教員	4年	2単位		
	卒業論文演習Ⅱ		担当教員	4年	2単位		
1	人間文化基礎論Ⅰa		土屋	1年	2単位		
2	人間文化基礎論Ⅰb		草生	1年	2単位		
3	人間文化基礎論Ⅱa		佐金	1年	2単位		
4	人間文化基礎論Ⅱb		磐下	1年	2単位		
5	人間文化概論Ⅰ		仲原	1・2年	2単位		
6	人間文化概論Ⅱ		大黒	1・2年	2単位		
7	人間行動学概論Ⅰ		佐伯・添田	1年	2単位		
8	人間行動学概論Ⅱ		進藤・山﨑（孝）	1年	2単位		
9	人間行動学データ解析法Ⅰa		笹島	2年	2単位		a:社会・心理
10	人間行動学データ解析法Ⅰb		［森谷］	2年	2単位		b:教育・地理
11	人間行動学データ解析法Ⅱa		佐伯	2年	2単位		
12	人間行動学データ解析法Ⅱb		木村	2年	2単位		
13	言語文化基礎論Ⅰ		小林	1・2年	2単位		
14	言語文化基礎論Ⅱ		高島	1・2年	2単位		
15	言語文化概論Ⅰ		井狩・野末・丹羽・白田	1・2年	2単位		
16	言語文化概論Ⅱ		大岩本･古賀･神竹･白田	1・2年	2単位		

■哲学歴史学科

17	哲学概論Ⅰ		佐金	2・3年	2単位	可	
18	哲学概論Ⅱ		佐金	2・3年	2単位	可	
19	哲学史通論Ⅰ	哲学史通論Ⅲ	［早瀬］	1・2年	2単位	可	
20	哲学史通論Ⅱ	哲学史通論Ⅳ	高梨	1・2年	2単位	可	
21	哲学演習・講読Ⅰ		佐金	2～4年	2単位		
22	哲学演習・講読Ⅱ		佐金	2～4年	2単位		
23	哲学史演習・講読Ⅰ		高梨	2～4年	2単位		
—	哲学史演習・講読Ⅱ		（休）	2～4年	2単位		
24	倫理学概論Ⅰ		土屋	2・3年	2単位	可	
25	倫理学概論Ⅱ		土屋	2・3年	2単位	可	
26	倫理学演習・講読Ⅰ		土屋	2～4年	2単位		
27	倫理学演習・講読Ⅱ		土屋	2～4年	2単位		
28	宗教学概論Ⅰ		仲原	2・3年	2単位	可	
29	宗教学概論Ⅱ		仲原	2・3年	2単位	可	
30	宗教学演習・講読Ⅰ		仲原	2～4年	2単位		
31	宗教学演習・講読Ⅱ		仲原	2～4年	2単位		
—	論理学概論Ⅰ		（休）	2・3年	2単位	可	
—	論理学概論Ⅱ		（休）	2・3年	2単位	可	
32	美学概論Ⅰ		高梨	2・3年	2単位	可	
33	美学概論Ⅱ		高梨	2・3年	2単位	可	
—	哲学特講Ⅰ	哲学史通論Ⅰ	（休）	2～4年	2単位		
34	哲学特講Ⅱ	哲学史通論Ⅱ	［脇坂］	2～4年	2単位		Mと共通
35	史学概論		平田	2・3年	2単位		
36	日本史基礎講読Ⅰ		仁木・佐賀	1・2年	2単位		
37	日本史基礎講読Ⅱ		塚田	2・3年	2単位		
38	日本史通論Ⅰ		［村井（良）］	2・3年	2単位	可	
39	日本史通論Ⅱ		佐賀	2・3年	2単位	可	
40	考古学通論		岸本	2・3年	2単位	可	
41	日本史講読Ⅰ		磐下	2～4年	2単位		

掲載番号	科目名	旧課程科目名（H21年度以前入学者）	教員名	標準履修年次	単位数	他学部履修	備考
42	日本史講読Ⅱ		仁木	2～4年	2単位		
43	日本史講読Ⅲ		塚田	2～4年	2単位		
44	日本史講読Ⅳ		佐賀	2～4年	2単位		
45	日本史演習Ⅰ		磐下	3・4年	2単位		
46	日本史演習Ⅱ		仁木	3・4年	2単位		
47	日本史演習Ⅲ		塚田	3・4年	2単位		
48	日本史演習Ⅳ		佐賀	3・4年	2単位		
49	考古学演習		岸本	3・4年	2単位		
50	日本史特講Ⅰ		［湯浅］	3・4年	2単位		Mと共通
51	日本史特講Ⅱ		［後藤］	3・4年	2単位		Mと共通
52	日本史特講Ⅲ		佐賀	3・4年	2単位		
53	日本史特講Ⅳ		塚田・［島﨑］	3・4年	2単位		
54	考古学実習		岸本	2～4年	2単位		
—	大阪の歴史演習		（休）				
55	世界史基礎講読		世界史コース教員全員	1・2年	2単位		
56	東洋史基礎講読		平田	2・3年	2単位		
57	東洋史通論		平田・野村・上野	2・3年	2単位	可	
58	世界史通論		野村	2・3年	2単位	可	
59	東洋史講読Ⅰ		上野	2～4年	2単位		
60	東洋史講読Ⅱ		［塩］	2～4年	2単位		
61	東洋史講読Ⅲ		平田	2～4年	2単位		
62	世界史講読		野村	2～4年	2単位		
63	東洋史演習Ⅰ		平田	3・4年	2単位		
64	東洋史演習Ⅱ		上野	3・4年	2単位		
65	東洋史演習Ⅲ		［塩］	3・4年	2単位		
66	世界史演習		野村	3・4年	2単位		
67	東洋史特講Ⅰ		［松本］	3・4年	2単位		Mと共通
68	東洋史特講Ⅱ		［上田］	3・4年	2単位		Mと共通
69	世界史特講		［秋葉］	3・4年	2単位		Mと共通
70	西洋史基礎講読		北村	2・3年	2単位		
71	西洋史通論		草生	2・3年	2単位	可	
72	西洋史講読Ⅰ		北村	2・3年	2単位		
73	西洋史講読Ⅱ		北村	3・4年	2単位		
74	西洋史講読Ⅲ		大黒	2・3年	2単位		
75	西洋史講読Ⅳ		大黒	3・4年	2単位		
76	西洋史演習Ⅰ		草生	3・4年	2単位		
77	西洋史演習Ⅱ		大黒	3・4年	2単位		
78	西洋史演習Ⅲ		北村	3・4年	2単位		
79	西洋史特講Ⅰ		［中谷］	3・4年	2単位		Mと共通
80	西洋史特講Ⅱ		［南］	3・4年	2単位		Mと共通

■人間行動学科

81	社会学概論Ⅰ		進藤	2年	2単位	可	
82	社会学概論Ⅱ		石田	2年	2単位	可	
83	社会学史Ⅰ		進藤	2年	2単位	可	
—	社会学史Ⅱ		（休）	2年	2単位	可	
84	社会学研究法Ⅰ		笹島	2年	2単位	可	社会調査士必修
85	社会学研究法Ⅱ		伊地知	2年	2単位	可	社会調査士必修
86	社会学実習Ⅰa		伊地知	3年	2単位		社会調査士必修
87	社会学実習Ⅰb		笹島	3年	2単位		社会調査士必修
88	社会学実習Ⅱa		伊地知	3年	2単位		社会調査士必修
89	社会学実習Ⅱb		笹島	3年	2単位		社会調査士必修
90	社会学基礎演習a		進藤	2年	2単位		

掲載番号	科目名	旧課程科目名（H21年度以前入学者）	教員名	標準履修年次	単位数	他学部履修	備考
91	社会学基礎演習ｂ		石田	２年	２単位		
92	社会学演習Ⅰａ		伊地知	２～４年	２単位		
93	社会学演習Ⅰｂ		笹島	２～４年	２単位		
94	社会学演習Ⅱａ		石田	２～４年	２単位		
95	社会学演習Ⅱｂ		川野	２～４年	２単位		
96	社会学演習Ⅲ		進藤	２～４年	２単位		
97	社会学演習Ⅳａ		進藤	２～４年	２単位		
98	社会学演習Ⅳｂ		石田	２～４年	２単位		
99	社会学演習Ⅳｃ		伊地知	２～４年	２単位		
100	社会学演習Ⅳｄ		川野	２～４年	２単位		
101	社会学演習Ⅳｅ		笹島	２～４年	２単位		
102	社会学特論Ⅰ		石田	２～４年	２単位		Ｍと共通
103	社会学特論Ⅱ		進藤	２～４年	２単位		
104	社会学特講Ⅰ		［白波瀬］	２～４年	２単位		Ｍと共通
105	社会学特講Ⅱ		［野村］	２～４年	２単位		Ｍと共通
106	社会学特講Ⅲ		［田間］	２～４年	２単位		Ｍと共通
107	社会調査法		川野	２～４年	２単位		社会調査士必修
—	社会学データ解析法		（休）	２～４年	２単位		社会調査士必修
108	心理学概論Ⅰ		池上	２～４年	２単位	可	
109	心理学概論Ⅱ		池上	２～４年	２単位	可	
110	心理学研究法Ⅰ		山	２～４年	２単位	可	
111	心理学研究法Ⅱ		山	２～４年	２単位	可	
112	心理学実験演習Ⅰ		池上･山･佐伯･［中川］	２年	２単位		
113	心理学実験演習Ⅱ		池上･山･佐伯･［中川］	２年	２単位		
114	心理学実験演習Ⅲ		池上・山・川邉・佐伯	３年	２単位		
115	心理学実験演習Ⅳ		池上・山・川邉・佐伯	３年	２単位		
116	人間行動学データ解析法Ⅲ		［田端］	３・４年	２単位		
117	生理心理学特論		川邉	２～４年	２単位	可	
118	認知心理学特論		山	２～４年	２単位	可	
—	学習心理学特論		（休）	２～４年	２単位	可	
119	発達心理学特論		佐伯	２～４年	２単位	可	
—	社会心理学特論		（休）	２～４年	２単位	可	
—	性格心理学特論		（休）	２～４年	２単位	可	
—	動物心理学特論		（休）	２～４年	２単位	可	
120	文化心理学特論		池上	２～４年	２単位	可	
—	心理検査法特論		（休）	２～４年	２単位	可	
121	心理学特講Ⅰ		［東山］	３・４年	２単位	可	Ｍと共通
—	心理学特講Ⅱ		（休）	３・４年	２単位	可	
—	心理学特講Ⅲ		（休）	３・４年	２単位	可	
122	教育学概論Ⅰ		柏木	２・３年	２単位		
123	教育学概論Ⅱ		［滝沢］	２・３年	２単位		
124	教育方法学Ⅰ		森	２・３年	２単位		
125	教育方法学Ⅱ		島田	３年	２単位		
126	比較・国際教育学		添田	３年	２単位		
127	教育学研究法Ⅰ		柏木	２年	２単位		
128	教育学研究法Ⅱ		島田	３年	２単位		
129	教育学実習		添田	２年	２単位		
130	教育学演習Ⅰ		［滝沢］	２年	２単位		
131	教育学演習Ⅱ		添田	３年	２単位		
132	教育学演習Ⅲ		島田	２年	２単位		
133	教育学演習Ⅳ		森	３年	２単位		
134	教育学演習Ⅴ		添田	３・４年	２単位		
135	教育行政学		［滝沢］	３・４年	２単位		
136	教育史		柏木	２～４年	２単位		

掲載番号	科目名	旧課程科目名（H21年度以前入学者）	教員名	標準履修年次	単位数	他学部履修	備考
137	教育メディア論		［深見］	2～4年	2単位		
138	教育学特講Ⅰ		［山﨑］	3・4年	2単位		Mと共通
139	教育学特講Ⅱ		［髙谷］	3・4年	2単位		
140	地理学概論Ⅰ		山﨑（孝）	2～4年	2単位	可	
141	地理学概論Ⅱ		［稲垣］	2～4年	2単位	可	
142	地誌学Ⅰ		大場	2～4年	2単位	可	
143	地誌学Ⅱ		祖田	2～4年	2単位	可	
144	地理学実験実習Ⅰ		祖田	2・3年	2単位		
145	地理学実験実習Ⅱ		木村	2・3年	2単位		
146	地理学講読演習Ⅰ		木村	3年	2単位		
147	地理学講読演習Ⅱ		山﨑（孝）	3年	2単位		
148	地理学野外調査実習Ⅰ		祖田	2・3年	2単位		
149	地理学野外調査実習Ⅱ		大場	3年	2単位		
150	地理学演習Ⅰ		大場・山﨑（孝）	3年	2単位		
151	地理学演習Ⅱ		大場・山﨑（孝）	3年	2単位		
152	人間行動学データ解析法Ⅳ		木村	3・4年	2単位		
153	自然地理学概論		［小倉］	2～4年	2単位	可	
154	地図学		［吉村］	2～4年	2単位	可	
—	地理情報学		（休）	2～4年	2単位	可	
155	地理学特講Ⅰ		水内	2～4年	2単位	可	Mと共通
156	地理学特講Ⅱ		［山口］	2～4年	2単位	可	Mと共通

■言語文化学科

157	国文学史Ⅰ		久堀	1～3年	2単位	可	
158	国文学史Ⅱ		久堀	1～3年	2単位	可	
159	国語学基礎論		丹羽	2～4年	2単位		
160	国語学方法論		丹羽	2～4年	2単位		
161	国語国文学講読Ⅰ		奥野	2～4年	2単位		
162	国語国文学講読Ⅱ		奥野	2～4年	2単位		
163	国語国文学講読Ⅲ		山本	2～4年	2単位		
164	国語国文学講読Ⅳ		山本	2～4年	2単位		
165	国語国文学演習Ⅰ		久堀	3・4年	2単位		
166	国語国文学演習Ⅱ		久堀	3・4年	2単位		
167	国語国文学演習Ⅲ		小林	3・4年	2単位		
168	国語国文学演習Ⅳ		小林	3・4年	2単位		
169	国語国文学演習Ⅴ		丹羽	3・4年	2単位		
170	国語国文学演習Ⅵ		丹羽	3・4年	2単位		
171	国語国文学特講Ⅰ		奥野	2～4年	2単位		
172	国語国文学特講Ⅱ		奥野	2～4年	2単位		
173	国語国文学特論	国語国文学特論Ⅰ	［水谷］	3・4年	2単位		Mと共通
174	国語国文学特論演習	国語国文学特論Ⅱ	［水谷］	3・4年	2単位		Mと共通
175	中国語中国文学概論Ⅰ	中国語学概論Ⅰ	岩本（真）	2・3年	2単位	可	
176	中国語中国文学概論Ⅱ	中国文学史Ⅱ	［西村（正）］	2・3年	2単位	可	
177	中国語中国文学概論Ⅲ	中国語学概論Ⅱ	大岩本	2・3年	2単位	可	
178	中国語中国文学概論Ⅳ	中国思想史Ⅰ	張	2・3年	2単位	可	
179	中国語基礎演習Ⅰ（前期ペア）	中国学基礎演習Ⅰ	松浦	2・3年	2単位		
180	中国語基礎演習Ⅱ（前期ペア）	中国学基礎演習Ⅱ	松浦	2・3年	2単位		
181	中国語学演習Ⅰ	中国学基礎演習Ⅲ	岩本（真）	3・4年	2単位		
182	中国語学演習Ⅱ	中国学演習Ⅳ	大岩本	3・4年	2単位		
183	中国文学演習Ⅰ	中国学演習Ⅲ	松浦	3・4年	2単位		
184	中国文学演習Ⅱ		松浦	3・4年	2単位		
185	中国文化学演習Ⅰ	中国文化学演習Ⅰ	張	3・4年	2単位		
186	中国文化学演習Ⅱ		張	3・4年	2単位		

掲載番号	科目名	旧課程科目名（H21年度以前入学者）	教員名	標準履修年次	単位数	他学部履修	備考
187	中国語コミュニケーションⅠ（後期ペア）		大岩本	2・3年	2単位		
188	中国語コミュニケーションⅡ（後期ペア）		大岩本	2・3年	2単位		
189	中国語コミュニケーションⅢ		岩本（真）	2～4年	2単位		
190	中国語コミュニケーションⅣ		張	2～4年	2単位		
—	中国語中国文学特講Ⅰ	中国学特講Ⅰ	（休）	2・3年	2単位		
191	中国語中国文学特講Ⅱ	中国学特講Ⅱ	［秋岡］	2・3年	2単位		Mと共通
192	英米文化概論		リチャーズ	2・3年	2単位	可	
193	英米文学史Ⅰ		杉井	2・3年	2単位	可	
194	英米文学史Ⅱ		田中（孝）	2・3年	2単位	可	
195	英米文学史Ⅲ		古賀	2・3年	2単位	可	
196	英語学概論Ⅰ		豊田	2・3年	2単位	可	
197	英語学概論Ⅱ		豊田	2・3年	2単位	可	
198	英米文化演習		リチャーズ	2～4年	2単位		
199	英米文学演習Ⅰ		田中（孝）	2～4年	2単位		
200	英米文学演習Ⅱ		杉井	2～4年	2単位		
201	英米文学演習Ⅲ		古賀	2～4年	2単位		
202	英米文学演習Ⅳ		杉井	2～4年	2単位		
203	英語学演習		豊田	2～4年	2単位		
204	英米文化特講		［原］	2～4年	2単位	可	Mと共通
—	英米文化特講		（休）	2～4年	2単位	可	
—	授業科目名（H22年度以降入学者）		（休）	2～4年	2単位	可	
205	英語コミュニケーションⅠ		リチャーズ	2～4年	2単位		
206	英語コミュニケーションⅡ		［シーヴァート］	2～4年	2単位		
207	ドイツ語フランス語圏言語文化論Ⅰ		髙井	2～4年	2単位	可	Mと共通
—	ドイツ語フランス語圏言語文化論Ⅱ	フランス文学特講	（休）	2～4年	2単位	可	
208	ドイツ語圏文学史	ドイツ文学史Ⅰ・ドイツ文学史Ⅱ	髙井	2・3年	2単位	可	
209	ドイツ語圏文化論	ドイツ文化論	長谷川	2・3年	2単位	可	
210	ドイツ語学概論		神竹	2・3年	2単位	可	
211	ドイツ語圏言語文化基礎演習Ⅰ	ドイツ語学演習Ⅰ	長谷川	2年	2単位	可	
212	ドイツ語圏言語文化基礎演習Ⅱ	ドイツ文学演習Ⅰ	神竹	2年	2単位	可	
213	ドイツ語圏言語文化演習Ⅰ	ドイツ語学演習Ⅱ	髙井	3・4年	2単位	可	
214	ドイツ語圏言語文化演習Ⅱ	ドイツ文学演習Ⅱ	長谷川	3・4年	2単位	可	
215	ドイツ語圏言語文化演習Ⅲ	ドイツ文化演習Ⅰ	神竹	3・4年	2単位	可	
216	ドイツ語圏言語文化特別演習	ドイツ文化演習Ⅱ	髙井	3年	2単位	可	
217	ドイツ語コミュニケーションⅠ		*エルトレ	3・4年	2単位	可	
218	ドイツ語コミュニケーションⅡ		*エルトレ	3・4年	2単位	可	
219	ドイツ語圏ランデスクンデ		*エルトレ	3・4年	2単位	可	
220	フランス語圏文学史	フランス文学史Ⅰ・フランス文学史Ⅱ	津川	1・2年	2単位	可	
221	フランス語圏文化論	フランス文化論Ⅰ・フランス文化論Ⅱ	白田	2・3年	2単位	可	
222	フランス語学概論	フランス語学概論Ⅰ・フランス語学概論Ⅱ	福島	2・3年	2単位	可	
223	フランス語圏言語文化基礎演習Ⅰ	フランス言語文化基礎演習	津川	2年	2単位	可	
224	フランス語圏言語文化基礎演習Ⅱ		白田	2年	2単位	可	
225	フランス語圏言語文化演習Ⅰ	フランス文学演習	福島	3・4年	2単位	可	
226	フランス語圏言語文化演習Ⅱ	フランス文化演習	津川	3・4年	2単位	可	
227	フランス語圏言語文化演習Ⅲ		白田	3・4年	2単位	可	
228	フランス語圏言語文化特別演習	フランス語学演習	福島	3年	2単位	可	
229	フランス語コミュニケーションⅠ		*バレイユ	3・4年	2単位	可	

掲載番号	科目名	旧課程科目名（H21年度以前入学者）	教員名	標準履修年次	単位数	他学部履修	備考
230	フランス語コミュニケーションⅡ		*バレイユ	3・4年	2単位	可	
231	エチュード・フランコフォーヌ	フランス文化特講	［中條］	2～4年	2単位	可	
—	ヨーロッパ言語文化特講	ドイツ言語文化特講Ⅱ	（休）	2～4年	2単位	可	
232	インターカルチュラルスタディーズ	フランス語学特講	福島	2～4年	2単位	可	Mと共通
233	言語学基礎論	言語学概論	山崎（雅）	1～4年	2単位		
234	言語応用論	言語応用論Ⅰ	井狩	2・3年	2単位		
235	言語比較論		山崎（雅）	2・3年	2単位		
236	言語教育論		田中（一）	2・3年	2単位		
237	言語情報論	言語情報論Ⅰ	関	2・3年	2単位		
238	言語応用論演習	言語応用論演習Ⅰ	井狩	2・3年	2単位		
239	言語比較論演習		［林］	2・3年	2単位		
240	言語教育論演習	言語情報論演習Ⅱ	田中（一）	2・3年	2単位		
241	言語情報論演習	言語情報特論	関	2・3年	2単位		
242	言語応用特論	言語情報特論演習Ⅱ	井狩	3年	2単位		
243	言語比較特論	言語情報特論演習Ⅰ	関	3年	2単位		
—	言語教育特論	言語情報論Ⅱ	（休）	2・3年	2単位		
244	言語応用特講	言語応用論Ⅱ	［中村］	2・3年	2単位		
—	言語比較特講	言語応用論演習Ⅱ	（休）	2・3年	2単位		
—	言語教育特講	言語情報論演習Ⅰ	（休）	2・3年	2単位		
245	文化理論		海老根	2・3年	2単位		
246	表現文化論	表象文化論Ⅰ	［小野原］	2・3年	2単位		
247	表象文化論	表象文化論Ⅱ	野末	2～4年	2単位		
248	比較表現論	比較表現論Ⅰ・比較表現論Ⅱ	三上	2～4年	2単位		
249	文化理論基礎演習a	表現文化基礎演習Ⅰa	野末	2年	2単位		
250	文化理論基礎演習b	表現文化基礎演習Ⅰb	高島	2年	2単位		
251	表現・表象文化論基礎演習a	表現文化基礎演習Ⅱa	三上	2年	2単位		
252	表現・表象文化論基礎演習b	表現文化基礎演習Ⅱb	*江村	2年	2単位		
253	表現・表象文化論演習Ⅰ	表現文化演習Ⅰ	高島	2・3年	2単位		
254	表現・表象文化論演習Ⅱ	表現文化演習Ⅱ	小田中・海老根・中川	2・3年	2単位		
255	表現・表象文化論演習Ⅲ	表現文化演習Ⅲ	海老根	3・4年	2単位		
256	表現・表象文化論演習Ⅳ	表現文化演習Ⅳ	三上	3・4年	2単位		
257	比較表現論演習	表現文化演習Ⅴ	［石川］	3・4年	2単位		
258	文化理論特別演習a	表現文化演習Ⅵa	小田中	3・4年	2単位		
259	文化理論特別演習b	表現文化演習Ⅵb	小田中	3・4年	2単位		
260	表現文化論特論	表現文化特論Ⅰ	増田	3・4年	2単位		
261	表象文化論特論	表現文化特論Ⅱ	［日比野］	3・4年	2単位		Mと共通
262	比較表現論特論	ロシア文化論	*江村	1～4年	2単位	可	
263	表現文化講読Ⅰ		野末	2～4年	2単位		
264	表現文化講読Ⅱ	表現文化講読Ⅱa	*江村	2～4年	2単位		
265	表現文化講読Ⅲ	表現文化講読Ⅱb	［酒井］	2～4年	2単位		

◆文学部共通専門教育科目

266	美術史通論		［藤岡］	2～4年	2単位	可	
267	民俗学		［菊地］	2～4年	2単位	可	
268	文化人類学概論Ⅰ		多和田	2～4年	2単位	可	
269	文化人類学概論Ⅱ		多和田	2～4年	2単位	可	
270	観光文化論		天野	2～4年	2単位	可	
271	観光文化実践演習		天野	2～4年	2単位		
272	広報情報論Ⅰ		［七沢］	2～4年	2単位	可	
—	広報情報論Ⅱ		（休）	2～4年	2単位	可	

掲載番号	科目名	旧課程科目名（H21年度以前入学者）	教員名	標準履修年次	単位数	他学部履修	備考
—	マス・コミュニケーション論Ⅰ		（休）	2～4年	2単位	可	
273	マス・コミュニケーション論Ⅱ		［鈴木］	2～4年	2単位	可	
274	中国古典語Ⅰ		［垣内］	2・3年	2単位	可	
275	中国古典語Ⅱ		［垣内］	2・3年	2単位	可	
276	ギリシア語Ⅰ		［佐藤］	1～4年	2単位	可	
277	ギリシア語Ⅱ		［佐藤］	1～4年	2単位	可	
—	ラテン語Ⅰ		（休）	1～4年	2単位	可	
—	ラテン語Ⅱ		（休）	1～4年	2単位	可	
278	西洋古典学		［西村（賀）］	1～4年	2単位	可	
—	情報処理教育Ⅰ		（休）	2～4年	2単位		
—	情報処理教育Ⅱ		（休）	2～4年	2単位		
—	比較文化交流論Ⅰ		（休）	2～4年	2単位		
279	比較文化交流論Ⅱ		IS委員長ほか	2～4年	2単位		Mと共通
—	国際都市文化論Ⅰ		（休）	2～4年	2単位		
—	国際都市文化論Ⅱ		（休）	2～4年	2単位		
—	国際都市社会論Ⅰ		（休）	2～4年	2単位		
—	国際都市社会論Ⅱ		（休）	2～4年	2単位		
280	上方文化講座		久堀ほか	1～4年	2単位	可	
281	国際ジャーナリズム論Ⅰ		［松田］	2～4年	2単位	可	
282	国際ジャーナリズム論Ⅱ		［松田］	2～4年	2単位	可	
283	文学部基礎演習a,b,c,d		大坪・石川・有田・渡辺	1年	2単位		
—	文学部実践演習		（休）	3年	2単位		
284	日本文化発信のための英語		［奥西］	2～4年	2単位		
285	大阪の地域・文化実践演習		大場・［村田］	2～4年	2単位		

◆教職に関する科目

286	教職概論a,b,c		森	1～4年	2単位	可	
287	教育基礎論a,b		［村井（尚）］	2～4年	2単位	可	
288	教育基礎論c		柏木	2～4年	2単位	可	
289	発達・学習論a,b		［古見］	2～4年	2単位	可	
290	発達・学習論c		［岡本］	2～4年	2単位	可	
291	教育制度論a		［滝沢］	2～4年	2単位	可	
292	教育制度論b,c		［佐野］	2～4年	2単位	可	
293	国語科教育法Ⅰ		［木村］	2～4年	2単位	可	
294	国語科教育法Ⅱ		［木村］	2～4年	2単位	可	
295	国語科教育法Ⅲ		［木村］	2～4年	2単位	可	
—	国語科教育法Ⅳ		（休）	2～4年	2単位	可	
296	社会科・地理歴史科教育法Ⅰa,b		［手取］	2～4年	2単位	可	
297	社会科・地理歴史科教育法Ⅱa,b		［中］	2～4年	2単位	可	
298	社会科・公民科教育法Ⅰ		［岩本］	2～4年	2単位	可	
299	社会科・公民科教育法Ⅱ		［岩本］	2～4年	2単位	可	
300	外国語科教育法（英語）Ⅰ		井狩	2～4年	2単位	可	
301	外国語科教育法（英語）Ⅱ		［西本］	2～4年	2単位	可	
302	外国語科教育法（英語）Ⅲ		［西本］	2～4年	2単位	可	
—	外国語科教育法（英語）Ⅳ		（休）	2～4年	2単位	可	
—	外国語科教育法（独語）Ⅰ		（休）	2～4年	2単位	可	
—	外国語科教育法（独語）Ⅱ		（休）	2～4年	2単位	可	
303	外国語科教育法（独語）Ⅲ		神竹	2～4年	2単位	可	
—	外国語科教育法（独語）Ⅳ		（休）	2～4年	2単位	可	
—	外国語科教育法（仏語）Ⅰ		（休）	2～4年	2単位	可	
304	外国語科教育法（仏語）Ⅱ		福島	2～4年	2単位	可	
—	外国語科教育法（仏語）Ⅲ		（休）	2～4年	2単位	可	
305	外国語科教育法（仏語）Ⅳ		福島	2～4年	2単位	可	

掲載番号	科目名	旧課程科目名（H21年度以前入学者）	教員名	標準履修年次	単位数	他学部履修	備考
306	外国語科教育法（中国語）Ⅰ		岩本（真）	2～4年	2単位	可	
307	外国語科教育法（中国語）Ⅱ		岩本（真）	2～4年	2単位	可	
—	外国語科教育法（中国語）Ⅲ		（休）	2～4年	2単位	可	
—	外国語科教育法（中国語）Ⅳ		（休）	2～4年	2単位	可	
308	教育方法論a		［藤原］	2～4年	2単位	可	
309	教育方法論b		［宮橋］	2～4年	2単位	可	
310	教育方法論c		［福田］	2～4年	2単位	可	
311	教育課程論a,b		島田	2～4年	2単位	可	
312	教育課程論c		［廣瀬（真）］	2～4年	2単位	可	
313	特別活動論a		福田	2～4年	2単位	可	
314	特別活動論b		［藤原］	2～4年	2単位	可	
315	特別活動論c		添田	2～4年	2単位	可	
316	道徳教育の研究a,b		［高松］	2～4年	2単位	可	
317	教育相談論a,b		［齊藤］	2～4年	2単位	可	
318	人権・進路指導の研究a,b		［西田］	2～4年	2単位	可	
319	教職実践演習		柏木ほか	4年	2単位	可	
320	中学校教育実習		柏木・森	4年	4単位	可	
321	高等学校教育実習		柏木・森	4年	2単位	可	
322	教育実習事前事後指導		柏木・森	4年	1単位	可	
323	書道A		［南條］	2～4年	2単位	可	
—	書道B		（休）	2～4年	2単位	可	
—	教職ボランティア実習Ⅰ		（休）	1～4年	2単位	可	
—	教職ボランティア実習Ⅱ		（休）	1～4年	2単位	可	
324	教職ボランティア実習Ⅲ		添田	1～4年	2単位	可	
—	教職ボランティア実習Ⅳ		（休）	1～4年	2単位	可	
325	教職ボランティア実習Ⅴ		添田	1～4年	2単位	可	
326	教職ボランティア実習Ⅵ		添田	1～4年	2単位	可	

◆博物館に関する科目

327	生涯学習概論		［赤尾］	1・2年	2単位	可	
328	博物館概論		岸本	1・2年	2単位	可	
329	博物館経営論		［澤井ほか］	2・3年	2単位	可	
330	博物館資料論		［前田］	2・3年	2単位	可	
331	博物館情報・メディア論		［吉田］	2・3年	2単位	可	
332	博物館実習Ⅰ		岸本	3・4年	2単位	可	
333	博物館実習Ⅱ		受入館（岸本）	3・4年	1単位	可	
334	博物館資料保存論		［豆谷］	2・3年	2単位	可	
335	博物館展示論		［川端ほか］	2・3年	2単位	可	
336	博物館教育論		［井上（敏）］	2・3年	3単位	可	

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAGEN1101	開講期	単位数	標準履修年次
1	**人間文化基礎論Ⅰa** Introduction to Philosophy and History (Seminar) Ⅰa			前木 1	2 単位	1 年
	旧科目名			担当教員名 土屋 貴志 准教授		

●科目の主題

学問を研究するために必要な基本的姿勢と諸方法を学ぶ。

●到達目標

大学におけるレポートや卒業論文を書く際に必要な、学術的文章の書き方、論理的思考、資料を収集する方法、資料の分析方法、論述の構成の仕方、発表の仕方などを身につける。

●授業内容・授業計画

前半に学術的文章の書き方の演習を行い、後半にはディベート演習を通して、資料収集の方法、資料の分析、論点の整理と検討、および発表の仕方を学んだ後、成果をレポートに集大成する。

具体的には以下の内容を予定しているが、必要に応じて変更する可能性もある。

第 1 回　ガイダンス・受講カード記入・小論文（400 字程度）執筆
第 2 回　学情ツアー
第 3 回　作文例の検討①
第 4 回　作文例の検討②
第 5 回　作文例の検討③
第 6 回　学術的文章の書き方
第 7 回　中間レポート（2000 字程度）執筆
第 8 回　文献資料の探し方
第 9 回　ビデオ資料視聴、チームごとのディベート準備
第 10 回　ディベート試合①
第 11 回　ディベート試合②
第 12 回　ディベート試合③
第 13 回　ディベート試合④
第 14 回　最終レポート（4000 字程度）執筆
第 15 回　採点面接

●評価方法

提出した課題の内容を評価の対象とする。評価内容は「受講カード」に記録し、いつでも閲覧に応じる。学期末試験は行わないが、採点に関する面談を行う（受講者 20 名を超えた場合には、半期にわたる自らの学習活動を評点化しその根拠を記した「自己評価レポート」で代用する）。学期末レポート・受講カードは採点面談時に（自己評価レポートに代替した場合は採点終了後に学生サポートセンター文学部教務担当から）返却する。

●受講生へのコメント

受講生諸君の主体的な作業を中心とする。毎回のように宿題を出すので、十分に覚悟して履修すること。

当科目は学術的文章の書き方などの内容が「文学部基礎演習」と重複するので、当科目か「文学部基礎演習」のどちらか一方だけを履修することを強く勧める。とくに、哲学コースに進みたい学生は必修科目になる当科目のほうを履修すること。

●参考文献・教材

P. シンガー『実践の倫理』（昭和堂）、G. ペンス『医療倫理』（みすず書房）、ほか。

授業時間中に配布ないし紹介する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAGEN1101	開講期	単位数	標準履修年次
2	**人間文化基礎論Ⅰb** Introduction to Philosophy and History (Seminar) Ⅰb			前木 1	2 単位	1 年
	旧科目名			担当教員名 草生 久嗣 准教授		

●科目の主題

東京大学教養学部歴史学部会 / 編『史料学入門』（岩波書店）の輪読

●到達目標

人文諸学の研究の基本である一次情報の把握・入手・分析について知り、現代情報化社会において通用する

思考技術の一つを身に着ける。

●授業内容・授業計画

テキストの章に従ってすすめていく。毎回、担当者（複数名）を決め、各章の内容について報告と議論を行う。最後にテキストについて自らの意見をまとめた報告作成・提出する。課題となる章は変更になることもある。

第 1 回　ガイダンス
第 2 回　序論　読者に過去が届くまで
第 3 回　第 1 部　史料批判と言う基本（古文書学と碑文学－古代ローマの事例）
第 4 回　歴史学者の国語（日本語）学－室町時代の古記録を読む
第 5 回　非文字社会と文字資料－アンデス史の場合
第 6 回　第 2 部　史料の政治学（削られた文章－資料の表層と本質、エンヴェル・パシャの一演説を例に）
第 7 回　「太平天国」像の形成と変貌
第 8 回　事件史と裁判－「蛮社の獄」の場合
第 9 回　第 3 部　史料の読み方・生かし方（書物から身体への接近－モリエールの喜劇より）
第 10 回　年代記を読む－中世ヨーロッパの年代記と挿絵
第 11 回　自伝を読む－個人から見た植民地期のインド社会
第 12 回　共通歴史副教材を読む－バルカン諸国の和解の試み
第 13 回　第 4 部　現代史・現在と過去の干渉（記憶と史料の対抗－米国における戦争体験を中心に）
第 14 回　口述 / 観察 / 非文字資料－民俗学研究の立場から
第 15 回　まとめ

●評価方法

発表内容（1/3）、発表準備・質疑への参加状況（1/3）、報告ほか提出物（1/3）を総合的に評価する。

●受講生へのコメント

歴史の勉強は、すぐれた歴史書を読みこなすことで独習でも不可能ではありません。しかし歴史「学」は、歴史を書く立場になっての技術・理論・方法論についての学び。とくに「史料（source）」の重要性を理解することは、大学で歴史学を学んだ証拠として、もっとも大事な点です。 教科書は、読み物集としても優れているものの、そうした歴史学の勉強に不可欠な「史料」への向き合い方の様々を伝える事例集といってよい。 授業では、担当箇所についてのプレゼンを行います。内容のまとめにとどまらず、関わる関連情報の収集や分析をすることで、歴史学で「史料」をもちいることの意味を理解してもらいます。各自、担当箇所については希望をとりますので、できれば授業前までに一読して、自分が興味を持てそうなテーマ（回）について自覚を持っておいてください。

●参考文献・教材

教科書である、東京大学教養学部歴史学部会 / 編『史料学入門』（岩波書店）は必携のこと。（可能な限り初回より持参）参照用重要事典として、『歴史学事典』（弘文堂）（学情および文 220 所蔵）

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LAGEN1102	開講期	単位数	標準履修年次
3	**人間文化基礎論Ⅱ a** Introduction to Philosophy and History（Seminar）Ⅱ a			後木 1	2 単位	1 年
	旧科目名			担当教員名 佐金 武 講師		

●科目の主題

哲学に必要な基礎的リテラシーの習得と実践。

●到達目標

主として哲学コースの志望を検討している学生のために提供する、1 回生向け演習科目。哲学上のテーマを扱いながら、問題を考察する力を養う。また、自らの思考を発表によって他者に伝達する技術、それを文章にまとめる能力、ディスカッションを通じて思考を深める方法など、大学生として研究を進める上で基本となるリテラシーの習得を目指す。

●授業内容・授業計画

受講生は、以下の（1）から（4）のプロセスを実践する。

（1）課題の選定：テキスト教材の項目から、関心のあるテーマを選定する。
（2）課題への取り組み：テキストや参考文献の内容を的確にくみ取り、これに対して論理的思考に基づく考察を加える。
（3）発表：自分の理解や見解を伝えるための発表を行う。また、他の受講者や講師とのディスカッション（質疑応答）を通じて、自らの考察を深める。
（4）小レポートの提出：発表後、質疑応答の結果も踏まえつつ、自分の見解を短いレポートにまとめて提出する。

授業は毎回、数名の担当者が順に発表し、他の受講生との間で質疑応答を行うという形ですすめる。

第 1 回　導入：授業方法の説明
第 2 回　哲学的思考と議論の方法
第 3 回　受講生による発表とディスカション 1
第 4 回　受講生による発表とディスカション 2
第 5 回　受講生による発表とディスカション 3
第 6 回　受講生による発表とディスカション 4
第 7 回　受講生による発表とディスカション 5
第 8 回　受講生による発表とディスカション 6
第 9 回　受講生による発表とディスカション 7
第 10 回　受講生による発表とディスカション 8
第 11 回　受講生による発表とディスカション 9
第 12 回　受講生による発表とディスカション 10
第 13 回　受講生による発表とディスカション 11
第 14 回　受講生による発表とディスカション 12
第 15 回　受講生による発表とディスカション 13

●評価方法

平常点（出席 15 ＋発表 40 ＋小レポート 30 ＋議論への貢献度）による評価。

●受講生へのコメント

哲学上のテーマを扱うので、特にこの分野に関連するコースの志望者の受講を期待するが、他コース志望の学生の受講も歓迎する。

発表に際しては、ごく短い英語文献の読解が必要になる。

●参考文献・教材

次のテキストを参照する（事前に購入の必要なし）。

A. Fisher and J. Tallant (2016) How to Get Philosophy Students Talking, Routledge.

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAGEN1102	開講期	単位数	標準履修年次
4	**人間文化基礎論Ⅱ b** Introduction to Philosophy and Hisotry（Seminar） Ⅱ b			後木 1	2 単位	1 年
	旧科目名			担当教員名 磐下 徹 准教授		

●科目の主題

日本史研究の概要を知る

●到達目標

大学で学ぶ「日本史」は、高校までとは異なり暗記科目ではない。史料の読解・分析を基礎に自分で論を組み立てていくことが求められる。本講義では、時代・テーマともに幅広い分野の日本史研究の成果に触れ、大学で学ぶ「日本史」のイメージをつかんでもらいたい。

●授業内容・授業計画

近年の研究成果を分かりやすく概説した図書を取り上げる（山川出版社の日本史リブレットなど、6 冊程度）。2 人 1 組でその内容を要約して発表してもらう。他の参加者も事前に該当する図書を読んでくる。報告者の発表後、参加者全員で討論を行い理解を深めていく。

なお、学修効果を考慮し、授業内容・計画を変更することがある。

第 1 回　ガイダンス①（授業の進め方の説明）
第 2 回　ガイダンス②（課題図書の紹介）
第 3 回　課題図書①の発表と討論
第 4 回　課題図書①の発表と討論
第 5 回　課題図書②の発表と討論
第 6 回　課題図書②の発表と討論
第 7 回　課題図書③の発表と討論
第 8 回　課題図書③の発表と討論
第 9 回　課題図書④の発表と討論
第 10 回　課題図書④の発表と討論
第 11 回　課題図書⑤の発表と討論
第 12 回　課題図書⑤の発表と討論

第 13 回　課題図書⑥の発表と討論
第 14 回　課題図書⑥の発表と討論
第 15 回　まとめ

●評価方法
平常点（発表内容 60%、出席状況 30%、受講態度 10%）
●受講生へのコメント
発表するときだけではなく、毎回必ず予習（課題図書の精読）をして授業に臨むこと。
主体的な授業参加を期待します。
●参考文献・教材
課題図書は授業第 2 回に紹介し、必要なプリント類を配布します。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAGEN1103	開講期	単位数	標準履修年次
5	人間文化概論 I Introduction to Philosophy and History（Lecture） I			前月 4	2 単位	1・2 年
	旧科目名			担当教員名 仲原 孝 教授		

●科目の主題
哲学の基本的な問題の立て方や考え方を学ぶ。
●到達目標
受講者各自がさまざまな問題を哲学的に考える態度を身につけることを目標とする。
●授業内容・授業計画
哲学の最も主要な問題のいくつかをとりあげて、具体例を交えながら解説する。
授業計画は以下の通り。ただし授業進度の都合上、授業計画に多少の変更が行なわれる場合もありうることを付記しておく。
第 1 回　イントロダクション
第 2 回　存在の問題（1）
第 3 回　存在の問題（2）
第 4 回　存在の問題（3）
第 5 回　存在の問題（4）
第 6 回　神の問題（1）
第 7 回　神の問題（2）
第 8 回　神の問題（3）
第 9 回　認識の問題（1）
第 10 回　認識の問題（2）
第 11 回　認識の問題（3）
第 12 回　価値の問題（1）
第 13 回　価値の問題（2）
第 14 回　価値の問題（3）
第 15 回　総括。哲学とは何か
●評価方法
小論文形式のレポートを課す。論ずるべき課題を通知する時に、同時に、枚数、テーマ、論じ方など、論述が満たすべき条件を何項目かにわたって指定する。それらがすべて満たされていることが単位認定の必須の条件となる。
●受講生へのコメント
授業中の私語は厳重に禁止する。成績評価のためのレポートでは、講義で提示された問題に対して各自が主体的に答を模索することが求められる。ノートや参考書をまとめただけのレポートには単位を認定しないので注意。
●参考文献・教材
テキストは用いない。必要な資料は印刷して授業中に配布する。

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LAGEN1104	開講期	単位数	標準履修年次
6	人間文化概論Ⅱ Introduction to Philosophy and History (Lecture) Ⅱ			後月 4	2 単位	1・2 年
	旧科目名			担当教員名 大黒 俊二 教授		

●科目の主題

西洋史を中心とした歴史学の新潮流の概観。

●到達目標

現代歴史学の多様な傾向について一通りの理解を得ることを目標とする。

●授業内容・授業計画

環境史、世界システム、修正主義、歴史認識共有、社会史について以下の順に取り上げる。

第 1 回　1. 序論：歴史認識とは何か？
第 2 回　2. 環境史（1）：緑の神話
第 3 回　3. 環境史（2）：乾燥化理論
第 4 回　4. 世界システム論（1）：基本概念
第 5 回　5. 世界システム論（2）：実践
第 6 回　6. 修正主義（1）：ドイツ――「過ぎ去ろうとしない過去」
第 7 回　7. 修正主義（2）：イスラエル――シオニズム批判
第 8 回　8. 修正主義（3）：アイルランド――修正主義史観
第 9 回　9. 修正主義（4）：イタリア――「反ファシズムの危機」
第 10 回　10. 歴史認識共有の試み：独仏共通歴史教科書
第 11 回　11. 偶像破壊から「三つの指輪の物語」へ：独仏共通歴史教科書第 1 巻
第 12 回　12. アナール学派第一世代：フェーヴル、ブロック
第 13 回　13. アナール学派第二世代：ブローデル、ラブルース
第 14 回　14. アナール学派第三世代：ルゴフ、ル・ロワ・ラデュリ
第 15 回　15. フランス国外のアナール学派：ギンズブルグ、クーラ、グレーヴィチ

●評価方法

レポート 1 回、試験（定期試験）1 回で評価する。

●受講生へのコメント

特になし。

●参考文献・教材

J. ラートカウ（海老根剛・森田直子訳）『自然と権力――環境の世界史』2012 年、みすず書房。
川北稔（編）『ウォーラーステイン』講談社、2001 年。
歴史学研究会編『歴史における「修正主義」』青木書店、2000 年。
P. ガイス／ G. ル・カントレック（福井憲彦・近藤孝弘訳）『ドイツ・フランス共通歴史教科書【現代史】――1945 年以降のヨーロッパと世界』明石書店、2008 年。
P. バーク（大津真作訳）『フランス歴史学革命――アナール学派 1929-89 年』岩波書店、1992 年。

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LBGEN1101	開講期	単位数	標準履修年次
7	人間行動学概論Ⅰ Introduction to Human Behavioral Science Ⅰ			前金 1	2 単位	1 年
	旧科目名			担当教員名 佐伯 大輔 准教授／添田 晴雄准教授		

●科目の主題

（添田担当分）教育学は、乳幼児から老齢期までの人間行動における「教えと学び」を分析・考察する学問分野である。本講義では教育学におけるトピックを学びとカリキュラムを中心にいくつか取り上げ、人間の行動の諸相を教育学の立場から説明することにより、教育学という学問分野についての理解を深めることを目的とする。

（佐伯担当分）現代の心理学は科学的方法論に基づいて、心や行動法則を明らかにする学問領域であるが、心や行動の捉え方については、様々な提案がなされてきた。授業では、心理学における心や行動の捉え方がどのように変遷してきたかを概説する。

●到達目標

（滝沢担当分）教育学の基本的な事項、概念を理解し、多様な視点から教育について考えられる。

（佐伯担当分）心理学の歴史において、心や行動の見方がどのように変遷してきたのかを理解することを到達目標とする。

●授業内容・授業計画

15 回の授業の前半を滝沢（教育学）が担当し、後半を佐伯（心理学）が担当する。

第 1 回　オリエンテーション　学びの「カリキュラム」
第 2 回　学びの軌跡としてのカリキュラム
第 3 回　未来像からさかのぼる学びのカリキュラム
第 4 回　教え学ぶこととコミュニケーション
第 5 回　教え学ぶことと日本語
第 6 回　教えることのパラドックス
第 7 回　ふりかえりとレポート課題にむけての演習
第 8 回　心理学の歴史（1）
第 9 回　心理学の歴史（2）
第 10 回　心理学の歴史（3）
第 11 回　心理学の研究方法
第 12 回　心理学における行動観（1）
第 13 回　心理学における行動観（2）
第 14 回　心理学における行動観（3）
第 15 回　到達度確認

●評価方法

滝沢担当分（教育学）：毎回の授業で作成、提出したワークシートによる。
佐伯担当分（心理学）：平常点と試験によって成績評価を行う。

●受講生へのコメント

滝沢担当分（教育学）：自分の意見をまとめたり、他の学生と意見交換をしたりする際に、積極的に取り組むことを期待する。

●参考文献・教材

滝沢担当分（教育学）：適宜紹介する。
佐伯担当分（心理学）：適宜紹介する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBGEN1102	開講期	単位数	標準履修年次
8	**人間行動学概論Ⅱ** Introduction to Human Behavioral Science Ⅱ			後金 1	2 単位	1 年
	旧科目名			担当教員名 進藤 雄三 教授／山﨑 孝史 教授		

●科目の主題

（山﨑担当分）地図や地理学の歴史を軸に人間社会が未知なる世界をどう認識し、そこに対してどう行動していったかを振り返りながら、人間の行動とそれを取り巻く、空間、領域、場所との関係について解説します。特に、地理学が社会学や歴史学と比べ、どのような観点から人間行動をとらえようとしているのか考えていきます。

（進藤担当分）社会学は社会における人間行動の特質と、その複合から発生する「社会的」なるものの解明を、理論的・実証的に明らかにする学問である。本講義では、社会学のいくつかの主要トピックを取り上げ、社会学の基本を理解することを目的とする。

●到達目標

人間行動学科 4 コースのうち、社会学と地理学について、行動学として位置づけながら当該領域の理解を深める。

●授業内容・授業計画

前半（1 ～ 7 回）を地理学（山﨑）、後半（8 ～ 14 回）を社会学（進藤）が担当する。授業内容は下記の通り。

第 1 回　人間行動への地理学的接近
第 2 回　古代・中世の地図にみる世界観
第 3 回　近現代の地図の役割―紙地図から GPS・Google Earth まで
第 4 回　人間の環境・空間利用
第 5 回　人間の領域性―空間と権力の関係
第 6 回　人間の心理と場所との密接な関係
第 7 回　前半部のまとめとテスト
第 8 回　社会学における人間：ホモソシオロジクス

第 9 回　動物行動と人間行動：行為と行動
第 10 回　意味の罠：自己成就的予言と認知的不協和
第 11 回　行為と行為システム：行為の意図せざる結果
第 12 回　宗教社会学：救済と蓄財のパラドクス
第 13 回　政治社会学とメディア社会学：権力と支配のパラドクス
第 14 回　教育・家族・医療の社会学：現代社会の構成を考える（社会学の対象と方法）
第 15 回　レポート・試験

●評価方法
（山﨑担当分）
毎回のコミュニケーションカードと最終講義日に実施するテスト
（進藤担当分）
毎回のコミュニケーションカードと最終講義日に実施するテスト

●受講生へのコメント
（山﨑担当分）
大学の地理学は高校までの地理科目とは違い、地形を扱ったり、地名を憶えたり、地図を眺めたりする学問ではありません。多様な社会現象がどこで、どう、なぜ現れるのかをその場所の特性を通して考えます。この講義を通して皆さんがもつネガティブな地理のイメージは変わるでしょう。詳しくは以下のページをご覧ください。
教員ホームページ：http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/user/yamataka/home.htm（2016 年 4 月にリニューアル予定）
（進藤担当分）
社会学の面白さを、理論面を中心に紹介します。社会学の分野は非常に広く、多様です。広大な人間・社会現象のなかから、特定の主題・問題に焦点を当てることを可能にするのは、自分自身の関心、問題意識です。そのきっかけにしてください。

●参考文献・教材
（山﨑担当分）
テキスト：使用しません。
参考書（購入の必要は必ずしもありません）：
竹中克行編著『人文地理学への招待』ミネルヴァ書房、2015 年
山﨑孝史著『政治・空間・場所―「政治の地理学」にむけて［改訂版］』ナカニシヤ出版、2013 年
参考ホームページ：
地理学教室ホームページ：http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/geo/
（進藤担当分）
テキスト：使用しない。
参考書：適宜指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBGEN3201	開講期	単位数	標準履修年次
9	**人間行動学データ解析法Ⅰa** Data Analysis of Human Behavioral Science Ⅰa			前月 2	2 単位	2 年
	旧科目名			担当教員名 笹島 秀晃 講師		

●科目の主題
官庁統計や調査報告を読むための基本的知識、調査・実験から得られたさまざまな形式のデータを整理・分析するために必要な基本的知識と技術について解説する。

●到達目標
単純集計、度数分布、代表値、クロス集計、相関関係などの記述統計データの読み方や、グラフの読み方、またそれらの計算や作成の仕方を学ぶことによって、実際にデータを整理・分析できるようになることが本講義の目標である。

●授業内容・授業計画
指定の教科書の構成の従いつつ、おおむね下記のスケジュールで講義を進める。
第 1 回　ガイダンス
第 2 回　統計ソフトの基本操作
第 3 回　統計ソフトを使った計算
第 4 回　量的データの収集・入力

第 5 回　単純集計
第 6 回　代表値・散らばりの尺度（1）
第 7 回　代表値・散らばりの尺度（2）
第 8 回　クロス集計（1）
第 9 回　クロス集計（2）
第 10 回　相関係数
第 11 回　データのグラフ化
第 12 回　因果関係と相関関係
第 13 回　エラボレーション
第 14 回　疑似相関・媒介効果・交互作用
第 15 回　まとめ

●評価方法
出席（20%）、課題提出（20%）、試験（60%）。
●受講生へのコメント
授業は、Excel、SPSS などのソフトウェアを使って演習形式で行う。欠席するとついてこれなくなるので、やむを得ない場合を除いて休まないこと。なお本講義は、社会調査士資格認定 C 科目である。
●参考文献・教材
教科書：廣瀬毅士ほか , 2010,『社会調査のための統計データ分析』オーム社 .
参考書：神林博史・三輪哲 , 2011,『社会調査のための統計学』技術評論社.（入門）
参考書：G.W. ボーンシュテット・D. ノーキ , 1992,『社会統計学』ハーベスト社（発展）
参考書：篠原清夫ほか , 2010,『社会調査の基礎』弘文堂（社会学コースの学生は必携）

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBGEN2201	開講期	単位数	標準履修年次
10	人間行動学データ解析法Ｉ b Data analysis of Human behavioral Science Ｉ b			前月 2	2 単位	2 年
	旧科目名			担当教員名 森谷義哉 非常勤講師		

●科目の主題
統計学の基本的な知識を習得し、データ、特に調査データを活用できるようになること。
●到達目標
・統計学の基本的な知識を習得する。
・ソフトウェアを操作してデータ解析の一連の作業を行うことができる。特に、ソフトウェアの出力結果を適切に解釈できる。
●授業内容・授業計画
統計学の入門として、データの収集や整理から確率変数・確率分布、推定・検定までの基本的な内容をできるだけ分かりやすく説明し、知識を暗記するのではなく、それらの基礎にある考え方を理解できるようにする。説明は、プリントに基づいて行い、必要に応じてソフトウェア（たとえば、Excel）を用いた演習を行う。
授業計画は以下の通りである。ただし、受講生のレベルと理解に合わせて、内容を調整することがある。
第 1 回　データとは（1） 変数・尺度
第 2 回　データとは（2） データの可視化
第 3 回　1 変数について（1） 度数分布表・ヒストグラム・
第 4 回　1 変数について（2） 平均値・中央値・最頻値・分散・標準偏差
第 5 回　1 変数について（3） 標準化・偏差値
第 6 回　2 変数について（1） 散布図・共分散・相関係数
第 7 回　2 変数について（2） 相関係数の性質
第 8 回　2 変数について（3） クロス集計表と連関係数
第 9 回　確率変数・確率分布（1） 離散型確率分布
第 10 回　確率変数・確率分布（2） 連続型確率分布
第 11 回　推定（1） 推定の考え方
第 12 回　推定（2） 点推定・区間推定
第 13 回　検定（1） 検定の考え方
第 14 回　検定（2） 平均の検定・平均の差の検定

第 15 回　検定（3） 独立性の検定・適合度検定

●評価方法

平常点（発表・アンケート）20%、授業中の課題 40%、期末試験 40%を基準として、毎回の講義・演習に対する取り組み方を含めて総合的に評価する。

●受講生へのコメント

最近は、文系・理系にかかわらず、データに基づいて意思決定する力が求められています。統計学はそのための学問であり、少しでも多くの人に統計学の基礎知識を身に付けて欲しいと思います。そこで、この授業では、数学や PC などの知識を前提にせず、できるだけ分かりやすく説明するように努力しますので、講義中は説明に集中して、演習中は課題に積極的に取り組む姿勢を期待します。数式も登場しますが、簡単に理解できるレベルにしていますので、諦めずに慣れてください。理解できれば楽しくなります。なお、質問は大歓迎です。

また、一度理解できなくなると履修を継続することが難しくなると思われるので、できるだけ欠席や遅刻をしないように心がけてください。さらに、配布したプリントの内容を予習・復習して次回の授業にのぞむと良いと思います。

●参考文献・教材

＜教科書＞

プリントを配布します。

＜参考書＞

（1） 山田剛史・村井潤一郎（2004）『よくわかる心理統計』ミネルヴァ書房
（2） 山田剛史・杉澤武俊・村井潤一郎（2008）『R によるやさしい統計学』オーム社
（3） 慶應 SFC データ分析教育グループ（1998）『データ分析入門』慶應義塾大学出版会
（4） 高橋信（2004）『マンガでわかる統計学』オーム社
（5） 稲垣宣生・吉田光雄・山根芳知・地道正行（2007）『統計学講義』裳華房

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBGEN2202	開講期	単位数	標準履修年次
11	**人間行動学データ解析法Ⅱ a** Data Analysis of Human Behavioral Science Ⅱ a			後月 2	2 単位	2 年
	旧科目名			担当教員名 佐伯 大輔 准教授		

●科目の主題

実験・調査において、標本より得られたデータから母集団についての結論を導き出すためには、推定ならびに検定と呼ばれる統計的処理を施す必要がある。本講では、点推定と区間推定、ならびに基本的な検定手法である t 検定、F 検定、カイ 2 乗検定について、その理論と実践の両面にわたって講ずる。

●到達目標

授業で紹介する検定法の理論的基礎について理解を深めるとともに、その実際の適用の仕方に習熟することが、この授業の到達目標である。

●授業内容・授業計画

主として、平均値に関する検定を例にとって、推測統計の基本的な考え方を説明する。おおよその授業計画は以下のとおりである。

第 1 回　統計的推測とは
第 2 回　データ解析 I の復習
第 3 回　確率変数と確率分布
第 4 回　正規分布
第 5 回　標本分布と中心極限定理
第 6 回　点推定と区間推定
第 7 回　検定の基本的手続き
第 8 回　カイ 2 乗分布・t 分布・F 分布
第 9 回　2 つの平均値の差の検定（1）
第 10 回　2 つの平均値の差の検定（2）
第 11 回　2 つの平均値の差の検定（3）
第 12 回　独立性の検定
第 13 回　相関と無相関検定
第 14 回　3 つ以上の平均値の差の検定
第 15 回　総復習

●評価方法
学期末試験の成績によって評価する。
●受講生へのコメント
本科目は複数開講科目である。この授業は、人間行動学科の社会学コース・心理学コースの学生を対象とする。同学科の教育学コース・地理学コースならびに他学科の第 1 部学生は、同時間帯に同内容で開講される人間行動学データ解析法Ⅱ b を受講すること。
●参考文献・教材
［テキスト］使用しない。必要な資料は、随時、授業時に配布する。
［参考文献］
(1) 広田すみれ (2013)『読む統計学 使う統計学 第 2 版』慶應義塾大学出版会
(2) 森敏昭・吉田寿夫 (1990)『心理学のためのデータ解析テクニカルブック』北大路書房
(3) 伊藤正人 (2006)『心理学研究法入門―行動研究のための研究計画とデータ解析―』昭和堂

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBGEN2202	開講期	単位数	標準履修年次
12	人間行動学データ解析法Ⅱ b Data Analysis of Human Behavioral Science Ⅱ b			後月 2	2 単位	2 年
	旧科目名			担当教員名 木村 義成 准教授		

●科目の主題
人間行動学をはじめ、様々な統計処理を用いる学問において必要とされる統計の原理と計算方法について学習する。統計の原理と計算方法のみならず、地理学や教育学で用いられる地域特性分析やデータ・サンプリングと調査法、地域住民への質問票の作成や分析についても実データを用いて演習を実施する。
●到達目標
演習の前半においては、平均、中央値、分散、標準偏差といった広く世の中で利用される基本統計量とデータのグラフ表現について理解してもらう。演習の後半では、地域統計のデータを用いた分析例について理解を深めてもらう。演習では Excel を利用するので、Excel における関数、データベース、データ集計機能について熟達してもらう。
●授業内容・授業計画
人間行動学をはじめ、様々な統計処理を用いる学問において必要とされる、基本統計量や統計推測の原理と方法について学習する。授業は理論と実践の両面から行うものとする。理論においては、正規分布、ポアッソン分布など分布の種類、平均値、標準偏差、検定と推定など統計の基礎となる概念について、数学的な背景、理論を理解してもらう
一方、実践においては、学術情報総合センターの端末室を利用し、主に Excel の統計機能を利用した処理法を地域統計分析の観点から習得する。
第 1 回 ・ガイダンス
第 2 回 ・基本統計量とグラフ表現①
第 3 回 ・基本統計量とグラフ表現②
第 4 回 ・データ検索・抽出
第 5 回 ・データのクロス集計
第 6 回 ・サンプリングと調査法
第 7 回 ・ヒストグラムとローレンツ曲線①
第 8 回 ・ヒストグラムとローレンツ曲線②
第 9 回 ・ローレンツ曲線とジニ係数
第 10 回 ・データのばらつき（分散・標準偏差）
第 11 回 ・検定と推定の基礎
第 12 回 ・多変量解析の基礎（回帰分析：地域変化と予測）
第 13 回 ・多変量解析の基礎（主成分分析、因子分析、クラスタ法を用いた地域の分類）
第 14 回 ・多変量解析の基礎（数量化理論を用いた分析）
第 15 回 ・質問票の作成と分析
●評価方法
出席点、および小レポート（60 ～ 70%）、最終レポート（30 ～ 40%）の割合で総合的に評価する。
●受講生へのコメント
統計処理は、実際にデータを用いて取り組まないと理解が進まない。
本演習では、Excel を利用することにより統計の理論的な面のみならず、実用的な面も理解してもらう。

●参考文献・教材
教材・参考文献については、第 1 回のガイダンスにて説明を行う。
教材は以下の市販書を用いる。
Excel による統計入門―Excel2007 対応版　縄田 和満 著　朝倉書店
ISBN-13: 978-4254121728
※）第1回のガイダンスには必ず受講すること。第1回を受講していない場合は、演習の参加を認めないことがある。

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LCGEN1101	開講期	単位数	標準履修年次
13	言語文化基礎論Ⅰ Outline of Language and Culture Studies Ⅰ			後火 4	2 単位	1・2 年
	旧科目名			担当教員名 小林 直樹 教授		

●科目の主題
昔話と日本古典文学
●到達目標
現在、「昔話」と一括りにされている物語の祖型を「日本古典文学」の世界に求め、その物語が本来持っていた特色や魅力を明らかにすることを目標とする。
●授業内容・授業計画
私たちにおなじみの「昔話」も、その祖型を「日本古典文学」に求めれば、そこにはさまざまに異なる成立事情がうかがえる。代表的な 7 種の「昔話」を取り上げ、その物語の本来の特色や機能、さらにはそこに込められた日本人の発想について考察する。
第 1 回　ガイダンス
第 2 回　瘤取り爺①
第 3 回　瘤取り爺②
第 4 回　腰折れ雀（雀の恩返し）
第 5 回　浦島太郎①
第 6 回　浦島太郎②
第 7 回　浦島太郎③
第 8 回　わらしべ長者①
第 9 回　わらしべ長者②
第 10 回　くらげ骨なし
第 11 回　鼠の嫁入り
第 12 回　一寸法師①
第 13 回　一寸法師②
第 14 回　一寸法師③
第 15 回　まとめ
●評価方法
試験による。
●受講生へのコメント
「昔話」の本来の姿が、決して平板な勧善懲悪の物語ではなく、思いのほか多様で奥深い世界を内包していることに気付いてほしい。
●参考文献・教材
授業中に指示する。

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LCGEN1102	開講期	単位数	標準履修年次
14	言語文化基礎論Ⅱ Outline of Language and Culture Studies Ⅱ			後水 3	2 単位	1・2 年
	旧科目名			担当教員名 高島 葉子 准教授		

●科目の主題
日本の妖怪の一種目である「山姥」に関する説話伝承とブリテン諸島（イギリス、アイルランド）のハッグ（鬼婆）妖精の説話伝承を題材とし、比較文化的考察を行う。

●到達目標
妖怪や妖精は地域を超えた共通性を指摘できるが、その起源や変容過程は地域固有の風土、歴史、宗教によって異なる。異なる地域の説話伝承を検討することにより、言語文化学に必要な比較文化的視点や分析方法の基礎を学ぶことを目指す。
●授業内容・授業計画
前半で日本の「山姥」とブリテン諸島のハッグ妖精に関する伝承を概観しつつその共通性を指摘したのち、後半でそれぞれの系譜を考察することにより、その歴史的変容の相違を明らかにする。
第 1 回　オリエンテーション
第 2 回　山姥伝承（1）
第 3 回　山姥伝承（2）
第 4 回　ハッグ伝承（1）
第 5 回　ハッグ伝承（2）
第 6 回　山姥とハッグの比較（2）
第 7 回　山姥の系譜（1）
第 8 回　山姥の系譜（2）
第 9 回　山姥の系譜（3）
第 10 回　山姥の起源
第 11 回　ハッグの系譜（1）
第 12 回　ハッグの系譜（2）
第 13 回　ハッグの系譜（3）
第 14 回　ハッグの起源
第 15 回　総括
●評価方法
出席点・平常点（30%）および期末テスト（70%）で評価する。
●受講生へのコメント
講義科目だが、演習形式も取り入れ、グループでの討論を行ってもらう予定である。
●参考文献・教材
授業時に資料配布を行う。参考文献適宜指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCGEN1103	開講期	単位数	標準履修年次
15	言語文化概論 I Introduction to Language and Culture Studies I			前火 1	2 単位	1・2 年
	旧科目名			担当教員名 井狩 幸男 教授／野末 紀之 教授／ 丹羽 哲也 教授／白田 由樹 准教授		

●科目の主題
言語文化学科の各コースの研究教育内容の紹介。
●到達目標
本科目は、専門領域を異にする教員が行うオムニバス方式の授業であり、言語またはそれによって織りなされる文学の諸相を学び、両者の多様な関係のあり方について理解を深めることを目標とする。
●授業内容・授業計画
第 1 ～ 4 回「言語獲得のメカニズム」（言語応用：井狩幸男教授）
心理学と言語学の学際領域として始まった心理言語学研究は、隣接する認知科学の研究分野の影響を受け、扱う内容が多岐に渡っている。本講義では、その中から 4 つのテーマを選び言語の関連領域の知見を紹介しながら、人間にとって言語とは何かという問題を考える。
第 5 ～ 8 回「ダンスの衝撃」（表現文化：野末紀之教授）19 世紀から 20 世紀にかけて西欧の文学者に衝撃をあたえたものにダンスがある。それは大衆娯楽であり、また同時に旧来の芸術観念ではとらえられない身体芸術であった。身体の運動とその衝撃をいかに言語で表現するのか、はたして表現できるのか――文学者たちが書き残した作品の一端にふれる。
第 9 ～ 12 回（国語国文学：丹羽哲也教授）言語というものは多様な側面を持ち、日本語も例外ではない。古代からほとんど変化していない部分もあれば、社会の移り変わりとともに、あるいは外国語の影響によって変化してきた部分もあり、現在まさに変化しつつある現象もある。このような日本語の諸相を学びながら、言語の変化について考えていく。
第 13 ～ 14 回（ドイツ語フランス語圏言語文化フランス語圏言語文化領域：白田由樹准教授）19 世紀のフランスで人気を集めた演劇・文学作品のヒーローとその背景を探る。 I ではロマン派の「英雄」として 19 世紀の文学

や演劇でさかんに取り上げられたナポレオン像の変遷を追いながら、近代におけるフランス国民意識の生成を文化史的に読み解いてみたい。

第 1 回　言語獲得
第 2 回　言語と脳
第 3 回　言語と意識
第 4 回　ヒトと言語
第 5 回　ダンスの衝撃（1）
第 6 回　ダンスの衝撃（2）
第 7 回　ダンスの衝撃（3）
第 8 回　ダンスの衝撃（4）
第 9 回　日本語の「ゆれ」と「乱れ」
第 10 回　和語と漢語と外来語
第 11 回　日本語の地理的位相
第 12 回　日本語の社会的位相
第 13 回　ナポレオンの史実と評価の推移
第 14 回　文学・演劇の中のナポレオン像
第 15 回　レポート相談日

●評価方法

レポートおよび出席点による。

●受講生へのコメント

1 言語文化学科の必修科目なので、必ず履修すること。
2『言語文化学概論Ⅰ』『言語文化学概論Ⅱ』の 2 科目をあわせて言語文化学科のコース内容を伝える科目設定である。したがってこの 2 科目の両方を原則として 1 年次に履修すること。
3 特定の担当教員のテーマを選択してレポートを提出する。ただし、その担当教員の授業回にのみ出席するのではなく、すべての担当教員の授業に出席すること。
4『言語文化学概論Ⅰ』『言語文化学概論Ⅱ』にまたがる担当（今年度はドイツ語フランス語圏言語文化フランス語領域言語文化領域の白田准教授）については、どちらか一方の授業のレポートテーマとしてのみ選択可。ⅠⅡともドイツ語フランス語圏言語文化フランス語領域言語文化領域のテーマでレポートを提出することは認められない。
5 レポートと出席状況を合わせて成績評価を行う。なお、欠席回数が全授業回数の三分 の一を超えた場合、原則として、レポートを提出しても評価の対象にならず、単位は認定されない。

●参考文献・教材

必要に応じて授業中に指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCGEN1104	開講期	単位数	標準履修年次
16	**言語文化概論Ⅱ** Introduction to Language and Culture Studies Ⅱ			前木 1	2 単位	1・2 年
	旧科目名			担当教員名 大岩本 幸次 准教授／古賀 哲男 准教授／神竹 道士 教授／白田 由樹 准教授		

●科目の主題

言語文化学科の各コースにおける研究教育内容の紹介。

●到達目標

専門領域を異にする教員が行うオムニバス方式の授業であり、言語またはそれによって織りなされる文学の諸相を学び、両者の多様な関係のあり方について理解を深めることを目標とする。

●授業内容・授業計画

第 1 ～ 4 回（中国語中国文学：大岩本准教授）「漢字の音韻について」言語は時代の変遷とともにその形を変化させていきますが、中国語は数千年という長い期間でその変遷をたどることができる言語の一つです。今回の講義では音韻のレベルで中国語の時代的変化をたどり、また日本漢字音との密接な関わりについて言及してみたいと思います。

第 5 ～ 8 回（英米言語文化：古賀哲男准教授）英語圏における文学・文化研究をとくに 20 世紀に書かれたアメリカ詩と同時代の音楽・絵画を題材として考えてみます。無声映画からトーキー映画の橋渡しをなるチャップリン映画とハートクレイン（Hart Crane,1899-1932）の詩、ブルースやジャズといった黒人音楽とラングストン・ヒュー（Langston Hughes,1902-67）の詩 , ジャック・ポラック（Jackson Pollock,1912-56）のアクション・ペインティングとチャールズ・オルソン（Charles Olson,1910-70）の詩、そしてラップ・ヒップホップとアミリ・バラカ（Amiri Baraka,1934-2014）

の詩を扱います。

第 9 ～ 12 回（ドイツ語フランス語圏言語文化フランス語圏言語領域：神竹道士教授）「標準ドイツ語とは何か」をテーマとして、その標準的あるいは模範的形式を文法・綴り・発音から眺めてみる。ドイツ語を通して「正しい言葉」の規範とその実像について考えてみる機会としたい。

第 13 ～ 14 回（ドイツ語フランス語圏言語文化フランス語圏言語領域：白田由樹准教授）百年戦争でフランスに劇的な勝利をもたらしながら焚刑に処せられたジャンヌ・ダルクは、死後 400 年以上を経た 19 世紀に「救国のヒロイン」として一躍脚光を浴びる。その要因を、当時の社会状況やジャンヌにまつわる劇作品、祝祭等から考察していく。

第 1 回　声調と声母
第 2 回　介音・母音・韻尾
第 3 回　韻書の成立
第 4 回　日本漢字音
第 5 回　チャップリンとクレイン
第 6 回　ブルース・ジャズとヒューズ
第 7 回　ポロックとオルソン
第 8 回　ラップ・ヒップホップとバラカ
第 9 回　文法規範の確立と揺れ
第 10 回　正しい書き方（正書法）
第 11 回　正しい発音（正音法）
第 12 回　正しいドイツ語（標準ドイツ語）
第 13 回　ジャンヌ・ダルクと「民衆」の歴史
第 14 回　世紀末フランスの聖ジャンヌ像
第 15 回　レポート相談日

●評価方法

レポートおよび出席点による。

●受講生へのコメント

1 言語文化学科の必修科目なので必ず履修すること。
2「言語文化概論Ⅰ」「言語文化概論Ⅱ」の 2 科目をあわせて言語文化学科のコース内容を伝える科目設定である。したがってこの 2 科目をともに原則として 1 年次に履修すること。
3 特定の担当教員のテーマを選択してレポートを提出する。ただし、その担当教員の授業回にのみ出席するのではなく、すべての担当教員の授業に出席すること。
4「言語文化概論Ⅰ」「言語文化概論Ⅱ」にまたがる担当（今年度はドイツ語フランス語圏言語文化フランス語言語文化領域の白田准教授）については、どちらか一方の授業のレポートテーマとしてのみ選択可。Ⅰ・Ⅱともドイツ語フランス語圏言語文化フランス語言語文化領域のテーマでレポートを提出することは認められない。
5 レポートと出席状況を合わせて成績評価を行う。なお、欠席回数が全授業回数の三分の一を超えた場合、原則として、レポートを提出しても評価の対象にならず、単位は認定されない。

●参考文献・教材

必要に応じて授業中に指示する。

哲 学 歴 史 学 科

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAPHL3199	開講期	単位数	標準履修年次
17	哲学概論 I Introduction to Philosophy I			前月 3	2 単位	2・3 年
	旧科目名			担当教員名 佐金 武 講師		

●科目の主題

形而上学とは、世界の根本的なあり方を探求する哲学の一分野である。その主要な問題の検討を通じて、われわれの世界観の明晰化を試みる。

●到達目標

哲学の基礎である論理的な思考と、形而上学の基本概念の習得を目標とする。その際、単なる専門知識の伝授に終始するのではなく、自ら問題を形成し粘り強く考えぬく自律心と、偏狭な見方を避けあらゆる可能性に対して開かれた知性を育むことを目指す。

●授業内容・授業計画

形而上学の主要な問題について、新旧の様々な理論的可能性を探る。

講義パートで学んだことを土台として、グループワークやディスカッション、ディベートなどを行い、問題を多角的に検討する。

第 1 回　導入：分析形而上学の試みについて
第 2 回　物理的対象（1）：どのような条件によって複数の部分は一つの対象を合成するのか
第 3 回　物理的対象（2）：無制限主義・事実主義・ニヒリズム
第 4 回　物理的対象（3）：有機主義とモニズム
第 5 回　コンセプトマップ作成とディスカッション I
第 6 回　性質（1）：多にわたる一の問題
第 7 回　性質（2）：普遍主義と唯名論
第 8 回　性質（3）：トロープ説
第 9 回　コンセプトマップ作成ととディスカッション II
第 10 回　実体説と束説（1）：裸の個体
第 11 回　実体説と束説（2）：性質の束としての個体
第 12 回　コンセプトマップ作成とディスカッション III
第 13 回　様相（1）：様相実在論
第 14 回　様相（2）：いくつかの代案
第 15 回　コンセプトマップ作成とディスカッション IV

●評価方法

本科目では、グループワーク等における受講生の積極的参加を求める。この平常点に加えて、レポート課題を予定する。

●受講生へのコメント

本科目は、後期に開講される哲学概論 II とあわせて受講することが望ましい。

●参考文献・教材

以下を参考文献としてあげる（購入の必要は特になし）。

[1] S. Mumford（2012）, Metaphysics: A Very Short Introduction, Oxford University Press.
[2] J. W. Carroll and N. Markosian（2010）, An Introduction to Metaphysics, Cambridge University Press.
[3] J. Tallant（2011）, Metaphysics: An Introduction, Continuum.
[4] E. B. Conee and T. Sider（2007）, Riddles of Existence: A Guided Tour of Metaphysics, Oxford University Press.（『形而上学レッスン』、A・コニー &T・サイダー著、小山虎訳、春秋社）

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAPHL3200	開講期	単位数	標準履修年次
18	**哲学概論Ⅱ** Introduction to Philosophy Ⅱ			後月 3	2 単位	2・3 年
	旧科目名			担当教員名 佐金 武 講師		

●科目の主題

形而上学とは、世界の根本的なあり方を探求する哲学の一分野である。その主要な問題の検討を通じて、われわれの世界観の明晰化を試みる。

●到達目標

哲学の基礎である論理的な思考と、形而上学の基本概念の習得を目標とする。その際、単なる専門知識の伝授に終始するのではなく、自ら問題を形成し粘り強く考えぬく自律心と、偏狭な見方を避けあらゆる可能性に対して開かれた知性を育むことを目指す。

●授業内容・授業計画

形而上学の主要な問題について、新旧の様々な理論的可能性を探る。

講義パートで学んだことを土台として、グループワークやディスカッション、ディベートなどを行い、問題を多角的に検討する。

第 1 回　導入：後期授業の説明と準備（グループの組み替えなど）
第 2 回　人の同一性（1）：パーフィットの思考実験
第 3 回　人の同一性（2）：身体説・記憶説・魂説
第 4 回　人の同一性（3）：動物主義と現象的基準
第 5 回　コンセプトマップ作成とディスカッション I
第 6 回　決定論と自由（1）：自由と他行為可能性
第 7 回　決定論と自由（2）：両立論と非両立論
第 8 回　決定論と自由（3）：行為と因果
第 9 回　コンセプトマップ作成とディスカッション II
第 10 回　時間（1）：マクタガートの「時間の非実在性証明」
第 11 回　時間（2）：A- 理論と B- 理論
第 12 回　コンセプトマップ作成とディスカッション III
第 13 回　持続（1）：一時的な内在的性質の問題
第 14 回　持続（2）：延続説と耐続説
第 15 回　コンセプトマップ作成とディスカッション IV

●評価方法

本科目では、グループワーク等における受講生の積極的参加を求める。この平常点に加えて、レポート課題を予定する。

●受講生へのコメント

本科目は、前期に開講される哲学概論 I とあわせて受講することが望ましい。

●参考文献・教材

以下を参考文献としてあげる（購入の必要は特になし）。

[1] S. Mumford（2012）, Metaphysics: A Very Short Introduction, Oxford University Press.
[2] J. W. Carroll and N. Markosian（2010）, An Introduction to Metaphysics, Cambridge University Press.
[3] J. Tallant（2011）,Metaphysics: An Introduction, Continuum.
[4] E. B. Conee and T. Sider（2007）, Riddles of Existence: A Guided Tour of Metaphysics, Oxford University Press.（『形而上学レッスン』、A・コニー &T・サイダー著、小山虎訳、春秋社）

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAPHL3201	開講期	単位数	標準履修年次
19	**哲学史通論 I** Outline of the History of Philosophy Ⅰ			前水 4	2 単位	1・2 年
	旧科目名			担当教員名 早瀬 篤 非常勤講師		

●科目の主題

古代ギリシア世界にはじまった西洋哲学の歴史を、その端緒から語り起こして、プラトンおよびアリストテレスによって大成されるに至るまでを概観する。古代ギリシア哲学は―哲学とは本質的に古代ギリシア的なものと言われるよう

に―哲学史上の枢要となる位置を占めるが、それだけでなく、現代世界を支配する自然および人文諸科学の基礎となる思考様式をはじめて明確な形で提示したものである。現代における西洋的な「学」の営みの由来を知るために、紀元前 6-4 世紀におけるギリシアの思想的状況を渉猟することにしたい。

●到達目標

古代ギリシア哲学の主要な哲学者の教説について大まかな理解を得ることが目標である。古代ギリシア哲学の基本用語（例えば「エレンコス」「形相」「素材」）の意味だけではなく、それらがどのような問題を解決するために使われているのかというところまで簡単に説明できるようになることが目標である。

●授業内容・授業計画

講義は以下のような区分に従って行われる。

第 1 回　古代ギリシア哲学総説
第 2 回　哲学のはじまり (1) 最初期の自然学者たち
第 3 回　哲学のはじまり (2) ソフィスト
第 4 回　ソクラテスの哲学 (1)
第 5 回　ソクラテスの哲学 (2)
第 6 回　ソクラテスの哲学 (3)
第 7 回　プラトンの哲学 (1)
第 8 回　プラトンの哲学 (2)
第 9 回　プラトンの哲学 (3)
第 10 回　プラトンの哲学 (4)
第 11 回　アリストテレスの哲学 (1)
第 12 回　アリストテレスの哲学 (2)
第 13 回　アリストテレスの哲学 (3)
第 14 回　アリストテレスの哲学 (4)
第 15 回　総括

●評価方法

成績は出席と学期末に行うテストの成績とを考慮して算出する。その内訳は、出席 60%、テストの成績 40%とする。

●受講生へのコメント

●参考文献・教材

教科書は指定しないが、参考書籍として以下のものを挙げる。
内山勝利（編）『哲学の歴史 第 1 巻 哲学誕生【古代I】』(2008, 中央公論新社)
藤沢令夫『プラトンの哲学』(1998, 岩波新書)
内山勝利他（編）『アリストテレス全集 1 カテゴリー論・命題論』(2013, 岩波書店)〔編者によるアリストテレスの解説 (pp.337-442) が参考になる。授業担当講師による『命題論』の翻訳・解説も収録。〕

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAPHL3202	開講期	単位数	標準履修年次
20	**哲学史通論Ⅱ** Outline of the History of Philosophy Ⅱ			後水 4	2 単位	1・2 年
	旧科目名			担当教員名 高梨 友宏 教授		

●科目の主題

大陸合理論と英国経験論の二つの思潮と、これらを総合するカントの超越論的批判哲学に代表される西洋近世哲学のうち、英国経験論とカントの超越論的批判哲学の内容を概観する。

●到達目標

「イギリス経験論」の思想家、ロック、バークリーおよびヒュームの哲学を概観した後、カントの超越論的批判哲学を紹介する。とくに「大陸合理論」と「イギリス経験論」をカントがどのように総合して彼の「超越論的批判哲学」を構想したか、またこの立場がその後の哲学思想にどのような影響を及ぼしたかについて、十分な検討を加え、概説を試みたい。

●授業内容・授業計画

できるかぎり、以下のようなプランに沿って進めたい。

第 1 回　導入：合理論の諸思想の概観（前期のまとめ）と経験論、およびそれらの総合としてのカントの超越論的批判哲学
第 2 回　ロック (1)：生得観念説の否定、観念の起源その 1（「感覚」、「内省」、「単純観念」）
第 3 回　ロック (2)：観念の起源その 2（「複合観念」）

第 4 回　ロック（3）：認識の価値と妥当性
第 5 回　バークリー：バークリーの経験論、視覚と触覚、「自然の言語」としての視覚
第 6 回　ヒューム（1）：ロック、バークリーの経験論との異同、認識論（「印象」、「観念」、「連想」、「信念」、実体と自我への批判）
第 7 回　ヒューム（2）：情念論その 1（直接的情念と間接的情念、間接的情念の諸相と相互関係）
第 8 回　ヒューム（3）：情念論その 2（自由と必然、理性と情念）、道徳論（理性に起因しない道徳、「道徳感覚」）
第 9 回　カント（1）：超越論的批判哲学の目的とその哲学史的意義、およびその前提と方法
第 10 回　カント（2）：認識論その 1（超越論的感性論、純粋悟性概念の発見および演繹）
第 11 回　カント（3）：認識論その 2（原則の分析論：図式論）
第 12 回　カント（4）：認識論その 3（原則の分析論：原則の体系）
第 13 回　カント（5）：認識論その 4（超越論的弁証論と認識の限界設定）
第 14 回　カント（6）：実践哲学および目的論への見通し
第 15 回　カント（7）：カントの超越論的批判哲学の体系／後期のまとめ（調整）

●評価方法
学期末試験を課し、授業内容の理解の如何を評価対象とする。

●受講生へのコメント
哲学史通論Ⅱでは、大陸合理論について概観する年と、英国経験論からカントの批判哲学までを概観する年とが交替することになる。今年度は後者を扱う。大陸合理論の思想についてはできるだけ授業枠内で触れることにしたいが、限界があるので、希望者には関連するプリントを配布し、自習を求めることとしたい。
出欠はとらないが、毎回「コミュニケーション・カード」を配布し、受講者の質問や疑問に答える形で授業内容を補足する。

●参考文献・教材
教材として、授業プリントを配布。
その他、参考文献は適宜授業中に紹介する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAPHL3203	開講期	単位数	標準履修年次
21	**哲学演習・講読Ⅰ** Readings Seminar in Philosophy Ⅰ			前水 3	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 佐金 武 講師		

●科目の主題
英語文献の講読を通じて、古代ギリシャから現代にいたる哲学の流れを「時間」を軸に概観する。

●到達目標
哲学の文献の読解力を養うとともに、二次文献の検索にも習熟し、さらに研究を深める方法について学ぶ。

●授業内容・授業計画
本年度は、以下のテキストの精読に取り組む。
Philip Turetzky（1998）Time, Routledge.
第 1 回　導入：テキスト全体についての解説と授業の準備
第 2 回　第 1 章”Greek thought before Aristotle”の講読 1
第 3 回　第 1 章の講読 2
第 4 回　第 2 章”Aristotle”の講読 1
第 5 回　第 2 章の講読 2
第 6 回　第 3 章”Greek thought after Aristotle: Skeptics, Epicureans and Stoics”の講読 1
第 7 回　第 3 章の講読 2
第 8 回　第 4 章”Neoplatonism and the end of the ancient world”の講読 1
第 9 回　第 4 章の講読 2
第 10 回　第 5 章”Anticipation of modernity”の講読 1
第 11 回　第 5 章の講読 2
第 12 回　第 6 章”Absolute and ideal time”の講読 1
第 13 回　第 6 章の講読 2
第 14 回　第 7 章”Kant”の講読 1
第 15 回　第 7 章の講読 2

●評価方法
平常点と期末テストの採点による。
●受講生へのコメント
この科目は、後期に開講される哲学演習・講読 II とあわせて受講することが望ましい。
●参考文献・教材
授業中に提示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAPHL3204	開講期	単位数	標準履修年次
22	哲学演習・講読Ⅱ Reading Seminar in Philosophy Ⅱ			後水 3	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 佐金 武 講師		

●科目の主題
英語文献の講読を通じて、古代ギリシャから現代にいたる哲学の流れを「時間」を軸に概観する。
●到達目標
哲学の文献の読解力を養うとともに、二次文献の検索にも習熟し、さらに研究を深める方法について学ぶ。
●授業内容・授業計画
本年度は、以下のテキストの精読に取り組む。
Philip Turetzky (1998) Time, Routledge.
第 1 回　導入：前期の振り返りと授業の準備
第 2 回　第 8 章”Being and becoming”の講読 1
第 3 回　第 8 章の講読 2
第 4 回　第 9 章”McTaggart’s problem”の講読 1
第 5 回　第 9 章の講読 2
第 6 回　第 10 章”Tense and existence”の講読 1
第 7 回　第 10 章の講読 2
第 8 回　第 11 章”Phenomenology of time”の講読 1
第 9 回　第 11 章の講読 2
第 10 回　第 12 章”Transcendence and existence”の講読 1
第 11 回　第 12 章の講読 2
第 12 回　第 13 章”Multiplicity and virtuality”の講読 1
第 13 回　第 13 章の講読 2
第 14 回　第 14 章”Becoming-time”の講読 1
第 15 回　第 14 章の講読 2
●評価方法
平常点と期末テストの採点による。
●受講生へのコメント
この科目は、前期に開講される哲学演習・講読 I とあわせて受講することが望ましい。
●参考文献・教材
授業中に提示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAPHL3205	開講期	単位数	標準履修年次
23	哲学史演習・講読Ⅰ Reading Seminar in the History of Philosophy Ⅰ			前水 2	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 高梨 友宏 教授		

●科目の主題
フッサール『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』を読む。
●到達目標
フッサール後期現象学の代表的著作である『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』における、フッサールの近大哲学史観を踏まえ、「生活世界」の理念や「他者問題」について理解を深める。

●授業内容・授業計画

最初の数回で、同著第 1 部「ヨーロッパ的人間の根本的な生活危機の表現としての学問の危機」および第 2 部「近代における物理学的客観主義と超越論的主観主義との対立の起源の解明」の内容について講師が講述し、その後、第 3 部「超越論的問題の解明とそれに関連する心理学の機能」について独語講読演習を行う。

第 1 回　導入：フッサール現象学の概説と、『危機』書第 1 部の内容についての講述
第 2 回　『危機』書第 2 部の内容についての講述（1）
第 3 回　『危機』書第 2 部の内容についての講述（2）
第 4 回　『危機』書第 3 部の講読（1）
第 5 回　『危機』書第 3 部の講読（2）
第 6 回　『危機』書第 3 部の講読（3）
第 7 回　『危機』書第 3 部の講読（4）
第 8 回　『危機』書第 3 部の講読（5）
第 9 回　『危機』書第 3 部の講読（6）
第 10 回　『危機』書第 3 部の講読（7）
第 11 回　『危機』書第 3 部の講読（8）
第 12 回　『危機』書第 3 部の講読（9）
第 13 回　『危機』書第 3 部の講読（10）
第 14 回　『危機』書第 3 部の講読（11）
第 15 回　『危機』書第 3 部の講読（12）

●評価方法

平常点による評価。

●受講生へのコメント

講読に当たっては、受講者に独文和訳を課すので、独語中級程度の既修者が受講されることが望ましい。

●参考文献・教材

資料・テキストはコピーして配布するが、各自で訳書を用意することが望ましい。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAPHL3207	開講期	単位数	標準履修年次
24	倫理学概論 I Introduction to Ethics I			前火 3	2 単位	2・3 年
	旧科目名			担当教員名 土屋 貴志 准教授		

●科目の主題

倫理学（道徳哲学）とは、規範の根拠について考える学問である。いいかえれば「～はわるい」「～はよい」「～してはいけない」「～してもよい」「～すべきだ」「～すべきではない」等ということが、どうしてそう言えるのか、その理由を示そうとするのが倫理学である。本科目においては倫理学の基礎について考察する。

●到達目標

受講生諸君が、社会におけるさまざまな規範の根拠について考え、自分の規範的判断の理由を、他者の納得できる形で表現できるようになることが、当科目の目標である。

●授業内容・授業計画

倫理学の基本的な考え方を、講義、課題演習および思考実験を通して学ぶ。
授業予定は下記の通りだが、適宜変更する可能性もある。

第 1 回　オリエンテーション
第 2 回　事例 1 をめぐる討論
第 3 回　倫理学とはなにか
第 4 回　規範を根拠づけるとはどういうことか
第 5 回　倫理に関する相対主義
第 6 回　究極的原理はどのようなものか
第 7 回　実践的三段論法の活用
第 8 回　中間まとめ（中間レポート）
第 9 回　義務論：カント
第 10 回　利己主義と利他主義
第 11 回　功利主義（公益主義）
第 12 回　義務論と功利主義（公益主義）の対比

第 13 回　事例 2 をめぐる討論
第 14 回　事例 3 をめぐる討論
第 15 回　まとめ（期末レポート、自己評価レポート）

●評価方法

担当教員は、2 回課すレポートの成績に、授業への参加姿勢などを勘案して評点原案を作成する。受講者は、半期にわたる自らの学習活動を評点化しその根拠を記した「自己評価レポート」を最終授業時に提出する。担当教員は評点原案と自己評価レポートの内容を突き合わせて成績を決定する。

●受講生へのコメント

1. 講義ノートを担当者のウェブサイト（http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/user/tsuchiya/class/class-index.html）で公開するので、毎時間必ず事前に精読して出席すること。授業では読んできたことを前提に質疑応答や議論を行う。この予習なしに出席しても授業内容を理解できないので，毎回欠かさずに予習してくること。
2. 所定の事項を記入した受講カードを提出すること。受講カードは所見と評価を記録する「カルテ」として用いる。受講者は自分の受講カードの記載内容をいつでも閲覧できる。
3. 受講者の顔と名前を覚えたいので、顔と氏名を積極的に売り込むこと。履修登録者数が 20 人を超えた場合は、顔写真の受講カードへの貼付を受講者全員に義務づける。
4. 期末レポート・自己評価レポート・受講カードは成績採点終了後に返却する。返却の掲示が出たら、学生サポートセンター文学部教務担当まで各自受け取りに来ること。
5. 受講カードと自己評価レポートのいずれか一方でも未提出の場合は履修放棄とみなす。

●参考文献・教材

以下の参考図書のほか、授業中に適宜紹介する。
カント『道徳形而上学の基礎づけ』（光文社古典新訳文庫）
ホッブズ『リヴァイアサン』（岩波文庫）、ロック『完訳統治二論』（岩波文庫）
『世界の名著 49 ベンサム /J.S. ミル』（中央公論新社）
ロールズ『正義論』（紀伊國屋書店）
シンガー『実践の倫理』（昭和堂）
レイチェルズ『現実をみつめる道徳哲学』（晃洋書房）
サンデル『これからの「正義」の話をしよう』（早川書房）

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAPHL3208	開講期	単位数	標準履修年次
25	**倫理学概論Ⅱ** Introduction to Ethics Ⅱ			後火 3	2 単位	2・3 年
	旧科目名			担当教員名 土屋 貴志 准教授		

●科目の主題

倫理学（道徳哲学）とは、規範の根拠について考える学問である。いいかえれば「～はわるい」「～はよい」「～してはいけない」「～してもよい」「～すべきだ」「～すべきではない」等ということが、どうしてそう言えるのか、その理由を示そうとするのが倫理学である。本科目では倫理学の代表的な諸理論について考察する。

●到達目標

倫理学の諸理論とその問題点について考え議論することにより、受講生が「倫理学する」能力（倫理学的問題に即して考え、自分の意見を持ち、その根拠を他者に共有できる形で説明する能力）を身につけると共に、「倫理学について語る」ための基礎的知識を得る。

●授業内容・授業計画

授業形態はプリントやウェブサイト、テキストを活用した講義のほか、必要に応じてグループディスカッションや討論を行う。

具体的には下記のように進める予定であるが、必要に応じて変更する可能性もある。

第 1 回　オリエンテーション
第 2 回　現実の問題と倫理学の関係
第 3 回　倫理学「理論」の特長に基づく分類
第 4 回　発見の方法～決疑論
第 5 回　正当化①義務論
第 6 回　正当化②帰結主義（1）利己主義
第 7 回　正当化②帰結主義（2）功利主義（a）古典的功利主義と選好功利主義（b）行為功利主義と規則功利主義

第 8 回　正当化②帰結主義（2）功利主義（c）総量説と平均効用説、先行存在説
第 9 回　起源の説明①共同体主義
第 10 回　起源の説明②社会契約説
第 11 回　起源の説明③進化論的倫理学
第 12 回　動機付け（教育）～徳倫理学
第 13 回　実践上の注意～ケア倫理学
第 14 回　まとめの質疑
第 15 回　期末レポート、自己評価レポート

●評価方法

担当教員は期末レポートの成績に、授業への参加姿勢などを勘案して評点原案を作成する。受講者は、半期にわたる自らの学習活動を評点化しその根拠を記した「自己評価レポート」を最終授業時に提出する。担当教員は評点原案と自己評価レポートの内容を突き合わせて成績を決定する。

●受講生へのコメント

1. 講義ノートを担当者のウェブサイト（http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/user/tsuchiya/class/class-index.html）で公開するので、毎時間必ず事前に精読して出席すること。授業では読んできたことを前提に質疑応答や議論を行う。この予習なしに出席しても授業内容を理解できないので，毎回欠かさずに予習してくること。
2. 所定の事項を記入した受講カードを提出すること。受講カードは所見と評価を記録する「カルテ」として用いる。受講者は自分の受講カードの記載内容をいつでも閲覧できる。
3. 受講者の顔と名前を覚えたいので、顔と氏名を積極的に売り込むこと。履修登録者数が 20 人を超えた場合は、顔写真の受講カードへの貼付を受講者全員に義務づける。
4. 期末レポート・自己評価レポート・受講カードは成績採点終了後に返却する。返却の掲示が出たら、学生サポートセンター文学部教務担当まで各自受け取りに来ること。
5. 受講カードと自己評価レポートのいずれか一方でも未提出の場合は履修放棄とみなす。
6. 事前に倫理学概論 I を履修していることが望ましい。

●参考文献・教材

以下の参考図書のほか、授業中に適宜紹介する。
ジョンセン他『臨床倫理学』（新興医学出版社）
フランケナ『倫理学』（培風館）
ランド『利己主義という気概』（ビジネス社）
ヘア『道徳的に考えること』（勁草書房）
マッキンタイア『美徳なき時代』（みすず書房）
ゴティエ『合意による道徳』（木鐸社）
内井惣七『進化論と倫理』（世界思想社）
アリストテレス『ニコマコス倫理学』（光文社古典新訳文庫）
ノディングズ『ケアリング』（晃洋書房）

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAPHL3209	開講期	単位数	標準履修年次
26	**倫理学演習・講読 I** Reading Seminar in Ethics I			前火 2	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 土屋 貴志 准教授		

●科目の主題

西洋倫理学の代表的な古典 3 点を日本語で通読する。

●到達目標

西洋倫理学の代表的古典に関して、
1）著者は倫理をどのようなものと考えていたか
2）著者の倫理についての考え方は、現代の日本社会に生きる我々にとって、どのような意義をもつか
の二点について、受講生が自分自身の解答を得る。

●授業内容・授業計画

毎週少なくとも 100 ページ以上の読書課題を課す。毎回、報告者を指名する。報告者は、文献の課題箇所に書かれた内容と、議論したいことの要点を、レジュメにまとめてきて発表する。課題文献についてのレポート（4000 字程度）を 2 回課す。

具体的には下記のように進める予定であるが、必要に応じて変更する可能性もある。

第 1 回　オリエンテーション・受講カード記入
第 2 回　プラトン『国家』第 1 巻～第 3 巻 18 章
第 3 回　プラトン『国家』第 3 巻 19 章～第 5 巻
第 4 回　プラトン『国家』第 6 巻・第 7 巻
第 5 回　プラトン『国家』第 8 巻～第 10 巻
第 6 回　中間レポート執筆
第 7 回　アリストテレス『ニコマコス倫理学』第 1 巻～第 3 巻
第 8 回　アリストテレス『ニコマコス倫理学』第 4 巻～第 6 巻
第 9 回　アリストテレス『ニコマコス倫理学』第 7 巻・第 8 巻
第 10 回　アリストテレス『ニコマコス倫理学』第 9 巻・第 10 巻
第 11 回　カント『道徳形而上学の基礎づけ』序言・第 1 章
第 12 回　カント『道徳形而上学の基礎づけ』第 2 章
第 13 回　カント『道徳形而上学の基礎づけ』第 3 章
第 14 回　期末レポート執筆
第 15 回　採点面接

●評価方法
指名報告およびレポートを評価の対象とする。評価内容は「受講カード」に記録し、いつでも閲覧に応じる。
学期末試験は行わないが、採点に関する面談を行う。受講カードは採点面談時に返却する。

●受講生へのコメント
読書課題の量が多いが、一字一句の理解よりも、論旨は何かを考えて、大意をつかむ読み方を習得するように心がけてほしい。

●参考文献・教材
テキストは以下の本全部である。
・プラトン『国家』（上・下、岩波文庫）
・アリストテレス『ニコマコス倫理学』（上・下、光文社古典新訳文庫）
・カント『道徳形而上学の基礎づけ』（光文社古典新訳文庫）
参考文献は必要に応じて授業中に紹介する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAPHL3210	開講期	単位数	標準履修年次
27	**倫理学演習・講読Ⅱ** Reading Seminar in Ethics Ⅱ			後火 1	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 土屋 貴志 准教授		

●科目の主題
英米倫理学の代表的な古典 5 点を日本語で通読する。

●到達目標
英米倫理学の代表的古典に関して、
1）著者は倫理をどのようなものと考えていたか
2）著者の倫理についての考え方は、現代の日本社会に生きる我々にとって、どのような意義をもつか
の二点について、受講生が自分自身の解答を得る。

●授業内容・授業計画
毎週少なくとも 100 ページ以上の読書課題を課す。毎回、報告者を指名する。報告者は、文献の課題箇所に書かれた内容と、議論したいことの要点を、レジュメにまとめてきて発表する。課題文献についてのレポート（4000 字程度）を 2 回課す。
具体的には下記のように進める予定であるが、必要に応じて変更する可能性もある。
第 1 回　オリエンテーション・受講カード記入
第 2 回　『リヴァイアサン』序説～第 9 章
第 3 回　『リヴァイアサン』第 10 章～第 16 章
第 4 回　『リヴァイアサン』第 17 章～第 25 章
第 5 回　『リヴァイアサン』第 26 章～第 31 章
第 6 回　『統治二論』後編第 1 章～第 8 章
第 7 回　『統治二論』後編第 9 章～第 19 章
第 8 回　中間レポート執筆

第 9 回　『道徳および立法の諸原理序説』第 1 章～第 6 章
第 10 回　『道徳および立法の諸原理序説』第 7 章～第 17 章
第 11 回　『功利主義論』第 1 章～第 3 章
第 12 回　『功利主義論』第 4 章・第 5 章
第 13 回　『自由論』第 1 章・第 2 章
第 14 回　『自由論』第 3 章～第 5 章
第 15 回　期末レポート執筆・採点面接

●評価方法

指名報告およびレポートを評価の対象とする。評価内容は「受講カード」に記録し、いつでも閲覧に応じる。学期末試験は行わないが、採点に関する面談を行う。受講カードは採点面談時に返却する。

●受講生へのコメント

読書課題の量が多いが、一字一句の理解よりも、論旨は何かを考えて、大意をつかむ読み方を習得するように心がけてほしい。

●参考文献・教材

テキストは以下の文献全部である。
・ホッブズ『リヴァイアサン』第 1 部・第 2 部（岩波文庫）
・ロック『完訳統治二論』（岩波文庫）
・ベンサム『道徳および立法の諸原理序説』（『世界の名著 49　ベンサム /J.S. ミル』中公バックス所収）
・J. S. ミル『功利主義論』（同上）
・J. S. ミル『自由論』（日経 BP クラシックス）
参考文献は必要に応じて授業時間内に紹介する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAPHL3211	開講期	単位数	標準履修年次
28	**宗教学概論 I** Introduction to the Study of Religion I			前木 2	2 単位	2・3 年
	旧科目名			担当教員名 仲原 孝 教授		

●科目の主題

世界に数えきれないほど存在する宗教について考えるのに、すべての宗教をひとまとめにして扱ってしまったのでは宗教の真相は見えなくなる。そこでこの講義では、毎年、特定の宗教的・宗教哲学的思想を主題として取り上げ、それについて深く掘り下げながら、宗教の本質について考えてゆく。

●到達目標

具体的な宗教現象に即しながら、宗教の本質について受講者各自が独自の哲学的思考を展開できるようになることを、授業の目標とする。

●授業内容・授業計画

今年は、スピノザの『エチカ』にあらわされている宗教哲学を具体的にたどることを通じて、スピノザの宗教体験はいかなるものであったか、宗教について哲学的に研究する目的や手段や意義は何か、といったことについて考察して行きたい。

授業計画は以下の通り。ただし授業進度の都合上、授業計画に多少の変更が行なわれる場合もありうることを付記しておく。

第 1 回　全般的序論
第 2 回　スピノザの哲学史的地位
第 3 回　スピノザの生涯 (1)
第 4 回　スピノザの生涯 (2)
第 5 回　スピノザの生涯 (3)
第 6 回　スピノザの生涯 (4)
第 7 回　スピノザの生涯 (5)
第 8 回　スピノザの生涯 (6)
第 9 回　幾何学的叙述形式の必然性と限界
第 10 回　スピノザの神
第 11 回　「神すなわち自然」
第 12 回　能産的自然と所産的自然

第 13 回　物心並行説
第 14 回　救済思想としての汎神論
第 15 回　スピノザの神論の宗教哲学的意義

●評価方法
小論文形式のレポートを課す。論ずるべき課題を通知する時に、同時に、枚数、テーマ、論じ方など、論述が満たすべき条件を何項目かにわたって指定する。それらがすべて満たされていることが単位認定の必須の条件となる。
●受講生へのコメント
授業中の私語は厳重に禁止する。成績評価のためのレポートでは、講義で提示された問題に対して各自が主体的に答を模索することが求められる。ノートや参考書をまとめただけのレポートには単位を認定しないので注意。
●参考文献・教材
テキストは用いない。必要な資料は印刷して授業中に配布する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAPHL3212	開講期	単位数	標準履修年次
29	宗教学概論Ⅱ Introduction to the Study of Religion Ⅱ			後木 2	2 単位	2・3 年
	旧科目名			担当教員名 仲原 孝 教授		

●科目の主題
世界に数えきれないほど存在する宗教について考えるのに、すべての宗教をひとまとめにして扱ってしまったのでは宗教の真相は見えなくなる。そこでこの講義では、毎年、特定の宗教的・宗教哲学的思想を主題として取りあげ、それについて深く掘り下げながら、宗教の本質について考えてゆく。
●到達目標
具体的な宗教現象に即しながら、宗教の本質について受講者各自が独自の哲学的思考を展開できるようになることを、授業の目標とする。
●授業内容・授業計画
前期のつづき。前期と連続して受講することが望ましい。
授業計画は以下の通り。ただし授業進度の都合上、授業計画に多少の変更が行なわれる場合もありうることを付記しておく。
第 1 回　序論。要注意点の指示
第 2 回　スピノザの精神論の概観
第 3 回　自由意志の否定
第 4 回　3 種類の認識
第 5 回　自己認識の可能性
第 6 回　スピノザの真理論
第 7 回　スピノザの感情論
第 8 回　能動と受動
第 9 回　3 つの基本感情
第 10 回　諸感情の演繹
第 11 回　感情への隷属
第 12 回　最高善としての神の認識
第 13 回　理性と感情
第 14 回　人間の自由について
第 15 回　総括。スピノザ哲学の宗教哲学的意義
●評価方法
小論文形式のレポートを課す。論ずるべき課題を通知する時に、同時に、枚数、テーマ、論じ方など、論述が満たすべき条件を何項目かにわたって指定する。それらがすべて満たされていることが単位認定の必須の条件となる。
●受講生へのコメント
授業中の私語は厳重に禁止する。成績評価のためのレポートでは、講義で提示された問題に対して各自が主体的に答を模索することが求められる。ノートや参考書をまとめただけのレポートには単位を認定しないので注意。
●参考文献・教材
テキストは用いない。必要な資料は印刷して授業中に配布する。

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LAPHL3213	開講期	単位数	標準履修年次
30	**宗教学演習・講読Ⅰ** Reading Seminar in the Study of Religion Ⅰ			前木 3	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 仲原 孝 教授		

●科目の主題

宗教学・宗教哲学の基礎的文献を講読する。

●到達目標

文献を正確に読解する能力を身につけつつ、しかもそれに対する自分独自の解釈を形成する力を養うことを、授業の目標とする。

●授業内容・授業計画

フリードリヒ・ニーチェの『道徳の系譜学』第 1 論文を、ドイツ語原書で講読する。

授業計画は以下の通り。ただし授業進度の都合上、授業計画に多少の変更が行なわれる場合もありうることを付記しておく。

第 1 回 § 1
第 2 回 § 2
第 3 回 § 3-4
第 4 回 § 5
第 5 回 § 6
第 6 回 § 7
第 7 回 § 8-9
第 8 回 § 10
第 9 回 § 11
第 10 回 § 12
第 11 回 § 13
第 12 回 § 14-15
第 13 回 § 16
第 14 回 § 17
第 15 回 § 18

●評価方法

授業で課せられた担当課題を適切に果たしたか、議論にどの程度積極的に参加したか、を考慮して評価する。

●受講生へのコメント

欠席・遅刻は大幅に減点する。特に自分の担当する回に特段の理由なく欠席した者には単位を認めないので注意すること。

●参考文献・教材

テキストは、Friedrich Nietzsche: *Zur Genealogie der Moral,* Kritische Studienausgabe, Walter de Gruyter Verlag を使用する。

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LAPHL3214	開講期	単位数	標準履修年次
31	**宗教学演習・講読Ⅱ** Reading Seminar in the Study of Religion Ⅱ			後木 3	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 仲原 孝 教授		

●科目の主題

宗教学・宗教哲学の基礎的文献を講読する。

●到達目標

文献を正確に読解する能力を身につけつつ、しかもそれに対する自分独自の解釈を形成する力を養うことを、授業の目標とする。

●授業内容・授業計画

前期にひきつづき、フリードリヒ・ニーチェの『道徳の系譜学』を、ドイツ語原書で講読する。後期は第 2 論文を読む。前期と連続して受講することが望ましい。

授業計画は以下の通り。ただし授業進度の都合上、授業計画に多少の変更が行なわれる場合もありうることを付

記しておく。

第 1 回　§ 1
第 2 回　§ 2-3
第 3 回　§ 4
第 4 回　§ 5-6
第 5 回　§ 7
第 6 回　§ 8-9
第 7 回　§ 10
第 8 回　§ 11-12
第 9 回　§ 13-14
第 10 回　§ 15-16
第 11 回　§ 17-18
第 12 回　§ 19
第 13 回　§ 20
第 14 回　§ 21-22
第 15 回　§ 23-25

●評価方法

授業で課せられた担当課題を適切に果たしたか、議論にどの程度積極的に参加したか、を考慮して評価する。

●受講生へのコメント

欠席・遅刻は大幅に減点する。特に自分の担当する回に特段の理由なく欠席した者には単位を認めないので注意すること。

●参考文献・教材

テキストは、Friedrich Nietzsche: *Zur Genealogie der Moral,* Kritische Studienausgabe, Walter de Gruyter Verlag を使用する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAPHL3217	開講期	単位数	標準履修年次
32	**美学概論 I** Introduction to Aesthetics I			前水 1	2 単位	2・3 年
	旧科目名			担当教員名 高梨 友宏 教授		

●科目の主題

近代ドイツ美学史の概観と美学上の諸概念の理解を目指す。

●到達目標

「美学」は 18 世紀ドイツの哲学者 A.G. バウムガルテンによって「感性的認識の学」として―ただし実質的には美や芸術を主題とする学として―打ちたてられた、比較的歴史の浅い、哲学の一分科である。バウムガルテン以後、「美学」は様々な思想家の手に委ねられ、独自の思想史を形成していく。本講では、ドイツの思想家たちに担われた美学思想を、その成立から現代に至るまで編年的に概観しながら、とくに美学の中心概念である「美的／感性的なもの」および、それに深い関連をもつ周辺的諸概念、すなわち、「芸術」、「感情」、「趣味」、「価値」などが、これを論じる哲学者たちにより、彼らの思想的立場を反映して、どのように扱われていくかについて検討したい。

I ではバウムガルテン、カント、シラー、ヘーゲルらドイツ近代の美学思想を取り上げるが、とくにカントに重点を置いて講じる予定。

●授業内容・授業計画

できるかぎり、以下のプランに沿って授業を進めたい。

第 1 回　導入「美学とは何か？」
第 2 回　バウムガルテンその 1「感性的認識の学」
第 3 回　バウムガルテンその 2「美と芸術」
第 4 回　カントその 1「批判哲学体系の中での“美学”の位置づけ」
第 5 回　カントその 2「“趣味判断”の第 1 契機と第 2 契機」
第 6 回　カントその 3「“趣味判断”の第 3 契機と第 4 契機」
第 7 回　カントその 4「芸術論と天才論」
第 8 回　カントその 5「趣味の二律背反の解決について」
第 9 回　カントその 6「崇高論」
第 10 回　シラーその 1「カント美学への批判と美の自律性」

第 11 回　シラーその 2「美的教育論」
第 12 回　ヘーゲルその 1「芸術哲学の方法論」
第 13 回　ヘーゲルその 2「芸術の歴史的展開」
第 14 回　ヘーゲルその 3「芸術終焉論」
第 15 回　まとめと質疑応答（ただし、最終回は授業進行上、調整に充てる場合がある）

●評価方法
学期末試験を課し、授業内容の理解の如何を評価対象とする。
●受講生へのコメント
・受講に際して、特に予備知識は必要としないが、美や芸術に対すると同程度に、哲学にも関心を持つ人の受講が望ましい。
・毎授業の終わりに、10 分程度、関連するクラシック音楽を観賞する時間を設ける予定。
・出欠はとらないが、毎回「コミュニケーション・カード」を配布し、受講者の質問や疑問に答える形で授業内容を補足する。
●参考文献・教材
教材：授業用プリントを配布する。
参考書：今道友信編講座『美学』（東京大学出版会）／新田博衛編『藝術哲学の根本問題』（晃洋書房）／木幡順三『美と芸術の論理』（勁草書房）／佐々木健一『美学辞典』（東京大学出版会）／当津武彦編『美の変貌』（世界思想社）他、授業時間中に適宜指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAPHL3218	開講期	単位数	標準履修年次
33	美学概論Ⅱ Introduction to Aesthetics Ⅱ			後水 1	2 単位	2・3 年
	旧科目名			担当教員名 高梨 友宏 教授		

●科目の主題
ヘーゲル以後の主たるドイツ系美学・芸術哲学の概観。
●到達目標
美学概論Ⅰの続き（Ⅰの項を参照されたい）。Ⅱでは、ショーペンハウアー、ニーチェ、フィードラー、ガイガー、オーデブレヒト、ハイデガーらの美学または芸術哲学を概観しながら、美学（または芸術哲学）の諸問題について検討する。また時間が許す限り、その他の哲学者または美学者の美学思想についても紹介したい。
●授業内容・授業計画
できるかぎり、以下のプランに沿って授業を進めたい。
第 1 回　導入「美学の課題と展開」
第 2 回　ショーペンハウアーその 1「表象としての世界と意志としての世界」
第 3 回　ショーペンハウアーその 2「美もしくは芸術の目的、すなわち苦悩からの（一時的）解放」
第 4 回　ショーペンハウアーその 3「芸術ジャンル論と音楽への評価」
第 5 回　ニーチェその 1「音楽の精神からの悲劇の誕生」
第 6 回　ニーチェその 2「芸術の原理としてのデュオニュソス的なものとアポロン的なもの」
第 7 回　フィードラーその 1「芸術活動の意義、すなわち現実性の把握」
第 8 回　フィードラーその 2「芸術活動の自立性、すなわち芸術学の基礎付けへの貢献」
第 9 回　ガイガーとオーデブレヒトその 1「現象学的美学」
第 10 回　ガイガーとオーデブレヒトその 2「ガイガーの客観的美的価値論」
第 11 回　ガイガーとオーデブレヒトその 3「オーデブレヒトの主観的美的価値論」
第 12 回　ハイデガーその 1「現象学的存在論」
第 13 回　ハイデガーその 2「芸術作品における存在の生起、または“大地”と“世界”の抗争」
第 14 回　ハイデガーその 3「美学への批判」
第 15 回　まとめと質疑応答（ただし、最終回は授業進行上、調整に充てる場合がある）
●評価方法
学期末試験を課し、授業内容の理解の如何を評価対象とする。
●受講生へのコメント
・受講に際して、特に予備知識は必要としないが、美や芸術に対すると同程度に、哲学にも関心を持つ人の受講が望ましい。
・本講は前期「美学概論Ⅰ」の続きであるため、Ⅰの受講者が継続して受講することが望ましい。

・毎授業の終わりに、10 分程度、関連するクラシック音楽を観賞する時間を設ける予定。
・出欠はとらないが、毎回「コミュニケーション・カード」を配布し、受講者の質問や疑問に答える形で授業内容を補足する。

●参考文献・教材

教材：授業用プリントを配布する。

参考書：今道友信編講座『美学』（東京大学出版会）／新田博衛編『藝術哲学の根本問題』（晃洋書房）／木幡順三『美と芸術の論理』（勁草書房）／佐々木健一『美学辞典』（東京大学出版会）／当津武彦編『美の変貌』（世界思想社）他、授業時間中に適宜指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAPHL3220	開講期	単位数	標準履修年次
34	**哲学特講Ⅱ** Special Lecture on Philosophy II			後火 2	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 脇坂 真弥 非常勤講師		

●科目の主題

「人間の尊厳」や「意志の自由」を重視する哲学的思想が現実の中でどのような困難に突き当たるのか、そこで顕わになる問題とは何か、その際に人間にどのような可能性がありうるのかを、シモーヌ・ヴェイユの思想を中心に考察する。

●到達目標

「自律」という人間の在り方と、それが抱える矛盾について、授業を基礎としながら自分なりに展開して考察できるようになることを目標とする。

●授業内容・授業計画

シモーヌ・ヴェイユが体験した工場労働をめぐる問題を、「自由」「尊厳」「不幸」といったキーワードから考えていく。その際に、カントの「自律」に関する考え方や、現代の「道徳的運」と呼ばれる倫理的問題についても触れてみたい。できるかぎり以下の計画に従うが、状況によっては多少の変更を加える。

第 1 回　オリエンテーション／シモーヌ・ヴェイユとは
第 2 回　ヴェイユの生涯（1）「2 人のヴェイユ」説
第 3 回　ヴェイユの生涯（2）キリスト教との三度の出会い
第 4 回　工場体験と周囲の反応
第 5 回　人間の尊厳とは―カントの倫理思想
第 6 回　「尊厳の喪失」について
第 7 回　《自由》の陥穽と「盲目のメカニズム」
第 8 回　「不幸」について（1）
第 9 回　「不幸」について（2）
第 10 回　「道徳的運」について（1）
第 11 回　「道徳的運」について（2）
第 12 回　もうひとつの尊厳（1）「善への欲求」との関連から
第 13 回　もうひとつの尊厳（2）「従順」との関連から
第 14 回　「なぜ私なのか」という問い
第 15 回　総括

●評価方法

論述式の試験か、あるいはレポートを課す予定。詳細は講義中に指示する。

●受講生へのコメント

授業中の私語は厳禁なので、注意すること。

●参考文献・教材

テキストは用いず、必要があれば資料を配布する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAGEN3201	開講期	単位数	標準履修年次
35	**史学概論** Introduction toHistory			前火 4	2 単位	2・3 年
	旧科目名			担当教員名 平田 茂樹 教授		

●科目の主題

「歴史学研究法」を学ぶ。

●到達目標

中国史を題材としながら、歴史学を如何に研究するかについての方法論を習得することを目指す。

●授業内容・授業計画

中国史を題材としながら、歴史学を如何に研究するかについて講義を行う。

第 1 回　歴史学と歴史文学の違い
第 2 回　歴史学の発展
第 3 回　中国人の歴史意識
第 4 回　史料分析法
第 5 回　時代区分（1）
第 6 回　時代区分（2）
第 7 回　中間試験
第 8 回　東アジア世界のとらえ方
第 9 回　専制国家と封建制
第 10 回　共同体とネットワーク
第 11 回　時代区分（3）新しい「近世」論
第 12 回　中国都市論の新たな動向
第 13 回　中国史学をめぐる新たな課題
第 14 回　総括試験
第 15 回　まとめ

●評価方法

二回の試験（70%）と平常点（30%）

●受講生へのコメント

授業では毎回、簡単な小テストを行います。毎回の授業の積み重ねとして中間試験、総括試験を行いますので、毎回の講義の内容をしっかり理解するように努めてください。

●参考文献・教材

岸本美緒『中国の歴史』（ちくま学芸文庫）

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAJPH2101	開講期	単位数	標準履修年次
36	**日本史基礎講読Ⅰ** Basic Readings in Japanese History Ⅰ			後木 2	2 単位	1・2 年
	旧科目名			担当教員名 仁木 宏 教授／佐賀 朝 教授		

●科目の主題

（前半）中世史料の基礎的な解読能力を身につける（仁木）
（後半）歴史学・歴史資料と現代―「従軍慰安婦」問題を素材に―（佐賀）

●到達目標

大学における日本史の学習は史料読解からはじまる。前半の授業では、中世の基礎的な史料を読み進めてゆくことで、もっとも基礎的な学力を養うことを目的とする。

後半の授業では、近年、注目されている「従軍慰安婦」問題を素材に、歴史研究と現代との関係、歴史資料と史実の関係、文書史料と証言（オーラルヒストリー）の有効性と限界などについて、多角的に検討する。

以上を通して、素材である歴史資料と、学問的方法である歴史学を通じて、史実にどのように迫りうるのか、を具体的に体感してもらいたい。

●授業内容・授業計画

前半の授業では、グループにわかれて、順番に報告してもらう。グループ内で十分議論して、その成果を発表するようにする。

後半の授業では、近年、争点となっている「慰安婦」報道をめぐる新聞記事の検討から始め、争点にかかわる研究や史料、証言などを実際に読み進め、随時、ディスカッションもはさみつつ、この問題に歴史学がどのようにアプローチするのかを具体的に学ぶとともに、受講生各自が「慰安婦」問題をめぐる史実とその解決策について考察を深める。

第 1 回　ガイダンス
第 2 回　室町幕府の文書
第 3 回　鎌倉幕府の文書
第 4 回　朝廷の文書
第 5 回　戦国大名の文書
第 6 回　荘園の文書
第 7 回　織豊政権の文書
第 8 回　朝日新聞の「慰安婦」報道記事訂正問題をめぐって
第 9 回　吉見義明氏のテキスト講読①
第 10 回　吉見義明氏のテキスト講読②
第 11 回　日本軍・日本政府の文書資料
第 12 回　体験者の証言をめぐって
第 13 回　秦郁彦氏のテキスト講読
第 14 回　「慰安婦」問題の解決策をめぐって
第 15 回　まとめ

●評価方法

授業における報告や課題シート、学期末の試験・レポートなどにより総合的に評価する。

●受講生へのコメント

大学に入って初めて本格的に取り組む日本史の専門的授業です。日本史コースを志望し、あるいは日本史や歴史学に興味がある 1 回生の皆さんは、ぜひ受講してください。

「従軍慰安婦」問題は、報道の問題だけでなく、歴史資料と史実の解明、歴史研究と現代の関係などを考える素材として有意義です。授業を通じて、歴史と私たちとをつなぐ、史料や歴史学の可能性について具体的に体感してください。

●参考文献・教材

前半・後半とも、教材はプリントの形で配布する。

授業後半の参考文献は以下の通り。

・吉見義明『従軍慰安婦』（岩波新書、1995 年）
・秦郁彦『慰安婦と戦場の性』（新潮選書、1999 年）
・吉見義明『日本軍「慰安婦」制度とは何か』（岩波ブックレット、2010 年）

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAJPH3201	開講期	単位数	標準履修年次
37	**日本史基礎講読Ⅱ** Basic Readings in Japanese History Ⅱ			前木 2	2 単位	2・3 年
	旧科目名			担当教員名 塚田 孝 教授		

●科目の主題

「地域の歴史的総合調査」の意義と古文書読解の初歩。

●到達目標

日本史研究室では、毎年秋に和泉市域の一地区（江戸時代の村に当る）を対象に、「地域の歴史的総合調査」に取り組んでいる。それは、一つの地域に即して、時代を越えて、史料調査・聞取り・地域空間把握など総合的な調査を行うことをめざすものである。秋の調査にむけて、「地域の歴史的総合調査」の目的と意義を理解し、史料調査に際して必要となる古文書読解の初歩を身に付ける。

●授業内容・授業計画

第 1 ～ 3 回の講義で「地域の歴史的総合調査」の実際を紹介し、その目的と意義について考える。その後は、毎回、近世史料の写真版コピーをテキストとして、受講生各自の筆写、読み合せ、内容理解によって授業を進める。テキストには、基本的なくずし方の史料を用いる。

第 1 回　2015 年度の北田中町（近世の北田中村）調査
第 2 回　「地域の歴史的総合調査」①
第 3 回　「地域の歴史的総合調査」②

第 4 回　古文書講読①
第 5 回　古文書講読②
第 6 回　古文書講読③
第 7 回　古文書講読④
第 8 回　古文書講読⑤
第 9 回　古文書講読⑥
第 10 回　古文書講読⑦
第 11 回　2016 年度調査に向けたガイダンス
第 12 回　古文書講読⑧
第 13 回　古文書講読⑨
第 14 回　古文書講読⑩
第 15 回　総括

●評価方法
授業における発表や古文書読解の小テストで総合的に評価する。
●受講生へのコメント
予習・復習がたいせつ。課外に院生がチューターとなって行っている「古文書を読む会」へ参加することも有効。
●参考文献・教材
テキストプリント配布。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAJPH3202	開講期	単位数	標準履修年次
38	日本史通論Ⅰ Japanese History Survey Ⅰ			後金 2	2 単位	2・3 年
	旧科目名			担当教員名 村井 良介 非常勤講師		

●科目の主題
戦国時代の権力論、とくに戦国大名権力の分析を通じて、日本史を考える視角や方法を学ぶ。
●到達目標
戦国大名など、戦国時代の権力についての最新の研究成果を学ぶと同時に、それらについて論じている諸学説の視点や考え方の枠組みの違いなどを理解する。こうしたことを通じて、日本史を考えるときに必要な考え方や視角を身につけることを目指す。
●授業内容・授業計画
戦国時代は中世と近世の転換点にあたる時代として注目されてきたが、この授業では戦国大名権力の分析を中心に、戦国時代の独自の特質は何かということを考える。具体的には、戦国大名や、近年注目されてきている戦国領主といった有力領主の織りなす権力構造の特質を論じる。
第 1 回　授業の概要／授業のねらい／授業の進め方／学習のしかた
第 2 回　中世と近世 ―転換期としての戦国時代― (1)
第 3 回　中世と近世 ―転換期としての戦国時代― (2)
第 4 回　支配原理をめぐる二元論 (1)
第 5 回　支配原理をめぐる二元論 (2)
第 6 回　戦国時代の法と暴力 (1)
第 7 回　戦国時代の法と暴力 (2)
第 8 回　戦国時代の法と暴力 (3)
第 9 回　戦国大名と戦国領主 (1)
第 10 回　戦国大名と戦国領主 (2)
第 11 回　戦国大名と戦国領主 (3)
第 12 回　戦国大名と戦国領主 (4)
第 13 回　戦国期の権力構造の特質 (1)
第 14 回　戦国期の権力構造の特質 (2)
第 15 回　授業のまとめ
●評価方法
定期試験（100%）
●受講生へのコメント
シラバスや授業中に指示する参考文献は、できるだけ一般読者向けに書かれたものを挙げるので、必要に応じ

て適宜参照してほしい。

●参考文献・教材

久留島典子『日本の歴史 13　一揆と戦国大名』（講談社）
池享『日本中世の歴史 6　戦国大名と一揆』（吉川弘文館）
黒田基樹『戦国大名』（平凡社新書）
村井良介『戦国大名論』（講談社選書メチエ）

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAJPH3203	開講期	単位数	標準履修年次
39	日本史通論Ⅱ Japanese History Survey Ⅱ			前木 1	2 単位	2・3 年
	旧科目名			担当教員名 佐賀 朝 教授		

●科目の主題

「巨大都市大阪の形成・発展と都市問題」というテーマのもと、明治時代半ばから第二次大戦終結までの近代大阪の歴史について概観する。

●到達目標

近代における都市社会の発展とその矛盾の様相を捉えることを通じて、現代の地域社会が抱える課題に向き合うための基本的な視座を獲得することを目標としたい。

●授業内容・授業計画

前半では、1889 年の地方自治制実施によって大阪市が誕生してから、日清・日露戦争と産業資本の確立を経て、大阪が 100 万の人口を有する巨大都市へと発展し、その一方で都市社会問題が広範に成立する様相を見る。後半では、第一次世界大戦期の経済発展によって都市問題がさらに深刻化するなか、階級的社会運動が展開され、新しい都市政策が登場するプロセスを論じたうえで、昭和恐慌と満州事変を経て大阪大空襲に至る、戦時体制下大阪の経済・社会についても見、可能な範囲で戦後への展望にも触れたい。

近年、進展しつつある近代都市史研究の成果をふまえ、明治半ばから終戦にいたるまでの巨大都市大阪の歴史的なあゆみを概観しながら、その特徴を明らかにする。

第 1 回　明治半ば大阪の都市空間―導入
第 2 回　近代都市の成立―市制町村制と大阪市の成立―
第 3 回　企業勃興―大阪の紡績会社と鉄道資本―
第 4 回　産業革命と地域社会―九条・西九条の工場集積―
第 5 回　日清・日露戦争と大阪
第 6 回　社会問題の成立―労働問題と社会運動―
第 7 回　阪神と阪急―「私鉄王国」大阪と郊外開発―
第 8 回　第一次世界大戦期の経済発展と都市化
第 9 回　都市問題の深刻化―住宅問題と借家争議―
第 10 回　米騒動と方面委員制度の発足―新しい社会政策―
第 11 回　都市政策・都市計画の誕生―関一大阪市長の役割―
第 12 回　日本橋「裏長屋」の生活と不良住宅地区改良事業
第 13 回　昭和恐慌・満州事変と都市社会問題
第 14 回　戦時体制と大阪市民―国防婦人会と大阪の町会―
第 15 回　大阪大空襲―太平洋戦争下の空襲と都市―

●評価方法

平常点、小レポート、学期末試験などにより総合的に評価する。

●受講生へのコメント

毎回のコメントカードへの記入内容も重視しますので、まずはしっかり出席して話を聞いてください。

●参考文献・教材

・小山仁示『(改訂) 大阪大空襲―大阪が壊滅した日』（東方出版、1989 年）
・原田敬一『日本近代都市史研究』（思文閣出版、1997 年）
・芝村篤樹『日本近代都市の成立―1920・30 年代の大阪―』（松籟社、1998 年）
・広川禎秀編『近代大阪の行政・社会・経済』（青木書店、1998 年）
・佐賀朝『近代大阪の都市社会構造』（日本経済評論社、2007 年）
・広川禎秀編『近代大阪の地域と社会変動』（部落問題研究所、2009 年）
以上のほか、授業のなかで随時、提示する。

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LAJPH3204	開講期	単位数	標準履修年次
40	考古学通論 Archaeology Survey			前火 2	2 単位	2・3 年
	旧科目名			担当教員名 岸本 直文 教授		

●科目の主題

飛鳥時代 7 世紀の考古学。6 世紀中頃に中央権力の卓越化が進み、前方後円墳の時代は終焉する。東アジア情勢の影響を受けながら、新たな制度的統治方式の導入に特徴づけられる、中央集権的な国家体制の樹立をめざした変革がどのように進められるのかを概観する。

●到達目標

古墳時代的なものがどのように払拭・克服され、新たな制度が導入されるのか、仏教導入寺院造営、や都城や地方官衙の成立、土器様式、墳墓の変質、といったさまざまな分野の考古資料を取り上げて、飛鳥時代史のもつ意義を理解することを目標とする。

●授業内容・授業計画

資料を配付した上で、主としたパワーポイントによって授業を以下の通り進める。

第 1 回　7 世紀史のイントロダクション
第 2 回　前方後円墳の廃止
第 3 回　仏教受容と寺院造営
第 4 回　土器様式の転換
第 5 回　都城の成立（1）
第 6 回　都城の成立（2） 太宰府と多賀城
第 7 回　国家的大開発
第 8 回　集落再編と条里制
第 9 回　国・評・五十戸の行政区画
第 10 回　国府と郡家
第 11 回　大化の薄葬令
第 12 回　朝鮮式山城
第 13 回　手工業生産
第 14 回　文化・習俗
第 15 回　まとめ

●評価方法

定期試験による。

●受講生へのコメント

とくになし

●参考文献・教材

資料を配付する。

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LAJPH3205	開講期	単位数	標準履修年次
41	日本史講読 I Readings in Japanese History I			後火 3	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 磐下 徹 准教授		

●科目の主題

日本古代史の基礎的史料の読解

●到達目標

『続日本紀』を素材に古代史料の基礎的読解力を習得する

●授業内容・授業計画

語註や補注の充実している新日本古典文学大系『続日本紀』をテキストとして使用し、史料の読解とはどのようなものであるのかを理解してもらう。

原則として参加者 1 人が一日～二日分の記事を担当し、その読解・考察を発表。他の参加者は発表を聞き、疑問点や論点を提示して議論する。

なお、学修効果を高めるため、受講者の状況に応じて計画は変更されることもある。

第 1 回　ガイダンス
第 2 回　『続日本紀』解題①
第 3 回　『続日本紀』解題②
第 4 回　発表①
第 5 回　発表②
第 6 回　発表③
第 7 回　発表④
第 8 回　発表⑤
第 9 回　発表⑥
第 10 回　発表⑦
第 11 回　発表⑧
第 12 回　発表⑨
第 13 回　発表⑩
第 14 回　発表⑪
第 15 回　まとめ

●評価方法

平常点（発表内容 80%、出席状況 20%）

●受講生へのコメント

史料読解は歴史学の基本である。細かい点も疎かにしない史料の読み方を体得してほしい。はじめはできなくても、積み重ねを大切に、粘り強く前進してほしい。

なお、初回に報告順などを決めるので、必ず出席するように。

●参考文献・教材

新日本古典文学大系『続日本紀』（岩波書店）
井上薫「続日本紀」（『国史大系書目解題　上巻』吉川弘文館、1971 年）
笹山晴生「続日本紀と古代の史書」（新日本古典文学大系『続日本紀　一』岩波書店、1989 年）
その他、必要に応じてプリント等配布

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAJPH3206	開講期	単位数	標準履修年次
42	日本史講読Ⅱ Readings in Japanese History Ⅱ			前木 3	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 仁木 宏 教授		

●科目の主題

中世史料を読解する応用力を養う。

●到達目標

中世文書には独特な表現があり、そこには中世社会の特色が反映されていることも多い。史料からそうした社会のあり方を読みとる能力をみがかせる。史料を正確に読むことは日本史を学習してゆく上で必修である。「よみ」や表面的な意味にとどまらず、その背後にある中世社会の諸側面をいかに深くとらえることができるかがポイントとなる。

卒業論文を書く上では高度な史料読解能力が必要とされるが、そのための必要十分な訓練の場とする。

●授業内容・授業計画

中世の都市・流通にかかわる史料をテキストにする。

グループにわかれて、順番に報告してもらう。グループ内で十分議論して、その成果を発表するようにする。

第 1 回　ガイダンス
第 2 回　鎌倉時代Ⅰ
第 3 回　鎌倉時代Ⅱ
第 4 回　鎌倉時代Ⅲ
第 5 回　市の伝承
第 6 回　室町幕府法Ⅰ
第 7 回　室町幕府法Ⅱ
第 8 回　徳政をめぐって
第 9 回　撰銭をめぐって
第 10 回　座掟
第 11 回　町掟

第 12 回　戦国大名法
第 13 回　戦国大名と都市
第 14 回　楽市令
第 15 回　信長・秀吉と都市

●評価方法
授業における報告と、学期末の定期試験で評価する。
●受講生へのコメント
法令は比較的難しい史料が多いが、これが読めるようになれば、他の史料は容易に解読できるようになる。
●参考文献・教材
プリントを配布する。参考文献は、適宜指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAJPH3207	開講期	単位数	標準履修年次
43	日本史講読Ⅲ Readings in Japanese History Ⅲ			後木 2	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 塚田 孝 教授		

●科目の主題
近世古文書講読。
●到達目標
大阪府の南部に位置する和泉市域に残された近世の村方文書から、基本的なものを選んで読んでいく。これを通して近世古文書の読解力を養うことをめざす。なお、これを通して近世の民衆生活の一端に触れることができればと思っている。
●授業内容・授業計画
この授業では、毎年秋に日本史研究室が行なっている和泉市教育委員会との合同調査（「地域の歴史的総合調査」）によって発見された古文書をテキストとしている。昨年度は、北田中町（近世の北田中村）に残された史料を取り上げ、①北田中村の高と土地、②漆原池の水利関係史料、③北田中村の座関係史料、④本泉寺の鐘鋳関係史料の四グループに分かれて、近世の北田中村の村落構造と民衆生活の諸側面の復元を試みた。今年も、秋の合同調査で発見された史料もしくは関連史料をテキストに、その史料の内容に即してグループをつくり、発表形式で行なう。
第 1 回　合同調査の史料概要と方針説明、グループ分け
第 2 回　和泉地域の関連先行研究の検討①
第 3 回　和泉地域の関連先行研究の検討②
第 4 回　古文書講読①
第 5 回　古文書講読②
第 6 回　古文書講読③
第 7 回　古文書講読④
第 8 回　古文書講読⑤
第 9 回　古文書講読⑥
第 10 回　古文書講読⑦
第 11 回　古文書講読⑧
第 12 回　古文書講読⑨
第 13 回　古文書講読⑩
第 14 回　古文書講読⑪
第 15 回　総括
●評価方法
授業における発表と最終レポートで総合的に評価する。
●受講生へのコメント
グループでの事前準備がたいせつ。課外に院生がチューターとなって行っている「古文書を読む会」へ参加することが必要。
●参考文献・教材
テキスト　プリント配布。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAJPH3208	開講期	単位数	標準履修年次
44	日本史講読Ⅳ Readings in Japanese History Ⅳ			前水 4	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 佐賀 朝 教授		

●科目の主題

「戦時下の国民動員と市民生活・地域社会」というテーマのもと、「十五年戦争」期（1931 ～ 45）の史料を読んでいく。

●到達目標

活字史料を中心に、近現代史料を読み解くための基礎的な方法や知識の修得を目ざす。

●授業内容・授業計画

この授業では、「十五年戦争」期における国民動員や戦時政策と、市民生活や地域社会との関係について、『資料日本現代史』（大月書店）などの史料集に収録された活字史料を読み進める形で考察したい。受講生とも相談しつつ、テキストの中から取り上げる史料を選択し、関連する論文などにも言及する形での分担発表を順番に行ってもらう。発表は、1 人ずつ、あるいは 2 ～ 3 人程度の少人数のグループで担当してもらう予定。

必要に応じて、基本文献や関連論文の要約・論評を主眼とする報告も織り込む。

第 1 回　ガイダンス
第 2 回　論文検討報告①
第 3 回　史料報告その 1
第 4 回　史料報告その 2
第 5 回　史料報告その 3
第 6 回　論文検討報告②
第 7 回　史料報告その 4
第 8 回　史料報告その 5
第 9 回　史料報告その 6
第 10 回　史料報告その 7
第 11 回　論文検討報告③
第 12 回　史料報告その 8
第 13 回　史料報告その 9
第 14 回　史料報告その 10
第 15 回　まとめ

●評価方法

平常点、発表、小レポート、期末レポートなどにより総合的に評価する。

●受講生へのコメント

近現代の史料を、まずは活字のものから読んでもらい、分析や論述の基礎となるような史料の読み方を学び取ってください。あわせて戦時下の生活や社会の実態にも触れてほしいと思います。意欲的な参加を期待しています。

●参考文献・教材

・藤原彰・功刀俊洋編『資料日本現代史 8 満洲事変と国民動員』（大月書店、1983 年）
・栗屋憲太郎・小田部雄次編『資料日本現代史 9 二・二六事件前後の国民動員』（大月書店、1984 年）
・吉田裕・吉見義明編『資料日本現代史 10 日中戦争期の国民動員①』（大月書店、1984 年）
・伊香俊哉・吉田裕・吉見義明編『資料日本現代史 11 日中戦争期の国民動員②』（大月書店、1984 年）
・赤澤史朗・北河賢三・由井正臣編『資料日本現代史 13 太平洋戦争下の国民生活』（大月書店、1985 年）

以上のほか、基本文献や論文についてについては授業のなかで随時、提示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAJPH3301	開講期	単位数	標準履修年次
45	日本史演習 I Seminar in Japanese History I			前水 2	2 単位	3・4 年
	旧科目名			担当教員名 磐下 徹 准教授		

●科目の主題

日本古代法制史料の講読

●到達目標
『類聚三代格』を素材に、史料の性質に即した読解・考察力を身につける
●授業内容・授業計画
『類聚三代格』を輪読する。原則として参加者 1 人が一～二つの格（太政官符や詔・勅）を担当して、読解・考察を発表。他の参加者は発表を聞き、疑問点や論点を提示して議論する。
なお、学修効果を高めるため、参加者の状況に応じて計画は変更されることもある。

第 1 回　ガイダンス
第 2 回　『類聚三代格』解題①
第 3 回　『類聚三代格』解題②
第 4 回　発表①
第 5 回　発表②
第 6 回　発表③
第 7 回　発表④
第 8 回　発表⑤
第 9 回　発表⑥
第 10 回　発表⑦
第 11 回　発表⑧
第 12 回　発表⑨
第 13 回　発表⑩
第 14 回　発表⑪
第 15 回　まとめ

●評価方法
平常点（発表内容 80%、出席状況 20%）
●受講生へのコメント
この演習でとりあげる『類聚三代格』は、古代史研究に必要な史料読解力を身につけるのには好適な史料である。ここで身につけた力は他時代の研究にも役立つものなので、意欲的に参加してほしい。
初回に報告順などを決めるので、必ず出席すること。
●参考文献・教材
新訂増補国史大系『類聚三代格』（吉川弘文館）
吉田孝「類聚三代格」（『国史大系書目解題　上巻』吉川弘文館、1971 年）
その他、必要に応じてプリント等を配布

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAJPH3302	開講期	単位数	標準履修年次
46	日本史演習Ⅱ Seminar in Japanese History Ⅱ			前木 2	2 単位	3・4 年
	旧科目名			担当教員名 仁木 宏 教授		

●科目の主題
中世大阪都市論の構想
●到達目標
中世の摂津・河内・和泉地域にはさまざまな都市が生成し、展開していた。本演習においては、1970 年代以降の研究潮流から、当該地域の都市研究の視角を見出し、都市論としての構想を練り上げてゆきたい。
この授業では、特定の研究史を対象にして、参加者全員がさまざまな角度からそれを解明する方法をみがいた上で、その課題について正しく認識できるようになることを目標とする。
●授業内容・授業計画
グループにわかれて、順番に報告してもらう。グループ内で十分議論して、その成果を発表するようにする。

第 1 回　ガイダンス
第 2 回　中世都市研究の大まかな流れ
第 3 回　堺の研究Ⅰ
第 4 回　堺の研究Ⅱ
第 5 回　寺内町の研究Ⅰ
第 6 回　寺内町の研究Ⅱ
第 7 回　流通論Ⅰ

第 8 回　流通論Ⅱ
第 9 回　流通論Ⅲ
第 10 回　権力論Ⅰ
第 11 回　権力論Ⅱ
第 12 回　権力論Ⅲ
第 13 回　織田政権と都市
第 14 回　豊臣期大坂城下町研究
第 15 回　総括

●評価方法
授業における報告による。
●受講生へのコメント
地域権力研究はさまざまな論点をふくんでおり、理解することは簡単ではないが、参加者全員で議論しながら進めてゆきたい。
●参考文献・教材
教材は、プリントを配布する。参考文献は、授業中に指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAJPH3303	開講期	単位数	標準履修年次
47	日本史演習Ⅲ Seminar in Japanese History Ⅲ			前木 4	2 単位	3・4 年
	旧科目名			担当教員名 塚田 孝 教授		

●科目の主題
近世都市史演習。
●到達目標
近世都市史について、受講生各自が興味を持つテーマを設定し、そのテーマについて研究史を調べ、史料にもとづいた報告を行うという形式で授業を進める。これにより、近世史研究の方法の修得をめざす。
●授業内容・授業計画
テーマ設定は、大坂町触の中で興味をもったもの数個を選択する形で行う。その町触が問題としている諸事象をテーマとし、各テーマを 2 ～ 3 名のグループで担当する。各グループが、次の 3 段階に従って、ほぼ 3 回の報告を行う。第 1 ステップは、基本町触の正確な理解。第 2 ステップは、その町触の内容がどのように論じられてきたか。第 3 ステップは、関連町触の網羅的な検討。
第 1 回　町触とは何か、および方針説明、グループ分け
第 2 回　近世大坂の支配と町の仕組み
第 3 回　町触報告①
第 4 回　町触報告②
第 5 回　町触報告③
第 6 回　町触報告④
第 7 回　研究史報告①
第 8 回　研究史報告②
第 9 回　研究史報告③
第 10 回　研究史報告④
第 11 回　総合報告①
第 12 回　総合報告②
第 13 回　総合報告③
第 14 回　総合報告④
第 15 回　総括
●評価方法
授業における発表と最終レポートで総合的に評価する。
●受講生へのコメント
グループでの事前準備がたいせつ。
●参考文献・教材
テキスト　プリント配布。
参考書　塚田孝『近世の都市社会史』青木書店、1996 年。『大阪市史』第 1 ～ 5 巻、清文堂より復刻版。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAJPH3304	開講期	単位数	標準履修年次
48	**日本史演習Ⅳ** Seminar in Japanese History Ⅳ			後木 3	2 単位	3・4 年
	旧科目名			担当教員名 佐賀 朝 教授		

●科目の主題

「近現代地域社会史の調査・研究」というテーマのもと、大阪府南部の和泉市域に残された近現代の地域史料を素材として共同研究を進める。

●到達目標

多様な形態の近代史料を読み解き、分析する力を鍛えることを目ざす。

●授業内容・授業計画

この授業では、毎年秋に日本史研究室が行なっている和泉市教育委員会との合同調査（「地域の歴史的総合調査」）によって発見された史料をテキストとしたい。近年あるいは今年秋に実施される合同調査で発見された史料を素材として、4 つ程度の班（グループ）にわかれて史料の解読や分析作業を進め、中間発表をくり返しながら共同研究の成果を論文などの形式でまとめることを目ざす。

必要に応じて、『和泉市の歴史 地域叙述編』などの関係文献・論文の分担報告なども織り込む。

第 1 回　ガイダンス
第 2 回　関連論文・文献報告（その 1）
第 3 回　関連論文・文献報告（その 2）
第 4 回　1 班第 1 回報告
第 5 回　2 班第 1 回報告
第 6 回　3 班第 1 回報告
第 7 回　4 班第 1 回報告
第 8 回　1 班第 2 回報告
第 9 回　2 班第 2 回報告
第 10 回　3 班第 2 回報告
第 11 回　4 班第 2 回報告
第 12 回　1 班第 3 回報告
第 13 回　2 班第 3 回報告
第 14 回　3 班第 3 回報告
第 15 回　4 班第 3 回報告

●評価方法

出席、中間発表、成果報告などにより総合的に評価する。

●受講生へのコメント

生の地域史料に触れ、人びとの生活や地域社会の歴史を復元する作業に共同で取り組みます。共同研究作業の楽しさを体感してください。しんどいことも少なくありませんが、意欲的な参加を期待しています。

●参考文献・教材

・和泉市史編さん委員会『和泉市の歴史 2 松尾谷の歴史と松尾寺』（和泉市、2008 年）
・和泉市史編さん委員会『和泉市の歴史 3 池田谷の歴史と開発』（和泉市、2011 年）
・和泉市史編さん委員会『和泉市の歴史 4 信太山地域の歴史と生活』（和泉市、2015 年）

以上のほか、授業のなかで随時、提示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAJPH3305	開講期	単位数	標準履修年次
49	**考古学演習** Seminar in Archaeology			後水 3	2 単位	3・4 年
	旧科目名			担当教員名 岸本 直文 教授		

●科目の主題

考古学を専攻しようとする者であるかないかを問わず、受講者の関心のある歴史のテーマに即して、考古学的な課題を設定し、先行研究から考古学の成果を学ぶ。自分の研究テーマに考古学の成果を活かす基本を身につけることが主題である。

●到達目標

先行研究を調べ主要な論文を読み、咀嚼し整理・発表する。その内容について参加者で討論し、そのなかから次回の発表について考えていく。これを重ねることで、テーマについての理解を深めるとともに、研究の現状を把握し、自分なりの論点を見いだすことを目標とする。

●授業内容・授業計画

参加人数にもよるが、2 ～ 3 回程度の発表を予定している。1 人 30 分の発表、15 分の質疑を行い、1 回に 2 人を基本とする。理解に必要な図や表・写真を含めた資料を準備すること。

第 1 回　各自の興味関心にもとづきテーマ設定と文献紹介を行う。
第 2 回　受講者の発表 1 回目 (1)
第 3 回　受講者の発表 1 回目 (2)
第 4 回　受講者の発表 1 回目 (3)
第 5 回　受講者の発表 1 回目 (4)
第 6 回　受講者の発表 1 回目 (5)
第 7 回　受講者の発表 1 回目 (6)
第 8 回　2 回目の発表について相談しアドバイスを行う
第 9 回　受講者の発表 2 回目 (1)
第 10 回　受講者の発表 2 回目 (2)
第 11 回　受講者の発表 2 回目 (3)
第 12 回　受講者の発表 2 回目 (4)
第 13 回　受講者の発表 2 回目 (5)
第 14 回　受講者の発表 2 回目 (6)
第 15 回　レポートについて相談し必要な指示を行う

●評価方法

発表内容、質疑への参加状況、レポートを総合的に評価する。

●受講生へのコメント

各自のテーマについては、相談の上決めていくが、日本史・世界史を問わないし、時代も自由である。また、設定が難しい場合は、論文をこちらが指定して論評をしてもらうこともある。

●参考文献・教材

各自に対して事前に参考文献を紹介する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAJPH3306	開講期	単位数	標準履修年次
50	日本史特講Ⅰ Problems in Japanese History Ⅰ			前集中	2 単位	3・4 年
	旧科目名			担当教員名 湯浅 治久 非常勤講師		

●科目の主題

中世～近世移行期の社会編成と地域社会
－あらたな移行期研究を目ざして－

●到達目標

中世～近世移行期研究は、自立的村落の研究の進展により確実に進展をみたが、その後新たな枠組みが必要な時期にさしかかったものと思われる。とくに重要な点は、村落内外の「変化」を総合的に把握するための視角と方法の開拓である。本講義では、研究史の吟味から独自の視角を確保し、かつ移行期の社会編成を具体的に論じ、また新たな方法を模索してみることにより、今後の研究を展望してみたい。

●授業内容・授業計画

中世史研究から村落と社会編成の論点を提示し、また近世成立期の研究の論点との関連を吟味してゆく。そして具体的なフィールドとして近江とその周辺を設定し、織豊期の諸政策と地域社会の関わりを具体的に論じてゆく。

第 1 回　社会編成とは何か－視角の提示－
第 2 回　中世における村落史研究の展開 (1) 二重構成論まで
第 3 回　中世における村落史研究の展開 (2) 自立的村落論以降
第 4 回　中世的社会編成の展開－荘園制と領主制－
第 5 回　畿内の惣村・東国の郷村－村落の形成と諸類型－
第 6 回　中世村落と社会的権力としての土豪
第 7 回　中世村落と地域社会

第 8 回　中世村落と宗教－融通と信仰－
第 9 回　惣村（郷村）の運動の方向性
第 10 回　移行期における社会編成の展開－指出と検地－
第 11 回　移行期における中間団体と身分・階級
第 12 回　畿内近国における武家知行制の変質
第 13 回　織豊期における土地制度の改変と身分
第 14 回　公儀領主制と近世村落への展開
第 15 回　まとめ

●評価方法
平常点（出席・積極的受講）30%、定期試験 70%
●受講生へのコメント
日本史の時代区分ごとの研究スタイルに拘泥せず、中世史と近世史の両方の展開に興味を持つことで、歴史を連続的に把握するように務めて欲しい。
●参考文献・教材
レジュメのプリントを配付するので、それに沿って講義をすすめることにする。
参考文献：湯浅治久「惣村と土豪」（『岩波講座日本歴史第 9 巻中世 4』、岩波書店、2015 年 2 月）、同「中近世移行期における社会編成と諸階層」（『日本史研究』掲載予定、2016 年 4 月）。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAJPH3307	開講期	単位数	標準履修年次
51	日本史特講Ⅱ Problems in Japanese History Ⅱ			前集中	2 単位	3・4 年
	旧科目名			担当教員名 後藤 雅知 非常勤講師		

●科目の主題
近世房総の漁業社会
●到達目標
日本近世における山野河海の利用形態は、自然環境が異なるため各地域によって多様であったが、村落の構造的特質や年貢・諸役の負担の相違によっても大きく異なった。本講義ではそれらをふまえつつ、房総沿岸における漁場利用のありようを、具体的な近世史料の読解を通じて明らかにする。史料からどのように社会のありようを読み取れるのか、講義を通じて理解するとともに、近世史料の分析方法を身につけることも講義の目標である。
●授業内容・授業計画
日本近世の漁業社会の特質をおおまかに解説した上で、房総沿岸に即して、史料から漁業社会の構造を詳細に明らかにしていく。漁民がどのように存在したのか、村落のありようを検討した上で、漁業社会の社会的権力ともいえる浦請負人の存在形態に注目し、漁業社会におけるその位置を探りながら、房総沿岸の漁業社会構造を全体として明らかにしていく。
第 1 回　日本近世における漁業社会の構造的特質とは
第 2 回　房総沿岸における海付村落の構造（1）
第 3 回　房総沿岸における海付村落の構造（2）
第 4 回　房総沿岸における海付村落の構造（3）
第 5 回　房総沿岸の浦請負人と地域社会（1）
第 6 回　房総沿岸の浦請負人と地域社会（2）
第 7 回　房総沿岸の浦請負人と地域社会（3）
第 8 回　房総沿岸の浦請負人と地域社会（4）
第 9 回　浦請負人と村社会（1）
第 10 回　浦請負人と村社会（2）
第 11 回　領主の交代と浦請負人（1）
第 12 回　領主の交代と浦請負人（2）
第 13 回　領主の交代と浦請負人（3）
第 14 回　領主の交代と浦請負人（4）
第 15 回　全体のまとめ
●評価方法
授業中に適宜行う小テスト（30%）と、最終的な試験（70%）で評価する。

●受講生へのコメント

近世の活字史料を、かなりの分量にわたって読みながら講義をすすめる。かなりの史料を読むことを覚悟して欲しい。

●参考文献・教材

講義に必要な近世の活字史料は適宜プリントして配布する。その他、参考文献としては、後藤雅知『近世漁業社会構造の研究』山川出版社、2001 年、後藤雅知「近世後期の漁業構造と地域社会」『千葉大学教育学部研究紀要』49- Ⅱ、2001 年。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAJPH3308	開講期	単位数	標準履修年次
52	日本史特講Ⅲ Problems in Japanese History Ⅲ			後水 2	2 単位	3・4 年
	旧科目名			担当教員名 佐賀 朝 教授		

●科目の主題

「日本史研究上の諸問題」と題して、日本史コース 3 回生が、次年度の卒業論文作成に向けて、日本史の研究論文を読み、批判的に理解する力を養うとともに、自らテーマを考え、絞り込んでいく場とする。

●到達目標

卒業論文の作成を念頭において、各時代・分野の最新の研究状況をフォローするとともに、先行研究を正確に理解し、自らの課題との関係を意識して、内在的・批判的に論文を読み解き、そこから学ぶことをめざす。

後期終了までに、基本的な卒論テーマないしは取り上げる領域・分野を固めることを目ざす。

●授業内容・授業計画

まず、これまでに活字になった先輩たちの卒業論文のいくつかを取り上げ、受講生とともに輪読する形で、卒論とは何かを学ぶ。その後、卒業論文作成に向けて、受講生の関心にしたがった研究上の諸問題を取り上げ、受講生による関連文献の要約と批判的コメントを中心とした報告を重ねる。各報告をめぐって受講生全員で討論し、問題意識を深め、卒業論文に備える。

第 1 回　卒論とは何か―史料と問題意識
第 2 回　刊行された卒論に学ぶ①考古学
第 3 回　刊行された卒論に学ぶ②古代
第 4 回　刊行された卒論に学ぶ③中世
第 5 回　刊行された卒論に学ぶ④近世
第 6 回　刊行された卒論に学ぶ⑤近現代
第 7 回　受講生による先行研究の整理・検討報告①
第 8 回　受講生による先行研究の整理・検討報告②
第 9 回　受講生による先行研究の整理・検討報告③
第 10 回　受講生による先行研究の整理・検討報告④
第 11 回　受講生による先行研究の整理・検討報告⑤
第 12 回　受講生による先行研究の整理・検討報告⑥
第 13 回　受講生による先行研究の整理・検討報告⑦
第 14 回　受講生による先行研究の整理・検討報告⑧
第 15 回　まとめ

●評価方法

授業での報告と最終レポートで総合的に評価する。

●受講生へのコメント

この授業は、日本史コースの 4 回生が取り組む卒業論文につながるものである。卒論とはどういうものなのか、卒論を通じて何を明らかにしたいか、じっくり考える機会にしてほしい。

●参考文献・教材

プリント等を適宜、配布する。参考文献等は、授業のなかで随時、提示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAJPH3309	開講期	単位数	標準履修年次
53	日本史特講Ⅳ Problems in Japanese History Ⅳ			後木 4	2 単位	3・4 年
	旧科目名			担当教員名 塚田 孝 教授／ 島﨑 未央 非常勤講師		

●科目の主題

近世大坂の都市社会－法と社会の視点から－

●到達目標

1970 年代後半から大きな発展を見せた近世の都市社会史研究は、巨大都市・三都を中心として進められたが（第 1 期）、1990 年代に入って、その都市社会構造の固有性が自覚されていった（第 2 期）。現在、都市社会構造の固有性を踏まえて、改めて巨大都市としての通有性を捉え直すことが求められている。そうした最新の都市史研究の成果を理解する。

●授業内容・授業計画

最初に導入として、1970 年代後半以降の近世都市史研究の展開をたどり、現在の研究上の課題について解説する。続いて、近世大坂の諸局面（町と町人／流通と株仲間／芝居地と遊廓社会／非人身分）を取り上げて、江戸や京都との比較を念頭に置きながら、その社会構造の固有性を明らかにするとともに、そこに見られる巨大都市としての共通する問題群を摘出する。なお、流通に関わる局面については、島﨑講師の最新の研究を紹介してもらう。

第 1 回　近世都市史研究の展開
第 2 回　近世都市史研究の方法と課題
第 3 回　町と町人①
第 4 回　町と町人②
第 5 回　町と町人③
第 6 回　芝居地と遊廓社会①
第 7 回　芝居地と遊廓社会②
第 8 回　芝居地と遊廓社会③
第 9 回　流通と株仲間①　（島﨑講師担当）
第 10 回　流通と株仲間②　（島﨑講師担当）
第 11 回　流通と株仲間③　（島﨑講師担当）
第 12 回　非人身分（垣外仲間）①
第 13 回　非人身分（垣外仲間）②
第 14 回　非人身分（垣外仲間）③
第 15 回　総括

●評価方法

授業中に行なう小テスト、およびレポートなどで総合的に評価する。

●受講生へのコメント

現代都市大阪につながってくる近世大坂の特質を理解することで、現在を生きることの歴史性を考え、相対化する契機としてほしい。

●参考文献・教材

テキスト　プリント配布。
参考書　塚田孝『都市社会史の視点と構想―法・社会・文化―』清文堂出版、2015 年

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAJPH3209	開講期	単位数	標準履修年次
54	考古学実習 Practice in Archaeology			前水 3	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 岸本 直文 准教授		

●科目の主題

考古学の基本技術として、遺物実測の基本を習得する。

●到達目標

遺物の実物観察の基礎を身につけ、それを図化して資料化する基本技術を身につけることを目標とする。

●授業内容・授業計画

大学が保管する実物の石器・土器等の考古資料を観察・整理しながら、石器や土器の実測を行う。またこれ以外に、古墳の測量調査を行うことがある。

第 1 回　出土遺物の洗浄（1）
第 2 回　出土遺物の洗浄（2）
第 3 回　出土遺物の洗浄（3）
第 4 回　出土遺物への注記
第 5 回　土器の観察とスケッチ
第 6 回　打製石器の実測（1）
第 7 回　打製石器の実測（2）・磨製石器の実測（1）
第 8 回　磨製石器の実測（2）
第 9 回　土器の破片資料の実測（1）
第 10 回　土器の破片資料の実測（1）
第 11 回　完形土器の実測（1）
第 12 回　完形土器の実測（2）
第 13 回　完形土器の実測（3）
第 14 回　完形土器の実測（4）
第 15 回　拓本

●評価方法

出席および各課題で仕上げられた図面による。

●受講生へのコメント

作業空間や道具類の数量、また実習という性格から、10 名程度しか受け入れられない。また、進捗状況をそろえる必要があり、毎回の課題について、区切りのつくまで延長して仕上げてもらう。

●参考文献・教材

必要なものは、適宜、プリントを配布する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAGEN2101	開講期	単位数	標準履修年次
55	**世界史基礎講読** Basic Readings in World History			前金 1	2 単位	1・2 年
	旧科目名			担当教員名 野村 親義 准教授 ほか		

●科目の主題

本講の目的は、世界各国の大学が学部生向けの世界史教科書として採用しているウイリアム・マクニールの『世界史』を参照しながら、主に世界史学教室初年次学生に、大学での世界史学習の見取り図を提示することである。なお本講は、マクニールの『世界史』が採用する各々の時代・地域区分を、世界史学教室所属教員各々が自身の専門に基づきつつ、オムニバス形式で授業を行う。

●到達目標

世界史学習上の見取り図を習得し、より専門的な時代別・地域別・テーマ別世界史学習への準備を行う。

●授業内容・授業計画

世界で 40 年以上にわたり読み続けられているマクニールの『世界史（上）（下）』（中公文庫）は、人類の歴史を太古以降現代まで三つの時代に区分し、これら三つの時代区分を通じ「発達した技術を持つ（魅力的な）複合社会」からなるいくつかの文明がどのように変遷してきたかを分析している。第一の時代区分である紀元前 500 年以前の時代は、農耕技術や鉄、文字などの発達を通じ中東の古代オリエント文明やその影響を受けた中国、インド、ギリシャに文明が誕生した時代である。ユーラシアの中央に生起した蛮族が諸文明を撹乱することで始まった紀元前 500 年から紀元 1500 年までの第二の時代区分は、ギリシャ・ローマ・東西ヨーロッパ、インド、中国の諸文明が各々の文明を成熟させるとともに、新たに生じたイスラム文明が旧来からの諸文明と勢力を均衡させた時代であった。紀元 1500 年から現代までの第三の時代区分は、民主革命と産業革命の果実を通じ西ヨーロッパがそれまでの諸文明均衡の時代を破り、他文明社会のありようを変容させた時代である。

具体的な授業プランは以下の通り。なお、各回の授業内容の仔細については、第 1 回に配布する資料を参照のこと。

第 1 回　野村　マクニールの時代区分と地域区分
第 2 回　草生　―「世界」を見るということ―
第 3 回　草生　―多元性に満ちた「文明」―

第 4 回　草生 ―世界を構成する「社会」―（一神教世界）
第 5 回　平田 時代区分 2 と東洋世界（1）（仮題）
第 6 回　平田 時代区分 2 と東洋世界（2）（仮題）
第 7 回　平田 時代区分 2 と東洋世界（3）（仮題）
第 8 回　上野 イスラーム史と多文化共生
第 9 回　上野 成熟の近世オスマン社会
第 10 回　上野 オスマンの近代
第 11 回　北村 近代以降の西欧と諸文明
第 12 回　北村 コレラの世界史（19 世紀）
第 13 回　北村 現代建築と大阪市大
第 14 回　野村 産業革命・民主革命とアジアの近代－植民地支配と苦悩の時代
第 15 回　野村 独立後のアジア―「アジアの世紀」への長い道のり

●評価方法
各教員に提出する小レポート（教員ごとに A4 で 2 枚 - 計 10 枚：成績評価の 100%）
●受講生へのコメント
受講生は、授業出席前にマクニールの『世界史』を熟読するとともに、各回の授業後、教員が指示する参考文献を参照することが求められる。
●参考文献・教材
教材：ウイリアム・マクニール『世界史（上）（下)』中公文庫、2008 年。
参考文献：山川出版社『詳説世界史』および、講義ごとに担当教員が指示する文献。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAWHE3201	開講期	単位数	標準履修年次
56	**東洋史基礎講読** Basic Readings in Oriental History			前木 2	2 単位	2・3 年
	旧科目名			担当教員名 平田 茂樹 教授		

●科目の主題
諸子百家選読。
●到達目標
春秋戦国時代にかけて活躍した思想家たちは、それぞれ異なる考え方を主張し、諸子百家と呼ばれている。これらの考えは今日の中国の伝統文化の基礎を形作っており、中国を知る上では不可欠なものである。今回は諸子百家を選読することにより、古代中国の人々の生活や考え方を学ぶと共に、基礎的な漢文読解能力を身につけることを目指してゆく。
●授業内容・授業計画
諸子百家の文献を少しずつ読み進めて行く。
第 1 回　ガイダンス
第 2 回　『論語』選読
第 3 回　『論語』選読
第 4 回　『孟子』選読
第 5 回　『孟子』選読
第 6 回　『老子』選読
第 7 回　『老子』選読
第 8 回　『荘子』選読
第 9 回　『荘子』選読
第 10 回　『韓非子』選読
第 11 回　『韓非子』選読
第 12 回　『孫子』選読
第 13 回　『孫子』選読
第 14 回　『墨子』選読
第 15 回　まとめ
●評価方法
平常点（100%）

●受講生へのコメント
基礎的な漢文読解能力を身につけることを目指してゆきますので、毎回必ず出席し、課題に取り組むようにしてください。
●参考文献・教材
湯浅邦弘『諸子百家―儒家・墨家・道家・法家・兵家』（中公新書）

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LAWHE3202	開講期	単位数	標準履修年次
57	東洋史通論 Outline of Oriental History			後金 1	2 単位	2・3 年
	旧科目名			担当教員名 平田・野村・上野		

●科目の主題
本講は「帝国とアジアの近代化」を共通テーマとした、東洋史学専修教員によるオムニバス形式の授業となる。具体的には、野村（専門：イギリス帝国史、近現代インド経済史）がイギリス帝国とインドの近代化との関係を、政治史・経済史・社会史の各視覚から論じ、上野（専門：オスマン帝国史）が宗派・宗教をキーワードとしながら、オスマン帝国を軸とするユーラシア大陸中部の帝国のありようを論ずる。最後に平田（専門：宋代中国史、中華帝国史）が中華帝国と近代化の関係を、その阻害要因とその克復のありように焦点を当てつつ論じる。
●到達目標
本講の到達目標は、アジアにおける帝国と近代化の関係を複眼的に考察する視点を獲得することである。
●授業内容・授業計画
第 1 回　野村：ガイダンス
第 2 回　野村：イギリス帝国と近代化
第 3 回　野村：イギリス帝国とインドの近代化：政治
第 4 回　野村：イギリス帝国とインドの近代化：経済
第 5 回　野村：イギリス帝国とインドの近代化：社会
第 6 回　上野：宗派国家としての近代オスマン帝国
第 7 回　上野：宗派国家としての近代ロシア帝国
第 8 回　上野：帝国と宗教の越境性・・・イスラームの場合
第 9 回　上野：帝国と宗教の越境性・・・キリスト教の場合
第 10 回　上野：宗派国家のその後
第 11 回　平田：中華帝国と近代化－近代化の阻害要因とその克復－ 政治的要因
第 12 回　平田：中華帝国と近代化－近代化の阻害要因とその克復－ 経済的要因
第 13 回　平田：中華帝国と近代化－近代化の阻害要因とその克復－ 社会的要因
第 14 回　平田：中華帝国と近代化－近代化の阻害要因とその克復－ 文化的要因
第 15 回　平田：中華帝国と近代化－近代化の阻害要因とその克復－ 阻害要因の克復と近代化

●評価方法
各教員が授業中に課すレポートの総点をもとに評価する。
●受講生へのコメント
この授業は、授業中に課されるレポートの提出が単位習得の必須条件となる。
●参考文献・教材
野村：クリストファー・ベイリ編；中村ほか訳『イギリス帝国歴史地図』（東京書籍，1994.3）
平田：ジョシュア・A・フォーゲル（井上裕正訳）『内藤湖南 ポリティックスとシノロジー』（平凡社、1989 年）
このほか、担当者が授業中に指示する文献。

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LAGEN3202	開講期	単位数	標準履修年次
58	世界史通論 Introduction to World History			後木 4	2 単位	2・3 年
	旧科目名			担当教員名 野村 親義 准教授		

●科目の主題
講義では、アンガス・マディソンらが構築した数量経済史研究の成果を踏まえ、19 世紀から現代に至るアジア現

代史の動向を、昨今注目著しいインドに焦点を当てながら、論じます。

19 世紀初頭、世界の GDP の 6 割近くを占めたアジアは、20 世紀半ばにはその比率を 2 割程度まで大きく下落させました。しかしその後、アジアの奇跡などを経、現在は 19 世紀に得ていた地位を回復しつつあります。本講義の目的は、アジアが世界に占める経済的地位を大きく変化させてきた背景を、工業化、植民地化、帝国主義、ナショナリズム、開発政策など、時々の世界の政治・経済・社会情勢に配慮しつつ、特にインドに焦点を当てながら、理解することにあります。

●到達目標

本講義の到達目標は、世界の注目著しいアジアの 200 年を、歴史を通じ理解する目を養うことにあります。

●授業内容・授業計画

本講は、以下の授業計画に基づいて、授業を進めます。なお、進捗状況により、授業計画が若干変更される場合があります。

第 1 回　導入
第 2 回　アジアとはどこか
第 3 回　19 世紀以前のアジア（1）－インド
第 4 回　19 世紀以前のアジア（2）－中国・日本
第 5 回　比較対象としての 19 世紀以前のヨーロッパ
第 6 回　欧米の工業化とアジアの経済的の相対的地位低下
第 7 回　欧米の自由主義プロジェクトとアジアの植民地化
第 8 回　植民地支配下のアジアの経済（1）－貿易・金融
第 9 回　植民地支配下のアジアの経済（2）－製造業
第 10 回　植民地支配下のアジアの経済（3）－労働
第 11 回　植民地支配と独立運動
第 12 回　独立と開発政策
第 13 回　輸入代替型工業化
第 14 回　輸出志向型工業化
第 15 回　アジアの奇跡とアジア通貨危機

●評価方法

期末試験で評価します（100%）。

●受講生へのコメント

昨今の日本の政治・経済・社会情勢は、アジア諸国の政治・経済・社会情勢と分かちがたく結ばれています。本講義を通じ、アジア諸国、特に昨今注目著しいインドの現代史の理解を深めることで、日本の今後を考える上で重要なアジア諸国の政治・経済・社会情勢をよりよく理解する一助としてもらえれば幸いです。

あわせて、現代をよりよく理解する上で、歴史を理解することがいかに重要であるかを感じ取ってもらえればより一層幸いです。

●参考文献・教材

教科書はありません。プリントを授業中に配布します。また、適宜ビデオ等も利用します。

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LAWHE3203	開講期	単位数	標準履修年次
59	**東洋史講読 I** Readings in Oriental History I			前水 4	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 上野 雅由樹 講師		

●科目の主題

近世および近代の西アジア地域の都市社会史を扱った和文論文を輪読する。

●到達目標

15 世紀から 20 世紀初頭の西アジア地域の歴史を把握するとともに、その理解にはどのような視点と知識が必要かを学ぶ。また、歴史学の分野における論文がどのようなものかを理解することを目指す。

●授業内容・授業計画

15 世紀から 20 世紀初頭までの時代順に、時代背景を補足しながら日本語で書かれた論文を輪読する。各回の担当者が論文の内容を発表し、その内容について意見を出し合うという形で進める。

第 1 回　ガイダンス
第 2 回　近世オスマン帝国
第 3 回　近世オスマン帝国

第 4 回　近世オスマン帝国
第 5 回　近世オスマン帝国
第 6 回　サファヴィー朝
第 7 回　サファヴィー朝
第 8 回　サファヴィー朝
第 9 回　ガージャール朝
第 10 回　ガージャール朝
第 11 回　近代オスマン史
第 12 回　近代オスマン史
第 13 回　近代オスマン史
第 14 回　近代オスマン史
第 15 回　総括

●評価方法
演習形式の授業であるため、発表や議論など、授業への取り組みを総合的に評価する。
●受講生へのコメント
教材は適宜、配布します。地域にかかわらず、歴史に関心のある方々を歓迎します。
●参考文献・教材
佐藤次高『イスラームの国家と王権』岩波書店、2004 年。
林佳世子『オスマン帝国 500 年の平和』講談社、2008 年。
新井政美『オスマン帝国はなぜ崩壊したのか』青土社、2009 年。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAWHE3204	開講期	単位数	標準履修年次
60	東洋史講読Ⅱ Readings in Oriental History Ⅱ			前月 4	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 塩　卓悟 非常勤講師		

●科目の主題
中国古代飲食史関係史料選読
●到達目標
『太平広記』の飲食関係史料を講読することを通じて、中国古代における飲食生活をはじめとする社会生活の様子を学ぶとともに、やや高度な漢文読解能力を身につけることを目指します。
●授業内容・授業計画
『太平広記』飲食関係史料を読み進めていくとともに、それらの記事内容に関連する他の史料もあわせて紹介・講読します。
第 1 回　ガイダンス
第 2 回　『太平広記』酒部
第 3 回　『太平広記』酒部
第 4 回　『太平広記』酒部
第 5 回　『太平広記』酒部
第 6 回　『太平広記』食部
第 7 回　『太平広記』食部
第 8 回　『太平広記』食部
第 9 回　『太平広記』食部
第 10 回　『太平広記』飲食関係史料①
第 11 回　『太平広記』飲食関係史料②
第 12 回　『太平広記』飲食関係史料③
第 13 回　『太平広記』飲食関係史料④
第 14 回　『太平広記』飲食関係史料⑤
第 15 回　まとめ
●評価方法
平常点 100％
●受講生へのコメント
やや高度な漢文読解能力を身につけることを目指して行きますので，毎回出席して、課題に取り組んでください。

●参考文献・教材
テキスト：配布プリント
参考書：授業中に適宜紹介します。

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LAWHE3205	開講期	単位数	標準履修年次
61	東洋史講読Ⅲ Readings in Oriental History Ⅲ			後火 4	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 平田 茂樹 教授		

●科目の主題
『宋史』列伝選読。
●到達目標
『宋史』列伝を選読しながらやや高度な漢文読解能力の修得を目指す。
●授業内容・授業計画
『宋史』列伝を選読する。
第 1 回　『宋史』について
第 2 回　『宋史』后妃伝
第 3 回　『宋史』后妃伝
第 4 回　『宋史』宗室伝
第 5 回　『宋史』宗室伝
第 6 回　『宋史』公主伝
第 7 回　『宋史』循吏伝
第 8 回　『宋史』道学伝
第 9 回　『宋史』道学伝
第 10 回　『宋史』儒林伝
第 11 回　『宋史』儒林伝
第 12 回　『宋史』外国伝
第 13 回　『宋史』外国伝
第 14 回　『宋史』外国伝
第 15 回　まとめ
●評価方法
平常点（100%）
●受講生へのコメント
毎回、漢文講読の範囲を決めて読み進めてゆきますので、必ず課題に取り組み、出席するようにしてください。
●参考文献・教材
松丸道雄・斯波義信『世界歴史大系　中国史〈3〉五代～元』(山川出版社)

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LAGEN3203	開講期	単位数	標準履修年次
62	世界史講読 Readings in World History			後木 3	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 野村 親義 准教授		

●科目の主題
本講前半の主題は、カリフォルニア大学の南アジア史担当教授であったメトカーフ夫妻によるインド近現代史のテキストの日本語訳『インドの歴史（ケンブリッジ版世界各国史）』創土社、2006 年や、ネルー大学のインド近現代史担当教授であったビパン・チャンドラによるインド近現代史のテキストの日本語訳『近代インドの歴史』山川出版社、2001 年を輪読することである。講義後半は、卒論執筆予定者の関心に近い一次史料の輪読に時間を割く。
●到達目標
本講の到達目標は、近年世界の注目を集めるインドの近現代史を学ぶことで、インドが抱える問題と可能性を理解する手掛かりを得ることである。また、一次史料に触れることも、本稿の到達目標の一つである。
●授業内容・授業計画
前半は、メトカーフ夫妻『インドの歴史（ケンブリッジ版世界各国史）』創土社、2006 年や、ビパン・チャンドラ『近

代インドの歴史』山川出版社、2001 年を輪読形式で読み進める。後半は、配布する一次史料を輪読形式で読み進める。

第 1 回　導入
第 2 回　メトカーフ夫妻『インドの歴史（ケンブリッジ版世界各国史）』第 1 回
第 3 回　メトカーフ夫妻『インドの歴史（ケンブリッジ版世界各国史）』第 2 回
第 4 回　メトカーフ夫妻『インドの歴史（ケンブリッジ版世界各国史）』第 3 回
第 5 回　メトカーフ夫妻『インドの歴史（ケンブリッジ版世界各国史）』第 4 回
第 6 回　メトカーフ夫妻『インドの歴史（ケンブリッジ版世界各国史）』第 5 回
第 7 回　ビパン・チャンドラ『近代インドの歴史』山川出版社第 1 回
第 8 回　ビパン・チャンドラ『近代インドの歴史』山川出版社第 2 回
第 9 回　ビパン・チャンドラ『近代インドの歴史』山川出版社第 3 回
第 10 回　ビパン・チャンドラ『近代インドの歴史』山川出版社第 4 回
第 11 回　ビパン・チャンドラ『近代インドの歴史』山川出版社第 5 回
第 12 回　史料輪読 1
第 13 回　史料輪読 2
第 14 回　史料輪読 3
第 15 回　史料輪読 4

●評価方法
平常点。

●受講生へのコメント
教科書以外にも、授業で紹介する文献を各自読み進めてください。

●参考文献・教材
メトカーフ夫妻『インドの歴史（ケンブリッジ版世界各国史）』創土社、2006 年
ビパン・チャンドラ『近代インドの歴史』山川出版社、2001 年

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAWHE3301	開講期	単位数	標準履修年次
63	**東洋史演習Ⅰ** Seminar in Oriental History Ⅰ			前木 4	2 単位	3・4 年
	旧科目名			担当教員名 平田 茂樹 教授		

●科目の主題
『夷堅志』選読。

●到達目標
洪邁『夷堅志』は宋代の社会を知る上で重要な史料とされており、この史料の講読を通じて、高度な漢文読解能力を養成するとともに、古代中国社会について深い知識を身につけることを目指す。

●授業内容・授業計画
洪邁『夷堅志』選読。

第 1 回　宋代とは如何なる時代か？
第 2 回　『夷堅志』選読（1）
第 3 回　『夷堅志』選読（2）
第 4 回　『夷堅志』選読（3）
第 5 回　『夷堅志』選読（4）
第 6 回　『夷堅志』選読（5）
第 7 回　『夷堅志』選読（6）
第 8 回　『夷堅志』選読（7）
第 9 回　『夷堅志』選読（8）
第 10 回　『夷堅志』選読（9）
第 11 回　『夷堅志』選読（10）
第 12 回　『夷堅志』選読（11）
第 13 回　『夷堅志』選読（12）
第 14 回　『夷堅志』選読（13）
第 15 回　まとめ

●評価方法
平常点（100%）

●受講生へのコメント
授業では毎回選読する場所を決めて読み進めていきますので、しっかり予習をして授業に臨んでください。
●参考文献・教材
松丸道雄・斯波義臣『世界歴史大系　中国史 3』（山川出版社）

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LAWHE3302	開講期	単位数	標準履修年次
64	**東洋史演習Ⅱ** Seminar in Oriental History Ⅱ			後水 4	2 単位	3・4 年
	旧科目名			担当教員名 上野 雅由樹 講師		

●科目の主題
18、19 世紀のロシア帝国とオスマン帝国で、そして両国を行き来しながら生きた人々の関係を扱う論考を輪読する。
●到達目標
ロシア帝国とオスマン帝国の関係を扱う論文の読解を通じて、多様な文化的背景を有した人々を内包した国々にとって近世から近代への移行がどのようなものだったのかを理解する。あわせて、卒論に向けて論文とはどのようなもので、どのように書いたらいいのかについて理解を深める。
●授業内容・授業計画
授業は英文論文の輪読を通して進める。主に扱うテーマは以下のものを予定しているが、進捗状況と受講者の関心に応じて変更する。
第 1 回　ガイダンス
第 2 回　黒海商業とギリシア正教徒
第 3 回　黒海商業とギリシア正教徒
第 4 回　黒海商業とギリシア正教徒
第 5 回　正教徒オスマン臣民とロシア帝国
第 6 回　正教徒オスマン臣民とロシア帝国
第 7 回　正教徒オスマン臣民とロシア帝国
第 8 回　オスマン・アルメニア人とロシア帝国
第 9 回　オスマン・アルメニア人とロシア帝国
第 10 回　オスマン・アルメニア人とロシア帝国
第 11 回　ロシア・ムスリムとオスマン帝国
第 12 回　ロシア・ムスリムとオスマン帝国
第 13 回　ロシア・ムスリムとオスマン帝国
第 14 回　ロシア・ムスリムとオスマン帝国
第 15 回　総括
●評価方法
演習形式の授業であるため、発表や議論など、授業への取り組みを総合的に評価する。
●受講生へのコメント
教材は適宜、配布します。地域にかかわらず、歴史に関心のある方々を歓迎します。
●参考文献・教材
Lucien J. Frary and Mara Kozelsky eds., Russian-Ottoman Borderlands: The Eastern Question Reconsidered (University of Wisconsin Press, 2014).
Paul W. Werth, The Tsar's Foreign Faiths: Toleration and the Fate of Religious Freedom in Imperial Russia (Oxford University Press, 2014).

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LAWHE3303	開講期	単位数	標準履修年次
65	**東洋史演習Ⅲ** Seminar in Oriental History Ⅲ			後月 4	2 単位	3・4 年
	旧科目名			担当教員名 塩　卓悟非常勤講師		

●科目の主題
受講生各自が東洋史の研究テーマの特徴を理解したうえで、研究に取り組むことを考える。

●到達目標

論文講読・研究報告を通じて、東洋史の該当分野の研究史について理解するとともに、自身の見解を論理的に説明する能力を身につける。

●授業内容・授業計画

受講者はそれぞれ関心のある東洋史の分野のテーマあるいは学術論文を事前に選択し、報告・論評を行う。担当者以外の受講者は報告内容について問題点・疑問点を指摘し、議論を行う。

第 1 回　ガイダンスー如何に東洋史研究を行うか？
第 2 回　受講生による報告・質疑応答
第 3 回　受講生による報告・質疑応答
第 4 回　受講生による報告・質疑応答
第 5 回　受講生による報告・質疑応答
第 6 回　受講生による報告・質疑応答
第 7 回　受講生による報告・質疑応答
第 8 回　受講生による報告・質疑応答
第 9 回　受講生による報告・質疑応答
第 10 回　受講生による報告・質疑応答
第 11 回　受講生による報告・質疑応答
第 12 回　受講生による報告・質疑応答
第 13 回　受講生による報告・質疑応答
第 14 回　受講生による報告・質疑応答
第 15 回　総括

●評価方法

平常点（50%）。平常点は報告内容および議論への参加度合いによって評価します。

レポート（50%）。報告レジュメをもとに、授業での議論内容をふまえて修正したものをレポートとして提出してください。

●受講生へのコメント

学術論文の読解と整理、自身の関心のあるテーマをわかりやすく伝えること、それらは卒業論文作成に不可欠なスキルです。

●参考文献・教材

配布プリント

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAGEN3301	開講期	単位数	標準履修年次
66	世界史演習 Seminar in World History			前木 3	2 単位	3・4 年
	旧科目名			担当教員名 野村 親義 准教授		

●科目の主題

本講の主題は、植民地期インド史・イギリス帝国史に関する二次文献を輪読し、19 世紀から 20 世紀にかけイギリスとインドの間に構築された帝国関係を考察することである。

●到達目標

本講の到達目標は、植民地期インド史・イギリス帝国史に関する二次文献を輪読しつつ、卒業論文作成に向けた準備作業を行うことを到達目標とする。

●授業内容・授業計画

輪読する具体的な本は、授業初回、受講生と相談のうえ決定する。

第 1 回　導入
第 2 回　植民地期インド史・イギリス帝国史に関する二次文献の輪読　1
第 3 回　植民地期インド史・イギリス帝国史に関する二次文献の輪読　2
第 4 回　植民地期インド史・イギリス帝国史に関する二次文献の輪読　3
第 5 回　植民地期インド史・イギリス帝国史に関する二次文献の輪読　4
第 6 回　植民地期インド史・イギリス帝国史に関する二次文献の輪読　5
第 7 回　植民地期インド史・イギリス帝国史に関する二次文献の輪読　6
第 8 回　植民地期インド史・イギリス帝国史に関する二次文献の輪読　7
第 9 回　植民地期インド史・イギリス帝国史に関する二次文献の輪読　8

第 10 回　植民地期インド史・イギリス帝国史に関する二次文献の輪読 9
第 11 回　植民地期インド史・イギリス帝国史に関する二次文献の輪読 10
第 12 回　植民地期インド史・イギリス帝国史に関する二次文献の輪読 11
第 13 回　植民地期インド史・イギリス帝国史に関する二次文献の輪読 12
第 14 回　植民地期インド史・イギリス帝国史に関する二次文献の輪読 13
第 15 回　植民地期インド史・イギリス帝国史に関する二次文献の輪読 14

●評価方法
平常点。
●受講生へのコメント
教科書以外にも、授業で紹介する文献を各自読み進めてください。
●参考文献・教材
授業初回に受講生と相談のうえ決定する。

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LAWHE3304	開講期	単位数	標準履修年次
67	東洋史特講Ⅰ Problems in Oriental History Ⅰ			前金 3	2 単位	3・4 年
	旧科目名			担当教員名 松本 保宣 非常勤講師		

●科目の主題
隋・唐・五代の御前会議と朝儀
●到達目標
隋・唐・五代王朝の御前会議と朝会儀礼の考察を通して、中国王朝の皇帝政治の特質を理解する。
●授業内容・授業計画
中世中国王朝の政策決定過程の一環である聴政と、臣僚の皇帝に対する服属儀礼である朝会儀礼（主に常朝）の創出とその変容を、隋・唐・五代にわたってたどる。
第 1 回　序論　中国皇帝政治の特質と政策決定過程について
第 2 回　隋・唐の都城―長安と洛陽
第 3 回　隋朝の朝儀と聴政
第 4 回　唐前期の朝儀と聴政―対仗奏事と仗下奏事①
第 5 回　唐前期の朝儀と聴政―対仗奏事と仗下奏事②
第 6 回　長安と洛陽の宮室構造の変容
第 7 回　安史の乱後の聴政―延英殿の登場①
第 8 回　安史の乱後の聴政―延英殿の登場②
第 9 回　唐代宮城における常朝の変容―入閤とは何か、常朝の場はどこか①
第 10 回　唐代宮城における常朝の変容―入閤とは何か、常朝の場はどこか②
第 11 回　唐文宗朝から宣宗朝の政治改革①
第 12 回　唐文宗朝から宣宗朝の政治改革②
第 13 回　五代王朝における朝儀の変容①
第 14 回　五代王朝における朝儀の変容②
第 15 回　まとめ―聴政と朝儀の形成と変容
●評価方法
出席（50%）とレポート（50%）
●受講生へのコメント
大学院との同時開講なので、専門的な講義になります。できれば、隋唐五代の歴史の予備知識があるのが望ましいです。
概説書は参考文献に記載しておきます。
●参考文献・教材
専門書
松本保宣『唐王朝の宮城と御前会議―唐代聴政制度の展開』（晃陽書房、2006 年）
概説書
岸本美緒『中国の歴史』（ちくま学芸文庫、2015）→ごく初歩的な概説書です。
冨谷至・森田憲司編『概説中国史　古代―中世』（昭和堂、2016 年）→こちらはやや専門的です。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAWHE3305	開講期	単位数	標準履修年次
68	**東洋史特講Ⅱ** Problems in Oriental History Ⅱ			後水 2	2 単位	3・4 年
	旧科目名			担当教員名 上田 貴子 非常勤講師		

●科目の主題

19 世紀末以降、森林・草原地帯に交通・運輸・金融・移民によって急激な変化がもたらされ、中国東北地域には近代「満洲」が誕生した。ここでは、植民地経営や在地社会の近代化によって、鉄道に加え農業・工業・土木・医療そして官僚制等様々な近代的テクノロジーの導入・普及がなされ、これらは 1945 年以降も新中国で取捨選択され、継承されていった。この授業では近代的テクノロジーの導入・普及・継承からみた近代「満洲」社会の変容過程について、研究を行う。

●到達目標

医療・農業・工業を中心に近代的テクノロジーの導入・普及・継承に関する先行研究の理解を基礎に、そこで使用されるさまざまな史料の用い方を検討する。さらに、そこから一歩進んでテクノロジーの導入・普及・継承に切り込む視点を議論したい。

●授業内容・授業計画

期間を通じていくつかの先行研究の到達点について理解する。その研究手法・研究視点について議論を行う。

第 1 回　近代「満洲」の成立（1）
第 2 回　近代「満洲」の成立（2）
第 3 回　近代「満洲」の成立（3）
第 4 回　鉄道がもたらしたもの（1）
第 5 回　鉄道がもたらしたもの（2）
第 6 回　鉄道がもたらしたもの（3）
第 7 回　農業技術が変えたもの（1）
第 8 回　農業技術が変えたもの（2）
第 9 回　農業技術が変えたもの（3）
第 10 回　衛生の制度化（1）
第 11 回　衛生の制度化（2）
第 12 回　衛生の制度化（3）
第 13 回　総括（1）
第 14 回　総括（2）
第 15 回　総括（3）

●評価方法

事前に文献を読んでの内容理解 20%
議論への参加 40%
レポート 40%

●受講生へのコメント

各回のテーマに即した議論への積極的な参加を求めます。

●参考文献・教材

朴敬玉『近代中国東北地域の朝鮮人移民と農業』御茶の水書房、2015 年
藤原辰史『稲の大東亜共栄圏：帝国日本の「緑の革命」』吉川弘文館、2012 年
安冨歩・深尾葉子編『満洲の成立：森林の消尽と近代空間の成立』名古屋大学出版会、2009 年
飯島渉『ペストと近代中国：衛生の「制度化」と社会変容』研文出版、2000 年
ほか適宜提示

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAGEN3302	開講期	単位数	標準履修年次
69	**世界史特講** Problems in World History			前集中	2 単位	3・4 年
	旧科目名			担当教員名 秋葉 淳 非常勤講師		

●科目の主題

オスマン帝国史上の諸問題を、17 ～ 18 世紀を中心に論ずる。この時期は従来、「衰退期」とされ、比較的研

究の蓄積が薄かったが、ここでは近年の研究成果を踏まえ、新しい見方を提示する。

●到達目標

オスマン帝国史に関する基礎的な知識を身につけるとともに、研究史を理解し、歴史研究の視点や史料の読解方法を学ぶ。

●授業内容・授業計画

おおよそ以下の項目に沿って講義を進める予定である。9/27 ～ 9/30 の 4 日間で集中講義を行う。9/27：第 1 回～第 4 回、9/28：第 5 回～第 8 回、9/29：第 9 回～第 12 回、9/30：第 13 回～第 15 回。

第 1 回　ガイダンス
第 2 回　古典期オスマン帝国の支配体制
第 3 回　王位継承問題
第 4 回　帝国支配層の変容
第 5 回　オスマン社会の動揺
第 6 回　財政構造の変化
第 7 回　社会思想と宗教
第 8 回　「チューリップ時代」
第 9 回　都市社会と権力
第 10 回　「アーヤーン」層の台頭
第 11 回　法廷から見るオスマン社会
第 12 回　法廷史料に見る婚姻・離婚
第 13 回　罪と罰
第 14 回　嘆願と紛争処理
第 15 回　総括

●評価方法

平常点（30%）、試験（70%）

●受講生へのコメント

下記の参考書のうち、少なくとも『オスマン帝国 500 年の平和』は授業の前に読んでおくこと。

●参考文献・教材

基本参考文献：
林佳世子『オスマン帝国 500 年の平和』講談社、2008.
鈴木董『オスマン帝国　イスラム世界の「柔らかい専制」』講談社，1992.
永田雄三・羽田正『成熟のイスラーム世界』（世界の歴史 15）中央公論社，1998.
その他の参考文献は授業中に紹介する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAWHW3201	開講期	単位数	標準履修年次
70	**西洋史基礎講読** Basic Readings in Western History			前水 4	2 単位	2・3 年
	旧科目名			担当教員名 北村 昌史 教授		

●科目の主題

研究書を読むための基本的な文献読解力を身に着ける。

●到達目標

新書・文庫の歴史書や研究論文を正確にその内容に即してまとめられるようにする。

●授業内容・授業計画

前半は、1 冊の共通のテキストを決めて、輪読する。後半は、個々の受講生が、関心に近い学術雑誌の論文の内容をまとめて報告する。前半と後半をどこで区切るかは受講生の人数による。

第 1 回　ガイダンス
第 2 回　新書ないしは文庫の輪読（1 回）
第 3 回　新書ないしは文庫の輪読（2 回）
第 4 回　新書ないしは文庫の輪読（3 回）
第 5 回　新書ないしは文庫の輪読（4 回）
第 6 回　新書ないしは文庫の輪読（5 回）
第 7 回　新書ないしは文庫の輪読（6 回）
第 8 回　新書ないしは文庫の輪読（7 回）

第 9 回　学術論文の内容紹介（1 人目）
第 10 回　学術論文の内容紹介（2 人目）
第 11 回　学術論文の内容紹介（3 人目）
第 12 回　学術論文の内容紹介（4 人目）
第 13 回　学術論文の内容紹介（5 人目）
第 14 回　学術論文の内容紹介（6 人目）
第 15 回　総括・予備

●評価方法
平常点 100%。
●受講生へのコメント
内容をまとめて報告してもらうだけではなく、それを踏まえて質疑応答するので、毎回一人一つは質問をするように。
●参考文献・教材
未定。ガイダンスの時間に相談して決める。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAWHW3202	開講期	単位数	標準履修年次
71	西洋史通論 Western History Survey			後火 2	2 単位	2・3 年
	旧科目名			担当教員名 草生 久嗣 准教授		

●科目の主題
合同生活圏の諸相：中世東地中海世界ビザンツ帝国を題材に
●到達目標
適切な歴史的題材の学習を通して、現代世界の抱える諸問題について向き合う手がかりを得る。
●授業内容・授業計画
「グローバル化」という新語が喧伝されるはるか昔から、世界史上、社会の一体性は支配の理想として求められてきた。しかし理念上の一体世界に包み込まれる人々の在り方は多元的であり、その一元化に反発するマージナルな人々こそが、実は自らの生活圏を根強く維持しつづけ、声を残してきている。その例を、中世東地中海におけるビザンツ帝国史に探ってみたい。
第 1 回　ガイダンス
第 2 回　イントロダクション（1）「ユニヴァーサリズム」の時代
第 3 回　イントロダクション（2）「合同生活圏」という考え方
第 4 回　通論（1） 古典古代地中海世界
第 5 回　通論（2） 古代末期世界
第 6 回　通論（3） 初期中世・ビザンツ
第 7 回　通論（4） 盛期中世
第 8 回　通論（5） 近世・近代・現代
第 9 回　各論（1） 共通語
第 10 回　各論（2） 辺境域
第 11 回　各論（3） 異教と異端
第 12 回　詳説（1） ボゴミール現象
第 13 回　詳説（2） 民衆信仰と魔女
第 14 回　まとめ
第 15 回　試験
●評価方法
以下の総点で評価する。
1）任意の回にコメントを提出してもらう（各回 5 点満点）。カードのテーマは授業で指示する。
2）最終日に、基礎知識の確認・語彙試験（50 点満点）を行う。
●受講生へのコメント
西洋中世史・ビザンツ史についての前知識は特に必要としない。が、授業に関わる、あるいは授業内外で言及された文献については、自分で確認し「本についての知識」として押さえていく習慣を身に着けてほしい。また、学習事項の確認には弘文堂歴史学事典など信頼のおける大事典や、『岩波講座世界歴史』など、評価を得ている通史書にあたること。

●参考文献・教材
本授業に関わる参考文献ジュディス・ヘリン『ビザンツ驚くべき中世帝国』
井上浩一『ビザンツ 文明の継承と変容』
樺山紘一『異境の発見』
田川建三『書物としての新約聖書』
井上・根津編『ビザンツ　交流と共生の千年帝国』

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LAWHW3203	開講期	単位数	標準履修年次
72	西洋史講読 I Readings in Western History I			後月 2	2 単位	2・3 年
	旧科目名			担当教員名 北村 昌史 教授		

●科目の主題
ドイツ語で書かれた研究書や史料を読み込むドイツ語力を身に着ける。
●到達目標
ドイツ語の文章を正確に読む訓練をする。
●授業内容・授業計画
Volker Wieprecht/Robert Skuppin, *Berliner populare Irrtumer: Ein Lexikon*, 2007を講読する。ベルリンの様々な事象を歴史的背景と交えつつ、平明に述べた本書からいくつかの項目をピックアップして精読する。例として授業計画の各回にそうした項目を記しておくが、実際の授業ではそれにこだわらない。

第 1 回　ガイダンス
第 2 回　ドイツ語の講読（カリーヴルスト）
第 3 回　ドイツ語の講読（アンペルマン）
第 4 回　ドイツ語の講読（ケバブ）
第 5 回　ドイツ語の講読（天気）
第 6 回　ドイツ語の講読（テンペルホーフ空港）
第 7 回　ドイツ語の講読（ヴィルマーズドルフの未亡人）
第 8 回　ドイツ語の講読（ワイン製造）
第 9 回　ドイツ語の講読（飲み屋の閉店時間）
第 10 回　ドイツ語の講読（自転車レーン）
第 11 回　ドイツ語の講読（ベルリンの壁）
第 12 回　ドイツ語の講読（ミルク売りの女性の算術法）
第 13 回　ドイツ語の講読（モスクワ時間）
第 14 回　ドイツ語の講読（揚げドーナツ）
第 15 回　総括

●評価方法
平常点：100%
●受講生へのコメント
予習は必須。CD 教材もあるので適宜聞いていただきます。
●参考文献・教材
Volker Wieprecht/Robert Skuppin, *Berliner populare Irrtumer: Ein Lexikon*, 2007. テキストのコピーを配布する。

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LAWHW3301	開講期	単位数	標準履修年次
73	西洋史講読 II Readings in Western History II			前月 2	2 単位	3・4 年
	旧科目名			担当教員名 北村 昌史 教授		

●科目の主題
ドイツ語で書かれた歴史研究の論文を講読する。
●到達目標
ドイツ語を正確に読めるようになるとともに、外国語文献をその背景まで立ち入って読み込む力を取得する。

●授業内容・授業計画
テキスト未定。ドイツ語の論文をただひたすら読む。
第 1 回　ガイダンス
第 2 回　ドイツ語の講読
第 3 回　ドイツ語の講読
第 4 回　ドイツ語の講読
第 5 回　ドイツ語の講読
第 6 回　ドイツ語の講読
第 7 回　ドイツ語の講読
第 8 回　ドイツ語の講読
第 9 回　ドイツ語の講読
第 10 回　ドイツ語の講読
第 11 回　ドイツ語の講読
第 12 回　ドイツ語の講読
第 13 回　ドイツ語の講読
第 14 回　ドイツ語の講読
第 15 回　総括
●評価方法
平常点：100%
●受講生へのコメント
「西洋史講読Ⅰ」を履修していることが望ましい。予習は必須。
●参考文献・教材
テキストは、ガイダンスの際に配布。参考書は辞書などは適宜指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAWHW3204	開講期	単位数	標準履修年次
74	西洋史講読Ⅲ Readings in Western History Ⅲ			後木 1	2 単位	2・3 年
	旧科目名			担当教員名 大黒 俊二 教授		

●科目の主題
西洋史関係のフランス語テクストの講読。
●到達目標
フランス語で歴史学の研究文献を読みこなす能力を身につけることを目標とする。
●授業内容・授業計画
独仏共通歴史教科書第 1 巻のフランス語版を読む。本教科書は見開き 2 ページが 1 単元を構成しているため、中世世界に関する章を毎回見開き 2 ページずつ読む。また同教科書のドイツ語版も併用し、両者の微妙な違いに注意し、その意味を考える。
第 1 回　授業の進め方についての説明
第 2 回　独仏共通歴史教科書第 1 巻、88-89 ページ
第 3 回　独仏共通歴史教科書第 1 巻、90-91 ページ
第 4 回　独仏共通歴史教科書第 1 巻、92-93 ページ
第 5 回　独仏共通歴史教科書第 1 巻、94-95 ページ
第 6 回　独仏共通歴史教科書第 1 巻、96-97 ページ
第 7 回　独仏共通歴史教科書第 1 巻、98-99 ページ
第 8 回　独仏共通歴史教科書第 1 巻、100-101 ページ
第 9 回　独仏共通歴史教科書第 1 巻、102-103 ページ
第 10 回　独仏共通歴史教科書第 1 巻、104-105 ページ
第 11 回　独仏共通歴史教科書第 1 巻、106-107 ページ
第 12 回　独仏共通歴史教科書第 1 巻、108-109 ページ
第 13 回　独仏共通歴史教科書第 1 巻、110-111 ページ
第 14 回　独仏共通歴史教科書第 1 巻、114-115 ページ
第 15 回　独仏共通歴史教科書第 1 巻、116-117 ページ
●評価方法
平常点。

●受講生へのコメント
この科目は来年度の「西洋史講読Ⅳ」と合わせて受講することがのぞましい。
●参考文献・教材
Histoire/Geschichte. *L'Europe et le monde de l'Antiquité à 1815*, Paris, 2011.
Histoire/Geschichte. *Europa und die Welt von der Antike bis 1815*, Stuttgart-Leipzig, 2011.

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAWHW3302	開講期	単位数	標準履修年次
75	西洋史講読Ⅳ Readings in Western History Ⅳ			前木 1	2 単位	3・4 年
	旧科目名			担当教員名 大黒 俊二 教授		

●科目の主題
西洋史関係のフランス語テクストの講読。
●到達目標
フランス語で歴史学の研究文献を読みこなせす能力を身に付けることを目標とする。
●授業内容・授業計画
独仏共通歴史教科書第 1 巻のフランス語版を読む。本教科書は見開き 2 ページが 1 単元を構成しているため、近代初期に関する章を毎回見開き 2 ページずつ読む。また同教科書のドイツ語版も併用し、両者の微妙な違いに注意し、その意味を考える。
第 1 回　授業の進め方についての説明
第 2 回　独仏共通歴史教科書第 1 巻、146-147 ページ
第 3 回　独仏共通歴史教科書第 1 巻、148-149 ページ
第 4 回　独仏共通歴史教科書第 1 巻、150-151 ページ
第 5 回　独仏共通歴史教科書第 1 巻、152-153 ページ
第 6 回　独仏共通歴史教科書第 1 巻、154-155 ページ
第 7 回　独仏共通歴史教科書第 1 巻、156-157 ページ
第 8 回　独仏共通歴史教科書第 1 巻、158-159 ページ
第 9 回　独仏共通歴史教科書第 1 巻、160-161 ページ
第 10 回　独仏共通歴史教科書第 1 巻、162-163 ページ
第 11 回　独仏共通歴史教科書第 1 巻、164-165 ページ
第 12 回　独仏共通歴史教科書第 1 巻、166-167 ページ
第 13 回　独仏共通歴史教科書第 1 巻、168-169 ページ
第 14 回　独仏共通歴史教科書第 1 巻、170-171 ページ
第 15 回　独仏共通歴史教科書第 1 巻、174-175 ページ
●評価方法
平常点。
●受講生へのコメント
この科目は昨年度の「西洋史講読Ⅲ」と合わせて受講することがのぞましい。そのためこの講読は、昨年度の「西洋史講読Ⅲ」の読了個所から読み始める。
●参考文献・教材
Histoire/Geschichte. *L'Europe et le monde de l'Antiquité à 1815*, Paris, 2011.
Histoire/Geschichte. *Europa und die Welt von der Antike bis 1815*, Stuttgart-Leipzig, 2011.

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAWHW3303	開講期	単位数	標準履修年次
76	西洋史演習 I Seminar in Western History I			前水 3	2 単位	3・4 年
	旧科目名			担当教員名 草生 久嗣 准教授		

●科目の主題
西洋史史料を用いた研究入門
●到達目標
史料や関連二次文献の収集や取り扱いについて学習し理解を深めることで、議論構築の基礎を学習する。自分

が担当した史資料の持つ意義や問題点を、明確に指摘できるようになる。

●授業内容・授業計画

西洋史史料を用いた演習。少なくとも 3 つの史料類型（A～C：議論の上決定）について、それぞれ代表する史料（翻訳）を担当者が紹介・解説してゆく。考古資料・碑文・古文書・法文・典礼文・美術資料・叙述史料・文書史料などの分野から、報告者は自分の関心に則して選択し、調査のうえ報告する。その他の参加者は、その報告の用意を助けたり、演習内容の書記、記録編集、議論を行い、その成果を、学期末までに各自が執筆する小論文に結実させる。

第 1 回　ガイダンス
第 2 回　イントロダクション（1）参加者自己紹介、参考資料の確認、教材の確定
第 3 回　イントロダクション（2）報告作業内容の確認、報告の役割分担
第 4 回　イントロダクション（3）準備から報告、記録作成までの模擬演習
第 5 回　演習（A－ 1）
第 6 回　演習（A－ 2）
第 7 回　演習（A－ 3）
第 8 回　演習（B－ 1）
第 9 回　演習（B－ 2）
第 10 回　演習（B－ 3）
第 11 回　演習（C－ 1）
第 12 回　演習（C－ 2）
第 13 回　まとめ（1）小論文準備会
第 14 回　まとめ（2）小論文検討会・演習記録の取りまとめ作業
第 15 回　まとめ（3）取りまとめ作業と総括

●評価方法

割り当てた作業役割（資料用意、報告、書記、質問、議論）に対する取り組み方をもって評価する。

●受講生へのコメント

自分のアカデミックな関心を大事にし、必ずそれに対する自覚を持って参加してください。それぞれの得意とする話題の際には、授業内で随時、助言を求めます。

本格的な歴史研究に必要な技術（史料論・史料操作）を段階を踏んで学習する構成になっています。

●参考文献・教材

①以下は入手しておくことが望ましい。
・井上浩一著『私もできる西洋史研究 – 仮想（バーチャル）大学に学ぶ』和泉書院、2012 年
・山内志朗著『ぎりぎり合格への論文マニュアル』平凡社新書、2001 年
・関心のある地域（国名）・時代（古代・中世・近世・近現代）についての『○○史研究入門』と『○○史史料』
②外国語や専門用語について、調べる体験をしておくこと。
・外国語それぞれについての言語大事（辞）典
・『歴史学事典』（弘文堂）
（専門辞典については各項目の執筆者と参考文献が明記してある大型のものが望ましい。）

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAWHW3304	開講期	単位数	標準履修年次
77	**西洋史演習Ⅱ** Seminar in Western History Ⅱ			後木 3	2 単位	3・4 年
	旧科目名			担当教員名 大黒 俊二 教授		

●科目の主題

西洋中世史研究の意義、方法、研究動向について学ぶ。

●到達目標

現代ヨーロッパ人にとって中世という時代はいかなる意味を持つのか、また私たち非西欧人が西洋中世史を研究する意味や目的はどこにあるのかについて理解を深め、また卒業論文テーマの選定、卒業論文作成のための基礎的作業を行うこと。

●授業内容・授業計画

西洋中世史研究に関する日本語と英語の入門書の講読、および卒業論文作成に向けての基礎的作業を行う。授業を大きく 2 部に分け、第 1 部では J. H. アーノルド『歴史』および J. H. Arnold, *What is Medieval HIstory?* の講読。第 2 部では受講生各自の関心に沿った自由研究発表を行う。授業中には文献の探索、読み方、レジュメの作成法、発表の仕方、議論の進め方についても指導を行う。これらは卒業論文作成のための準備作業である。

期末には自由研究発表の内容をレポートにまとめて提出してもらう。

第 1 回　授業の進め方についての説明
第 2 回　アーノルド『歴史』第 1 章、第 2 章の講読
第 3 回　アーノルド『歴史』第 3 章、第 4 章の講読
第 4 回　アーノルド『歴史』第 5 章、第 6 章の講読
第 5 回　アーノルド『歴史』第 7 章の講読、文献探索指導
第 6 回　Arnold, *What is Medieval HIstory?* 第 1 章の講読
第 7 回　Arnold, *What is Medieval HIstory?* 第 2 章の講読
第 8 回　Arnold, *What is Medieval HIstory?* 第 3 章の講読
第 9 回　Arnold, *What is Medieval HIstory?* 第 4 章の講読
第 10 回　Arnold, *What is Medieval HIstory?* 第 5 章の講読
第 11 回　自由研究発表
第 12 回　自由研究発表
第 13 回　自由研究発表
第 14 回　自由研究発表
第 15 回　自由研究発表

●評価方法

講読における原文の理解度、発表の完成度とわかりやすさ、およびレポートで評価する。

●受講生へのコメント

講読においては英語文献を大量に正確に読む訓練を行うので、十分な予習が必要である。

●参考文献・教材

J. H. アーノルド（新広記訳）『歴史』岩波書店、2003 年。
J. H. Arnold, *What is Medieval History?*, Cambridge, 2008.

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAWHW3305	開講期	単位数	標準履修年次
78	**西洋史演習Ⅲ** Seminar in Western History Ⅲ			後火 3	2 単位	3・4 年
	旧科目名			担当教員名 北村 昌史 教授		

●科目の主題

西洋史をめぐる諸問題。英語文献の講読を行った後、参加者による自由発表を行う。

●到達目標

英語文献としては Brian Ladd, *The Ghosts of Berlin: Confronting German History in the Urban Landscape*, 1997 を取り上げる。ベルリンの建築物の社会的・歴史的コンテクストを論じた研究書の読解を通じて、英語文献を読み込む力を身につけるとともに、歴史研究の方法論などについても討議する。自由発表は、各自の関心あるテーマについて先行研究を批判的に検討した結果を報告していただく。両方の作業を通じて卒業論文を作成するための基本的な文献読解力や議論を展開する能力を取得する。

●授業内容・授業計画

最初の 3 分の 2 は英語文献の購読。残り 3 分の 1 は自由発表

第 1 回　ガイダンス
第 2 回　英語文献の講読
第 3 回　英語文献の講読
第 4 回　英語文献の講読
第 5 回　英語文献の講読
第 6 回　英語文献の講読
第 7 回　英語文献の講読
第 8 回　英語文献の講読
第 9 回　英語文献の講読
第 10 回　英語文献の講読
第 11 回　自由発表
第 12 回　自由発表
第 13 回　自由発表
第 14 回　自由発表
第 15 回　総括

●評価方法
平常点：100％
●受講生へのコメント
英語文献の講読は、予習は必須。自由発表については全員で議論することを前提とするので、報告に対する質問を全員が出すまでは授業は終わらない。もちろん、一人ひとつ質問を出せばよいということではなく、積極的に質問できる報告にはどんどん質問を出してもらいたい。
●参考文献・教材
Brian Ladd, *The Ghosts of Berlin: Confronting German History in the Urban Landscape*, 1997.

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAWHW3306	開講期	単位数	標準履修年次
79	**西洋史特講Ⅰ** Problems in Western History Ⅰ			後金 4	2 単位	3・4 年
	旧科目名			担当教員名 中谷 功治 非常勤講師		

●科目の主題
古代ローマ帝国の「正統な」継承国家であるビザンツ帝国について，主に中期ビザンツの成立をめぐって考察する。分析の中心となるのはコンスタンティノープル皇帝政権と地方のテマ軍団の関係である。
●到達目標
6 世紀までの後期ローマ帝国と 9 世紀以降のビザンツ帝国では，どのような面で変化があったのか，あるいは継承された要素は何か。中央政府と小アジアを中心とする地方のテマ軍団の関係から，7 ～ 9 世紀前半までの政治過程について理解を深める。
●授業内容・授業計画
7 ～ 9 世紀前半のビザンツ帝国の政治過程について，テマ（軍団ならびに軍管区）のはたした役割，とりわけテマ反乱に注目しつつ考察する。同時に皇帝位の継承や中央政府との関連などから当時の帝国の政治のありかたを明らかにする。
第 1 回　イントロダクション：ビザンツ帝国の時代区分について
第 2 回　ディオクレティアヌス・コンスタンティヌス体制
第 3 回　後期ローマ帝国における皇帝の即位儀礼
第 4 回　問題提起：軍事優位国家としての中期ビザンツ帝国
第 5 回　テマをめぐる問題：テマ反乱とビザンツ帝国
第 6 回　7 世紀の情勢：ヘラクレイオス帝と後継者たち
第 7 回　混乱の時代：7 世紀末～ 8 世紀初
第 8 回　レオン 3 世とコンスタンティノス 5 世の政権
第 9 回　エイレネ政権：摂政期と女帝期
第 10 回　ニケフォロス 1 世の政権
第 11 回　レオン 5 世とスラヴ人トマスの乱：テマ反乱の終焉
第 12 回　テマの改革と専制国家体制の確立
第 13 回　テマ制の起源をめぐって
第 14 回　授業内試験
第 15 回　授業総括
●評価方法
平常点とする。
ただし，最終授業の 1 週前の授業時にテストを実施する（90%）。
出席そのものは評価の対象とはしないが，毎回の「感想・質問」については成績評価に加えることがある（10%）。
授業内試験は，（a）穴埋式と（b）記述式とからなり，前者は講義での内容を確認するためのもの，後者については事前に題目を提示する。
上記の授業内テストにおいては，自筆ノートのみ持ち込み可とする（誰かの授業ノートのコピーを利用することは禁止）。ただし，配布したプリント類は別とする。
●受講生へのコメント
授業内試験での（b）記述式については，各自が参考にした文献の提示が求められる。したがって，13 回目の授業までに，各自があわせて自主的な学習を進めることが必要となる。
授業全体の説明となる初回のイントロダクションについては，かならず出席してほしい。
●参考文献・教材
井上浩一『生き残った帝国ビザンティン』（講談社学術文庫，2009 年）

J・ヘリン『ビザンツ 驚くべき中世帝国』（白水社，2010 年）
根津由喜夫『ビザンツ国家と社会』（山川出版社，2008 年）
その他，授業において随時参考図書を紹介する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAWHW3307	開講期	単位数	標準履修年次
80	**西洋史特講Ⅱ** Problems in Western History Ⅱ			前木 5	2 単位	3・4 年
	旧科目名			担当教員名 南 直人 非常勤講師		

●科目の主題
ドイツを中心にヨーロッパの食の歴史を考察する。
●到達目標
「食」という視点から、近代に重点を置きつつ、ドイツを中心としたヨーロッパの歴史についての理解を深める。
●授業内容・授業計画
食の歴史を、生産・消費・流通、政治・国家、日常生活・文化、思想・言説等の多様な側面から考察する。
第 1 回　ヨーロッパの食文化概説（1）
第 2 回　ヨーロッパの食文化概説（2）
第 3 回　古代・中世の食（1）
第 4 回　古代・中世の食（2）
第 5 回　「コロンブスの交換」（1）
第 6 回　「コロンブスの交換」（2）
第 7 回　コーヒー・茶・砂糖の世界史（1）
第 8 回　コーヒー・茶・砂糖の世界史（2）
第 9 回　コーヒー・茶・砂糖の世界史（3）
第 10 回　工業化と食の変遷（1）
第 11 回　工業化と食の変遷（2）
第 12 回　都市化と食の変遷（1）
第 13 回　都市化と食の変遷（2）
第 14 回　現代世界と食
第 15 回　総括
●評価方法
平常点 30%、試験 70%
●受講生へのコメント
特になし
●参考文献・教材
南直人『＜食＞から読み解くドイツ近代史』ミネルヴァ書房、2015 年
南直人『世界の食文化⑱ドイツ』農文協、2003 年

人 間 行 動 学 科

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LBSOC3201	開講期	単位数	標準履修年次
81	社会学概論 I Introduction to Sociology I			前火 4	2 単位	2 年
	旧科目名			担当教員名 進藤 雄三 教授		

●科目の主題

社会学の基礎概念、分析方法、および個別分野における代表的な諸学説を概説する。

●到達目標

社会学という学問の特徴、その方法と対象に関する概観を獲得し、個別領域における知見を学習するとともに、社会学的思考法の習得を目指す。

●授業内容・授業計画

以下の授業計画にそって授業を進める。

第 1 回　オリエンテーション
第 2 回　社会学の基礎概念：行為、相互行為、地位―役割、組織、制度、全体社会
第 3 回　分析の範例 1：行為論的視点
第 4 回　分析の範例 2：相互作用論的視点
第 5 回　分析の範例 3：全体論的視点
第 6 回　現代的範例：予言の自己成就、ラベリング論、世界システム論
第 7 回　範例の含意：意図せざる結果、構造と行為
第 8 回　家族社会学
第 9 回　医療社会学
第 10 回　教育社会学
第 11 回　メディア社会学
第 12 回　逸脱・社会問題の社会学
第 13 回　ジェンダーの社会学
第 14 回　階層の社会学
第 15 回　試験

●評価方法

コメント 5、試験あるいはレポート 5 で評価する。

●受講生へのコメント

能動的な参加を期待する。

●参考文献・教材

教科書：特に指定しない。
参考書：進藤他著『社会学』医学書院（2012）。その他、随時紹介する。

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LBSOC3202	開講期	単位数	標準履修年次
82	社会学概論 II Introduction to Sociology II			後水 2	2 単位	2 年
	旧科目名			担当教員名 石田 佐恵子 教授		

●科目の主題

主たるテーマ：「グローバル化時代の社会学的課題」

●到達目標

社会学概論は、社会学のさまざまな概念、キーワードを紹介し、社会学的な考え方と方法への理解を深めることが目標である。社会学概論 II では、特にグローバル化時代における新しい社会学的課題を念頭に置いて、社会学的発想法について、短いレポート作成やグループディスカッションを通じて学ぶ。

●授業内容・授業計画

社会学の基本的性格について、特に「是非を考える」「根本から考える」「メディアから考える」など、さまざまなトピックから概説する。毎回の講義時に、出題される課題のレポートを作成する。

第 1 回　ガイダンス
第 2 回　トピックについての概念理解とブリーフレポート作成 (1)
第 3 回　グループディスカッションで学ぶ社会学トレーニング (1)
第 4 回　トピックについての概念理解とブリーフレポート作成 (2)
第 5 回　グループディスカッションで学ぶ社会学トレーニング (2)
第 6 回　トピックについての概念理解とブリーフレポート作成 (3)
第 7 回　グループディスカッションで学ぶ社会学トレーニング (3)
第 8 回　中間まとめと講評
第 9 回　トピックについての概念理解とブリーフレポート作成 (4)
第 10 回　グループディスカッションで学ぶ社会学トレーニング (4)
第 11 回　トピックについての概念理解とブリーフレポート作成 (5)
第 12 回　グループディスカッションで学ぶ社会学トレーニング (5)
第 13 回　トピックについての概念理解とブリーフレポート作成 (6)
第 14 回　グループディスカッションで学ぶ社会学トレーニング (6)
第 15 回　授業のまとめと評価

●評価方法

講義時に毎回の当日ブリーフレポート、およびディスカッション報告を作成する。参加と態度、平常点全体で評価する。

●受講生へのコメント

受講生には、毎回の予習と復習、インターネットの積極的な活用など、熱心な参加を求める。

ディスカッションを行う形式の授業であるため、50 名程度の規模が望ましい。履修希望学生が多い場合には人数制限を行うことがあるので、第 1 回目の授業には必ず出席すること。

●参考文献・教材

教科書：開講時に指示する。
参考書：随時紹介する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBSOC3203	開講期	単位数	標準履修年次
83	社会学史 I History of Sociology I			後火 4	2 単位	2 年
	旧科目名			担当教員名 進藤 雄三 教授		

●科目の主題

「すべての歴史は現代史である」。この命題を基軸にすえつつ、19 世紀から現代にいたる社会学の歴史を、通史として概観する。

●到達目標

社会学という学問の誕生、展開の歴史的経緯を理解するとともに、社会学の主題、分野、方法の基礎を習得することを目標とする。

●授業内容・授業計画

以下の計画にしたがって進める。
第 1 回　オリエンテーション
第 2 回　近代社会と啓蒙思想：ルソーからマルクスへ
第 3 回　近代社会の転換点
第 4 回　マックス・ウェーバー：行為論
第 5 回　ゲオルク・ジンメル：相互行為論
第 6 回　エミール・デュルケム：全体論
第 7 回　20 世紀社会学へ：シカゴ学派とフランクフルト学派
第 8 回　アメリカ社会学の興隆：パーソンズと機能主義
第 9 回　反旗 1：交換理論、象徴的相互佐用論
第 10 回　反旗 1：現象学的社会学とエスノメソドロジー
第 11 回　中間考察：構造機能主義以降のアメリカ社会学
第 12 回　ヨーロッパ社会学
第 13 回　現代の諸理論
第 14 回　現代社会学の課題
第 15 回　Coda

●評価方法
出席（2)、コメント（2)、小レポート（2)、期末レポート（4)、計 10 点満点で評価する。
●受講生へのコメント
毎回コメントを求めます。また、小レポート（1200 ～ 2000 字程度）を 2 回、期末レポート（4000 ～ 6000 字程度）の提出を課します。講義を、レポート作成の指標として活用して下さい。
●参考文献・教材
テキストは使用しない。プリントを配布し、文献は随時指示する。
参考文献：土井文博他編『はじめて学ぶ社会学』ミネルヴァ書房（2007）
富永健一『思想としての社会学』新曜社（2008）

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBSOC3205	開講期	単位数	標準履修年次
84	社会学研究法 I Research methods in Sociology I			前月 3	2 単位	2 年
	旧科目名			担当教員名 笹島 秀晃 講師		

●科目の主題
社会学の目的は社会現象の解明にあるから、社会学の研究は、まずは現実の社会を知ることから始めなければならない。そのための方法が「社会調査」である。社会調査の方法には大別して量的方法と質的方法がある。本講義ではいずれの方法も扱うが、特に社会調査の歴史、社会調査の目的、社会調査の方法論などの社会調査の基礎的な事項について講義する。
●到達目標
社会学における社会調査の意義と、さまざまな社会調査法に関する基本的事項の習得を目標とする。
●授業内容・授業計画
以下のとおりのスケジュールで講義を行う。
第 1 回　ガイダンス
第 2 回　社会調査の意義と役割
第 3 回　社会調査の歴史（欧米と日本）
第 4 回　社会調査の種類
第 5 回　量的調査と質的調査
第 6 回　量的調査のプロセス
第 7 回　調査票の作成・ワーディング
第 8 回　サンプリング
第 9 回　インタビュー調査
第 10 回　参与観察
第 11 回　ライフヒストリー調査
第 12 回　二次データ・歴史資料の分析
第 13 回　世論調査・市場調査
第 14 回　調査・研究倫理について
第 15 回　まとめ
●評価方法
出席（20%）＋ミニレポート①（40%）＋ミニレポート②（40%）
●受講生へのコメント
本講義は、社会調査士資格認定 A 科目である。社会学コース生は、必ず前期開講の「社会学研究法 I」（前期開講※調査士 A 科目）と「社会調査法」（後期開講※調査士 B 科目）を通年で履修すること。社会調査士資格を申請予定の学生（主に社会学コースの学生）は、篠原清夫ほか , 2010,『社会調査の基礎』弘文堂を購入しておくこと。適宜授業中に参照する。
●参考文献・教材
教科書はなし。
参考書：盛山和夫 , 2004,『社会調査法入門』有斐閣.
参考書：篠原清夫ほか , 2010,『社会調査の基礎』弘文堂.

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBSOC3206	開講期	単位数	標準履修年次
85	社会学研究法Ⅱ Research methods in Sociology Ⅱ			後木 3	2 単位	2 年
	旧科目名			担当教員名 伊地知 紀子 教授		

●科目の主題

質的調査の歴史、目的、方法論などについて学ぶ。

●到達目標

質的調査の技法を学び実践を試みることにより、実施の基礎を身につける。

●授業内容・授業計画

調査法の基礎を学ぶとともに、グループワークによって課題に取組み報告をすることで、質的調査の可能性と課題を検討する。

第 1 回　ガイダンス
第 2 回　質的調査とは
第 3 回　質的調査の歴史
第 4 回　質的調査の魅力と困難
第 5 回　質的調査の進め方
第 6 回　参与観察
第 7 回　ライフヒストリー法
第 8 回　資料分析
第 9 回　グループワーク①
第 10 回　グループワーク②
第 11 回　グループワーク③
第 12 回　グループ報告①
第 13 回　グループ報告②
第 14 回　グループ報告③
第 15 回　まとめ

●評価方法

授業の課題についての取組みと報告、期末レポート。

●受講生へのコメント

本講は、社会調査士資格認定 A 科目である。社会学コース生は、必ず後期開講の「社会学研究法Ⅱ」（後期開講※調査士 A 科目）と「社会調査法」（後期開講※調査士 B 科目）を通年で履修すること。社会調査士資格を申請予定の学生（主に社会学コースの学生）は、篠原清夫ほか , 2010,『社会調査の基礎』弘文堂を購入しておくこと。

●参考文献・教材

授業中に提示。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBSOC3301	開講期	単位数	標準履修年次
86	社会学実習Ⅰa Field Work in Social Research Ⅰa			前水 3	2 単位	3 年
	旧科目名			担当教員名 伊地知 紀子 教授		

●科目の主題

「大阪における教育実践の現場に学ぶ」というテーマで、大阪府内の学校教育現場で、歴史的に築かれてきた多文化教育実践について、朝鮮学校と日本学校の歴史と現状を主に調査する。

●到達目標

予備調査に基づき、課題設定および関連文献の検討を行い、調査対象を決定したのち本調査を実施する、本調査での成果を踏まえ、一連のデータ分析をもとに報告書を作成する。

●授業内容・授業計画

統計データおよび既存文献の読解を踏まえ、問題関心を共有する班編成を行う。全体と班別に調査計画を作成し、調査方法および項目を設定する。

第 1 回　ガイダンス
第 2 回　調査対象地域の事前学習（1）
第 3 回　調査対象地域の事前学習（2）
第 4 回　先行研究の検討（1）
第 5 回　先行研究の検討（2）
第 6 回　先行研究の検討（3）
第 7 回　班編成と課題設定（1）
第 8 回　班編成と課題設定（2）
第 9 回　データの収集と整理（1）
第 10 回　データの収集と整理（2）
第 11 回　現地予備調査
第 12 回　予備調査成果の整理
第 13 回　現地本調査（1）
第 14 回　現地本調査（2）
第 15 回　中間報告会

●評価方法

学生は、自らの問題関心を設定し、研究計画の構成、調査の実施、データ分析、報告書の作成を行う。この全過程を通して評価する。

●受講生へのコメント

この授業は前期・後期通年で受講すること。

●参考文献・教材

授業中に適宜提示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBSOC3301	開講期	単位数	標準履修年次
87	社会学実習Ⅰb Field Work in Social Research Ⅰ b			前水 2	2 単位	3 年
	旧科目名			担当教員名 笹島 秀晃 講師		

●科目の主題

本調査実習は、自治体コミュニティ政策の転換が地域コミュニティに与えた影響を調査することを通して、受講学生が地域調査の基礎的な知識と作法を習得することを目的とする。大阪市では、2012 年度からおおよそ小学校エリアを基本として「地域活動協議会」が設立された。ただし、こうした試みは行政主導のもと短期間で進められた結果として、地域住民に混乱を生じさせた可能性が指摘されている。本調査実習では、大阪市において地域活動協議会や地域振興会に関わる住民に聞き取りを行うことで、自治体コミュニティ政策が地域コミュニティに与えた影響を明らかにすることを目指す。前期は、大阪市西成区の地域活動協議会や地域振興会に聞き取り調査を行い、地域コミュニティ活動に関する基礎データを収集しつつ、地域活動協議会設立後の地域コミュニティ活動の変化を調査する。

●到達目標

・社会調査のプロセス（企画・調査対象者の選定・実査・分析・報告書の作成）を一通り経験することで、社会調査における基礎的な作法に習熟する。
・質的社会調査手法（インタビュー調査・ライフヒストリー調査）を身につける。

●授業内容・授業計画

授業は、作業の進捗状況によって流動的に進行するが、基本的には下記のスケジュールを想定している。

第 1 回　ガイダンス
第 2 回　先行研究の検討
第 3 回　先行研究の検討
第 4 回　先行研究の検討
第 5 回　グループ分け・調査企画・調査対象の設定
第 6 回　グループ分け・調査企画・調査対象の設定
第 7 回　インタビューの練習・調査項目の設定
第 8 回　インタビューの練習・調査項目の設定
第 9 回　インタビューの練習・調査項目の設定
第 10 回　実査・インタビュー・データの文字起こし・分析

第 11 回　実査・インタビュー・データの文字起こし・分析
第 12 回　実査・インタビュー・データの文字起こし・分析
第 13 回　実査・インタビュー・データの文字起こし・分析
第 14 回　調査成果の報告
第 15 回　調査成果の報告

●評価方法
出席・平常点（60%）・授業内の課題（40%）
●受講生へのコメント
実習Ⅰと実習Ⅱは、同一のクラス（a 組／ b 組）を通年で履修しなければならない。クラス分けについては、年度初めのガイダンスで指示するので、必ず出席すること。
●参考文献・教材
［参考文献］
岩崎信彦 , 1989,『町内会の研究』御茶の水書房 .
玉野和志 , 2005,『東京のローカル・コミュニティ：ある町の物語 1900-80』東京大学出版会 .
藤井聡ほか , 2015,『大都市自治を問う：大阪・橋下市政の検証』学芸出版社 .

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBSOC3302	開講期	単位数	標準履修年次
88	社会学実習Ⅱ a Field Work in Social Research Ⅱ a			後水 3	2 単位	3 年
	旧科目名			担当教員名 伊地知 紀子 教授		

●科目の主題
「大阪における教育実践の現場に学ぶ」というテーマで、大阪府内の学校教育現場で、歴史的に築かれてきた多文化教育実践について、朝鮮学校と日本学校の歴史と現状を主に調査する。
●到達目標
予備調査に基づき、課題設定および関連文献の検討を行い、調査対象を決定したのち本調査を実施する、本調査での成果を踏まえ、一連のデータ分析をもとに報告書を作成する。
●授業内容・授業計画
統計データおよび既存文献の読解を踏まえ、問題関心を共有する班編成を行う。全体と班別に調査計画を作成し、調査方法および項目を設定する。
第 1 回　ガイダンス
第 2 回　本調査成果の検討（1）
第 3 回　本調査成果の検討（2）
第 4 回　報告書作成に向けての討論（1）
第 5 回　報告書作成に向けての討論（2）
第 6 回　補充調査の準備
第 7 回　補充調査（1）
第 8 回　補充調査（2）
第 9 回　補充調査成果の整理と検討（1）
第 10 回　補充調査成果の整理と検討（2）
第 11 回　最終報告会（1）
第 12 回　最終報告会（2）
第 13 回　報告書作成（1）
第 14 回　報告書作成（2）
第 15 回　報告書作成（3）
●評価方法
学生は、自らの問題関心を設定し、研究計画の構成、調査の実施、データ分析、報告書の作成を行う。この全過程を通して評価する。
●受講生へのコメント
この授業は前期・後期通年で受講すること。
●参考文献・教材
授業中に適宜提示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBSOC3302	開講期	単位数	標準履修年次
89	社会学実習Ⅱ b Field Work in Social Research Ⅱ b			後水 2	2 単位	3 年
	旧科目名			担当教員名 笹島 秀晃 講師		

●科目の主題

本調査実習は、自治体コミュニティ政策の転換が地域コミュニティに与えた影響を調査することを通して、受講学生が地域調査の基礎的な知識と作法を習得することを目的とする。大阪市では、2012 年度からおおよそ小学校エリアを基本として「地域活動協議会」が設立された。ただし、こうした試みは行政主導のもと短期間で進められた結果として、地域住民に混乱を生じさせた可能性が指摘されている。本調査実習では、大阪市において地域活動協議会や地域振興会に関わる住民に聞き取りを行うことで、自治体コミュニティ政策が地域コミュニティに与えた影響を明らかにすることを目指す。

後期の実習では、協議会設立後の地域コミュニティの変化を、より長い地域の歴史の中に位置付けて分析するために、住民から地域の歴史を聞き取ることを目的としたオーラル・ヒストリー調査を行う（まちづくりオーラル・ヒストリー調査）。地域コミュニティの変遷を個人史という観点から記述することによって、近年の変化を相対化しつつ分析することを目指す。オーラル・ヒストリー調査は、大阪市西成区のなかでも特に山王地区、ないし今宮地区の地域振興会のメンバーを対象に行うことを計画している。

●到達目標

・社会調査のプロセス（企画・調査対象者の選定・実査・分析・報告書の作成）を一通り経験することで、社会調査における基礎的な作法に習熟する。
・質的社会調査手法（インタビュー調査・ライフヒストリー調査）を身につける。

●授業内容・授業計画

授業は、作業の進捗状況によって流動的に進行するが、基本的には下記のスケジュールを想定している。

第 1 回　前期調査のおさらい
第 2 回　ライフヒストリー・モノグラフの講読
第 3 回　ライフヒストリー・モノグラフの講読
第 4 回　ライフヒストリー・インタビューの練習
第 5 回　ライフヒストリー・インタビューの練習
第 6 回　実査・インタビュー・データの文字起こし・分析
第 7 回　実査・インタビュー・データの文字起こし・分析
第 8 回　実査・インタビュー・データの文字起こし・分析
第 9 回　実査・インタビュー・データの文字起こし・分析
第 10 回　調査成果の報告
第 11 回　調査成果の報告
第 12 回　調査成果の報告
第 13 回　報告書の作成
第 14 回　報告書の作成
第 15 回　報告書の作成

●評価方法

出席・平常点（60%）・授業内の課題（40%）

●受講生へのコメント

実習Ⅰと実習Ⅱは、同一のクラス（a 組／ b 組）を通年で履修しなければならない。クラス分けについては、年度初めのガイダンスで指示するので、必ず出席すること。

●参考文献・教材

岩崎信彦 , 1989,『町内会の研究』御茶の水書房 .
後藤春彦ほか , 2005,『まちづくりオーラル・ヒストリー』水曜社 .
玉野和志 , 2005,『東京のローカル・コミュニティ：ある町の物語 1900-80』東京大学出版会 .
藤井聡ほか , 2015,『大都市自治を問う：大阪・橋下市政の検証』学芸出版社 .

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LBSOC3207	開講期	単位数	標準履修年次
90	**社会学基礎演習 a** Proseminar in Sociology a			前火 2	2 単位	2 年
	旧科目名			担当教員名 進藤 雄三 教授		

●科目の主題

社会学の基本文献をテキストに用いて、社会学の基礎を習得する。社会学はどのような「問い」を立てるのか。社会学はどのようなものの見方、考え方をするのか。社会学の理論と方法にはどのようなものがあるのか。社会学によって何が分かるのか、社会学することの意味をは何か、その基礎を学ぶことが基礎演習の目的である。

●到達目標

社会学の文献を探し出す方法、文献の読み方、読書ノートの取り方、演習での発表と議論の仕方、レジュメの作成方法、レポートの書き方などを学ぶ。

●授業内容・授業計画

共通したテキストを講読し、毎回の報告とディスカッションを通して理解を深める。

第 1 回　ガイダンス
第 2 回　読書ノートの取り方、レジュメの作成方法、インターネットを用いた文献検索方法など
第 3 回　学情センター・ツアー
第 4 回　社会学の基本文献を読む（1）
第 5 回　社会学の基本文献を読む（2）
第 6 回　社会学の基本文献を読む（3）
第 7 回　社会学の基本文献を読む（4）
第 8 回　社会学の基本文献を読む（5）
第 9 回　社会学の基本文献を読む（6）
第 10 回　社会学の基本文献を読む（7）
第 11 回　社会学の基本文献を読む（8）
第 12 回　社会学の基本文献を読む（9）
第 13 回　社会学の基本文献を読む（10）
第 14 回　レポートの書き方、文献リスト、注、引用の仕方
第 15 回　レポートの作成と提出

●評価方法

平常点（出席と参加態度、レジュメと報告）、学期末レポート

●受講生へのコメント

社会学コースの新 2 回生を 2 つのクラスに分け、それぞれ a 組と b 組とする。クラス分けは、新年度の始めに掲示するので、履修前に必ず確認すること。

●参考文献・教材

教科書：開講時に指示する。
参考書：随時紹介する。

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LBSOC3207	開講期	単位数	標準履修年次
91	**社会学基礎演習 b** Proseminar in Sociology b			前水 4	2 単位	2 年
	旧科目名			担当教員名 石田 佐恵子 教授		

●科目の主題

社会学の基本文献をテキストに用いて、社会学の基礎を習得する。社会学はどのような「問い」を立てるのか。社会学はどのようなものの見方、考え方をするのか。社会学の理論と方法にはどのようなものがあるのか。社会学によって分かること、社会学することの意味を深く探求することが基礎演習の目的である。

●到達目標

社会学の文献を探し出す方法、文献の読み方、読書ノートの取り方、演習での発表と議論のしかた、レジュメの作成方法、レポートの書き方などを学ぶ。

●授業内容・授業計画

共通したテキストを講読し、毎回の報告とディスカッションを通して理解を深める。

第 1 回　ガイダンス（報告・発表スケジュールの決定）
第 2 回　読書ノートの取り方、レジュメの作成方法、インターネットを用いた文献検索方法など
第 3 回　学情センター・ツアー
第 4 回　社会学の基本文献を読む（1）
第 5 回　社会学の基本文献を読む（2）
第 6 回　社会学の基本文献を読む（3）
第 7 回　社会学の基本文献を読む（4）
第 8 回　社会学の基本文献を読む（5）
第 9 回　社会学の基本文献を読む（6）
第 10 回　社会学の基本文献を読む（7）
第 11 回　社会学の基本文献を読む（8）
第 12 回　社会学の基本文献を読む（9）
第 13 回　社会学の基本文献を読む（10）
第 14 回　レポートの書き方、引用、注、文献リストについて
第 15 回　レポートの作成と提出について

●評価方法
適宜課されるミニレポート、平常点（出席と参加態度）
学期末レポート

●受講生へのコメント
社会学コース新 2 回生を 2 つのグループに分け、それぞれ a 組と b 組とする。クラス分けは、新年度始めに掲示を行う ので、必ず確認すること。

●参考文献・教材
開講時に相談の上、決定する。
参考書：随時紹介する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBSOC3208	開講期	単位数	標準履修年次
92	社会学演習Ⅰ a Seminar in Sociology Ⅰ a			前木 3	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 伊地知 紀子 教授		

●科目の主題
生活世界の社会学：現代社会における生活世界のグローバル化について社会学の視点から考察する

●到達目標
グローバル化時代の生活世界が抱える諸問題を、社会学的に分析し考察する力を養う。

●授業内容・授業計画
社会運動、市民社会などの切り口から、グローバル化時代の問題点と可能性を生活世界から社会学的に考察する。
第 1 回　ガイダンス
第 2 回　群衆の精神①
第 3 回　群衆の精神②
第 4 回　群衆の意見と信念①
第 5 回　群衆の意見と信念②
第 6 回　群衆の意見と信念③
第 7 回　様々な群衆の分類とその解説①
第 8 回　様々な群衆の分類とその解説②
第 9 回　大衆の反逆①
第 10 回　大衆の反逆②
第 11 回　世界を支配しているのは誰か①
第 12 回　世界を支配しているのは誰か②
第 13 回　世界を支配しているのは誰か③
第 14 回　まとめ（1）
第 15 回　まとめ（2）

●評価方法
平常点（出席および態度）、ミニレポート、学期末レポート

●受講生へのコメント
テキストは事前に入手しておくこと。
授業中に頻繁な意見発表を求める。

●参考文献・教材
＜テキスト＞
ギュスターヴ・ル・ボン『群集心理』（講談社学術文庫）、講談社、1993。
オルデガ・イ ガセット『大衆の反逆』（ちくま学芸文庫）、筑摩書房、1995。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBSOC3208	開講期	単位数	標準履修年次
93	社会学演習Ⅰb Seminar in Sociology Ⅰ b			後火 3	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 笹島 秀晃 講師		

●科目の主題
本講義では、「都市政治と再開発」、および「コミュニティと場所」という都市社会学の二つのトピックを主題とする。都市社会学の研究は、マクロ領域に着目したテーマ群（マクロ・アプローチ）とミクロ領域に着目したテーマ群（ミクロ・アプローチ）に整理することができる。マクロ・アプローチは、国家や資本といった構造的な要因と都市空間の変動の関係性を分析する。ミクロ・アプローチは、都市空間におけるコミュニティや社会集団の動向を分析する。
本講義では、都市社会学におけるマクロ・アプローチの思考法を理解するために「都市政治と再開発」の論点を検討する。ここでは行政・企業・不動産所有者からなる都市的なポリティクスの中で、いかに再開発が進展するのかを議論する。加えて、ミクロ・アプローチの思考法を理解するために、「コミュニティと場所」の論点に着目し、町内会や商店街など地域の多様なアクターの中で、まちづくりや景観保全といった問題がどのように構成されているかをを議論する。

●到達目標
・学術論文を理解するために必要な読解力の向上。
・現代日本の具体的な事例を、都市社会学の理論枠組みを用いて検討するための分析力の向上。

●授業内容・授業計画
以下の通り
第 1 回　ガイダンス
第 2 回　都市社会学の基本視角
第 3 回　ミクロ・アプローチとマクロ・アプローチ：シカゴ学派と新都市社会学
第 4 回　都市政治と再開発①：問題設定（町村敬志・西澤晃彦著「第 9 章 権力と都市」『都市の社会学』）
第 5 回　都市政治と再開発②：分析視角（〈成長マシン〉論）（ハーヴェイ・モロッチ「成長マシンとしての都市」）
第 6 回　都市政治と再開発③：事例①（東京の臨海部開発）（町村敬志「第 5 章 東京臨海部開発の政治過程」『世界都市東京の構造転換』）
第 7 回　都市政治と再開発④：事例②（横浜の創造都市事業）（笹島秀晃「アートによる地域再生の今日的様相ー横浜市初黄・日ノ出町における安全・安心まちづくりと芸術不動産事業に着目して」『ヘスティアとクリオ』）
第 8 回　都市政治と再開発⑤：ミニレポートの検討
第 9 回　前半部分のまとめ
第 10 回　コミュニティと場所①：問題設定（町村敬志・西澤晃彦著「第 10 章 見える都市、見えない都市」『都市の社会学』）
第 11 回　コミュニティと場所②：分析視角（〈都市の意味〉論）（マニュエル・カステル『都市とグラスルーツ』）
第 12 回　コミュニティと場所③：事例①（長浜）（矢部拓也「地方小都市再生の前提条件：滋賀県長浜市第三セクター「黒壁」の登場と地域社会の変容」）
第 13 回　コミュニティと場所④：事例②（鞆の浦）（森久聡「地域政治における空間の刷新と存続:福山市・鞆の浦「鞆港保存問題」に関する空間と政治のモノグラフ」）
第 14 回　コミュニティと場所⑤：ミニレポートの検討
第 15 回　後半部分のまとめ

●評価方法
平常点（20%）＋課題提出（20%）＋ミニレポート①（30%）＋ミニレポート②（30%）

●受講生へのコメント
・2 ～ 3 回生向け（特に 2 回生）。

・各講義は、①文献講読と②提出課題を用いたディスカッションの二つの内容からなる。
・文献講読では、受講学生が文献の要約・論点の報告を行う。なお重要なポイントについては教員が解説する。
・毎回の講義では課題の提出を求める。課題の分量は 400 字～ 800 字程度の予定である。

●参考文献・教材

・講義ではコピーを配布するので、文献を購入する必要はない。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBSOC3209	開講期	単位数	標準履修年次
94	**社会学演習Ⅱ a** Seminar in Sociology Ⅱ a			後水 4	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 石田 佐恵子 教授		

●科目の主題

「現代文化の社会学演習」カルチュラル・スタディーズ、メディア人類学、映像社会学、現代文化の社会学などの国内外の 最新の文献を読んでいく。

●到達目標

社会学的な概念を理解し、社会学論文を読みこなすことを目標とする。報告や討論を通じて、各自の問題関心を深める。さらに、主体的な文献・情報収集の能力、プレゼンテーション能力を身につけていくことを目標とする。

●授業内容・授業計画

「現代メディアの文化」を主題とした最新のテキストを講読する。

第 1 回　ガイダンス（報告・発表スケジュールの決定）
第 2 回　テキストに基づく報告と議論（1）
第 3 回　テキストに基づく報告と議論（2）
第 4 回　テキストに基づく報告と議論（3）
第 5 回　テキストに基づく報告と議論（4）
第 6 回　テキストに基づく報告と議論（5）
第 7 回　テキストに基づく報告と議論（6）
第 8 回　テキストに基づく報告と議論（7）
第 9 回　テキストに基づく報告と議論（8）
第 10 回　テキストに基づく報告と議論（9）
第 11 回　テキストに基づく報告と議論（10）
第 12 回　各自の関心に基づく発表（1）
第 13 回　各自の関心に基づく発表（2）
第 14 回　各自の関心に基づく発表（3）
第 15 回　レポートの作成と提出について

●評価方法

適宜課されるミニレポート、平常点（出席と参加態度）
学期末レポート

●受講生へのコメント

2 回生～ 4 回生向け。現代文化、メディア文化研究に特に関心を持つ者、大学院進学を希望する者の受講を歓迎する。ただし、履修人数が 10 人を超えるときには、調整を行うことがある。

●参考文献・教材

教科書：開講時に指定する。
参考書：随時紹介する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBSOC3209	開講期	単位数	標準履修年次
95	**社会学演習Ⅱ b** Seminar in Sociology Ⅱ b			後木 2	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 川野 英二 准教授		

●科目の主題

社会意識論

●到達目標
社会意識に関する社会学の文献を読み、そこで用いられた理論や分析手法を自らの問題意識にあわせて応用することを学ぶ。
●授業内容・授業計画
社会意識論に関するテキスト・文献を読み、社会意識分析のアプローチを学ぶ。各自の関心に合ったテーマを調べ、先行研究で用いられている理論や分析手法をさらに掘り下げて学ぶ。ソフトウェアを使って実際に社会意識データの分析法と論文の作成法を学ぶ。

第 1 回　オリエンテーション
第 2 回　文献報告とディスカッション（1）家族・ワークライフバランス
第 3 回　文献報告とディスカッション（2）政治
第 4 回　文献報告とディスカッション（3）国際化
第 5 回　文献報告とディスカッション（4）仕事と余暇
第 6 回　文献報告とディスカッション（5）日常生活・人間関係
第 7 回　社会意識データの分析法（1）量的データの分析法
第 8 回　社会意識データの分析法（2）質的データの分析法
第 9 回　社会意識データの分析法（3）データ分析の実際
第 10 回　社会意識データの分析法（4）データ分析の実際
第 11 回　社会意識データの分析法（5）データ分析の実際
第 12 回　社会意識データの分析法（6）データ分析の実際
第 13 回　演習（1）
第 14 回　演習（2）
第 15 回　レポート作成について

●評価方法
報告3、平常点1、レポート6の 10 点満点で評価する。
●受講生へのコメント
分析手法や統計ソフトなど、新しいことを自ら進んで学ぶ意欲のある学生を望む。
●参考文献・教材
NHK 放送文化研究所 (2015)『現代日本人の意識構造［第八版］
そのほか参考文献などは授業中に指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBSOC3210	開講期	単位数	標準履修年次
96	社会学演習Ⅲ Seminar in Sociology Ⅲ			前月 3	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 進藤 雄三 教授		

●科目の主題
現代社会理論：グローバリゼーション以降の現代社会に関する基礎的理論書を読み進める。
●到達目標
社会理論に関わる基本文献を読みことを通して、理論に関する基礎的知見と文献を読み進める基礎的技術と能力を涵養することを目的とする。
●授業内容・授業計画
授業内容は以下の通り。

第 1 回　オリエンテーション（報告スケジュールの確定）
第 2 回　テキストに基づく報告（1）
第 3 回　テキストに基づく報告（2）
第 4 回　テキストに基づく報告（3）
第 5 回　テキストに基づく報告（4）
第 6 回　テキストに基づく報告（5）
第 7 回　テキストに基づく報告（6）
第 8 回　テキストに基づく報告（7）
第 9 回　テキストに基づく報告（8）
第 10 回　テキストに基づく報告（9）
第 11 回　テキストに基づく報告（10）

第 12 回　受講生による発表（1）
第 13 回　受講生による発表（2）
第 14 回　受講生による発表（3）
第 15 回　レポート作成と提出

●評価方法
報告（4）討論（2）レポート（4）の 10 点満点で評価する。
●受講生へのコメント
受講者には 2 回以上の報告、演習内での積極的な討議参加が求められる。期末レポート(2000 字程度)は、報告・発表内容に即したものとする。
●参考文献・教材
開講時に決定する。
候補文献は、ハバーマス『他者生の受容』(2004)『引き裂かれた西洋』(2009)、バウマン『個人化社会』(2008)、ベック『ナショナリズムの超克』(2008) など。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBSOC3211	開講期	単位数	標準履修年次
97	社会学演習Ⅳ a Seminar in Sociology Ⅳ a			後火 3	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 進藤 雄三 教授		

●科目の主題
卒業論文の主題設定、調査や資料収集の設計、論述方法などを総合的に学ぶ。
●到達目標
卒業論文の主題を確定し、最終学年における年間研究の計画を立てる。
●授業内容・授業計画
関連分野における社会学の共通テキストを参照し、各自の問題意識にそった発表を行う。
第 1 回　オリエンテーション
第 2 回　受講生による報告（主題と問題意識）
第 3 回　受講生による報告（主題と問題意識）
第 4 回　受講生による報告（主題と問題意識）
第 5 回　受講生による報告（主題と問題意識）
第 6 回　受講生による報告（主題と問題意識）
第 7 回　受講生による報告（主題と問題意識）
第 8 回　受講生による報告（調査や資料収集の設計）
第 9 回　受講生による報告（調査や資料収集の設計）
第 10 回　受講生による報告（調査や資料収集の設計）
第 11 回　受講生による報告（調査や資料収集の設計）
第 12 回　上回生による卒業論文報告
第 13 回　上回生による卒業論文報告
第 14 回　主題の確定と企画書の書き方
第 15 回　卒業論文作成に向けて
●評価方法
平常点（出席と参加態度、レジュメ）
学期末レポート
●受講生へのコメント
社会学コースの 3 回生を 5 つのクラスに分け、それぞれ a 組～ e 組とする。クラス分けは、後期学期の履修登録時に掲示するので、履修前に必ず確認すること。なお、a 組の専門分野は、理論社会学、医療社会学、家族社会学、社会問題の社会学などである。
●参考文献・教材
教科書：開講時に指示する。
参考書：『よくわかる卒論の書き方　第 2 版』ミネルヴァ書房、他、随時紹介する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBSOC3211	開講期	単位数	標準履修年次
98	社会学演習Ⅳ b Seminar in Sociology Ⅳ b			後火 3	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 石田 佐恵子 教授		

●科目の主題
卒業論文の主題設定、調査や資料収集の設計、論述方法などを総合的に学ぶ。
●到達目標
卒業論文の主題を確定し、最終学年における年間研究の計画を立てる。
●授業内容・授業計画
関連分野における社会学の共通テキストを参照し、各自の問題意識にそった発表を行う。
第 1 回　ガイダンス
第 2 回　受講生による報告（主題と問題意識）
第 3 回　受講生による報告（主題と問題意識）
第 4 回　受講生による報告（主題と問題意識）
第 5 回　受講生による報告（主題と問題意識）
第 6 回　受講生による報告（主題と問題意識）
第 7 回　受講生による報告（調査や資料収集の設計）
第 8 回　受講生による報告（調査や資料収集の設計）
第 9 回　受講生による報告（調査や資料収集の設計）
第 10 回　受講生による報告（調査や資料収集の設計）
第 11 回　受講生による報告（調査や資料収集の設計）
第 12 回　上回生による卒業論文報告
第 13 回　上回生による卒業論文報告
第 14 回　主題の確定と企画書の書き方
第 15 回　卒業論文作成に向けて
●評価方法
平常点（出席と参加態度、レジュメ）
学期末レポート
●受講生へのコメント
社会学コースの 3 回生を 5 つのクラスに分け、それぞれ a 組～ e 組とする。クラス分けは、後期学期の履修登録時に掲示するので、履修前に必ず確認すること。なお、b 組の専門分野は、「現代文化」「メディア文化」「感情と身体の社会学」「知識社会学」などである。
●参考文献・教材
教科書：『メディアの卒論』ミネルヴァ書房
参考書：『よくわかる卒論の書き方　第 2 版』ミネルヴァ書房、他、随時紹介する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBSOC3211	開講期	単位数	標準履修年次
99	社会学演習Ⅳ c Seminar in Sociology Ⅳ c			後木 4	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 伊地知 紀子 教授		

●科目の主題
卒業論文の主題設定、調査や資料収集の設計、論述方法などを総合的に学ぶ。
●到達目標
卒業論文の主題を確定し、最終学年における年間研究の計画を立てる。
●授業内容・授業計画
関連分野における社会学の共通テキストを参照し、各自の問題意識にそった発表を行う。
第 1 回　ガイダンス
第 2 回　受講生による報告（主題と問題意識）
第 3 回　受講生による報告（主題と問題意識）

第 4 回　受講生による報告（主題と問題意識）
第 5 回　受講生による報告（主題と問題意識）
第 6 回　受講生による報告（主題と問題意識）
第 7 回　受講生による報告（調査や資料収集の設計）
第 8 回　受講生による報告（調査や資料収集の設計）
第 9 回　受講生による報告（調査や資料収集の設計）
第 10 回　受講生による報告（調査や資料収集の設計）
第 11 回　受講生による報告（調査や資料収集の設計）
第 12 回　上回生による卒業論文報告
第 13 回　上回生による卒業論文報告
第 14 回　主題の確定と企画書の書き方
第 15 回　卒業論文作成に向けて

●評価方法
平常点（出席と参加態度、レジュメ）
学期末レポート

●受講生へのコメント
社会学コースの 3 回生を 5 つのクラスに分け、それぞれ a 組～ e 組とする。クラス分けは、後期学期の履修登録時に掲示するので、履修前に必ず確認すること。なお、c 組の専門分野は、「エスニシティ」「コミュニティ」「生活世界の社会学」「地域社会学」などである。

●参考文献・教材
教科書：開講時に指示する。
参考書：『よくわかる卒論の書き方　第 2 版』ミネルヴァ書房、他、随時紹介する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBSOC3211	開講期	単位数	標準履修年次
100	**社会学演習Ⅳ d** Seminar in Sociology Ⅳ d			後木 4	2 単位	3 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 川野 英二 准教授		

●科目の主題
卒業論文の主題設定、調査や資料収集の設計、論述方法などを総合的に学ぶ。

●到達目標
卒業論文の主題を確定し、最終学年における年間研究の計画を立てる。

●授業内容・授業計画
関連分野における社会学の共通テキストを参照し、各自の問題意識にそった発表を行う。
第 1 回　ガイダンス
第 2 回　受講生による報告（主題と問題意識）
第 3 回　受講生による報告（主題と問題意識）
第 4 回　受講生による報告（主題と問題意識）
第 5 回　受講生による報告（主題と問題意識）
第 6 回　受講生による報告（主題と問題意識）
第 7 回　受講生による報告（調査や資料収集の設計）
第 8 回　受講生による報告（調査や資料収集の設計）
第 9 回　受講生による報告（調査や資料収集の設計）
第 10 回　受講生による報告（調査や資料収集の設計）
第 11 回　受講生による報告（調査や資料収集の設計）
第 12 回　上回生による卒業論文報告
第 13 回　上回生による卒業論文報告
第 14 回　主題の確定と企画書の書き方
第 15 回　卒業論文作成に向けて

●評価方法
平常点（出席と参加態度、レジュメ）、学期末レポート

●受講生へのコメント
社会学コースの 3 回生を 5 つのクラスに分け、それぞれ a 組～ e 組とする。クラス分けは、後期学期の履修登録

時に掲示するので、履修前に必ず確認すること。なおｄ組では、主に現代のさまざまな社会問題に関する実証研究をテーマとする。手堅い調査を行い、方法論と分析技術の習得と鍛錬を厭わない受講生を期待する。

●参考文献・教材

教科書：開講時に指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBSOC3211	開講期	単位数	標準履修年次
101	**社会学演習Ⅳｅ** Seminar in Sociology Ⅳ e			後火４	２単位	２～４年
	旧科目名			担当教員名 笹島 秀晃 講師		

●科目の主題

卒業論文の主題設定、調査や資料収集の設計、論述方法などを総合的に学ぶ。

●到達目標

卒業論文の主題を確定し、最終学年における年間研究の計画を立てる。

●授業内容・授業計画

関連分野における社会学の共通テキストを参照し、各自の問題意識にそった発表を行う。

第１回　ガイダンス
第２回　受講生による報告（主題と問題意識）
第３回　受講生による報告（主題と問題意識）
第４回　受講生による報告（主題と問題意識）
第５回　受講生による報告（主題と問題意識）
第６回　受講生による報告（主題と問題意識）
第７回　受講生による報告（調査や資料収集の設計）
第８回　受講生による報告（調査や資料収集の設計）
第９回　受講生による報告（調査や資料収集の設計）
第 10 回　受講生による報告（調査や資料収集の設計）
第 11 回　受講生による報告（調査や資料収集の設計）
第 12 回　上回生による卒業論文報告
第 13 回　上回生による卒業論文報告
第 14 回　主題の確定と企画書の書き方
第 15 回　卒業論文作成に向けて

●評価方法

平常点：出席と参加態度、レジュメ（50%）＋学期末レポート：ミニ卒論・1 万字程度（50%）。

●受講生へのコメント

社会学コースの 3 回生を 5 つのクラスに分け、それぞれ a 組～ e 組とする。クラス分けは、後期学期の履修登録時に掲示するので、履修前に必ず確認すること。なお、e 組の専門分野は、「都市」「コミュニティ」「まちづくり」「アート」などである。

●参考文献・教材

教科書：開講時に指示する。
参考書：『よくわかる卒論の書き方　第 2 版』ミネルヴァ書房、他、随時紹介する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBSOC3212	開講期	単位数	標準履修年次
102	**社会学特論Ⅰ** Specific Issues in Sociology II			前火３	２単位	２～４年
	旧科目名			担当教員名 石田 佐恵子 教授		

●科目の主題

内容分析、ディスコース分析の手法を学ぶ

●到達目標

メディアの文化、新聞記事、雑誌記事、テレビコマーシャル、テレビ番組などを題材に、内容分析、ディスコース分析の手法を用いて、社会学論文（レポートや卒業論文など）を書く能力を身につける。

●授業内容・授業計画

導入として、概念の理解、研究の方法、資料検索の方法などを学ぶ。テキストを活用した予習・復習が必要となる。後半では、受講生自身が具体的な資料を用いて内容分析を行い、各自報告を行う。

第 1 回　ガイダンス
第 2 回　内容分析、ディスコース分析の手法（1）
第 3 回　内容分析、ディスコース分析の手法（2）
第 4 回　内容分析、ディスコース分析の手法（3）
第 5 回　内容分析、ディスコース分析の手法（4）
第 6 回　資料収集とテーマの設定（1）
第 7 回　資料収集とテーマの設定（2）
第 8 回　データ入力と分析（1）
第 9 回　データ入力と分析（2）
第 10 回　データ入力と分析（3）
第 11 回　受講生による個人報告（1）
第 12 回　受講生による個人報告（2）
第 13 回　受講生による個人報告（3）
第 14 回　まとめと講評
第 15 回　レポート作成と提出

●評価方法

内容分析・ディスコース分析の実施と報告、講義終了後のレポート作成による。

●受講生へのコメント

「メディア文化」をテーマに卒業論文を書こうとする学生を歓迎する。本科目は実習・実践的な科目であり、授業時間以外の予習と復習が必須である。また、表計算ソフト、エクセルが使えることを前提に授業を進める。授業時には、パーソナルコンピュータ、タブレット、スマートフォンなどで、エクセルを動かせる体制で参加すること。

●参考文献・教材

教科書：有馬明恵『内容分析の方法』ナカニシヤ出版
参考書：『メディアの卒論』ミネルヴァ書房

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBSOC3213	開講期	単位数	標準履修年次
103	社会学特論Ⅱ Special Studies in Sociology			後月 2	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 進藤 雄三 教授		

●科目の主題

臨床社会学の基礎的トピックスを概説する。本講義では、(1) 家族、教育、医療、福祉といった制度的次元と、(2) ライフステージにおける社会的エイジングという時間的次元を組合せ、現代日本における問題をを対象として解説する。

●到達目標

臨床社会学の視点と、医療社会学、福祉社会学、家族社会学、社会病理学との関係を理解するとともに、個別領域における具体的問題に関する基礎的知見を習得し、現代の日本社会が抱える課題に関しての見取り図を得ることを目的とする。

●授業内容・授業計画

授業内容は以下の通りである。

第 1 回　オリエンテーション：臨床社会学の位置
第 2 回　家族・教育・医療・福祉：社会的制度複合体への視点
第 3 回　家族問題へのアプローチ
第 4 回　教育問題へのアプローチ
第 5 回　医療問題・福祉問題へのアプローチ
第 6 回　家族・教育・医療の交錯現象：不登校、発達障害
第 7 回　家族・医療・福祉の交錯現象：社会的入院、社会的ケア
第 8 回　社会的エイジング：概観
第 9 回　子ども・青年期へのアプローチ
第 10 回　成人期へのアプローチ

第 11 回　高齢期へのアプローチ
第 12 回　ジェンダーという視点
第 13 回　階層という視点
第 14 回　ライフ・ポリティクスとバイオ・ポリティクス
第 15 回　現代日本社会における臨床社会学

●評価方法
出席（2）コメント（3）期末レポート（5）の 10 点満点で評価する。
●受講生へのコメント
毎回コメントを課します。講義のなかから、自分が関心を持てたテーマについて、期末にレポート（4000 ～ 6000 字）を提出してもらいます。講義を、関心の活性化と涵養の指標として活用して下さい。
●参考文献・教材
テキストは使用しない。プリントを使用する。
参考文献：大村英昭編『臨床社会学を学ぶ人のために』世界思想社（2000）
大村英昭・野口裕二編『臨床社会学のすすめ』有斐閣（2000）
森田洋司・進藤雄三編『医療化のポリティクス』学文社（2006）

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBSOC3214	開講期	単位数	標準履修年次
104	社会学特講 I Special Lecture on Sociology I			前金 2	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 白波瀬 達也 非常勤講師		

●科目の主題
社会調査の企画・設計・実施を行い、分析・集計するための実践的な知識と能力を習得する。社会調査の一連の流れに沿って、社会調査におけるデータ収集と分析の技法を解説する。
●到達目標
受講者は、授業の進行に合わせて、自身の調査企画案を構想することが求められる。
●授業内容・授業計画
授業は一方的な講義スタイルをとらない。受講者自身の調査関心をシェアし、調査計画立案を受講者・教員が共同で検討する予定である。なお、調査の実施、調査結果の発表・レポート作成はグループではなく個人としておこなうものとする。
第 1 回　調査テーマの選び方
第 2 回　先行研究の調べ方
第 3 回　リサーチクエスチョンの決め方
第 4 回　調査計画の作り方
第 5 回　調査倫理
第 6 回　事前調査
第 7 回　調査のアポイントの取り方
第 8 回　調査時の基本姿勢
第 9 回　調査の実施（参与観察）
第 10 回　調査の実施（インタビュー）
第 11 回　調査データの整理
第 12 回　調査データの分析
第 13 回　調査結果の発表（口頭発表）
第 14 回　調査結果の発表（報告書・論文作成）
第 15 回　授業のまとめ
●評価方法
平常点とレポートで評価する。それぞれの配点は以下の通り。
平常点：20 点
レポート：80 点
●受講生へのコメント
●参考文献・教材
北川由紀彦・山北輝裕『社会調査の基礎』（2015 年，NHK 出版）
小田博志『エスノグラフィー入門』（2010 年，春秋社）

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBSOC3215	開講期	単位数	標準履修年次
105	社会学特講Ⅱ Special Lecture on Sociology Ⅱ			前金 3	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 野村 明宏非常勤講師		

●科目の主題

現代の社会と文化的事象の分析をとおして、社会的なものと個人的なものの関係の変容について学ぶ。

●到達目標

理論社会学や文化研究などの知見に基づき、モダニティとポストモダニティに関する基礎的な知識を習得する。そのうえで、今日の社会の変容が受講生自らの問題としてリアリティをもって考えられる力を身につける。

●授業内容・授業計画

現代文化に関連する多様なトピックを具体的に取り上げながら、現代社会に関する知見を深める。

近代に成立した国民国家の体制は、今日大きな揺らぎをみせており、グローバル化や個人化の潮流の中で、社会と個人のあり方には根本的な変容が生じている。また、こうした現代の変容は既存の社会学そのものの再検討を迫っているともいえる。本講義では現代の「社会」と「社会学」の両者を再考し、新たな知見やパースペクティヴを探究することになる。

第 1 回　イントロダクション
第 2 回　文化と文明の概念
第 3 回　国民国家とコロニアリズム
第 4 回　国民国家とポストコロニアリズム
第 5 回　オリエンタリズムとセルフオリエンタリズム
第 6 回　コミュニティの変容と文化の客体化
第 7 回　現代文化とオーセンティシティ
第 8 回　小括
第 9 回　構造化と主体化
第 10 回　権力と統治性
第 11 回　規律社会論（1）
第 12 回　規律社会論（2）
第 13 回　管理社会論（1）
第 14 回　管理社会論（2）
第 15 回　総括

●評価方法

出席状況 50%、授業時のレポート等提出物 50%によって総合的に評価する。

●受講生へのコメント

●参考文献・教材

授業中に適宜紹介する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBSOC3216	開講期	単位数	標準履修年次
106	社会学特講Ⅲ Special Lecture on Sociology Ⅲ			後集中	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 田間 泰子 非常勤講師		

●科目の主題

ジェンダーと家族、特にリプロダクションに関わる諸課題に関して、基礎知識を得たうえで諸課題の解決を考察する。

●到達目標

○ジェンダーと家族、特にリプロダクションに関する基礎知識を得る。
○ジェンダーと家族、特にリプロダクションを説明する諸理論を理解する。
○ジェンダーと家族、特にリプロダクションに関する諸課題について、研究する力を身に付ける。

●授業内容・授業計画

前半は理論中心、後半は事例中心に学習を進める。

第 1 回　イントロダクション
第 2 回　基礎知識①歴史
第 3 回　基礎知識②統計的事実
第 4 回　理論①第一波フェミニズム、第二波フェミニズム
第 5 回　理論②ポスト近代のジェンダー論、ケアの正義論
第 6 回　理論③マルクス主義フェミニズム
第 7 回　理論④機能主義・社会的ネットワーク論
第 8 回　小括
第 9 回　現代の諸課題①概要（妊娠・出産・家族計画）
第 10 回　現代の諸課題②人工妊娠中絶
第 11 回　現代の諸課題③多様な親子関係（里親・養子等）
第 12 回　現代の諸課題④セクシュアリティとリプロダクション
第 13 回　現代の諸課題についての討議①
第 14 回　同②
第 15 回　総括

●評価方法

出席状況 50%、授業時の発言等の積極性 50%によって評価する。

●受講生へのコメント

下記文献①～④のいずれか一冊、および⑤を事前に読んでおくことを期待する。他の参考文献については、履修生が確定してから別途周知する。

●参考文献・教材

①岩間暁子・大和礼子・田間泰子『問いからはじめる家族社会学』有斐閣、2015。
②宮本みち子・岩上真珠編『リスク社会のライフデザイン』放送大学教育振興会、2014。
③岩上真珠『ライフコースとジェンダーで読む家族』第 3 版、有斐閣、2013。
④落合恵美子『21 世紀家族へ』改訂版、有斐閣、2004。
⑤千田有紀他『ジェンダー論をつかむ』有斐閣、2013。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBSOC3217	開講期	単位数	標準履修年次
107	社会調査法 Methods of Social Research			後火 2	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 川野 英二 准教授		

●科目の主題

社会調査によって資料やデータを収集し、分析しうる形にまで整理していく具体的な方法について学習する。

●到達目標

調査目的と調査方法、調査方法の決め方、調査設計と企画、仮説構成、サンプリングの方法、調査票の作成・質問文の作り方、調査の実施方法、調査データの整理などについて解説し、「いい加減」な調査をおこなったり「いい加減」な調査のデータにだまされたりしないようになることが本講義の目標である。

●授業内容・授業計画

授業は教科書にもとづきすすめ、補足的な内容を説明する。この授業のなかで自分の研究テーマ・研究計画を具体的に考える。

第 1 回　社会調査の意義
第 2 回　社会調査の歴史
第 3 回　社会調査の目的と方法
第 4 回　調査方法の決め方
第 5 回　調査の設計と企画
第 6 回　仮説の構築
第 7 回　量的調査の意義
第 8 回　量的調査の方法（1）：サンプリング
第 9 回　量的調査の方法（2）：調査票の作成
第 10 回　量的調査の方法（3）：調査票の配布と回収
第 11 回　量的調査の方法（4）：データの整理
第 12 回　質的調査の意義

第 13 回　質的調査の方法と注意点
第 14 回　質的データの取り扱い
第 15 回　まとめ

●評価方法
平常点・期末試験
●受講生へのコメント
本講は、社会調査士資格認定 B 科目である。社会学コース生は、必ず前期開講の「社会学研究法Ⅰ」と後期開講の「社会調査法」を通年で履修すること。
教科書は必ず購入すること。
参考書はこの授業にかぎらず調査士資格を希望する者は必ず購入すること。
●参考文献・教材
【教科書】
轟亮ほか『入門・社会調査法―2 ステップで基礎から学ぶ［第 2 版］』法律文化社、2013 年
【参考書】
佐藤郁哉『社会調査の考え方　上』東京大学出版会、2015 年
篠原清夫ほか『社会調査の基礎』弘文堂、2010 年

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBPSY3201	開講期	単位数	標準履修年次
108	**心理学概論Ⅰ** General Psychology Ⅰ			前木 2	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 池上 知子 教授		

●科目の主題
近年、心理学は著しい発展を遂げ、研究の領域も大きな広がりを示している。本授業では、心理学発展の背景にある時代精神、心理学の対象、方法などの歴史的変遷を知ることにより、心理学の全般的理解を促し、今後の方向やあるべき姿を考える。
●到達目標
主として心理学コースの学生が心理学の全体像を把握し、心理学の各専門分野を学ぶための基礎知識を習得できるようにする。
●授業内容・授業計画
20 世紀初頭から現代に至る心理学の主要な潮流とその成果を学ぶ。すなわち、フロイトによって創設された精神分析学、アメリカにおける行動主義、及びドイツに生まれたゲシュタルト心理学について、それぞれの分野における現在の研究課題と関連づけながら概説する。授業計画はおよそ以下の通りとなる。
第 1 回　心理学とは何か―科学と常識―
第 2 回　心理学の方法論―科学としての心理学―
第 3 回　ヴントの心理学―実験心理学の誕生―
第 4 回　精神物理測定学―主観と客観―
第 5 回　精神分析学の誕生
第 6 回　精神分析学の展開
第 7 回　精神分析学の功罪―多重人格障害の治療をめぐって―
第 8 回　心理査定と心理療法
第 9 回　行動主義心理学とは―パブロフの犬―
第 10 回　行動主義心理学―ワトソンによる恐怖条件づけ実験―
第 11 回　行動主義心理学の展開―スキナーボックス―
第 12 回　行動主義心理学の功罪―兵士はいかに戦わされてきたか―
第 13 回　行動主義を超えて―試行錯誤か直観か―
第 14 回　ゲシュタルト心理学とは
第 15 回　認知主義の台頭―認知革命―
●評価方法
主として学期末に行う試験の成績によって評価する。
定期試験（100%）
●受講生へのコメント
心理学の研究方法への理解を深めるため、授業時間を利用してさまざまな質問紙調査への協力を依頼したり、

授業時間外に行われる実験への参加を要請することがある。受講生は積極的に参加してほしい。

●参考文献・教材

大山正（著）(2010)『心理学史―現代心理学の生い立ち―』サイエンス社
北尾倫彦他（著）(1997)『グラフィック心理学』サイエンス社
無藤隆他（著）(2004)『心理学』有斐閣

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBPSY3202	開講期	単位数	標準履修年次
109	**心理学概論Ⅱ** General Psychology Ⅱ			後木 2	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 池上 知子 教授		

●科目の主題

本授業では、心理学概論Ⅰに続いて、心理学の対象、方法などの歴史的変遷を追い、現代心理学の源流を知ることにより、心理学全般への理解を促し、今後の方向やあるべき姿を考える。

●到達目標

主として心理学コースの学生が心理学の全体像を把握し、心理学の各専門分野を学ぶための基礎知識を習得できるようにする。

●授業内容・授業計画

20 世紀に独自の発展を遂げた認知心理学、社会心理学、性格心理学、発達心理学の各分野の成立と展開について概説する。また、脳研究及び動物研究と心理学の関係に触れながら、心の起源について考える。授業計画はおよそ以下の通りとなる。

第 1 回　心とは何か
第 2 回　認知心理学―知覚研究の展開―
第 3 回　認知心理学―記憶研究の展開―
第 4 回　認知心理学―推論と判断－
第 5 回　認知心理学―社会的認知研究の登場―
第 6 回　社会心理学の源流―状況の力―
第 7 回　社会心理学の進展
第 8 回　社会心理学の最近の動向―ミクロとマクロ―
第 9 回　個人差の心理学―性格の個人差―
第 10 回　個人差の心理学―知能の個人差―
第 11 回　発達心理学―性格形成―
第 12 回　発達心理学―知能の発達―
第 13 回　心理学と脳研究の源流
第 14 回　心理学と脳研究の現在
第 15 回　動物研究と心理学―進化心理学の源流―

●評価方法

主として学期末に行う試験の成績により評価する。
定期試験（100%）

●受講生へのコメント

心理学の研究方法への理解を深めるため、授業時間を利用してさまざまな質問紙調査への協力を依頼したり、授業時間外に行われる実験への参加を要請することもある。受講生は積極的に参加してほしい。

●参考文献・教材

大山正（著）(2010)『心理学史―現代心理学の生い立ち―』サイエンス社
北尾倫彦他（著）(1997)『グラフィック心理学』サイエンス社
無藤隆他（著）(2004)『心理学』有斐閣

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LBPSY3203	開講期	単位数	標準履修年次
110	**心理学研究法 I** Research methods in Psychology I			前月 3	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 山 祐嗣 教授		

●科目の主題

心理学の研究を行う際に必要になる実験・調査の計画やデータの解析の方法、すなわち心理学における方法論の問題を概説する。

●到達目標

研究論文を読んで問題点を見つけ、その問題点を解決できるような実験・調査能力の基礎となる知識やスキルを習得することを目標とする。実験・調査を遂行するための計画法と、得られたデータから何がいえるかという科学的な思考能力が求められる。

●授業内容・授業計画

講義は概ね以下の内容で行われる。

第 1 回　科学的・実証的方法とは：心理学実験
第 2 回　科学的・実証的方法とは：調査法
第 3 回　実験と観察
第 4 回　実証の手続き：心理学実験
第 5 回　実証の手続き：調査法
第 6 回　調査の設計：サンプリングなど
第 7 回　調査の設計における独立変数の操作
第 8 回　実験計画における独立変数の操作
第 9 回　実験における従属変数と測定
第 10 回　調査法における従属変数と測定
第 11 回　質問紙による調査：調査票の構成と質問文の作り方（1）
第 12 回　質問紙による調査：調査票の構成と質問文の作り方（2）
第 13 回　実験室実験の研究法上の問題
第 14 回　調査の研究法上の問題
第 15 回　心理学に特有の研究法上の問題

●評価方法

期末試験の成績による。

●受講生へのコメント

自分の研究テーマについての論文を読んだとき、独立変数の操作や従属変数の測定法などに留意する。

●参考文献・教材

教科書：高野陽太郎・岡　隆（編）『心理学研究法』有斐閣　2004
参考書：伊藤正人『心理学研究法入門：行動研究のための研究計画とデータ解析』昭和堂 2006
森　敏昭・吉田寿夫（編著）『心理学のためのデータ解析テクニカルブック』北大路書房 1990

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LBPSY3204	開講期	単位数	標準履修年次
111	**心理学研究法 II** Research methods in Psychology II			後月 3	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 山 祐嗣 教授		

●科目の主題

心理学研究法 I で習得した知識・スキルをさらに発展させるべく、心理学の研究を行う際に必要になる実験・調査の計画やデータの解析の方法を概説する。

●到達目標

研究論文を読んで問題点を見つけ、その問題点を解決できるような実験・調査能力の基礎となる知識やスキルを習得することを目標とする。実験・調査を遂行するための計画法と、得られたデータから何がいえるかという科学的な思考能力が求められる。

●授業内容・授業計画

講義は概ね以下の内容で行われる。

第 1 回　はじめに（既存の知識の確認）
第 2 回　調査法（1）：調査票の構成と質問文の作り方
第 3 回　調査法（2）：調査票の配布と回収
第 4 回　調査法（3）：実施の方法など
第 5 回　観察法（1）：実施の方法など
第 6 回　観察法（2）：実施の方法など
第 7 回　検査法：実施の方法など
第 8 回　研究の実施：実験室実験
第 9 回　研究の実施：調査法
第 10 回　調査データの整理および統計的分析（1）
第 11 回　調査データの整理および統計的分析（2）
第 12 回　調査データの整理および統計的分析（3）
第 13 回　実験データの統計的分析
第 14 回　実験データ・調査データの結果の解釈
第 15 回　実験的研究報告・調査報告

●評価方法

仮想の実験データについてのレポートによって評価する。

●受講生へのコメント

自分の研究テーマについての論文を読んだとき、研究の方法論、データ分析の方法などに留意する。

●参考文献・教材

教科書：高野陽太郎・岡　隆（編）『心理学研究法』有斐閣 2004
参考書：伊藤正人『心理学研究法入門：行動研究のための研究計画とデータ解析』昭和堂 2006
森　敏昭・吉田寿夫（編著）『心理学のためのデータ解析テクニカルブック』北大路書房 1990

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBPSY3205	開講期	単位数	標準履修年次
112	**心理学実験演習 I** Laboratory Work in Psychology I			前水 3	2 単位	2 年
	旧科目名			担当教員名 池上 知子 教授／山 祐嗣 教授／ 佐伯 大輔 准教授／中川 紗江 非常勤講師		

●科目の主題

心理学の代表的な実験・調査をとりあげ、それらの実験方法・調査方法、データ獲得の手順、結果の統計的な処理方法などを学ぶ。

●到達目標

心理学の基礎的な研究法を理解し習得すると同時に、実験を通じて科学的なものの考え方を身につける。

●授業内容・授業計画

実験演習ⅠとⅡを通して約 10 種の実験課題を行い、原則として毎回レポートの提出を義務づける。すべての実験についての出席とレポート提出を単位取得の最低要件とする。実験演習ⅠとⅡは時限をまたぎ連続して行うので、同じ学年度に履修すること。

第 1 回　オリエンテーション
第 2 回　実験（1）
第 3 回　実験（2）
第 4 回　実験（3）
第 5 回　実験（4）
第 6 回　実験（5）
第 7 回　実験（6）
第 8 回　実験（7）
第 9 回　実験（8）
第 10 回　実験（9）
第 11 回　実験（10）
第 12 回　実験（11）
第 13 回　実験（12）
第 14 回　実験（13）
第 15 回　レポート講評

●評価方法
実験課題ごとに課されるレポートを基準に評価を行う。未提出のレポートがある場合は、評価の対象外となるので注意すること。
●受講生へのコメント
レポートや論文の執筆技術は、執筆を繰り返すことによって向上する。この演習を通じて、心理学における研究手法のみでなく、これらの技術についてもしっかりと習得し、実験演習Ⅲ・Ⅳや卒業論文に生かしてもらいたい。
●参考文献・教材
テキスト　心理学実験指導研究会編『実験とテスト＝心理学の基礎』実習編、解説編　培風館
参考書　課題ごとに随時紹介する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBPSY3206	開講期	単位数	標準履修年次
113	心理学実験演習Ⅱ Laboratory Work in Psychology Ⅱ			前水 4	2 単位	2 年
	旧科目名			担当教員名 池上 知子 教授／山 祐嗣 教授／ 佐伯 大輔 准教授／中川 紗江 非常勤講師		

●科目の主題
心理学の代表的な実験・調査をとりあげ、それらの実験方法・調査方法、データ獲得の手順、結果の統計的な処理方法などを学ぶ。
●到達目標
心理学の基礎的な研究法を理解し習得すると同時に、実験を通じて科学的なものの考え方を身につける。
●授業内容・授業計画
実験演習ⅠとⅡを通して約 10 種の実験課題を行い、原則として毎回レポートの提出を義務づける。すべての実験についての出席とレポート提出を単位取得の最低要件とする。実験演習ⅠとⅡは時限をまたぎ連続して行うので、同じ学年度に履修すること。

第 1 回　オリエンテーション
第 2 回　実験（1）
第 3 回　実験（2）
第 4 回　実験（3）
第 5 回　実験（4）
第 6 回　実験（5）
第 7 回　実験（6）
第 8 回　実験（7）
第 9 回　実験（8）
第 10 回　実験（9）
第 11 回　実験（10）
第 12 回　実験（11）
第 13 回　実験（12）
第 14 回　実験（13）
第 15 回　レポート講評

●評価方法
実験課題ごとに課されるレポートを基準に評価を行う。未提出のレポートがある場合は、評価の対象外となるので注意すること。
●受講生へのコメント
レポートや論文の執筆技術は、執筆を繰り返すことによって向上する。この演習を通じて、心理学における研究手法のみでなく、これらの技術についてもしっかりと習得し、実験演習Ⅲ・Ⅳや卒業論文に生かしてもらいたい。
●参考文献・教材
テキスト　心理学実験指導研究会編『実験とテスト＝心理学の基礎』実習編、解説編　培風館
参考書　課題ごとに随時紹介する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBPSY3301	開講期	単位数	標準履修年次
114	**心理学実験演習Ⅲ** Laboratory Work in Psychology Ⅲ			前水 2	2 単位	3 年
	旧科目名			担当教員名 池上 知子 教授／山 祐嗣 教授／ 川邉 光一 准教授／佐伯 大輔 准教授		

●科目の主題

卒業論文作成の前段階として、各自で設定したテーマに基づいた研究を計画・実施し、その成果を論文（レポート）としてまとめるまでの一連の過程を実践する。この実験演習は、「心理学実験演習Ⅰ・Ⅱ」並びに「心理学研究法Ⅰ・Ⅱ」で習得した基礎的事項や研究方法に関する知識を前提とする。

●到達目標

心理学の論文を作成するために必要な文献の検索、実験・調査の計画、実験・調査の実施、データ解析など、実験心理学的な思考法と技能の習得を目標とする。

各自の卒業論文に関連するテーマを取り上げることが望ましいが、卒業論文と異なるテーマでもよい。

●授業内容・授業計画

各自が研究テーマを決め、そのテーマに関連する文献（主に英語論文）を検索し、その中から少なくとも 3 編以上読み、その内容をレジュメにまとめて授業時に発表する。授業では、指導教員からのコメントや受講者との議論を通して、各自の研究テーマに関する研究計画（目的、方法、解析法などをまとめたもの）を立てる。この研究計画にもとづいて、実験・調査を実施し、得られたデータに適切な解析を行い、研究目的に対する結論を導出する。最後に、これらをレポートにまとめ提出する。

第 1 回　ガイダンス
第 2 回　文献検索
第 3 回　文献発表（1）
第 4 回　文献発表（2）
第 5 回　文献発表（3）
第 6 回　文献発表（4）
第 7 回　文献発表（5）
第 8 回　研究計画発表
第 9 回　実験・調査（1）
第 10 回　実験・調査（2）
第 11 回　実験・調査（3）
第 12 回　実験・調査（4）
第 13 回　実験・調査（5）
第 14 回　研究結果報告
第 15 回　レポート提出

●評価方法

各自が作成した研究レポートの評価による。

●受講生へのコメント

英語論文を読むことは最初は難しく感じるかもしれないが、いくつか読むうちに、容易に読めるようになる。また、実験や調査を行うことは、かなりの時間と労力を必要とするが、こうした努力を通して、実証科学としての心理学のものの見方を体得することができるのである。

最初の授業時に各自の希望する研究テーマに応じて担当指導教員を決定するため、予めテーマを決めておいてほしい。

●参考文献・教材

指導教員が適宜指示する。

掲載№.	授業科目名	科目 NO.	LBPSY3302	開講期	単位数	標準履修年次
115	**心理学実験演習Ⅳ** Laboratory Work in Psychology Ⅳ			後水 2	2 単位	3 年
	旧科目名			担当教員名 池上 知子 教授／山 祐嗣 教授／ 川邉 光一 准教授／佐伯 大輔 准教授		

●科目の主題

卒業論文作成の前段階として、各自で設定したテーマに基づいた研究を計画、実施し、その成果を論文（レポート）としてまとめるまでの一連の過程を実践する。この実験演習は、心理学実験演習Ⅰ、ⅡおよびⅢで習得した基礎的事項、研究方法に関する知識を前提とする。

●到達目標

心理学実験演習Ⅲに引き続き、心理学の論文を作成するために必要な文献の検索、実験・調査の計画、実験・調査の実施、データ解析など、実験心理学的な思考法と技能の習得を目標とする。

授業の進行方法は心理学実験演習Ⅲと全く同様であるが、心理学実験演習Ⅳで設定する研究テーマは、卒業論文に関連するテーマであることが望ましい。

●授業内容・授業計画

各自が研究テーマを決め、その研究テーマに関連する文献（主に英語論文）を検索し、その中から少なくとも 3 編以上読み、その内容をレジュメにまとめて授業時に発表する。授業では、指導教員からのコメントや受講者との議論を通して、各自の研究テーマに関する研究計画（目的、方法、解析法などをまとめたもの）を立てる。この研究計画にもとづいて、実験・調査を実施し、得られたデータに適切な解析を行い、研究目的に対する結論を導出する。最後に、これらをレポートにまとめ提出する。

第 1 回　ガイダンス
第 2 回　文献検索
第 3 回　文献発表（1）
第 4 回　文献発表（2）
第 5 回　文献発表（3）
第 6 回　文献発表（4）
第 7 回　文献発表（5）
第 8 回　研究計画発表
第 9 回　実験・調査（1）
第 10 回　実験・調査（2）
第 11 回　実験・調査（3）
第 12 回　実験・調査（4）
第 13 回　実験・調査（5）
第 14 回　研究結果報告
第 15 回　レポート提出

●評価方法

各自が作成した研究レポートの評価による。

●受講生へのコメント

英語論文を読むことは最初は難しく感じるかもしれないが、いくつか読むうちに、容易に読めるようになる。また、実験や調査を行うことは、かなりの時間と労力を必要とするが、こうした努力を通して、実証科学としての心理学のものの見方を体得することができるのである。

最初の授業時に各自の希望する研究テーマに応じて担当指導教員を決定するため、予めテーマを決めておいてほしい。

●参考文献・教材

指導教員が適宜指示する。

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LBPSY3303	開講期	単位数	標準履修年次
116	人間行動学データ解析法Ⅲ Data Analysis in Human Behavioral Science Ⅲ			前木 2	2 単位	3・4 年
	旧科目名			担当教員名 田端 拓哉 非常勤講師		

●科目の主題

人間行動学データ解析法Ⅱで学んだことを基礎として、より複雑な実験デザインに対応した統計分析（分散分析）、および、複数の変数間の複雑な関係を明らかにするための統計分析（重回帰分析と因子分析）を学習する。具体的には、1 要因・2 要因分散分析、重回帰分析、因子分析について基本的な考え方と実際の適用の仕方を習得する。

●到達目標

分散分析、重回帰分析、因子分析の基本的な考え方を理解し、コンピューターを用いて実際に分析ができ、分析結果を適切に記述できるようになることが目標である。

●授業内容・授業計画

講義は概ね以下の内容で行われる。

第 1 回　統計的仮説検定の原理（復習）
第 2 回　分散分析とは
第 3 回　1 要因分散分析（対応がない場合）の実践
第 4 回　1 要因分散分析（対応がある場合）の実践
第 5 回　2 要因分散分析（2 要因とも対応がない場合）の実践
第 6 回　2 要因分散分析（混合要因の場合）の実践
第 7 回　2 要因分散分析（2 要因とも対応がある場合）の実践
第 8 回　分散分析のまとめ
第 9 回　相関係数を利用した分析とその実践
第 10 回　重回帰分析とは
第 11 回　重回帰分析の実践①
第 12 回　重回帰分析の実践②
第 13 回　因子分析とは
第 14 回　因子分析の実践
第 15 回　総括とレポート課題の提出

●評価方法

各分析の実践のための練習課題への取り組みと学期末のレポートによって評価を行う。

●受講生へのコメント

統計に関する知識は研究を進める上で必要不可欠なので、しっかり身につけてほしい。

●参考文献・教材

参考文献

田中敏・山際勇一郎『新訂ユーザーのための教育・心理統計と実験計画法』教育出版
森敏昭・吉田寿夫編著『心理学のためのデータ解析テクニカルブック』北大路書房

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LBPSY3207	開講期	単位数	標準履修年次
117	生理心理学特論 Special Studies in Physiological Psychology			後火 4	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 川邉 光一 准教授		

●科目の主題

人間や動物の精神機能および、その結果として表出される行動は、微視的レベルで見ると脳を中心とした神経系の活動にその起源があるといえるであろう。 生理心理学、行動神経科学といわれる学問領域は、精神活動や行動と、脳・神経系を中心とした身体の生理的機構との間の関係について研究する学問である。ここでは、生理心理学における必須知識である脳・神経系に関する生物学的知見についての講義の後に、脳・神経系と精神機能との関係についての講義を行う。

●到達目標

本講義では、まず神経系の構造とその情報伝達の仕組み、生理心理学・行動神経科学における研究手法につ

いての基本的知識を習得してもらうことを第一の目的とする。また、学習・記憶を中心とした高次精神機能と中枢神経系の関係について概説することにより、精神・行動と脳・神経系の関係についての理解を深めてもらうことを第二の目的とする。特に、学習・記憶やストレスといった経験が、脳内の神経細胞にどのような変化をもたらすかということについて議論を進めていきたい。

●授業内容・授業計画

本講義の主たる目標は以下の 2 点である。(1) 脳・神経系の構造・機能とその情報伝達の仕組みについての基本的知識を習得する。(2) 学習・記憶を中心とした高次精神機能と中枢神経系の関係についての理解を深める。

第 1 回　オリエンテーション
第 2 回　脳の構造と機能 (1)
第 3 回　脳の構造と機能 (2)
第 4 回　神経系を構成する細胞とその機能
第 5 回　神経系における情報伝達機構 (1) : 神経細胞内の情報伝達
第 6 回　神経系における情報伝達機構 (2) : シナプスの情報伝達
第 7 回　神経系における情報伝達機構 (3) : 神経伝達物質と受容体
第 8 回　受容体薬理学の基礎
第 9 回　学習・記憶の脳内機構 (1) : 記憶と脳
第 10 回　学習・記憶の脳内機構 (2) : 海馬と記憶
第 11 回　学習・記憶の脳内機構 (3) : 神経細胞・シナプスの可塑的性質
第 12 回　学習・記憶の脳内機構 (4) : 長期増強と長期抑圧
第 13 回　ストレスと脳 (1) : ストレス反応とは
第 14 回　ストレスと脳 (2) : ストレス反応の生理的機序
第 15 回　まとめ

●評価方法

学期末に行う試験の成績を基本とするが、これに出席点も加味する。

●受講生へのコメント

この講義の前半は脳や神経系の生物学的知識の概説となる。ここでは専門的な用語が頻出するが、これらは生理心理学において必須の知識となるので努めて習得してもらいたい。また、心理学の研究方法への理解を深めてもらうため、授業時間内に質問紙調査に協力を求めたり、授業時間外に実験への参加協力を要請する場合もある。受講者は、これらに積極的に参加、協力してほしい。

●参考文献・教材

参考書
カールソン , N.R. (泰羅雅登・中村克樹　監訳)『神経科学テキスト―脳と行動』(第 4 版) 丸善
ピネル , J.P.J. (佐藤敬ら　訳)『バイオサイコロジー : 脳―心と行動の神経科学』 西村書店

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBPSY3208	開講期	単位数	標準履修年次
118	**認知心理学特論** Special Studies in Cognitive Psychology			前火 3	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 山 祐嗣 教授		

●科目の主題

認知心理学の、知覚や記憶・思考についての知識を獲得することと、実験データから何がいえるのか、実験データをどのように説明するのかといった、科学的な思考態度を養うことを目的とする。

●到達目標

認知心理学は、人間を、情報処理を行なう能動性をもった認識主体とみなして研究する学問領域である。本講では、認識の基本的な領域である知覚や記憶・思考について、ときには簡単なデモ実験などを行いながら理解を深める。

●授業内容・授業計画

講義は概ね以下の内容で行われる。

第 1 回　認知心理学の誕生まで
第 2 回　認知心理学における進化心理学
第 3 回　知覚
第 4 回　注意
第 5 回　意識

第 6 回　記憶（1）
第 7 回　記憶（2）
第 8 回　記憶（3）
第 9 回　思考（1）
第 10 回　思考（2）
第 11 回　思考（3）
第 12 回　思考（4）
第 13 回　合理性規範と語用論
第 14 回　文化の影響（1）
第 15 回　文化の影響（2）

●評価方法
学期末に行う最終試験によって評価する。
●受講生へのコメント
認知心理学の研究法についての理解を深めるために、授業に関連する領域の心理学実験・調査を行うことがある。実際に体験してみてほしい。
●参考文献・教材
教科書
仲　真紀子（編著）『いちばんはじめに読む心理学の本 4 認知心理学』ミネルヴァ書房　2010
参考書
山　祐嗣『思考・進化・文化－日本人の思考力』ナカニシヤ書店　2003
山　祐嗣『日本人は論理的に考えることが本当に苦手なのか』2015

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBPSY3210	開講期	単位数	標準履修年次
119	**発達心理学特論** Special Studies in Developmental Psychology			前水 1	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 佐伯 大輔 准教授		

●科目の主題
心理学における「発達」とは、出生から死に至るまでの心身の系統的変化を指す。発達心理学では、発達現象を説明するために、これまでに多くの理論が提案され、実験・調査による理論の検証が試みられてきた。この授業では、ヒトの発達に関する研究から主なものをいくつか選び概説する。さらに、ヒトや動物の行動を幅広く説明する行動分析学の立場から、発達現象をどのように分析できるかを紹介する。
●到達目標
授業で紹介される研究内容（理論の内容、実験・調査の内容）について理解し、説明ができるようになることを到達目標とする。
●授業内容・授業計画
主に以下の章立てに沿って、講義形式で授業を行う。
第 1 回　発達とは
第 2 回　発達研究の歴史
第 3 回　遺伝と環境
第 4 回　発達の研究方法
第 5 回　発達段階と発達の理論（1）
第 6 回　発達段階と発達の理論（2）
第 7 回　発達段階と発達の理論（3）
第 8 回　発達の概要（1）
第 9 回　発達の概要（2）
第 10 回　発達の概要（3）
第 11 回　行動分析学から見た発達（1）
第 12 回　行動分析学から見た発達（2）
第 13 回　行動分析学から見た発達（3）
第 14 回　行動分析学から見た発達（4）
第 15 回　まとめ

●評価方法
平常点と期末試験により評価する。
●受講生へのコメント
心理学の研究方法への理解を深めてもらうため、授業終了後に質問紙調査への協力を求めたり、授業時間外に実験への参加協力を要請する場合もある。受講者は、これらに積極的に参加、協力してほしい。
●参考文献・教材
授業内で適宜紹介する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBPSY3214	開講期	単位数	標準履修年次
120	文化心理学特論 Special Studies in Cultural Psychology			後火 2	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 池上 知子 教授		

●科目の主題
世界にはさまざまな国や地域があるが、それぞれの国や地域には固有の文化が存在し、そこに暮らす人々のものの考え方や行動は、その文化に大きく規定される。たとえば、欧米人は個の確立に重きをおくが、日本人は個を主張するより周囲との調和を重んじるとしばしば言われる。本授業では、このよう違いは本当に存在するのか、もし存在するのなら、そのような違いがなぜ生まれるのかを文化心理学の研究知見に基づきながら講じ、文化と人間の関係について考察する。
●到達目標
主として心理学コースの学生が、文化心理学の分野で卒業論文を作成するために必要な専門的知識や教養を習得できるようにする。
●授業内容・授業計画
文化心理学の主要なトピックを精選して講述する。
第 1 回　文化とは何か　－文化心理学の課題－
第 2 回　しつけと文化　－コミュニケーションスタイル－
第 3 回　教育と文化　－隠れたカリキュラム－
第 4 回　文化と自己　－相互独立的自己観と相互協調的自己観－
第 5 回　文化と動機づけ　－意欲の構造－
第 6 回　文化と感情　－幸福感と道徳感情－
第 7 回　文化と思考　－論理的思考と情緒的思考－
第 8 回　文化と認知　－分析的知覚と包括的知覚－
第 9 回　文化と集団　－個人主義と集団主義－
第 10 回　文化と集団　－関係的集団主義－
第 11 回　文化の伝達　－文化的ナラティブ－
第 12 回　文化の伝達　－文化的再生産－
第 13 回　文化間摩擦　－異文化受容－
第 14 回　文化間摩擦　－異文化適応－
第 15 回　文化とアイデンティティ　－多文化共生－
●評価方法
定期試験の成績を基本として評価する。
●受講生へのコメント
心理学の研究方法への理解を深めるために、授業時間を利用して種々の質問紙調査への協力を依頼したり、授業時間外に行われる心理学実験への参加を要請することがある。受講生は積極的に参加、協力してほしい。
●参考文献・教材
金児暁嗣・結城雅樹（編集（2005）『文化行動の社会心理学　－文化を生きる人間のこころと行動－』 北大路書房

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBPSY3304	開講期	単位数	標準履修年次
121	**心理学特講 I** Special Topics in Psychology I			前集中	2 単位	3・4 年
	旧科目名			担当教員名 東山 篤規 非常勤講師		

●科目の主題

『体性感覚の心理学』

体性感覚とは，皮膚感覚（触覚，温度感覚，痛覚）と自己受容感覚（体の位置，運動，力の感覚）を併せたものをさします。ひとことで言えば「体の感覚」です。本講義では，この体性感覚がもつ機能について精神物理学 Psychophysics の知見をもとにお話しします。

●到達目標

われわれの知識の大半は，感覚を通して外界からもたらされます。本講義では，体性感覚という素材を通して，1）精神物理学の方法を学び，2）環境に適応する感覚的機能の多様な様式について学ぶことを目標とします。

●授業内容・授業計画

最初に「精神物理学的測定法」について述べます。それに続いて，受動的触覚 touch の研究を紹介し，さらに能動的触覚 haptics の研究について紹介します。最後に，体性感覚と他の感覚（主に視覚）との相互作用について述べ，感覚諸機能が統合的にはたらいているようすを描出します。

第 1 回　精神物理学的方法　閾の概念
第 2 回　精神物理学的方法　閾の測定
第 3 回　精神物理学的方法　スティーブンスの直接法（1）
第 4 回　精神物理学的方法　スティーブンスの直接法（2）
第 5 回　触の感覚
第 6 回　振動感覚
第 7 回　触覚の順応
第 8 回　加重と抑制
第 9 回　触材の次元
第 10 回　触覚的形の知覚
第 11 回　位置・間隔・運動の知覚
第 12 回　体性感覚と視覚の相互作用　シャルパンティエの錯覚
第 13 回　体性感覚と視覚の相互作用　股のぞきの研究
第 14 回　体性感覚と視覚の相互作用　垂直水平の錯視
第 15 回　体性感覚と視覚の相互作用　視覚的垂直

●評価方法

講義への出席とレポートの提出を総合的に勘案して評価します。

●受講生へのコメント

講義を受講されるにあたって，予備的な知識は必要ありません。好奇心が強い人，議論が好きな人，心理学を科学的に学んでみたいと思われる人，文系理系にとらわれない人には，きっと興味をもっていただけると思います。

●参考文献・教材

教科書
東山篤規（著）『体と手がつくる知覚世界』勁草書房，2012.
授業が始まる前に，この書籍を入手しておいてほしい。
参考文献
東山篤規ほか（著）『触覚と痛み』おうふう
カッツ，D（著）/ 東山篤規・岩切絹代（訳）『触覚の世界』新曜社

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBEDU3201	開講期	単位数	標準履修年次
122	**教育学概論 I** Introduction to Education I			後水 5	2 単位	2・3 年
	旧科目名			担当教員名 柏木 敦 教授		

●科目の主題

「教育」「教育学」に関わる基礎的な知識を、集団討議とその観察によって主体的に習得することを目的とする。

●到達目標

目標（到達目標）：受講者同士の意見交換や議論およびそれらの観察を通じて、「教育」「教育学」を複眼的に捉え、また理解したり、議論を解釈したり整理したりする力を身につけることを目標としたい。

●授業内容・授業計画

以下に掲げる基本的な論点について、順に説明する。

第 1 回　ガイダンス
第 2 回　概説（1）人間の教育～子供の発見
第 3 回　概説（2）学校と教育～思想と体制
第 4 回　人間の教育（1）
第 5 回　人間の教育（2）
第 6 回　伝統と革新（1）
第 7 回　伝統と革新（2）
第 8 回　子供の発見（1）
第 9 回　子供の発見（2）
第 10 回　学校と教育（1）
第 11 回　学校と教育（2）
第 12 回　教育の科学へ（1）
第 13 回　教育の科学へ（2）
第 14 回　思想と体制（1）
第 15 回　思想と体制（2）

●評価方法

受講生各自の発表、レポートの総合成績によるが、出席率も加味する。自主的・主体的な発言がない場合は、出席にカウントしない。

●受講生へのコメント

講義形式の授業であるが、受講生が積極的に参加できる機会を設ける。講義にあたっては、次回講義の内容に該当する教材を指示するので、受講者あらかじめ一度は目を通してから出席すること。

●参考文献・教材

村井実『原典による 教育学の歩み』講談社、1974 年

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBEDU3202	開講期	単位数	標準履修年次
123	教育学概論Ⅱ Introduction to Education Ⅱ			前火 2	2 単位	2・3 年
	旧科目名			担当教員名 滝沢 潤 非常勤講師		

●科目の主題

教育は、個人の人間形成に大きな役割を果たしているだけではなく、文化的、政治的、経済的要請を反映した社会制度の一つとして社会の形成と維持、発展に欠くことのできない重要な機能を果たしている。本講義では、こうした社会制度としての教育、教育の社会的機能の観点から、現代の教育を理解するうえで重要なトピックを取り上げ、教育学の対象や成果を学ぶとともに、社会制度としての教育や教育の社会的機能について考える。

●到達目標

・教育の社会的機能を多面的、複眼的に理解する。
・社会制度としての教育の重要性を多面的、複眼的に理解する。

●授業内容・授業計画

本講義では、これまでの教育学の成果を踏まえ、以下のトピックの考察を通じて、社会制度としての教育、教育の社会的機能について考える。

第 1 回　イントロダクション　社会階層と教育（1）
第 2 回　社会階層と教育（2）
第 3 回　社会階層と教育（3）
第 4 回　社会階層と教育（4）
第 5 回　ジェンターと教育（1）
第 6 回　ジェンターと教育（2）
第 7 回　ジェンターと教育（3）
第 8 回　家庭と子育て／就学前教育・保育（1）

第 9 回　家庭と子育て／就学前教育・保育（2）
第 10 回　家庭と子育て／就学前教育・保育（3）
第 11 回　家庭と子育て／就学前教育・保育（4）
第 12 回　社会の多文化・多言語化と教育（1）
第 13 回　社会の多文化・多言語化と教育（2）
第 14 回　社会の多文化・多言語化と教育（3）
第 15 回　まとめ

●評価方法
・授業のなかで取り上げたトピックに関連する最終レポート（60%）
・授業内レポート（40%）

●受講生へのコメント
日頃から現代の教育問題にもち、講義を踏まえてさらに教育について深く多面的に考察できるようになることを期待する。

●参考文献・教材
参考文献は、適宜紹介する。
必要に応じて各種資料を配布する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBEDU3203	開講期	単位数	標準履修年次
124	教育方法学Ⅰ Methodsology of Education Ⅰ			前火 4	2 単位	2・3 年
	旧科目名			担当教員名 森 久佳 准教授		

●科目の主題
本授業の目的は、教育方法学上の主要なテーマである「学び（学習）」や「教える（教授）」、また、「授業」や「カリキュラム（教育課程）」、「教師」などに関する専門的な知見を習得することである。

●到達目標
(1)「教育方法学」に関する基本的知識と課題について理解する。
(2)「学び（学習）」や「教える（教授）」、「授業」や「カリキュラム（教育課程）」、「教師」といったテーマに関する専門的な知見を修得する。

●授業内容・授業計画
講義だけでなくグループワーク等も積極的に導入することで、以下のテーマを扱う。
第 1 回　オリエンテーション（授業の進め方などについての説明）
第 2 回　「教育方法学」の対象と課題
第 3 回　「学ぶ」・「教える」について（Ⅰ）:「学ぶ」－「教える」の関係
第 4 回　「学ぶ」・「教える」について（Ⅱ）:「教える」ことの難しさをめぐって
第 5 回　「学校」と「授業」・「カリキュラム」（Ⅰ）: 近代学校の歴史と課題
第 6 回　「学校」と「授業」・「カリキュラム」（Ⅱ）:「授業」の成立・定型化の歴史を中心に
第 7 回　「学校」と「授業」・「カリキュラム」（Ⅲ）:「カリキュラム」の概念をめぐって
第 8 回　「学力」と「教育評価」（Ⅰ）:「学力」の概念をめぐって
第 9 回　「学力」と「教育評価」（Ⅱ）: 今日における学力論争を中心に
第 10 回　教科外教育活動について（Ⅰ）: 歴史と分野・方法を中心に
第 11 回　教科外教育活動について（Ⅱ）: 今日的課題をめぐって
第 12 回　教師の力量形成について（Ⅰ）:「教師」の概念をめぐって
第 13 回　教師の力量形成について（Ⅱ）: 専門家としての教師像を中心に
第 14 回　教師の力量形成について（Ⅲ）: 最近の動向と課題を中心に
第 15 回　全体のまとめ

●評価方法
平常点（20%）、小レポート（30%）、レポート（50%）

●受講生へのコメント
学生自身が主体的、自律的に学んでいくことを重視する。
また、グループワーク等も積極的に取り入れる予定である。

●参考文献・教材
＜参考文献＞（下記以外の文献も、授業中に随時紹介する予定）

・臼井嘉一(2010)『教育実践学と教育方法論:カリキュラム・教科指導・学力を教育実践から問い直す』日本標準.
・臼井嘉一監修 (2013)『戦後日本の教育実践』三恵社.
・木原俊行 (2006)『教師が磨き合う「学校研究」: 授業力量の向上をめざして』ぎょうせい.
・佐藤学 (1995)『教育方法学』(岩波テキストブック) 岩波書店.
・田中耕治・鶴田清司・橋本美保・藤村宣之 (2012)『新しい時代の教育方法』(有斐閣アルマ) 有斐閣.
・日本教育方法学会編 (2004)『現代教育方法事典』図書文化社.
・日本教育方法学会編 (2009)『日本の授業研究』(上・下巻) 学文社.
・日本教育方法学会編 (2014)『教育方法学研究ハンドブック』学文社.

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LBEDU3301	開講期	単位数	標準履修年次
125	教育方法学Ⅱ Methodsology of Education Ⅱ			前火 3	2 単位	3 年
	旧科目名			担当教員名 島田 希 准教授		

●科目の主題

学習観の転換や子どもたちの学力実態など、教育方法をめぐる今日的課題をふまえた上で、それらの解決に資する新しい学びのあり方を探究する。様々な教育実践を分析することを通じて、今日求められる新しい学びの意義や課題について、自分なりの考えをまとめることができることを目指す。

●到達目標

①教育方法をめぐる今日的課題について理解する。
②上記①の解決を目指した教育実践について、その特徴・意義・課題を分析することができる。
③上記①②をふまえた上で、今日求められる新しい学びの意義や課題について考察を深める。

●授業内容・授業計画

教育方法をめぐる今日的課題とその解決に資する新しい学びのあり方について、以下のテーマを中心に考察を深めていく。

第 1 回 オリエンテーション
第 2 回 教育方法をめぐる今日的課題①―学習観の転換―
第 3 回 教育方法をめぐる今日的課題②―子どもたちの学力実態―
第 4 回 多様な学習形態の特徴・意義・課題①―一斉学習―
第 5 回 多様な学習形態の特徴・意義・課題②―個別学習―
第 6 回 多様な学習形態の特徴・意義・課題③―協働学習―
第 7 回 特色ある教育実践の分析①
第 8 回 プロジェクトアプローチによる探究的な学習活動①
第 9 回 プロジェクトアプローチによる探究的な学習活動②
第 10 回 特色ある教育実践の分析②
第 11 回 現代的な課題に対応した学習活動①
第 12 回 現代的な課題に対応した学習活動②
第 13 回 特色ある教育実践の分析③
第 14 回 特色ある教育実践の分析④
第 15 回 全体のまとめ

●評価方法

各回における小レポート (30%) と期末レポート (70%) により、総合評価する。

●受講生へのコメント

本科目では、講義に加えて、グループでのディスカッション、実践事例の分析等を行う。それらへの積極的な参加を求める。

●参考文献・教材

授業中に適宜資料を配付する。以下を参考文献とする。

・日本教育方法学会編 (2014)『教育方法学研究ハンドブック』学文社 .
・佐藤学 (2010)『教育の方法』左右社 .

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LBEDU3302	開講期	単位数	標準履修年次
126	**比較・国際教育学** Comparative and International Education			前月 3	2 単位	3 年
	旧科目名			担当教員名 添田 晴雄 准教授		

●科目の主題

諸外国の教育制度や教育文化を比較することにより、日本の教育文化の特質を考察する。とくに今年度は、大学入試制度と中等教育修了試験制度を手がかりに教育文化を比較考察する。

●到達目標

(1) 諸外国の大学入試制度や中等教育修了試験制度と子どもの学習生活への影響について分析する。
(2) 諸外国の大学入試制度や中等教育修了試験制度との比較を通して日本の大学入試制度の教育文化的特徴を考察する。

●授業内容・授業計画

前半では、日本の大学入試制度や中等教育修了試験制度について、複数のグループに分かれて調べ、それを相互に発表しあう。後半では、前半とは別のグループ分けを行い、各グループが 1 国を担当して、その国の教育の概要、大学入試制度や中等教育修了試験制度について発表し、日本との比較を行う。なお、研究対象とする国については、受講者の属性や受講者数等を鑑みて第 1 回または第 2 回の授業中に決定する。

第 1 回 オリエンテーション
第 2 回 研究方法としての「比較」
第 3 回 ワークショップ
第 4 回 日本の大学入試制度 (1) 現状
第 5 回 日本の大学入試制度 (2) 歴史
第 6 回 日本の大学入試制度 (3) 言説と子どもの学習生活への影響
第 7 回 ワークショップ
第 8 回 ワークショップ
第 9 回 フランスの大学入試と国際バカロレア
第 10 回 ドイツの大学入試とアビトゥーア
第 11 回 イギリスの大学入試と General Certificate of Secondary Education
第 12 回 アメリカの大学入試と standard tests と民間学力テスト
第 13 回 国際比較分析を通しての日本の教育文化の特質 (1)
第 14 回 国際比較分析を通しての日本の教育文化の特質 (2)
第 15 回 「大学入学希望者学力評価テスト」と「高校基礎学力テスト」

●評価方法

平常点および期末レポート。

評価観点はつぎのとおり。諸外国の教育実態および言説を文献等で適切に把握できる／諸外国の教育実態および言説を適切に分析できる／諸外国との比較を通して日本の教育文化の特質を考察できる

●受講生へのコメント

受講生が自ら情報を収集し、考察し、発表していくことを重視する。

●参考文献・教材

授業中に指示する。

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LBEDU3204	開講期	単位数	標準履修年次
127	**教育学研究法 I** Research methodss in Education I			前木 5	2 単位	2 年
	旧科目名			担当教員名 柏木 敦 教授		

●科目の主題

「教育」「教育学」を研究対象として捉えるための基礎的なトレーニングとして、研究のテーマやトピックの設定の仕方、教育・教育学の概念、論文の読み方と書き方、文献・資料の検索に関わる基本的な事柄を学ぶ。

●到達目標

到達目標は以下の三点である。
(1)「教育」に関わる課題意識をもつこと。

(2) 課題意識を「研究」に結びつけること。
(3) 課題を実証的に検討する手法を身につけること。

●授業内容・授業計画

以下のように、授業を進める。

第 1 回　オリエンテーション
第 2 回　「教育学」の諸領域
第 3 回　課題意識を形にする (1)
第 4 回　課題意識を形にする (2)
第 5 回　論文購読 (1)
第 6 回　論文購読 (2)
第 7 回　個別中間発表 (1)
第 8 回　個別中間発表 (2)
第 9 回　文献調査法
第 10 回　グループ発表 (1)
第 11 回　グループ発表 (2)
第 12 回　グループ発表 (3)
第 13 回　グループ発表 (4)
第 14 回　グループ発表 (5)
第 15 回　授業のまとめ

●評価方法

講義中に行う発表の評価と授業参加度を加味して評価する。出席 3 分の 2 以上をもって、単位認定の最低要件とする。

●受講生へのコメント

第 1 回目の授業で、授業内容や履修方法について詳しく説明するので極力欠席しないこと。

●参考文献・教材

教育アンケート調査編集委員会編『教育アンケート調査年鑑』2014 年上下、2015 年上下

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBEDU3303	開講期	単位数	標準履修年次
128	**教育学研究法Ⅱ** Research methodss in Education Ⅱ			後火 4	2 単位	3 年
	旧科目名			担当教員名 島田 希 准教授		

●科目の主題

授業研究の基本的な方法論を身につけることを目指す。学校におけるフィールドワークを通じて、授業観察、実践記録の収集、分析の方法などについて考察を深めていく。あわせて、質的アプローチによる教育研究の基本的な方法論についても検討する。

●到達目標

①授業研究の基本的な方法論について理解する。
②上記①をふまえた上で、学校におけるフィールドワークを実施し、授業研究の基本的な方法論について理解を深める。
③質的アプローチによる教育研究の基本的な方法論について理解する。

●授業内容・授業計画

授業研究や質的アプローチによる教育研究の方法について、学校現場におけるフィールドワーク等を行いながら、以下のテーマを中心に考察を深めていく。

第 1 回　オリエンテーション
第 2 回　授業を構成する要素－授業を捉える視点の確認
第 3 回　授業研究の方法①授業観察
第 4 回　授業研究の方法②授業記録の収集と整理
第 5 回　授業研究の方法③授業記録の分析
第 6 回　学校現場におけるフィールドワーク①授業観察と記録の収集
第 7 回　学校現場におけるフィールドワーク②授業記録の分析
第 8 回　インタビューの手法①対象者および内容の選定
第 9 回　インタビューの手法②データの収集・整理

第 10 回　インタビューの手法③データの分析
第 11 回　インタビューデータの分析①
第 12 回　インタビューデータの分析②
第 13 回　アクションリサーチによる教育研究①
第 14 回　アクションリサーチによる教育研究②
第 15 回　全体のまとめ

●評価方法
授業および学校でのフィールドワークにおける取り組み（60%）と期末レポート（40%）により、総合評価する。

●受講生へのコメント
本科目では、実際に学校現場におけるフィールドワークを実施し、実践記録の収集・分析等を行う。それらへの積極的な参加を通じて、授業研究および質的アプローチによる教育研究の基本的な考え方について学んでほしい。

●参考文献・教材
授業中に適宜資料を配布する。以下を参考文献とする。

・秋田喜代美・恒吉僚子・佐藤学編（2005）『教育研究のメソドロジー―学校参加型マインドへのいざない』東京大学出版会 .
・秋田喜代美・藤江康彦編（2007）『はじめての質的研究法―教育・学習編』東京図書 .
・水越敏行（1987）『授業研究の方法論』明治図書 .

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBEDU3205	開講期	単位数	標準履修年次
129	教育学実習 Field Work in Education			後月 3	2 単位	2 年
	旧科目名			担当教員名 添田 晴雄 准教授		

●科目の主題
教育学研究には、授業実践研究など、研究対象・研究方法いずれにおいても教育実践現場に密接した研究分野もあれば、教育哲学などのようにどちらかと言えば思弁的要素の強い研究分野がある。しかしながら、教育の実態や教育実践を踏まえない教育学研究はありえない。大学における教育学研究は、ともすると文献研究、理念研究に偏りがちであり、教育実践現場の経験がほとんどない学生は、現実を踏まえない理想論に終始することが少なくない。そこで、本科目では、大阪市学校支援学生ボランティア制度の機会を利用して学校における教育実践に参加し、教育の現実から教育学を考察しなおす契機とすることを目的とする。受講生には、上記のボランティアに参加し、その経験を教育学的に意義付けるための発表・討論を行い、レポートを作成することが課せられる。

●到達目標
(1) 教育現場を教育学の視点から観察したり、聞き取り調査をしたりして、記録をとる。
(2) 観察・聞き取り・考察したことをパワーポイントを使って発表する。
(3) 他の学生の発表について教育学的に討論することができる。

●授業内容・授業計画
4 月に大阪市学校支援学生ボランティアの事前指導を行う。ボランティアはその直後から初めてよい。
第 1 回　大阪市学校支援学生ボランティア事前指導（前期に行う）
第 2 回　発表要領とパワーポイントによるプレゼンテーションについて
第 3 回　ワークショップ
第 4 回　モノから読み解く観察校園・学級の特徴（第 1 回発表）(1)
第 5 回　モノから読み解く観察校園・学級の特徴（第 1 回発表）(2)
第 6 回　モノから読み解く観察校園・学級の特徴（第 1 回発表）(3)
第 7 回　モノから読み解く観察校園・学級の特徴（第 1 回発表）(4)
第 8 回　着目した子どもと変化を観察する文脈（第 2 回発表）(1)
第 9 回　着目した子どもと変化を観察する文脈（第 2 回発表）(2)
第 10 回　着目した子どもと変化を観察する文脈（第 2 回発表）(3)
第 11 回　着目した子どもと変化を観察する文脈（第 2 回発表）(4)
第 12 回　子どもの変化と教師の働きかけ（第 3 回発表）(1)
第 13 回　子どもの変化と教師の働きかけ（第 3 回発表）(2)
第 14 回　子どもの変化と教師の働きかけ（第 3 回発表）(3)
第 15 回　子どもの変化と教師の働きかけ（第 3 回発表）(4)

●評価方法
平常点（発表と討論）、レポート。
●受講生へのコメント
本科目は後期科目であるが、4 月にボランティアの登録等の説明を行うので、掲示に気をつけること。
●参考文献・教材
4 月の説明会で「教育学実習の手引き」を配布する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBEDU3206	開講期	単位数	標準履修年次
130	教育学演習 I Seminar in Education I			後火 4	2 単位	2 年
	旧科目名			担当教員名 滝沢 潤 非常勤講師		

●科目の主題
経済的格差の拡大、グローバル化、少子高齢化といった社会の構造的な変化のなかで、教育・学校のあり方の根本的な問い直しが求められ、様々な教育改革が進められている。こうした現状は、これまでにも増して教育（学）の重要性が高まっていることを示すものでもある。教育は、社会の存続と発展に不可欠の機能をもち、すべての人々が、様々な機会を通して経験するものである。特に現代は、様々なメディアを通じて連日のように「教育問題」が報じられ、大きな社会的関心を呼んでいる。民主的な社会にあっては、すべての人々が教育について意見をもち、議論をすることが重要である。しかし、その一方で、教育はすべての人々が経験するが故に、その主張や議論が個人的経験に基づく一面的な見方によるものとなることも多い。また、メディアでの取り上げられ方や論調も、必ずしも多様な側面からの十分な検証を経たものでないこともある。
そこで、本演習では、学生の個人的な教育体験や意見を大切にしながらも、それに固執することなく、また、メディアの情報を鵜呑みにすることなく、教育学の成果を踏まえながら、現在の教育、とりわけ教育改革の意味について複眼的かつ論理的に考察し、それらをわかりやすく発表し、より建設的な議論を行うことで、各自の教育に対する見方・捉え方をより深化することを目的とする。
本演習では、この目的を達成するために、グループ・ワークを重視して授業進めて行くこととする。
●到達目標
・教育学の成果を踏まえながら、教育改革の意味について複眼的かつ論理的に考察できる。
・考察結果をわかりやすく発表し、より建設的な議論を行うことができる。
・教育に対する見方・捉え方をより深化させる。
・グループ・ワークにおいて他者の意見を尊重しながら、協力して課題に取り組むことができる。
●授業内容・授業計画
授業は、3 つのステージから構成される。毎回、4 人以下のグループを構成し、各回に設定されたテーマについて、資料の要約、自分の問題意識の明確化、意見交換、発表を行う。第 3 ステージでは、各自の設定したテーマについてグループで調査し、報告書を作成し、発表を行う。

第 1 回　第 1 ステージ －トピックについて議論－
テーマ：中高一貫教育課題 1:「中高一貫教育」について意見交換をする。どのような意見、議論（論点）が出たかまとめ、代表者が発表する。
第 2 回　課題 2 :「中高一貫教育」に関する新聞記事を読み、分担して要約する。まとめを踏まえて、意見交換をし、論点をまとめる。主な意見と論点について（第 1 回とは異なる）代表者が発表する。
第 3 回　課題 3 :「中高一貫教育」の関連資料（法令、学校数、特徴など）と、藤田論文の要旨シートを踏まえ、「中高一貫教育」に関して意見交換し、主な意見・論点を発表する。以上を踏まえ、「中高一貫教育」についての各自の考えをまとめる。
第 4 回　課題 4 :「中高一貫教育」に関するこれまでの学習を踏まえ、自分の出身地（地域（市）レベル）に公立中高一貫校が設置された場合の影響・状況を推測、検討し、設置すべきかどうか自分の意見をまとめ、意見交換をする。
第 5 回　第 2 ステージ －藤田英典編『誰のための「教育再生」か』を用いて現代の教育改革について理解を深める－
テーマ 1「1 全国一斉学力テスト」
第 6 回　テーマ 2「3 寛容なき厳罰主義＜ゼロ・トレランス＞」
第 7 回　テーマ 3「4 学校選択制」
第 8 回　第 3 ステージ －レポート作成・発表－テーマ設定、グループ編成
第 9 回　調査、報告書作成

第 10 回　調査、報告書作成
第 11 回　調査、報告書作成
第 12 回　調査、報告書作成
第 13 回　調査、報告書作成
第 14 回　グループ発表
第 15 回　グループ発表、まとめ

●評価方法
授業態度、各シートの評価：60%、第 3 ステージで作成する報告書：40%、とする。
各授業で作成したシート、レジュメは、滝沢が確認・評価したあと、コピーし返却する。最終的にポート・フォリオとして自己評価の対象とする。
第 3 ステージで作成する報告書は冊子としてまとめ、全員に配布する。

●受講生へのコメント
学生各自が考察するテーマの選定、報告書の作成、意見交換等での積極的な取り組みを期待する。

●参考文献・教材
藤田英典編『誰のための「教育再生」か』岩波書店、2007 年。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBEDU3304	開講期	単位数	標準履修年次
131	教育学演習Ⅱ Seminar in Education Ⅱ			後月 4	2 単位	3 年
	旧科目名			担当教員名 添田 晴雄 准教授		

●科目の主題
海外に出ることなく日本の教育を受けてきた人々にとって、日本の学校教育、ことに、その教育文化的側面については、あまりにも日常化しすぎているゆえに、その特徴を自覚したり客観的に考察したりする機会があまりない。近年、多くの外国人研究者が日本の学校園における長期間にわたる参与観察と文献研究に基づいて日本の学校教育文化を考察しており、それらの著書も相次いで出版されている。これらを読むことによって、われわれは日本の学校教育文化の特質と意義について、改めて気づき深く考えることができるようになる。
本科目では、このような文献のうちのひとつである、Peter Cave, *Primary School in Japan Self, Individuality and Learning in Elementary Education*, Routledge, 2007 をテキストにし、英文講読を通して日本の学校教育文化の特徴を比較教育学の視点から考察する。講読の過程において、研究に活かすための英文読解の仕方、日本語と英語の教育関連専門用語の差異の問題、比較教育文化的分析のあり方などについても議論する。

●到達目標
(1) 日本の学校教育文化の特徴を比較教育学の視点から考察する。
(2) 日本語と英語の教育関連専門用語の差異について考察する。
(3) 研究に活かすための英文解釈の技術の基礎を身につける。

●授業内容・授業計画
Primary School in Japan Self, Individuality and Learning in Elementary Education は、著者の Peter Cave が近畿地方にあるふたつの小学校の 6 年生の教室を観察し、とくに、個性の伸長と集団活動とのバランスについて深く考察した著作である。今回は、この著作のうち、日本の特別活動について書かれている第 6 章の一部を中心に読み進む予定である。最初は全文訳をしながら読解のコツをつかみ、徐々にパラグラフリーディング的な読解を行う
第 1 回　オリエンテーション
第 2 回　*Primary School in Japan Self, Individuality and Learning in Elementary Education* について／ PukiWiki について
第 3 回　入学試験解答用の英文解釈と研究に使うための翻訳の違いについて
第 4 回　ワークショップ
第 5 回　全文訳研究　特別活動 (1)
第 6 回　全文訳研究　特別活動 (2)
第 7 回　全文訳研究　特別活動 (3)
第 8 回　全文訳研究　特別活動 (4)
第 9 回　全文訳研究　特別活動 (5)
第 10 回　要約訳研究　特別活動 (1)
第 11 回　要約訳研究　特別活動 (2)

第 12 回　要約訳研究　特別活動（3）
第 13 回　要約訳研究　特別活動（4）
第 14 回　要約訳研究　特別活動（5）
第 15 回　まとめ

●評価方法
PukiWiki への書き込み状況、授業中の発表の様子、ノート提出により評価する。
●受講生へのコメント
ノートを活用しながら、予習・復習を行ってほしい。
受講生どうしのコミュニケーションのツールとして PukiWiki を利用するので、学び合いの醍醐味を体験してほしい。
●参考文献・教材
プリントを配布する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBEDU3207	開講期	単位数	標準履修年次
132	教育学演習Ⅲ Seminar in Education Ⅲ			後木 4	2 単位	2 年
	旧科目名			担当教員名 島田 希 准教授		

●科目の主題
戦後の特色ある教育実践を読み解きながら、教育方法をめぐるキーコンセプトや論点について理解を深めていく。あわせて、多様な文献や資料を読み解き、受講生相互にディスカッションを重ねることにより、多面的な見方を身につけることを目指す。
●到達目標
①教育方法をめぐるキーコンセプトについて理解する。
②上記①をふまえつつ、戦後の特色ある教育実践の意義や課題を分析することができる。
③上記①②をふまえた上で、21 世紀型の学びの創造にむけた検討課題について考察を深める。
●授業内容・授業計画
戦後の特色ある教育実践を読み解くことを通じて、教育方法に関する諸概念について考察する。以下のテーマを中心に扱いつつ、最終的には 21 世紀型の学びに関する検討へとつなげていく。
第 1 回　オリエンテーション
第 2 回　戦後の特色ある教育実践を読み解くキーコンセプトの検討
第 3 回　生活とのつながりを重視した教育実践の分析①
第 4 回　生活とのつながりを重視した教育実践の分析②
第 5 回　科学的な見方・考え方を育む教育実践の分析①
第 6 回　科学的な見方・考え方を育む教育実践の分析②
第 7 回　中間まとめ①経験主義と系統主義をめぐって
第 8 回　学力の保障をめざした教育実践の分析①
第 9 回　学力の保障をめざした教育実践の分析②
第 10 回　綿密な教材研究に支えられた教育実践の分析①
第 11 回　綿密な教材研究に支えられた教育実践の分析②
第 12 回　中間まとめ②授業づくりを支える教職観・授業観
第 13 回　21 世紀型の学びの創造にむけた検討①
第 14 回　21 世紀型の学びの創造にむけた検討①
第 15 回　全体のまとめ
●評価方法
授業時の発表、ディスカッションへの参加、小レポート（60%）と期末レポート（40%）により、総合評価する。
●受講生へのコメント
本科目では、以下に挙げる教材や資料をグループで読み解き、発表してもらう。それをもとに受講生相互にディスカッションを行う。受講生には課題となる教材のみならず、関連する資料等を自ら調べ、発表の準備を整えるなど、積極的な参加を求める。
●参考文献・教材
以下を主たる教材とする。あわせて、関連する教材、資料については授業中に適宜紹介する。
・田中耕治編著（2005）『時代を拓いた教師たち－戦後教育実践からのメッセージ』日本標準 .
・田中耕治編著（2009）『時代を拓いた教師たちⅡ－実践から教育を問い直す』日本標準 .

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBEDU3305	開講期	単位数	標準履修年次
133	**教育学演習Ⅳ** Seminar in Education Ⅳ			前月 2	2 単位	3 年
	旧科目名			担当教員名 森 久佳 准教授		

●科目の主題

本演習では、「カリキュラム」と「教師」に関する基本的な知識と考え方の習得を図り、それを前提とすることで、教育学（とりわけ教育方法学）における研究的なアプローチの理解とその深化を目指す。

具体的には、課題文献をそれぞれグループで講読の上、その内容を授業時に発表することになるが、ここでいう発表とは、単に課題文献の内容を発表するのではなく、他の演習の出席者が理解できるように、発表内容の工夫等を行うことを意味する。すなわち、自分たちが授業を行うつもりで発表（プレゼン）することが求められ、入念な準備が必要になると思われるので、その心づもりで参加してもらいたい。

●到達目標

(1) カリキュラムと教師に関する基本的な知識や考え方を習得する
(2) 教育学（とりわけ教育方法学）に関するテーマを研究するアプローチについて理解する

●授業内容・授業計画

まず、カリキュラム及び教師を中心的なテーマとする文献の講読と発表を通して、教育学（とりわけ教育方法学）における基本的な知識や考え方の習得を目指す。その上で、研究ハンドブックや研究論文等の文献の講読に進む予定である。

第 1 回　オリエンテーション（授業の進め方などの説明）
第 2 回　「カリキュラム」とは何か
第 3 回　カリキュラムの構成
第 4 回　学校文化とカリキュラム
第 5 回　隠れたカリキュラム
第 6 回　カリキュラム編成・開発における教師の専門性
第 7 回　授業における教師の専門性
第 8 回　生活指導実践と教師の専門性
第 9 回　教育評価と教師の専門性
第 10 回　教員の職務の特徴とやりがい
第 11 回　教育課程・カリキュラム研究の動向Ⅰ
第 12 回　教育課程・カリキュラム研究の動向Ⅱ
第 13 回　教師・教師教育研究の動向Ⅰ
第 14 回　教師・教師教育研究の動向Ⅱ
第 15 回　授業のまとめと総括

●評価方法

平常点 40%（授業への参加状況、発表の様子）と期末レポート（60%）による。

●受講生へのコメント

学生自身が主体的、自律的に学んでいくことを重視する。

●参考文献・教材

＜参考文献＞（下記の文献の一部をコピーして配布する）

・沼田裕之・増渕幸男編著（2009）『教育学 21 の問い』福村出版.
・田中智志・今井康雄編（2009）『キーワード 現代の教育学』東京大学出版会.
・田中統治・庄司一子・浜田博文編（2008）『学校教育論』放送大学教育振興会.
・小柳和喜雄・久田敏彦・湯浅恭正編著（2014）『新教師論：学校の現代的課題に挑む教師力とは何か』ミネルヴァ書房.
・日本教育方法学会編（2014）『教育方法学研究ハンドブック』学文社.

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBEDU3306	開講期	単位数	標準履修年次
134	**教育学演習Ⅴ** Seminar in Education Ⅴ			前月 5	2 単位	3・4 年
	旧科目名			担当教員名 添田 晴雄 准教授		

●科目の主題

日本の教育時事を題材にして英語で演習を行う。日本の教育を英語で説明したり、議論したりすることにより、(1) 日本の教育をより深く理解する、(2) 日本の教育を発信する力をつける、ことを目的とする。本演習では、英語を流暢に話せることを目的にしていない。むしろ、たどたどしくてもいいので、日本語以外の言語（英語）を使って、日本の教育についてなんとか伝えようとする努力を積み重ねることに重きを置く。

英語を使うことによって日本の教育の理解が深くなる理由は次のとおりである。たとえば「ゆとり教育」「総合的な学習の時間」「いじめ」など、日本語のみで会話している際には理解しているつもりになっているような概念を英語で説明しようとすると、とたんに自分の理解の浅さに気づくことがある。さらに、それぞれの訳語である pressure-free education、periods for integrated learning、bullying などに直面すると、日本語の概念とのずれに気づくことになる。また、「特別活動」のように、英語で説明することにより日本の教育文化の特質を再考させられる事象も少なくない。このような経験を通して、日本の教育の理解をさらに深める必要性を感じ、教育学研究をより追究してほしい。

●到達目標

(1) 英語で説明しようとすることが日本の教育を深く理解する契機となることを体験する。
(2) (1) の結果として、教育学の探究がより深まったことが意識できる。
(3) 外国人に対して日本の教育時事のいくつかについて（たどたどしくてもいいので）英語で説明できるようになる。

●授業内容・授業計画

今年度は、特別活動、算数・数学教育、道徳教育、学習指導要領と大学入試、教員の多忙化、など、今日の日本の教育の争点や日本の教育文化の特徴が見出される事象について、英語で説明する課題に取り組む。ひとりあたりふたつの概念を説明する課題に取り組む。授業中に外国の大学と Skype 接続し、英語でプレゼンテーションをする機会も計画中である。

第 1 回　オリエンテーション
第 2 回　説明内容ウェビング、日本語による説明原稿の作成
第 3 回　聞き手の理解事前事後予想、日本語によるパワーポイントの作成
第 4 回　日本語による発表と振り返り
第 5 回　英語による説明原稿の作成
第 6 回　英語によるパワーポイントの作成
第 7 回　英語による説明リハーサル、振り返り
第 8 回　ふたつ目の概念の説明準備（1）
第 9 回　ふたつ目の概念の説明準備（2）
第 10 回　英語による説明リハーサル
第 11 回　Skype による海外の大学生に向けたプレゼンテーション
第 12 回　振り返り
第 13 回　ふたつ目の概念の英語による説明準備
第 14 回　ふたつ目の概念の発表（1）
第 15 回　ふたつ目の概念の発表（2）

●評価方法

平常点（発表とディスカッション）。ただし、英語そのものの能力は評価の対象としない。

●受講生へのコメント

自由選択科目であり、教育学コース生以外の受講も歓迎する。教育学が得意な学生と英語で表現することに興味を持っている学生とが共に学び合う場にしたい。英語はたどたどしくてもかまわない。日本の教育をテーマにして、思っていることをなんとか伝えようとする経験を積んで欲しい。

●参考文献・教材

村田翼夫・山口満編著『バイリンガルテキスト現代日本の教育―制度と内容―』東信堂、2010 年

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBEDU3307	開講期	単位数	標準履修年次
135	**教育行政学** Educational Administration			後火 3	2 単位	3・4 年
	旧科目名			担当教員名 滝沢 潤 非常勤講師		

●科目の主題

本講義は、教育行政の基本原理や組織、現代の教育行政の課題、教育行政学の対象や成果について説明する。

現代において教育は、それにかかわる人々や費用の規模の大きさからも、それが非常に重要な社会制度の一つであることがわかる。この社会制度としての教育を形成・維持し、発展させる役割を果たしているのが教育行政であり、その重要性は、教育実践に匹敵するものである。さらに、現代の急激な社会変動の中にあっては、教育行政ないし教育行政学は新たな課題に直面しており、とくに教育の公共性ないし公教育あり方が根本的に問われ、教育行政も大きな転換点にあるといえる。本講義では、こうした状況を踏まえ、教育行政の基本原理や組織を理解したうえで、今後の教育行政のあり方やそれを対象とする教育行政学の課題と可能性について考察していく。

●到達目標

・教育行政の意義、役割を理解する。
・教育行政の現代的課題を理解する。
・教育行政学とその課題を理解する。

●授業内容・授業計画

講義では、教育行政の基本原理・組織について学ぶとともに、とくに現代の教育行政が直面する課題について、教育行政学の成果を踏まえながら検討、考察する。

第 1 回　イントロダクション
第 2 回　＜教育行政の原理と制度＞　公教育の概念と制度的原理①
第 3 回　公教育の概念と制度的原理②
第 4 回　教育行政の概念と一般原則
第 5 回　教育法規の体系と教育基本法の改正
第 6 回　教育行政の制度①（文部科学省、教育委員会）
第 7 回　教育行政の制度②（教育委員会制度改革）
第 8 回　教育行政の制度③（教育委員会制度の理念と展望）
第 9 回　＜教育行政の諸領域＞　学校経営①（学校評価）
第 10 回　学校経営②（学校参加）
第 11 回　教育内容行政①（教科書検定）
第 12 回　教育内容行政②（教科書採択）
第 13 回　＜教育行政（学）の論点・課題＞　学校選択論①
第 14 回　学校選択論②
第 15 回　教育とアカウンタビリティ（全国学力・学習状況調査）

●評価方法

・期末最終レポート（70%）
・授業内小レポート等（30%）

●受講生へのコメント

小レポート等、積極的な授業参加を期待する。

●参考文献・教材

参考文献は適宜紹介する。
必要に応じて各種資料を配布する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBEDU3208	開講期	単位数	標準履修年次
136	**教育史** History of Education			前月 4	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 柏木 敦 教授		

●科目の主題

近代公教育の形成・展開の過程について、主として日本近代における学校教育制度の成立過程を概観する。本講義では特に義務教育制度の成立、展開過程を中心に講義を進め、日本近代において「学校に通う」ということ、

「学校で学ぶ」ということがどのような形で日本の人々の学習のありようや生活のありようを変えていったのかということを考えてゆく。

●到達目標

以下の三点を到達目標とする。

(1) 日本の教育制度政策の展開過程を、史料に基づいて理解してゆく。

(2) 教育の歴史的な出来事を実証する史資料について知る。

(3)「学校に通う」「学校で学ぶ」ということの意味について、歴史的経緯を踏まえた考え方を持つ。

●授業内容・授業計画

以下のような内容で授業を進める。

第 1 回　ガイダンス
第 2 回　学校がない頃の子どもの学び方
第 3 回　学校教育のはじまり～「学制」と学校制度のはじまり
第 4 回　初等教育制度の模索過程～教育令、諸学校令
第 5 回　第二次小学校令と帝国憲法・地方自治制度
第 6 回　御真影と教育勅語
第 7 回　実業教育の展開
第 8 回　義務教育無償制の成立
第 9 回　児童の労働環境と小学校制度
第 10 回　「特別教育」「特殊教育」の流れ
第 11 回　大正デモクラシーと子どもの教育
第 12 回　国民学校令下の小学校教育
第 13 回　戦時下の教育内容
第 14 回　敗戦後の教育改革
第 15 回　講義のまとめ

●評価方法

期末試験の成績による。

●受講生へのコメント

学校教育制度の形成過程や日本近代史に興味をもって受講するのが望ましい。

●参考文献・教材

成城学園教育研究所編『教育問題研究』(復刻版)、龍渓書舎
『編集復刻　日本近代教育史料大系〔公文記録（一)〕』龍渓書舎
その他参考文献については授業中に適宜紹介する。
教材はレジュメ・資料を配付する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBEDU3209	開講期	単位数	標準履修年次
137	**教育メディア論** Theory and Practice of Educational Media			前集中	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 深見 俊崇 非常勤講師		

●科目の主題

今日の学校現場では，ICT 環境の整備が進みつつあり，その積極的な活用が教師に求められている。また，児童・生徒の情報活用能力を育成するためにも，授業等において児童・生徒が主体的に活用できる学習環境や授業をデザインする力量が求められている。

本講義では，ICT に関する理解を深めた上で，それらを活用した教育実践を概観し，教育への応用をいかに図るかを検討する。そして，授業等において ICT を積極的に活用できる素養を身に付ける。

●到達目標

・ICT 活用の可能性と課題を踏まえた上で，児童・生徒の学習を豊かにするための活用方法を考えることができる。
・児童・生徒が ICT を主体的に活用するための学習環境や授業をについて考察することができる。
・インターネット社会における新たな教育の可能性を考えることができる。

●授業内容・授業計画

各回の内容は以下の通りである。

第 1 回　オリエンテーション
第 2 回　情報とメディア

第 3 回　授業設計の基礎―メディアを授業で活用するために
第 4 回　情報教育と ICT 活用
第 5 回　ICT 活用の可能性と課題
第 6 回　情報モラル
第 7 回　携帯電話・スマートフォン①
第 8 回　携帯電話・スマートフォン②
第 9 回　メディアリテラシーの基礎
第 10 回　体験を通してメディアリテラシーを理解する
第 11 回　遠隔教育・交流学習①
第 12 回　遠隔教育・交流学習②
第 13 回　インターネット社会における教育のあり方①
第 14 回　インターネット社会における教育のあり方②
第 15 回　21 世紀に求められる教育

●評価方法
平常点（40%）＋レポート（60%）
レポートの内容については講義中に伝える。
●受講生へのコメント
毎回の講義では，それぞれのテーマについて受講者間で議論するので，積極的に参加してもらいたい。
ICT をいかに活用するかに留まらず，教育そのものを再検討する講義を目指すため，教育について幅広く考えてみたいという人も受講を歓迎したい。
●参考文献・教材
教材：プリント・配付資料を配付する。参考文献：
水越敏行・久保田賢一（2008）『ICT 教育のデザイン』，日本文教出版
コリンズ・ハルバーソン（稲垣忠編訳）（2012）『デジタル社会の学びのかたち』，北大路書房

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBEDU3308	開講期	単位数	標準履修年次
138	**教育学特講Ⅰ** Special Lecture on Education Ⅰ			後集中	2 単位	3・4 年
	旧科目名			担当教員名 山﨑 洋子 非常勤講師		

●科目の主題
教育における今日的なトピック・課題を念頭におきながら、イギリスの学校教育の歴史を講述し、考察を加える。
●到達目標
産業革命を最も早くなし遂げた国家・イギリスにおいて展開された学校教育の歴史的考察を通して、教育という営為を思想史的な文脈に位置づけて理解することをめざす。具体的には、19 世紀から 20 世紀の期間のイギリスで展開された教育事象に内包する理論・理想・現実を理解し、そのことを通じて、またそれらを参照枠としながら、日本の今日の学校教育の出来事・事象を客観的に理解する知見や態度を習得する。
●授業内容・授業計画
基本的には講義形式で進めるが、必要に応じて、質疑やグループ討論の時間を作る。
第 1 回　ガイダンス：近代化と学校教育
第 2 回　イギリスの学校教育・教授法の史的変遷（1）モニトリアルシステム、ギャラリーシステム
第 3 回　イギリスの学校教育・教授法の史的変遷（2）オーウェンの性格形成学院と幼児教育運動
第 4 回　イギリスの学校教育・教授法の史的変遷（3）出来高払い制と教員養成
第 5 回　新教育運動の生起と展開（1）中等教育改革と新学校
第 6 回　新教育運動の生起と展開（2）初等教育改革と「教育の新理想」
第 7 回　国際的な新教育運動の生起と展開―新教育連盟の誕生と教師
第 8 回　ニイルの教育思想（1）サマーヒルの誕生
第 9 回　ニイルの教育思想（2）The Problem Child, Parent and Teacher
第 10 回　ニイル新教育思想の普及と課題
第 11 回　Dartington School の理想と限界
第 12 回　進歩主義教育の出現と展開（1）Eveline Lowe Primary School と Black paper
第 13 回　進歩主義教育の出現と展開（2）その終焉

第 14 回　進歩主義教育の歴史的課題
第 15 回　まとめ

●評価方法
最後に、講義の中で出てきたトピックに関する試験を実施する。
●受講生へのコメント
教育という事象を知的かつ歴史的に理解したいと思う学生の受講を歓迎する。
●参考文献・教材
山﨑洋子『ニイル「新教育」思想の研究－社会批判にもとづく「自由学校」の地平－』1996，大空社
宮野安治，山﨑洋子，菱刈晃夫『講義　教育原論－人間・歴史・道徳－』2011，成文堂
Roy Lowe 著，山﨑洋子・添田晴雄監訳『進歩主義教育の終焉』2013、知泉書館
Richard Aldrich 著，山﨑洋子・木村裕三監訳『教育史に学ぶ－イギリス教育改革からの提言－』2009，知泉書館

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBEDU3309	開講期	単位数	標準履修年次
139	教育学特講Ⅱ Special Lecture on Education Ⅱ			前集中	2 単位	3・4 年
	旧科目名			担当教員名 髙谷 哲也 非常勤講師		

●科目の主題
学校教育のあり方をめぐる世の中の議論について、その妥当性を論考することを通して、教育学の専門的知見と専門的な議論の作法を学ぶ。
●到達目標
学校教育をめぐる各種の主張・議論の特徴を理解するとともに、本質的課題を見出す見識を身につける。
●授業内容・授業計画
学校教育のあり方をめぐって、世の中には様々な主張・議論が展開されている。その中で、学力保障に関するもの、授業づくりに関するもの、学校の危機に関するもの、学校づくりや子どもの権利保障に関するもの、教師の成長に関するものをとりあげ、各種議論における主張の前提にある論理や教育観を確認する。それに対し、教育学分野で蓄積されてきた研究知見に基づくとどのような問いが生起するのかを学び、専門的知見から世の中で議論・主張されている内容の妥当性について考察していく。
第 1 回　オリエンテーション
第 2 回　時代の変化と学力観の転換
第 3 回　学習者の求める良い授業の要素
第 4 回　学習者の学びを規定する教師の学習観
第 5 回　体罰はなぜなくならないのか
第 6 回　生徒指導・部活動における教育観・指導観
第 7 回　成長主体としての子どもの可能性と子どもの権利
第 8 回　教師の「観」に規定される教育実践
第 9 回　子どもは教師の何をみているか
第 10 回　教師の仕事と成長にみられる特徴
第 11 回　問い直される教師と子どもの関係
第 12 回　授業の主役と教師の役割
第 13 回　学校づくりの主役と教師の役割
第 14 回　教育の議論と専門的な学習コミュニティ
第 15 回　教育問題を論じる作法と多様性の中でのダイアログ
●評価方法
1．授業中に課す演習課題：60%
2．授業中に作成するミニポートフォリオ（記録シート）の完成：40%
●受講生へのコメント
本授業は、講義と対話・課題演習・ディスカッションを組み合わせながら進める。
学校教育をめぐる様々な問題に関心のある人の受講はもちろんのこと、意見の交流方法や、自身の意見を論理的に述べる方法を学びたい人の参加も、大いに歓迎する。
●参考文献・教材
授業中に資料を配付する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBGEO3201	開講期	単位数	標準履修年次
140	**地理学概論 I** Introduction to Geography I			前火 2	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 山﨑 孝史 教授		

●科目の主題

本講義は、現代社会を①資源と産業、②生活と文化、③グローバル化、④土地利用、⑤地域構造という 5 つの観点から、地理学的に読み解きます。私たちが世界と地域を理解する力を、地理学を通してどのように獲得できるのか考えます。

●到達目標

①「資源と産業」の単元では、天然資源の分布を理解し、農林水産業、工業、商業・サービス業などの産業立地のメカニズムについて考えます。

②「生活と文化」の単元では、都市と農山漁村といった生活様式の分化を理解し、文化景観の歴史的形成と観光化について考えます。

③「グローバル化」の単元では、交通・通信の発達に伴うグローバル化のメカニズムを理解し、資本と人口の流動と情報化社会の到来について考えます。

④「土地利用」の単元では、主として都市内での土地利用の変化と規制を理解し、都市空間の変容と都市居住の質的変化について考えます。

⑤「地域構造」の単元では、近代化による産業地域の構造と結節地域の形成過程を理解し、地域構造の現代的特徴について考えます。

●授業内容・授業計画

到達目標に記した 5 つの単元ごとに以下のような個別のテーマについて講述していきます。実際の授業内容には変更が加えられることがあります。

第 1 回　イントロダクション
第 2 回　資源と産業：農業生産の課題
第 3 回　資源と産業：工業立地のメカニズムと推移
第 4 回　資源と産業：商業・サービス業の革新
第 5 回　生活と文化：都市と農山漁村の構造
第 6 回　生活と文化：文化景観の歴史的形成
第 7 回　生活と文化：観光の文化論的理解
第 8 回　グローバル化：交通・通信手段の発達
第 9 回　グローバル化：資本と人口の流動
第 10 回　グローバル化：情報化社会の空間
第 11 回　土地利用：都市的土地利用の変化と規制
第 12 回　土地利用：都市空間の変容と居住変化
第 13 回　地域構造：近代化と産業地域の形成
第 14 回　地域構造：現代地域の構造的特徴
第 15 回　まとめ

●評価方法

各週のリーディング・ショートレポート（50%）、期末レポート（50%）から評価します。

●受講生へのコメント

受講生は講義初回に指示するテキストを購入して下さい。

●参考文献・教材

テキスト：講義時に指示します。
ホームページ：http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/user/yamataka/home.htm

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBGEO3202	開講期	単位数	標準履修年次
141	**地理学概論Ⅱ** Introduction to Geography II			前月 1	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 稲垣 稜 非常勤講師		

●科目の主題

大都市圏構造の変化を郊外世代の観点から考える.

●到達目標

地理学的な見方により，郊外世代と大都市圏構造について理解できるようになることを目標とする.

●授業内容・授業計画

大都市圏は 20 世紀を代表する結節地域構造である．大都市圏構造の変化を解明するためのアプローチは多様であるが，この授業では，郊外世代（郊外第 2 世代）の観点から大都市圏を考える.

第 1 回　オリエンテーション（大都市圏研究について）
第 2 回　大都市圏の空間構造
第 3 回　郊外の形成と変容
第 4 回　郊外居住と郊外第 2 世代
第 5 回　郊外の就業構造
第 6 回　郊外の雇用成長とその変化
第 7 回　大都市と郊外
第 8 回　大都市圏の求人・求職
第 9 回　求人行動と大都市圏構造
第 10 回　求職行動と大都市圏構造
第 11 回　求人・求職と郊外
第 12 回　雇用形態と求人情報提供事業
第 13 回　大都市圏における求人媒体
第 14 回　大都市圏における求人情報提供事業
第 15 回　まとめ

●評価方法

平常点と定期試験をもとに総合的に評価する.

●受講生へのコメント

特になし

●参考文献・教材

『郊外世代と大都市圏』（稲垣稜著）ナカニシヤ出版，2011 年.

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBGEO3203	開講期	単位数	標準履修年次
142	**地誌学Ⅰ** Regional Geography I			前水 2	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 大場 茂明 教授		

●科目の主題

地誌学Ⅰは外国地誌である。異なる文化をもって発展してきた諸地域を、近代ナショナリズムの所産である「国民国家」の枠を越えて、経済的・政治的に統合しようという未曾有の試みが行われている EU の地誌を扱う。

●到達目標

欧州統合が「ひとつのヨーロッパ」を目標としているのと同時に、実は多様な地域・住民で構成される「いくつものヨーロッパ」を目指す試みであることを、順次取り上げるトピックの学習を通じて理解する。あわせて、欧州統合の拡大と深化が、域内諸地域に及ぼした影響についての知見を深め、地域問題に対する思考力を養う。

●授業内容・授業計画

本講義では、①欧州統合の拡大と深化の過程、②経済・政治統合をめぐる諸問題、③ EU 域内の地域格差（成長地域、旧工業地域、発展途上地域）に焦点を絞って、人口・経済力ともに域内最大の加盟国であるドイツを中心としたヨーロッパ地誌を講述する。

第 1 回　欧州統合の歴史

第 2 回　EU の組織
第 3 回　経済統合の過程；転機にある EURO
第 4 回　EU 域内の地域格差
第 5 回　EU 地域政策の展開
第 6 回　外国人とは誰か？（1） 同化・編入・統合
第 7 回　外国人とは誰か？（2）ドイツにおける移民たち
第 8 回　政治統合への道
第 9 回　ヨーロッパの都市景観 （スライド上映）
第 10 回　ドイツにおける産業構造の転換と地域間格差
第 11 回　ドイツの成長地域：バイエルン州
第 12 回　ドイツの旧工業地域：ルール地域
第 13 回　ドイツの発展途上地域：旧東ドイツ
第 14 回　ドイツのまちづくり （ビデオ上映）
第 15 回　本講義のまとめ

●評価方法
論述形式の定期試験により評価する。授業時に配布した資料や参考文献の持ち込みは自由なので、講義内容にもとづき如何に論理的な記述をするかが、評価のポイントとなる。

●受講生へのコメント
本講義では、ビデオやスライドの上映、担当教員自身の現地での体験を織り込みながら、多少なりともヨーロッパの風景や日常生活を実感してもらえるよう工夫する。単に EU に関する知見を深めるのみならず、受講者がヨーロッパに行きたくなるような授業を展開して行きたい。

●参考文献・教材
テキスト：使用しない。最新情報を交えたプリントを配布する。
参考書：授業時に適宜指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBGEO3204	開講期	単位数	標準履修年次
143	**地誌学Ⅱ** Regional Geography II			後火 1	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 祖田 亮次 准教授		

●科目の主題
人間は自然を改変することで新たな生業と産業を生み出し、それに伴う文化を創出しながら、生活圏を拡大してきた。この授業では、日本の「地域性」について、ヒトー自然関係（あるいは人間－環境関係）に重点を置きつつ、多様な観点から考察する。キーワードとなるのは、景観改変、国土開発、風土認識、災害・防災・減災、都市と村落などである。

●到達目標
「地域」の単位をどのように設定するか、どのような側面からみるかによって、地域の見え方は異なってくるという点を理解した上で、地域間の格差や地域間の結びつきなどについて、多様な観点か考察できるようになる。

●授業内容・授業計画
本講義では、地誌学や地域学に関連する抽象的・概念的な議論を抑えた上で、具体的な地域研究の方法や地域特性の描き方について、いくつかの事例を取り上げながら考察する。各回のおよその内容は以下のとおりである。
第 1 回　地理学とは何か、地誌学とは何か
第 2 回　フンボルトのコスモス
第 3 回　ラッツェルと環境決定論（環境と生活 1）
第 4 回　ヴィダル・ドゥ・ラ・ブラーシュと環境可能論（環境と生活 2）
第 5 回　地誌学と風土論
第 6 回　地誌学と地域研究
第 7 回　地誌学と地方誌／地域誌、地元学
第 8 回　地誌学と地域単位論
第 9 回　流域社会論と海山里連関学
第 10 回　環境地誌の可能性――淀川流域を事例として
第 11 回　環境地誌の可能性――大和川流域を事例として

第 12 回　環境地誌の可能性――阿賀野川流域を事例として
第 13 回　環境地誌の可能性――信濃川流域を事例として
第 14 回　地誌学と人間－環境関係論
第 15 回　本講義のまとめ

●評価方法
授業内で書くコメント、授業外の時間に貸す宿題・レポート、授業の参加度合いなどを総合的に判断して評価する。およその配分は以下の通り。出席点：10 ～ 15%、宿題・コメントペーパー・小レポート：40 ～ 45%、期末レポート：35 ～ 40%。

●受講生へのコメント
暗記や記憶を重視する授業ではない。地域の特徴や地域間の格差、地域間の結びつきなどについて、多様な観点から考察することを目的とする授業である。

●参考文献・教材
テキスト：使用しない。授業中にプリントを配布する。
参考書：授業時に文献リストを配布する。

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LBGEO3205	開講期	単位数	標準履修年次
144	地理学実験実習 I Experiment and Practice in Geography I			前火 3	2 単位	2・3 年
	旧科目名			担当教員名 祖田 亮次 准教授		

●科目の主題
本実習の目的は地理学の分野において卒業論文を作成していく上で必要な技術と知識の習得です。また、そうした技術が地理学のものの見方・考え方と密接に結びついていることも理解してもらいます。本実習は地理学実験実習Ⅱと並行して開講されるので、合わせて受講してください。本実習Ⅰでは、フィールドワークに必要な技術・作法・資料収集・データ分析を中心に学び、同時並行の実験実習 II では、GIS の考え方と使い方を身につけてもらいます。

●到達目標
フィールドワークとは何かを理解し、地図や資料の収集、読解、分析が可能になること。

●授業内容・授業計画
授業はおよそ以下の計画で進めます。
第 1 回　イントロダクション
第 2 回　地図の読み方と描き方 1
第 3 回　地図の読み方と描き方 2
第 4 回　地図の読み方と描き方 3
第 5 回　フィールドワークと地図 1
第 6 回　フィールドワークと地図 2
第 7 回　フィールドワークの方法論 1
第 8 回　フィールドワークの方法論 2
第 9 回　フィールドワークの準備 1（資料収集）
第 10 回　フィールドワークの準備 2（資料分析）
第 11 回　フィールドワークの準備 3（調査項目の設定）
第 12 回　フィールドワークの準備 4（アポイントメントの取り方）
第 13 回　フィールドで収集したデータの使い方 1
第 14 回　フィールドで収集したデータの使い方 2
第 15 回　フィールドで収集したデータの使い方 3

●評価方法
出席（20%）、各週課題（40%）、レポート課題（40%）から評価します。特に各週課題は怠らずに提出してください。

●受講生へのコメント
今後、地理学の専門課程で学習し、卒業論文を執筆していく上で、これらの技術は不可欠ですので、継続的に作業に取り組んでください。必ず、地理学実験実習Ⅱと同時に受講してください。

●参考文献・教材
必要なリーディング課題は担当者より提供します。作業ファイルの保存のために USB メモリーが必要となりますので、各自ご準備ください。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBGEO3206	開講期	単位数	標準履修年次
145	**地理学実験実習Ⅱ** Experiment and Practice in Geography II			前火 4	2 単位	2・3 年
	旧科目名			担当教員名 木村 義成 准教授		

●科目の主題

本実習の目的は地理学の分野において卒業論文を作成していく上で必要な技術と知識の習得である。

本実習では、空間データの作成と編集、GIS や GPS の考え方と使い方に習熟することを通じて、地理学研究を行う上で必要な地域統計を用いた統計処理、及び空間解析に関する技術と知識を習得することを目的とする。

●到達目標

本実習では、地域特性の分析やデータ・サンプリングと調査法、地域住民への質問票の作成や分析について実データを用いて演習を実施する。

なお、同時並行の実験実習Ⅰにおいても、フィールドワークに必要な技術・作法・資料収集・データ分析を中心に学ぶ。

●授業内容・授業計画

地理学教室所有の GIS や GPS を利用した実習を行う。

本実習は地理学実験実習Ⅰと並行して開講されるので、必ず合わせて受講すること。

第 1 回 ・イントロダクション
第 2 回 ・一般地図の作成①
第 3 回 ・一般地図の作成②
第 4 回 ・統計地図の作成
第 5 回 ・空間データの作成と編集①
第 6 回 ・空間データの作成と編集②
第 7 回 ・空間データの作成と編集③
第 8 回 ・基礎統計量とグラフ表現①
第 9 回 ・基礎統計量とグラフ表現②
第 10 回 ・検定と推定
第 11 回 ・地域の分類のための多変量解析
第 12 回 ・空間解析
第 13 回 ・GPS を用いた位置情報の取得
第 14 回 ・空間データの統合利用
第 15 回 ・総括

●評価方法

実験実習という講義の性格上、出席点を最重視する。実習の内容は連続するものであり、欠席すると次回以降、実習に付いて行けなくなる可能性があるので留意すること。

●受講生へのコメント

今後、地理学の専門課程で学習し、卒業論文を執筆していく上で、これらの技術は不可欠なので、継続的に作業に取り組むこと。

また、「地理学実験実習Ⅰ」と必ず受講すること。「地理学実験実習Ⅱ」のみの受講は許可しない。

●参考文献・教材

教材・参考文献については、随時紹介する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBGEO3301	開講期	単位数	標準履修年次
146	**地理学講読演習Ⅰ** Reading Seminar in Geography I			前水 3	2 単位	3 年
	旧科目名			担当教員名 木村 義成 准教授		

●科目の主題

国内外の学術論文の読解を通じて、地理学の諸分野における最新の研究動向にふれる。

●到達目標

毎回一定分量の国内外の学術論文やテキストにふれることで、地理学における基本語彙を習得するとともに、地理学における最新の研究動向にふれることで、卒業論文のテーマ選定にもつなげられるような地理学的な知を身に

つける。

●授業内容・授業計画

前半（1 ～ 8 回）は担当者が用意したテキストを用いて、輪読形式で授業を行う。これによって、単に文意を把握するだけではなく、地理学における基本語彙の習得を目指す。後半（9 ～ 15 回）は各自が選定した外国語文献に基づきレジュメを作成し、その内容について発表する。受講生は報告内容に関する質疑討論を行う。

第 1 回　ガイダンス
第 2 回　受講生による報告と討論
第 3 回　同上
第 4 回　同上
第 5 回　同上
第 6 回　同上
第 7 回　同上
第 8 回　同上
第 9 回　同上
第 10 回　同上
第 11 回　同上
第 12 回　同上
第 13 回　同上
第 14 回　同上
第 15 回　授業のまとめと後期への展開

●評価方法

出席状況（20%）、発表内容（50%）、質問など議論への参加状況（30%）から評価する。

●受講生へのコメント

毎回一定のボリュームのある国内外の学術論文の精読を課題とするので、履修にあたっては十分な予習が必要である。したがって、たとえば将来最新の研究動向を踏まえた卒業論文を執筆したいと考えている意欲的な専攻生には役立っ授業である一方、漫然とした履修態度は認めないので留意すること。

なお、第 1 回のガイダンスには必ず出席すること。ガイダンスを欠席した場合は、受講を認めないことがあるので注意すること。

●参考文献・教材

演習で用いる文献については、ガイダンスにて説明する。したがって、ガイダンスには必ず参加すること。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBGEO3302	開講期	単位数	標準履修年次
147	**地理学講読演習 II** Reading Seminar in Geography II			後火 3	2 単位	3 年
	旧科目名			担当教員名 山﨑 孝史 教授		

●科目の主題

地理学において、外国語は少なくとも英語の能力を磨くことが求められます。なぜなら、学界の最新の研究動向を知るには英語文献の読解力が前提となり、将来自らの仕事や研究の成果を国際的に発信していく上で英語が鍵を握るからです。本演習ではこうした観点から英語文献の精読とそれに関する口頭発表から構成されます。

●到達目標

本演習では演習受講者が自らの卒論研究を構想していく中で、関心に近い研究テーマを扱った外国の研究（英語電子ジャーナル論文）を検索・紹介し、その視角や方法を理解した上で、インターネット上で外国の事例について調べ、報告します。こうした作業を通して、卒論研究の構想を具体化するとともに外国語（英語）による情報収集能力を高めます。

●授業内容・授業計画

(1) 出席：毎週の講義には必ず出席して下さい。出席数が 2/3 に満たない受講生は自動的に不合格とします。欠席の場合は減点しますが、病欠などの場合は診断書のコピー等の提出があれば減点しません。
(2) 前半の課題：前半の各週は Google などの検索エンジンを用いて、インターネット上でダウンロード可能な英語学術論文を読解・紹介します。まず候補論文を複数選定し、それらの要旨（アブストラクト）ついて簡単に紹介した上で、選定した一本の論文についてその理論的アプローチ、方法論、結論を詳しく紹介します。
(3) 後半の課題：後半の各週は、前半の論文読解作業にもとづき外国の事例について記載したホームページを探します。複数のサイトについて記載内容を紹介した後、一つの事例について詳しく報告します。紹介・報告共にプロジェクターやパワーポイントを用いて行います（発表は日本語で可）。

（4）期末レポート：各週の課題に加えて期末のレポートを提出していただきます。詳しくは講義中に指示します。

第 1 回　イントロダクション：英語論文の選び方
第 2 回　自分の関心を知る 1：面白そうな論文の要旨紹介（グループ A）
第 3 回　自分の関心を知る 2：面白そうな論文の要旨紹介（B）
第 4 回　自分の関心を知る 3：面白そうな論文の要旨紹介（C）
第 5 回　論文紹介 1：その理論、方法論、結果（A）
第 6 回　論文紹介 2：その理論、方法論、結果（B）
第 7 回　論文紹介 3：その理論、方法論、結果（C）
第 8 回　外国の事例を探す 1：面白そうなサイトの紹介（A）
第 9 回　外国の事例を探す 2：面白そうなサイトの紹介（B）
第 10 回　外国の事例を探す 3：面白そうなサイトの紹介（C）
第 11 回　外国事例の紹介 1（A）
第 12 回　外国事例の紹介 2（B）
第 13 回　外国事例の紹介 3（C）
第 14 回　卒論に外国語文献を引用する（期末レポート準備）1
第 15 回　卒論に外国語文献を引用する（期末レポート準備）2

●評価方法

前半の課題：要旨紹介 20 点、詳細報告 20 点
後半の課題：サイト紹介 20 点、事例報告 20 点
期末レポート：20 点
総得点 60 点以上を合格とします。

●受講生へのコメント

演習に関する諸連絡は専用の ML（chiri-kodoku）を通して行います。演習日以外にも質問などをポストすることができますので、活用してください。

●参考文献・教材

課題文献は、Google や学術情報総合センターの電子ジャーナルなどを用いて検索・ダウンロードします。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBGEO3207	開講期	単位数	標準履修年次
148	**地理学野外調査実習 I** Field Survey in Geography I			後水 2	2 単位	2・3 年
	旧科目名			担当教員名 祖田 亮次 准教授		

●科目の主題

野外調査実習では、調査の準備と実施、成果の整理と分析という野外調査の一連のプロセスを通じて、文献・資料の収集法、調査テーマの設定手順、聞き取りや観察の技術、収集した情報の整理方法などを学び、フィールドワークに必要な知識と方法を身につけることを目的とする。教員と受講生で設定したテーマに基づいて、自治体、企業、各種団体、住民への聞き取り調査、アンケート調査、観察、写真撮影、作図などを実施する。

●到達目標

フィールドワークの方法論を理解したうえで、実際に現地でどのように行動すべきなのか、実践を通じて習得できるようになる。

●授業内容・授業計画

下記の 3 段階を踏んで、現地調査の準備を行っていく。

第 1 回　イントロダクション
第 2 回　調査地域の選定と同地域に関する基本的な文献・地図・資料の輪読 1
第 3 回　調査地域の選定と同地域に関する基本的な文献・地図・資料の輪読 2
第 4 回　調査テーマの選定と調査項目の検討、現地関係機関との調整、調査計画の作成 1
第 5 回　調査テーマの選定と調査項目の検討、現地関係機関との調整、調査計画の作成 2
第 6 回　調査テーマの選定と調査項目の検討、現地関係機関との調整、調査計画の作成 3
第 7 回　現地調査・エクスカーション 1
第 8 回　現地調査・エクスカーション 2
第 9 回　現地調査・エクスカーション 3
第 10 回　現地調査・エクスカーション 4
第 11 回　成果報告と報告書作成 1

第 12 回　成果報告と報告書作成 2
第 13 回　成果報告と報告書作成 3
第 14 回　成果報告と報告書作成 4
第 15 回　成果報告と報告書作成 5

●評価方法
平常点（出席状況と課題への取り組み方）と最終レポートによって評価する。
●受講生へのコメント
「地理学実験実習Ⅰ」、「地理学実験実習Ⅱ」を履修済みであることが望ましい。
授業では、ほぼ毎回課題を課すので、受講生には個人またはグループでの作業に積極的に参加することが求められる。
また、現地調査・巡検に参加しない場合には単位修得は認められないので、くれぐれも留意すること。現地調査・巡検等で若干の交通費がかかる。
●参考文献・教材
テキスト：使用しない。
参考書：授業時に適宜指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBGEO3303	開講期	単位数	標準履修年次
149	**地理学野外調査実習Ⅱ** Field Survey in Geography II			前月 4	2 単位	3 年
	旧科目名			担当教員名 大場 茂明 教授		

●科目の主題
この実習では、春季の教室巡検先となる調査地を選定し、現地調査と巡検の企画を行うとともに、その成果を報告書として公表するプロセスを学ぶ。受講生各自が設定したテーマに基づいて、自治体、企業、各種団体、住民への聞き取り調査、アンケート調査、観察、写真撮影、作図などを実施する。
●到達目標
調査地候補についての各種情報を収集し、事前調査を実施した上で、現地調査ならびに巡検を行う。巡検後も調査を継続して調査成果を授業時に報告するとともに、受講生全員で調査報告書を作成して公表する。こうした作業を通じて、フィールドワークの企画・実施・まとめという一連のプロセスを習得することが、この実習の到達目標である。
●授業内容・授業計画
下記の 3 段階を踏んで、現地調査を実施し、成果を報告・公表する。
第 1 回　ガイダンス
第 2 回　フィールドワークの企画 1（調査地域の選定）
第 3 回　フィールドワークの企画 2（調査地に関する文献・地図・史資料の収集整理）
第 4 回　調査テーマの選定と調査項目の検討 1（質問票調査の準備）
第 5 回　調査テーマの選定と調査項目の検討 2（聞き取り調査の準備）
第 6 回　調査テーマの選定と調査項目の検討 3（景観調査の準備）
第 7 回　フィールドワークの実施 1（景観調査）
第 8 回　フィールドワークの実施 2（土地利用調査）
第 9 回　フィールドワークの実施 3（地域構造調査）
第 10 回　フィールドワークの実施 4（経済活動調査）
第 11 回　フィールドワークの実施 5（地域文化調査）
第 12 回　フィールドワークの実施 6（社会生活調査）
第 13 回　フィールドワークのまとめと報告書作成 1（報告書の構成）
第 14 回　フィールドワークのまとめと報告書作成 2（図表の作成法）
第 15 回　フィールドワークのまとめと報告書作成 3（地図化）
●評価方法
平常点（出席状況と課題提出 60%）と報告書執筆内容（40%）により評価する。
●受講生へのコメント
「地理学野外調査実習Ⅰ」、「地理学実験実習Ⅰ」、「地理学実験実習Ⅱ」を履修済みであることが受講の前提である。現地調査の実施、収集した資料の整理と分析、成果報告書の作成に至るまで、個人またはグループでの作業が授業の中心となるので、受講にあたっては積極的に参加する姿勢が求められる。なお、現地調査・巡検に

参加しない場合には単位修得は認められないので、くれぐれも留意すること。

●参考文献・教材

テキスト：使用しない。

参考書：授業時に適宜指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBGEO3304	開講期	単位数	標準履修年次
150	**地理学演習 I** Seminar in Geography I			前月 2	2 単位	3 年
	旧科目名			担当教員名 大場 茂明 教授／山﨑 孝史 教授		

●科目の主題

地理学の諸分野における近年の学術雑誌論文の中から、受講生各自が関心ある文献を選び、レジュメを作成して発表し、それに基づき受講生全員で議論をする。

●到達目標

この演習を通じて、

①地理学における様々な研究分野と研究方法

②資料の収集・分析方法と、その分析結果の妥当性

③論文の書き方

を学んでもらう。

●授業内容・授業計画

各自が関心のあるテーマに基づき、学術雑誌に公表された論文を選択し、その内容を要約して発表する。受講生は報告内容に関する質疑・討論を行う。レジュメの作成方法、発表の要領など、詳細は第 1 回の授業で説明するので、必ず出席のこと。

第 1 回　授業の進め方と基本文献の紹介
第 2 回　受講生による報告
第 3 回　同上
第 4 回　同上
第 5 回　同上
第 6 回　同上
第 7 回　同上
第 8 回　同上
第 9 回　同上
第 10 回　同上
第 11 回　同上
第 12 回　同上
第 13 回　同上
第 14 回　同上
第 15 回　授業のまとめと後期への展開

●評価方法

出席状況（10%）、発表内容（60%）、質問など議論への参加状況（30%）により評価する。

●受講生へのコメント

必ず「地理学演習Ⅱ」をペアで受講すること。本演習は 4 年次の卒業論文執筆に向けて、地理学における研究方法や論文の書き方を先行研究から学ぶことを目指す。そのためには、自分が報告するだけではなく、他の受講生による発表を理解し、建設的な質疑・批判を行うことが重要である。したがって、授業への出席はもとより、議論への積極的参加が求められる。

●参考文献・教材

テキスト：使用しない。

参考書：授業時に適宜指示する。

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LBGEO3305	開講期	単位数	標準履修年次
151	**地理学演習Ⅱ** Seminar in Geography Ⅱ			後木 4	2 単位	3 年
	旧科目名			担当教員名 大場 茂明／山﨑 孝史 教授		

●科目の主題

「地理学演習Ⅰ」の受講を基礎に、地理的研究課題の選定、先行研究の渉猟、調査方法の検討、予備調査、発表と討論の各段階の作業を通して、地理学研究の理論・方法に精通し卒業論文の作成に備えます。

●到達目標

受講生は、この演習を通して 4 年次の卒業論文の研究課題を決定し、学期末に予定される卒業論文合同演習のための研究計画レポートを作成します。

●授業内容・授業計画

以下の計画に沿って授業を進めます。受講生は各週の課題にそって卒論計画を練っていきます。

第 1 回　地理的研究課題の発見
第 2 回　地理的研究課題の特定
第 3 回　研究課題発表・討論
第 4 回　先行研究の渉猟
第 5 回　先行研究の批判的摂取
第 6 回　先行研究展望・討論
第 7 回　調査方法の検討
第 8 回　調査方法の採用
第 9 回　調査方法発表・討論
第 10 回　調査地候補の選定
第 11 回　調査地の選定
第 12 回　調査地発表・討論
第 13 回　研究計画の作成
第 14 回　卒論研究計画の発表
第 15 回　卒論研究計画の完成

●評価方法

出席（10%）、課題提出・発表（60%）、研究計画書（30%）から評価します。

●受講生へのコメント

必ず「地理学演習Ⅰ」を合わせて受講してください。本演習は 4 年生次の卒業論文執筆に直接つながる演習として、具体的な卒業論文の研究計画を作成しますので、各自の研究課題・方法の具体化にとどまらず、相互討論を通してその洗練も目指します。したがって、自己の課題への取り組みに加え演習への恒常的参加、4 年生向けの卒論合同演習・論文発表会への出席も必要とされます。

●参考文献・教材

テキスト：使用しません。
参考書：授業時に適宜指示します。

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LBGEN3306	開講期	単位数	標準履修年次
152	**人間行動学データ解析法Ⅳ** Data Analysis in Human Behavioral Sciences Ⅳ			後月 3	2 単位	3・4 年
	旧科目名			担当教員名 木村 義成 准教授		

●科目の主題

人間行動学をはじめ、様々な統計処理を用いる学問において必要とされる、多変量解析の原理と方法について学習する。授業では実際に皆さんが行うデータ採取の課題を与え、結果を分析していく方式で行う。

●到達目標

多変量解析について、どのようなデータに対して、どのような分析を行い、どのように結果の解釈を行うか、の 3 点に焦点を絞って解説を行う。地理学や心理学の分野では、多変量解析を基礎とした研究が多数あるため、この演習を受講することにより、それらの論文を読みこなす能力を養って頂く。

●授業内容・授業計画

人間行動学をはじめ、様々な統計処理を用いる学問において必要とされる、多変量解析の原理と方法について学習する。授業は理論と実践の両面から行うものとする。理論においては、重回帰分析、クラスタ分析、主成分分析、因子分析などの各種分析方法について学習する。一方、実践においては、学術情報総合センターの端末室の SPSS を利用する。

第 1 回　・イントロダクション
第 2 回　・基本統計量①
第 3 回　・基本統計量②
第 4 回　・判断分析
第 5 回　・重回帰分析①
第 6 回　・重回帰分析②
第 7 回　・ロジステック回帰分析
第 8 回　・各種の回帰分析
第 9 回　・クラスタ分析
第 10 回　・数量化理論Ⅰ類
第 11 回　・数量化理論Ⅱ類
第 12 回　・主成分分析
第 13 回　・因子分析
第 14 回　・数量化理論Ⅲ類
第 15 回　・総括

●評価方法

出席点（60%）、レポート（40%）の割合を目安に総合的に評価する。

●受講生へのコメント

統計処理は、実際にデータを用いて取り組まないと理解が進まない。本演習で紹介する多変量解析は広くマーケティング等で利用されている手法なので、是非理解してもらいたい。

なお、本講義は人間行動学データ解析法 IIb などの講義を既に単位取得し、統計学の基礎を既に学んでいることを前提とする。

●参考文献・教材

教材・参考文献については演習中に逐次紹介する。

※）第1回のガイダンスには必ず受講すること。第1回を受講していない場合は、演習の参加を認めないことがある。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBGEO3208	開講期	単位数	標準履修年次
153	**自然地理学概論** Introduction to Physical Geography			後火 2	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 小倉 博之 非常勤講師		

●科目の主題

自然地理学は地理学の一分野であり，自然科学に属する学問でもあります。本授業では，自然地理学の視点に立って地表付近で展開する自然現象を理解し，自然現象と人間活動との関わり，ならびに災害への対応を考えていきます。

●到達目標

地表空間で展開する自然現象の科学的理解を第 1 目標とし，さらに，たんなる知識習得にとどまらず自然現象を適切にとらえ，それに関する理論構築と法則追究ができることを目指します。

●授業内容・授業計画

上述の主題・目標にそって，プリント資料・プロジェクター等で図・表・写真を提示し解説する講義を主体とします。なお，受講者の理解を深めるために，作業や論理展開をともなう課題が出されます。各時限の内容は次の通りです。

第 1 回　自然地理学とは
第 2 回　自然地理学の歩み
第 3 回　自然現象のとらえ方 －－ 地形のスケール，海岸地形の解釈
第 4 回　自然現象の観察から理論の構築へ －－ 氷河・周氷河地形，地形発達の概念
第 5 回　地形をつくる作用 －－ 火山地形，山地地形，気候地形，乾燥地形
第 6 回　地質時代区分と年代 －－ 地球史の時間目盛り
第 7 回　新生代第四紀 －－「最近」の地球環境の変遷

第 8 回　平野の種類とその分布 －－ 侵食・堆積地形
第 9 回　日本の地質と地形 －－ 沖積平野の形成過程
第 10 回　沖積平野の特性
第 11 回　地震の発生源
第 12 回　内陸地震と活断層 －－ 変動地形
第 13 回　活断層地形 －－ 地殻変動の表出
第 14 回　活断層の調査方法と情報
第 15 回　純粋科学・応用科学としての自然地理学 －－ 地形と自然災害・防災

●評価方法

最終評価は，授業中に数回実施する小テスト・小レポートの評価点と定期試験の点数を総合し，絶対評価でおこないます。配点比率は前者が 30%，後者（定期試験）が 70%です。

●受講生へのコメント

本授業は毎回多くの図・表を使用して進行し、内容は回を追って深化していきますので、欠席すると理解が困難になります。ぜひともノートを作成し、解説内容、配付資料、板書などが有機的に関連づけられ、体系的な授業内容が理解できるように心掛けてください。内容理解のため、毎回 1 時間程度の復習が求められます。

配付資料は講義のほか、授業内の小試験でも使用しますので、過去に配付したものも毎回持参してください。

●参考文献・教材

教科書は指定せず、授業中に配付するプリントを使用します。おもな参考図書は次のとおりです。

池田安隆ほか「活断層とは何か」東京大学出版会.
太田陽子ほか編「日本の地形 6 近畿・中国・四国」東京大学出版会（他に本シリーズ各巻）.
貝塚爽平ほか編「写真と図でみる地形学」東京大学出版会.
貝塚爽平「平野と海岸を読む」岩波書店、自然景観の読み方 5.

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBGEO3209	開講期	単位数	標準履修年次
154	**地図学**			前水 1	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 吉村 智博 非常勤講師		

●科目の主題

古地図（絵図）を独立した史料として解読し、その歴史性を掘り下げる。また古地図（絵図）の特性に即した固有の役割を認識し、時代状況に位置づける。とともに古地図（絵図）に刻印された情報を読み取り、その社会的機能を分析する。

●到達目標

古地図（絵図）作製の歴史的背景を理解するともに、それぞれの内容および特質について考察することを目標とする。

●授業内容・授業計画

古代律令国家から近代国民国家にいたる長期的なスパンにおいて古地図（絵図）の変遷とその特徴を概観することになる。レジュメによる解説とあわせて、プレゼンテーションによる古地図（絵図）の投影をおこない、視覚的に理解できるよう進めていく。

第 1 回　「地図学入門」 ガイダンス（授業概要）と地図学の可能性について
第 2 回　「行基図論」 鎌倉時代に作製されたいわゆる「行基図」の内容と地図史的位置について
第 3 回　「洛中洛外図論」 狩野派が中心となって描いた洛中洛外図屏風の特質について
第 4 回　「世界図論」 ヨーロッパ文化との接触によって誕生した世界図のコスモロジーについて
第 5 回　「伊能図論」 伊能忠敬が中心となった精緻な日本図の作製過程について
第 6 回　「国絵図論」 江戸幕府によって都合 4 回にわたり作製された国絵図の経緯について
第 7 回　「村絵図論」 土地・治水・争論などに際して作製された絵図に描かれた村落の景観について
第 8 回　「町絵図論①－大阪」 商都の都市域を克明に描いた版行絵図について
第 9 回　「町絵図論②－京都」 古都の改造によって誕生した町の姿を刻印した版行絵図について
第 10 回　「作製技術論」 古地図（絵図）の材質・種類、測量・技法、作製・修復について
第 11 回　「展示公開論」 多様な制約とタブーを排して古地図（絵図）を公開する意義と課題について
第 12 回　「近代地図論」 近代国民国家の一大プロジェクトとしての基本図の作製とその特徴について
第 13 回　「遊覧図論」 観光と遊覧を主題に描かれたパノラマ図と博覧会・名勝旧跡との関係について

第 14 回　「航空写真論」 飛行機による測量と記録行為と記録された都市空襲の実態について
第 15 回　授業内レポートの作成

●評価方法
出席とレポートの内容によって判定する。全体点数を、出席 50%、レポート 50%で按分し評価する。
●受講生へのコメント
古地図（絵図）の特質や背景を歴史貫通的に追跡します。レジュメによる解説とあわせてプレゼンテーションでの古地図（絵図）の投影などもおこなうので、比較的ビジュアルな内容の授業となります。
●参考文献・教材
毎回の授業の中で関連書籍を明示します。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBGEO3211	開講期	単位数	標準履修年次
155	地理学特講 I Special Lecture in Geography I			後月 2	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 水内 俊雄 教授		

●科目の主題
都市社会・政治地理学の実践：都市地域における生活困窮問題、住宅貧困問題、特にホームレス問題にどのように接近し、観察し、関係者と接し、問題の改善にあたっての仕組みづくり、施策づくりの後方支援に関与することを、国内外のフィールドも紹介しながら、身につけてゆくことをめざす。とくに脱ホームレス支援、居住福祉支援というフィールドに焦点をあてて、如上の課題を具体的に紹介したい。一面この分野における NPO、NGO、あるいは社会的企業研究でもある。
●到達目標
水内自身が、脱ホームレス支援の NPO の理事として活動しているが、その活動の意味と課題を実感してもらうような講義をめざしている。そのために、現場の支援者（NPO、社会的企業ほか）にも講義に登場してもらいながら、受講生の率直な意見をフィードバックする形で、対話型の授業もめざしたい。脱ホームレス支援は、総合的な生活支援に他ならない。そうしたスキルやモチベーションを少しでも学んでもらいたい。教科書や一般書籍ではなかなか得られない事実が満載であるので、みなさんの生き方や就職のありかたを考える上でも大いに参考になることを期待している。
●授業内容・授業計画
前半は、座学を中心に、生活困窮者問題と都市問題の関わりについて、社会保障、セーフティネットの再編と関連させながら課題の摘出を行う。特にホームレス問題やインナーシティ問題に具体の状況を紹介しながら、現状の最前線を知ってもらう。後半は、実際に地域に出てフィールドワークを行い、特に支援の現場に焦点をあて、現場の声や地域状況を肌で感じてもらう。水内が関係する企画の紹介も行い、自主的に参加してもらう機会も提供する。
第 1 回　セーフティネットの重荷と大学生として、大学としてわれわれが考えるべきこと
第 2 回　セーフティネットのほころび：その 1　ホームレス問題とハウスレス問題
第 3 回　新しいホームレス、ネットカフェ難民、派遣切り、ワーキングプア、そして生活困窮者問題
第 4 回　脱ホームレス支援が居住福祉支援につながる実践事例の紹介：その 1
第 5 回　脱ホームレス支援が居住福祉支援につながる実践事例の紹介：その 2
第 6 回　居住福祉の支援と社会的不動産、NPO との関係
第 7 回　社会的企業、NPO 論と都市論との関係の整理
第 8 回　居住福祉の支援は都市再生につながるその実例紹介
第 9 回　現場訪問その 1 寄せ場、簡易宿所集中地域における脱ホームレス支援の実態
第 10 回　現場訪問その 2：中間施設としての無料低額宿泊所の役割と NPO の機能
第 11 回　現場訪問その 3：NPO による支援付住宅という中間施設を用いた脱ホームレス支援
第 12 回　現場訪問その 4：脱ホームレス支援におけるアフターケア支援の実態
第 13 回　現場訪問その 5：アートを生かした新しいまちづくり現場
第 14 回　現場訪問その 6：社会的不動産業による新しいまちづくり現場
第 15 回　現場訪問その 7：社会的企業による新しいまちづくり現場
●評価方法
授業やフィールドワーク毎のミニレポートによる平常点とする。
●受講生へのコメント
現場感覚を養ってもらうために、ゲストスピーカーや関連するプログラムへの参加、あるいはフィールドワークを行うので、体を動かして、目を動かして、五感を働かせて、問題に対処してもらう。大学での講義スタイルから少々異

なるので、好奇心あふれる探究心の持ち主が授業参加してくれるとうれしい。

●参考文献・教材

『モダン都市の系譜―地図から読み解く社会と空間―』（ナカニシヤ出版）を参考書として紹介しておく。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBGEO3212	開講期	単位数	標準履修年次
156	**地理学特講Ⅱ** Special Lecture in Geography II			後金 3	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 山口 覚 非常勤講師		

●科目の主題

空間的な移動や都市空間との関わりの中で生成する社会と文化、近代国家の変容や狭間におけるアイデンティティの変容・再構成といった社会地理学の基礎的なテーマについて具体的な事例から見ていく。

●到達目標

それぞれの事例は簡潔な理論によってまとめられるようなものではない。地理学（ないし歴史地理学）的な説明方法に慣れてもらいたい。

●授業内容・授業計画

まずイントロダクションでは朝鮮寺と呼ばれる在日コリアンの宗教施設などについて触れる。本編では 4 つのテーマを取り上げる予定である。(1) 大阪大都市圏における沖縄出身者。(2) 集団就職と呼ばれた若年労働力移動の制度。(3) アメリカ合衆国の都市空間との関係の中で生み出された音楽（ラップ／デトロイト・テクノ）。(4) イギリス・スコットランドにおける独立論やスコットランド系ディアスポラの動向，文化の生成。空間と社会の関係史がこの授業のテーマとなる。

第 1 回　イントロダクション
第 2 回　大阪大都市圏と沖縄出身者（1）
第 3 回　大阪大都市圏と沖縄出身者（2）
第 4 回　大阪大都市圏と沖縄出身者（3）
第 5 回　集団就職（1）：若年労働力移動の制度
第 6 回　集団就職（2）：若年労働者の実存的問題
第 7 回　都市空間と文化（1）：アメリカの黒人社会と脱工業化
第 8 回　都市空間と文化（2）：デトロイトと音楽（1）
第 9 回　都市空間と文化（3）：デトロイトと音楽（2）
第 10 回　スコットランド（1）：イギリスという国？
第 11 回　スコットランド（2）：脱工業化と独立論
第 12 回　スコットランド（3）：2 つのナショナリズムと移民社会
第 13 回　スコットランド（4）：タータンという文化
第 14 回　スコットランド（5）：ディアスポラ・ツーリズム
第 15 回　授業中試験

●評価方法

最終回に実施する授業中試験（100%）で評価する（予定）。

●受講生へのコメント

状況に応じて授業内容を変更する場合がある。

●参考文献・教材

特になし。必要に応じて適宜プリントを配布する。

言 語 文 化 学 科

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LCJPN2101	開講期	単位数	標準履修年次
157	国文学史Ⅰ History of Japanese Literature Ⅰ			前火２	２単位	１～３年
	旧科目名			担当教員名 久堀 裕朗 准教授		

●科目の主題

近世人形浄瑠璃史

●到達目標

作品が生まれた時代と作品内容との間には、密接な相関関係があることを理解する。

●授業内容・授業計画

江戸時代、人形浄瑠璃の作品内容は、時代の変化に応じてどのように展開していったのかを概観する。

第１回　ガイダンス／人形浄瑠璃について
第２回　浄瑠璃御前物語
第３回　金平浄瑠璃①
第４回　金平浄瑠璃②
第５回　宇治加賀掾の浄瑠璃①
第６回　宇治加賀掾の浄瑠璃②
第７回　近松の浄瑠璃①
第８回　近松の浄瑠璃②
第９回　近松の浄瑠璃③
第10回　近松の浄瑠璃④
第11回　近松没後、享保期の浄瑠璃①
第12回　近松没後、享保期の浄瑠璃②
第13回　近松没後、元文・寛保期の浄瑠璃①
第14回　近松没後、元文・寛保期の浄瑠璃②
第15回　まとめ

●評価方法

期末試験と平常点（授業時に書いてもらうコメントシートなど）による。

●受講生へのコメント

授業では各作品の一部しか取り上げることができないが、受講者はそれぞれの関心に応じて作品を選び、全体を読んだり、現在の文楽の舞台を観るなどして、更に人形浄瑠璃の世界に親しんでほしい。

●参考文献・教材

教材
プリントを配布する。
参考文献
授業中に指示する。

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LCJPN2102	開講期	単位数	標準履修年次
158	国文学史Ⅱ History of Japanese Literature Ⅱ			後火２	２単位	１～３年
	旧科目名			担当教員名 久堀 裕朗 准教授		

●科目の主題

近世人形浄瑠璃史

●到達目標

作品が生まれた時代と作品内容との間には、密接な相関関係があることを理解する。

●授業内容・授業計画

江戸時代、人形浄瑠璃の作品内容は、時代の変化に応じてどのように展開していったのかを概観する。

第１回　ガイダンス

第 2 回　人形浄瑠璃の黄金時代、三大名作①
第 3 回　人形浄瑠璃の黄金時代、三大名作②
第 4 回　人形浄瑠璃の黄金時代、三大名作③
第 5 回　人形浄瑠璃の黄金時代、三大名作④
第 6 回　人形浄瑠璃の黄金時代、三大名作⑤
第 7 回　人形浄瑠璃の黄金時代、三大名作⑥
第 8 回　近松半二・菅専助の浄瑠璃①
第 9 回　近松半二・菅専助の浄瑠璃②
第 10 回　近松半二・菅専助の浄瑠璃③
第 11 回　近松半二・菅専助の浄瑠璃④
第 12 回　太閤記物の流行と 19 世紀の浄瑠璃①
第 13 回　太閤記物の流行と 19 世紀の浄瑠璃②
第 14 回　太閤記物の流行と 19 世紀の浄瑠璃③
第 15 回　まとめ

●評価方法
期末試験と平常点（授業時に書いてもらうコメントシートなど）による。
●受講生へのコメント
授業では各作品の一部しか取り上げることができないが、受講者はそれぞれの関心に応じて作品を選び、全体を読んだり、現在の文楽の舞台を観るなどして、更に人形浄瑠璃の世界に親しんでほしい。
●参考文献・教材
教材
プリントを配布する。
参考文献
授業中に指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCJPN3201	開講期	単位数	標準履修年次
159	国語学基礎論 Introduction to Japanese Linguistics			前月 4	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 丹羽 哲也 教授		

●科目の主題
日本語研究の基礎。
●到達目標
日本語文法に関わる基礎的な知識を習得し、言葉についての思考方法を身につける。
●授業内容・授業計画
現代語文法と古典語文法について、両者を対照しながら解説する。毎回、演習問題を課す。
第 1 回　導入
第 2 回　文の構造と品詞
第 3 回　代名詞の用法
第 4 回　形容動詞の問題
第 5 回　動詞の活用
第 6 回　活用の変遷
第 7 回　格関係
第 8 回　「は」と「が」
第 9 回　係り結び
第 10 回　述語の構造
第 11 回　動詞の自他と態（ヴォイス）
第 12 回　時制と相（アスペクト）
第 13 回　叙法（モダリティ）と終助詞
第 14 回　接続関係
第 15 回　総括
●評価方法
授業中に課される課題の提出（1.5 割）と学期末の試験（8.5 割）による。

●受講生へのコメント
日本語研究の基礎を扱うが、毎回の課題など決して平易ではない。
●参考文献・教材
プリントを配布する。参考文献は授業中に指示する。

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LCJPN3202	開講期	単位数	標準履修年次
160	国語学方法論 Methods of Japanese Linguistics			後月 4	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 丹羽 哲也 教授		

●科目の主題
類義語の分析。
●到達目標
言葉の意味分析を通して、自分の普段使っている言葉を内省し、言語の体系性・論理性と言語使用の柔軟性について自覚を深める。
●授業内容・授業計画
受講生が課題として与えられる類義語を比較・考察し、発表資料を作成して、発表する。それをもとに、受講生全員で議論する。
第 1 回　発表資料作成の方法と用例データについての説明。
第 2 回　語義分析の方法についての解説。
第 3 回　動詞・形容詞の類義語（1）
第 4 回　動詞・形容詞の類義語（2）
第 5 回　動詞・形容詞の類義語（3）
第 6 回　動詞・形容詞の類義語（4）
第 7 回　副詞の類義語（1）
第 8 回　副詞の類義語（2）
第 9 回　副詞の類義語（3）
第 10 回　副詞の類義語（4）
第 11 回　名詞の類義語（1）
第 12 回　名詞の類義語（2）
第 13 回　名詞の類義語（3）
第 14 回　名詞の類義語（4）
第 15 回　レポート指導
●評価方法
平常点（発表内容、および、発表担当でない時の発言ぶり）と学期末のレポートによる。
●受講生へのコメント
国語辞典に載っている意味記述は十分とは言えないものが少なくなく、より深く正確な意味の定義を考える。担当者は作例と電子テキストによる用例を検討し、その類義語の間に直感的に感じられる微妙な意味の違いを論理的に説明することが求められる。他の受講生は、その発表について自分の意見を表明することが求められる。
●参考文献・教材
参考文献は授業中に指示する。

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LCJPN3203	開講期	単位数	標準履修年次
161	国語国文学講読 I Readings in Japanese Language and Literature I			前木 2	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 奥野 久美子 准教授		

●科目の主題
川端康成「掌の小説」講読
●到達目標
文庫版で 120 編あまりの川端康成の掌編小説（超短篇小説）を精読する。初出の確認、本文校訂と注釈、および先行研究の調査研究を中心とし、一言一句をおろそかにしない読みにより、作品や作家とその時代への理解を

深めることを目標とする。あわせて近代文学の研究方法の基礎を身につける。

●授業内容・授業計画

受講生各自が作品を選び、調査研究し、発表する。担当者以外の受講生は討議に参加し、受講生全員で作品の理解を深めていく。

第 1 回　ガイダンス
第 2 回　上回生による発表と討議 1
第 3 回　上回生による発表と討議 2
第 4 回　2 回生による発表と討議 1
第 5 回　2 回生による発表と討議 2
第 6 回　2 回生による発表と討議 3
第 7 回　2 回生による発表と討議 4
第 8 回　2 回生による発表と討議 5
第 9 回　2 回生による発表と討議 6
第 10 回　2 回生による発表と討議 7
第 11 回　2 回生による発表と討議 8
第 12 回　2 回生による発表と討議 9
第 13 回　2 回生による発表と討議 10
第 14 回　2 回生による発表と討議 11
第 15 回　2 回生による発表と討議 12

●評価方法

発表内容、討議への参加状況と学期末のレポートによる。

●受講生へのコメント

受講前にテキストを通読し、毎回の授業前にはその回に扱う箇所を再度熟読しておくこと。受講生が授業を作るという意識を持ち、自分の担当でない場合も、積極的に質問・意見を出し、討議の活発化に努めること。

●参考文献・教材

テキスト：川端康成『掌の小説』（新潮文庫、定価 907 円）※旧版はページ数が異なる場合があるので、できるだけ新刊で入手できるものを購入。

参考文献：

『川端康成全集』（新潮社、1980 年代刊）
『川端康成全作品研究事典』（勉誠出版、1998）
『伊豆と川端文学事典』（勉誠出版、1999）
『詩魂の源流　掌の小説』（川端文学研究会編、教育出版センター、1977）
『川端康成「掌の小説」研究』（松坂俊夫著、教育出版センター、1983）
『論集川端康成 掌の小説』（川端文学研究会編、おうふう、2001）
森晴雄著『川端康成「掌の小説」論』（5 編シリーズ、龍書房）（『「心中」その他』1997、『「貧者の恋人」その他』2000、『「雨傘」その他』2003、『「日向」その他』2007、『「有難う」その他』2012）

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCJPN3204	開講期	単位数	標準履修年次
162	**国語国文学講読Ⅱ** Readings in Japanese Language and Literature Ⅱ			後木 2	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 奥野 久美子 准教授		

●科目の主題

川端康成「掌の小説」講読（後半）

●到達目標

文庫版で 120 編あまりの川端康成の掌編小説（超短篇小説）を精読する。初出の確認、本文校訂と注釈、および先行研究の調査研究を中心とし、一言一句をおろそかにしない読みにより、作品や作家とその時代への理解を深めることを目標とする。あわせて近代文学の研究方法の基礎を身につける。

●授業内容・授業計画

受講生各自が、前期にとりあげた作品以外から、対象作品を選び、調査研究し、発表する。担当者以外の受講生は討議に参加し、受講生全員で作品の理解を深めていく。

第 1 回　ガイダンス
第 2 回　上回生による発表と討議 1

第 3 回　上回生による発表と討議 2
第 4 回　2 回生による発表と討議 1
第 5 回　2 回生による発表と討議 2
第 6 回　2 回生による発表と討議 3
第 7 回　2 回生による発表と討議 4
第 8 回　2 回生による発表と討議 5
第 9 回　2 回生による発表と討議 6
第 10 回　2 回生による発表と討議 7
第 11 回　2 回生による発表と討議 8
第 12 回　2 回生による発表と討議 9
第 13 回　2 回生による発表と討議 10
第 14 回　2 回生による発表と討議 11
第 15 回　2 回生による発表と討議 12

●評価方法

発表内容、討議への参加状況と学期末のレポートによる。

●受講生へのコメント

・前期の国語国文学講読 I に続くものであるが、必ずしも前期の受講を必要としない。後期のみの受講も可。
・受講前にテキストを通読し、毎回の授業前にはその回に扱う箇所を再度熟読しておくこと。受講生が授業を作るという意識を持ち、自分の担当でない場合も、積極的に質問・意見を出し、討議の活発化に努めること。

●参考文献・教材

テキスト：川端康成『掌の小説』（新潮文庫、定価 907 円）※旧版はページ数が異なる場合があるので、できるだけ新刊で入手できるものを購入。

参考文献：
『川端康成全集』（新潮社、1980 年代刊）
『川端康成全作品研究事典』（勉誠出版、1998）
『伊豆と川端文学事典』（勉誠出版、1999）
『詩魂の源流　掌の小説』（川端文学研究会編、教育出版センター、1977）
『川端康成「掌の小説」研究』（松坂俊夫著、教育出版センター、1983）
『論集川端康成 掌の小説』（川端文学研究会編、おうふう、2001）
森晴雄著『川端康成「掌の小説」論』（5 編シリーズ、龍書房）（『「心中」その他』1997、『「貧者の恋人」その他』2000、『「雨傘」その他』2003、『「日向」その他』2007、『「有難う」その他』2012）

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCJPN3205	開講期	単位数	標準履修年次
163	国語国文学講読Ⅲ Readings in Japanese Language and Literature Ⅲ			前月 3	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 山本 真由子 講師		

●科目の主題

『和泉式部日記』講読

●到達目標

宮内庁書陵部蔵『和泉式部日記』（三条西家旧蔵本）を、詳しく読み解くことを通して、平安時代の文学作品を注釈する際に必要となる文献を知り、他の作品を読み解く際に応用できるようになることを目標とする。また、写本の影印を用いて読むことにより、くずし字に親しみ、併せて書物の成立と伝来について考える視点を養う。

●授業内容・授業計画

『和泉式部日記』は、平安時代の仮名日記である。まず、学期初めに、平安時代の日記文学と『和泉式部日記』について概説し、文献調査方法などについて講義する。その後、受講者が各自の担当箇所を翻字、調査して、発表する。発表を承けて、他の受講者も質疑に参加し、受講者全員で本作を読み解いてゆく。

第 1 回　ガイダンス　平安時代の日記文学について
第 2 回　『和泉式部日記』について
第 3 回　文献調査方法／平安時代の文学作品の写本・くずし字について
第 4 回　受講者による発表・質疑
第 5 回　受講者による発表・質疑

第 6 回　受講者による発表・質疑
第 7 回　受講者による発表・質疑
第 8 回　受講者による発表・質疑
第 9 回　受講者による発表・質疑
第 10 回　受講者による発表・質疑
第 11 回　受講者による発表・質疑
第 12 回　受講者による発表・質疑
第 13 回　受講者による発表・質疑
第 14 回　受講者による発表・質疑
第 15 回　まとめ／レポート提出

●評価方法

授業時の発表と、発表後に質疑をふまえて改訂し学期末に提出するレポート（発表レジュメ）による。また授業中不定期に翻字の小テストを行い、その成績も評価に加味する。

●受講生へのコメント

自分の担当ではない場合も、毎回の授業前には、その回に扱う箇所を翻字しておくこと。

●参考文献・教材

教材
プリントを配布する。
参考文献
授業時に詳しく指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCJPN3206	開講期	単位数	標準履修年次
164	**国語国文学講読Ⅳ** Readings in Japanese Language and Literature Ⅳ			後月 3	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 山本 真由子 講師		

●科目の主題

『竹取物語』講読

●到達目標

天理図書館蔵『竹取物語』（天正本）を、他の諸本と比較して、詳しく読み解くことを通して、平安時代の文学作品の本文校訂の方法と注釈する際に必要となる文献を知り、他の作品を読み解く際に応用できるようになることを目標とする。また、写本の影印を用いて読むことにより、くずし字に親しみ、併せて書物の成立と伝来について考える視点を養う。

●授業内容・授業計画

『竹取物語』は、平安時代に成立した物語であるが、今日伝わる最古の写本は室町時代のものである。本作を読み解くには、本文の校訂が必要である。まず、学期初めに、平安時代の物語文学と『竹取物語』の諸本について講義する。その後、受講者が各自の担当箇所を翻字、調査して、発表する。発表を承けて、他の受講者も質疑に参加し、受講者全員で本作を読み解いてゆく。

第 1 回　ガイダンス　平安時代の物語文学について
第 2 回　『竹取物語』の諸本について
第 3 回　受講者による発表・質疑
第 4 回　受講者による発表・質疑
第 5 回　受講者による発表・質疑
第 6 回　受講者による発表・質疑
第 7 回　受講者による発表・質疑
第 8 回　受講者による発表・質疑
第 9 回　受講者による発表・質疑
第 10 回　受講者による発表・質疑
第 11 回　受講者による発表・質疑
第 12 回　受講者による発表・質疑
第 13 回　受講者による発表・質疑
第 14 回　受講者による発表・質疑
第 15 回　まとめ／レポート提出

●評価方法
授業時の発表と、発表後に質疑をふまえて改訂し学期末に提出するレポート（発表レジュメ）による。また授業中不定期に翻字の小テストを行い、その成績も評価に加味する。
●受講生へのコメント
自分の担当ではない場合も、毎回の授業前には、その回に扱う箇所を翻字しておくこと。
●参考文献・教材
教材
プリントを配布する。
参考文献
授業時に詳しく指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCJPN3301	開講期	単位数	標準履修年次
165	国語国文学演習 I Seminar in Japanese Language and Literature I			前水 3	2 単位	3・4 年
	旧科目名			担当教員名 久堀 裕朗 准教授		

●科目の主題
江戸時代の人形浄瑠璃作品を原本の影印によって精読しながら、先行の注釈書では解決できない、解釈上の問題点を見出して検討し、加えて人形浄瑠璃という芸能の特質について理解を深める。
●到達目標
作品の精読作業を通じ、近世の文学作品を注釈する際に必要となる同時代の基本文献について広範な知識を得、実証的な文献の扱い方を学んで、他の作品を精読・分析する際に応用できる力を身につけることを目標とする。また、近世の板本を読むことによって、くずし字に親しみ、かつ板本に関する書誌的知識を習得する。
●授業内容・授業計画
近松『心中重井筒』精読。
『心中重井筒』は、宝永 4 年（1707）大坂竹本座初演の世話浄瑠璃である。この授業では、受講者が各自の担当範囲を調査・発表する演習形式で本作を精読していく。まず学期初めの 3 回程度で、人形浄瑠璃という芸能の特徴、浄瑠璃を読む際に留意すべき点、文献調査方法等について講義する。以降受講者が順にそれぞれの担当部分について発表し、それを承けて他の出席者も参加して質疑を行うという形で授業を進めていく。なお原作を読むだけでなく、現在の文楽の舞台映像を参考に、その演出についても検討を加える。
第 1 回　ガイダンス／近松の世話浄瑠璃について
第 2 回　『心中重井筒』について
第 3 回　文献調査方法
第 4 回　受講者による発表・質疑
第 5 回　受講者による発表・質疑
第 6 回　受講者による発表・質疑
第 7 回　受講者による発表・質疑
第 8 回　受講者による発表・質疑
第 9 回　受講者による発表・質疑
第 10 回　受講者による発表・質疑
第 11 回　受講者による発表・質疑
第 12 回　受講者による発表・質疑
第 13 回　受講者による発表・質疑
第 14 回　受講者による発表・質疑
第 15 回　まとめ／レポート提出
●評価方法
授業時の発表と、発表後に補足を加えて学期末に提出してもらうレポート（発表レジュメ）によって評価する。また授業中不定期に小テストを行うので、その成績も評価に加味する。
●受講生へのコメント
担当範囲だけではなく、全体をじっくり読みこみ、毎回積極的に授業参加することによって、人形浄瑠璃の世界に親しんでほしい。
●参考文献・教材
教材
プリントを配布する。

参考文献
『近松全集』（岩波書店）その他、授業時に詳しく指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCJPN3302	開講期	単位数	標準履修年次
166	**国語国文学演習Ⅱ** Seminar in Japanese Language and Literature Ⅱ			後水 3	2 単位	3・4 年
	旧科目名			担当教員名 久堀 裕朗 准教授		

●科目の主題
近松の世話浄瑠璃作品を原本の影印によって精読しながら、先行の注釈書では解決できない、解釈上の問題点を見出して検討する。
●到達目標
作品の精読作業を通じ、近世の文学作品を注釈する際に必要となる同時代の基本文献について広範な知識を得、実証的な文献の扱い方を学んで、他の作品を精読・分析する際に応用できる力を身につけることを目標とする。また近世の板本を読むことによって、くずし字に親しみ、かつ板本に関する書誌的知識を習得する。
●授業内容・授業計画
近松『鑓の権三重帷子』精読
『鑓の権三重帷子』は、享保 2 年（1717）大坂竹本座初演の世話浄瑠璃である。この授業では、受講者が各自の担当範囲を調査・発表する演習形式で本作を精読していく。まず学期初めの 3 回程度で、扱う作品や浄瑠璃の曲節などについて講義する。以降受講者が順にそれぞれの担当部分について発表し、それを承けて他の出席者も参加して質疑を行うという形で授業を進めていく。なお原作を読むだけでなく、現在の文楽の舞台映像を参考に、その演出についても検討を加える。

第 1 回　ガイダンス
第 2 回　『鑓の権三重帷子』について
第 3 回　浄瑠璃の曲節について
第 4 回　受講者による発表・質疑
第 5 回　受講者による発表・質疑
第 6 回　受講者による発表・質疑
第 7 回　受講者による発表・質疑
第 8 回　受講者による発表・質疑
第 9 回　受講者による発表・質疑
第 10 回　受講者による発表・質疑
第 11 回　受講者による発表・質疑
第 12 回　受講者による発表・質疑
第 13 回　受講者による発表・質疑
第 14 回　受講者による発表・質疑
第 15 回　まとめ／レポート提出

●評価方法
授業時の発表と、発表後に補足を加えて学期末に提出してもらうレポート（発表レジュメ）によって評価する。また授業中不定期に翻字の小テストを行うので、その成績も評価に加味する。
●受講生へのコメント
担当範囲だけではなく、全体をじっくり読みこみ、毎回積極的に授業参加することによって、浄瑠璃の世界に親しんでほしい。
●参考文献・教材
教材
プリントを配布する。
参考文献
『近松全集』（岩波書店）その他、授業時に詳しく指示する。

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LCJPN3303	開講期	単位数	標準履修年次
167	国語国文学演習Ⅲ Seminar in Japanese Language and Literature Ⅲ			前水 2	2 単位	3・4 年
	旧科目名			担当教員名 小林 直樹 教授		

●科目の主題
『閑居友』講読
●到達目標
『閑居友』の精読を通じて、中世の文学作品を、その作品が成立した時代の文脈の中に位置づけて読み解いていく基本姿勢の習得を目指す。
●授業内容・授業計画
九条家出身の遁世僧、慶政の手になる説話集『閑居友』を注釈的に読解する。受講生は分担して報告を行い、その後の全体討議を経てテキスト理解を深めていく。

第 1 回　ガイダンス
第 2 回　『閑居友』解説と講読
第 3 回　『閑居友』解説と講読
第 4 回　『閑居友』解説と講読
第 5 回　受講生による報告と討議
第 6 回　受講生による報告と討議
第 7 回　受講生による報告と討議
第 8 回　受講生による報告と討議
第 9 回　受講生による報告と討議
第 10 回　受講生による報告と討議
第 11 回　受講生による報告と討議
第 12 回　受講生による報告と討議
第 13 回　受講生による報告と討議
第 14 回　受講生による報告と討議
第 15 回　まとめ

●評価方法
平常点とレポートによる。授業回数の 3 分の 2 以上出席していない場合、評価対象としない。
●受講生へのコメント
本科目は後期の演習Ⅳと併せて受講することが極めて望ましい。受講する場合、自分の担当でない場合も、下読みを十分に行って授業に臨み、積極的に質問・意見を出すよう努めてほしい。
●参考文献・教材
テキスト：プリントによる。
参考書：新日本古典文学大系『宝物集 閑居友 比良山古人霊託』（岩波書店）
中世の文学『閑居友』（三弥井書店）
角川ソフィア文庫『発心集（上・下）』（KADOKAWA）

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LCJPN3304	開講期	単位数	標準履修年次
168	国語国文学演習Ⅳ Seminar in Japanese Language and Literature Ⅳ			後水 2	2 単位	3・4 年
	旧科目名			担当教員名 小林 直樹 教授		

●科目の主題
『閑居友』講読。
●到達目標
『閑居友』の精読を通じて、中世の文学作品を、その作品が成立した時代の文脈の中に位置づけて読み解いていく基本姿勢の習得を目指す。
●授業内容・授業計画
前期の演習Ⅲに引き続き、『閑居友』を注釈的に読解する。担当者による報告と、受講者全員による討議を経て、テキスト理解を深めていく。

第 1 回　受講生による報告と討議
第 2 回　受講生による報告と討議
第 3 回　受講生による報告と討議
第 4 回　受講生による報告と討議
第 5 回　受講生による報告と討議
第 6 回　受講生による報告と討議
第 7 回　受講生による報告と討議
第 8 回　受講生による報告と討議
第 9 回　受講生による報告と討議
第 10 回　受講生による報告と討議
第 11 回　受講生による報告と討議
第 12 回　受講生による報告と討議
第 13 回　受講生による報告と討議
第 14 回　受講生による報告と討議
第 15 回　まとめ

●評価方法

平常点とレポートによる。授業回数の 3 分の 2 以上出席していない場合、評価対象としない。

●受講生へのコメント

本科目は前期の演習Ⅲと併せて受講することが極めて望ましい。受講する場合は、自分が報告者でない場合も、必ずテキストの下読みを行った上で授業に臨み、積極的に質問・意見を出してほしい。

●参考文献・教材

テキスト：プリントによる。
参考書：新日本古典文学大系『宝物集 閑居友 比良山古人霊託』（岩波書店）
中世の文学『閑居友』（三弥井書店）
角川ソフィア文庫『発心集（上・下）』（KADOKAWA）

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCJPN3305	開講期	単位数	標準履修年次
169	**国語国文学演習 V** Seminar in Japanese Language and Literature V			前木 4	2 単位	3・4 年
	旧科目名			担当教員名 丹羽 哲也 教授		

●科目の主題

語の歴史。『日本国語大辞典』の精読。

●到達目標

単語が歴史的にどう変遷していくか、その過程を文献資料によって明らかにしていくための方法を身につける。一つの語が様々な用法を派生・拡大していき、また、縮小していく、そういう流れの多様性と法則性を追究する。

●授業内容・授業計画

担当者は、課題の語について、古典文献（電子テキストも含む）から用例を収集し、『日本国語大辞典』（第二版）の記述を批判的に検討しながら、意味・用法の分析をし、いかなる変遷過程をたどってきたかという問題を考察、発表する。他の受講生はそれについて意見表明を求められる。

第 1 回　レジュメの作成方法、調査する資料についての説明。
第 2 回　言葉の意味と意味変化に関する概説（1）
第 3 回　言葉の意味と意味変化に関する概説（2）
第 4 回　発表と議論（1）
第 5 回　発表と議論（2）
第 6 回　発表と議論（3）
第 7 回　発表と議論（4）
第 8 回　発表と議論（5）
第 9 回　発表と議論（6）
第 10 回　発表と議論（7）
第 11 回　発表と議論（8）
第 12 回　発表と議論（9）
第 13 回　発表と議論（10）

第 14 回　発表と議論（11）
第 15 回　レポート指導

●評価方法
平常点と学期末のレポートによる。
●受講生へのコメント
各時代の用例を集めて分析するのは手間がかかることなので、準備に十分な時間をかけること。
●参考文献・教材
参考文献は授業中に指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCJPN3306	開講期	単位数	標準履修年次
170	国語国文学演習Ⅵ Seminar in Japanese Language and Literature Ⅵ			後木 4	2 単位	3・4 年
	旧科目名			担当教員名 丹羽 哲也 教授		

●科目の主題
日本語の諸相。
●到達目標
日本語がいかに変化して現在に至っているか、あるいは、日本語の現在の諸事象がいかなる歴史的背景を持っているか、自分で問題を設定して調べ、理解を深めていく力を養う。
●授業内容・授業計画
受講生各自が、日本語に関して興味を抱いている問題（意味、語源、文法、敬語、文体、音韻、表記、方言など）について、具体的なテーマを設定し、文献を調べたりデータを集めたりして考察を加え、複数回の発表をする。他の受講生は、それについての意見表明が求められる。
第 1 回　テーマ設定の相談、文献の紹介（1）
第 2 回　テーマ設定の相談、文献の紹介（2）
第 3 回　発表と議論（1）
第 4 回　発表と議論（2）
第 5 回　発表と議論（3）
第 6 回　発表と議論（4）
第 7 回　発表と議論（5）
第 8 回　発表と議論（6）
第 9 回　発表と議論（7）
第 10 回　発表と議論（8）
第 11 回　発表と議論（9）
第 12 回　発表と議論（10）
第 13 回　発表と議論（11）
第 14 回　発表と議論（12）
第 15 回　レポート指導
●評価方法
平常点と学期末のレポートによる。
●受講生へのコメント
あらかじめ、どんなテーマ・問題を設定するかある程度考えておくこと。
●参考文献・教材
参考文献は授業中に指示する。

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LCJPN3207	開講期	単位数	標準履修年次
171	**国語国文学特講Ⅰ** Special Lecture on Japanese Language and Literature Ⅰ			前月 2	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 奥野 久美子 准教授		

●科目の主題

芥川龍之介作品の精読

●到達目標

芥川龍之介の研究入門書をテキストに、研究の手順を受講生自らが実践することで身につけることを目標とする。

●授業内容・授業計画

芥川作品の中から受講生（人数によってはグループを作る）が各自研究対象作品を選び、本文校訂、注釈、先行研究をふまえた読解を中心に、作品の魅力を伝える抄出本文と鑑賞文（教科書のようなものをイメージしてもよい）を作成し、発表する。発表内容は受講生全員で討議し、必要に応じて担当教員が補足的な講義をする場合もある。

第 1 回　ガイダンス
第 2 回　作品選出と教員による模擬発表
第 3 回　受講生による研究発表 1
第 4 回　受講生による研究発表 2
第 5 回　受講生による研究発表 3
第 6 回　受講生による研究発表 4
第 7 回　受講生による研究発表 5
第 8 回　受講生による研究発表 6
第 9 回　受講生による研究発表 7
第 10 回　受講生による研究発表 8
第 11 回　受講生による研究発表 9
第 12 回　受講生による研究発表 10
第 13 回　受講生による研究発表 11
第 14 回　受講生による研究発表 12
第 15 回　まとめ（前期ベストテキストの選出と討議）

●評価方法

発表内容と、質疑応答等授業への参加状況、学期末のレポートによる。

●受講生へのコメント

対象作品は毎回熟読し、積極的に討議に参加すること。発表担当に際しては、最低でも 2 ～ 3 週間をかけた綿密な準備が必要である。

●参考文献・教材

テキスト：『芥川龍之介ハンドブック』（庄司達也編、鼎書房 2015）
参考文献：『芥川龍之介全集』（岩波書店、新版第 2 刷）
『芥川龍之介資料集』（山梨県立文学館、1995）
『芥川龍之介自筆未定稿図譜』（角田忠蔵編、大門出版美術出版部、1971）
※その他取り上げる作品に応じて授業内で指示する。

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LCJPN3208	開講期	単位数	標準履修年次
172	**国語国文学特講Ⅱ** Special Lecture on Japanese Language and Literature Ⅱ			後月 2	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 奥野 久美子 准教授		

●科目の主題

芥川龍之介作品の精読（後半）

●到達目標

芥川龍之介の研究入門書をテキストに、研究の手順を受講生自らが実践することで身につけることを目標とする。

●授業内容・授業計画

芥川作品のうち、前期で取り上げたもの以外から受講生（人数によってはグループを作る）が各自研究対象作

品を選び、本文校訂、注釈、先行研究をふまえた読解を中心に、作品の魅力を伝える抄出本文と鑑賞文（教科書のようなものをイメージしてもよい）を作成し、発表する。発表内容は受講生全員で討議し、必要に応じて担当教員が補足的な講義をする場合もある。

第 1 回　ガイダンス
第 2 回　作品選定
第 3 回　受講生による研究発表 1
第 4 回　受講生による研究発表 2
第 5 回　受講生による研究発表 3
第 6 回　受講生による研究発表 4
第 7 回　受講生による研究発表 5
第 8 回　受講生による研究発表 6
第 9 回　受講生による研究発表 7
第 10 回　受講生による研究発表 8
第 11 回　受講生による研究発表 9
第 12 回　受講生による研究発表 10
第 13 回　受講生による研究発表 11
第 14 回　受講生による研究発表 12
第 15 回　まとめ（後期ベストテキストの選出と討議）

●評価方法

発表内容と質疑など授業への参加姿勢、学期末レポートによる。

●受講生へのコメント

内容は前期の国語国文学特講 I と同様であるが、本授業の受講には必ずしも前期の受講を必要としない。後期のみの受講も可。対象作品は毎回熟読し、積極的に討議に参加すること。発表担当に際しては、最低でも 2 ～ 3 週間をかけた綿密な準備が必要である。

●参考文献・教材

教科書：『芥川龍之介ハンドブック』（庄司達也編、鼎書房 2015）
参考文献：『芥川龍之介全集』（岩波書店、新版第 2 刷）
『芥川龍之介資料集』（山梨県立文学館、1995）
『芥川龍之介自筆未定稿図譜』（角田忠蔵編、大門出版美術出版部、1971）
※その他取り上げる作品に応じて授業内で指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCJPN3307	開講期	単位数	標準履修年次
173	**国語国文学特論** Special Studies in Japanese Language and Literature			前木 3	2 単位	3・4 年
	旧科目名 国語国文学特論 I			担当教員名 水谷 隆 非常勤講師		

●科目の主題

中古和歌作品の注釈的読解

●到達目標

平安時代の和歌テキストを、文法や表現技法に注意しながら、正確・精密に読み解く能力を身につける。
古今集時代の和歌表現の特性についての知識を得る。

●授業内容・授業計画

はじめ、和歌史および和歌の表現技法について確認する。しかる後に、紀貫之撰『新撰和歌』中の歌を、受講生それぞれが担当して、文法や表現技法等に注意しながら調査・精読し、発表する。担当者以外の受講生も討議に加わり、理解を深めるという形式で授業を進める。

第 1 回　和歌史および『新撰和歌』についての概説
第 2 回　和歌の表現技法等の再確認 ①
第 3 回　和歌の表現技法等の再確認 ②
第 4 回　和歌テキストの読解と討議 ①
第 5 回　和歌テキストの読解と討議 ②
第 6 回　和歌テキストの読解と討議 ③
第 7 回　和歌テキストの読解と討議 ④
第 8 回　和歌テキストの読解と討議 ⑤

第 9 回　和歌テキストの読解と討議 ⑥
第 10 回　和歌テキストの読解と討議 ⑦
第 11 回　和歌テキストの読解と討議 ⑧
第 12 回　和歌テキストの読解と討議 ⑨
第 13 回　和歌テキストの読解と討議 ⑩
第 14 回　和歌テキストの読解と討議 ⑪
第 15 回　授業の総括

●評価方法
平常点（発表および討議への参加等）40%
学期末レポート 60%
●受講生へのコメント
担当者以外も、各回の授業で取り上げる歌について十分な予習をしてから授業に臨んでもらいたい。
●参考文献・教材
授業中に指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCJPN3308	開講期	単位数	標準履修年次
174	国語国文学特論演習 Special Seminar in Japanese Language and Literature			後木 3	2 単位	3・4 年
	旧科目名 国語国文学特論Ⅱ			担当教員名 水谷 隆 非常勤講師		

●科目の主題
『新撰和歌』の注釈的読解
●到達目標
平安時代の和歌テキストを、歌集という文脈の中において理解する能力を身につける。
和歌集のテキストを、一つのまとまりある作品として把握していく態度と方法を身につける。
●授業内容・授業計画
『新撰和歌』に収載された歌を、歌集における位置に注意しながら精読する。受講生それぞれが担当した歌について、調査・検討した結果を発表する。担当者以外の受講生も討議に加わり、理解を深めるという形式で授業を進める。
第 1 回　『新撰和歌』の構成に関する概説 ①
第 2 回　『新撰和歌』の構成に関する概説 ②
第 3 回　『新撰和歌』の読解と討議 ①
第 4 回　『新撰和歌』の読解と討議 ②
第 5 回　『新撰和歌』の読解と討議 ③
第 6 回　『新撰和歌』の読解と討議 ④
第 7 回　『新撰和歌』の読解と討議 ⑤
第 8 回　『新撰和歌』の読解と討議 ⑥
第 9 回　『新撰和歌』の読解と討議 ⑦
第 10 回　『新撰和歌』の読解と討議 ⑧
第 11 回　『新撰和歌』の読解と討議 ⑨
第 12 回　『新撰和歌』の読解と討議 ⑩
第 13 回　『新撰和歌』の読解と討議 ⑪
第 14 回　『新撰和歌』の読解と討議 ⑫
第 15 回　授業の総括
●評価方法
平常点（発表および討議への参加等）40%
学期末レポート 60%
●受講生へのコメント
担当者が、担当する作品について十分に調査・検討することは当然であるが、担当者以外も自分なりの解釈をした上で授業に参加し、実質的な討議ができるよう努力してもらいたい。
●参考文献・教材
授業中に指示する。

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LCCHN3201	開講期	単位数	標準履修年次
175	**中国語中国文学概論Ⅰ** Introduction to Chinese Linguistics and Literature Ⅰ			前火2	2単位	2・3年
	旧科目名 中国語学概論Ⅰ			担当教員名 岩本 真理 教授		

●科目の主題

まず中国語の共通語の成り立ちと、主だった方言の特徴について紹介する。次に、音韻、文法、語彙の三分野について講義を行った後に、言語習慣や、語彙・文法面でも変化を遂げつつある現状の一端を紹介する。

●到達目標

現代中国語について、全般的な知識を持ち、共通語における種々の特性に習熟することを目標とする。

●授業内容・授業計画

次のテーマを扱う。

第1回　中国語と周辺諸言語
第2回　方言の多様性
第3回　共通語の成立
第4回　音韻の特徴
第5回　文法の特徴1　孤立語、分析的言語
第6回　文法の特徴2　語の構成とフレーズ
第7回　文法の特徴3　補語の機能
第8回　文法の特徴4　アスペクト
第9回　文法の特徴5　処置文・受身文
第10回　文法の特徴6　複文の特性
第11回　語彙の特徴1　口語・書面語
第12回　語彙の特徴2　類義語・反義語
第13回　新語・流行語・外来語～新たな展開
第14回　言語習慣～忌みことば・諺～
第15回　まとめ

●評価方法

テーマごとにレポートの提出を課す。文法に関する講義ではドリル課題も加える。期末テストとあわせて総合的に評価する。

●受講生へのコメント

中国語の履修者を前提とする。配布プリントの例文の予習や、ドリル課題、レポート課題に真摯に取組むこと。

●参考文献・教材

毎回プリントを配布する。
参考文献は以下の通り。その他、適宜、授業中に指示する。
相原茂『中国語学習ハンドブック改訂版』大修館書店
S.R.ラムゼイ『中国の諸言語』大修館書店
周振鶴・游汝傑『方言と中国文化』光生館
輿水優・島田亜美『中国語わかる文法』大修館書店
三宅登之『中級中国語読みとく文法』白水社
荒川清秀『動詞を中心とした中国語文法論集』白帝社

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LCCHN3202	開講期	単位数	標準履修年次
176	**中国語中国文学概論Ⅱ** Introduction to Chinese Linguistics and Literature Ⅱ			前金4	2単位	2・3年
	旧科目名 中国文学史Ⅱ			担当教員名 西村　正男　非常勤講師		

●科目の主題

20世紀の中国語圏を代表する流行歌を取り上げ、それに関連する文学テクストや映画を併せて確認することで、中国近現代文学・映画・流行音楽の歴史や様相を理解することを目指す。

●到達目標

中国の近現代文学史・メディア文化史の概要を知る。また近現代文化とメディアとの関係を理解し、国民国家、

オリエンタリズム、ジェンダーなど様々な角度から文化を読解する方法を学ぶ。

●授業内容・授業計画

20世紀の中国語圏を代表する流行歌を毎回一曲取り上げる。そして、それに関連する文学テクストや映画にも言及することで、20世紀の中国語圏文化への理解を深めていく。

第 1 回　ガイダンス
第 2 回　毛毛雨（中国流行歌の勃興と知識人の批判）
第 3 回　乳娘曲（無声映画と音楽、演劇、トルストイ『復活』の受容）
第 4 回　桃花江（上海の流行歌の香港での継承）
第 5 回　天涯歌女（左翼知識人と流行音楽）
第 6 回　何日君再来（周璇、テレサ・テンと歴史に翻弄された歌）
第 7 回　玫瑰玫瑰我愛你その1（中国流行歌の西洋への伝播とオリエンタリズム）
第 8 回　玫瑰玫瑰我愛你その 2（台湾文学、シンガポール映画における受容）
第 9 回　売糖歌（占領下の上海と李香蘭）
第 10 回　花様的年華（戦後上海と香港映画）
第 11 回　説不出的快活（服部良一と上海・香港）
第 12 回　望春風（台湾の流行歌と文学）
第 13 回　広東語歌謡と香港映画
第 14 回　21 世紀の文化状況
第 15 回　まとめ

●評価方法

レポートを課す。

●受講生へのコメント

中国語ができることが望ましいが、中国語未履修であっても中国語圏の文化に興味のある学生の履修を歓迎する。

●参考文献・教材

授業中に適宜指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCCHN3203	開講期	単位数	標準履修年次
177	**中国語中国文学概論Ⅲ** Introduction to Chinese Linguistics and Literature Ⅲ			後水 3	2 単位	2・3 年
	旧科目名 中国語学概論Ⅱ			担当教員名 大岩本 幸次 准教授		

●科目の主題

中国古代の言語研究ともいえる小学の三分野、すなわち訓詁・文字・音韻の学について、関連する資料を紹介しつつ概説する。

●到達目標

小学の分野について概括的な知識を得ることを目的とする。また古来の読書音や訓釈を保存する字書を古籍の読解に利用する、あるいは古代中国の言語や文化をうかがう参考資料として活用する契機ともなることを期待する。

●授業内容・授業計画

おおよその進捗計画は以下の通り。

第 1 回　ガイダンス
第 2 回　訓詁（1）爾雅
第 3 回　訓詁（2）方言
第 4 回　訓詁（3）釋名
第 5 回　訓詁（4）まとめ
第 6 回　文字（1）説文解字
第 7 回　文字（2）玉篇・字林
第 8 回　文字（3）字様書
第 9 回　文字（4）まとめ
第 10 回　音韻（1）切韻
第 11 回　音韻（2）廣韻・集韻
第 12 回　音韻（3）等韻学
第 13 回　音韻（4）近世の韻書
第 14 回　音韻（5）まとめ
第 15 回　全体のまとめ

●評価方法
毎回の小テストと期末のレポートによって評価を定める。
●受講生へのコメント
特になし。
●参考文献・教材
授業の際にプリントを配布する。

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LCCHN3204	開講期	単位数	標準履修年次
178	中国語中国文学概論Ⅳ Introduction to Chinese Linguistics and Literature Ⅳ			前火 3	2 単位	2・3 年
	旧科目名 中国思想史 I			担当教員名 張 新民 教授		

●科目の主題
中国語圏映画の諸相。
●到達目標
中国・香港・台湾の映画作品を通して、その歴史的・社会的・思想的背景についての知識を獲得し、中国語圏の文化に対する理解を深める。
●授業内容・授業計画
映画を鑑賞するとともに、中国語によるシナリオまたは映画評論を読む。受講生には中国語テキストを分担・訳読してもらう。

第 1 回　ガイダンス
第 2 回　中国映画①
第 3 回　中国映画②
第 4 回　中国映画③
第 5 回　中国映画④
第 6 回　中国映画⑤
第 7 回　香港映画①
第 8 回　香港映画②
第 9 回　香港映画③
第 10 回　香港映画④
第 11 回　台湾映画①
第 12 回　台湾映画②
第 13 回　台湾映画③
第 14 回　台湾映画④
第 15 回　総括

●評価方法
平常点に拠る。
●受講生へのコメント
中国語の基礎力を必要とする。
●参考文献・教材
授業中に適宜指示する。

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LCCHN3205	開講期	単位数	標準履修年次
179	中国語基礎演習 I Basic seminar in Chinese I			前月 2	2 単位	2・3 年
	旧科目名 中国学基礎演習 I			担当教員名 松浦 恆雄 教授		

●科目の主題
中国語中国文学の専門科目の授業を受けるにふさわしい中国語の能力を身につける。
●到達目標
中国語の聴解力と読解力の養成に特に力を入れ、中国語教科書中級レベル以上の内容をマスターする。

●授業内容・授業計画

毎回、聴解力と読解力を養成するための課題を出す。授業では、その課題の確認と課題に関する作業を行う。この授業は中国語基礎演習Ⅱとペアで週二回連続で授業を行う。片方だけの受講は認めない。

第 1 回　ガイダンス。テクスト（二十六回分の課題）を配布。
第 2 回　第一回課題を確認し、それに関わる作業を行う。
第 3 回　第三回課題を確認し、それに関わる作業を行う。
第 4 回　第五回課題を確認し、それに関わる作業を行う。
第 5 回　第七回課題を確認し、それに関わる作業を行う。
第 6 回　第九回課題を確認し、それに関わる作業を行う。
第 7 回　第十一回課題を確認し、それに関わる作業を行う。
第 8 回　第十三回課題を確認し、それに関わる作業を行う。
第 9 回　第十五回課題を確認し、それに関わる作業を行う。
第 10 回　第十七回課題を確認し、それに関わる作業を行う。
第 11 回　第十九回課題を確認し、それに関わる作業を行う。
第 12 回　第二十一回課題を確認し、それに関わる作業を行う。
第 13 回　第二十三回課題を確認し、それに関わる作業を行う。
第 14 回　第二十五回課題を確認し、それに関わる作業を行う。
第 15 回　まとめ。

●評価方法

平常点（出席・授業への積極性・小テスト）に拠る。

●受講生へのコメント

本科目は、中国語基礎演習Ⅱとペア授業である。あわせて受講する必要がある。片方だけの受講は認めない。

●参考文献・教材

プリントを配布する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCCHN3206	開講期	単位数	標準履修年次
180	中国語基礎演習Ⅱ Basic seminar in Chinese Ⅱ			前木 2	2 単位	2・3 年
	旧科目名 中国学基礎演習Ⅱ			担当教員名 松浦 恆雄 教授		

●科目の主題

中国語中国文学の専門科目の授業を受けるにふさわしい中国語の能力を身につける。

●到達目標

中国語の聴解力と読解力の養成に特に力を入れ、中国語教科書中級レベル以上の内容をマスターする。

●授業内容・授業計画

毎回、聴解力と読解力を養成するための課題を出す。授業では、その課題の確認と課題に関する作業を行う。この授業は中国語基礎演習Ⅰとペアで週二回連続して授業を行う。片方だけの受講は認めない。

第 1 回　ガイダンス。テクスト（二十六回分の課題）を配布。
第 2 回　第二回の課題を確認し、それに関わる作業を行う。
第 3 回　第四回の課題を確認し、それに関わる作業を行う。
第 4 回　第六回の課題を確認し、それに関わる作業を行う。
第 5 回　第八回の課題を確認し、それに関わる作業を行う。
第 6 回　第十回の課題を確認し、それに関わる作業を行う。
第 7 回　第十二回の課題を確認し、それに関わる作業を行う。
第 8 回　第十四回の課題を確認し、それに関わる作業を行う。
第 9 回　第十六回の課題を確認し、それに関わる作業を行う。
第 10 回　第十八回の課題を確認し、それに関わる作業を行う。
第 11 回　第二十回の課題を確認し、それに関わる作業を行う。
第 12 回　第二十二回の課題を確認し、それに関わる作業を行う。
第 13 回　第二十四回の課題を確認し、それに関わる作業を行う。
第 14 回　第二十六回の課題を確認し、それに関わる作業を行う。
第 15 回　まとめ。

●評価方法

平常点（出席・授業への積極性・小テスト）に拠る。

●受講生へのコメント
本科目は、中国語基礎演習Ⅰとペア授業である。あわせて受講する必要がある。片方だけの受講は認めない。
●参考文献・教材
プリントを配布する。

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LCCHN3301	開講期	単位数	標準履修年次
181	中国語学演習Ⅰ Seminar in Chinese Linguistics Ⅰ			後火2	2単位	3・4年
	旧科目名 中国学基礎演習Ⅲ			担当教員名 岩本 真理 教授		

●科目の主題
中級レベルの学習者を対象とし既習の文法事項を整理し、様々な表現への対応が可能となるよう訓練する。
●到達目標
日本人学習者が誤解しやすい文法事項を特に取上げ、正確な理解に努め、読解力・発信力の強化を図る。
●授業内容・授業計画
毎回プリントの課題に取組み、なぜこの表現が非文となるのか、そのルールを具体例から学び取る。また一方では、多読を習慣化するため長期の課題も与える。各自が自分で現代中国語作品を選び、その内容の要約紹介と、「気に入った表現集」をレジュメにまとめ発表する。授業最終回には「私家版中国語表現辞典」を提出する。
第1回　ガイダンス
第2回　要、会、将、起来、下去1
第3回　要、会、将、起来、下去2
第4回　要、会、将、起来、下去3
第5回　要、会、将、起来、下去4
第6回　結果補語1
第7回　結果補語2
第8回　中間発表
第9回　結果補語3
第10回　結果補語4
第11回　方向補語と可能補語1
第12回　方向補語と可能補語2
第13回　方向補語と可能補語3
第14回　「私家版中国語表現辞典」発表、相互評価
第15回　まとめ
●評価方法
毎回の発表とレポートによる。受講者同士の相互評価も加味する。
●受講生へのコメント
複数の辞書の記述を読み比べて検討することが必要であり、早い段階から中中辞典の使用に親しみ習慣化してほしい。日本語に置き換えることで語や文の意味が理解できたものと、即断しないでほしい。授業中には、電子辞書の使用は一切認めない。
●参考文献・教材
教科書として次の教材を使用する。
徐晶凝著『中級漢語語法講義』(北京大学出版社)。プリントを配布する。
参考文献は、『実用現代漢語語法（増訂版)』(商務印書館)

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LCCHN3302	開講期	単位数	標準履修年次
182	中国語学演習Ⅱ Seminar in Chinese Linguistics Ⅱ			前水3	2単位	3・4年
	旧科目名 中国学演習Ⅳ			担当教員名 大岩本 幸次 准教授		

●科目の主題
古代漢語資料選読。

●到達目標
古代漢語に関する実践的な知識を身につける。
●授業内容・授業計画
古代漢語に関わる資料を分析・検討していく。
第 1 回　ガイダンス・資料配付
第 2 回　書誌的検討
第 3 回　作業編 1
第 4 回　作業編 2
第 5 回　作業編 3
第 6 回　作業編 4
第 7 回　分析編 1
第 8 回　分析編 2
第 9 回　分析編 3
第 10 回　分析編 4
第 11 回　検討編 1
第 12 回　検討編 2
第 13 回　検討編 3
第 14 回　検討編 4
第 15 回　まとめ
●評価方法
毎回の発表による平常点。
●受講生へのコメント
特になし。
●参考文献・教材
授業中に配布する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCCHN3303	開講期	単位数	標準履修年次
183	中国文学演習Ⅰ Seminar in Chinese Literature Ⅰ			前水 2	2 単位	3・4 年
	旧科目名 中国学演習Ⅲ			担当教員名 松浦 恆雄 教授		

●科目の主題
当代中国を代表する作家のひとりである余華（1960- ）の小説やエセ―を読むと同時に、同時代中国の文学について深く考える手掛かりとする。
●到達目標
現代中国語の読解能力を養い、余華の小説やエセ―を深く味わうと同時に、同時代中国の文学についての基礎的な知識を修得する。
●授業内容・授業計画
余華の小説集やエセ―集から短編を数編選んで精読する。最初に授業時にプリントを配布し、授業の進め方を指示するので、受講生は必ず出席すること。
第 1 回　ガイダンス
第 2 回　余華短編精読（第一回）
第 3 回　余華短編精読（第二回）
第 4 回　余華短編精読（第三回）
第 5 回　余華短編精読（第四回）
第 6 回　余華短編精読（第五回）
第 7 回　余華短編精読（第六回）
第 8 回　余華短編精読（第七回）
第 9 回　余華短編精読（第八回）
第 10 回　余華短編精読（第九回）
第 11 回　余華短編精読（第十回）
第 12 回　余華短編精読（第十一回）
第 13 回　余華短編精読（第十二回）

第 14 回　余華短編精読（第十三回）
第 15 回　まとめ

●評価方法
平常点（出席・授業への積極性・課題の提出内容）に拠る。
●受講生へのコメント
現代中国語の基礎的能力を必要とする。第 1 回の授業時にプリントを配布し、授業の進め方についての具体的な指示を行うので、受講者は、必ず出席すること。
●参考文献・教材
プリントを配布する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCCHN3304	開講期	単位数	標準履修年次
184	中国文学演習Ⅱ Seminar in Chinese Literature Ⅱ			後木 2	2 単位	3・4 年
	旧科目名 中国学演習Ⅲ			担当教員名 松浦 恆雄 教授		

●科目の主題
中国現代文学を代表する現代派の作家である施蟄存（1905-2003）の小説を読む。施蟄存の生涯とその小説から、中国現代文学におけるモダニズム文学の意義について理解を深める。
●到達目標
施蟄存の小説の特徴ある中国語に慣れ、その鑑賞能力を養うとともに中国女性文学の史的意義を修得する。
●授業内容・授業計画
施蟄存の小説集から数編を選んで精読する。最初の授業時にプリントを配布し、授業の進め方を指示するので、受講生は必ず出席すること。
第 1 回　ガイダンス
第 2 回　施蟄存の小説精読（第一回）
第 3 回　施蟄存の小説精読（第二回）
第 4 回　施蟄存の小説精読（第三回）
第 5 回　施蟄存の小説精読（第四回）
第 6 回　施蟄存の小説精読（第五回）
第 7 回　施蟄存の小説精読（第六回）
第 8 回　施蟄存の小説精読（第七回）
第 9 回　施蟄存の小説精読（第八回）
第 10 回　施蟄存の小説精読（第九回）
第 11 回　施蟄存の小説精読（第十回）
第 12 回　施蟄存の小説精読（第十一回）
第 13 回　施蟄存の小説精読（第十二回）
第 14 回　施蟄存の小説精読（第十三回）
第 15 回　まとめ
●評価方法
平常点（出席・授業への積極性・課題の提出内容）に拠る。
●受講生へのコメント
現代中国語の基礎的能力を必要とする。
●参考文献・教材
プリントを配布する。

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LCCHN3305	開講期	単位数	標準履修年次
185	**中国文化学演習Ⅰ** Seminar in Chinese Cultural Study Ⅰ			前火 4	2 単位	3・4 年
	旧科目名 中国学演習Ⅰ			担当教員名 張 新民 教授		

●科目の主題

中国大衆文化

●到達目標

映画、テレビ、雑誌、漫画、歌謡、大衆演芸などに関するテキストを読み、中国語の読解能力を養成するとともに、中国大衆文化についての基本的な知識を修得する。

●授業内容・授業計画

本年度は中国の絵物語「連環画」を取りあげ、中国民話を題材にした作品を読む。

第 1 回　ガイダンス
第 2 回　「連環画」を読む①
第 3 回　「連環画」を読む②
第 4 回　「連環画」を読む③
第 5 回　「連環画」を読む④
第 6 回　「連環画」を読む⑤
第 7 回　「連環画」を読む⑥
第 8 回　「連環画」を読む⑦
第 9 回　「連環画」を読む⑧
第 10 回　「連環画」を読む⑨
第 11 回　「連環画」を読む⑩
第 12 回　「連環画」を読む⑪
第 13 回　「連環画」を読む⑫
第 14 回　「連環画」を読む⑬
第 15 回　総括

●評価方法

平常点に拠る。

●受講生へのコメント

中国語の基礎力を必要とする。

●参考文献・教材

プリント配布

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LCCHN3306	開講期	単位数	標準履修年次
186	**中国文化学演習Ⅱ** Seminar in Chinese Cultural Study Ⅱ			後火 4	2 単位	3・4 年
	旧科目名			担当教員名 張 新民 教授		

●科目の主題

中国大衆文化。

●到達目標

映画、テレビ、雑誌、漫画、歌謡、大衆演芸などに関するテキストを読み、中国語の読解能力を養成するとともに、中国大衆文化についての基本的な知識を修得する。

●授業内容・授業計画

本年度は中国の伝統芸能「相声」を取り上げ、「単口相声」と「対口相声」各六篇を選んで精読する。

第 1 回　ガイダンス
第 2 回　「単口相声」を読む①
第 3 回　「単口相声」を読む②
第 4 回　「単口相声」を読む③
第 5 回　「単口相声」を読む④

第 6 回　「単口相声」を読む⑤
第 7 回　「単口相声」を読む⑥
第 8 回　「対口相声」を読む①
第 9 回　「対口相声」を読む②
第 10 回　「対口相声」を読む③
第 11 回　「対口相声」を読む④
第 12 回　「対口相声」を読む⑤
第 13 回　「対口相声」を読む⑥
第 14 回　「対口相声」を読む⑦
第 15 回　総括

●評価方法
平常点に拠る。
●受講生へのコメント
中国語の基礎力を必要とする。
●参考文献・教材
プリント配布。

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LCCHN3207	開講期	単位数	標準履修年次
187	中国語コミュニケーションⅠ Studies in Chinese Communication Ⅰ			後月 4	2 単位	2・3 年
	旧科目名			担当教員名 大岩本 幸次 准教授		

●科目の主題
初級の地固めをしつつ、中級程度の総合的な実力の育成をめざす。
●到達目標
基礎的文法をふまえてさらに幅のある表現を学び、文章読解のコツも把握できるようになることを目標とする。
●授業内容・授業計画
授業では各項目について必要最低限度の説明を加えた後、関連する内容の練習問題を解いて理解度を点検する。その他、各回の重要な例文を対象として暗誦を課す。おおよその進捗計画は以下の通り。
第 1 回　ガイダンス
第 2 回　判断・確認
第 3 回　疑問
第 4 回　推量・予測
第 5 回　必要・当然
第 6 回　意志・願望
第 7 回　可能・不可能
第 8 回　許容・勧告・命令・要請
第 9 回　程度・結果
第 10 回　一致・類似
第 11 回　比較
第 12 回　使役
第 13 回　受身
第 14 回　目的
第 15 回　原因・理由
●評価方法
小テストまた期末試験の結果に授業参加度を加味して評価を決定する。
●受講生へのコメント
中国語ネイティブスピーカの受講は認めない。
●参考文献・教材
ガイダンスの際に配布する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCCHN3208	開講期	単位数	標準履修年次
188	中国語コミュニケーションⅡ Studies in Chinese Communication Ⅱ			後水 2	2 単位	2・3 年
	旧科目名			担当教員名 大岩本 幸次 准教授		

●科目の主題

主として音声資料を用いて授業を行い、あわせて読解という側面についても分量的にそう多くない文章を多種にわたり読み進めていく。

●到達目標

ナチュラルなスピードで行われる短い中国語会話の内容をつかみとることができるようになること、文章読解のコツも把握できるようになることを目標とする。また文法に関する問題もこなしながらさまざまな語彙やフレーズに習熟、語彙の多様な含意に触れ、基礎的文法をふまえてさらに幅のある表現を学び、能力の向上を図りたい。

●授業内容・授業計画

おおよその進捗計画は以下の通り。

第 1 回　ガイダンス
第 2 回　第一課（上）
第 3 回　第一課（下）
第 4 回　第二課（上）
第 5 回　第二課（下）
第 6 回　第三課（上）
第 7 回　第三課（下）
第 8 回　第四課（上）
第 9 回　第四課（下）
第 10 回　第五課（上）
第 11 回　第五課（下）
第 12 回　第六課（上）
第 13 回　第六課（下）
第 14 回　第七課（上）
第 15 回　第七課（下）

●評価方法

期末試験の結果に授業参加度を加味して評価を決定する。

●受講生へのコメント

中国語ネイティブスピーカの受講は認めない。

●参考文献・教材

授業の際に配布する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCCHN3209	開講期	単位数	標準履修年次
189	中国語コミュニケーションⅢ Studies in Chinese Communication Ⅲ			前水 1	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 岩本 真理 教授		

●科目の主題

複雑な内容を備えた対話を進めていく能力と、説得力のあるスピーチを構成するための語学力を養成する。

●到達目標

中国の諸事情を反映したディベート形式の教材を用いる。日中の文化的な差異に留意し、習慣や制度の違いを充分理解したうえで、発信能力と表現力を高めることを目標とする。

●授業内容・授業計画

シャドーイング、作文、応用会話を中心に授業を進める。

第 1 回　ディクテーション（前年度までの総復習）
第 2 回　網恋究竟好不好①
第 3 回　同上②

第 4 回　同上③
第 5 回　同上④
第 6 回　代溝能否消除①
第 7 回　同上②
第 8 回　同上③
第 9 回　同上④
第 10 回　現代社会需要専才環是通才①
第 11 回　同上②
第 12 回　同上③
第 13 回　同上④
第 14 回　スピーチ原稿の検討
第 15 回　スピーチ大会と相互評価

●評価方法
授業中の発言、貢献とスピーチ大会における実技により総合的に判断する。
●受講生へのコメント
最終回には中国語によるスピーチの発表を課する。自分の考えを的確な中国語で発信するため訓練を積んでいく。スピーチの内容と実技を総合的に評価する。受講者全員による相互評価を取り入れる。
●参考文献・教材
教科書『弁論口語』（北京語言大学出版社）より配布。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCCHN3210	開講期	単位数	標準履修年次
190	中国語コミュニケーションⅣ Studies in Chinese Communication Ⅳ			後火 3	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 張 新民 教授		

●科目の主題
ことわざ中国語。
●到達目標
熟語やことわざを学び、中国語の表現力を高めることを目標とする。
●授業内容・授業計画
聞き取り練習、口頭作文、朗読練習を中心に授業を進める。
第 1 回　画龙点睛（聞き取り）
第 2 回　画龙点睛（朗読、作文）
第 3 回　后来居上（聞き取り）
第 4 回　后来居上（朗読、作文）
第 5 回　瓜田李下（聞き取り）
第 6 回　瓜田李下（朗読、作文）
第 7 回　模棱两可（聞き取り）
第 8 回　模棱两可（朗読、作文）
第 9 回　毛遂自荐（聞き取り）
第 10 回　毛遂自荐（朗読、作文）
第 11 回　不屈不挠（聞き取り）
第 12 回　不屈不挠（朗読、作文）
第 13 回　以身试法（聞き取り）
第 14 回　以身试法（朗読、作文）
第 15 回　総括
●評価方法
出席状況と平常点により評価する。
●受講生へのコメント
授業は中国語で行い、辞書を携帯すること。
●参考文献・教材
プリント、音声テクストを配布する。

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LCCHN3212	開講期	単位数	標準履修年次
191	**中国語中国文学特講Ⅱ** Special Studies in Chinese Linguistics and Literature Ⅱ			後集中	2 単位	2・3 年
	旧科目名 中国学特講Ⅰ			担当教員名 秋岡 英行 非常勤講師		

●科目の主題

老荘思想（道家思想）について概説した上で、『荘子』を原典で読みながら、その思想的特徴を考察する。

●到達目標

老荘思想への理解を深めるとともに、『荘子』の原典を読むことを通じて、漢文資料の扱い方も学ぶ。

●授業内容・授業計画

おおむね以下のような予定で授業を進める。

第 1 回　老荘の人と書物
第 2 回　老荘思想の歴史
第 3 回　老荘思想と儒教、老荘思想と仏教
第 4 回　老荘思想と文学・芸術
第 5 回　『荘子』内篇を読む（1）
第 6 回　『荘子』内篇を読む（2）
第 7 回　『荘子』内篇を読む（3）
第 8 回　『荘子』内篇を読む（4）
第 9 回　『荘子』外篇を読む（1）
第 10 回　『荘子』外篇を読む（2）
第 11 回　『荘子』外篇を読む（3）
第 12 回　『荘子』雑篇を読む（1）
第 13 回　『荘子』雑篇を読む（2）
第 14 回　『荘子』雑篇を読む（3）
第 15 回　まとめ

●評価方法

平常点と試験による総合評価

●受講生へのコメント

訳本などを参照してもらって構わないが、できるだけ自力で読み解いてほしい。

●参考文献・教材

授業中に指示する。

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LCENG3201	開講期	単位数	標準履修年次
192	**英米文化概論** Introduction to English and American Cultural Studies			後月 2	2 単位	2・3 年
	旧科目名			担当教員名 イアン・リチャーズ 准教授		

●科目の主題

To improve students’ knowledge of the themes and styles of classic British literature.

●到達目標

Students will be given prints to read weekly.

●授業内容・授業計画

Students will receive a weekly reading assignment. Classwork will consist of exercises based on the assignment. There will also be some hearing practice.

第 1 回　Introduction
第 2 回　Emma
第 3 回　Wuthering Heights
第 4 回　Woman in White 1
第 5 回　Woman in White 2
第 6 回　Great Expectations 1

第 7 回　Great Expectations 2
第 8 回　First Men in the Moon
第 9 回　A Room With a View 1
第 10 回　A Room With a View 2
第 11 回　Sons and Lovers 1
第 12 回　Sons and Lovers 2
第 13 回　Lord of the Flies 1
第 14 回　Lord of the Flies 2
第 15 回　Review Test

●評価方法
Attendance. Weekly assignments. Review test in final class.
●受講生へのコメント
You will need to attend at least 70% of classes in order to pass the course.
●参考文献・教材
テキストは利用しない。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCENG3202	開講期	単位数	標準履修年次
193	英米文学史Ⅰ History of English and American Literature Ⅰ			前木 2	2 単位	2・3 年
	旧科目名			担当教員名 杉井 正史 教授		

●科目の主題
英国ロマン派以前の文学
●到達目標
英国ロマン派以前の文学についての概観的知識を習得させ、その中の一作品に関して、研究考察をさせる。
●授業内容・授業計画
この期間の文学作品を紹介・鑑賞しながら、英文学の特色を考察する。また作品と時代背景との関係も考える。
第 1 回　・文学史の意味
第 2 回　・古英語、中英語と文学
第 3 回　・チョウサーの文学
第 4 回　・ソネットの導入とシドニー
第 5 回　・スペンサー、ルネサンス演劇の先行伝統
第 6 回　・大学出才人たちの演劇
第 7 回　・シェイクスピアの演劇
第 8 回　・ジョンソン、ジャコビアンドラマティスト
第 9 回　・形而上詩人、マーヴェル
第 10 回　・王政復古期の文学、ミルトン、バニヤン
第 11 回　・ドライデンの文学
第 12 回　・18 世紀の文学、小説、スウィフト
第 13 回　・ロマン主義の胎動、オースティン
第 14 回　・文学史と文学批評
第 15 回　・レポート相談日
●評価方法
試験およびこの期間の文学についてのレポート
●受講生へのコメント
特になし
●参考文献・教材
川崎寿彦『イギリス文学史』(成美堂)
参考書は教室で指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCENG3203	開講期	単位数	標準履修年次
194	英米文学史Ⅱ History of English and American Literature Ⅱ			後火 4	2 単位	2・3 年
	旧科目名			担当教員名 田中 孝信 教授		

●科目の主題

文学がいかに時代や文化的事象と密接に係わっているかを、作品を比較検討することで明らかにすると同時に、それらの底流を成す普遍性にも着目する。

●到達目標

文学を通して人間と社会への洞察を深めるとともに、英語という言語の持つ多様な表現力を学ぶ。

●授業内容・授業計画

前期に引き続き英文学の流れを、特にロマン派から現代に至るまでの主要な作家の作品を取り上げながら概観する。

第 1 回　ロマン主義時代（1）――ワーズワース、コールリッジ
第 2 回　ロマン主義時代（2）――バイロン、シェリー、キーツ
第 3 回　ヴィクトリア朝期の詩と散文（1）――時代精神とカーライル
第 4 回　ヴィクトリア朝期の詩と散文（2）――テニソン、ブラウニング、アーノルド
第 5 回　ヴィクトリア朝期の詩と散文（3）――ラスキン、ペイター、ラファエロ前派、ワイルド
第 6 回　ヴィクトリア朝の小説（1）――ディケンズ、サッカレー
第 7 回　ヴィクトリア朝の小説（2）――ブロンテ姉妹、ジョージ・エリオット、ハーディ
第 8 回　第 2 次大戦までの小説（1）――ヘンリー・ジェイムズ、コンラッド
第 9 回　第 2 次大戦までの小説（2）――ウルフ、ジョイス、ロレンス
第 10 回　第 2 次大戦までの詩と劇（1）――ホプキンズ、パウンド、イエイツ
第 11 回　1 第 2 次大戦までの詩と劇（2）――エリオット、バーナード・ショー
第 12 回　戦後の文学（1）――40 年代の詩人たち、50 年代と〈ムーヴメント〉、カトリック作家たち、逆ユートピア小説
第 13 回　戦後の文学（2）――〈怒れる世代〉の作家たち、女流作家たち、ベケット
第 14 回　現代の英文学
第 15 回　全体のまとめ

●評価方法

試験・レポート・平常点

●受講生へのコメント

訳書で構わないので、教科書に出てくる作家の作品をできるだけ多く読んでおくこと。

●参考文献・教材

川崎寿彦『イギリス文学史』（成美堂）およびプリント

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCENG3204	開講期	単位数	標準履修年次
195	英米文学史Ⅲ History of English and American Literature Ⅲ			前火 2	2 単位	2・3 年
	旧科目名			担当教員名 古賀 哲男 准教授		

●科目の主題

［主題］米文学の歴史的な展開

●到達目標

［目標］米文学史について主要な知識を教授し、受講生が英語の教職を身につける際に適切な助言等を行う。

●授業内容・授業計画

［授業内容］

主として、講義形式により、テーマについての主要な解説を行い、試験やレポート等で受講生のテーマについての理解を確認する。

第 1 回　第 1 回：イントロダクション：米文学史とは何か
第 2 回　第 2 回：植民地時代の米文学（17 世紀から 18 世紀）

第 3 回　第 3 回：国民文学創成期の文学 1（Ralph Waldo Emerson）
第 4 回　第 4 回：国民文学創成期の文学 2（Nathaniel Hawthorne）
第 5 回　第 5 回：国民文学創成期の文学 3（Herman Melville）
第 6 回　第 6 回：南北戦争期の文学
第 7 回　第 7 回：世紀末から第一次世界大戦期の文学
第 8 回　第 8 回：1920 年代の文学 1
第 9 回　第 9 回：1920 年代の文学 2
第 10 回　第 10 回：1930 年代の文学
第 11 回　第 11 回：1940 年代の文学
第 12 回　第 12 回：1950 年代の文学
第 13 回　第 13 回：1960 年代から 1990 年代の文学
第 14 回　第 14 回：2000 年以降の文学
第 15 回　まとめ・試験

●評価方法
出席率・試験・レポートによる。
●受講生へのコメント
米文学史について広く学ぶのみならず、卒論で対象とする作家・作品を研究する意欲を期待する。
●参考文献・教材
『アメリカ文学新考』（大阪教育図書）ならびに『アメリカ文学のミニマム・エッセンシャルズ』（大阪教育図書）

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCENG3205	開講期	単位数	標準履修年次
196	**英語学概論 I** English Language I			前木 3	2 単位	2・3 年
	旧科目名			担当教員名 豊田 純一 准教授		

●科目の主題
英語という言語を、言語学の各分野（音、意味、用法、構造など）において考察する能力の基礎を習得する。
●到達目標
言語学の基礎的知識を学ぶとともに、実際の英語の構造や会話における機能などの例を言語学的に考察することに慣れることを目標とする。
●授業内容・授業計画
毎週、教科書の各章を網羅し、まず重要事項を理解し、その内容に関連する例などを考察していきます。
第 1 回　ことばと音声 I
第 2 回　ことばと音声 II
第 3 回　音の組み合わせとアクセント
第 4 回　英語の発音とスペリング
第 5 回　単語ができるしくみ
第 6 回　文ができるしくみ
第 7 回　まとめ
第 8 回　文の内部構造
第 9 回　ことばの意味とは何だろう
第 10 回　語の間の意味関係
第 11 回　意味の拡張
第 12 回　ことばの意味とコンテクスト
第 13 回　まとまりのある文章
第 14 回　文章中の情報構造
第 15 回　全体のまとめ
●評価方法
試験・レポート（70%）、平常点（30%）
●受講生へのコメント
出席率が 70%に満たないものは、単位の対象外になります。
15 分以上遅刻したものは、欠席とみなしますので、お気を付けください。
平常点には、授業への積極的な参加とともに出席も含まれます。

試験、レポートは定期的にありますので、授業中の指示に従ってください。

●参考文献・教材

長谷川瑞穂（編）（2006）「はじめての英語学」 研究社（ISBN: 4-327-40144-7）

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCENG3206	開講期	単位数	標準履修年次
197	英語学概論Ⅱ English Language Ⅱ			後火 3	2 単位	2・3 年
	旧科目名			担当教員名 豊田 純一 准教授		

●科目の主題

現代英語が歴史的にどの様に編成されたかの概要を習得する。

●到達目標

英語はどの様な変化を経て現在に至るか、またその変化における要因はなんであったのかを学ぶとともに、なぜ現代英語が今のような文法形態になったのかを学際的に考察することに慣れることを目標とする。

●授業内容・授業計画

毎週特定の構造や機能を選び、まず重要事項を理解し、その内容に関連する例などを考察していきます。

第 1 回　現代英語の特徴
第 2 回　文法の明快さ
第 3 回　方言の多様性
第 4 回　人々の行き来と社会の変容
第 5 回　標準語
第 6 回　ポライトネスと王政
第 7 回　まとめ
第 8 回　動詞についてⅠ
第 9 回　動詞についてⅡ
第 10 回　形容詞や副詞
第 11 回　名詞・代名詞の仕組みⅠ
第 12 回　名詞・代名詞の仕組みⅡ
第 13 回　動詞の態と他動性Ⅰ
第 14 回　動詞の態と他動性Ⅱ
第 15 回　全体のまとめ

●評価方法

試験・レポート（70%）、平常点（30%）

●受講生へのコメント

出席率が 70%に満たないものは、単位の対象外になります。
15 分以上遅刻したものは、欠席とみなしますので、お気を付けください。
平常点には、授業への積極的な参加とともに出席も含まれます。
試験、レポートは定期的にありますので、授業中の指示に従ってください。

●参考文献・教材

授業中に随時指示します。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCENG3207	開講期	単位数	標準履修年次
198	英米文化演習 Seminar in English and American Cultural Studies			前水 2	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 イアン・リチャーズ 准教授		

●科目の主題

To improve students’ knowledge of cultural issues related to modern Britain and America.

●到達目標

The textbook ‘American Ways’ will be used.

●授業内容・授業計画

There will be a writing component to this course. Students will be given information in western methods of formal

essay writing and will practise writing essays. The remainder of the class will used on the textbook.

第 1 回 Introduction
第 2 回 Writing Seminar
第 3 回 Written Essay 1
第 4 回 Reformulation 1
第 5 回 American Ways 1
第 6 回 American Ways 2
第 7 回 American Ways 3
第 8 回 Written Essay 2
第 9 回 Reformulation 2
第 10 回 American Ways 4
第 11 回 American Ways 5
第 12 回 American Ways 6
第 13 回 American Ways 7
第 14 回 Written Essay 3
第 15 回 Review Test

●評価方法

平常点。

●受講生へのコメント

You will need to attend at least 70% of classes in order to pass the course.

●参考文献・教材

American Ways（3rd edition）, by Maryanne Kearny Datesman, JoAnn Crandall, and Edward N. Kearny.

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCENG3208	開講期	単位数	標準履修年次
199	**英米文学演習Ⅰ** Seminar in English and American Literature Ⅰ			前火 4	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 田中 孝信 教授		

●科目の主題

19 ～ 20 世紀英文学のテクストを味読しながら、作品が持つ意義を同時代性と普遍性の両面から探る。

●到達目標

文学テクストを通して英語読解力を鍛えるとともに、分析批評する能力を涵養する。

●授業内容・授業計画

「芸術は人生や自然に即するときに堕落する」と「芸術のための芸術」を唱えた唯美主義者オスカー・ワイルドの芸術観が、最も具体化された傑作『ドリアン・グレイの肖像』(1891) を読む。彼独自の流麗な文体を味わいながら、その背後にある様々な側面での境界の流動化現象を探る。

第 1 回 オスカー・ワイルドと『ドリアン・グレイの肖像』について
第 2 回 『ドリアン・グレイの肖像』を読む①
第 3 回 『ドリアン・グレイの肖像』を読む②
第 4 回 『ドリアン・グレイの肖像』を読む③
第 5 回 『ドリアン・グレイの肖像』を読む④
第 6 回 『ドリアン・グレイの肖像』を読む⑤
第 7 回 『ドリアン・グレイの肖像』を読む⑥
第 8 回 『ドリアン・グレイの肖像』を読む⑦
第 9 回 『ドリアン・グレイの肖像』を読む⑧
第 10 回 『ドリアン・グレイの肖像』を読む⑨
第 11 回 『ドリアン・グレイの肖像』を読む⑩
第 12 回 『ドリアン・グレイの肖像』を読む⑪
第 13 回 『ドリアン・グレイの肖像』を読む⑫
第 14 回 『ドリアン・グレイの肖像』の批評を読む
第 15 回 全体のまとめ

●評価方法

試験・レポート・平常点

●受講生へのコメント
訳書で構わないので、ワイルドの他の作品も読んでおくこと。
●参考文献・教材
オスカー・ワイルド『ドリアン・グレイの肖像』（開文社）

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LCENG3209	開講期	単位数	標準履修年次
200	英米文学演習Ⅱ Seminar in English and American Literature Ⅱ			後火 2	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 杉井 正史 教授		

●科目の主題
トマス・ミドルトンの喜劇、*A Trick to Catch the Old One*
●到達目標
トマス・ミドルトンの喜劇、*A Trick to Catch the Old One* を精読し、学生各自の視点から研究考察する。
●授業内容・授業計画
さまざまな観点から、トマス・ミドルトンの劇を精読する。
第 1 回　・ミドルトン時代の英語
第 2 回　・*A Trick to Catch the Old One* の構成について（1）
第 3 回　・*A Trick to Catch the Old One* の構成について（2）
第 4 回　・*A Trick to Catch the Old One* の批評史について（1）
第 5 回　・*A Trick to Catch the Old One* の批評史について（2）
第 6 回　・*A Trick to Catch the Old One* の精読（1）
第 7 回　・*A Trick to Catch the Old One* の精読（2）
第 8 回　・*A Trick to Catch the Old One* の精読（3）
第 9 回　・*A Trick to Catch the Old One* の精読（4）
第 10 回　・*A Trick to Catch the Old One* の精読（5）
第 11 回　・*A Trick to Catch the Old One* の精読（6）
第 12 回　・*A Trick to Catch the Old One* の精読（7）
第 13 回　・*A Trick to Catch the Old One* の精読（8）
第 14 回　・*A Trick to Catch the Old One* の機知
第 15 回　・レポート相談日
●評価方法
平常点とレポートと最後のテスト
●受講生へのコメント
特になし
●参考文献・教材
授業中に指示する。

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LCENG3210	開講期	単位数	標準履修年次
201	英米文学演習Ⅲ Seminar in English and American Literature Ⅲ			後水 4	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 古賀 哲男 准教授		

●科目の主題
［主題］
米文学を扱う。本年度は主として 1960 年以降の文学講読とする。
●到達目標
［目標］
米文学についての知識を教授し、演習形式で具体的作品についての理解を深める。
●授業内容・授業計画
［授業内容］
主として、演習形式で主題の作家を購読し、受講生による口頭発表やレポート提出を行う。

第 1 回　第 1 回：イントロダクション：対象作家・作品についての概説
第 2 回　第 2 回：対象作品の講読 1
第 3 回　第 3 回：対象作品の講読 2
第 4 回　第 4 回：対象作品の講読 3
第 5 回　第 5 回：対象作品の講読 4
第 6 回　第 6 回：対象作品の講読 5
第 7 回　第 7 回：口頭発表 1
第 8 回　第 8 回：口頭発表 2
第 9 回　第 9 回：口頭発表 3
第 10 回　第 10 回：口頭発表 4
第 11 回　第 11 回：口頭発表 5
第 12 回　第 12 回：口頭発表 6
第 13 回　第 13 回：口頭発表 7
第 14 回　第 14 回：口頭発表 8
第 15 回　まとめの議論

●評価方法
主として口頭発表・レポートによる。

●受講生へのコメント
幅広く米文学について学ぶべく基礎講読のみならず、卒論にむけての対象作家・作品研究を行う意欲を期待する。なお、［英米文学史Ⅲ」を予め、受講していることが望ましい。

●参考文献・教材
対象作品は未定（追って指示する）、参考文献は授業中に指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCENG3211	開講期	単位数	標準履修年次
202	**英米文学演習Ⅳ** Seminar in English and American Literature Ⅳ			後木 2	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 杉井 正史 教授		

●科目の主題
エリック・シーガルの小説、*Love Story*（1970）

●到達目標
映画としてもヒットしたエリック・シーガルの小説、*Love Story* を精読し、現代のアメリカ文学作品を味わう。

●授業内容・授業計画
さまざまな観点から、エリック・シーガルの小説、*Love Story* を精読する。
第 1 回　*Love Story* の英語（1）
第 2 回　*Love Story* の英語（2）
第 3 回　*Love Story* の時代背景（1）
第 4 回　*Love Story* の時代背景（2）
第 5 回　映画としての *Love Story*
第 6 回　*Love Story* の精読（1）
第 7 回　*Love Story* の精読（2）
第 8 回　*Love Story* の精読（3）
第 9 回　*Love Story* の精読（4）
第 10 回　*Love Story* の精読（5）
第 11 回　*Love Story* の精読（6）
第 12 回　*Love Story* の精読（7）
第 13 回　*Love Story* の精読（8）
第 14 回　*Love Story* の精読（9）
第 15 回　レポート相談日

●評価方法
平常点とレポートと最後のテスト

●受講生へのコメント
きちんと予習に努めること。

●参考文献・教材
Erich Segal（上岡弘二注解）*Love Story*（英光社）

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LCENG3212	開講期	単位数	標準履修年次
203	**英語学演習** Seminar in English Linguistics			後木 3	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名 英語学演習 I			担当教員名 豊田 純一 准教授		

●科目の主題
言語の歴史的変化においてみられる文化的要素を考察する。
●到達目標
英語の機能や構造を細かく分析でき、文化的要素も踏まえながら多岐な視点から考察ができることを目標とする。
●授業内容・授業計画
毎週特定の構造や機能を選び、まず重要事項を理解し、数々の実例を考察していきます。
第 1 回　変わりゆく社会と言語
第 2 回　文化の多様性と言語
第 3 回　表現と文化
第 4 回　民族言語学
第 5 回　ケーススタディー I
第 6 回　ケーススタディー II
第 7 回　ケーススタディー III
第 8 回　まとめ
第 9 回　英語と研究基準
第 10 回　数と言語
第 11 回　文法化現象
第 12 回　宗教と言語
第 13 回　ゲルマン語の未来形
第 14 回　英語史と文化
第 15 回　全体のまとめ
●評価方法
試験・レポート（70%）、平常点（30%）
●受講生へのコメント
出席率が 70%に満たないものは、単位の対象外になります。
15 分以上遅刻したものは、欠席とみなしますので、お気を付けください。
平常点には、授業への積極的な参加とともに出席も含まれます。
試験、レポートは定期的にありますので、授業中の指示に従ってください。
●参考文献・教材
授業中に随時指示します。

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LCENG3213	開講期	単位数	標準履修年次
204	**英米文化特講** Special Lecture in English and American Culture			前集中	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 原 英一 非常勤講師		

●科目の主題
19 世紀から 21 世紀までのイギリス学校小説の系譜をたどり、時代背景とテーマの変遷を解明する。
●到達目標
学校小説の系譜とそのテーマの変遷を理解し、文学作品の歴史的背景を解明するための方法論を身につける。
●授業内容・授業計画
この講義では、ヴィクトリア朝の「堕ちた女」の絵画表象の分析から始めて、「堕ちた女」、「孤児」、さらに「魔法」など、現代に至る学校小説の基本的モチーフの変遷を歴史的にたどる。扱う小説は、ヴィクトリア朝の *Jane Eyre*、*David Copperfield* 等、20 世紀の *Goodbye, Mr. Chips*、20 世紀から 21 世紀にかけての H*arry Potter*、*Never*

Let Me Go 等である。

第 1 回　イントロダクション：ヴィクトリア朝絵画と「堕ちた女」
第 2 回　「堕ちた女」の文学表象（1）：George Eliot, *Adam Bede*, Elizabeth Gaskell, *Ruth*
第 3 回　「堕ちた女」の文学表象（2）：Charlotte Bronte, *Jane Eyre* ①
第 4 回　「堕ちた女」の文学表象（3）：Charlotte Bronte, *Jane Eyre* ②
第 5 回　「堕ちた女」の文学表象（4）：Mary Elizabeth Braddon, *Lady Audley's Secret*
第 6 回　「学校小説」としての *Jane Eyre*
第 7 回　ディケンズの学校小説（1）：Charles Dickens, *David Copperfield* ①
第 8 回　ディケンズの学校小説（2）：Charles Dickens, *David Copperfield* ②
第 9 回　魔法と学校（1）：Theodore R. Cogswell, "The Wall Around the World"
第 10 回　魔法と学校（2）：J. K. Rowling, *Harry Potter and the Philosopher's Stone*
第 11 回　魔法と学校（3）：Roald Dahl, *Matilda*
第 12 回　戦争の世紀と学校小説（1）：James Hilton, *Goodbye, Mr. Chips*
第 13 回　戦争の世紀と学校小説（2）：Kazuo Ishiguro, *Never Let Me Go* ①
第 14 回　戦争の世紀と学校小説（3）：Kazuo Ishiguro, *Never Let Me Go* ②
第 15 回　全体のまとめ

●評価方法

平常点（60%）とレポート（40%）による。

●受講生へのコメント

集中講義の期間中、毎日 reaction paper に講義の感想、意見、質問などを書いて提出してもらいます。reaction paper に書かれた内容に対しては、担当者からのフィードバックを行います。ウェブを通じて行う場合もあります。フィードバック用のウェブサイト URL は教室で示します。

●参考文献・教材

教室で指示します。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCENG3216	開講期	単位数	標準履修年次
205	英語コミュニケーションⅠ Studies in English Communication Ⅰ			前水 4	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 イアン・リチャーズ 准教授		

●科目の主題

To improve abilities in English comprehension and communication, both in reading and writing.

●到達目標

Students will have a reading assignment each week.

●授業内容・授業計画

Students will be given a weekly reading assignment from the novel 'Animal Farm'. There will be a written test on the assignment in class, followed by exercises based on the assignment. Occasional short lectures will be given in English.

第 1 回　Introduction
第 2 回　Animal Farm 1
第 3 回　Animal Farm 2
第 4 回　Animal Farm 3
第 5 回　Animal Farm 4
第 6 回　Animal Farm 5
第 7 回　Animal Farm 6
第 8 回　Animal Farm 7
第 9 回　Animal Farm 8
第 10 回　Animal Farm 9
第 11 回　Animal Farm 10
第 12 回　Animal Farm 11
第 13 回　Animal Farm 12
第 14 回　Animal Farm 13
第 15 回　Review Test

●評価方法
Attendance, weekly written tests.
●受講生へのコメント
You will need to attend at least 70% of classes in order to pass the course.
●参考文献・教材
“Animal Farm” by George Orwell

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCENG3217	開講期	単位数	標準履修年次
206	英語コミュニケーションⅡ Studies in English Communication Ⅱ			後水 2	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 ジェフリー リン・シーヴァート 非常勤講師		

●科目の主題
To improve abilities in English comprehension and communication, both written and spoken.
●到達目標
To improve abilities in English comprehension and communication, both written and spoken.
●授業内容・授業計画
Weekly written assignments, conversations with the teacher and other students, and a final writing assignment.
第 1 回　*Jane Eyre*
第 2 回　*Jane Eyre*
第 3 回　*Jane Eyre*
第 4 回　*Jane Eyre*
第 5 回　*Jane Eyre*
第 6 回　*Jane Eyre*
第 7 回　*Jane Eyre*
第 8 回　*Jane Eyre*
第 9 回　*Jane Eyre*
第 10 回　*Jane Eyre*
第 11 回　*Jane Eyre*
第 12 回　*Jane Eyre*
第 13 回　*Jane Eyre*
第 14 回　*Jane Eyre*
第 15 回　*Jane Eyre*
●評価方法
Attendance, writing assignments, speaking, final writing assignment.
●受講生へのコメント
In this course we will study Charlotte Bronte’s masterpiece, *Jane Eyre* (1847), a novel that changed how the world looks at woman. Jane begins life with many disadvantages. She loses her parents when she is a baby. She is poor,not beautiful,has no social connections. But she is intelligent and has faith and hope in her future. Through education she will seek to empower herself.
●参考文献・教材
“*Jane Eyre*” by Charlotte Bronte, Penguin Reader, Upper Intermediate 5 (152pages). ISBN: 0-582-41932-8

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCDFX3201	開講期	単位数	標準履修年次
207	ドイツ語フランス語圏言語文化論Ⅰ			後木 3	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 髙井 絹子 准教授		

●科目の主題
ドイツ語圏の 13 作品を取り上げ、女性像に焦点を当てつつ作品の解題を試みる。
●到達目標
ドイツ語圏の歴史、文化、文学について理解を深める。

●授業内容・授業計画
初回に説明します。
第 1 回　導入
第 2 回　ゲーテ『ファウスト』
第 3 回　シラー『オルレアンの乙女』
第 4 回　クライスト『O 侯爵夫人』
第 5 回　フケー『水妖記』
第 6 回　シュトルム『みずうみ』
第 7 回　フォンターネ『エフィ・ブリースト』
第 8 回　ムージル『ポルトガルの女』
第 9 回　ブレヒト『セチュアンの善人』
第 10 回　トーマス・マン『ワイマールのロッテ』
第 11 回　フォイヒトヴァンガー『トレド風雲録』
第 12 回　ヴェーデキント『ルル』
第 13 回　ヴォルフ『カッサンドラ』
第 14 回　バッハマン『ジムルターン』
第 15 回　まとめ

●評価方法
平常点 30%、レポート 70%による評価です。

●受講生へのコメント
文学作品には様々な女性が登場しますが、彼女たちにはどのような時代状況が映し出されているのか、あるいはその造形には作家のどのような意図が込められているのか。女性たちを作品解読の手がかりとしてドイツ語圏文学の作品世界を逍遥しましょう。

●参考文献・教材
授業中指示します。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCDFD3201	開講期	単位数	標準履修年次
208	ドイツ語圏文学史 History of German Literature			前木 2	2 単位	2・3 年
	旧科目名 ドイツ文学史Ⅰ・Ⅱ			担当教員名 髙井 絹子 准教授		

●科目の主題
19 世紀後半から現代まで、ドイツ語圏文学の展開と変遷を辿ります。羅列的、網羅的に事項を取り上げるのではなく、現代的な問題意識および視点から、文学史上の各時期の重要な作家、作品、思想を見ていきます。

●到達目標
文学作品を切り口に、近現代ドイツ語圏の歴史、文化、社会状況について理解を深める。

●授業内容・授業計画
初回に授業の進め方について説明します。講義形式の授業です。
第 1 回　導入
第 2 回　ロマン主義と写実主義の間（1）
第 3 回　ロマン主義と写実主義の間（2）
第 4 回　写実主義（1）
第 5 回　写実主義（2）
第 6 回　写実主義（3）
第 7 回　世紀転換期の文学（1）
第 8 回　世紀転換期の文学（2）
第 9 回　大戦間期の文学（1）
第 10 回　大戦間期の文学（2）
第 11 回　戦後文学
第 12 回　BRD の文学
第 13 回　DDR の文学
第 14 回　現代ドイツ語圏文学の動向
第 15 回　まとめ

●評価方法
平常点（20%）、レポート（40%）、試験（40%）による総合評価です。
●受講生へのコメント
授業中に触れることの出来る作家や作品のみならず、実際に多くの作品を読んでください。
●参考文献・教材
手塚富雄・神品芳夫『増補ドイツ文学案内』（岩波文庫別冊 3）

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCDFD3202	開講期	単位数	標準履修年次
209	ドイツ語圏文化論 German Culture			後水 4	2 単位	2・3 年
	旧科目名 ドイツ文化論			担当教員名 長谷川 健一 講師		

●科目の主題
ドイツ語圏の文化・文学について多角的な視点から論じる。
●到達目標
ドイツ語圏の文化・文学・歴史についての幅広い知識を獲得すると同時に、ドイツ語圏の文化に対する理解を深める。
●授業内容・授業計画
ドイツの「黒い森」に源流をもち、豊かな水を湛えながらヨーロッパの国々の間を縫うように東へ進み、最後は黒海へと流れ込むドナウ河。古来その流域では、この河がもたらす様々な恩恵を受けて魅力ある多種多様な文化が開花し、その影響は現代にまで及んでいる。本講義では、このドナウ河流域の文化と文学について、歴史的な背景を踏まえながら講じる。なお、授業は教科書を参照しながら進めるが、適宜補助プリントも配布し、テーマに応じて、DVD・CD 等の視覚教材も使用する。

第 1 回　導入：ドナウ河とは
第 2 回　水の精の伝説（1）
第 3 回　水の精の伝説（2）
第 4 回　「ドナウ帝国」の歴史
第 5 回　宗教改革とイエズス会
第 6 回　ウィーンの音楽と建築
第 7 回　スロヴァキアの歴史と文化―ブラチスラヴァを中心に
第 8 回　ハンガリーの歴史と文化―ブダペシュトを中心に
第 9 回　チェコの歴史と文化―プラハを中心に
第 10 回　演劇（1）：ウィーン民衆劇
第 11 回　演劇（2）：グリルパルツァー
第 12 回　文学（1）：ビーダーマイヤー期
第 13 回　文学（2）：ウィーン世紀末
第 14 回　文学（3）：ハプスブルク神話
第 15 回　ヴィーラ伝説と総括

●評価方法
平常点（授業態度を含む）、試験、レポートから総合的に評価する。4 回以上欠席した場合は評価の対象としない。
●受講生へのコメント
紹介した作品や参考文献は積極的に読むこと。配布した補助プリント等も試験範囲となるので、ファイルに綴じ、後で試験勉強に役立てて欲しい。また、下に挙げた教科書を毎回持参すること。
●参考文献・教材
教科書：丹下和彦・松村國隆編著『ドナウ河―流域の文学と文化―』（2011 年、晃洋書房）
参考資料：適宜、補助プリントを配布する。

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LCDFD3203	開講期	単位数	標準履修年次
210	**ドイツ語学概論** Introduction to German Linguistics			前火 3	2 単位	2・3 年
	旧科目名			担当教員名 神竹 道士 教授		

●科目の主題

本講義では、言語学における重要な基本概念や言語学の主要な研究領域、そしてさまざまな言語学理論に関して分かりやすく紹介する。まず言語学の歴史的な変遷について概観し、言語研究とその時代の歴史的背景について論じる。基本的な言語学用語と分析方法について説明した上で、ドイツ語という個別言語の分析から、言語一般の普遍的解釈へと展開してみたいと思う。

●到達目標

本講義で取り扱う言語は主にドイツ語である。ドイツ語を通して、ことばの持つ普遍的な特徴と機能について理解し、言語学的な分析方法に関する基礎知識を習得することが、本講義の目標である。

●授業内容・授業計画

本講義では、主に次の様な項目について取り上げる。

第 1 回　古代の言語研究
第 2 回　一般言語学と個別言語学
第 3 回　ドイツ語の歴史
第 4 回　ドイツ語の音韻変化
第 5 回　ルターのドイツ語訳聖書
第 6 回　統一文章語
第 7 回　標準ドイツ語
第 8 回　文法規範
第 9 回　正書法
第 10 回　正音法
第 11 回　規範と揺れ
第 12 回　言語と社会
第 13 回　文体と言語変種
第 14 回　中間言語形式
第 15 回　まとめ

●評価方法

平常点（出席）と試験によって総合的に評価する。

●受講生へのコメント

授業でドイツ語を扱うので、ドイツ語未履修者は受講不可とする。

●参考文献・教材

適宜、プリントを配布する。

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LCDFD3204	開講期	単位数	標準履修年次
211	**ドイツ語圏言語文化基礎演習 I** Proseminar in German Language and Culture I			前水 3	2 単位	2 年
	旧科目名 ドイツ語学演習 I			担当教員名 長谷川 健一 講師		

●科目の主題

中級レベルのドイツ語テクストを精読する。

●到達目標

(1) 様々なドイツ語テクストの文体に慣れ、その精読を通じて中級レベルの文法の理解・定着を図ると同時に、(2) テクストで取り上げられたドイツ語圏の諸テーマに対する関心や理解を深める。

●授業内容・授業計画

前半は、現代ドイツ語で書かれた様々なドイツ語の文章を読む。それと並行して、初級・中級文法の復習・定着を目的とした演習問題もこなしていく。後半は、18 世紀から 19 世紀前半に書かれた文学テクストを精読する。受講生にはテクストのドイツ語訳に加えて、授業で扱ったテーマに関する報告を求める場合もある。

第 1 回　イントロダクション
第 2 回　ニュース記事のドイツ語を読む（1）
第 3 回　ニュース記事のドイツ語を読む（2）
第 4 回　雑誌のドイツ語を読む（1）
第 5 回　雑誌のドイツ語を読む（2）
第 6 回　事典のドイツ語を読む
第 7 回　文学テクストを読む（1）
第 8 回　文学テクストを読む（2）
第 9 回　文学テクストを読む（3）
第 10 回　文学テクストを読む（4）
第 11 回　文学テクストを読む（5）
第 12 回　文学テクストを読む（6）
第 13 回　文学テクストを読む（7）
第 14 回　文学テクストを読む（8）
第 15 回　文学テクストを読む（9）とまとめ

●評価方法

平常点（課題提出・発表・授業態度を含む）、試験、レポートから総合的に評価する。4 回以上欠席した場合は評価の対象としない。

●受講生へのコメント

課題の量は毎回比較的多くなる。必ず予習をして授業にのぞむこと。予習の際には、『独和大辞典』（小学館）、『大独和辞典』（博友社）など、最低 2 種類以上の辞書を使うこと。また、発音も確認しておくこと。

●参考文献・教材

教科書①：Bruder Grimm：*Ausgewählte Kinder- und Hausmärchen*. Stuttgart：Reclam.（UB3179）
教科書②：中島悠爾・平尾浩三・朝倉巧『必携ドイツ文法総まとめ（改訂版）』白水社（2010）
その他の参考文献については、授業中に適宜、紹介する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCDFD3205	開講期	単位数	標準履修年次
212	**ドイツ語圏言語文化基礎演習Ⅱ** Proseminar in German Language and Culture Ⅱ			前火 2	2 単位	2 年
	旧科目名 ドイツ文学演習Ⅰ			担当教員名 神竹 道士 教授		

●科目の主題

本演習では、中級レベルのドイツ語文法について論じます。ドイツ語の様々な資格試験にも対応できるように、完全な演習形式をとります。

●到達目標

ドイツ語文法を単なる知識にとどまらせず、ピンポイントの集中学習によって徹底的にマスターすることが本講義の目標です。

●授業内容・授業計画

事前にプリント（問題集）を配布します。毎回 2 ～ 3 枚程度のプリントをこなしていきます。
取り扱う文法項目は、以下の通りです。

第 1 回　現在完了形（haben 支配）
第 2 回　現在完了形（haben 支配）
第 3 回　現在完了形（sein 支配）
第 4 回　現在完了形（sein 支配）
第 5 回　現在完了形（haben/sein 支配）
第 6 回　形容詞の格変化
第 7 回　形容詞の格変化
第 8 回　形容詞の格変化
第 9 回　形容詞の格変化
第 10 回　前置詞の格支配
第 11 回　前置詞の格支配
第 12 回　前置詞の格支配
第 13 回　否定表現

第 14 回　否定表現
第 15 回　まとめ

●評価方法
平常点と試験によって評価します。
●受講生へのコメント
授業の前に必ず下調べをしてください。予習をすることが、授業参加の必須条件です。
●参考文献・教材
教材プリント（問題集）を配布します。
参考文献は授業中適宜指示します。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCDFD3301	開講期	単位数	標準履修年次
213	ドイツ語圏言語文化演習Ⅰ Seminar in German Language and Culture Ⅰ			前月 4	2 単位	3・4 年
	旧科目名 ドイツ語学演習Ⅱ			担当教員名 髙井 絹子 准教授		

●科目の主題
世紀転換期にウィーンで活躍したフロイトは古典作品への造詣が深く、しばしば精神分析学の手法を文学作品を解釈するプロセスの中に示そうとします。この授業では小論 *Das Motiv der Kastchenwahl.*（1913）をドイツ語で読みます。平易とはいえない文章を丹念に読み、かつフロイト流作品解釈の是非について考えます。
●到達目標
ドイツ語テクストを正確に読みとり、関連する諸テーマについての理解を深めます。
●授業内容・授業計画
初回に授業の進め方について説明します。
第 1 回　導入
第 2 回　Sigmund Freud: *Das Motiv der Kastchenwahl.*（1）
第 3 回　Sigmund Freud: *Das Motiv der Kastchenwahl.*（2）
第 4 回　Sigmund Freud: *Das Motiv der Kastchenwahl.*（3）
第 5 回　Sigmund Freud: *Das Motiv der Kastchenwahl.*（4）
第 6 回　Sigmund Freud: *Das Motiv der Kastchenwahl.*（5）
第 7 回　Sigmund Freud: *Das Motiv der Kastchenwahl.*（6）
第 8 回　Sigmund Freud: *Das Motiv der Kastchenwahl.*（7）
第 9 回　Sigmund Freud: *Das Motiv der Kastchenwahl.*（8）
第 10 回　Sigmund Freud: *Das Motiv der Kastchenwahl.*（9）
第 11 回　Sigmund Freud: *Das Motiv der Kastchenwahl.*（10）
第 12 回　Sigmund Freud: *Das Motiv der Kastchenwahl.*（11）
第 13 回　Sigmund Freud: *Das Motiv der Kastchenwahl.*（12）
第 14 回　Sigmund Freud: *Das Motiv der Kastchenwahl.*（13）
第 15 回　まとめ
●評価方法
平常点（50%）、試験（50%）による総合評価です。
●受講生へのコメント
事前に指示された箇所は必ず予習しておいてください。授業開始前にシェイクスピアの『ヴェニスの商人』『リア王』は読んでおくこと。
●参考文献・教材
高橋義孝編『小筐選び』同学社、1993 年。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCDFD3302	開講期	単位数	標準履修年次
214	ドイツ語圏言語文化演習Ⅱ Seminar in German Language and Culture Ⅱ			後火 2	2 単位	3・4 年
	旧科目名 ドイツ文学演習Ⅱ			担当教員名 長谷川 健一 講師		

●科目の主題

ドイツ語圏の文学テクストを精読する。

●到達目標

(1) ドイツ語圏の文学テクストの精読を通じて中・上級レベルの文法を理解すると同時に、読解力を高める。
(2) さまざまなジャンル・文体のテクストに慣れる。
(3) テクストの成立背景に関する理解を深める。

●授業内容・授業計画

水の精ウンディーネと騎士フルトブラントの悲恋を描いた *Undine* は、ドイツ・ロマン派の作家 Friedrich de la Motte Fouqué（1777-1843）が 1811 年に発表した短編小説である。本授業では、この小説を中心に、水の精（水の女）にまつわる幾つかのテクスト（伝説、詩、エッセイ、小説）を精読しつつ、このモティーフの特徴とその背景について考察する。その際、各テクストに関連した論文も適宜参照し、作品の理解を深める。受講生には、論文の内容に関する報告を求める場合もある。

第 1 回　イントロダクション：水の精あるいは水の女モティーフについて
第 2 回　*Herr Peter Dimringer von Staufenberg*（Grimm）の精読①
第 3 回　*Herr Peter Dimringer von Staufenberg*（Grimm）の精読②
第 4 回　*Herr Peter Dimringer von Staufenberg*（Grimm）の精読③
第 5 回　*Buch der Lieder*（Heine）の精読
第 6 回　*Godwi oder Das steinernde Bild der Mutter*（Brentano）の精読
第 7 回　*Elementargeister*（Heine）の精読①
第 8 回　*Elementargeister*（Heine）の精読②
第 9 回　*Undine*（Fouqué）の精読①
第 10 回　*Undine*（Fouqué）の精読②
第 11 回　*Undine*（Fouqué）の精読③
第 12 回　*Undine*（Fouqué）の精読④
第 13 回　*Undine*（Fouqué）の精読⑤
第 14 回　*Undine*（Fouqué）の精読⑥
第 15 回　*Undine*（Fouqué）の精読⑦とまとめ

●評価方法

平常点（授業態度を含む）、発表、試験、提出物・レポートから総合的に評価する。

●受講生へのコメント

必ず予習して授業にのぞむこと。予習の際には、『独和大辞典』（小学館）、『大独和辞典』（博友社）など、最低 2 種類以上の辞書を使うこと。その際、発音も確認しておくこと。

●参考文献・教材

テクスト（教科書）：Friedrich de la Motte Fouqué: *Undine. Eine Erzahlung*. Stuttgart : Reclam.（UB491）
その他のテクスト：Bruder Grimm: *Deutsche Sagen*. Stuttgart : Reclam.（UB6806）; Heinrich Heine: *Elementargeister*. Stuttgart : Reclam.（UB19136）; Clemens Brentano: *Godwi oder Das steinerne Bild der Mutter*. Stuttgart : Reclam.（UB9394）; Heinrich Heine: *Buch der Lieder*. Stuttgart : Reclam.（UB2231）（以上のテクストについては、コピーを配布する。）
文法の教科書：中島悠爾・平尾浩三・朝倉巧『必携ドイツ文法総まとめ（改訂版）』白水社（2010）
参考文献：適宜、紹介する。

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LCDFD3303	開講期	単位数	標準履修年次
215	**ドイツ語圏言語文化演習Ⅲ** Seminar in German Language and Culture Ⅲ			後火 3	2 単位	3・4 年
	旧科目名 ドイツ文化演習 I			担当教員名 神竹 道士 教授		

●科目の主題

本演習では、中級～上級レベルのドイツ語文法について論じます。ドイツ語の様々な資格試験にも対応できるように、完全な演習形式をとります。

●到達目標

ドイツ語文法を単なる知識にとどまらせず、ピンポイントの集中学習によって徹底的にマスターすることが本演習の目標です。

●授業内容・授業計画

事前にプリント（問題集）を配布します。毎回 3 枚程度のプリントをこなします。

取り扱う文法項目は、以下の通りです。

第 1 回　従属文（従属接続詞）
第 2 回　従属文（従属接続詞）
第 3 回　従属文（従属接続詞）
第 4 回　従属文（従属接続詞）
第 5 回　従属文（従属接続詞）
第 6 回　関係文（定関係代名詞）
第 7 回　関係文（定関係代名詞）
第 8 回　関係文（不定関係代名詞）
第 9 回　関係文（不定関係代名詞）
第 10 回　能動文と受動文
第 11 回　能動文と受動文
第 12 回　能動文と受動文
第 13 回　文域
第 14 回　文域
第 15 回　まとめ

●評価方法

平常点と試験によって評価します。

●受講生へのコメント

授業の前に必ず下調べをして下さい。

予習をすることが、授業参加の必須条件です。

●参考文献・教材

教材プリント（問題集）を配布します。

参考文献は授業中適宜指示します。

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LCDFD3304	開講期	単位数	標準履修年次
216	**ドイツ語圏言語文化特別演習** Special Seminar in German Languages and Culture			後月 4	2 単位	3 年
	旧科目名 ドイツ文化演習Ⅱ			担当教員名 髙井 絹子 准教授		

●科目の主題

平易なドイツ語で書かれたテクストを用い、19 世紀末から 20 世紀初めにかけての思想と芸術の関係について考察します。

●到達目標

ドイツ語の読解力を高め、思想と芸術の関係、時代状況が芸術作品に及ぼす影響について考察する力を養います。

●授業内容・授業計画

初回に授業の進め方について説明します。第 2 回以降は、テキストの音読、訳読が中心です。文法の補足説明、テキストの歴史的文化的背景についての説明を適宜行います。基礎的な知識を習得したあと、受講者が各自選ん

だテーマでレポート発表します。

第 1 回　導入
第 2 回　『芸術家の村・ヴォルプスヴェーデ』講読
第 3 回　『芸術家の村・ヴォルプスヴェーデ』講読
第 4 回　『芸術家の村・ヴォルプスヴェーデ』講読
第 5 回　『芸術家の村・ヴォルプスヴェーデ』講読
第 6 回　『芸術家の村・ヴォルプスヴェーデ』講読
第 7 回　『芸術家の村・ヴォルプスヴェーデ』講読
第 8 回　『芸術家の村・ヴォルプスヴェーデ』講読
第 9 回　『芸術家の村・ヴォルプスヴェーデ』講読
第 10 回　『芸術家の村・ヴォルプスヴェーデ』講読
第 11 回　受講者による発表準備（1）
第 12 回　受講者による発表準備（2）
第 13 回　受講者による発表（1）
第 14 回　受講者による発表（2）
第 15 回　まとめ

●評価方法

平常点（20%）、試験（40%）、レポート発表（40%）による総合評価です。

●受講生へのコメント

事前に指定された部分は、必ず予習してきてください。

●参考文献・教材

ステフェンス／ヴァイグル／池田『芸術家の村・ヴォルプスヴェーデ』同学社

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCDFD3305	開講期	単位数	標準履修年次
217	ドイツ語コミュニケーションⅠ Studies in German Communication Ⅰ			前水 2	2 単位	3・4 年
	旧科目名			担当教員名 ジモン・エルトレ 特任講師		

●科目の主題

Wir sprechen, hören, lesen und schreiben Deutsch in Alltagssituationen. Wir trainieren den Wortschatz und üben wichtige Strukturen.

●到達目標

Unser Ziel ist die Verbesserung der Kommunikationsfähigkeit in Alltagssituationen. Wir lernen auch Unterschiede zwischen dem Alltag in deutschsprachigen Ländern und dem in Japan kennen.

●授業内容・授業計画

Alltagsdeutsch auf dem Niveau A2 des europäischen Referenzrahmens. Am meisten geübt werden Sprechen und Hören. Im Zentrum steht die Erweiterung des Wortschatzes, doch manchmal werden auch grammatische Strukturen wiederholt.

第 1 回　Einführung, erste Übungen
第 2 回　Kommunikative Übungen
第 3 回　Kommunikative Übungen
第 4 回　Kommunikative Übungen
第 5 回　Kommunikative Übungen
第 6 回　Kommunikative Übungen
第 7 回　Kommunikative Übungen
第 8 回　Kommunikative Übungen
第 9 回　Kommunikative Übungen
第 10 回　Kommunikative Übungen
第 11 回　Kommunikative Übungen
第 12 回　Kommunikative Übungen
第 13 回　Kommunikative Übungen
第 14 回　Kommunikative Übungen
第 15 回　Zusammenfassung

●評価方法

Aktive und regelmäßige Teilnahme am Unterricht sowie Hausaufgaben (40%). Tests und kleine Präsentationen (60%).

●受講生へのコメント

In der ersten Stunde können Sie Themen wünschen. Vielleicht können wir Ihre Themen im Unterricht behandeln.

●参考文献・教材

Sie müssen kein Buch kaufen. Sie bekommen Kopien.

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCDFD3306	開講期	単位数	標準履修年次
218	ドイツ語コミュニケーションⅡ Studies in German Communication Ⅱ			後水２	２単位	３・４年
	旧科目名			担当教員名 ジモン・エルトレ 特任講師		

●科目の主題

Wir sprechen, hören, lesen und schreiben Deutsch in Alltagssituationen. Wir trainieren den Wortschatz und üben wichtige Strukturen.

●到達目標

Unser Ziel ist die Verbesserung der Kommunikationsfähigkeit in Alltagssituationen. Wir lernen auch Unterschiede zwischen dem Alltag in deutschsprachigen Landern und in dem in Japan kennen.

●授業内容・授業計画

Alltagsdeutsch auf dem Niveau A2 des europäischen Referenzrahmens. Am meisten geübt werden Sprechen und Hören. Im Zentrum steht die Erweiterung des Wortschatzes, doch manchmal werden auch grammatische Strukturen wiederholt.

第 1 回 Einführung, erste Übungen
第 2 回 Kommunikative Übungen
第 3 回 Kommunikative Übungen
第 4 回 Kommunikative Übungen
第 5 回 Kommunikative Übungen
第 6 回 Kommunikative Übungen
第 7 回 Kommunikative Übungen
第 8 回 Kommunikative Übungen
第 9 回 Kommunikative Übungen
第 10 回 Kommunikative Übungen
第 11 回 Kommunikative Übungen
第 12 回 Kommunikative Übungen
第 13 回 Kommunikative Übungen
第 14 回 Kommunikative Übungen
第 15 回 Zusammenfassung

●評価方法

Aktive und regelmäßige Teilnahme am Unterricht sowie Hausaufgaben (40%). Tests und kleine Präsentationen (60%).

●受講生へのコメント

In der ersten Stunde können Sie Themen wünschen. Vielleicht können wir Ihre Themen im Unterricht behandeln.

●参考文献・教材

Sie müssen kein Buch kaufen. Sie bekommen Kopien.

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCDFD3307	開講期	単位数	標準履修年次
219	ドイツ語圏ランデスクンデ German Landeskunde			後火 4	2 単位	3・4 年
	旧科目名			担当教員名 ジモン・エルトレ 特任講師		

●科目の主題

Die deutschsprachigen Länder heute. Sie lernen besonders die Schweiz und Unterschiede zwischen der Schweiz und Deutschland/Österreich kennen.

●到達目標

Das Ziel ist, einen Einblick in die Gesellschaft, Kultur, Politik, Wirtschaft der Schweiz, zu erhalten. Die einzelnen Themen sollen gemeinsam erarbeitet und diskutiert werden. Im zweiten Teil des Kurses soll ein selbst gewähltes Thema erarbeitet und präsentiert werden (Projektarbeit).

●授業内容・授業計画

Als Ausgleich zur üblichen Ausrichtung des Germanistikstudiums auf Deutschland steht mit der Schweiz ein anderes deutschsprachiges Land im Zentrum dieses Unterrichts.

第 1 回 Einführung
第 2 回 Geografie und Bevölkerung
第 3 回 Politisches System
第 4 回 Wirtschaft
第 5 回 Schule und Bildung
第 6 回 Literatur und Musik
第 7 回 Musik
第 8 回 Kirche, Feste und Bräuche
第 9 回 Familie und Freunde
第 10 回 Küche
第 11 回 Projektarbeit
第 12 回 Projektarbeit
第 13 回 Projektarbeit
第 14 回 Präsentationen
第 15 回 Zusammenfassung

●評価方法

Aktive und regelmäßige Teilnahme am Unterricht (40%). Präsentationen, Test (60%).

●受講生へのコメント

Spezielle Themenwünsche werden nach Möglichkeit berücksichtigt. Deutsche Sprachkenntnisse sind bei diesem Kurs Voraussetzung.

●参考文献・教材

Sie müssen kein Buch kaufen. Sie erhalten Kopien. Wir verwenden Materialien aus verschiedenen Medien (Bücher, Broschüren,CDs, DVDs).

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCDFF2101	開講期	単位数	標準履修年次
220	フランス語圏文学史 History of Frencophone Literature			後木 2	2 単位	1・2 年
	旧科目名 フランス文学史Ⅰ・Ⅱ			担当教員名 津川 廣行 教授		

●科目の主題

中世から現代までのフランス文学史を担当する。すなわち、フランス語およびフランス文学の黎明期にはじまって、武勲詩、12、13 世紀抒情詩・物語、14、15 世紀の抒情詩・演劇、フランス・ルネサンスの物語作家達、リヨン派・プレイヤード派の詩人達、バロックと古典主義、啓蒙思想、18 世紀の小説・演劇、ロマン主義、近代小説の誕生・発展、写実主義、自然主義、象徴主義、近代詩の流れ、ベル・エポックの文学、『エヌ・エル・エフ』の文学と批評、ダダ、シュールレアリスムの文学、実存主義、ヌーヴォー・ロマン、クレオール文学などについて論ずる。

●到達目標

それぞれの時代、それぞれの流派の代表的作品の概略を知ってもらうこともさることながら、それらを、各時代の

精神・文化・社会状況のうちに位置づけることによって、フランス文学の「流れ」を理解することを目標とする。

●授業内容・授業計画

第 1 回のイントロダクションで、フランス文学の生い立ち・特徴・基盤について概括的に論じたあと、2 回目以降は以下のような配分で講ずることになる。

第 1 回　イントロダクション
第 2 回　中世（1）
第 3 回　中世（2）
第 4 回　十六世紀
第 5 回　十七世紀（1）
第 6 回　十七世紀（2）
第 7 回　十八世紀（1）
第 8 回　十八世紀（2）
第 9 回　十九世紀（1）
第 10 回　十九世紀（2）
第 11 回　十九世紀（3）
第 12 回　二十世紀（1）
第 13 回　二十世紀（2）
第 14 回　二十世紀（3）
第 15 回　まとめ

●評価方法

出席およびレポート

●受講生へのコメント

フランス語圏文学史について広く学ぶのみならず、推薦した作品を、訳書でかまわないので、できるだけ多く読んでほしい。

●参考文献・教材

饗庭孝男他著『新版フランス文学史』白水社

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCDFF3201	開講期	単位数	標準履修年次
221	**フランス語圏文化論** Culture of Frencophone			後月 2	2 単位	2・3 年
	旧科目名 フランス文化論Ⅰ・Ⅱ			担当教員名 白田 由樹 准教授		

●科目の主題

19 世紀末ベルギーにおいて盛んな動きを見せた象徴派やアール・ヌーヴォーなどの芸術運動を取り上げる。また、これらの文学や芸術運動と、ベルギーという国の歴史や言語、当時の経済や国際関係等の背景を対比する中で、文化的特性が作り出されていく状況について考察していく。

●到達目標

これまで文学や美術史の領域で扱われてきた象徴派芸術やアール・ヌーヴォーについて、その生成の背景から検討していくことで、文化的事象を見る際の視野を広げる。また、多言語国家であるベルギーの歴史や言語、他のヨーロッパ諸国との関係を対照することから、多様な文化のあり方に対する理解を深める。

●授業内容・授業計画

19 世紀末から 20 世紀にかけてのベルギーの芸術運動を中心に、象徴派の文学や美術、アール・ヌーヴォーと呼ばれる応用芸術の動向や思想を概説する。また、この国の歴史的経緯や言語状況、他国との関係といった社会的背景をふまえながら、その文化的特性との関係について考える機会として、グループ討議や発表の機会を設ける。

第 1 回　ベルギーの概要と世紀末ヨーロッパ
第 2 回　ベルギーの歴史と地域・言語・宗教
第 3 回　文学、芸術、建築①中世から 18 世紀
第 4 回　産業革命と近代化
第 5 回　経済繁栄と植民地政策
第 6 回　世紀末ベルギーの文化と背景
第 7 回　文学、芸術、建築② 19 世紀後半から 20 世紀
第 8 回　美術界の状況と前衛芸術運動
第 9 回　イギリス、フランス、その他の影響

第 10 回　象徴派の美術：アンソール、ロップス、クノップフ
第 11 回　アール・ヌーヴォー：アンカール、オルタ、ヴァン・デ・ヴェルデ
第 12 回　象徴主義の文学：ローデンバック、ヴェラーレン、マーテルランク
第 13 回　二つの大戦から現在まで：言語紛争と地域対立
第 14 回　歴史と今をつなぐもの：現代アート作品から
第 15 回　試験・総括

●評価方法
平常点（60%）と発表・試験（40%）による。なお、5 回以上の欠席があった場合は、原則として評価の対象としない。

●受講生へのコメント
毎回、授業内容を整理し考察をおこなうミニ課題を出すので、能動的に問いを立て、解決する姿勢で受講してほしい。

●参考文献・教材
講義の中で指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCDFF3202	開講期	単位数	標準履修年次
222	**フランス語学概論** Introduction to Francophone Linguistics			後月 4	2 単位	2・3 年
	旧科目名 フランス語学概論Ⅰ・Ⅱ			担当教員名 福島 祥行 教授		

●科目の主題
いうまでもなく、言語の歴史は人間社会の歴史である。この科目では、「フランス語」――なにが「フランス語」かは、講義のなかであきらかになるであろう――を通時的・共時的にながめることにより、フランス語とフランス語圏、そしてわれわれ人類についての、社会、歴史、存在（ありかた）について思弁する。

●到達目標
人類の言語とフランス語およびフランス語圏の歴史、およびフランス語そのものについて考察をほどこすことにより、人類、言語、国家について多面的に考察する態度を涵養する。

●授業内容・授業計画
フランス語を通時的にながめるなかで、人類、言語、国家について話しあい、かんがえ、あらたな知識を創発することをめざす。
第 1 回　人類の曙と言語の誕生
第 2 回　インド・ヨーロッパ語族と比較言語学
第 3 回　古代ローマとラテン語
第 4 回　ケルト人とガリア魂
第 5 回　ゲルマン民族大移動とフランスの成立
第 6 回　ラテン語から古フランス語へ
第 7 回　ノルマンディ侵攻と英語への影響
第 8 回　ルネサンスと「国語」の誕生
第 9 回　近代フランス語とアカデミー・フランセーズ
第 10 回　合理主義と理性の文法
第 11 回　啓蒙主義とフランス語普遍論
第 12 回　ロマン主義と言語起源論
第 13 回　「小説」の誕生と国語教育
第 14 回　フランスの言語政策とフランコフォニー政策
第 15 回　ふりかえりとまとめ

●評価方法
ほぼ毎回おこなわれるグループワークと、ポートフォリオによるふりかえり、および自己評価。

●受講生へのコメント
フランス語履修者でなくても受講可能であるが、受講者には、言語と人間と世界＝社会にかんする真摯な洞察がもとめられる。
また「フランス語」ひとつをとりあげても、さまざまなことを論ずることが可能であるという「学問の豊穣さ」も感じてほしい。
なお、理由なき缺席を 3 回以上おこなった受講生については評価の対象としないので注意されたい。

また、毎回書いてもらったポートフォリオは、最終回で必要となるので、かならず保管すること。

●参考文献・教材

■参考文献

森本英夫『フランス語の社会学』（駿河台出版社）
P. リカード『フランス語史を学ぶ人のために』（世界思想社）
島岡茂『古フランス語文法』（大学書林）
島岡茂『フランス語の歴史』（大学書林）
島岡茂『フランス語の背景』（大学書林）
島岡茂『続・フランス文法の背景』（大学書林）
亀井・河野・千野編『言語学大辞典』（三省堂）
柴田・樺山・福井編『フランス史』（山川出版社）
朝倉季雄『新フランス文法事典』（白水社）
朝倉季雄『フランス文法集成』（白水社）
大橋保夫・他『フランス語とはどういう言語か』（駿河台出版社）
佐藤・大木・佐藤『詳解フランス文典』（駿河台出版社）
前島儀一郎『英仏比較文法』（大学書林）
島岡茂『英仏比較文法』（大学書林）
島岡茂『仏独比較文法』（大学書林）
島岡茂『フランス語統辞論』（大学書林）
東京外国語大学グループ〈セメイオン〉『フランス語学の諸問題』（三修社）
東京外国語大学グループ〈セメイオン〉『フランス語を考える』（三修社）
東京外国語大学グループ〈セメイオン〉『フランス語学の諸問題 2』（三修社）

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCDFF3203	開講期	単位数	標準履修年次
223	**フランス語圏言語文化基礎演習 I** Proseminar in Frencophone Language and Culture I			前木 2	2 単位	2 年
	旧科目名 フランス言語文化基礎演習			担当教員名 津川 廣行 教授		

●科目の主題

ベルギー象徴派の劇作家メーテルリンクの『青い鳥』(1909) をフランス語で読む。この作品については、子供のころ、児童向けの文庫などで読んだことのある者も多いであろうが、この授業では、大人のための童話であるとして、これを、フランス語で味わう。

●到達目標

驚くほど平易なフランス語でかかれている劇作品 *L'Oiseau bleu* の読解をつうじて、フランス語力の向上を目指す。また、含蓄のあるこの象徴劇に託されたメッセージを、読みとり、理解することを目標とする。

●授業内容・授業計画

第一回目のイントロダクションのあと、*L'Oiseau bleu* の生成過程、象徴主義文学運動のなかでのメーテルリンクの位置づけなどについて確認しながら、この作品を以下のペースで読み進めていく。

第 1 回　イントロダクション
第 2 回　pp. 246-248.
第 3 回　pp. 249-251.
第 4 回　pp. 252-254.
第 5 回　pp. 255-257.
第 6 回　pp. 258-260.
第 7 回　pp. 261-263.
第 8 回　pp. 264-266.
第 9 回　pp. 267-269.
第 10 回　pp. 270-272.
第 11 回　pp. 273-275.
第 12 回　pp. 276-278.
第 13 回　pp. 279-281.
第 14 回　pp. 282-284.
第 15 回　まとめ

●評価方法
授業への参加度
●受講生へのコメント
特になし
●参考文献・教材
授業中に指示する

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCDFF3204	開講期	単位数	標準履修年次
224	フランス語圏言語文化基礎演習Ⅱ Proseminar in Frencophone Language and Culture Ⅱ			後火 2	2 単位	2 年
	旧科目名			担当教員名 白田 由樹 准教授		

●科目の主題
フランス文化の背景を理解するために必要となる地理・歴史の概略的知識と、フランス語の読解力をテクスト講読を通じて養成する。
●到達目標
フランスの文化や文学になじむための地理や歴史・社会の基礎的な知識を身につけるとともに、フランス語の読解力や発音を向上させ、初級から中級への橋渡しとする。
●授業内容・授業計画
フランスの地理・歴史に関するテクストを講読しながら、フランスの文化的風土に関する基礎知識を整理・確認していく。また適宜、補足資料を参照しながら理解を深め、フランスという国の特性を発見していく。
第 1 回　フランスの地理と社会
第 2 回　地理①モザイクの風景
第 3 回　地理②千の顔をもつ国
第 4 回　地理③豊かな土地
第 5 回　地理④地方自治体
第 6 回　地理⑤都市とは何か
第 7 回　地理⑥首都パリ
第 8 回　フランスの史跡モニュメント
第 9 回　歴史①ブルターニュの巨石遺跡
第 10 回　歴史②ポン・デュ・ガール
第 11 回　歴史③大聖堂の時代
第 12 回　歴史④ルネサンス期の城
第 13 回　歴史⑤都市計画とフランス式庭園
第 14 回　歴史⑥産業革命とエッフェル塔
第 15 回　過去から現在へ（レポート・総括）
●評価方法
平常点（70%）、発表（10%）およびレポート（20%）
とくに授業の取り組み（毎回の準備や授業でのパフォーマンス、継続性）、その結果としての読解力・発音の伸びを重視する。なお、5 回以上の欠席があった場合は原則として単位を認定しない。
●受講生へのコメント
テクスト講読を中心とした演習なので、必ず予習（語彙の下調べと文法の復習、背景知識の補強）をしてくること。知らないことやわからない内容は積極的に調べ、必要に応じて質問や相談をしながら理解を進めてほしい。
●参考文献・教材
教材：斉藤広信、ベルナール・レウルス『フランス 地理と歴史の旅：*À la découverte de la France*』、白水社, 2013 年
参考文献：授業の中で案内する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCDFF3301	開講期	単位数	標準履修年次
225	**フランス語圏言語文化演習Ⅰ** Seminar in Francophone Language and Culture Ⅰ			前火 3	2 単位	3・4 年
	旧科目名 フランス文学演習			担当教員名 福島 祥行 教授		

●科目の主題

言語学という学問領域のあれこれを、フランス語を素材として学ぶとともに、フランス語そのものを深く考察するためのアイテムを身につける。授業は教場につどうすべてのひとびとのあいだの協働と対話によってすすめられる。

●到達目標

授業をとおして、フランス語および言語そのもの、ひいては人間存在へのまなざしを涵養する。

●授業内容・授業計画

今年度もなお、「記号」と「コミュニケーション」の問題について思弁する。われわれのコミュニケーション活動を分析すると、そこにはあまたのことが見過ごされ、誤解されてきたことがあきらかになる。この授業では、這般の消息をたずねることで、あたらしい知識の創発をめざす。なお、授業はグループワークによって進められる。

第 1 回　記号とはなにか
第 2 回　コミュニケーションとはなにか
第 3 回　コード・モデル
第 4 回　発話の多層性と言語行為論
第 5 回　会話の協調原理と関連性理論
第 6 回　推論モデル
第 7 回　ふたつの独我論
第 8 回　私的言語と感覚日記
第 9 回　ヴィトゲンシュタインの「意味」
第 10 回　プロトタイプとアフォーダンス
第 11 回　知覚の社会性とエスノメソドロジー
第 12 回　「意図」の不在
第 13 回　相互行為モデル
第 14 回　コミュニケーション研究の応用範囲
第 15 回　ふりかえりとまとめ

●評価方法

ポートフォリオによるふりかえり、および自己評価・相互評価。

●受講生へのコメント

われわれは「コミュニケーション」は「記号」の「伝達」であるとかんがえがちであるが、これらのキーワードについて厳密に考察したけっかではない。そして、「コミュニケーション」をめぐる言説のおおくは、そこをつきつめてかんがえていないがために、頓珍漢な方向へと彷徨している。受講生諸君は、教場における他者との「コミュニケーション」裡につきつめていただきたい。

●参考文献・教材

ウンベルト・エコ『記号論入門』而立書房
西阪仰『相互行為分析という視点――文化と心の社会学的記述』金子書房
好井裕明・西阪仰・山田富秋編『会話分析への招待』世界思想社
前田泰樹・水川喜文・岡田光弘編『エスノメソドロジー』新曜社
鈴木聡志『会話分析・ディスコース分析』新曜社
木村大治・高梨克也・中村美知夫編集『インタラクションの境界と接続』昭和堂
岡田美智男『弱いロボット』医学書院
ダニエル・C・デネット『スウィート・ドリームズ』NTT 出版
マイケル・S・ガザニガ『〈わたし〉はどこにあるのか』紀伊國屋書店
ケネス・J・ガーゲン他『ダイアローグ・マネジメント』ディスカヴァー・トウェンティワン
その他、授業中に指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCDFF3302	開講期	単位数	標準履修年次
226	フランス語圏言語文化演習Ⅱ Seminar in Francophone Language and Culture Ⅱ			前木 3	2 単位	3・4 年
	旧科目名 フランス文化演習			担当教員名 津川 廣行 教授		

●科目の主題

ベルギー象徴派の劇作家メーテルリンクの最高傑作である『ペレアスとメリザンド』(1892) をフランス語で読む。また、この作品はドビュッシーによってオペラ化されているので、これを DVD にて鑑賞する。

●到達目標

比較的平易な語で書かれたこの劇作品を、やや早めのスピードで読み進めることにより、フランス語力の向上を目指す。また、この謎めいた象徴劇に託されたメッセージを、読みとり理解することを目的とする。

●授業内容・授業計画

第一回目のイントロダクションのあと、*Pelleas et Melisande* の生成過程、象徴主義文学運動のなかでのメーテルリンクの位置づけなどについて確認しながら、この作品を以下のペースで読み進めていく。

第 1 回　イントロダクション
第 2 回　pp. 373-377.
第 3 回　pp. 378-382.
第 4 回　pp. 383-387.
第 5 回　pp. 388-392.
第 6 回　pp. 393-397.
第 7 回　pp. 398-402.
第 8 回　pp. 403-407.
第 9 回　pp. 408-412.
第 10 回　pp. 413-417.
第 11 回　pp. 418-422.
第 12 回　pp. 423-427.
第 13 回　pp. 428-433.
第 14 回　pp. 434-437.
第 15 回　まとめ

●評価方法

授業への参加度

●受講生へのコメント

特になし

●参考文献・教材

授業中に指示する

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCDFF3303	開講期	単位数	標準履修年次
227	フランス語圏言語文化演習Ⅲ Seminar in Francophone Language and Culture Ⅲ			後水 3	2 単位	3・4 年
	旧科目名			担当教員名 白田 由樹 准教授		

●科目の主題

フランス共和国やその他のフランス語圏の国々の文化に関するテクストを読みながら、今日に至るフランス語圏文化の成り立ちについて学ぶ。

●到達目標

フランス語圏の社会や文化に関する中級レベルの文章で用いられる語彙や表現を身につけるとともに、背景となる歴史的知識を学び、より幅広いテクストを読みこなすための語学力と文化的理解を深める。

●授業内容・授業計画

現在にいたるまでのフランス語圏の社会と文化を扱ったテクストを講読しながら、その背景を理解するために必要となる国際関係、言語状況、文化や文化などの概要と歴史的経緯を学ぶ。

第 1 回　Le français et l'Europe francohone

第 2 回　L'empire colonial français et DROM-COM
第 3 回　L'histoire et la société unique du Québec
第 4 回　Les francophones aux États-Unis et CODOFIL
第 5 回　Les Antilles françaises et l'indépendance d'Hatïti
第 6 回　L'Indochine française et l'Oncle Hô
第 7 回　L'Afrique française et le Printemps arabe
第 8 回　On parle français au Québec
第 9 回　La francophonie et l'OIF
第 10 回　Les Beurs : les immigrés arabes de deuxième génération
第 11 回　Autour des Adventures de Tintin
第 12 回　La fin de l'Indochine française à travers les films français
第 13 回　Les arts du cirque au Québec
第 14 回　La transformation de l'identité antillaise : de la négritude à la créolité
第 15 回　L'interculturalisme et la politique culturelle du Québec

●評価方法
平常点（70%）、レポート（30%）。
●受講生へのコメント
毎回、講読の予習（語彙や固有名詞、事実関係の下調べ、文法事項の復習、音読練習）は必ずやってくること。また、5 回以上欠席した場合は原則として単位を認定しない。
●参考文献・教材
教科書：山出裕子『フランス語圏の社会と文化 *Societes et cultures francophones*』、駿河台出版、2016 年
参考文献：授業中に案内する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCDFF3304	開講期	単位数	標準履修年次
228	**フランス語圏言語文化特別演習** Special Seminar in Francophone Language and Culture			後火 4	2 単位	3 年
	旧科目名 フランス語学演習			担当教員名 福島 祥行 教授		

●科目の主題
卒業論文執筆にむけたプレ演習として、論文に関する内容・形式面の諸注意、発想法、テーマ設定、文献蒐集、分析理論などについて学ぶことで、自律的に論文を執筆する環境をつくりあげる。
●到達目標
発想法、テーマ設定、文献蒐集、分析理論の学習と対話をとおして、フランス語圏学分野における論文執筆の力を身につける。
●授業内容・授業計画
主として、受講者各人がフランス語圏学の分野において設定したテーマにもとづき、論文執筆のためのワークショップをおこなう。主として受講者による発表と、受講者間のディスカッションによって進行してゆく。そのさい、発表会の司会は受講生が回り持ちでおこなう。
第 1 回　論文とはどのようなものか、ブレーンストーミング、マインドマップ、KJ 法、アクションラーニングなどについて、順番決定
第 2 回　論文をよむ、論理をくみたてる
第 3 回　文をつなぐ、書いてみる
第 4 回　受講生による発表①
第 5 回　受講生による発表②
第 6 回　受講生による発表③
第 7 回　受講生による発表④
第 8 回　受講生による発表⑤
第 9 回　受講生による発表⑥
第 10 回　受講生による発表⑦
第 11 回　受講生による発表⑧
第 12 回　受講生による発表⑨
第 13 回　受講生による発表⑩
第 14 回　受講生による発表⑪

第 15 回　ふりかえりとまとめ

●評価方法
平常点と発表内容をまとめたレポート。
●受講生へのコメント
フランス語圏領域以外に属する学生が受講したばあいは、テーマの選定をフランス語圏学に限定しない。また、ここで選択したテーマは、あくまで「論文執筆法」を学ぶための仮のものであり、じっさいの執筆時のテーマを拘束するものではない。
なお、発表者と対話することは、論文についてかんがえることの重要な要素をなすので、出席も重視する。
●参考文献・教材
授業中に指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCDFF3305	開講期	単位数	標準履修年次
229	フランス語コミュニケーションⅠ Studies in French Communication Ⅰ			前金 2	2 単位	2・3 年
	旧科目名			担当教員名 ロラン・バレイユ 特任講師		

●科目の主題
Aux travers de différents thèmes de la vie française, d'abord usuels puis dans un deuxième temps culturels, nous souhaitons amener l'apprenant à pouvoir s'exprimer et à échanger avec l'enseignant.
●到達目標
Les objectifs sont communicatifs et linguistiques. Nous travaillerons les compétences d'expression et de compréhension orales et écrites.
●授業内容・授業計画
Chacune des 3 leçons des dossiers est basée sur un média déclencheur différent (vidéo, écrit ou audio) et guide l'apprenant dans une découverte de la langue et une construction progressive du sens.

第 1 回　Dire quel sport on pratique
第 2 回　Donner des conseils
第 3 回　Exprimer le but
第 4 回　Expliquer une décision
第 5 回　Exprimer la fréquence. Caractériser un logement
第 6 回　Indiquer un itinéraire
第 7 回　Comprendre une annonce d'appartement
第 8 回　Comparer des appartements
第 9 回　Décrire une situation dans le passé
第 10 回　Faire une description
第 11 回　Situer dans le temps, Indiquer la chronologie
第 12 回　Raconter un changement de vie
第 13 回　Exprimer ses goûts
第 14 回　Présenter un problème et donner des solutions
第 15 回　Donner une opinion

●評価方法
Contrôle continu, présence et participation
●受講生へのコメント
Participation orale active nécessaire. Apprentissage du vocabulaire de base indispensable.
●参考文献・教材
Totem2 A2 de Marie-Jose Lopes et Jean-Thierry Le Bougnec, Hachette.

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCDFF3306	開講期	単位数	標準履修年次
230	フランス語コミュニケーションⅡ Studies in French Communication Ⅱ			後金 2	2 単位	2・3 年
	旧科目名			担当教員名 ロラン・バレイユ 特任講師		

●科目の主題

Aux travers de différents thèmes de la vie française, d'abord usuels puis dans un deuxième temps culturels, nous souhaitons amener l'apprenant à pouvoir s'exprimer et à échanger avec l'enseignant.

●到達目標

Les objectifs sont communicatifs et linguistiques. Nous travaillerons les compétences d'expression et de compréhension orales et écrites.

●授業内容・授業計画

Chacune des 3 leçons des dossiers est basée sur un média déclencheur différent (vidéo, écrit ou audio) et guide l'apprenant dans une découverte de la langue et une construction progressive du sens.

第 1 回 Caractériser un lieu
第 2 回 Décrire un cadre de vie
第 3 回 Parler d'un ensemble de personnes
第 4 回 Organiser son discours
第 5 回 Poser des questions sur un objet, Désigner un objet
第 6 回 Dire la matière
第 7 回 Comprendre une publicité
第 8 回 Vanter les qualités d'un objet
第 9 回 Comprendre un tract, Revendiquer
第 10 回 Faire une description
第 11 回 Donner des conseils
第 12 回 Exprimer des certitudes
第 13 回 Exprimer des souhaits
第 14 回 Annoncer une nouvelle (bonne ou mauvaise)
第 15 回 Parler du futur

●評価方法

Contrôle continu, présence et participation

●受講生へのコメント

Participation orale active nécessaire. Apprentissage du vocabulaire de base indispensable.

●参考文献・教材

Totem2 A2 de Marie-José Lopes et Jean-Thierry Le Bougnec, Hachette.

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCDFF3205	開講期	単位数	標準履修年次
231	エチュード・フランコフォーヌ Francophone Studies			前月 2	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名 フランス文化特講			担当教員名 中條 健志 非常勤講師		

●科目の主題

現代フランス語圏をフィールドに、当該の（とくにフランス以外の）地域・国における文化的・社会的事象をとりあげ、特定のテーマ（移民、言語、宗教、植民地、政治など）について考え、論じる。

●到達目標

当該のテーマに沿って、調べ、論じ、深め、拡げる力を、協働により身につける。また、フランス語圏の事象にたいして多面的な分析をほどこすことによって日本社会、延いては世界を多角的に見うる視点を身につける。

●授業内容・授業計画

講義にくわえグループワークによる作業と発表をおこなう。各グループは、それぞれにテーマを設定し、パワーポイントなどをもちいて発表、他グループはそれらにたいして意見を述べる。具体的には、以下のような内容を予定しているが、グループの数によっては、変更が生じることもある。

第 1 回　フランス語圏とはなにか
第 2 回　フランス語圏論①ヨーロッパ（総論）
第 3 回　フランス語圏論①ヨーロッパ（ベルギー）
第 4 回　フランス語圏論①ヨーロッパ（ルクセンブルク）
第 5 回　第 1 回グループ発表
第 6 回　フランス語圏論②北アフリカ（総論）
第 7 回　フランス語圏論②北アフリカ（アルジェリア）
第 8 回　フランス語圏論②北アフリカ（チュニジア）
第 9 回　フランス語圏論②北アフリカ（モロッコ）
第 10 回　第 2 回グループ発表
第 11 回　フランス語圏論③アメリカ／アジア・オセアニア（総論）
第 12 回　フランス語圏論③アメリカ／アジア・オセアニア（カナダ）
第 13 回　フランス語圏論③アメリカ／アジア・オセアニア（ベトナム）
第 14 回　フランス語圏論③アメリカ／アジア・オセアニア（ニューカレドニア）
第 15 回　第 3 回グループ発表、まとめ

●評価方法

グループ発表（50%）、授業活動への参加度（50%）※授業活動＝グループ・ワークによる資料の解読、まとめ、報告。

●受講生へのコメント

当該のテーマについての情報収集、およびプレゼンテーションの準備をグループ毎に授業中および授業時間外におこなう必要がある。したがって、学期中はグループのメンバーと協力し合える体制を整えておくこと。なお、グループでの授業活動に支障がでるので、遅刻・欠席には充分注意すること。

●参考文献・教材

三浦信孝・西山教行編『現代フランス社会を知るための 62 章』明石書店
小川秀樹編著『ベルギーを知るための 52 章』明石書店
私市正年編著『アルジェリアを知るための 62 章』明石書店
鷹木恵子編著『チュニジアを知るための 60 章』明石書店
小畑精和・竹中豊編著『ケベックを知るための 54 章』明石書店
飯野正子・竹中豊編著『現代カナダを知るための 57 章』明石書店
今井昭夫・岩井美佐紀編著『現代ベトナムを知るための 60 章』明石書店
その他は授業中に指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCDFX3204	開講期	単位数	標準履修年次
232	**インターカルチュラルスタディーズ** Intercultural Studies			前火 2	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名 フランス語学特講			担当教員名 福島 祥行 教授		

●科目の主題

主としてフランス語圏の、いわゆる「多文化」的状況を考察すべく、「文化」とはなにかについて思弁することのなかから、現実の「多文化」的状況のもたらす諸問題について論じつつ、「複文化主義」によってそれをのりこえる可能性について考える。

●到達目標

「文化」とはなにかについて思弁することのなかから、現実の「多文化」的状況のもたらす諸問題を批判的に検討し、「複文化主義」について考えるための視点／支点を身につける。

●授業内容・授業計画

そもそも「文化」とはなにかという根源的な問いよりスタートして、「文化」「民族」などを「本質主義的」にとらえることから生ずる「問題」と、その「解決策」について、受講生諸君とともに考えてゆく。

第 1 回　「文化」とはなにか
第 2 回　「文化」と「多文化」
第 3 回　「民族」と「共同体」
第 4 回　「同化」と「統合」と「嵌込」
第 5 回　「異文化間コミュニケーション」という問題
第 6 回　「文明の衝突」？

第 7 回　フランス語圏のケース
第 8 回　ドイツ語圏のケース
第 9 回　アメリカ、アフリカ、アジア、オセアニアのケース
第 10 回　「共和主義」と「多文化主義」
第 11 回　「アイデンティティ」と「認知」
第 12 回　「本質主義」と「構築主義」
第 13 回　「多文化主義」と「複文化主義」
第 14 回　ふたたび「文化」とはなにか
第 15 回　ふりかえりとまとめ

●評価方法

グループによる討論およびポートフォリオによるふりかえりと自己評価。どんな些細なことでも、気づきをしるせるよう、授業内容についてあれこれ思弁することがもとめられる。

くわえて、とうぜんのことながら、出席は重視される。

●受講生へのコメント

ひとまず、「あたりまえ」のことを疑ってみる習慣を身につけ、「文化」について、じぶんがいかに「思い込み」に捕らわれていたかを感じてほしい。

●参考文献・教材

ジャン＝ピエール・シュヴェヌマン『〈共和国〉はグローバル化を超えられるか』（平凡社）
アンドレア・センプリーニ『多文化主義とは何か』（白水社）
サミュエル・ハンチントン『文明の衝突』（集英社）
マルク・クレポン『文明の衝突という欺瞞』（新評論）
小坂井敏晶『民族という虚構』（東京大学出版会）
鍋倉健悦『異文化間コミュニケーション入門』（丸善）
三浦信孝『現代フランスを読む』（大修館書店）
西阪仰『相互行為分析という視点：文化と心の社会学的記述』（金子書房）
その他、授業中に指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCLNG2101	開講期	単位数	標準履修年次
233	**言語学基礎論** Introduction to Linguistics			前月 2	2 単位	1 ～ 4 年
	旧科目名 言語学概論			担当教員名 山崎 雅人 教授		

●科目の主題

本講義は、初めてこの学問に接する人が、多岐に渡る言語の知識を取得し、さらにその面白さを感じられるように、言語学を構成するさまざまな分野を理解することを主題とする。

●到達目標

受講生が言語学の基本概念に関する知識を習得することを到達目標とする。

●授業内容・授業計画

テキストは、受講生の知識を確認しながら理解が深まるように工夫された自作教材を用いる。すなわち、受講者は与えられた課題への自分の考えを罫線紙に書き、のちに解説を聞くことで自分の考えの当否を確認しながら知識を獲得してゆく。

第 1 回　第 1 回　言語学への招待　その 1
第 2 回　第 2 回　言語学への招待　その 2
第 3 回　第 3 回　構造について　その 1
第 4 回　第 4 回　構造について　その 2
第 5 回　第 5 回　研究方法について　その 1
第 6 回　第 6 回　研究方法について　その 2
第 7 回　第 7 回　比較言語学　その 1
第 8 回　第 8 回　比較言語学　その 2
第 9 回　第 9 回　類型論　その 1
第 10 回　第 10 回　類型論　その 2
第 11 回　第 11 回　記号論

第 12 回　第 12 回　社会言語学
第 13 回　第 13 回　心理言語学
第 14 回　第 14 章　応用言語学
第 15 回　第 15 回　補遺

●評価方法

受講生は、授業中の課題や指名に対して各自で考えて応答するとともに、宿題としての課題への解答を提出する。さらに、その日の講義内容に関して、「興味が持てたこと」と「理解ができなかったこと」（講義に関する要望も可）をまとめることで復習とする。こうした毎回の作業をきちんとこなすことと、規定以上の出席回数を満たすことに基づいて、成績評価を行う。

●受講生へのコメント

我々が日々関わり囲まれている「言葉の世界」には、少し見方を変えることで得られる「小さな発見」がたくさん潜んでいる。言葉は、自分自身の一部であるとともに、他者とつながる架け橋でもある。上に述べた「発見」は、自分とは何者か、自分が接する社会とはどのような存在か、という問題に何かしらの手がかりを与えてくれると思う。進んで言葉の世界へ赴き、探求の旅を楽しんでもらいたい。

●参考文献・教材

参考文献は、適宜教室で指示するが、以前にこの講義で用いた以下の本は有用と考える。・町田健著『町田健のたのしい言語学』2004 年、ソフトバンクパブリッシング

- 佐久間淳一、加藤重広、町田健著『言語学入門：これから始める人のための入門書』2004 年、研究社
- 星浩司著『言語学への扉』2006 年、慶應義塾大学出版会
- 佐久間淳一著『はじめてみよう言語学』2007 年、研究社
- 大津由紀雄編著『はじめて学ぶ言語学－ことばの世界をさぐる 17 章』2009 年、ミネルヴァ書房
- 大津由紀雄編、池上嘉彦著『ことばワークショップ―言語を再発見する』2011 年、開拓社
- 東京大学言語情報科学専攻『言語科学の世界へ―ことばの不思議を体験する 45 題』2011 年、東京大学出版会
- 佐久間淳一著『フシギなくらい見えてくる！本当にわかる言語学』2013 年、日本実業出版社

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCLNG3201	開講期	単位数	標準履修年次
234	言語応用論 Linguistics Applied			前水 3	2 単位	2・3 年
	旧科目名 言語応用論 I			担当教員名 井狩 幸男 教授		

●科目の主題

本講義では、心理言語学、神経言語学、応用言語学、発達心理学の諸分野から得られる知見を基に、子どもの認知と言語の発達について考察することを目的とする。

●到達目標

主な目標は、次の 2 つである。
(1) 子どもの認知と言語の発達を多面的に捉える。
(2) 得られた知見を子どもの言語獲得データ分析に応用する。

●授業内容・授業計画

テキストを輪読する。担当者を決め、担当箇所の要旨を纏め、発表してもらう。

第 1 回　授業の説明
第 2 回　認知と言語の発達に関する展望
第 3 回　早期のカテゴリー表象と概念（1）
第 4 回　早期のカテゴリー表象と概念（2）
第 5 回　初期の語彙（1）
第 6 回　初期の語彙（2）
第 7 回　脳と認知の発達（1）
第 8 回　脳と認知の発達（2）
第 9 回　子どもの文法理解の発達（1）
第 10 回　子どもの文法理解の発達（2）
第 11 回　小児期における実行機能：発達と障害
第 12 回　心の理解

第 13 回　数学的・科学的思考
第 14 回　学習と認知発達における社会認知的見解
第 15 回　授業のまとめ

●評価方法
出席・発表・レポートを総合的に評価する。
●受講生へのコメント
言語発達過程で観察される現象を多面的に深く考察する態度が身につくように心がけて欲しい。
●参考文献・教材
ジョン・オーツ他（2010）『子どもの認知と言語はどう発達するか』松柏社

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCLNG3202	開講期	単位数	標準履修年次
235	言語比較論 Comparative Analysis of Language			後火 3	2 単位	2・3 年
	旧科目名			担当教員名 山崎 雅人 教授		

●科目の主題
世界のさまざまな言語を比べる手段として、比較言語学、対照言語学、言語類型論の三つの方法を取り上げ、それぞれの特徴を考えることで、人間言語の多様性と共通性について考察する。
●到達目標
受講生が、さまざまな言語資料を統一的な研究方法で扱った論考を通して、「多様さの中の共通原理」を具体的に理解できることを目標とする。
●授業内容・授業計画
テキストはそれぞれの研究方法を主軸とした論考を指定する。受講生はそれをあらかじめ読み、内容要約を予習として提出してから講義を聞くなかで、トピックに基づく課題に取り組み、必要に応じた解説を通して理解を進めるよう努める。
第 1 回　講義の進め方、「言語を比べるとはどういうことかー三つの主な方法論ー」
第 2 回　比較言語学 1
第 3 回　比較言語学 2
第 4 回　比較言語学 3
第 5 回　対照言語学 1
第 6 回　対照言語学 2
第 7 回　対照言語学 3
第 8 回　言語類型論 1
第 9 回　言語類型論 2
第 10 回　言語類型論 3
第 11 回　言語類型論 4
第 12 回　言語類型論 5
第 13 回　言語類型論 6
第 14 回　補遺 1
第 15 回　補遺 2 または総括
●評価方法
出席回数が基準を下回らないこと、テキストの予習として内容の要約をしてくること、講義中の指名に応答すること並びに課題をこなすこと、さらに宿題として与えられた課題を行ってくること、時間的余裕があれば最後に行う、各自の課題によるプレゼンテーションなどの結果により、成績を決定する。
●受講生へのコメント
広く言語を見ることは、広く人間を観ることに通じると思う。大学生のうちに世界観を広げることは、今後何かに役立つと信じる。外国語は英語しかないのではなく、人の価値観もひとつではない。他者と異なることを許容する寛容性は、自他共に精神の豊かさをもたらしてくれるのではないだろうか。
●参考文献・教材
教材 1：吉田和彦著『言葉を復元する ―比較言語学の世界―』1996 年、三省堂
教材 2：石綿敏雄・高田誠共著『対照言語学』1995 年、おうふう
教材 3：松本克己著『世界言語への視座 歴史言語学と言語類型論』2006 年、三省堂
教材 4：リンゼイ J. ウェイリー著、大堀壽夫・古賀裕章・山泉実訳『言語類型論入門：言語の普遍性と多様性』

2006 年、岩波書店参考文献
池上嘉彦著『「する」と「なる」の言語学：言語と文化のタイポロジーへの試論』1981 年、大修館書店
久野暲，牧野成一，スーザン・G・ストラウス編『言語学の諸相：赤塚紀子教授記念論文集』2007 年、くろしお出版
三原健一，高見健一編著；窪薗晴夫［ほか］著『日英対照：英語学の基礎』2013 年、くろしお出版
西原哲雄編『言語学入門』、中島信夫編『語用論』共に 2012 年、朝倉書店

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCLNG3203	開講期	単位数	標準履修年次
236	言語教育論 Language Education			前水 2	2 単位	2・3 年
	旧科目名			担当教員名 田中 一彦 教授		

●科目の主題
言語教育に言語学が貢献することが出来るのか、もし出来るとすれば、どのような貢献の仕方が望ましいのかを検討する。
●到達目標
言語学が言語教育にどのような貢献が出来るかを判断するための理論的材料を獲得する。
●授業内容・授業計画
今期は、言語教育者のために書かれた語用論の概説書を精読し、語用論とは何かを知る。
第 1 回　イントロダクション
第 2 回　Defining the territory of Pragmatics 1
第 3 回　Defining the territory of Pragmatics 2
第 4 回　Defining the territory of Pragmatics 3
第 5 回　Defining the territory of Pragmatics 4
第 6 回　Defining the territory of Pragmatics 5
第 7 回　Principles of Pragmatic Meaning 1
第 8 回　Principles of Pragmatic Meaning 2
第 9 回　Principles of Pragmatic Meaning 3
第 10 回　Principles of Pragmatic Meaning 4
第 11 回　Sociolinguistic Theories of Pragmatic Meaning 1
第 12 回　Sociolinguistic Theories of Pragmatic Meaning 2
第 13 回　Sociolinguistic Theories of Pragmatic Meaning 3
第 14 回　Sociolinguistic Theories of Pragmatic Meaning 4
第 15 回　まとめ
●評価方法
平常点およびレポートの成績を総合的に評価する。
4 回以上欠席した場合評価の対象外とする（20 分以上の遅刻は欠席と見なす）。
●受講生へのコメント
授業中の積極的な発言を重視する。
●参考文献・教材
授業中に資料等を配付する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCLNG3204	開講期	単位数	標準履修年次
237	言語情報論 Linguistics and Information			前木 4	2 単位	2・3 年
	旧科目名 言語情報論 I			担当教員名 関 茂樹 教授		

●科目の主題
英語を中心として、文（発話）によって伝えられる情報の構成について考察することを主題とする。
●到達目標
文によって伝達される情報の構成の原則、新旧情報の配列の原則、焦点の置き方などについて、理解を深めることを目標とする。

●授業内容・授業計画

文の情報構造を分析した文献（主として英語）の中で基礎的な（Huddleston（1988）*English Grammar : An Outline* を取り上げ、精読する。その際、対応する日本語の例を比較検討する。

第 1 回　第 12 章を講読する。
第 2 回　第 12 章を講読する。
第 3 回　第 12 章を講読する。
第 4 回　第 12 章を講読する。
第 5 回　第 12 章を講読する。
第 6 回　第 13 章を講読する。
第 7 回　第 13 章を講読する。
第 8 回　第 13 章を講読する。
第 9 回　第 13 章を講読する。
第 10 回　第 13 章を講読する。
第 11 回　第 13 章を講読する。
第 12 回　第 13 章を講読する。
第 13 回　第 13 章を講読する。
第 14 回　第 13 章を講読する。
第 15 回　まとめ

●評価方法

平常点および定期試験を総合的に評価する。

●受講生へのコメント

十分に予習し、疑問点を質問すること。

●参考文献・教材

プリントを配布する。参考図書は、必要に応じて教室で紹介する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCLNG3205	開講期	単位数	標準履修年次
238	言語応用論演習 Seminar in Linguistics Applied			後水 3	2 単位	2・3 年
	旧科目名 言語応用論演習 I			担当教員名 井狩 幸男 教授		

●科目の主題

Web に無償で提供されている言語獲得研究用データベース（CHILDES）を使い、電子データの収集方法及び分析方法に習熟することを目的とする。

●到達目標

主な目標は、次の 2 つである。
（1）CLAN を使った CHILDES のデータ分析に慣れる。
（2）CHILDES のデータ分析を基に母語獲得について考察する。

●授業内容・授業計画

分析ツール（CLAN）の基本的な操作に慣れた後、CLAN を使って実際にデータを分析し、考察したことを発表してもらう。

第 1 回　授業の説明
第 2 回　CHILDES, CLAN の説明
第 3 回　第 1 回課題発表
第 4 回　第 1 回課題発表
第 5 回　第 1 回課題発表
第 6 回　第 1 回課題発表
第 7 回　第 2 回課題発表
第 8 回　第 2 回課題発表
第 9 回　第 2 回課題発表
第 10 回　第 2 回課題発表
第 11 回　第 3 回課題発表
第 12 回　第 3 回課題発表
第 13 回　第 3 回課題発表

第 14 回　第 3 回課題発表
第 15 回　授業のまとめ

●評価方法
出席・発表・レポートを総合的に評価する。
●受講生へのコメント
言語研究におけるデータベースの利用法がわかるようになって欲しい。
●参考文献・教材
宮田 Susanne 編（2004）『今日から使える発話データベース CHILDES 入門』ひつじ書房

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCLNG3206	開講期	単位数	標準履修年次
239	**言語比較論演習** Seminar in Comparative Analysis of Language			前月 3	2 単位	2・3 年
	旧科目名			担当教員名 林 嵐娟 非常勤講師		

●科目の主題
日本語・英語・中国語のコピュラ文と〈ウナギ文〉を対象に、比較考察を行う。
●到達目標
①普通のコピュラ文と〈ウナギ文〉との違い、および、日英中三言語における〈ウナギ文〉の共通点と相違点を把握すること。
②関連文献を精読することにより、文献の読解力を身につけること。
③言語比較研究の方法を学ぶこと。
●授業内容・授業計画
安井（2009）・Nunberg（1995）などの文献を講読する。同じ言語現象を分析する様々な方法を紹介し、それぞれの方法の利点と問題点について考察していく。
第 1 回　関連する定義についての解説
第 2 回　普通のコピュラ文と〈ウナギ文〉との共通点と相違点
第 3 回　日英中三言語の〈ウナギ文〉の共通点と相違点
第 4 回　安井（2009）を読む。(1)
第 5 回　安井（2009）を読む。(2)
第 6 回　Nunberg（1995）を読む。(1)
第 7 回　Nunberg（1995）を読む。(2)
第 8 回　Nunberg（1995）を読む。(3)
第 9 回　Nunberg（1995）を読む。(4)
第 10 回　Nunberg（1995）を読む。(5)
第 11 回　西山（2003）を読む。(1)
第 12 回　西山（2003）を読む。(2)
第 13 回　西山（2003）を読む。(3)
第 14 回　西山（2003）を読む。(4)
第 15 回　まとめ
●評価方法
平常点と期末試験を総合的に評価する。
●受講生へのコメント
日英中三言語の用例を扱うが、中国語の知識を前提とはしない。
文献を事前に読んで、授業に出席すること。
●参考文献・教材
資料を配布する。
Nunberg, G. 1995. “Transfers of meaning.” *Journal of Senmantics* 12, 109-32.
西山佑司．2003．「ウナギ文と措定文」．『日本語名詞句の意味論と語用論―指示的名詞句と非指示的名詞句』321-50．東京：ひつじ書房.
安井稔．2009．「『うなぎ文』を英語で考える」．『Web 英語青年』発刊準備特別号、32 - 59.

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LCLNG3207	開講期	単位数	標準履修年次
240	**言語教育論演習** Seminar in Language Education			後木 2	2 単位	2・3 年
	旧科目名 言語情報論演習Ⅱ			担当教員名 田中 一彦 教授		

●科目の主題

言語教育に言語学が貢献することが出来るのか、もし出来るとすれば、どのような貢献の仕方が望ましいのかを検討する。

●到達目標

言語習得にかかわる様々な言語理論が言語教育にどのような貢献が出来るかを検討する材料を獲得する。

●授業内容・授業計画

外国語の学習、教授、評価のためEUが策定したヨーロッパ共通参照枠（CEFR）とは何かを知り、それが日本の英語教育にとって有効かどうかを検討する。

第 1 回　イントロダクション
第 2 回　CEFR の政治的背景 1
第 3 回　CEFR の教育的背景 2
第 4 回　CEFR の言語学的背景 1
第 5 回　CEFR の言語学的背景 2
第 6 回　CEFR の言語学的背景 3
第 7 回　CEFR の言語学的背景 4
第 8 回　CEFR の言語学的背景 5
第 9 回　CEFR の言語学的背景 6
第 10 回　CEFR の言語学的背景 7
第 11 回　CEFR と言語教育 1
第 12 回　CEFR と言語教育 2
第 13 回　CEFR と言語教育 3
第 14 回　CEFR と言語教育 4
第 15 回　まとめ

●評価方法

平常点およびプレゼン、レポートの成績を総合的に評価する。
4 回以上欠席した場合は評価の対象外とする（20 分以上の遅刻は欠席と見なす）。

●受講生へのコメント

授業中の積極的な発言を重視する。

●参考文献・教材

授業中に資料を配付する。

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LCLNG3208	開講期	単位数	標準履修年次
241	**言語情報論演習** Seminar in Linguistics and Information			後木 4	2 単位	2・3 年
	旧科目名 言語情報特論			担当教員名 関 茂樹 教授		

●科目の主題

英語の語順、情報構造、音声的特徴および文の形式的特徴について、機能論的な観点から考察することを課題とする。

●到達目標

トピックの一貫性および個々の文内における情報構造の成り立ちと音声的な諸特徴との関係について、十分な理解を深めることを目標とする。

●授業内容・授業計画

機能論的な観点から文の構造とテクストの構成を分析した文献（Huddleston and Pullum（2005）を精読する。

第 1 回　関連する概念の定義と解説
第 2 回　第 14 章を読む。

第 3 回　第 14 章を読む。
第 4 回　第 14 章を読む。
第 5 回　第 14 章を読む。
第 6 回　第 15 章を読む。
第 7 回　第 15 章を読む。
第 8 回　第 15 章を読む。
第 9 回　第 15 章を読む。
第 10 回　第 15 章を読む。
第 11 回　第 15 章を読む。
第 12 回　第 15 章を読む。
第 13 回　第 15 章を読む。
第 14 回　第 15 章を読む。
第 15 回　第 15 章を読む。

●評価方法
試験と平常点により評価する。
●受講生へのコメント
参考文献も積極的に読んで、授業に出席すること。
●参考文献・教材
プリントを使用する。参考文献は授業で指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCLNG3301	開講期	単位数	標準履修年次
242	言語応用特論 Special Studies in Linguistics Applied			後月 3	2 単位	3 年
	旧科目名 言語情報特論演習Ⅱ			担当教員名 井狩 幸男 教授		

●科目の主題
前期に続いて、卒業論文を作成するために必要な様々な事柄について学ぶことを目標とする。過去の雑誌記事・新書などを取り上げて資料を作成し、発表を行う機会とする。その過程で各自が取り組みたい研究課題を見つけ、論文作成のための準備を始めることを目指す。受講生は言語応用コースの所属学生のみ。
●到達目標
卒業論文を作成するために必要な資料の分析の仕方を学び、作成に備える。
●授業内容・授業計画
各自が興味をもった話題を取り上げて発表してもらい、クラスで討論する。
第 1 回　授業の進め方に関する説明、及び発表準備に関する全般的な解説
第 2 回　第 1 回発表
第 3 回　第 1 回発表
第 4 回　第 1 回発表
第 5 回　第 1 回発表
第 6 回　第 2 回発表
第 7 回　第 2 回発表
第 8 回　第 2 回発表
第 9 回　第 2 回発表
第 10 回　第 3 回発表
第 11 回　第 3 回発表
第 12 回　第 3 回発表
第 13 回　第 3 回発表
第 14 回　発表の助言指導
第 15 回　総括
●評価方法
発表内容、他の発表者へのコメント、及び授業に対する取り組みを総合的に評価する。
●受講生へのコメント
本科目での発表を通して、卒論のテーマを見つけるよう努めて欲しい。

●参考文献・教材
必要に応じて、授業中に資料を配布する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCLNG3302	開講期	単位数	標準履修年次
243	言語比較特論 Special Studies in Comparative Analysis of Language			前火 2	2 単位	3 年
	旧科目名 言語情報特論演習 I			担当教員名 関 茂樹教授		

●科目の主題
資料収集、先行研究の考察、分析などの卒業論文を執筆するための基礎となる事柄について学ぶことを目標とする。
●到達目標
自ら課題を設定して、資料収集を行い、先行研究の知見を踏まえながら検討を加え、論文の作成に至るプロセスを十分に理解することを目標とする。
●授業内容・授業計画
卒業生の論文の内容を報告してもらい、良い点、改善点について検討する。後半では、他の様々な論文について講義する。
第 1 回　序論
第 2 回　過去の卒論について報告および検討する。
第 3 回　過去の卒論について報告および検討する。
第 4 回　過去の卒論について報告および検討する。
第 5 回　過去の卒論について報告および検討する。
第 6 回　過去の卒論について報告および検討する。
第 7 回　過去の卒論について報告および検討する。
第 8 回　過去の卒論について報告および検討する。
第 9 回　過去の卒論について報告および検討する。
第 10 回　論文の紹介および解説。
第 11 回　論文の紹介および解説。
第 12 回　論文の紹介および解説。
第 13 回　論文の紹介および解説。
第 14 回　論文の紹介および解説。
第 15 回　論文の紹介および解説。
●評価方法
報告の内容および議論への参加を総合的に評価する。
●受講生へのコメント
報告内容を受けて積極的に議論すること。
●参考文献・教材
教室で指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCLNG3210	開講期	単位数	標準履修年次
244	言語応用特講 Special Studies in Linguistics Applied			前集中	2 単位	2・3 年
	旧科目名 言語応用論 II			担当教員名 中村 艶子 非常勤講師		

●科目の主題
言語応用での実践としての通訳技能を用いて言語コミュニケーション能力を高める。
●到達目標
通訳（英語 / 日本語）の基本概念と手法の習得を目的とする。通訳の種類と方法、実践上の問題、通訳労働市場の特徴の講義による内容理解後、逐次通訳実践を行い、言語応用実践としての通訳の基礎を体得する。
●授業内容・授業計画
通訳手法について担当者による講義を受けた後、実践的な通訳を行う。学生がペア（ないし 3 人のグループ）になり、一人がスピーカー、もう一人が通訳者となって発表を行う。発表では、スピーカー（発表者）の英語スピー

チを通訳者が日本語へ訳したあと、クラスからの質疑応答の通訳（日英）を行う。スピーカーはパワーポイントを用いてスピーチを行う。

第 1 回　通訳手法について（講義） 英文による自己紹介（A4 用紙 1 枚を提出）
第 2 回　逐次通訳について、メモの取り方（講義・実践）
第 3 回　自己紹介の通訳実践
第 4 回　自己紹介の通訳実践（続き）
第 5 回　通訳の実際（講義）
第 6 回　英語プレゼンテーションと通訳演習
第 7 回　英語プレゼンテーションと通訳演習
第 8 回　英語プレゼンテーションと通訳演習
第 9 回　英語プレゼンテーションと通訳演習
第 10 回　英語プレゼンテーションと通訳演習
第 11 回　英語プレゼンテーションと通訳演習
第 12 回　英語プレゼンテーションと通訳演習
第 13 回　英語プレゼンテーションと通訳演習
第 14 回　Review
第 15 回　まとめ

●評価方法

英語による自己紹介スピーチ資料作成 10% / 自己紹介スピーチの通訳 10%
英語パワーポイント資料作成 10%
英語プレゼンテーション 20%
英語プレゼンテーションのスピーチ通訳 30%
通訳講義のまとめレポート 20%

●受講生へのコメント

受講生は各自、①英語での自己紹介スピーチ（2 分以内）（A4 ダブルスペースでタイプしたもの 1 枚）および②パワーポイントを用いたスピーチ（5 分程度）を準備すること。内容は時事問題、サークル活動、故郷の紹介、将来の職業などクラスの皆に興味をもって聞いてもらえると思うテーマであれば、何でも自由。発表時には、パワーポイントにできるだけ、写真、地図などを用いてわかりやすくすること。これら 2 種類の英語スピーチを講義初日に提出すること。（この内容は通訳実践で用いる。講師への提出用、通訳者への提出用、自分の発表用として同一物を 3 部用意しておくこと。）

③また、通訳についての文献を 1 冊読んで、通訳技術について理解したことをレポート 1 枚にまとめて講義 2 日目に提出すること。

●参考文献・教材

プリント資料を配付。また、上記スピーチを教材資料とする。

各自が興味をもった通訳に関する参考文献（講義 3 日目に提出するレポート用）1 点　例）ローデリック ジョーンズ（Roderick Jones）著、ウィンター 良子・松縄 順子訳、『会議通訳』松柏社（2006/04）

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCART3201	開講期	単位数	標準履修年次
245	**文化理論** Culture Theory			後水 4	2 単位	2・3 年
	旧科目名			担当教員名 海老根 剛 准教授		

●科目の主題

表現文化コースで学ぶ学生を主な対象に、文化の考察に不可欠な基本的視点と理論を概説します。表現文化コースにおける文化の研究は、文化的事象を歴史・社会・メディアの三つの視点から複合的に分析する点に方法論上の特徴がありますが、具体的に扱われる対象はきわめて多様です。したがって、ともすると個別的な主題の多様性のなかにコースの全体像が見失われがちになります。この講義では、「文化」についての基本的な考え方をいくつかの基本的な研究文献の紹介を通して確認し、文化を考える基本的視点を獲得することを目指します。

●到達目標

文化の概念とその歴史的変遷を意識化するとともに、現代文化を考察するために不可欠な基本的な理論的視点を学習する。

●授業内容・授業計画

各回の授業では、その都度のテーマを論じるにあたって有効な視点を提供してくれる基本文献をひとつ取り上げ、その内容を紹介しながら考察を進めます。受講者が関心のあるテーマをより深く学べるように、基本文献の配布も行

う。適宜、質問の時間も設ける予定です。

第 1 回　ガイダンス
第 2 回　「文化」の概念史
第 3 回　文化の人類学的条件
第 4 回　言語・技術・芸術の起源
第 5 回　近代産業社会・国民国家・文化
第 6 回　文化産業論
第 7 回　カルチュラルスタディーズ
第 8 回　グローバル化と多文化主義の諸問題
第 9 回　デジタル・テクノロジーと文化
第 10 回　都市・インターネット・アルゴリズム
第 11 回　マッシュアップ文化の経済
第 12 回　物語について
第 13 回　アートのモダニズム
第 14 回　アート・コモンズ・コミュニティ
第 15 回　まとめ

●評価方法

複数回のレポートで評価する。

●受講生へのコメント

この講義は表現文化コースに進学した2回生に文化理論の導入を行うことを第一の目的としています。したがって、履修登録者多数の場合には、表現文化コースの学生の履修を優先したうえで抽選を行います。

●参考文献・教材

適宜、配布する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCART3202	開講期	単位数	標準履修年次
246	**表現文化論** Lecture in Art and Representation			後火 4	2 単位	2・3 年
	旧科目名 表象文化論 I			担当教員名 小野原 教子 非常勤講師		

●科目の主題

現代における衣服／ファッションの社会的意味と文化的表象

●到達目標

人間は衣服を着る動物である。日常何気なく身に纏っているものが自ずと意味を放っている。服は言葉であり、こころは服を着るからだである。衣服／ファッションが現代の代表的表象文化であることを、講義を通して受講者は知ることとなるだろう。

●授業内容・授業計画

ファッションとは何かの基礎的理解（基本理論）、複雑化多様化する現代のアイデンティティと衣服の関係、雑誌・映像などの情報媒体とファッションの表象の問題、身体表現としてのコスチュームの分析、現代日本のファッションのグローバル的展開。

第 1 回　ガイダンス
第 2 回　衣服とアイデンティティ（1）
第 3 回　衣服とアイデンティティ（2）
第 4 回　衣服とアイデンティティ（3）
第 5 回　ファッションと記号論
第 6 回　ファッションとメディア（1）
第 7 回　ファッションとメディア（2）
第 8 回　ファッションとメディア（3）
第 9 回　グループプレゼンテーション
第 10 回　コスチュームとプロレス（1）
第 11 回　コスチュームとプロレス（2）
第 12 回　コスチュームとプロレス（3）
第 13 回　クールジャパンとグローバリズム
第 14 回　グループプレゼンテーション
第 15 回　まとめ

●評価方法
授業への貢献度およびタームペーパー（40%，60%）
●受講生へのコメント
「聞く」だけでなく「話す」「読む」「書く」の四つの面から授業に積極的に関わることを期待される。
また、受講生の興味・関心などから講義内容や進行は調整されたり、グループワークを課すこともある。
●参考文献・教材
小野原教子『闘う衣服』（水声社 2011）（授業で多用するので準備することが望ましい）
その他映像などを多く例証するが、参考書籍／論文なども授業で適宜指示する予定である。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCART3203	開講期	単位数	標準履修年次
247	表象文化論 Lecture in Culture and Representation			前火 4	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名 表象文化論Ⅱ			担当教員名 野末 紀之 教授		

●科目の主題
絵画や写真、広告のなかではしばしば人物の「男性性」や「女性性」が表現され、強調され、また利用されている。それらは見る者の意識と無意識にどのようにはたらきかけてくるのか。ジェンダーの観点から分析するための視点と理論を学ぶ。
●到達目標
上記の視点と理論を学ぶことにより、絵画や写真、広告の意味や戦略を読み解く方法を身につけることが目標である。
●授業内容・授業計画
テキストを読み進めるとともに、2 回のレポート提出を求める。
第 1 回　イントロダクション
第 2 回　テキスト読解（1）
第 3 回　テキスト読解（2）
第 4 回　テキスト読解（2）
第 5 回　テキスト読解（3）
第 6 回　テキスト読解（3）
第 7 回　テキスト読解（4）
第 8 回　テキスト読解（5）
第 9 回　第 1 回レポート作成のためのアドバイス
第 10 回　テキスト読解（6）
第 11 回　テキスト読解（7）
第 12 回　テキスト読解（8）
第 13 回　テキスト読解（9）
第 14 回　テキスト読解（10）
第 15 回　第 2 回レポート作成のためのアドバイス
●評価方法
出席、レポート、試験を総合的に判断する。
●受講生へのコメント
特になし。
●参考文献・教材
ジュディス・ウィリアムスン『広告の記号論』2 巻（柘植書房新社）、上野千鶴子『セクシィ・ギャルの大研究』（岩波書店）、グリセルダ・ポロック『視線と差異』（新水社）ほか。プリントを配布する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCART3204	開講期	単位数	標準履修年次
248	**比較表現論** Lecture in Comparative Representation			前木 3	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名 比較表現論Ⅰ・Ⅱ			担当教員名 三上 雅子 教授		

●科目の主題

2014 年に 100 周年を迎えた宝塚歌劇団を取り上げる。中国の越劇など、女性が男性を演じる演劇は必ずしも珍しくはない。しかし 100 年以上にわたって多くの観客を対象とするポピュラーなエンターテイメントとして存続し続けた演劇集団・宝塚歌劇団は、やはり特異な存在であるといえよう。今日では海外の研究者の注目をも集めている「宝塚」を講じることは、単に演劇について考察するにとどまらず、ジェンダー、異性装、異文化受容、近代化と地域文化のあり方、ファン文化、物語消費論など多様なトピックについて考えるきっかけを与えてくれるだろう。

●到達目標

一つの文化現象を構成する多様な要素――歴史、社会、伝統、経済など――に着目しながら、対象を考察・分析する姿勢を養う。

●授業内容・授業計画

宝塚歌劇の歴史をまず講じたのち、日本の近代化と宝塚、企業文化・地域文化としての視点、ファン文化など多様な観点から宝塚について考察していく。上演作品の映像を積極的に活用して、現代に息づくパーフォーマンス集団として宝塚を分析するというアプローチを心がける。

第 1 回　イントロダクション、アイスブレーキング。
第 2 回　上演 DVD の鑑賞、
第 3 回　宝塚歌劇という様式、そのコード。
第 4 回　第 2 次世界大戦前の宝塚歌劇の歴史。
第 5 回　第 2 次世界大戦後の宝塚歌劇の歴史。
第 6 回　小林一三について、和洋折衷の思想、日本の近代化との関係、レビューの誕生。
第 7 回　阪神間という地域、企業文化としての宝塚。
第 8 回　オリジナル作品。
第 9 回　海外ミュージカルと宝塚。
第 10 回　退団公演。
第 11 回　物語消費と宝塚。
第 12 回　ファン文化。
第 13 回　21 世紀の宝塚歌劇。
第 14 回　他の演劇集団・エンターテイメント集団と宝塚との比較、ビジネスモデルとしての宝塚。
第 15 回　総括、レポートの書き方について。

●評価方法

おもに学期末のレポートによる。

●受講生へのコメント

演劇は劇場に自らの身をおいて体感することがベストである。しかし常にそれがかなうとは限らない。幸い宝塚歌劇は最近のほとんどの作品が DVD 化され市販されている。劇場での観劇が不可能な時は、DVD などを通じて事前に宝塚作品を見ておいてほしい。

●参考文献・教材

授業中に適宜指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCART3205	開講期	単位数	標準履修年次
249	**文化理論基礎演習 a** Basic Seminar in Culture Theory a			後水 2	2 単位	2 年
	旧科目名 表現文化基礎演習Ⅰ a			担当教員名 野末 紀之 教授		

●科目の主題

表現文化コースの学生が、写真、広告、ファッション、マンガなどの視覚媒体を分析するさいに必要な基本的な観点や理論を身につける。

●到達目標

上記の観点や理論を演習形式により身につけて、レポート作成のさいに応用できるようにすることが目標である。

●授業内容・授業計画

演習形式によりテキストを精読するとともに、適宜、作品分析の発表を行なってもらう。

第 1 回　イントロダクション
第 2 回　テキスト読解（1）
第 3 回　テキスト読解（2）
第 4 回　テキスト読解（3）
第 5 回　テキスト読解（4）
第 6 回　テキスト読解（5）
第 7 回　テキスト読解（6）
第 8 回　テキスト読解（7）
第 9 回　第 1 回レポート提出のためのアドバイス
第 10 回　テキスト読解（8）
第 11 回　テキスト読解（9）
第 12 回　テキスト読解（10）
第 13 回　テキスト読解（11）
第 14 回　第 2 回レポート提出のためのアドバイス
第 15 回　まとめ

●評価方法

出席、発表、試験、レポートを総合的に判断する。

●受講生へのコメント

特になし。

●参考文献・教材

井上俊（編）『全訂新版　現代文化を学ぶ人のために』（世界思想社）;John Storey（ed.）*Cultural Theory and Popular Culture: An Introduction*（Addison Wesley）; Liz Wells, *Photography: A Critical Introduction*（Routledge）ほか。テキストはプリントを配布。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCART3205	開講期	単位数	標準履修年次
250	**文化理論基礎演習 b** Basic Seminar in Culture Theory b			後木 3	2 単位	2 年
	旧科目名 表現文化基礎演習 I b			担当教員名 高島 葉子 准教授		

●科目の主題

表現文化コースでは、文学や美術などの芸術作品だけでなく、テレビ、映画、雑誌、広告など日常的に接する身近な「ポピュラー文化」をも研究対象とする。こうした広い分野の対象を研究するための理論、方法の基礎を学ぶ。

●到達目標

文化理論の基礎的知識を身に付け、理論的文献の内容を的確に要約報告するスキルを習得するとともに、短いレポートをまとめることができるようにする。合わせて、英語の専門書を読みこなす英語力の基礎を身につけることを目指す。

●授業内容・授業計画

授業の前半で文化理論に関する入門的英語文献を講読する。後半では日本語文献につい担当者がレジュメを作成したうえで内容を報告し、質疑応答により理解を深める。学期末には各自で興味のある文献について紹介、報告を行い、レポートにまとめる。また、英語文献に関しては期末テストを行う。

第 1 回　オリエンテーション
第 2 回　英語文献講読
第 3 回　英語文献講読
第 4 回　英語文献講読
第 5 回　英語文献講読
第 6 回　英語文献講読、日本語文献の内容報告
第 7 回　英語文献講読、日本語文献の内容報告
第 8 回　英語文献講読、日本語文献の内容報告
第 9 回　英語文献講読、日本語文献の内容報告
第 10 回　英語文献講読、日本語文献の内容報告
第 11 回　英語文献講読、日本語文献の内容報告

第 12 回　英語文献講読、日本語文献の内容報告
第 13 回　英語文献講読、日本語文献の内容報告
第 14 回　英語文献講読、日本語文献の内容報告
第 15 回　期末テスト

●評価方法
出席状況 20%、口頭発表 20%、期末テスト 30%、期末レポート 30%で評価する。
●受講生へのコメント
英語テキストは入門書であるが、十分な予習を必要とする。また、授業でのデイスカッション等への積極的な参加を求める。なお、受講生は原則的に表現文化コース所属の学生に限る。
●参考文献・教材
日本語テキスト:井上俊編『全訂新板　現代文化を学ぶ人のために』(世界思想社)。英語文献はプリント配布する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCART3206	開講期	単位数	標準履修年次
251	表現・表象文化論基礎演習 a Basic Seminar in Culture and Representation a			前月 5	2 単位	2 年
	旧科目名 表現文化基礎演習Ⅱ a			担当教員名 三上 雅子 教授		

●科目の主題
(1) 作品分析の基礎を学ぶ。特定の方法論や理論にもとづく分析の一歩手前にとどまり、ひとつの具体的な対象としての作品と向き合い、それを構成している表現の特徴や構造を柔軟に把握し、考察するレッスンを行う。作品は私たちの前に、ひとつの物質的なまとまりとして、たとえば書かれた言葉（小説、エッセイ)、描かれた線と記号（マンガ)、俳優の身体と声（演劇)、静止した光と影（写真)、明滅する映像の連なり（映画）として与えられています。この授業では、そのような物質的まとまりとしての作品がどのように形作られており、どのような動き、出来事がそこに生起しているのかを明らかにするとともに、それを言葉によって記述するレッスンを行います。
(2) 文献調査、画像編集にもとづく簡潔なプレゼンテーションを作成し、発表するレッスンを行う。口頭発表における補助資料の位置づけを正しく理解し、プレゼンテーション用ソフトウェアの欠点と利点を把握した上で、効果的な発表資料を作成する技術を学習する。
●到達目標
(1) 自分が感じたことを手がかりに論理的に思考することを学ぶ。(2) 口頭発表の方法と技術的補助手段の使用法を学ぶ。
●授業内容・授業計画
今回の授業では、マンガ、小説、絵画、写真、映画、演劇、現代美術を扱う。それぞれのジャンルについて、指定された作品の分析を行う。また学期末には作品分析の口頭発表を受講者全員にしてもらう。
第 1 回　イントロダクション
第 2 回　マンガ分析
第 3 回　小説分析
第 4 回　絵画分析
第 5 回　映画作品上映
第 6 回　映画作品分析
第 7 回　演劇作品上映
第 8 回　演劇作品分析
第 9 回　写真分析
第 10 回　現代美術作品上映
第 11 回　現代美術作品分析
第 12 回　プレゼンテーション入門
第 13 回　口頭発表（1）
第 14 回　口頭発表（2）
第 15 回　まとめ
●評価方法
6 回のレポートと口頭発表で評価する。
●受講生へのコメント
この授業は表現文化コースに新たに進学した 2 回生向けの授業です。他コースの学生は受講できません。

●参考文献・教材
作品資料は授業内で配布します。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCART3206	開講期	単位数	標準履修年次
252	表現・表象文化論基礎演習 b Basic Seminar in Culture and Representation b			前水 2	2 単位	2 年
	旧科目名 表現文化基礎演習 II b			担当教員名 江村 公 特任講師		

●科目の主題
（1）作品分析の基礎を学ぶ。特定の方法論や理論にもとづく分析の一歩手前にとどまり、ひとつの具体的な対象としての作品と向き合い、それを構成している表現の特徴や構造を柔軟に把握し、考察するレッスンを行う。作品は私たちの前に、ひとつの物質的なまとまりとして、たとえば書かれた言葉（小説、エッセイ）、描かれた線と記号（マンガ）、俳優の身体と声（演劇）、静止した光と影（写真）、明滅する映像の連なり（映画）として与えられています。この授業では、そのような物質的まとまりとしての作品がどのように形作られており、どのような動き、出来事がそこに生起しているのかを明らかにするとともに、それを言葉によって記述するレッスンを行います。
（2）文献調査、画像編集にもとづく簡潔なプレゼンテーションを作成し、発表するレッスンを行う。口頭発表における補助資料の位置づけを正しく理解し、プレゼンテーション用ソフトウェアの欠点と利点を把握した上で、効果的な発表資料を作成する技術を学習する。
●到達目標
（1）自分が感じたことを手がかりに論理的に思考することを学ぶ。（2）口頭発表の方法と技術的補助手段の使用法を学ぶ。
●授業内容・授業計画
今回の授業では、マンガ、小説、絵画、写真、映画、演劇、現代美術を扱う。それぞれのジャンルについて、指定された作品の分析を行う。また学期末には作品分析の口頭発表を受講者全員にしてもらう。
第 1 回　イントロダクション
第 2 回　マンガ分析
第 3 回　小説分析
第 4 回　絵画分析
第 5 回　映画作品上映
第 6 回　映画作品分析
第 7 回　演劇作品上映
第 8 回　演劇作品分析
第 9 回　写真分析
第 10 回　現代美術作品上映
第 11 回　現代美術作品分析
第 12 回　プレゼンテーション入門
第 13 回　口頭発表（1）
第 14 回　口頭発表（2）
第 15 回　まとめ
●評価方法
6 回のレポートと口頭発表で評価する。
●受講生へのコメント
この授業は表現文化コースに新たに進学した 2 回生向けの授業です。他コースの学生は受講できません。
●参考文献・教材
作品資料は授業内で配布する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCART3207	開講期	単位数	標準履修年次
253	**表現・表象文化論演習Ⅰ** Seminar in Culture and Representation Ⅰ			前木 2	2 単位	2・3 年
	旧科目名 表現文化演習Ⅰ			担当教員名 高島 葉子 准教授		

●科目の主題

伝承文学とその再話に関して「シンデレラ」を題材にして考察する。、

●到達目標

伝承文学の基礎的知識とその研究方法を学び、現代社会において伝承文学およびその再話の持つ意義、問題点について自ら考察することができるようにする。

●授業内容・授業計画

「シンデレラ」に関する入門的研究書を担当者を決めてレジュメを作成し内容を報告してもらった後、全員で討論し理解を深める。授業の後半期には、「シンデレラ」の様々な類話、再話を題材とし、各自の問題設定に基づいて分析、発表を行う。学期末には各自の発表に基づいて小論文をまとめる。

第 1 回　オリエンテーション
第 2 回　文献の内容報告
第 3 回　文献の内容報告
第 4 回　文献の内容報告
第 5 回　文献の内容報告
第 6 回　文献の内容報告
第 7 回　文献の内容報告
第 8 回　文献の内容報告
第 9 回　文献の内容報告
第 10 回　発受講生の分析発表と討
第 11 回　受講生の分析発表と討論
第 12 回　受講生の分析発表と討論
第 13 回　受講生の分析発表と討論
第 14 回　受講生の分析発表と討論
第 15 回　総括

●評価方法

出席状況 20%、口頭発表 40%、学期末 40%で評価する。

●受講生へのコメント

受講生は、毎回の授業出席して報告・発表を行うだけでなく、他の受講生の報告・発表について積極的に意見を述べることを求められる。原則的に受講は表現文化コースの学生に限る。

●参考文献・教材

アラン・ダンダス編『シンデレラ――9 世紀の中国から現代のディズニーまで』池上嘉彦、山崎和恕、三宮郁子訳、紀伊国屋書店、1991 年。

上記以外に、授業中にプリントを配布する。また、必要に応じて参考資料、文献を紹介する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCART3208	開講期	単位数	標準履修年次
254	**表現・表象文化論演習Ⅱ** Seminar in Culture and Representation Ⅱ			後水 5	2 単位	2・3 年
	旧科目名 表現文化演習Ⅱ			担当教員名 中川 眞 教授／小田中 章浩 教授／海老根 剛 准教授		

●科目の主題

アーツマネジメントは芸術と社会をつなぎ、アーティストと市民の出会いと協働を組織する仕事である。アーツマネージメントの実践を通して、企画力、交渉力、実効力、忍耐力、想像力などを学ぶことを主眼とする。

●到達目標

展覧会やコンサートその他のアートイベントの企画立案を行い、その実践の過程で、いまアーツマネージメントに求められている課題とそれにふさわしい手法を学ぶ。社会におけるアートの可能性を追究してもらいたい。

●授業内容・授業計画

本科目ではグループワークが中心となる。地域の現場で実際のマネジメントを行うことから、しばしば授業時間外に行われる必要があり、授業ではプロジェクトの進捗状況の報告と問題点の討議が中心に行われる。この授業は後期に開講されるが、前期の共通教育科目「アーツマネジメント」の受講を本科目の受講条件とする。第 1 回のガイダンスの折りに、グループ分けや授業の進め方（時間外も含めて）の説明を行う。また、最終的な企画の実施は授業期間の終了後（2 月後半や 3 月など）になることも考えられるので、受講者はその点を了解の上で受講すること。

以下に 15 回の授業計画を掲げるが、暫定的なものであり、実際には複数の作業が同時進行することになるので、その点に留意するように。

第 1 回　ガイダンス
第 2 回　討論「地域のためのアーツマネジメントとは何か？」
第 3 回　討論「昨年度の企画の振り返りと今年度の可能性」
第 4 回　企画立案（1）
第 5 回　企画立案（2）
第 6 回　予算と実施体制の決定
第 7 回　実施時期と会場の決定
第 8 回　ゲストとの交渉
第 9 回　中間総括
第 10 回　広報（1）ウェブサイト、フライヤー作成
第 11 回　広報（2）メディアへの周知
第 12 回　実施要領の詳細と役割分担の決定
第 13 回　作品の搬入と管理
第 14 回　企画実施
第 15 回　まとめ

●評価方法

展覧会などのプロジェクトを企画立案・実施するワーキンググループへの参加度、過程の進め方および最終的なプロジェクトの成果にもとづいて成績評価を行う。

●受講生へのコメント

この授業は「座学」の授業とは正反対のコンセプトにもとづいている。教えてもらうのを受動的に待つのではなく、みずから動くことを通して学習する能動的な態度が、受講者には要求されます。型破りな授業なのでラクではないが、社会実践や社会変革等に関心のある学生には、極めて有意義な授業となり、やる気のある学生の期待は裏切らないであろう。

●参考文献・教材

中川眞『アートの力』和泉書院、2013
中川真他（編）『これからのアートマネジメント ― ソーシャルシェアへの道』フィルムアート社、2011

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LCART3301	開講期	単位数	標準履修年次
255	**表現・表象文化論演習Ⅲ** Seminar in Culture and Representation Ⅲ			前水 4	2 単位	3・4 年
	旧科目名 表現文化演習Ⅲ			担当教員名 海老根 剛 准教授		

●科目の主題

ひとつの映画作品は膨大な数の映像の連鎖（ショット）から構成されているだけでなく、字幕、ナレーション、音楽、環境音、視覚効果などの多様な要素を含んでいます。そうした諸要素が相互に特定の仕方で関係づけられることで、映画作品という複雑にして精妙な構築物が成立するのです。通常、作品分析と呼ばれる作業は、それがどんなに詳細なものであっても、そうした膨大な情報量を含んだ映画作品のごく限定された側面に触れるにすぎません。

この授業では、映画作品を場面ごとに上映し、適宜文献なども参照しながら、共同で作品分析を展開します。多数の視点からひとつの作品を見ることを通して、映画表現の複雑さと意味作用の豊かさを具体的に把握することを目指します。

●到達目標

コンセンサスを志向しないオープンな議論を通して映画作品の表現上の特徴や技法や主題や意味作用を考察し、映画表現の多面性と意味作用の複雑さを理解する。また映画を議論し考察する方法についても学習する。

●授業内容・授業計画

授業では 2 ～ 3 本の映画作品を取り上げる予定です。まず映画をはじめから最後まで上映し、その後、場面ごとの上映と議論を行います。

第 1 回　ガイダンス
第 2 回　作品上映（1）
第 3 回　場面上映とディスカッション
第 4 回　場面上映とディスカッション
第 5 回　場面上映とディスカッション
第 6 回　場面上映とディスカッション
第 7 回　作品上映（2）
第 8 回　場面上映とディスカッション
第 9 回　場面上映とディスカッション
第 10 回　場面上映とディスカッション
第 11 回　場面上映とディスカッション
第 12 回　作品上映（3）
第 13 回　場面上映とディスカッション
第 14 回　場面上映とディスカッション
第 15 回　場面上映とディスカッション

●評価方法

評価は議論への参加によって行う。議論への参加であって、授業への参加（＝出席）ではないので注意すること。この授業では、必ずしもひとつの結論に到達することを目的とせずに議論し、多様な意見を出し合い、できるだけ多くの視点や解釈を持ち込むことで作品分析を豊かにすることが目指されます。したがって、たとえ出席していても何も発言しない受講者は欠席しているのと同じです。毎回の議論に実質的に参加する受講者のみが単位を取得できる仕組みを用意します。

●受講生へのコメント

（1）この授業は、受講者が映画表現について最低限の知識を学習していることを前提しています。したがって、2015 年度開講の「表象文化論」（担当：海老根剛）を受講し、単位取得していることを受講の条件とします。昨年度の「表象文化論」を履修していないけれども受講したいというひとは、映画表現について学んでいることを何らかの仕方で証明すること。
（2）リラックスした雰囲気でオープンな議論を行う環境を確保するため、受講人数は最大 15 名とします。希望者多数の場合は初回の授業で選抜するので必ず出席すること。
（3）「聴衆」や「観客」としてではなく、実質的に議論に参加する意欲のあるひとだけ履修してください。
（4）作品上映の日は、作品の長さによって授業時間を 30 分ほどオーバーする可能性があります。了解のうえ、履修してください。

●参考文献・教材

適宜、配布する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCART3302	開講期	単位数	標準履修年次
256	**表現・表象文化論演習Ⅳ** Seminar in Culture and Representation Ⅳ			後月 2	2 単位	3・4 年
	旧科目名 表現文化演習Ⅳ			担当教員名 三上 雅子 教授		

●科目の主題

演劇は人類の歩みとともに常にあった芸術ジャンル・表象の形式である。現在でもほとんどすべての文化圏において、演劇は芸術として娯楽として創造され、受容されている。しかし今日の日本において演劇はややもすれば、映画や小説、マンガなどに比べて、「難しい、どう分析すればいいか方法がわからない」ものとして受け取られがちである。本授業では、演劇の歴史・演劇を成立させている諸要素などについての基礎的知識を得るとともに、その知識を基として演劇を分析・考察する方法論を学ぶ。

●到達目標

映画や小説、マンガなどと同様に、一つの「テクスト」として演劇を分析・考察する手続きを習得する。

●授業内容・授業計画

授業の前半においては、演劇の歴史、多様な文化圏における演劇のあり方、演劇を構成している諸要素などについて講じる。その場合は演劇作品の DVD・BR などの映像も積極的に活用する。後半はグループに分かれて特定の演劇作品を取り上げて、作品分析を行ってもらう。

第 1 回　イントロダクション、アイスブレーキング。
第 2 回　演劇の歴史（1）。

第 3 回　演劇の歴史（2）。
第 4 回　演劇の歴史（3）。
第 5 回　演劇の歴史（4）、演劇と劇場。
第 6 回　演劇の諸要素―戯曲。
第 7 回　演劇の諸要素―演出。
第 8 回　演劇の諸要素―演技。
第 9 回　発表（1）。
第 10 回　発表（2）。
第 11 回　発表（3）。
第 12 回　発表（4）。
第 13 回　発表（5）。
第 14 回　発表（6）。
第 15 回　総括、レポートの書き方について。

●評価方法
授業中の発表を40%、学期末のレポートを60%として評価する。また発表時の討論参加などの平常点も加味する。
●受講生へのコメント
演劇は劇場に足を運び自らの身をもって体感するべきものである。しかしそれが現実には難しい場合もある。現在では演劇作品の DVD もひろく一般に市販されている。また TV での演劇放送、インターネットでの映像公開も少なくない。さらに一般の映画館での舞台作品上映（シネ歌舞伎、劇団新感線の「げきシネ」、英国演劇の上映など）も盛んになってきている。劇場に行くのがベストだが、映像などによってもよいので多くの演劇作品に事前に触れておいてほしい。
なお、卒業論文において演劇（ミュージカル、宝塚歌劇をも含む）を取り上げる予定の学生は必ずこの授業を履修すること。 ただし、卒業論文で演劇を取り上げない学生であってもこの授業を履修することはもちろん可能である。なお教室の関係で受講生の人数を制限する場合がある。その場合は表現文化コース学生を優先する。
●参考文献・教材
授業中に適宜指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCART3303	開講期	単位数	標準履修年次
257	**比較表現論演習** Seminar in Comparative Representation			後木 2	2 単位	3・4 年
	旧科目名 表現文化演習Ⅴ			担当教員名 石川 優 非常勤講師		

●科目の主題
この授業では「既存の作品を下敷きとしてつくられたマンガ作品」の分析をおこなう。マンガには、ほかの作品を流用、引用、模倣することで成立する作品がしばしば見られ、「パロディ」、「リメイク」、「二次創作」などと呼ばれている。このような作品群は広く流通する一方で、もとの作品との距離（依存性と独自性）、受容の射程（もとの作品を知っていること / 知らないことが作品受容に与える影響）、著作権をはじめとする社会制度との折り合いなど、表現文化に関するさまざまな問題を提起している。授業では、発表とディスカッションをとおして、複数の作品と関わりながら生成されるマンガ作品について受講生とともに考える。
●到達目標
（1）マンガ作品をほかの作品との関係から分析することで、表現文化について多角的に考察できるようになる。
（2）発表と討論をとおして、表現文化をめぐる自らの問題意識を言語化できるようになる。
●授業内容・授業計画
まず、マンガ作品を分析するための基本理論について講義形式で概説し、この授業で前提とされる議論の枠組みを共有する（第 1 ～ 4 回）。次に、受講生に配布テキストに基づくグループ発表をしてもらい、全員でディスカッションをおこなう（第 5 ～ 8、10 ～ 14 回）。配布テキストは「パロディ」、「リメイク」、「二次創作」などのマンガ作品を中心とするが、受講生は、先行作品、派生作品、それらを論じた文章など、複数の文献を横断的に読み込んだ上で自らの論点を抽出し、発表を構成することとなる。なお、以下の授業計画は、受講生の人数に合わせて変更される場合がある。
第 1 回　オリエンテーション
第 2 回　講義（1）マンガ論 I
第 3 回　講義（2）マンガ論 II

第 4 回　講義（3）マンガ論 III
第 5 回　発表および討論（1）
第 6 回　発表および討論（2）
第 7 回　発表および討論（3）
第 8 回　発表および討論（4）
第 9 回　中間総括
第 10 回　発表および討論（5）
第 11 回　発表および討論（6）
第 12 回　発表および討論（7）
第 13 回　発表および討論（8）
第 14 回　発表および討論（9）
第 15 回　全体総括と補遺

●評価方法
毎回提出してもらうコミュニケーションカード（10%）、授業での発表（40%）、学期末レポート（50%）によって評価する。
●受講生へのコメント
授業時間外の学習が必須である。発表者だけでなく、受講生全員に、テキストに予め目をとおして授業に臨むことが求められる。テキストは、一回の授業につき複数の文献にわたる場合がある。また、受講生には、発表や討論に積極的に参加する態度が期待される。初回に授業スケジュールの調整と文献リストの配布をおこなうので、出席すること。
●参考文献・教材
教材はプリントを配布する。参考文献は、授業中に適宜指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCART3304	開講期	単位数	標準履修年次
258	**文化理論特別演習 a** Advanced Seminar in Culture Theory: class A			前火 2	2 単位	3・4 年
	旧科目名 表現文化演習VI a			担当教員名 小田中 章浩 教授		

●科目の主題
卒業論文作成に必要とされる能力の開発
●到達目標
本講は表現文化学コースに所属する三回生（四回生）を対象とし、表現文化学コースにおいて卒業論文を書くための研究テーマ設定の方法、問題の論理的な構築ならびに分析の方法について指導する。したがって表現文化学コースに所属する三回生（四回生）は、この演習を必ず受講することが求められる。
●授業内容・授業計画
受講者がこれまでに大学で学んできた論理的な文章表現力を確認するために、まず文章の要約、小論文作成のためのアウトラインの作成、さらに 2500 字の小論文の作成へと段階的に課題を与える。その過程において表現文化学に関係した文献を読み、また文献の引用の方法やリサーチの方法について教える。最後に卒業論文のシミュレーションとして、4000 字程度の小論文を作成する。
第 1 回　文章を要約する（1）:「使用後を考えなかった兵器」を元に要約の具体的方法を解説
第 2 回　文章を要約する（2）:『民族という名の宗教』の要約法について考える
第 3 回　文章を要約する（3）:『動物化するポストモダン』の要約法について考える
第 4 回　文章を要約する（4）:『「七人の侍」と現代』の要約法について考える
第 5 回　問題を提起する（1）：与えられた課題について、問題を提起し、それを解くための方法について考える
第 6 回　アウトラインを作成する（1）：上記問題を小論文にするためのアウトラインを作成する
第 7 回　序論を作成する：上記アウトラインに基づいて論文の序論を作成する
第 8 回　本論の一部を書く：上記のアウトラインを用いて論文の一部を実際に書いてみる
第 9 回　問題を提起する（2）：与えられた課題について、問題を提起し、それを解くための方法について考える
第 10 回　アウトラインを作成する（2）：上記問題を小論文にするためのアウトラインを作成する
第 11 回　小論文を作成する（2）：上記アウトラインに基づき、序論、本論、結論からなる 2500 字の小論文を作成する

第 12 回　問題を提起する（3）：与えられた課題について、問題を提起し、それを解くための方法について考える
第 13 回　アウトラインを作成する（3）：上記問題を小論文にするためのアウトラインを作成する
第 14 回　小論文を作成する（3）：上記アウトラインに基づき、4000 字ていどの小論文を作成する
第 15 回　小論文を作成する（3）：上記小論文の内容を修正する

●評価方法

受講生はほぼ毎回課題の提出が求められる。評価は、各自の毎回の課題への取り組み（70%）と、講義終了後に提出する小論文（30%）によって行う。

●受講生へのコメント

この a クラスは、表現文化学コース所属の三回生のうち、学生番号で数えて最初の半数が受講することを想定している。ただしやむを得ない事情により a クラスを受講できない者については、b クラスへの移動を認めるので、最初の授業の際に教員に相談すること。

●参考文献・教材

なだいなだ『民族という名の宗教』岩波新書（新赤版）204,1992 年
東浩紀『動物化するポストモダン』講談社現代新書 1575,2001 年
四方田犬彦『「七人の侍」と現代』岩波新書（新赤版）1255,2010 年
さらに黒沢明監督『七人の侍』をまだ見ていない人は、この副読本が用いられる時までに見ておくこと。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCART3304	開講期	単位数	標準履修年次
259	**文化理論特別演習 b** Advanced Seminar in Culture Theory: Class B			前火 3	2 単位	3・4 年
	旧科目名 表現文化演習VI b			担当教員名 小田中 章浩 教授		

●科目の主題

卒業論文作成に必要とされる能力の開発

●到達目標

本講は表現文化学コースに所属する三回生（四回生）を対象とし、表現文化学コースにおいて卒業論文を書くための研究テーマ設定の方法、問題の論理的な構築ならびに分析の方法について指導し、さらにそれらのプレゼンテーション能力を高めることを目的とする。したがって表現文化学コースに所属する三回生（四回生）は、この演習を必ず受講することが求められる。

●授業内容・授業計画

受講者がこれまでに大学で学んできた論理的な文章表現力を確認するために、まず文章の要約、小論文作成のためのアウトラインの作成、さらに 2500 字の小論文の作成へと段階的に課題を与える。その過程において表現文化学に関係した文献を読み、また文献の引用の方法やリサーチの方法について教える。最後に卒業論文のシミュレーションとして、4000 字程度の小論文を作成する。

第 1 回　文章を要約する（1）：「使用後を考えなかった兵器」を元に要約の具体的方法を解説
第 2 回　文章を要約する（2）：『民族という名の宗教』の要約法について考える
第 3 回　文章を要約する（3）：『動物化するポストモダン』の要約法について考える
第 4 回　文章を要約する（4）：『「七人の侍」と現代』の要約法について考える
第 5 回　問題を提起する（1）：与えられた課題について、問題を提起し、それを解くための方法について考える
第 6 回　アウトラインを作成する（1）：上記問題を小論文にするためのアウトラインを作成する
第 7 回　序論を作成する：上記アウトラインに基づいて論文の序論を作成する
第 8 回　本論の一部を書く：上記のアウトラインを用いて論文の一部を実際に書いてみる
第 9 回　問題を提起する（2）：与えられた課題について、問題を提起し、それを解くための方法について考える
第 10 回　アウトラインを作成する（2）：上記問題を小論文にするためのアウトラインを作成する
第 11 回　小論文を作成する（2）：上記アウトラインに基づき、序論、本論、結論からなる 2500 字の小論文を作成する
第 12 回　問題を提起する（3）：与えられた課題について、問題を提起し、それを解くための方法について考える
第 13 回　アウトラインを作成する（3）：上記問題を小論文にするためのアウトラインを作成する
第 14 回　小論文を作成する（3）：上記アウトラインに基づき、4000 字ていどの小論文を作成する

第 15 回　小論文を作成する（3）：上記小論文の内容を修正する

●評価方法
受講生はほぼ毎回課題の提出が求められる。評価は、各自の毎回の課題への取り組み（70%）と、講義終了後に提出する小論文（30%）によって行う。

●受講生へのコメント
このｂクラスは、表現文化学コース所属の三回生のうち、学生番号で数えて後半の半数が受講することを想定している。ただしやむを得ない事情によりｂクラスを受講できない者については、ａクラスへの移動を認めるので、最初の授業の際に教員に相談すること。

●参考文献・教材
なだいなだ『民族という名の宗教』岩波新書（新赤版）204,1992
東浩紀『動物化するポストモダン』講談社現代新書 1575,2001
四方田犬彦『「七人の侍」と現代』岩波新書（新赤版）1255,2010
さらに黒沢明監督『七人の侍』をまだ見ていない人は、この副読本が用いられる時までに見ておくこと。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCART3305	開講期	単位数	標準履修年次
260	表現文化論特論 Specific Lecture in Art and Representation			後水 3	2 単位	3・4 年
	旧科目名 表現文化特論 I			担当教員名 増田 聡 准教授		

●科目の主題
映画や絵画のように距離をもって鑑賞される「芸術」というより、衣服のごとく身にまとう「もの」へと接近しつつある 21 世紀初頭のポピュラー音楽環境を、複製技術、主体性の変容、産業構造と所有意識等の観点から検討する。

●到達目標
音楽文化研究への学術的アプローチに必要な「音楽の捉え方」を獲得することを目標とする。

●授業内容・授業計画
講義形式。授業計画は仮のものであり、履修者の背景や知見に応じて適宜変更する。また視聴覚資料を多用する。
第 1 回　イントロダクション
第 2 回　ウォークマンと聴衆の欲望
第 3 回　ブランドとしてのアーティスト、「キャラ」としてのアーティスト
第 4 回　音楽的主体の複層性と可変性
第 5 回　演奏リアリズム概念とその相対化の動向
第 6 回　Perfume と初音ミクの相違
第 7 回　ビデオクリップ史（1）
第 8 回　ビデオクリップ史（2）
第 9 回　ビデオクリップ史（3）
第 10 回　パクリと盗作
第 11 回　copyright と著作権
第 12 回　複製と再生産
第 13 回　ディスク文化の諸相
第 14 回　芸術と物
第 15 回　まとめ

●評価方法
期末レポートによる評価。

●受講生へのコメント
楽典の知識は必要としない。現代文化や文化理論について広く関心を持つ学生の履修を期待する。

●参考文献・教材
参考文献として下記をあげておく。音楽分野について卒論執筆を考えている受講生は一読しておくこと。
増田聡『聴衆をつくる―音楽批評の解体文法』（青土社）
増田聡・谷口文和『音楽未来形―デジタル時代の音楽文化のゆくえ』（洋泉社）
谷口文和・中川克志・福田裕大『音響メディア史』（ナカニシヤ出版）
円堂都司昭『ソーシャル化する音楽―「聴取」から「遊び」へ』（青土社）

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCART3306	開講期	単位数	標準履修年次
261	表象文化論特論 Specific Lecture in Culture and Representation			前集中	2 単位	3・4 年
	旧科目名			担当教員名 日比野 啓 非常勤講師		

●科目の主題

アメリカン・ミュージカル研究入門

●到達目標

アメリカン・ミュージカルを演劇学の対象として研究するのに必要な基礎概念を「身につける」＝ただ理解するのではなく、自分で使いこなせるようにする。

●授業内容・授業計画

統合ミュージカルの最高傑作といわれる『ウェスト・サイド物語』（1957 年初演）を題材として取り上げ、必要に応じてその映画版や他のフィルム・ミュージカルを見ながら、アメリカン・ミュージカルとはどんなもので、研究対象としてどんな分析ができるのか、を講義します。

第 1 回　イントロダクション（1）この講義で何を学ぶのか・大学の講義で何を学ぶのか
第 2 回　イントロダクション（2）『ウェスト・サイド物語』を参照項にする意義・「芝居見たまま」の意義
第 3 回　レヴューと統合ミュージカル
第 4 回　真正性と贋物性（1）物語
第 5 回　意味と非意味（1）ナンバー
第 6 回　意味と非意味（2）ダンスミュージカル
第 7 回　アメリカン・ミュージカル以外の世界各地の音楽劇
第 8 回　中間試験：「『ウェスト・サイド物語』見たまま」
第 9 回　作品外のインフラストラクチャー
第 10 回　アメリカン・ミュージカル以外のアメリカ演劇
第 11 回　セクシュアリティ：作品内、作り手、観客
第 12 回　エスニシティ：作品内、作り手、観客
第 13 回　階級：作品内、作り手、観客
第 14 回　真正性と贋物性（2）音楽
第 15 回　期末試験

●評価方法

授業への積極的な参加（32%）：授業時にレスポンスペーパーを書いてもらいます（計 8 回）。

中間試験（30%）：映画『ウェスト・サイド物語』の任意の 5 分程度のシークエンスを上映し、そのシークエンスであなたが何を見たか、何を聞いたかを書いてもらいます（「見たまま」を書く要領です。「見たまま」については講義で説明します）。

期末試験（38%）：用語説明＋記述式の、よくあるタイプの期末試験を実施します。もし受講者が十分少なければ口頭試問に代えるかもしれません（後者のほうが理解度の判定がより容易なので）。

●受講生へのコメント

アメリカン・ミュージカルは他の多くの商業演劇同様、折衷主義がその特徴です。つまり手法としては「何でもあり Anything Goes」のジャンルで、歌舞伎と同じく、他ジャンルの演劇形態を貪欲に吸収して発展・変化してきたので、アメリカン・ミュージカルとは何であり、研究対象としてどんな分析ができるか、と問われると、包括的な回答がしにくいのです。事実、1990 年代以降、合衆国ではミュージカル研究が本格化しますが、その実態は音楽学、演劇学、映画学、ゲイ・スタディーズなどの寄り合い所帯であり、ディシプリンとして共有されている理念は当初は余りありませんでした。とはいえ、もうそれから十五年近くたったので、アメリカン・ミュージカル研究者間での共通の基盤はできつつあります。本講義では、集中講義のかたちで、日本では殆ど紹介されてこなかった、アメリカン・ミュージカル研究の最新の知見を受講者の皆さんに披露します。

●参考文献・教材

受講希望者は、受講前に映画『ウェスト・サイド物語』を事前に（少なくとも）一度見ておいてください。日本語の研究文献は皆無に等しい（あるいはそう銘打っているものの内容は出鱈目に近い）ので、受講者の関心・意欲及び語学力に応じて、英語文献を紹介したり、あるいは講義で引用したりします。

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LCART2101	開講期	単位数	標準履修年次
262	**比較表現論特論** Specific Lecture in Comparative Representation			前月 4	2 単位	1 ～ 4 年
	旧科目名 ロシア文化論			担当教員名 江村 公 特任講師		

●科目の主題

現代アートのコンテクスト

この講義では第二次世界大戦前のヨーロッパ芸術との連続性と断絶を念頭に置きながら、戦後アメリカのアートを中心に、作品の提起するテーマに着目し、芸術作品の社会的・理論的背景を探る。

●到達目標

「現代アート」と呼ばれるものはかならずしも理解しやすいものばかりとはかぎらない。というのも、現代の作品は複数の歴史的・社会的・経済的文脈（コンテクスト）のもとに成立しているからである。作品のこうした文脈を理解し、鑑賞する際に感じる自分自身のさまざまな感想――「なぜ、そのように感じるのか」という根拠を明らかにできるようになることが目標。

●授業内容・授業計画

授業ではプロジェクターを使い毎回多くの作品を紹介するが、それらを理解する上での基本的用語や概念を確認しながら進めていく。また、芸術作品に関わる映像の鑑賞も行う予定である。なお、授業計画は現時点での見取り図であり、若干の変更の可能性がある。

第 1 回　はじめに――授業概要の説明など
第 2 回　戦前のヨーロッパ芸術（1）絵画
第 3 回　戦前のヨーロッパ芸術（2）立体作品
第 4 回　戦後アメリカ芸術の出発点／抽象表現主義
第 5 回　映画鑑賞《モナリザ・スマイル》前半
第 6 回　映画鑑賞《モナリザ・スマイル》後半
第 7 回　映画分析
第 8 回　消費文化と芸術／ネオ・ダダとポップ・アート
第 9 回　ミニマリズム
第 10 回　エコロジーとアート／環境芸術
第 11 回　コンセプチュアル・アート
第 12 回　芸術とジェンダーの問題
第 13 回　アイデンティティと芸術表現
第 14 回　映像鑑賞予定
第 15 回　まとめ／作品鑑賞の多様なかたち

●評価方法

出席点（20%）、小レポート（30%）、学期末レポート（50%）

●受講生へのコメント

授業で開催中の展覧会について紹介するので、学期中はできるだけ美術館・博物館に足を運ぶよう心がけて下さい。

●参考文献・教材

授業中に指示する。

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LCART3209	開講期	単位数	標準履修年次
263	**表現文化講読 I** Readings in Art and Representation I			後火 3	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 野末 紀之 教授		

●科目の主題

この授業では、表現文化コースで近現代の文学作品を卒論やレポートで取上げる予定の学生に、作品分析のためのさまざまな方法と理論を提供することを主題とする。

●到達目標

上記の方法と理論を多少なりとも身につけ、作品分析を行なうさいに応用してレポートを書くこと。

●授業内容・授業計画

テキストを演習形式で読みすすめながら、適宜、関心のある作品の分析を行なってもらう。

第 1 回　イントロダクション
第 2 回　テキスト①読解（1）
第 3 回　テキスト①読解（2）
第 4 回　テキスト①読解（3）
第 5 回　テキスト①読解（4）
第 6 回　テキスト②読解（1）
第 7 回　テキスト②読解（2）
第 8 回　第 1 回レポート提出のための注意事項の説明および質疑応答
第 9 回　テキスト②読解（3）
第 10 回　テキスト②読解（4）
第 11 回　テキスト②読解（5）
第 12 回　テキスト③読解（1）
第 13 回　テキスト③読解（2）
第 14 回　テキスト③読解（3）
第 15 回　第 2 回レポート提出のための注意事項の説明および質疑応答

●評価方法

出席、発表、レポートを総合的に判断する。

●受講生へのコメント

授業以外でもいろいろ読んでください。

●参考文献・教材

亀井秀雄（監修）、蓼沼正美（著）『超入門！ 現代文学理論講座』（ちくまプリマー新書）、廣野由美子『批評理論入門――『フランケンシュタイン』解剖講義』（中公新書）、阿部公彦『小説的思考のススメ』（東京大学出版会）。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCART3210	開講期	単位数	標準履修年次
264	表現文化講読Ⅱ Readings in Art and Representation Ⅱ			後月 4	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名 表現文化講読Ⅱ a			担当教員名 江村 公 特任講師		

●科目の主題

記念碑を考える――芸術作品と記憶の関わり

この授業では「文化的記憶」や「記念碑／モニュメント」を切り口に主に西洋の芸術作品について学ぶ。古代以来、忘却にあらがい、偉業や物語を記憶にとどめるという芸術の側面に着目することで、社会の変化の中で「記念碑」という芸術表現がどのような意義を持っていたのか、また、それが現代にどのように生かされているのかを考察する。

●到達目標

造形芸術や映画の分析をとおして、「記念碑」という芸術作品の形式だけでなく、その背後にある歴史的・文化的文脈を理解し、現代社会とのつながりを再考することを目指す。

●授業内容・授業計画

下記の参考文献を踏まえ、西洋文化における「記念碑」という形式とその意義について、プロジェクターを使用し作品紹介を行いながら、考察していく。授業の後半では、受講者それぞれが「記念碑」あるいは「記念碑的なもの」を見つけて、分析を行い報告をおこなってもらう。なお、授業計画は現時点での見取り図であり、若干の変更の可能性がある。

第 1 回　はじめに――授業の概要
第 2 回　記念碑／モニュメントとは？
第 3 回　都市における記憶とアート・フェスティバルの意義
第 4 回　映画に見る記念碑的なものの起源――映画《グラディエーター》鑑賞（1）
第 5 回　映画に見る記念碑的なものの起源――映画《グラディエーター》鑑賞（2）
第 6 回　映画の分析
第 7 回　戦争とその表象
第 8 回　記念碑とインスタレーションという形式
第 9 回　イメージと想起

第 10 回　記憶とアーカイヴ
第 11 回　消費社会のモニュメンタリティ
第 12 回　参加者による報告（1）
第 13 回　参加者による報告（2）
第 14 回　参加者による報告（3）
第 15 回　まとめ

●評価方法
出席および授業への参加（20%）、小レポート（30%）、授業での報告（50%）
●受講生へのコメント
「記念碑」を広い意味でとらえてみると、自分自身のまわりに、記念碑や記念館のたぐいはたくさんあるように思います。日常生活の中でも意識してみて下さい。
●参考文献・教材
アライダ・アスマン、安川晴基訳『想起の空間――文化的記憶の形態と変遷』（水声社、2007 年）
香川檀『想起のかたち――記憶アートの歴史意識』（水声社、2012 年）

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCART3211	開講期	単位数	標準履修年次
265	表現文化講読Ⅲ Readings in Art and Representation Ⅲ			前水 2	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名 表現文化講読Ⅱ b			担当教員名 酒井美貴 非常勤講師		

●科目の主題
本講は初級レベルのフランス語を学んだ学生を対象とし、表現文化に関連したフランス語の教材を用いることによって、受講者に中級レベルのフランス語の読解力を付けてもらうためのものです。
●到達目標
上記のように、中級レベルのフランス語の読解力を習得してもらうことを目標とします。
●授業内容・授業計画
池田理代子の漫画『ベルサイユのばら』の仏訳（Riyoko Ikeda ,*La Rose de Versailles*）を読みます。ただしテキスト読解だけでなく、必要に応じて当時の文化、歴史を扱った日本語の文献を読んだり、映画を参照することによって、この時代に関する理解を深めます。
第 1 回　仏語テキスト講読 1 回目
第 2 回　仏語テキスト講読 2 回目
第 3 回　仏語テキスト講読 3 回目
第 4 回　仏語テキスト講読 4 回目
第 5 回　仏語テキスト講読 5 回目
第 6 回　仏語テキスト講読 6 回目
第 7 回　仏語テキスト講読 7 回目
第 8 回　仏語テキスト講読 8 回目
第 9 回　仏語テキスト講読 9 回目
第 10 回　仏語テキスト講読 10 回目
第 11 回　仏語テキスト講読 11 回目
第 12 回　仏語テキスト講読 12 回目
第 13 回　仏語テキスト講読 13 回目
第 14 回　仏語テキスト講読 14 回目
第 15 回　期末試験
●評価方法
評価は平常点（50%）と期末試験（50%）によって行います。
●受講生へのコメント
受講生は初級レベルのフランス語力を身につけていることが必要です。
●参考文献・教材
授業において随時プリントを配布します。

文学部共通専門教育科目

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LXGEN3201	開講期	単位数	標準履修年次
266	美術史通論 Outline of Art History			後金２	２単位	２～４年
	旧科目名			担当教員名 藤岡 穣 非常勤講師		

●科目の主題

飛鳥時代から鎌倉時代にかけての美術について仏教美術を中心に論じる。

●到達目標

中世以前の日本美術について、その中核をなす仏教美術を中心に学ぶ。仏教美術に関する基礎知識を身につけるとともに、美術史の方法論や近接領域との関わりについても知見を広げる。

●授業内容・授業計画

はじめに仏教美術に関する基礎的な知識を講義した後、飛鳥時代から鎌倉時代の代表的な仏像、美術をとりあげ、様式、図像、技法、作者、歴史背景などの諸問題について検討していきたい。ただし、概説にとどまらず、一つ一つの作品多角的に、また掘り下げて考察することを通して、その作品が属する時代の美術の特性を浮き彫りにし、かつ魅力をさぐっていきたい。

第１回　ガイダンス
第２回　仏の三十二相と生身性
第３回　仏像の種類と着衣
第４回　仏像の作り方
第５回　仏画の技法と彩色法
第６回　仏像きらきらし―飛鳥時代の仏像―
第７回　精緻の技―奈良時代の仏像―
第８回　仏教の世界観―飛鳥・奈良の仏画―
第９回　木彫の成立、密教の世界―平安前期の仏像―
第10回　定朝の革命―平安後期の仏像―
第11回　美麗の世界―平安仏画―
第12回　運慶と快慶―鎌倉時代の仏像―
第13回　時空を超えて―絵巻の魅力―
第14回　現地見学授業
第15回　現地見学授業

●評価方法

期末試験の結果に、出席等、平常点を加えて評価する。現地見学授業のレポート提出者には成績に加点する。

●受講生へのコメント

ノートは文字のみならず、スケッチも併用してください。見学授業を計画しています。交通費、見学費用は各自の負担となります。

●参考文献・教材

教科書は特になし。参考文献は、水野敬三郎著『奈良・京都の古寺巡り―仏像の見かた―』（岩波ジュニア新書89）、水野敬三郎監修『日本仏像史』（美術出版社）ほか。その他、適宜授業中に指示します。

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LXGEN3202	開講期	単位数	標準履修年次
267	民俗学 Folklore			前金２	２単位	２～４年
	旧科目名			担当教員名 菊地 暁 非常勤講師		

●科目の主題

民俗とは、普通の人々が日々の生活のなかから創り上げ、承け伝えてきたコトバ、モノ、ワザといったものの総体である。いわば、私たち一人一人が「資料」である。そして民俗学とは、そのような民俗を、文献には書き残されることのなかった普通の人々の歴史を探る糸口として発見した学問である。本講義は、民俗学の目的と方法を、その創始者・柳田国男（1875－1962）の学問的生涯に即して概略した上で、人生儀礼、信仰・祭礼・芸能、口頭伝承などの個別分野を論じる予定である。

●到達目標
民俗学の基本的な考え方と資料操作を理解する。
●授業内容・授業計画
以下の要領で実施する予定である。
第 1 回　使用上の注意
第 2 回　柳田国男の生涯
第 3 回　民俗学の方法
第 4 回　そだつ－人生儀礼－
第 5 回　めとる－婚姻－
第 6 回　とむらう－葬送－
第 7 回　生活史の書き方 1
第 8 回　いのる―信仰―
第 9 回　まつる―年中行事―
第 10 回　おどる―民俗芸能―
第 11 回　生活史の書き方 2
第 12 回　つたえる―口頭伝承 1―
第 13 回　なづける―口頭伝承 2―
第 14 回　ものがたる―口頭伝承 3―
第 15 回　まとめ
●評価方法
授業中に課すミニ・レポートおよび期末レポートによって評価する。
●受講生へのコメント
知的好奇心の旺盛な受講生を歓迎する。というのも、民俗学とは、私たち一人一人の生活体験を起点として、どこまでも具体的な事実の積み重ねから、日々の現実を成り立たせている歴史＝社会のありかたを考える学問であり、それゆえ、取り扱う対象には際限がないからだ。
●参考文献・教材
教科書は特に指定しない。以下はいずれも参考文献。
菊地暁 2001『柳田国男と民俗学の近代－奥能登のアエノコトの二十世紀－』吉川弘文館
菊地暁［編］2005『身体論のすすめ』丸善
高取正男 1975『日本的思考の原型－民俗学の視角－』講談社現代新書

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LXGEN3203	開講期	単位数	標準履修年次
268	**文化人類学概論 I** Introduction to Cultural Anthropology I			前月 4	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 多和田 裕司 教授		

●科目の主題
本講義は、文化人類学の中心的概念である「文化」についての理解を深めることを目的とする。人間の行動は知らず知らずのうちに文化によって拘束されている。その一方で、自らの行動をとおして文化を創り上げ、それを変化させてきたのも他ならぬ人間である。講義では、このような人間行動と文化のダイナミックな関係をあきらかにし、文化を動態的に把握する方法について考えていく。
●到達目標
本講義は、受講生が、(1) 文化概念、(2)「異」文化理解をめぐる諸問題、(3) 動態としての文化等の諸点について、文化人類学における代表的議論を把握するとともに、その作業を通して文化について考察するための自らの立脚点を作り上げることを到達目標とする。
●授業内容・授業計画
授業は、毎回の課題として設定される基本文献の事前学習を前提に、当該文献についての解説および授業参加者による討論を通しての内容理解という形で進められる。なお個別の授業計画およびそこで扱われるテーマは以下の通りである。
第 1 回　オリエンテーション：講義のポイント、授業の進め方、課題文献の紹介、評価方法についての説明
第 2 回　人類学における文化概念（解説）：人類学は文化をどうとらえてきたか
第 3 回　人類学における文化概念（1）
第 4 回　人類学における文化概念（2）

第 5 回　人類学における文化概念（3）
第 6 回　「異」文化理解をめぐる諸問題（解説）：多文化主義と「文明の衝突」論、文化相対主義の可能性と限界、オリエンタリズム
第 7 回　「異」文化理解をめぐる諸問題（1）
第 8 回　「異」文化理解をめぐる諸問題（2）
第 9 回　「異」文化理解をめぐる諸問題（3）
第 10 回　動態としての文化（解説）：越境する文化、伝統の創造、世俗化と宗教復興
第 11 回　動態としての文化（1）
第 12 回　動態としての文化（2）
第 13 回　動態としての文化（3）
第 14 回　総合討論
第 15 回　授業の総括

●評価方法

平常点をもとに総合的に評価する。平常点は、課題文献に関する議論のさいの発言回数を基礎として算出する。授業に積極的に関わらない者（出席していても議論に参加しない者など）については評価しない。

●受講生へのコメント

授業出席にさいしての最低限の準備として、毎回課題文献を読んだ上で、内容についての要点整理、疑問点の洗い出し等を行っておくことを求める。なお各回の課題文献や授業の進め方についてはオリエンテーション時に説明するので、受講希望者は必ず出席すること。

●参考文献・教材

オリエンテーション時に指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LXGEN3204	開講期	単位数	標準履修年次
269	**文化人類学概論Ⅱ** Introduction to Cultural Anthropology Ⅱ			後月 4	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 多和田 裕司 教授		

●科目の主題

本講義は、文化人類学の立場から、文化の越境、拡散、共通化などの状況を、より具体的なテーマに即して検討する。とくに（1）文化のグローバル化とナショナリズム、（2）現代消費社会における文化、（3）現代社会における文化の力など、従来の本質主義的な文化観ではとらえることの出来ない文化現象について考察することで、現代社会に特有な文化のあり方についての理解を深めていく。

●到達目標

本講義は、受講生が、現代世界における文化の重要性および文化をめぐる状況の複雑さを理解するとともに、文化人類学における比較的新しい研究テーマについての知見を深めることを目標とする。

●授業内容・授業計画

授業は、毎回の課題として設定される基本文献の事前学習を前提に、当該文献についての解説および授業参加者による討論を通しての内容理解という形で進められる。なお個別の授業計画およびそこで扱われる題材は以下の通りである。

第 1 回　オリエンテーション：講義のポイント、授業の進め方、課題文献の紹介、評価方法についての説明
第 2 回　グローバル化とナショナリズム（解説）：文化のグローバル化、越境と混淆、文化ナショナリズム
第 3 回　グローバル化とナショナリズム（1）
第 4 回　グローバル化とナショナリズム（2）
第 5 回　グローバル化とナショナリズム（3）
第 6 回　現代消費社会における文化（解説）：文化と消費社会、マクドナルド化、ポストモダン消費論
第 7 回　現代消費社会における文化（1）
第 8 回　現代消費社会における文化（2）
第 9 回　現代消費社会における文化（3）
第 10 回　現代社会における文化の力（解説）：ソフトパワー論、文化と地域振興、宗教の力／暴力
第 11 回　現代社会における文化の力（1）
第 12 回　現代社会における文化の力（2）
第 13 回　現代社会における文化の力（3）
第 14 回　総合討論
第 15 回　授業の総括

●評価方法
平常点をもとに総合的に評価する。平常点は、課題文献に関する議論のさいの発言回数を基礎として算出する。授業に積極的に関わらない者（出席していても議論に参加しない者など）については評価しない。
●受講生へのコメント
授業出席にさいしての最低限の準備として、毎回課題文献を読んだ上で、内容についての要点整理、疑問点の洗い出し等を行っておくことを求める。なお各回の課題文献や授業の進め方についてはオリエンテーション時に説明するので、受講希望者は必ず出席すること。
●参考文献・教材
オリエンテーション時に指示する。

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LXGEN3205	開講期	単位数	標準履修年次
270	観光文化論 Lecture in Culture and Tourism			前木 3	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 天野 景太 准教授		

●科目の主題
現代日本・大阪における「ニュー・ツーリズム」の観光文化論を主たるテーマとします。観光文化とは、観光者や観光事業者といった主体が紡ぎ出す観光経験や観光形態の諸相、あるいは、観光を通じた文化の交流等により生成、展開していく地域文化の諸相のことで、場所や時代によってさまざまな展開をみせています。特に近年においては、「見物」や「遊楽」といった昔ながらの観光スタイルだけではなく、各地で体験型観光や地域独自の魅力の発掘、持続可能な観光の推進などに象徴されるような新しい観光文化（ニュー・ツーリズム）のあり方が模索されています。本科目では、これらのニュー・ツーリズムがもつ文化的な特質の解読を通じて、観光文化のダイナミズムに関して検討します。
●到達目標
授業の内容を自分の身近な地域において展開する具体的な観光文化の考察に敷衍することで、観光文化の多様性に関して理解を深められるようにします。また、現在政府（観光庁）の施策としても「ニュー・ツーリズム創出・流通促進事業」が推進されるようになっていますが、それらの批判的検討を含め、観光を一つの文化現象として総合的、相対的に捉える視点を獲得出来るようにします。さらに、文化ガイドなど、地域における観光文化の担い手として実際に活躍するための素養を身につけられるようにします。
●授業内容・授業計画
以下の内容に関して、講義形式で行います。
第 1 回　ガイダンス～現代における観光文化の諸相と変容
第 2 回　飽くなき食文化の探求～フード・ツーリズム
第 3 回　“湯治”から“メタボ対策”へ～ヘルス・ツーリズム
第 4 回　東京オリンピックはなぜ「誘致」されたのか？～イベント・ツーリズム
第 5 回　「まっさん」の足跡を訪ねる～コンテンツ・ツーリズム
第 6 回　「大人の社会見学」は浸透するのか～インダストリアル・ツーリズム
第 7 回　日本橋オタロードは国際観光地なのか？～サブカルチャー・ツーリズム
第 8 回　昭和の追憶と郷愁の彼方へ～レトロ・ツーリズム
第 9 回　千社詣からコロプラまで～ゲーミング・ツーリズム
第 10 回　被災の記憶の継承から復興への願いをかたちに～ダーク・ツーリズム、ボランティア・ツーリズム
第 11 回　観光を通じた都市と農村の交流～グリーン・ツーリズム
第 12 回　観光は「エコ活動」につながるのか？～エコ・ツーリズム（1）
第 13 回　観光振興と環境保護は両立できるか？～エコ・ツーリズム（2）
第 14 回　「廃」なるものの固有価値～ヘリテージ・ツーリズム
第 15 回　まとめ～大阪における新たな観光文化の展開
●評価方法
毎回の授業の最後に、コミュニケーションペーパーに授業内容を受けての自らの考察を記してもらいます。そのコミュニケーションペーパーの解答の積み重ね（30%）と、中間レポート（35%）、期末試験（35%）により評価します。ただし、コミュニケーションペーパーへの回答数（≒出席数）が、11 回未満の場合、中間レポートや期末試験の評定にかかわらず、原則として F 評価となります。なお、授業開始後 30 分以上の遅刻は欠席扱いとします。
●受講生へのコメント
本科目は文学部共通の専門科目であると同時に、大阪市立大学文学部履修証明プログラム「大阪文化ガイド＋講座」の必修科目となっています。この意味で、大阪を中心とした関西の事例を取り上げ、身近な地域における今

後の観光文化のあり方について考えてもらえることを意識しつつ講義します。また授業中に写真や映像などのビジュアルな資料を豊富に呈示します。板書はほとんど行わないので、講義内容をリアルタイムに考察、整理しながらメモをとっていくことが求められます。受講者は単に授業の内容を記憶するだけではなく、授業の内容と自分の過去の観光体験等とをリンクさせつつ、理解・考察する姿勢をもって授業に臨んでください。また、観光や異文化コミュニケーションに関してより深く探求したい学生は、観光現象に関してより複眼的な視野を獲得する意味で「観光文化実践演習」「日本文化発信のための英語」「文化人類学概論」、共通教育科目の「観光研究入門」「観光と文化」などを並行履修することを推奨します。

●参考文献・教材

教材（テキスト）安福恵美子他『観光まちづくり再考』古今書院、2016 年。

参考文献 必要に応じて授業中に紹介します。また、観光文化に関する up to date な話題は、新聞やインターネット等を通じて入手してください。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LXGEN3206	開講期	単位数	標準履修年次
271	**観光文化実践演習** Seminar and Practice in Culture and Tourism			後木 3	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 天野 景太 准教授		

●科目の主題

履修者各自の地元、あるいは大阪市およびその周辺地域をフィールドとして、観光コミュニケーション（ガイド）の企画と実践、観光ガイドマップの作成、観光モデルコースのデザイン、などを行います。出来上がった成果物は、ボランティアガイド等各自の実践活動に役立てていただくとともに、内輪の演習の中だけでなく、WEB サイトにおける公開、その他の手段を通じて、広く公開することも検討します。履修者の人数により、ガイドマップづくりやモデルコースづくりに関しては数人のグループ単位で実施する可能性もあります。

●到達目標

着地型観光の企画、フィールドワーク、観光メディアの編集、観光モデルコースのデザインなどの総合的な実践を通じて、地域における観光資源の発掘、魅力の洗い出し、他者への呈示の工夫など、自身が観光文化の担い手として活躍できるための基礎的な素養を体得していただくことを目指します。そのため、観光・旅行に興味があったり、観光業界への就職を目指す学生のみならず、文化の発信、写真、路上散策、インタビュー取材、イベントの企画や運営、広告、編集などに興味を持つ学生の履修も歓迎します。

●授業内容・授業計画

授業は 3 つのパートに分けて行います。第一に、地域資源の発掘と呈示の実践として、地元を歩きその地域の文化的実態を観察、記録、さらにそれらの観光的魅力を観光者に呈示するための工夫を考え、発表します。第二に、観光ガイドマップの作成の実践として、各自のなじみのある地域の観光ガイドマップを作成することを通じてプリントメディアによる地域文化を表現する工夫を考え、発表します。第三に、観光モデルコースの企画の実践として、多様な文化的背景をもつ観光客に対して、周遊旅行のプロデュースを想定したトラベルプランをデザイン・発表します。可能であれば、旅行会社のツアープロデューサーなど観光実践の第一線で活躍されている方をゲストスピーカーとしてお招きすることも考えています。

第 1 回　ガイダンス
第 2 回　観光文化を創造する・地域文化のリアリティへの感応力を磨く！（講義形式）
第 3 回　観光的魅力の洗い出しから文化の呈示の実際（講義形式）
第 4 回　フィールドノートからく地域文化の呈示へ（実習）
第 5 回　観光コミュニケーション（ガイド）の実践（1）（発表と討論）
第 6 回　観光コミュニケーション（ガイド）の実践（2）（発表と討論）
第 7 回　観光メディアをデザインする～絵地図をつくる（講義形式）
第 8 回　観光ガイドマップづくり（実習）
第 9 回　観光ガイドマップのプレゼンテーション（1）（発表と討論）
第 10 回　観光ガイドマップのプレゼンテーション（2）（発表と討論）
第 11 回　観光行動をデザインする～トラベルプランニング入門（講義形式）
第 12 回　観光モデルコースづくり（実習）
第 13 回　観光モデルコースのプレゼンテーション（1）（発表と討論）
第 14 回　観光モデルコースのプレゼンテーション（2）（発表と討論）
第 15 回　まとめ（成果発表会）

●評価方法

各パートにおける成果物 60%、平常点 40%で評価します。平常点は、実習および報告、討論への参加度など

に関して加点方式で評価します。ただし、出席率が 70%を下回った場合、成果物の提出が 1 つでも欠けた場合、原則として F 評価となります。

●受講生へのコメント

授業時間は、主に各自の成果物の発表と討論の場となります。そのため、ガイドマップやガイド資料などの制作のための現地フィールドワーク、既存の観光メディアのレビューなど、授業時間外に於ける各自の活動が多くのウエイトを占めます。そのための相応の時間的、場合によっては金銭的な負担が発生することを了解の上、履修を検討してください。そのため、本科目の履修を通じたスキルの獲得、自己成長に強い意欲をもった学生の参加を期待します。＊「大阪文化ガイド＋講座」受講者の方へ

本科目と他の科目との関係ですが、「大阪の歴史演習」や「大阪の地理」などの科目の受講で得られた個々の大阪の歴史や文化に関する知識を、第一に観光プロデュースという視点から捉え直してみること、第二に個々の観光スポット（点）をマップやトラベルプランに展開し、線や面として表現することが（本科目の）眼目です。

●参考文献・教材

教材（テキスト）安福恵美子他『観光まちづくり再考』古今書院，2016 年

担当教員の他の授業等において過去に制作した観光ガイドブック（『日光・会津よりみち遊歩案内』『小江戸物語』『TJ Style』『大阪平野レトロさんぽ』）などの学生が主体となって制作された冊子や、各地の観光案内所等で配布されているパンフレット、着地型観光のツアーパンフレットなどがプライマリな参考資料となります。そのほか、観光文化の呈示の実践に関する参考文献として、西村幸夫編著『観光まちづくり：まち自慢からはじまる地域マネジメント』学芸出版社、などがあります。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LXGEN3207	開講期	単位数	標準履修年次
272	**広報情報論 I** Advertisements and Information I			前集中	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 七沢 潔 非常勤講師		

●科目の主題

テレビが伝えた戦後日本を考える～沖縄・水俣・原発・戦争報道の事例研究から

●到達目標

NHKアーカイブスなどに保管された過去のテレビ番組のテーマ別研究を通して得られた知見を、長短さまざまな映像クリップの視聴と分析を通して追体験的に学習する。その上で、テレビジョンというフレームを通して見られた社会問題について報道の限界も視野に入れた上で思考し、認識を再構築する。

●授業内容・授業計画

テレビのアーカイブ番組のたくさんの番組映像を視聴しながら、そこに記録された戦後の日本の歩みを、沖縄、水俣、原発、戦争報道という 4 つの異なる視点から見つめ直す。そこで触発されたことを最後の分科会、全体討論を通じて意識化していく。

第 1 回　テレビ番組アーカイブスを使って学ぶこと（ガイダンス）
第 2 回　テレビが伝えた沖縄 1　総論　見つめられた「本土復帰」
第 3 回　テレビが伝えた沖縄 2　沖縄戦はどう描かれたか
第 4 回　テレビが伝えた沖縄 3　米軍基地問題
第 5 回　テレビが伝えた水俣 1　1950 年代　初期報道と空白の 10 年
第 6 回　テレビが伝えた水俣 2　1970 年代　メディアと責任追及
第 7 回　テレビが伝えた水俣 3　1980 年代～　認定問題と再びの報道空白
第 8 回　テレビが伝えた原発 1　1950 ～ 60 年代　広報としてのテレビ
第 9 回　テレビが伝えた原発 2　1970 ～ 80 年代　事故に対峙する・闘うテレビ
第 10 回　テレビが伝えた原発 3　1990 年代「安全神話」への回帰
第 11 回　テレビが伝えた原発 4　2011．3．11 ～福島原発事故後のテレビ報道
第 12 回　テレビが伝えた戦争 1　国民の悲劇としての物語
第 13 回　テレビが伝えた戦争 2　アジア太平洋の人々への眼差し
第 14 回　全体のまとめ 1　分科会（グループ別）形式の討論
第 15 回　全体のまとめ 2　分科会ごとの発表と議論

●評価方法

分科会での討論や全体での議論の中での発言など、平常点（40%）、2 回行うレポート提出（60%）により評価を決めます。

●受講生へのコメント

日本の戦後史を複数のテーマと視点から検証する授業です。

映像をたくさん使い、それに触発され、思考し、議論する流れを大切にしたいと思います。
みなさんが積極的に参加できるように授業を工夫しますので、ぜひチャレンジしてください。

●参考文献・教材

（沖縄）仲里効「オキナワ、イメージの縁」（未来社 2007）
七沢潔「記録された沖縄の”本土復帰”」『放送メディア研究』8 号、2011 年
http://www.nhk.or.jp/bunken/ よりPDFダウンロード可能
（水俣）石牟礼道子「苦海浄土」（講談社文庫 2004 年） 原田正純「水俣病」（岩波新書 1972 年）（原発）
七沢潔「テレビと原発報道の 60 年」（彩流社 2016 年予定）
ETV特集取材班「ホットスポット～ネットワークでつくる放射能汚染地図」（講談社 2012 年）（戦争）桜井均「テレビは戦争をどう伝えたか」（岩波書店 2005 年） ほか

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LXGEN3210	開講期	単位数	標準履修年次
273	マス・コミュニケーション論Ⅱ Mass Communication Studies Ⅱ			前木 2	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 鈴木 敬吾 非常勤講師		

●科目の主題

メディアとしての新聞の特性を、その歴史や他メディアとの比較によって考察し、ジャーナリズムの可能性と課題を探る。同時に時事問題の理解を通じて、社会の諸問題に自らコミットしていく市民力の必要性を学ぶ。

●到達目標

時事問題の理解に至る過程で、現代史の基礎知識を身につけ、大まかな歴史認識、時代感覚を獲得する。社会の諸問題を我がこととしてとらえ、問題解決の回路を探る姿勢を理解する。以上のことを学ぶツールとして、新聞を読むクセとコツを獲得する。

●授業内容・授業計画

授業は 3 部構成。①下記の計画に基づく各回テーマの講義（計画は社会情勢によって大幅に変更する可能性がある）②毎回、新聞記事を基にした時事ニュースに関する小論文を課す。小論文のテーマと記事資料は、各回の授業で次回分を提示・配布する③小論文の課題にした時事ニュースの解説

第 1 回 新聞概論＝活字離れ、新聞離れが進む中での新聞論調の 2 極化。朝日バッシング、特定秘密保護法、集団的自衛権行使容認の解釈改憲などについて
第 2 回 新聞の読み方
第 3 回 「偏向」している新聞報道
第 4 回 記者のつくられ方＝志の職業、でも萎える志
第 5 回 戦争に乗じた新聞＝軍部独走を許した土壌
第 6 回 世紀のスクープ＝開戦日をつかむ取材力
第 7 回 竹槍事件＝記者の気骨
第 8 回 8・15 の夜＝反省と無反省
第 9 回 原爆投下＝続く検閲と自己規制
第 10 回 新憲法を生んだスクープ＝記事が歴史をつくる
第 11 回 下山事件 = 占領下の事件報道
第 12 回 講和と安保＝国論二分、社論も揺れた
第 13 回 西山事件・上＝すり替えられた問題の本質
第 14 回 西山事件・下＝もろかった「知る権利」
第 15 回 まとめ

●評価方法

試験＝ 51％ 最終授業で提示するテーマで自由に書いてもらう。結論の是非ではなく、結論に至る筋道と説得力を基準に判断する。
日常点・その他＝ 49％ 毎回の小論文の評価

●受講生へのコメント

時事問題の理解は「いま」を生きる私たちにとって、必要不可欠な「一般常識」である。同時に就職を希望する人にとっては、すぐに具体的課題として出現する。新聞は社会の流れを理解するための最適なツールであり、毎回の小論文は、考え、理解するためのエクササイズと位置付けている。理解を深められる工夫をして進めていく。
毎回の小論文で特徴的なものを授業で紹介する。
意欲に応える空間・時間にしたいので、私語・居眠りをする人の出席は認めない。5 分以上の遅刻も認めない。出席は取らない。

前年度のマスコミュニケーション論を受講した人の継続受講も歓迎する。

●参考文献・教材

「岩波講座アジア・太平洋戦争」全８巻（岩波書店）▽「ジャーナリズムの条件」全４巻（岩波書店）▽「それでも、日本人は『戦争』を選んだ」（加藤陽子、朝日出版）▽「私の朝日新聞社史」（森恭三、田畑書店）▽「毎日新聞社会部」（山本祐司、河出書房新社）▽「ジャーナリズムの可能性」（原寿雄、岩波新書）▽「太平洋戦争と新聞」（前坂俊之、講談社学術文庫）▽「戦争と新聞」（鈴木健二、毎日新聞社）▽「20 世紀事件史 歴史の現場」（毎日新聞社）▽「密約 外務省機密漏洩事件」（澤地久枝、岩波現代文庫）▽「『毎日』の３世紀」（毎日新聞社）▽「敗戦日記」（高見順、文春文庫）

※その他の参考文献は各回提示する

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LXGEN3211	開講期	単位数	標準履修年次
274	**中国古典語Ⅰ** Classical Chinese Ⅰ			前水４	２単位	２・３年
	旧科目名			担当教員名 垣内 智之 非常勤講師		

●科目の主題

日本における中国古典語（漢文）受容の歴史を辿ったうえで、漢文という外国語を日本語に翻訳する訓練を行なう。

●到達目標

主に江戸時代に出版された和刻本漢籍（訓点が付けられた中国語文献）を資料として中国古典文献に触れることで、同じ文章に対しても異なる訓読が行なわれてきた事実を確認する。あわせて、自らが訓読する際にどのような基準に立つべきか、中国語の語法、日本語の文法を踏まえて考察することを目標とする。

●授業内容・授業計画

高校生向けの参考書などには、漢文は〈句形〉を暗記したうえで訓読すべきとするものもあるが、現在一般的に行なわれている訓読法は、長い歴史のなかで生み出された様々な読み方を元にして整理されたものであり、訓読に唯一絶対の規則があるわけではない。

本講義では、まず漢文が日本語に与えた影響などを考えたうえで、現代中国語と古典中国語の違いと共通点、古典中国語における書き言葉と話し言葉の違いなどを確認する。そのうえで、日本における漢文訓読の歴史を辿り、訓読において許容される幅を考えながら、実際に読解の訓練を行なう。

第１回　日本語と漢文
第２回　古典中国語と現代中国語／文言と白文
第３回　「漢文教授ニ関スル調査報告」（明治 45 年官報 8630 号）を読む
第４回　工具書の使い方
第５回　資料選読①
第６回　資料選読②
第７回　資料選読③
第８回　資料選読④
第９回　資料選読⑤
第 10 回　資料選読⑥
第 11 回　資料選読⑦
第 12 回　資料選読⑧
第 13 回　資料選読⑨
第 14 回　資料選読⑩
第 15 回　まとめ

●評価方法

評価の割合は、平常（50%）、期末試験（50%）を基準とする。

平常の評価には、受講態度、作成資料および発表内容の評価等を含む。

●受講生へのコメント

第４回以降、受講生に訓読を担当してもらう予定である。

訓読の訓練にあたっては漢和辞典を持参すること。

●参考文献・教材

テキストは指定しない。 随時、複写資料を配布する。

参考書、辞書は授業中に紹介する。

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LXGEN3212	開講期	単位数	標準履修年次
275	**中国古典語Ⅱ** Classical Chinese Ⅱ			後水 4	2 単位	2・3 年
	旧科目名			担当教員名 垣内 智之 非常勤講師		

●科目の主題

前期の「中国古典語Ⅰ」に引き続き、中国古典語（漢文）受容の歴史を辿りつつ、漢文という外国語を日本語に翻訳する訓練を行なう。

●到達目標

主に江戸時代に出版された和刻本漢籍（訓点が付けられた中国語文献）を資料として読解の訓練を行ない、漢文訓読の力をさらに高めることを目標とする。あわせて、中国古典文献を扱う際の基本的な手続きを確認する。

●授業内容・授業計画

前期の「中国古典語Ⅰ」の内容を踏まえつつ、訓読の訓練を行ない、自らが訓読する際の基準を確立していく。

後期の講義では、目録における著録状況の確認や解題の読解を通じて、個々の文献の性格を知るといった中国古典文献を扱う際の基本的な手続きを確認することを通じて、中国古典文献の全体像を概観する。また、陰陽や五行といった基本的な概念についても確認し、中国文化に対する認識を深める。

第 1 回　中国古典文献と目録学
第 2 回　『四庫全書総目提要』を読む
第 3 回　注釈の読み方
第 4 回　三谷景従『掌中十三経注疏』を読む
第 5 回　資料選読①
第 6 回　資料選読②
第 7 回　資料選読③
第 8 回　資料選読④
第 9 回　資料選読⑤
第 10 回　資料選読⑥
第 11 回　資料選読⑦
第 12 回　資料選読⑧
第 13 回　資料選読⑨
第 14 回　資料選読⑩
第 15 回　まとめ

●評価方法

評価の割合は、平常（50%）、期末試験（50%）を基準とする。

平常の評価には、受講態度、作成資料および発表内容の評価等を含む。

●受講生へのコメント

漢和辞典を必ず持参すること。

第 2 回以降、受講生に訓読を担当してもらう予定である。

●参考文献・教材

テキストは指定しない。 随時、複写資料を配布する。

参考書、辞書は授業中に紹介する。

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LXGEN2101	開講期	単位数	標準履修年次
276	**ギリシア語Ⅰ** Greek Ⅰ			前木 4	2 単位	1 ～ 4 年
	旧科目名 ギリシア語Ⅰ			担当教員名 佐藤 義尚 非常勤講師		

●科目の主題

古典ギリシャ語（紀元前五世紀）の初歩的な文法を学び，プラトン，アリストテレス，新約聖書といった古典が原文で読めるようになることを目指す.

●到達目標

動詞・直説法の変化の暗記，動詞造語の理解，名詞の基本的な変化の暗記を前期の目標とする.

●授業内容・授業計画

前期は文字，発音，アクセントから始まって，動詞，名詞の基本的な変化を中心に学ぶ．自作の教材を配布して文法事項を説明し，それについてのギリシャ語和訳の練習問題を次週にやる．これの繰り返しで授業は進行する．ギリシャ語は単語の変化がすべてとも言える言語なので，単語変化の練習は繰り返しおこなう．

第 1 回　イントロダクション，文字．
第 2 回　文字，発音．
第 3 回　文字の書き方，アクセント．
第 4 回　動詞，現在形．名詞，第一変化．
第 5 回　動詞，未来形．
第 6 回　動詞，未完了過去．
第 7 回　名詞，第二変化．形容詞．
第 8 回　前置詞．合成動詞．
第 9 回　動詞，アオリスト．
第 10 回　動詞，現在完了，過去完了．
第 11 回　強意代名詞．後倚辞．
第 12 回　動詞，中動相．
第 13 回　代名詞．
第 14 回　動詞，第二アオリスト．
第 15 回　全体のまとめ．

●評価方法

定期試験（50%）と平常点（50%）で総合的に評価する．

●受講生へのコメント

語彙集を配布するので辞書は不要．練習問題の予習は必ずやってくること．

●参考文献・教材

配布プリントで教える．

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LXGEN2102	開講期	単位数	標準履修年次
277	ギリシア語Ⅱ Greek II			後木 4	2 単位	1 ～ 4 年
	旧科目名 ギリシア語 II			担当教員名 佐藤 義尚 非常勤講師		

●科目の主題

前期に続き古典ギリシャ語（紀元前五世紀）の初歩的な文法を学ぶ．

●到達目標

後期でギリシャ語読解に必要な基本事項をすべて学修し終えることを目標とする．

●授業内容・授業計画

前期の続き．前期の出席者あるいは初歩的知識（動詞・直説法、名詞の基本的変化を知っているレベル）のある者が出席可能．前期と同様、教材を教室で配布し授業を行う．接続法，希求法，分詞などの用法を学び，初級文法を学習し終える．

第 1 回　動詞，受動相．
第 2 回　mi 動詞．
第 3 回　名詞，第三変化．能相欠如動詞．
第 4 回　約音動詞．約音名詞．約音形容詞．
第 5 回　子音幹動詞．
第 6 回　動作態．動詞，接続法．
第 7 回　不定法．
第 8 回　分詞．関係代名詞．
第 9 回　動詞，希求法．
第 10 回　希求法の用法．
第 11 回　条件文．分詞の独立用法．
第 12 回　比較級，最上級．副詞．命令法．
第 13 回　間接話法．
第 14 回　動詞的形容詞．否定詞．
第 15 回　全体のまとめ．

●評価方法
定期試験（50%）と平常点（50%）で総合的に評価する.
●受講生へのコメント
辞書不要. 練習問題の予習は必ずやってくること.
●参考文献・教材
配布プリントで教える.

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LXGEN2105	開講期	単位数	標準履修年次
278	西洋古典学 Classical Studies			後集中	2 単位	1 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 西村 賀子 非常勤講師		

●科目の主題
「ヨーロッパの文化のなかに生きるギリシア神話」を主題とし、ヨーロッパ文化を知るうえで不可欠なギリシア神話についての理解を深める。まず、個別の神話・伝説についてその内容を紹介し、ギリシア文学のなかでそれらがどう描かれたかを概観する。さらに、ギリシア神話が近・現代ヨーロッパ文化に及ぼした具体的な影響を、視覚媒体（絵画・彫刻・DVD など）によって確認し、自分の考えを深める一助とする。
●到達目標
ギリシア神話は膨大で、登場する神々や人間の関係は複雑だが、主要な物語や登場人物・神・英雄に話題を限定する。講義の目標は、ヨーロッパ文化の理解に必要な神話の知識を得ることである。
●授業内容・授業計画
以下のような内容を予定している。
第 1 回　教員自己紹介、受講動機の確認（小レポート提出）
第 2 回　神話とは何か？神話と伝説・昔話などの違い、文字との関係
第 3 回　ギリシア神話と文学・哲学、現代との関わり、オウィディウスの影響を脱した 20 世紀
第 4 回　創世神話：オリエントやヘブライズムとの比較、三世代交代神話
第 5 回　プロメテウス、パンドラ神話、五時代説話
第 6 回　オリュンポスの 12 神
第 7 回　ヨーロッパのエンブレム：エウロペの略奪
第 8 回　オイディプス伝説（1）
第 9 回　オイディプス伝説（2）
第 10 回　異邦の魔女メデイア
第 11 回　トロイア戦争をめぐって（1）
第 12 回　トロイア戦争をめぐって（2）
第 13 回　トロイア戦争をめぐって（3）
第 14 回　トロイア戦争をめぐって（4）
第 15 回　トロイア戦争をめぐって（5）
●評価方法
出席（40%）、授業への積極的参加の度合い（20%）、レポート（40%）などを総合して評価する。
●受講生へのコメント
ギリシア神話についての知識はヨーロッパ文化をより深く理解するうえで欠かせません。それ以上に、ギリシア神話は、「話」としてともかくおもしろい！ この講義では神話について解説し、神話に言及している古代の文献を確認し（といってもギリシア語やラテン語が読めなくてもだいじょうぶです）、さらに視覚的媒体も使います。講義ではたくさんの視覚媒体を用います。視覚媒体には古代の壷絵や彫像、ルネサンスや古典主義の絵画・彫刻のほか、ギリシア悲劇の上演映像（たとえば蜷川幸雄演出の『王女メデイア』や『オイディプス王』あるいは『オデュッセイア』をベースにした映画）なども含まれます。ヨーロッパ系の文学に興味のある方はもちろん、美術や造形表現に関心を持っている方にも有益な講義です。受講にあたって古典語や古典文学の知識は必要ありません。ただ、映像鑑賞後に学生のあいだで意見交換をする予定なので、そこできちんと発言することが求められます。同じ映画を他の人がどんなふうに見たかを率直に話し合うと、多様なものの見方を知って楽しく、視野も広がります。
●参考文献・教材
教科書：西村賀子『ギリシア神話―神々と英雄に出会う』（中公新書）
参考書：西村賀子『ホメロス『オデュッセイア』―〈戦争〉を後にした英雄の歌』（岩波書店）

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LXGEN3216	開講期	単位数	標準履修年次
279	**比較文化交流論Ⅱ** Comparative Cultural Exchange II			前集中	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 草生 久嗣 准教授／レイモンド・ラングリー非常勤講師／小野原 教子 非常勤講師		

●科目の主題

当科目は文学研究科インターナショナルスクール（IS）による国際発信力育成事業の一環として、また「都市文化」という大枠の主題に沿いながら、英語による講義とディスカッションの形式で提供される授業である。

インターナショナルスクールは文学部創立 50 周年記念を機に企画され、平成 15 年度に文学研究科が採択された COE の事業（都市文化研究センター）として発足し、以来、国内外から実績のある研究者を招聘して、集中講義を行なってきた。また、平成 19 年度より同 21 年度までの 3 年間、文部科学省大学院教育改革支援プログラム（大学院 GP）として文学研究科「国際発信力育成インターナショナルスクール」が採択されて以来、当科目は IS 集中科目として発展し、大学院 GP が終了した後もその理念とともに継続されている。

近年はさらに、本学が目指すグローバル人材育成とも連動し、将来国際社会での活躍が期待される全学部・研究科の学生と大学院生に履修の機会を広げてきている。

この授業は、文学部共通科目のひとつであり、学部生が卒業に必要な単位として算入できる。

IS 集中科目には、「比較文化交流論Ⅰ」「比較文化交流論Ⅱ」「国際都市文化論Ⅰ」「国際都市文化論Ⅱ」「国際都市社会論Ⅰ」「国際都市社会論Ⅱ」の 6 科目があり、原則として 1 年に 1 科目ずつ提供される。講師と個々の講義内容は毎年入れ替わり、科目名を変えて提供されるので、毎年受講することができる。

本年度は「比較文化交流論 II」が提供される。講義内容の詳細については、平成 28 年 3 月下旬に、掲示板やポータルサイト、インターナショナルスクールのウェブサイト上に掲載する予定。

●到達目標

インターナショナルスクール集中科目に共通する目標は次のとおりである。

（1）英語による講義を聴いて、内容を理解し、考察する。 （2）講義内容に関するディスカッションを英語で行い、意見を述べる。

●授業内容・授業計画

集中講義の日程は、9 月下旬を予定している。

講義期間中は、2 名の招聘講師（現在選定中）が 2 日ずつ（合計 4 日）担当する。

4 日間を通じて、まず各講師による講義が英語によって行なわれ、続いて講義の内容に関する講師と受講者間の質疑やディスカッションが英語で行われる。

第 1 回　インターナショナルスクールからのオリエンテーション
第 2 回　1 人目の講師による講義（1）
第 3 回　1 人目の講師による講義（2）
第 4 回　ディスカッション
第 5 回　1 人目の講師による講義（3）
第 6 回　1 人目の講師による講義（4）
第 7 回　ディスカッション
第 8 回　1 人目の講師による講義のまとめ
第 9 回　2 人目の講師による講義（1）
第 10 回　2 人目の講師による講義（2）
第 11 回　ディスカッション
第 12 回　2 人目の講師による講義（3）
第 13 回　2 人目の講師による講義（4）
第 14 回　ディスカッション
第 15 回　2 人目の講師による講義のまとめ

●評価方法

平常点（毎回の出席、授業への参加、アンケート）とレポートによる。

●受講生へのコメント

当科目は、英語による講義とディスカッションを通じた、学術コミュニケーションの訓練・経験の場として提供される。

講義内容を十分理解するため、事前に公表・配布される資料にあらかじめ目を通し、概要をつかんでおくことを勧める。また、内容を理解するだけでなく、それに関する自分の見解や意見を英語で表現することは容易ではない。しかし、将来的にそうしたことが求められる状況に身をおくことを想定し、困難な経験とその後に残される自分なりの課題を含めて、何かを学び取ってほしい。

●参考文献・教材

配布資料は開講までにポータルサイトや学生サポートにて提供される予定（事前に確認のこと）。また、昨年度までの集中科目に関する情報は、以下の URL から参照できる。

http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/IS/ja/courses/intensive-course

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LXGEN2106	開講期	単位数	標準履修年次
280	上方文化講座 KAMIGATA Culture Course			前集中	2 単位	1 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 久堀 裕朗 准教授 ほか		

●科目の主題

「上方文化講座」は、大阪の地に歴史的に育まれた文化、とりわけ伝統芸能に光を当て、学問的体系の下にこれを学ぼうとする試みである。講師として伝統芸能の第一線で活躍する専門家を招き、本学教員との共同作業により授業を組み立てていく。当授業は本学学生のみならず、一般市民にも公開する。

「上方文化講座」が取り上げるのは文楽（人形浄瑠璃）である。大阪を代表するこの伝統芸能は、2003 年にユネスコの世界無形遺産（人類の口承及び無形遺産の傑作）にも選定された。大阪生まれの文楽が「人類共通の宝」たりうるのはなぜか、その普遍的意義を捉え、世界的芸術文化の広がりの中に位置づけようとするのが本講座の目指すところである。

●到達目標

1. 文楽（人形浄瑠璃）を様々な角度から考察し、その魅力を発見するとともに、上方文化に関する知見を広める。
2. 文楽技芸員による芸談・実演に触れることによって、伝統芸能の伝承や、その現代におけるあり方について考える。

●授業内容・授業計画

本授業は、大阪を代表する伝統芸能である文楽（人形浄瑠璃）を学問的体系の下に学ぼうとするものである。文楽技芸員と本研究科教員とが、それぞれの専門性を生かしつつ、共同で授業を展開する。本年度は、現在の文楽はもちろん、歌舞伎でも上演される名作『ひらかな盛衰記』を取り上げ、この作品のもつ普遍的な魅力を多角的に分析していく。

授業は夏期 3 日間（8 月 24・25・26 日予定）の集中講義の形式で行う。取り上げる作品の内容、文章表現、時代背景、テーマ等に関わる講義を教員が行い（初日、2･3 日目午前）、その上で文楽技芸員（竹本津駒大夫・鶴澤清介・桐竹勘十郎、他）が実演を交えて作品を解説する（2・3 日目午後）。

◎なお、この授業は一般市民にも公開する。履修登録の際に、400 字程度で受講動機を記入したものを提出すること。希望者多数の場合は選抜を行い、受講許可者については後日掲示する。

第 1 回～第 15 回 （授業内容の詳細は後日掲示する）

●評価方法

出席状況とレポートによる。レポート課題は授業中に指示する。

●受講生へのコメント

例年、本講座を受講してはじめて文楽について知り、伝統芸能に興味を抱く学生が多い。授業を通じて、未知なる古典との新たな出会いを体験してほしい。

●参考文献・教材

教材

テキストは授業時間に配布する。

参考文献

2004 年度第 1 回の講座が『上方文化講座 曾根崎心中』（和泉書院）として、2007 年度第 4 回講座が『上方文化講座 菅原伝授手習鑑』（同）として、2008 年度第 5 回講座が『上方文化講座 義経千本桜』（同）として、それぞれ刊行されている。

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LXGEN3221	開講期	単位数	標準履修年次
281	国際ジャーナリズム論Ⅰ（読売新聞寄付講座） International Journalism Ⅰ			前火 5	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 松田 いりあ 非常勤講師		

●科目の主題

この科目は読売新聞社の寄付によって開講されるもので、『The Japan News』を教材として使用します。政治・経済・文化など、各自の視点から記事を取り上げてもらい、一緒に読んでディスカッションをします。

●到達目標

時事問題への関心を深めたり、英語学習の動機づけにして、受講生それぞれの目標により近づいてもらいたいと思います。

●授業内容・授業計画

毎回 1 ～ 2 人の受講生が『The Japan News』の掲載記事を選んで問題提起をし、それをふまえたディスカッションを中心に授業を進めます。メディアをとりまく現状についても、担当者から映像資料や文献を紹介します。

第 1 回　この授業の進め方について
第 2 回　『The Japan News』掲載記事による問題提起とディスカッション
第 3 回　『The Japan News』掲載記事による問題提起とディスカッション
第 4 回　『The Japan News』掲載記事による問題提起とディスカッション
第 5 回　『The Japan News』掲載記事による問題提起とディスカッション
第 6 回　『The Japan News』掲載記事による問題提起とディスカッション
第 7 回　『The Japan News』掲載記事による問題提起とディスカッション
第 8 回　『The Japan News』掲載記事による問題提起とディスカッション
第 9 回　『The Japan News』掲載記事による問題提起とディスカッション
第 10 回　『The Japan News』掲載記事による問題提起とディスカッション
第 11 回　『The Japan News』掲載記事による問題提起とディスカッション
第 12 回　『The Japan News』掲載記事による問題提起とディスカッション
第 13 回　『The Japan News』掲載記事による問題提起とディスカッション
第 14 回　『The Japan News』掲載記事による問題提起とディスカッション
第 15 回　この授業のまとめ

●評価方法

(1)『The Japan News』掲載記事による問題提起
(2) ディスカッションへの参加

●受講生へのコメント

英語学習、時事問題、ジャーナリズムなど、さまざまな関心にできる限り応えたいと思います。

●参考文献・教材

『The Japan News』を教材として使用します。受講生は 3 カ月間の購読を推奨（割引あり）。

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LXGEN3222	開講期	単位数	標準履修年次
282	国際ジャーナリズム論Ⅱ（読売新聞寄付講座） International Journalism Ⅱ			後火 5	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 松田 いりあ 非常勤講師		

●科目の主題

この科目は読売新聞社の寄付によって開講されるもので、『The Japan News』を教材として使用します。政治・経済・文化など、各自の視点から記事を取り上げてもらい、一緒に読んでディスカッションをします。

●到達目標

時事問題への関心を深めたり、英語学習の動機づけにして、受講生それぞれの目標により近づいてもらいたいと思います。

●授業内容・授業計画

毎回 1 ～ 2 人の受講生が『The Japan News』の掲載記事を選んで問題提起をし、それをふまえたディスカッションを中心に授業を進めます。メディアをとりまく現状についても、担当者から映像資料や文献を紹介します。

第 1 回　この授業の進め方について
第 2 回　『The Japan News』掲載記事による問題提起とディスカッション
第 3 回　『The Japan News』掲載記事による問題提起とディスカッション
第 4 回　『The Japan News』掲載記事による問題提起とディスカッション
第 5 回　『The Japan News』掲載記事による問題提起とディスカッション
第 6 回　『The Japan News』掲載記事による問題提起とディスカッション
第 7 回　『The Japan News』掲載記事による問題提起とディスカッション
第 8 回　『The Japan News』掲載記事による問題提起とディスカッション
第 9 回　『The Japan News』掲載記事による問題提起とディスカッション
第 10 回　『The Japan News』掲載記事による問題提起とディスカッション
第 11 回　『The Japan News』掲載記事による問題提起とディスカッション
第 12 回　『The Japan News』掲載記事による問題提起とディスカッション
第 13 回　『The Japan News』掲載記事による問題提起とディスカッション
第 14 回　『The Japan News』掲載記事による問題提起とディスカッション
第 15 回　この授業のまとめ

●評価方法

(1)『The Japan News』掲載記事による問題提起
(2) ディスカッションへの参加

●受講生へのコメント

英語学習、時事問題、ジャーナリズムなど、さまざまな関心にできる限り応えたいと思います。

●参考文献・教材

『The Japan News』を教材として使用します。受講生は 3 カ月間の購読を推奨（割引あり）。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LXGEN1101	開講期	単位数	標準履修年次
283	**文学部基礎演習 a,b,c,d** Basic Seminar for Students at The Faculty of Literatrue and Human Sciences a,b,c,d,e			前 1	2 単位	1 年
	旧科目名 文学部基礎演習 a,b,c,d			担当教員名 大坪 亮介 非常勤講師／石川 優 非常勤講師／有田 豊 非常勤講師／渡辺 拓也 非常勤講師		

●科目の主題

大学の講義や演習科目で課されるレポートでは、自らの考えを論理的に伝えるために、高校までの教育で修得してきたものとは異なった文章力が求められる。その集大成が文学部の最終年次で課せられる卒業論文である。この科目では、大学で求められる文章表現力を演習形式で伝授する。

●到達目標

自らの考えを論理的かつ明確に第三者に伝えるためのアカデミック・ライティング技術の習得を目標とする。

●授業内容・授業計画

まず、まとまった文章や、本をまるごと一冊要約する訓練から始まり、小論文を作成するためのテーマ設定、アウトラインの構想、執筆と推敲といった過程を通じて、大学で身につけるべき文章表現法を習得する。

第 1 回　ガイダンス、文章を要約する（1 回目）
第 2 回　文章を要約する（2 回目）
第 3 回　本をまるごと一冊要約する 1 回目
第 4 回　本をまるごと一冊要約する 1 回目
第 5 回　本をまるごと一冊要約する 2 回目
第 6 回　本をまるごと一冊要約する 2 回目
第 7 回　小論文を作成する 1 回目（アウトラインの構想を立てる）
第 8 回　小論文を作成する 1 回目（アウトラインの構想を立てる）
第 9 回　小論文を作成する 1 回目（本文を書く）
第 10 回　小論文を作成する 1 回目（本文を書く）
第 11 回　小論文を作成する 2 回目（アウトラインの構想を立てる）
第 12 回　小論文を作成する 2 回目（アウトラインの構想を立てる）
第 13 回　小論文を作成する 2 回目（本文を書く）
第 14 回　小論文を作成する 2 回目（本文を書く）
第 15 回　学期末レポート（小論文）を作成する

●評価方法
毎回の課題提出（50%）、学期末の小論文（50%）
●受講生へのコメント
論文やレポートは学生個人と担当教員の間で交わされる私信ではなく、公的なコミュニケーション手段である。自分の考えを明確に表現し、第三者に理解してもらうには、どんなことが必要になるのか、この演習を通じて探ってみてほしい。
なお、a）～ d）の各クラスとも、受講生数は 10 名程度とする。もし受講希望者多数の場合、初回の授業にて抽籤をおこなう。
●参考文献・教材
以下の書籍を教材として用いるので事前に購入しておくこと。なだいなだ『民族という名の宗教』岩波新書（新赤版）204，1992 年
東浩紀『動物化するポストモダン』講談社現代新書 1575,2001 年その他の資料は、授業中にプリントを配布する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LXGEN3223	開講期	単位数	標準履修年次
284	日本文化発信のための英語 English for Guiding Japanese Culture			後木 2	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 奥西 佐智子 非常勤講師		

●科目の主題
社寺、城、庭、茶道、日本食、酒など、日本人の生活に大きな影響を与えてきたものや、外国人から見た日本の不思議な事などを題材に取り上げ、基礎英語で日本文化の紹介の仕方を考案する。同時に英語のリスニング力とスピーキング力を鍛えてゆく。
●到達目標
観光地で大阪の魅力のみならず、日本の文化、伝統、歴史なども基礎英語で紹介できるよう、話のふくらませ方を学び、各々のガイディングスタイルを構築する。
●授業内容・授業計画
日本の宗教や文化に触れながら、外国人観光客の視点で大阪の観光地を見る。英検二級程度の英語を使い、観光地で日本文化の発信をする方法を考案する。5 回の実習では、講義内容を基に、各人が英語で発表するものとする。講義・実習を通し、各々のガイディングスタイルを構築するサポートをする。
第 1 回　ガイダンス～ガイドとして大切なこと・観光英語とは～（10 月 6 日・木曜日）
第 2 回　観光英語～大阪のいいところをどう伝えるか～（10 月 13 日・木曜日）
第 3 回　観光英語～日本人の生活とおもてなしの心～（10 月 20 日・木曜日）
第 4 回　観光英語～神道に関わる日本の習慣～（10 月 27 日・木曜日）
第 5 回　神社にて実習（11 月 6 日・日曜日）～住吉大社にて発表～
第 6 回　観光英語～茶道について～（11 月 10 日・木曜日）
第 7 回　観光英語～日本人にとっての仏教およびお寺の存在～（11 月 24 日・木曜日）
第 8 回　寺にて実習（12 月 4 日・日曜日）～四天王寺にて発表～
第 9 回　観光英語～庭・古墳について～（12 月 8 日・木曜日）
第 10 回　庭園にて実習（12 月 18 日・日曜日）～大仙公園または天王寺公園にて発表～
第 11 回　観光英語～日本の世界遺産と城について～（12 月 22 日・木曜日）
第 12 回　城周辺にて実習（1 月 8 日・日曜日）～大阪城にて発表～
第 13 回　観光英語～日本食および日本酒について～（1 月 19 日・木曜日）
第 14 回　実習　大阪について（1 月 22 日・日曜日）～大阪駅周辺にて発表～
第 15 回　大阪の観光地で日本文化を発信　総まとめ
●評価方法
適宜与える課題および実習における発表を通して総合的に評価する。
授業では、学習意欲と出席率で評価し、実習では、話す態度、発表内容、声の大きさ、発音、話すスピードなどを評価の対象とする。
●受講生へのコメント
基礎英語を使い、大阪の観光地から、日本の文化を発信する方法を学び、自分の英語力に合わせて案内内容を考案する。
実習では各人の担当箇所をあらかじめ定め、各々英語で案内することとし、発表内容の提出が必要。
他人の案内を聞いて、良いところを学び、講師（現役ガイド）よりアドバイスを受け、自己学習に努める事。
授業では、CD を使用し、外国人にとっての日本の不思議な事を題材にし、リスニングの授業も行う。

●参考文献・教材
テキストは使用しない。適宜参考資料を配布する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LXGEN3224	開講期	単位数	標準履修年次
285	大阪の地域・文化実践演習 Seminar and Practice for Regional Culture in Osaka			前木 5	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 大場 茂明 教授／ 村田 正博 非常勤講師		

●科目の主題
地域間競争の時代といわれる現代において、地域に存在する有形・無形の資産を（再）発見・（再）評価し、それらを「まちの魅力」としていかに活用・発信していくかが、都市の活性化にあたって重要な課題となっています。また、その際には、あわせて行政、地元企業・団体、住民など、地区に関わる様々なアクターによる多種多様な取り組みが、新たな都市居住の魅力を創出し、地域の再生・発展に寄与しうるポテンシャルを有しており、そうしたアクターの参加と協働が鍵を担っていることもいうまでもありません。この授業は、大阪市とその周辺地域をフィールドとして、地域文化・地域資源を再発見し、それをまちづくりにどう活かしていくかを、講義・現地実習を通じて実践的に学びます。

●到達目標
本年度は、江戸時代を代表する俳人・画家として知られる与謝蕪村（享保元 [1716] ～天明 3[1784] 年）の生誕地・毛馬地区（大阪市都島区）を舞台として開催される「蕪村生誕 300 年顕彰事業」に合わせ、一部のイベントに参加・体験してもらいながら、①地域の現状把握、②フィールドワークによる地域文化・地域資源の再発見、③受講生相互の意見交換を行います。こうしたプロセスを通じて、与謝蕪村の現代的意義を問うとともに、毛馬地区に存在する有形・無形の地域資産の活用方法を考え、さらにはそれらのまちづくりや集客事業への展開を図りながら、地区の活性化に対する提言を行うことを目的とします。

●授業内容・授業計画
授業は、教室での講義形式の授業、毎月 1 回土曜に行う現地実習、「蕪村生誕 300 年記念シンポジウム」（5 月 1 日）によって構成されます。現地実習は毎回 3 時間程度を予定しているので、授業 2 コマ分としてカウントします。

第 1 回　ガイダンス 4 月 14 日
第 2 回　現地実習（1）天六～毛馬 4 月 23 日
第 3 回　同上
第 4 回　地域文化の再発見（講義形式） 4 月 28 日
第 5 回　蕪村生誕 300 年記念シンポジウム 5 月 1 日
第 6 回　地域文化の復原とその意義（講義形式） 5 月 12 日
第 7 回　地域資源の調べ方（講義形式） 5 月 19 日
第 8 回　現地実習（2）梅田～中崎町 5 月 21 日
第 9 回　同上
第 10 回　地域資源とまちづくり（講義形式） 6 月 9 日
第 11 回　地域からの情報 発信（講義形式） 6 月 16 日
第 12 回　現地実習（3）九条 6 月 18 日
第 13 回　同上
第 14 回　地域文化をめぐる新しい視座（講義形式） 6 月 30 日
第 15 回　まとめ（成果発表会）

●評価方法
出席状況（30%）、期末レポート（70%）により評価します。

●受講生へのコメント
本科目は、文学部共通の専門科目であると同時に、大阪市立大学文学部履修証明プログラム「大阪文化ガイド＋講座」の選択科目となっています。現地実習やシンポジウム参加など、この科目は日程が変則的となります。履修の際には注意して下さい。

●参考文献・教材
テキスト：使用しません。
参考文献：授業中に適宜紹介します。

教 職 に 関 す る 科 目

掲載№	授業科目名	科目 NO.	KLPED1101	開講期	単位数	標準履修年次
286	**教職概論 a,b,c** Introduction to Teaching Profession a,b,c			後月 2 ／ 後月 4 ／ 後集中	2 単位	1 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 森 久佳 准教授		

●科目の主題

本講義は、教師の役割や職務の基本的事項を理解すると共に、教師をとりまく状況の変化、教育改革の進行などの今日的動向の把握することを目的としている。

今日、教師は学習指導のみならず様々な職務を担うとともに、多くの役割を期待されることとなっている。また、教師の抱える困難には、教師の置かれている立場の変化や我が国の教師観、学校教育の変化が複雑に影響している。そうした中で、教師は厳しい評価にさらされながら活動を余儀なくされているともいえる。

以上のような点を踏まえながら、教職に関する基礎的事項とその意義について検討していく。

●到達目標

本講義の到達目標は以下 3 点である。

①教職に関する基礎的事項を理解すること。

②自らの教師体験を客観化し、教職の意義について検討すること。

③教職について学ぶことを通して自らの職業について主体的に考えること。

●授業内容・授業計画

以下の計画に沿って、講義形式で進める。なお、講義では、プリント及びワークシート等も使用する。

第 1 回　オリエンテーション（授業の進め方などの説明）
第 2 回　教職に関する基本的な知識・考え方などの理解①（免許状・資格の種類／任用・身分，など）
第 3 回　教職に関する基本的な知識・考え方などの理解②（免許状の取得／教師教育と教員養成，など）
第 4 回　全学教職課程ガイダンス（予定）
第 5 回　教職の現状と主要業務についての理解①（教職の職務の現状）
第 6 回　教職の現状と主要業務についての理解②（授業）
第 7 回　教職の現状と主要業務についての理解③（授業研究／校内研究，など）
第 8 回　教職の現状と主要業務についての理解④（教育課程とカリキュラム）
第 9 回　教職の現状と主要業務についての理解⑤（学級づくりと教師）
第 10 回　教職の現状と主要業務についての理解⑥（学校づくりと教師）
第 11 回　教職の現状と主要業務についての理解⑦（保護者・地域と教師）
第 12 回　専門職としての教職のあり方についての理解①（教職の抱える課題）
第 13 回　専門職としての教職のあり方についての理解②（専門職としての教職）
第 14 回　専門職としての教職のあり方についての理解③（教職のもつジレンマと今後の教職のあり方）
第 15 回　教師の今日的課題と展望（まとめ）

●評価方法

出席レポート、定期試験、レポート課題などによって行う。

評価観点 1　教員の職務について基本的事項を理解している。

評価観点 2　教職の意義について分析・検討している。

評価観点 3　自らの進路のひとつとして教職をとらえている。

●受講生へのコメント

本講義の授業時間内に、全学教職課程ガイダンスを行う（時期未定）こととなっている。教職課程履修者はこのガイダンスに出席する必要があるので、注意すること。

また、第 1 回目の授業時に全体のオリエンテーションを行うので、出来る限り出席すること。

●参考文献・教材

＜テキスト＞

・佐藤晴雄（2015）『教職概論』（第 4 次改訂版）学陽書房.

＜参考文献＞

・臼井嘉一編著（2014）『学生と教師のための現代教職論とアカデミックフリーダム』学文社.
・曽余田浩史編著（2014）『教職概論』（教師教育講座第 1 巻）協同出版.
・高橋陽一編（2014）『新しい教師論』武蔵野美術大学出版局.
・髙谷哲也編著（2011）『教師の仕事と求められる力量:新たな時代への対応と教師研究の知見から』あいり出版.

・奈須恵子・逸見敏郎（2012）『学校・教師の時空間：中学校・高等学校の教師をめざすあなたに』三元社.
・C・デー／Q・グー（2015）『教師と学校のレジリエンス：子どもの学びを支えるチーム力』（小柳和喜雄・木原俊行監訳）北大路書房.
その他、参考書等の紹介は講義の中で行う。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	KLPED2201	開講期	単位数	標準履修年次
287	**教育基礎論 a,b** Fundamentals in Education a,b			前水 4 ／ 前水 5	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 村井 尚子 非常勤講師		

●科目の主題
この授業では、教育の本質を捉え、その理念を学ぶために、まず教育を家庭、社会、学校といった側面から考える。そのうえで、教育の学的基礎づけの主流を担ってきた欧米の教育思想について説明する。さらに、古代から現代にいたるまでの西洋及び日本の教育の歴史について概観し、公教育制度が成立して以降の制度とそこから生じる諸課題について考えていく。

●到達目標
教育についての自身の経験を踏まえたうえで、教育の理念、思想、歴史とその課題について学ぶことによって、より本質的な諸相をとらえる視点をもつことが目指される。

●授業内容・授業計画
教育とは何かについて、哲学的な問いを含めて考えたうえで、家庭教育、学校教育、社会と教育についてそれぞれの問題や歴史について、他国の実践も参照しつつ考察を進めていく。

第 1 回　教育とは何か
第 2 回　人間形成と教育
第 3 回　教職の専門性
第 4 回　社会と教育
第 5 回　子どもの社会化と教育
第 6 回　家庭教育の意義と特徴
第 7 回　家庭教育をめぐる諸問題
第 8 回　子どもにとって学校とは
第 9 回　欧米の教育の歴史（1）
第 10 回　欧米の教育の歴史（2）
第 11 回　日本の教育の歴史（古代から第二次大戦）
第 12 回　日本の教育の歴史（戦後から現代）
第 13 回　世界の教育（オランダを中心として）
第 14 回　教育におけるリフレクションの意義と実践
第 15 回　全体のまとめ

●評価方法
この授業では、適宜グループワークやディスカッションを取り入れ、小レポートの提出を求める。また、授業中の態度および期末のレポートを評価の対象とする。平常点（20%）、小レポート（30%）、期末レポート（50%）とする。
評価観点 1　教育の理念について理解している
評価観点 2　教育の歴史について理解している
評価観点 3　教育の思想について理解している

●受講生へのコメント
この授業を受講するにあたって、まず受講生の「教育」への前理解を対象化してもらいたい。その上で、教育を様々な視点から捉え、考察していくことで、受講生の前理解が変化したかどうかを問いたいと考えている。積極的な態度での参加を歓迎する。

●参考文献・教材
教科書は用いないが、教育学の古典や現代の教育をめぐる論点について書かれた文献を適宜紹介する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	KLPED2201	開講期	単位数	標準履修年次
288	**教育基礎論 c** Fundamentals in Education c			後火 3	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 柏木 敦 教授		

●科目の主題

受講者が教員としての基礎知識並びに基礎教養を習得し、「教育とは何か」ということついて、自ら考え、直面する課題を解決するための素材を提供することを本講義の主題とする。

●到達目標

目標（到達目標）：以下の三点を到達目標とする。

(1) 教育の意義や目的について理解する。

(2) 教育の歴史的流れと、理念のありようを知る。

(3) 学校教育に関わる基本的事項ならびに今日の教育課題について、基本的な知識を身につけ、課題解決のための視点を養う。

●授業内容・授業計画

授業は、以下の順序で行う。

第 1 回　ガイダンス
第 2 回　教育の対象としての子ども
第 3 回　子ども観
第 4 回　子どもの権利と親の権利
第 5 回　「教育」とは何か、「学校」とは何か
第 6 回　学校と教育の歴史　古代～中世
第 7 回　学校と教育の歴史　近世～近代初期
第 8 回　近現代日本における教育理念
第 9 回　教育基本法（1）
第 10 回　教育基本法（2）
第 11 回　義務教育の原則と現状
第 12 回　中等教育の諸問題
第 13 回　高等教育をめぐって
第 14 回　教育行政
第 15 回　学習指導要領

●評価方法

小テスト（30 点）、期末試験（70 点）により評価する。

評価観点 1　教育の意義や目的について理解している

評価観点 2　教育の歴史的流れと、理念のありようを理解している

評価観点 3　学校教育に関わる基本的事項ならびに今日の教育課題について、基本的な知識を身につけ、課題解決のための視点を持っている

●受講生へのコメント

講義にあたっては、次回講義の内容に該当するテキストの箇所を指示するので、あらかじめ一度は目を通してから出席すること。

●参考文献・教材

高橋陽一『教育通義』武蔵野美術大学出版局、2013 年

その他参考文献等は適宜紹介する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	KLPED2202	開講期	単位数	標準履修年次
289	**発達・学習論 a,b** Human Development and Learning a,b			前木 4 ／ 前木 5	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 古見 文一 非常勤講師		

●科目の主題

発達心理学・学習心理学の基礎的な知識を習得し、教育場面における人間の心理や行動について理解を深める。また、基礎研究で得られた知見が日常生活や臨床・教育場面にどのように活かされるのかを明らかにする。

●到達目標
発達心理学・学習心理学の基礎的知識を習得し、幼児、児童及び生徒の心理や行動の背景を理解する。
●授業内容・授業計画
発達・学習過程を理解するために、以下の各領域から主要なトピックを選び講義する。ただし、授業の進捗状況により、順序を変更したり、内容を一部省略する可能性がある。
第 1 回　イントロダクション（発達心理学、学習心理学とは）
第 2 回　乳児期の発達
第 3 回　情動と条件づけ
第 4 回　子どもの問題解決能力
第 5 回　子どもの目撃証言
第 6 回　知能指数（IQ）
第 7 回　読み書きの発達
第 8 回　心の理論
第 9 回　道徳性の発達
第 10 回　攻撃性
第 11 回　言語発達
第 12 回　子どものレジリエンス
第 13 回　発達障害 1
第 14 回　発達障害 2
第 15 回　まとめ
●評価方法
主として学期末試験にもとづき評価を行なう。
評価観点 1　幼児、児童および生徒の心身の発達について理解している
評価観点 2　学習の過程について理解している
評価観点 3　障害のある幼児、児童及び生徒の発達及び学習の支援を考えることができる
●受講生へのコメント
常に実際の子どもの姿がどのようであるかを意識しながら受講してください。心理学実験で明らかとなってきた様々な現象が日常生活にどのように現れているかをしっかり結びつけられるようになってほしいと思います。
●参考文献・教材
教科書
加藤弘通・川田学・伊藤崇（編）必読文献で学ぶ発達心理学． 新曜社 2016 年 4 月出版予定
注：基本的に教科書に沿って授業を進める。現時点で出版予定の本であるので、変更があった際は授業中にアナウンスを行う。
参考書
鳥居深雪 脳からわかる発達障害ー子どもたちの「生きづらさ」を理解するために．中央法規出版 2009 年
子安増生・郷式徹（編）心の理論ー第二世代の研究へ．新曜社 2016 年 2 月出版予定

掲載№	授業科目名	科目 NO.	KLPED2202	開講期	単位数	標準履修年次
290	**発達・学習論 c** Human Development and Learning c			後金 1	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 岡本 真彦 非常勤講師		

●科目の主題
発達心理学・学習心理学の基礎的な知識を習得し、教育場面における人間の心理や行動について理解を深める。また、基礎研究で得られた知見が日常生活や臨床・教育場面にどのように活かされるのかを明らかにする。
●到達目標
発達心理学・学習心理学の基礎的知識を習得し、幼児、児童及び生徒の心理や行動の背景を理解する。
●授業内容・授業計画
発達・学習過程を理解するために、以下の各領域から主要なトピックを選び講義する。ただし、授業の進捗状況により、順序を変更したり、内容を一部省略する可能性がある。
第 1 回　教育心理学を学ぶ意味
第 2 回　発達の理論
第 3 回　乳・幼児期の発達

第 4 回　社会性・道徳性の発達
第 5 回　読解力の発達と教育
第 6 回　青年期の発達
第 7 回　「障がい」の理解
第 8 回　学習のメカニズム
第 9 回　動機づけの基礎
第 10 回　動機づけの応用
第 11 回　記憶の分類
第 12 回　記憶の理論を活かす
第 13 回　学習方略
第 14 回　メタ認知と学習観
第 15 回　まとめ

●評価方法

主として学期末試験にもとづき評価を行なう。
評価観点 1　幼児、児童および生徒の心身の発達について理解している
評価観点 2　学習の過程について理解している
評価観点 3　障害のある幼児、児童及び生徒の発達及び学習の支援を考えることができる

●受講生へのコメント

基礎と応用、実験室内で得られた知見と実験室外の日常・教育場面における問題がどのように結びつくのかを考えながら受講してほしい。また、臨床・教育場面における様々な問題に対して、客観的、批判的な視点で物事を見る力を養ってほしい。

●参考文献・教材

教科書：「絶対役立つ教育心理学」 藤田哲也編著 ミネルヴァ書房 2007
授業では、教科書の内容を中心に解説しますので、必ず教科書を持参してください。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	KLPED2203	開講期	単位数	標準履修年次
291	**教育制度論 a** Educational Systems a			前火 4	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 滝沢 潤 非常勤講師		

●科目の主題

現在は、教育基本法の改正に象徴される、教育法制および制度の大改革が行われている。このような状況のなかで教師をめざすにあたって、教育制度や関連法令の基本的な事項について確実に理解するとともに、今後の日本の学校教育がどのように展開しようとしているのかを正確に把握することは、学校現場における教育活動を方向づけるうえで非常に大きな意味をもっている。本講義では、こうした認識に基づいて、教育の法と制度の変化のなかで学校教育がどのように変容していくのかを、教育制度の基本的な事項を踏まえながら理解できるようにする。

●到達目標

下記、評価観点 1、2、3 を参照のこと。

●授業内容・授業計画

本講義では、昨今の教育法令の改正の意義・ポイントを明確にしながら、公教育制度や教育行政の原理など基本的な事項を説明する。その際、可能な限り具体的な事例を取り上げながら、学校教育の場面において教育行政・制度の問題ががどのような意味をもち役割を果たしているのかを理解できるようにする。

第 1 回　イントロダクション、教育制度の基本とその改革動向（1）
第 2 回　教育制度の基本とその改革動向（2）
第 3 回　学校の制度
第 4 回　教職員と教員養成の制度
第 5 回　教員の研修と福利厚生の制度
第 6 回　教育委員会の制度（1）
第 7 回　教育委員会の制度（2）
第 8 回　教科書の制度
第 9 回　学校参加の制度（1）
第 10 回　学校参加の制度（2）

第 11 回　学校評価の制度
第 12 回　教員評価の制度
第 13 回　学校給食の制度
第 14 回　入試制度
第 15 回　奨学金の制度

●評価方法
期末試験 80%、授業内小レポート等 20%。
評価観点 1　学校教育を中心とした教育制度について理解している。
評価観点 2　教育に関する法令の基本的事項を理解している。
評価観点 3　現在の教育改革の動向を理解している。

●受講生へのコメント
小レポート等、積極的な授業参加を期待する。

●参考文献・教材
高妻紳二郎編著『新・教育制度論　教育制度を考える 15 の論点』ミネルヴァ書房、2014 年。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	KLPED2203	開講期	単位数	標準履修年次
292	教育制度論 b,c Educational Systems b,c			後金 2 ／ 後金 3	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 佐野 正彦 非常勤講師		

●科目の主題
今日のわが国の教育制度のかかえる焦眉の課題のなかから具体的な問題をとりあげ、その歴史的、思想的背景とともに、具体的な改革の現実を分析する。我が国の問題を客観的に評価するためにOECD加盟国などの先進国を中心とした世界的な動向との比較検討も行う。

●到達目標
教育に関する社会的、制度的、および経営的な事項を理解するために
①学校を中心とした教育制度についての理解ができる
②教育に関する法令の基礎的事項の理解ができる
③現在の教育改革の動向について理解できる
ことを目標とする。

●授業内容・授業計画
今日の日本の教育制度改革において、焦眉の課題となっている（1）競争原理と市場原理に基づく学校改革に関わって学区制度と学校選択制の問題を、(2) 学力低下・学力格差が社会的な問題として論じられているなかでの、学力保障や教育内容に関わる制度のあり方を、(3) 学校生活に「子どもの権利」を根づかせるうえでの、教師の懲戒権や生徒の参加や権利保障のあり方を、(4) 政治主導の教育行政という名目で教育委員会不要論も叫ばれるなかでの、教育委員会制度の意義と課題を、(5) 教員評価、懲戒や分限処分の強化、政治活動、労働基本権の制限による教員に対する管理強化が進むなかでの教員の身分保障と教育の自由の問題を、検討する。

第 1 回　導入　授業の目標、内容、評価について
第 2 回　学区制度と学校選択（1）新自由主義政策と学校制度
第 3 回　学区制度と学校選択（2）新自由主義政策と学校制度
第 4 回　学力を保障する制度（1）学力低下論争・PISA・全国学力テスト
第 5 回　学力を保障する制度（2）貧困と学力問題
第 6 回　学力を保障する制度（3）教育費と学力問題
第 7 回　学力を保障する制度（4）学力の規定要因と学力保障を支える制度
第 8 回　子どもの権利を守る制度（1）体罰問題を考える
第 9 回　子どもの権利を守る制度（2）教師の懲戒権と子どもの権利①
第 10 回　子どもの権利を守る制度（3）教師の懲戒権と子どもの権利②
第 11 回　教育委員会制度の意義と課題（1）戦後改革期における教育委員会制度発足の理念と意義
第 12 回　教育委員会制度の意義と課題（2）教育委員会制度の変遷と自由化・廃止論の検討
第 13 回　教育の自由と教員の身分保障（1）教員の懲戒・分限制度と特別身分保障制度
第 14 回　教育の自由と教員の身分保障（2）教員評価、政治的権利・労働者としての権利制限の問題
第 15 回　まとめ・到達度確認

●評価方法
試験による評価（7 割）とともに、授業中に課すいくつかの小レポートなどの課題（3 割）による総合評価。
●受講生へのコメント
①「教職課程履修カルテ」の評価は、上記「到達目標」に示した観点にもとづいて行う。
②日頃より教育関連の新聞や雑誌の記事に目を通し、スクラップして現在の教育改革をめぐる動向、特に大阪の状況につ いて整理、把握しておくこと。
③出された課題については、期限までに学習し提出すること。
●参考文献・教材
参考書
①堀内・佐野他『新版　専門高校の国際比較　日欧米の職業教育』法律文化社、2006 年
②乾・佐野他『不安定を生きる若者たち―日英比較　フリーター・ニート・失業』大月書店、2006 年
③『教育六法』いくつかの出版社から刊行されているので、自分に合ったものいを選ぶとよい。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	KLJPN2201	開講期	単位数	標準履修年次
293	国語科教育法Ⅰ Methods of Teaching Japanese Ⅰ			前金 4	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 木村 雅則 非常勤講師		

●科目の主題
「国語科」の担当者としての基本的なあり方を学ぶ
●到達目標
・国語科教員として教育界に貢献するための基本的な能力や知識が身についている。
・国語科教員の仕事内容と、教科として指導すべき内容を理解できている。
・国語科の学習指導案の意味と役割を理解し、正しく学習指導案を作成できる。
●授業内容・授業計画
「国語科」をめぐる様々な内容について概説し、担当者としての基本的な視点や能力を培う。講義中心に進めるが、必要に応じて課題を課す。また、第 2 回以降は毎回授業冒頭に小テスト（文語文法・漢文句法）を行い、基礎的な実力を培う手立てとする。
第 1 回　ガイダンス
第 2 回　「国語」の授業の周辺①――専門用語など
第 3 回　「国語」の授業の周辺②――教科書など
第 4 回　授業の構築①――授業前
第 5 回　授業の構築②――授業中
第 6 回　授業の構築③――授業後
第 7 回　教材研究
第 8 回　学習指導要領①――現行の内容と変遷
第 9 回　学習指導要領②――校種間連携など
第 10 回　教え方の基礎①――現代文分野
第 11 回　教え方の基礎②――古典分野
第 12 回　学習指導案①――高等学校
第 13 回　学習指導案②――中学校
第 14 回　学習指導案③――作成演習
第 15 回　まとめ
●評価方法
・期末考査を実施する（持ち込み不可の予定）。
・基本算出式＝期末考査（50%）＋毎回の小テスト合計（20%）＋提出物（20%）＋授業への参加状況（10%）。ただし、遅刻・欠席が多いとか提出物を出さないなど、現場で支障をきたすと思われる場合は、他の点数の如何に関わらず単位を認めない予定。
【評価観点】
1　国語科教育法の基本的理論を身につけている。
2　学習指導要領の国語の項目について理解している。
3　国語科学習指導案の作り方の基礎を習得している。
●受講生へのコメント
・授業態度について。あなたが現場で教壇に立った時に「こんな生徒でいてほしい」という態度で、あなた自身

がこの授業を受けてください。
・読書については「質より量」と考えて、継続してください。
・内容は、高等学校を中心に進めることになりますが、ご理解ください（もちろん中学校の内容についても適宜触れますので、ご心配はいらないかと思います）。

●参考文献・教材

教材：『高等学校学習指導要領解説　国語編』（教育出版、著者：文部科学省。ISBN 978-4-316-30021-4）。必ず購入し、毎時間授業に持参すること。また毎回レジュメを配布する。また必要に応じて、適宜その他の資料プリントも配布する予定。
参考書：高校時代に各自が使っていた「文法書」や「国語便覧」などがあれば好ましい（出版社は問わない）。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	KLJPN2202	開講期	単位数	標準履修年次
294	国語科教育法Ⅱ Methods of Teaching Japanese Ⅱ			後金 4	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 木村 雅則 非常勤講師		

●科目の主題

国語科・古典分野の授業研究

●到達目標

・国語科教員として教育界に貢献できる能力や知識が身についており、自己の力でより一層の向上を図ることができる。
・古典（古文・漢文）を教材として正しく読解する能力を持ち、学習指導案を作成することができる。
・古典（古文・漢文）を教えるために必要な知識や技術が身についており、実際に授業ができる。

●授業内容・授業計画

高等学校の古典を想定し、各時間、担当者を決めて模擬授業を行う。その後、その検討を通して、古典分野の各領域について、授業の実践的研究を行う。

第 1 回　ガイダンス――担当者の決定と授業運営方法など説明
第 2 回　古典の基本的指導法①――古文【講義】
第 3 回　古典の基本的指導法②――漢文【講義】
第 4 回　模擬授業と分野別研究①　古文・随筆 1
第 5 回　模擬授業と分野別研究②　漢文・小話（故事）
第 6 回　模擬授業と分野別研究③　古文・物語 1
第 7 回　模擬授業と分野別研究④　漢文・近体詩
第 8 回　模擬授業と分野別研究⑤　古文・物語 2
第 9 回　模擬授業と分野別研究⑥　漢文・史伝
第 10 回　模擬授業と分野別研究⑦　古文・日記
第 11 回　模擬授業と分野別研究⑧　漢文・思想
第 12 回　模擬授業と分野別研究⑨　古文・和歌
第 13 回　模擬授業と分野別研究⑩　漢文・文章
第 14 回　模擬授業と分野別研究⑪　古文・随筆 2
第 15 回　模擬授業と分野別研究⑫　古文・物語 3

●評価方法

・模擬授業に対して評価する（平常点）。
・また、レポートとして、学習指導案・考査問題を提出させ、それに対して評価する。
・以上の点と検討会での参加状況とを総合的に判断して評価する。期末考査は実施しない。

【評価観点】

1　学習指導要領の理解に基づいた、古典分野の学習指導案が作成できる。
2　教材の内容を正しく理解し、それを授業に展開できる。
3　古典分野の指導法の基礎を理解し、授業経営の基本を習得している。

●受講生へのコメント

・受講者数によって、模擬授業の時間数や内容が変わったりすることも考えられますので、初回の授業で担当者を決定するつもりでいます。初回の欠席がないようにしてください。
・学習指導案については、すでに教育法Ⅰで履修済と考えますので、特に詳細な説明はしませんが、第 2・3 回の授業では授業内容として一応取り上げる予定です。
・国語科の授業の展開方法を実体験することにより、実践力を身に付けてほしいと考えます。また、出席者同士

が意見交換する中で、判断力・思考力・発言力をも身に付けてください。

●参考文献・教材

テキスト：『精選古典B』（古B 306・文部科学省検定済教科書高等学校国語科用・三省堂）

・模擬授業の教材はすべてここから選ぶので、全員購入の上、授業に持参すること。

参考書：『高等学校学習指導要領解説　国語編』（教育出版）←「国語科教育法Ⅰ」でテキストとして指定したもの。他に必要あらば、適宜、授業内で紹介する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	KLJPN2203	開講期	単位数	標準履修年次
295	**国語科教育法Ⅲ** Methods of Teaching Japanese Ⅲ			前金 5	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 木村 雅則 非常勤講師		

●科目の主題

国語科・現代文分野の授業研究

●到達目標

・国語科教員として教育界に貢献できる能力や知識が身についており、自己の力でより一層の向上を図ることができる。

・現代文を教材として正しく読解する能力を持ち、学習指導案を作成することができる。

・現代文を教えるために必要な知識や技術が身についており、実際に授業ができる。

●授業内容・授業計画

国語科・現代文分野（書写と表現は除く）について、各時間担当者を決めて模擬授業を行う。その後、その検討を通して、現代文分野の各領域または指定教材について、授業の実践的研究を行う。

第 1 回　ガイダンス
第 2 回　現代文の基本的な指導法 1【講義】
第 3 回　現代文の基本的な指導法 2【講義】
第 4 回　模擬授業と分野別研究①　小説 1
第 5 回　模擬授業と分野別研究②　随想
第 6 回　模擬授業と分野別研究③　詩・短歌・俳句
第 7 回　模擬授業と分野別研究④　評論 1
第 8 回　模擬授業と分野別研究⑤　小説 2
第 9 回　模擬授業と分野別研究⑥　評論 2
第 10 回　模擬授業と分野別研究⑦　小説 2
第 11 回　模擬授業と分野別研究⑧　評論 3
第 12 回　模擬授業と分野別研究⑨　指定教材：『山月記』
第 13 回　模擬授業と分野別研究⑩　指定教材：《中学校・論理的文章》
第 14 回　模擬授業と分野別研究⑪　指定教材：《中学校・文芸的文章》
第 15 回　まとめ

●評価方法

・模擬授業に対して評価する（平常点）。

・また、レポートとして、学習指導案・考査問題を提出させ、それに対して評価する。

・以上の点と検討会での参加状況とを総合的に判断して評価する。期末考査は実施しない。

【評価観点】

1　学習指導要領の理解に基づいた、現代文分野の学習指導案が作成できる。

2　教材の内容を正しく理解し、それを授業に展開できる。

3　現代文分野の指導法の基礎を理解し、授業経営の基本を習得している。

●受講生へのコメント

・受講者数によって、模擬授業の時間数や内容が変わったりすることも考えられますので、初回の授業で担当者を決定するつもりでいます。初回の欠席がないようにしてください。

・学習指導案についてはすでに教育法ⅠまたはⅡで履修済と判断しますので、詳細な説明まではしない予定です。ただし並行履修が考えられますので、念のため第 2・3 回の授業で概説を講義する予定です。

・教材は、主として高校 1 年生をターゲットとしたものを取り扱いますが、中学校教材や指定教材も含めることで、中等教育全体の学年について包括的に扱うこととします。

●参考文献・教材

テキスト：『精選国語総合』（国総 307・文部科学省検定済教科書高等学校国語科用・三省堂）

・模擬授業①～⑧の教材はすべてここから選ぶので、全員購入の上、授業に持参すること。
・模擬授業⑨～⑪の教材はプリントを配布する予定。
参考書：『高等学校学習指導要領解説　国語編』（教育出版）←「国語科教育法Ⅰ」でテキストとして指定してあるもの。他に必要あらば、適宜、授業内で紹介する。

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	KLSGH2201	開講期	単位数	標準履修年次
296	**社会科・地理歴史科教育法Ⅰ a,b** Methods of Teaching Geography and History Ⅰ a,b			前火 4 ／ 前火 5	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 手取 義宏 非常勤講師		

●科目の主題
社会科・地歴科教育の理論。
●到達目標
中等社会科の歴史をふまえた上で、現在の社会科・地歴科について理解を深める。
社会科・地歴科における教材と教授方法と評価のあり方について理解を深める。
●授業内容・授業計画
中学校社会科における地理的分野と歴史的分野、および高校地歴科の歴史、目標と内容、教授方法と評価など理論的側面を中心に解説と考察を行う。

第 1 回　社会科教育の現状と課題
第 2 回　中等社会科教育の歴史Ⅰ　社会科の成立と初期社会科
第 3 回　中等社会科教育の歴史Ⅱ　社会科の変遷と地歴科の成立
第 4 回　中学校社会科地理的分野の目標と内容
第 5 回　中学校社会科歴史的分野の目標と内容
第 6 回　高校地理の目標と内容
第 7 回　高校歴史の目標と内容
第 8 回　社会科授業の基礎理論Ⅰ　授業における活動とコミュニケーション
第 9 回　社会科授業の基礎理論Ⅱ　授業のプロセスとモデル
第 10 回　教材研究と授業づくりの道筋
第 11 回　社会科における多様な教授方法
第 12 回　社会科における協同学習の組織化
第 13 回　社会科におけるメディア機器の活用
第 14 回　授業と学習の評価の理論
第 15 回　まとめ

●評価方法
出席および振り返りシート（50%）、試験（50%）。
評価観点 1　社会科の歴史について理解している
評価観点 2　現行の社会科・地歴科の目標と内容について理解している
評価観点 3　社会科・地歴科の教授方法について理解している
●受講生へのコメント
特になし。
●参考文献・教材
文部科学省『中学校学習指導要領』、『中学校学習指導要領解説社会編』
文部科学省『高等学校学習指導要領』、『高等学校学習指導要領解説地理歴史編』

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	KLSGH2202	開講期	単位数	標準履修年次
297	**社会科・地理歴史科教育法Ⅱ a,b** Methods of Teaching Geography and History Ⅱ a,b			後水 2 ／ 後金 5	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 中 善則 非常勤講師		

●科目の主題
社会科・地歴科の授業実践

●到達目標
社会科・地歴科授業実践の分析の視点を獲得すること。
授業プランづくりと模擬授業実践を通して、社会科・地歴科授業実践の基礎的な力量を身につけること。
●授業内容・授業計画
前半は主に社会科・地歴科の授業実践を分析し、具体的な授業づくりと実践について理解を深める。
後半はグループ（個人）に分かれて授業プランを作成して模擬授業を行い、それぞれの授業についての討議を行う。（フィールドワークの実践についても考察する予定であるが、受講生の人数によっては、変更する可能性がある）
第 1 回　オリエンテーション（授業プラン作成と模擬授業に向けて）
第 2 回　地理実践に学ぶ
第 3 回　歴史実践に学ぶ
第 4 回　フィールドワーク（地理・野外観察、歴史・野外調査）の実践に学ぶ
第 5 回　フィールドワークの実践
第 6 回　フィールドワークのまとめ
第 7 回　授業プランの作成
第 8 回　模擬授業（1）
第 9 回　模擬授業（2）
第 10 回　模擬授業（3）
第 11 回　模擬授業（4）
第 12 回　模擬授業（5）
第 13 回　模擬授業（6）
第 14 回　模擬授業（7）
第 15 回　模擬授業全体のふり返りと総括（まとめのレポート記入）
●評価方法
出席および毎回の振り返りシート（15%）、授業プランの作成（40%）、模擬授業の実践（30%）、まとめのレポート（15%）
評価観点 1　社会科・地歴科の授業を分析し、多面的に論じることができる。
評価観点 2　社会科・地歴科の授業プラン（フィールドワークを含む）を構成することができる。
評価観点 3　模擬授業を実践し、自らの実践について反省的に考察することができる。
●受講生へのコメント
社会科・地理歴史科教育法 I を履修していることが望ましい。
学習指導要領および解説については、事前に熟読しておいてください。生徒と夢中になって課題に取り組めるような授業づくりを共に考えていきましょう。
●参考文献・教材
参考文献：文部科学省『中学校学習指導要領』、『中学校学習指導要領解説社会編』
文部科学省『高等学校学習指導要領』、『高等学校学習指導要領解説地理歴史編』

掲載№	授業科目名	科目 NO.	KLSCV2201	開講期	単位数	標準履修年次
298	社会科・公民科教育法 I Methods of Teaching Social Studies and Civics I			前木 3	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 岩本 賢治 非常勤講師		

●科目の主題
この講義では、主に中学校科教育の課題について考えていきたい。
●到達目標
戦後社会科教育の政策の変化と実践史への理解を通じて、今日の社会科教育の目標と課題について考察を深める。特に社会科教育の実践例と特徴ある教材を分析することにより、自分が受けてきた社会科教育のイメージにとらわれることなく、社会科教育のあるべき実践の姿について考えられるようになる。
●授業内容・授業計画
講義の前半では、戦後社会科教育の成立から現在に至るまでの社会科教育の歴史を振り返りながら、社会科教育の目標について考える。
後半では、教材研究を行う。現行の教科書の問題点、戦後社会科教科書の記述の変遷、戦後社会科教育実践の分析から、社会科教育実践上の課題について考える。
第 1 回　中学生・高校生の意識状況（大学生の被教育体験を振り返りながら）

第 2 回　戦後社会科教育の歴史①
第 3 回　戦後社会科教育の歴史②
第 4 回　戦後社会科教育の歴史③
第 5 回　戦後社会科教育の歴史④
第 6 回　戦後社会科教育実践の授業分析①
第 7 回　戦後社会科教育実践の授業分析②
第 8 回　戦後社会科教育実践の授業分析③
第 9 回　戦後社会科教育実践の授業分析④
第 10 回　戦後社会科教育実践の授業分析⑤
第 11 回　教科書の研究－日本の社会科教科書の変遷
第 12 回　社会科教材の工夫と活用①
第 13 回　社会科教材の工夫と活用②
第 14 回　社会科教材の工夫と活用③
第 15 回　社会科教材の工夫と活用④

●評価方法

平常点（30%）、定期試験（70%）
評価観点 1　社会科教育の諸理論や意義について理解している
評価観点 2　社会科教育並びに授業をめぐる諸課題について理解している
評価観点 3　社会科教育並びに授業について、自分なりの意見を持っている。

●受講生へのコメント

・この授業は出席を重視するので注意すること。
・授業の中でグループワークを通じて、意見形成、意見表明を求めるので、自分なりの考えを持ち、表現できるよう努めること。

●参考文献・教材

プリント配布
参考書『中学校学習指導要領解説社会編』文部科学省
『高等学校学習指導要領解説公民編』文部科学省

掲載№	授業科目名	科目 NO.	KLSCV2202	開講期	単位数	標準履修年次
299	**社会科・公民科教育法Ⅱ** Methods of Teaching Social Studies and Civics Ⅱ			後木 3	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 岩本 賢治 非常勤講師		

●科目の主題

この講義では、社会科・公民科教育法Ⅰの内容を受ける形で、中学校・高校の社会科・公民科教育の課題について考えていきたい。

●到達目標

暗記中心、教師の一方通行型の説明、という従来の公民（科）の授業のイメージにとらわれることなく、生徒の生きる力や考える力に結びついた中学社会科公民的分野・公民科教育のあり方を考えていく。受講生全員が、1 時間分の中学校・高校の公民科の授業の学習指導案を作成することを目標とする。

●授業内容・授業計画

講義の前半では、中学社会科公民的分野・公民科の授業実践上の工夫についていくつかの実践例を紹介しながら望ましい授業について考えていきたい。後半では、学生による学習指導案の作成と模擬授業の発表や討論を中心に行っていきたい。

第 1 回　中学生・高校生の意識状況（大学生の被教育体験を振り返りながら）
第 2 回　中学社会科公民的分野・高校公民科教育の課題（授業紹介）
第 3 回　公民科の授業実践の工夫と課題①（憲法学習の授業紹介）
第 4 回　公民科の授業実践の工夫と課題②（憲法学習教材の制作と発表 1）
第 5 回　公民科の授業実践の工夫と課題③（憲法学習教材の制作と発表 2）
第 6 回　学習指導案の作成①（学習指導案とは、その書き方など）
第 7 回　学習指導案の作成②（テーマ設定）
第 8 回　学習指導案の作成③（作成作業と添削）

第 9 回　学生による模擬授業の実施①
第 10 回　学生による模擬授業の実施②
第 11 回　学生による模擬授業の実施③
第 12 回　学生による模擬授業の実施④
第 13 回　学生による模擬授業の実施⑤
第 14 回　学生による模擬授業の実施⑥
第 15 回　学生による模擬授業の実施⑦

●評価方法

平常点（45%）、作成・提出した学習指導案と模擬授業（55%）
評価観点 1　公民科の授業における課題について理解している
評価観点 2　個性的な授業プランを構想し、学習指導案を適切に作成できる
評価観点 3　模擬授業において、必要な授業技術が身についている

●受講生へのコメント

・あらかじめ社会科・公民科教育法 I の授業を履修しておくことが望ましい。
・この授業は出席を重視するので注意すること。
・授業の中でグループワークを通じて、意見形成、意見表明を求めるので、自分なりの考えを持ち、表現できるよう努めること。

●参考文献・教材

プリント配布
参考書『中学校学習指導要領解説社会編』文部科学省
『高等学校学習指導要領解説公民編』文部科学省

掲載№	授業科目名	科目 NO.	KLENG2201	開講期	単位数	標準履修年次
300	**外国語科教育法（英語） I** Methods of Teaching English I			前月 3	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 井狩 幸男 教授		

●科目の主題

将来、英語の教師になることを目指す学生を対象に、実際に教壇に立つ際に必要となる英語教育全般に関する知識、並びに、基本的な指導技術を身につけることを目的とする。受講生には、教育に対する情熱は勿論のこと、英語に関する深い洞察力と優れた運用能力が求められる。

●到達目標

主に、次の 2 つのことを目標とする。
(1) 教壇に立ち、指導する際に必要となる基本的な英語力を養う。
(2) 英語教育に関わる様々な問題を深く考察する態度を身につける。

●授業内容・授業計画

テキストを中心に英語教育の理論面を扱い、実践的な指導力の基礎固めに主眼を置く。

第 1 回　英語教育入門 (1)
第 2 回　英語教育入門 (2)
第 3 回　英語教育の目的・英語の指導目標
第 4 回　英語教育の環境的要因・学習者の要因
第 5 回　教師の役割とよい教師の条件、言語習得の理論上の諸問題
第 6 回　発音の指導、文字と綴りの指導
第 7 回　語彙の指導、文法の指導
第 8 回　リスニングの指導、スピーキングの指導
第 9 回　リーディングの指導、ライティングの指導
第 10 回　オーラル・コミュニケーションの指導、英語指導の原理
第 11 回　教材研究と授業の準備、授業案の作成と授業の進め方
第 12 回　テストと評価、教育機器の活用
第 13 回　ネイティブスピーカーの活用、教育実習に向けて
第 14 回　英語教師の心得
第 15 回　まとめ

●評価方法
出席、課題、レポートを基に、総合的に評価する。
評価観点 1　授業に臨む姿勢
評価観点 2　欠席・遅刻の有無
評価観点 3　課題に対する取組
●受講生へのコメント
教職科目であることを勘案し、出席状況及び授業態度の悪い者は、単位を認定しないこともある。
●参考文献・教材
『新編英語科教育法入門』 土屋澄男 編著　研究社出版
『バイリンガリズム入門』 山本雅代 編著　大修館書店

掲載№	授業科目名	科目 NO.	KLENG2202	開講期	単位数	標準履修年次
301	外国語科教育法（英語）Ⅱ Methods of Teaching English Ⅱ			前月 4	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 西本 有逸 非常勤講師		

●科目の主題
1 英語教師に必要な知識や理論を習得する。
2 理論と実践を結びつけ、語彙・文法・聞く・話す・読む・書くなどの指導法について考える。
3 指導目標、指導内容、指導計画、活動や評価を盛り込んだ指導案を作成し、お互いに検討しあう。
4 模擬授業を行い、お互いに批評しあう。
●到達目標
1 中学校・高等学校における英語科教育について、理論と指導法を習得する。
2 教育実習に備えてマイクロティーチングを行い、実践力をつける。
3 指導案（細案）が作成できる。理論と実践を結びつけ、中学校および高校の英語科教育について考える。
●授業内容・授業計画
以下の授業計画について、講義・演習・実習・発表・討論を行う。
第 1 回　自分が受けてきた英語科教育の振り返り
第 2 回　理想的な英語科の授業とは
第 3 回　コミュニケーションとは
第 4 回　中学校編（1）：導入・語彙指導
第 5 回　中学校編（2）：教科書本文の指導
第 6 回　中学校編（3）：内在化を促す指導
第 7 回　中学校編（4）：コミュニケーション活動
第 8 回　模擬授業：中学校（1）
第 9 回　模擬授業：中学校（2）
第 10 回　模擬授業：中学校（3）
第 11 回　高校編（1）：プリントの作成
第 12 回　高校編（2）：四技能の扱い・統合
第 13 回　高校編（3）：音読指導
第 14 回　模擬授業：高校（1）
第 15 回　模擬授業：高校（2）
●評価方法
・学外での英語教育に関する学会・研究会・セミナー等への出席とレポートを義務づける。
・レポート（3 本）の質と課題発表と授業への参加度等を総合して評価する。
評価観点 1　英語科教育法の理論を理解している
評価観点 2　中学校英語の学習指導案を作成し、それに基づいて授業ができる
評価観点 3　高校英語の学習指導案を作成し、それに基づいて授業ができる
●受講生へのコメント
・教職科目であるゆえ、真摯な受講態度と積極的な授業参加を要求する。
・出席を重視する。2 回を越えて欠席した場合、単位を認定しない。
・遅刻 3 回で欠席 1 回とみなす。
●参考文献・教材
・基本的にはプリントを配布する。

・参考文献や良書等については授業中に指示する。
・参考書…『改訂版英語教育用語辞典』（白畑智彦ほか著　大修館書店）
　　『新学習指導要領にもとづく英語科教育法』（望月昭彦ほか著　大修館書店）

掲載№	授業科目名	科目 NO.	KLENG2203	開講期	単位数	標準履修年次
302	**外国語科教育法（英語）Ⅲ** Methods of Teaching English Ⅲ			後月 4	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 西本 有逸 非常勤講師		

●科目の主題
1 英語科のテスト作成に必要な知識や理論を習得する。
2 理論と実践を結びつけ、中学校と高校のテストを作成する。

●到達目標
1 中学校と高校における英語科のテスト作成について、理論を習得する。
2 理論と実践を結びつけ、中学校と高校のテストを作成する。

●授業内容・授業計画
以下の授業計画について、講義・演習・実習・発表・討論を行う。
第 1 回　自分が受けてきた英語テストの振り返り
第 2 回　英語学力評価の基本認識
第 3 回　音声テスト
第 4 回　文法テスト
第 5 回　語彙テスト
第 6 回　機能に関するテスト
第 7 回　コミュニケーション方略に関するテスト
第 8 回　リスニングテスト
第 9 回　スピーキングテスト
第 10 回　リーディングテスト
第 11 回　ライティングテスト
第 12 回　ディクテーション
第 13 回　クローズテスト
第 14 回　面接テスト
第 15 回　まとめ

●評価方法
・学外での英語教育に関する学会・研究会・セミナー等への出席とレポートを義務づける。
・レポート（2 本）の質と課題発表と授業への参加度等を総合して評価する。評価観点 1　英語科教育法の理論と実践を理解している
評価観点 2　中学校英語のテストが作成できる
評価観点 3　高校英語のテストが作成できる

●受講生へのコメント
・教職科目であるゆえ、真摯な受講態度と積極的な授業参加を要求する。
・出席を重視する。2 回を越えて欠席した場合、単位を認定しない。
・遅刻 3 回で欠席 1 回とみなす。

●参考文献・教材
・以下の文献を教科書として毎時間使用するので各自必ず購入しておくこと。『これからの英語学力評価のあり方ー英語教師支援のために』
（田中正道　監修　教育出版　ISBN: 431680166x）・その他参考文献や良書等については授業中に指示する。

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	KLGER2203	開講期	単位数	標準履修年次
303	**外国語科教育法（独語）Ⅲ** Methods of Teaching Foreign Languages（Germany）Ⅲ			前木 3	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 神竹 道士 教授		

●科目の主題

外国語科教育法（独語）Ⅰ・Ⅱでは、主に理論的な視点からドイツ語教育を捉えてきたが、外国語科教育法（独語）Ⅲでは実践的な視点から、主に大学におけるドイツ語教育について議論する。

●到達目標

受講者には、本学で行われているドイツ語共通教育の実際の授業を何度か参観してもらい、ドイツ語教育の現場が如何なるものか体験してもらう。その上で、大学におけるドイツ語教育の抱える問題点についての認識を深めてもらうことが、本講義の主たる目標である。

●授業内容・授業計画

本講義の授業内容と授業計画は、以下の通りである。

第 1 回　ドイツ語教育の歴史
第 2 回　ドイツ語教育の理念
第 3 回　ドイツ語教育の課題
第 4 回　ドイツ語学習の目的
第 5 回　ドイツ語学習の課題
第 6 回　ドイツ語教授法（初年次教育）
第 7 回　ドイツ語教授法（専門教育）
第 8 回　教材研究（初年次教育）
第 9 回　教材研究（専門教育）
第 10 回　教具の利用法と教室の適正規模
第 11 回　評価方法と評価の適正性
第 12 回　授業参観（1）
第 13 回　授業参観（2）
第 14 回　授業参観（3）
第 15 回　まとめ

●評価方法

平常点とレポートによって総合的に評価する。
評価観点 1　ドイツ語教育の理念と課題に関して認識する
評価観点 2　教授法に関して十分な知識を有する
評価観点 3　実際の授業を客観的・批判的に評価する

●受講生へのコメント

特になし。

●参考文献・教材

適宜、プリントを配布する。

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	KLFRN2202	開講期	単位数	標準履修年次
304	**外国語科教育法（仏語）Ⅱ** Methods of Teaching French Ⅱ			前月 4	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 福島 祥行 教授		

●科目の主題

フランス語で書かれた外国語教育にかんする書物や論文を精読することで、フランス語教育に必要な基礎知識とフランス語力を身につける。

●到達目標

中等教育におけるフランス語教育のありかたを思弁し、どうじにフランス語教員としての仏語運用能力を涵養する。

●授業内容・授業計画

今年度は CEFR を精読する。

第 1 回　イントロダクション（CEFR とはなにか）
第 2 回　受講生による発表①
第 3 回　受講生による発表②
第 4 回　受講生による発表③
第 5 回　受講生による発表④
第 6 回　受講生による発表⑤
第 7 回　受講生による発表⑥
第 8 回　受講生による発表⑦
第 9 回　受講生による発表⑧
第 10 回　受講生による発表⑨
第 11 回　受講生による発表⑩
第 12 回　受講生による発表⑪
第 13 回　受講生による発表⑫
第 14 回　受講生による発表⑬
第 15 回　ふりかえりとまとめ

●評価方法

ポートフォリオと自己評価。評価観点①　フランス語教育の方法論とその思想を理解している。
評価観点②　フランス語による言語学習の術語を理解している。
評価観点③　言語教育についてフランス語で発信できる。

●受講生へのコメント

外国語教育において、方法論の選択は皮相な問題にすぎない。そもそも言語をおしえるとはどういうことなのかについて対話し、知識を創発されたい。

●参考文献・教材

授業中に指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	KLFRN2204	開講期	単位数	標準履修年次
305	**外国語科教育法（仏語）Ⅳ** Methods of Teaching French IV			後火 3	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 福島 祥行 教授		

●科目の主題

外国語教育のありかたを論じつつ、中等教育におけるフランス語教育の理論と実践、外国語学習のありかたについて、具体的に考察する。

●到達目標

中等教育におけるフランス語教育のありかたと、そもそも言語を教えるとはいかなることかについて思弁し実践する力を涵養する。

●授業内容・授業計画

外国語学習の思想について受講生とともにかんがえながら、中等教育における外国語教育と言語学習について、具体的実践のありかたを考察する。

第 1 回　外国語学習とはなにか
第 2 回　外国語教育と言語学習
第 3 回　言語学習をささえる思想
第 4 回　中等教育における外国語学習
第 5 回　中学校における外国語科指導要領
第 6 回　フランス語教育と外国語学習
第 7 回　協働学習とはなにか
第 8 回　ポートフォリオとはなにか
第 9 回　自律学習とはなにか
第 10 回　教案作成 1
第 11 回　教案作成 2
第 12 回　教案実践 1
第 13 回　教案実践 2
第 14 回　その他の話題
第 15 回　ふりかえりとまとめ

●評価方法
ポートフォリオと自己評価。
■評価観点
①学習指導要領の外国語科の項目とその意味について理解している。
②外国語科教育の方法論とその思想を理解している。
③言語教育とはなにかについて深くかんがえている。
●受講生へのコメント
外国語教育において、方法論の選択は皮相な問題にすぎない。そもそも言語をおしえるとはどういうことなのかについて深く思弁されたい。
●参考文献・教材
リチャーズ&ロジャーズ『アプローチ&メソッド　世界の言語教授・指導法』東京書籍
中村啓佑、長谷川富子『フランス語をどのように教えるか』(駿河台出版社)
ジョンソン&ジョンソン『外国語教育学大事典』(大修館書店)
中村洋一『テストで言語能力は測れるか』(桐原書店)
小池他編『応用言語学事典』(研究社)

掲載№	授業科目名	科目 NO.	KLCHN2201	開講期	単位数	標準履修年次
306	外国語科教育法（中国語） Ⅰ Methods of Teaching Chinese Ⅰ			前集中	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 岩本 真理 教授		

●科目の主題
中国語教育の現状と歴史的経緯への理解を深める。高校における中国語教育の達成目標に基づいて授業計画を立てる。
●到達目標
『高等学校の中国語、韓国語学習のめやす』に基づき、年間計画、月間計画、週間計画を作成したうえで、模擬授業を実施する。受講者同士で相互評価を行い、それぞれの課題を共有する。
●授業内容・授業計画
前半で概説をおこない、後半は授業計画の作成と発表、模擬授業の実施に重点を置く。
第 1 回　中国語教育の『現状
第 2 回　中国語教育の歴史
第 3 回　現行テキストの検討 1
第 4 回　現行テキストの検討 2
第 5 回　言語習得とは
第 6 回　発音教育の課題 1
第 7 回　発音教育の課題 2
第 8 回　初級段階文法事項の課題 1
第 9 回　初級段階文法事項の課題 2
第 10 回　授業計画の作成 1
第 11 回　授業計画の作成 2
第 12 回　模擬授業 1
第 13 回　模擬授業 2
第 14 回　相互評価
第 15 回　まとめ
●評価方法
授業中の発表とレポートによる。
評価観点 1　中国語教育の歴史を理解している
評価観点 2　中国語による授業遂行を行うに十分な学力を備えている
評価観点 3　到達目標を明確にして、授業計画を作成できる
●受講生へのコメント
到達目標を示したうえで、学習者の積極的参加を促し、授業を展開してほしい。自らの語学力を日々点検して向上させるための方法を日常的に模索しよう。
●参考文献・教材
参考文献　マイケル・バイラム『相互文化的能力を育む外国語教育―グローバル時代の市民性形成をめざして』

大修館書店

掲載№	授業科目名	科目 NO.	KLCHN2202	開講期	単位数	標準履修年次
307	**外国語科教育法（中国語）Ⅱ** Methods of Teaching Chinese Ⅱ			後集中	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 岩本 真理 教授		

●科目の主題

授業をどのように組み立て学習者の発信力を高めるのか、この目標達成のためにグループに分かれて教材の作成を行う。

●到達目標

初級段階を終えた学習者に対する授業計画の作成、適切な質と練習量を備えた教材の作成、多元的な評価方法の模索。

●授業内容・授業計画

教科書の作成のために、まず必要な事項を整理する。その後、評価方法の多様性について概説したのち、具体的な教材の作成作業に入る。

第 1 回　教科書を教えるのか、教科書で教えるのか。
第 2 回　中級段階の『課題 1
第 3 回　中級段階の課題 2
第 4 回　評価方法についての検討 1
第 5 回　評価方法についての検討 2
第 6 回　授業活性化のためのアイデア 1
第 7 回　授業活性化のためのアイデア 2
第 8 回　教材作成 1
第 9 回　教材作成 2
第 10 回　教材作成 3
第 11 回　教材作成 4
第 12 回　模擬授業 1
第 13 回　模擬授業 2
第 14 回　相互評価
第 15 回　まとめ

●評価方法

授業中の発表とレポートによる
評価観点 1　教材作成のための必須事項を理解している
評価観点 2　中国語の運用能力を十分備えている
評価観点 3　学力評価のための基準を理解している

●受講生へのコメント

教材を作成するための事前準備に十分時間をかけてほしい。

●参考文献・教材

胡玉華『中国語教育とコミュニケーション能力の育成』東方書店
野口裕之　大隅敦子『テスティングの基礎理論』研究社

掲載№	授業科目名	科目 NO.	KLPED2204	開講期	単位数	標準履修年次
308	**教育方法論 a** Methods of Education a			後水 2	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 藤原 靖浩 特任講師		

●科目の主題

教育方法の理論と実践を理解する。

●到達目標

学校教育現場では、社会の変化に合わせた新たな教育的ニーズが生まれている。本講義を通して、教育方法の理論的な理解を深めると共に、教育方法論を応用した実践的な教育方法を提案するための基礎を培う。

●授業内容・授業計画

教育方法を学ぶために不可欠だと考えられる教育方法の基本的な理論、子どもの学び、発達の過程、授業で求められるスキル、メディアの利用法等を理論的に把握し、教育方法論の諸問題を概説する。また、子どもの自主性や自治能力を育成する総合学習や特別活動の具体的な指導法にも触れる。

第 1 回　ガイダンス：教育方法論の基礎理解
第 2 回　子どもの学びの特徴と発達
第 3 回　教育方法の理論と歴史（1）－普遍的な教育方法、教授学の歴史－
第 4 回　教育方法の理論と歴史（2）－近代学校の教育方法、教育の現代化－
第 5 回　体験を通して学ぶことの意味（1）－特別活動を中心に－
第 6 回　体験を通して学ぶことの意味（2）－総合学習を中心に－
第 7 回　新たな教育方法の展開
第 8 回　学校における情報機器の活用と指導技術
第 9 回　教育における評価と指導
第 10 回　教育方法の実践（1）
第 11 回　教育方法の実践（2）
第 12 回　教育方法の実践（3）
第 13 回　教育方法の実践（4）
第 14 回　教育方法の実践（5）
第 15 回　まとめ－これからの教育－

●評価方法

出席、授業内に提出する小レポート、試験の結果を総合的に評価します。
評価観点 1　　教育方法の基礎的な理論を理解している。
評価観点 2　　教育方法の実際と諸問題についての理解を深めている。
評価観点 3　　教育方法の実践的な技術と手法について理解している。

●受講生へのコメント

大学の講義は座学が多く、実践的な形式での講義が少ないという意見を聞きます。また、教育実習に望む学生の中には、実際に教壇にたつ経験のないまま、実習を迎えることに不安を抱えている人もいるでしょう。本講義の後半では、模擬授業などを通して、実際の教育方法を体験してもらいます。また、自分が今まで受けてきた学校の授業を思い出して、お互いに意見を交わしたり、実際の事例を通して学びを深めたいと思っています。教員採用試験の内容にも触れた講義内容を目指していますので、ぜひ意欲的に講義に取り組んで欲しいと思います。

●参考文献・教材

適宜、資料を配布します。
平沢茂『教育の方法と技術』学文社、2006 年。（編著書）
佐藤学『教育の方法』放送大学叢書、2010 年。
佐藤真『体験学習・体験活動の効果的な進め方』教育開発研究所（編著書）、2007 年。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	KLPED2204	開講期	単位数	標準履修年次
309	教育方法論 b Methods of Education b			前集中	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 宮橋 小百合 非常勤講師		

●科目の主題

子どもたちの生きる現実を読みひらき、その現実を切り拓いていく教育実践をつくりだす教育方法の理論的・実践的な認識を深めていくことを主たる目的とする。

●到達目標

戦後日本の学校教育においてどのような方法論が蓄積されてきたのかを再発見できる。
そのような再発見をもとに、今後の教育現場にそくした新たな教育方法を見出すための基盤を培う。

●授業内容・授業計画

戦後日本の教育を現場から牽引してきた教師たちが、たどってきたあゆみを確認することで、戦後から問題とされてきたことが、現在から見てどのような意味をもつのか、あるいは現在においてそれらの問題はどのように扱われているのかを、教育方法に着目しながら考えていけるようにしたい。

第 1 回　オリエンテーション・教育方法とは何か

第 2 回　戦後における教育実践のあゆみ
第 3 回　無着成恭と生活綴り方
第 4 回　糸賀一雄と障害児教育
第 5 回　大村はまと国語単元学習
第 6 回　東井義雄と「村を育てる学力」
第 7 回　斎藤喜博と授業の創造
第 8 回　大西忠治と生活指導
第 9 回　遠山啓と水道方式
第 10 回　庄司和晃と仮説実験授業
第 11 回　岸本裕史と学力の基礎
第 12 回　向山洋一と教育技術法則化運動
第 13 回　金森俊郎といのちの学習
第 14 回　現代における教育方法と授業づくり
第 15 回　総まとめ

●評価方法

出席 40%、ワークシート 15%、ミニテストと宿題 30%、発表等授業参加度 15%の総合評価。
評価観点 1　教育の方法を支えている理論的・実践的な背景を理解している
評価観点 2　教育の技術を的確に行うための基本的事項を理解している
評価観点 3　情報機器および教材の活用に関する基本的事項を理解している

●受講生へのコメント

1. 話し合いや意見の交換などを重視した授業を行いますので、積極的に参加してください。
2. 出席を重視していますので、毎時間出席してください。
3. 集中講義中は、宿題を課しますので授業後に宿題ができるよう時間的余裕の確保に努めてください。

●参考文献・教材

＜参考文献＞
田中耕治編著『時代を拓いた教師たち一戦後教育実践からのメッセージ』日本標準、2005 年。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	KLPED2204	開講期	単位数	標準履修年次
310	**教育方法論 c** Methods of Education			後火 5	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 福田 敦志 非常勤講師		

●科目の主題

子どもたちの生きる現実を読みひらき、その現実を切り拓いていく教育実践をつくりだす教育方法の理論的・実践的な認識を深めていく。

●到達目標

近代教育思想及び教育方法の遺産を総括し、その批判的継承の筋道を探ることを通して、今日における教育方法の課題を理解する。

上記の成果をふまえながら、子どもたちの生きる現実を切り拓こうとしている先駆的な実践記録を共同で分析し合うことを通して、教育方法に関する認識を深める。

●授業内容・授業計画

教育の方法・技術に結晶している近代教育思想及び教育方法の遺産の批判的検討を行いつつ、先駆的な実践記録をテクストにして共同で分析し合いながら、教育方法・技術に関する理論的・実践的な認識を深めていく。

第 1 回　教育方法とは何か
第 2 回　教育実践における子ども観の問題①
第 3 回　教育実践における子ども観の問題②
第 4 回　授業とその指導技術の問題史的考察①
第 5 回　授業とその指導技術の問題史的考察②
第 6 回　授業とその指導技術の問題史的考察③
第 7 回　生活指導とその指導技術の問題史的考察①
第 8 回　生活指導とその指導技術の問題史的考察②
第 9 回　生活指導とその指導技術の問題史的考察③

第 10 回　情報機器の活用とその指導技術
第 11 回　メディア・リテラシーの形成とその指導技術
第 12 回　学校づくりの思想とその技術①
第 13 回　学校づくりの思想とその技術②
第 14 回　応答関係の構築に関する教育方法学的考察
第 15 回　総括

●評価方法
出席（20%）、ミニレポート（20%）、試験（60%）の総合評価
評価観点 1　教育の方法を支えている理論的・実践的な背景を理解している
評価観点 2　教育の技術を的確に行うための基本的事項を理解している
評価観点 3　情報機器および教材の活用に関する基本的事項を理解している

●受講生へのコメント
討論のある授業を共に創り出していきたいので、ご協力をお願いしたい。

●参考文献・教材
＜テキスト＞
適宜、資料を配布する。
＜参考文献＞
岩垣攝他著『教室で教えるということ』八千代出版、2010 年。
子安潤『反・教育入門』白澤社、2006 年。
山本敏郎・福田敦志他著『新しい時代の生活指導』有斐閣、2014 年。
日本教育方法学会編『教育方法学研究ハンドブック』学文社、2014 年。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	KLPED2205	開講期	単位数	標準履修年次
311	教育課程論 a,b Theory and Practice in Curriculum a,b			前木 2 ／ 後月 5	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 島田 希 准教授		

●科目の主題
教育課程（カリキュラム）およびその編成をめぐる今日的課題について、多面的に考察できるようになることを目指す。そのために、可能な限り事例を紹介し、実践に即しつつ、具体的に考える機会を提供する。

●到達目標
①教育課程の意義や編成の方法について理解する。
②教育課程編成をめぐる変遷や今日的動向について理解する。
③上記①②をふまえた上で、教育課程編成をめぐる今日的動向に関して考察を深める。

●授業内容・授業計画
教育課程の意義や編成の方法、さらには、教育課程編成をめぐる変遷や今日的動向について、以下のテーマを中心に考察を深めていく。
第 1 回　オリエンテーション
第 2 回　教育課程（カリキュラム）とは
第 3 回　教育課程編成の原理
第 4 回　教育課程編成の主体・方法・手順
第 5 回　戦後教育における学力観の変遷と教育課程編成①
第 6 回　戦後教育における学力観の変遷と教育課程編成②
第 7 回　異校園種連携によるカリキュラム開発
第 8 回　キャリア教育のカリキュラム
第 9 回　情報モラルを育むカリキュラム
第 10 回　総合的な学習の時間のカリキュラム
第 11 回　新たな教育課程の開発を目指す先導的な取り組み
第 12 回　教育課程（カリキュラム）評価
第 13 回　教育課程編成（カリキュラム開発）と学校づくり
第 14 回　教育課程編成（カリキュラム開発）に求められる教師の専門性
第 15 回　全体のまとめ

●評価方法
各回における小レポート（30%）と期末試験（70%）により、総合評価する。
【評価の観点】
①教育課程の意義について理解している。
②教育課程編成の方法について理解している。
③教育課程編成をめぐる変遷や今日的動向について理解している。
●受講生へのコメント
本科目では、講義に加えて、グループでのディスカッション等の機会も設ける。それらへの積極的な参加を求める。加えて、本科目で扱う内容に関わる参考文献・資料等を授業中に紹介するので、積極的にそれらにふれて、教育課程編成をめぐる今日的課題に関する考察を各自で深めてほしい。
●参考文献・教材
授業中に適宜資料を配付する。教材については授業中に指示する。
そのほか、以下を参考文献とする。
・古川治・矢野裕俊・前迫孝憲編著（2015）『教職をめざす人のための教育課程論』北大路書房 .
・田中博之（2013）『カリキュラム編成論－子どもの総合学力を育てる学校づくり－』放送大学教育振興会 .

掲載№	授業科目名	科目 NO.	KLPED2205	開講期	単位数	標準履修年次
312	教育課程論 c Theory and Practice in Curriculum b			前集中	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 廣瀬 真琴非常勤講師		

●科目の主題
教育課程と授業のデザイン入門。
●到達目標
カリキュラム開発や授業デザインに関する諸原理や方法論を理解し、それを担う主体としての力量を形成する。
●授業内容・授業計画
学習指導要領の変遷やカリキュラム開発の事例を見ていくことで、わが国の教育をとりまく歴史および教育課程編成の原理をつかむ。教科及び諸領域のカリキュラム開発や授業づくりの基礎を習得する。
第 1 回　オリエンテーション＋カリキュラムとは何か
第 2 回　カリキュラムに関する諸概念の整理
第 3 回　カリキュラムの編成原理の類型と具体
第 4 回　学習指導要領の変遷
第 5 回　現行学習指導要領の特質
第 6 回　教科のカリキュラム開発と授業デザイン
第 7 回　特別活動のカリキュラム開発と活動のデザイン
第 8 回　総合的な学習の時間のカリキュラム開発と授業デザイン
第 9 回　学校を基盤としたカリキュラム開発の特徴
第 10 回　カリキュラム開発や授業実践に関する教師の力量
第 11 回　特色あるカリキュラムの事例整理
第 12 回　特色あるカリキュラムの事例分析
第 13 回　カリキュラムの構想
第 14 回　カリキュラムの構想報告会
第 15 回　総括

●評価方法
評価は、平常点、試験を総合して行う。3 分の 1 以上の欠席は、単位修得を認めない。
評価観点 1　教育課程（カリキュラム）の意義を理解する
評価観点 2　学習指導要領をその歴史的変遷のなかに位置づけて、特徴づける
評価観点 3　教育課程の編成（カリキュラム開発）および授業づくりの方法を理解する
●受講生へのコメント
基本的には講義形式で進めますが、グループワークやグループディスカッションも取り入れ、受講生の積極的な参加を期待しています。
●参考文献・教材
毎回の授業中に提示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	KLPED2206	開講期	単位数	標準履修年次
313	**特別活動論 a** Problems on Extra Curriculum Activities a			後火 4	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 福田 敦志 非常勤講師		

●科目の主題

特別活動の歴史的変遷をその時々の社会的背景や教育政策との関連をふまえつつ問題史的に考察し、今日的課題を明らかにしていく。

学級活動や生徒会活動、学校行事における具体的指導の在り様について、先駆的な実践記録等を共同で分析し合うことを通して、特別活動の指導原理について理論的・実践的な認識を深めていく。

●到達目標

特別活動の歴史的変遷の意味を理解するとともに、今日的な課題を把握する。

学級活動や生徒会活動、学校行事といった具体的な特別活動の指導原理について理論的・実践的な認識を深める。

●授業内容・授業計画

特別活動の歴史的変遷の意味をその時々の社会的背景や教育政策との関連をふまえつつ問題史的に考察していくとともに、先駆的な実践記録等を共同で分析し合うことを通して、特別活動の指導原理について理論的・実践的な認識を深めていく。

第 1 回　教育課程における特別活動の位置と意味
第 2 回　戦後教育実践における特別活動の問題史的考察①
第 3 回　戦後教育実践における特別活動の問題史的考察②
第 4 回　戦後教育実践における特別活動の問題史的考察③
第 5 回　特別活動の指導原理―子どもの発達と活動のもつ意味①
第 6 回　特別活動の指導原理―子どもの発達と活動のもつ意味②
第 7 回　特別活動の指導原理―「交わり」と「自治」を育てる①
第 8 回　特別活動の指導原理―「交わり」と「自治」を育てる②
第 9 回　特別活動の指導原理―子どもの参加を生み出す①
第 10 回　特別活動の指導原理―子どもの参加を生み出す②
第 11 回　特別活動の指導原理―「自前の文化」をつくりだす①
第 12 回　特別活動の指導原理―「自前の文化」をつくりだす②
第 13 回　教室文化をつくりだす学級活動の指導
第 14 回　子どもとともにつくる生徒会活動・学校行事の指導
第 15 回　総括

●評価方法

出席（10%）、ミニレポート（10%）、試験（80%）の総合評価
評価観点 1：特別活動の歴史的変遷の意味と今日的課題を理解している。
評価観点 2：特別活動の指導原理を理解している。
評価観点 3：特別活動を具体的に構想するための基本的視点を理解している。

●受講生へのコメント

討論のある授業を共に創りだしていきたいので、ご協力をお願いしたい。

●参考文献・教材

＜テキスト＞
適宜、資料を配布する。
＜参考文献＞
高田清・諸岡康哉編著『特別活動の基礎と展開』コレール社、1999 年。
文部科学省『中学校学習指導要領』2008 年。
文部科学省『高等学校学習指導要領』2009 年。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	KLPED2206	開講期	単位数	標準履修年次
314	特別活動論 b Problems on Extra Curriculum Activities b			前水 2	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 藤原 靖浩 特任講師		

●科目の主題

特別活動の教育課程上の位置づけ、意義、生徒指導との関連などについて学び、特別活動の今日的課題を明らかにする。また、特別活動の内容（学級活動・ホームルーム活動、生徒会活動、学校行事、関連する活動としての部活動）について、理論だけでなく実践的な指導力を身に付ける。

●到達目標

特別活動の意義、生徒指導との関連などについて、その意味を理解すると共に、特別活動の今日的な課題を把握する。特別活動の内容（学級活動・ホームルーム活動、生徒会活動、学校行事、関連する活動としての部活動）について実践的な指導力を身に付ける。

●授業内容・授業計画

特別活動の意義、生徒指導との関連について学び、適宜、映像や資料を用いて先行実践、文部科学省の資料等を取り上げながら、特別活動の内容を踏まえた実践的な指導力を養成する。

第 1 回　ガイダンス－教育課程における特別活動の位置づけ－
第 2 回　特別活動の概念とその内容
第 3 回　特別活動における「集団」の意味
第 4 回　特別活動の特徴とその意義
第 5 回　教科教育と特別活動
第 6 回　特別活動と総合的な学習の時間
第 7 回　特別活動が育む資質・能力とその評価
第 8 回　特別活動における話合い活動の現状と今日的課題
第 9 回　特別活動における保護者・地域の役割
第 10 回　特別活動と生徒指導
第 11 回　小学校における特別活動の実践
第 12 回　中学校における特別活動の実践
第 13 回　高等学校における特別活動の実践
第 14 回　これからの特別活動のあり方について
第 15 回　まとめ

●評価方法

出席、授業内に提出する小レポート、試験の結果を総合的に評価します。
評価観点 1　特別活動の今日的課題を理解している。
評価観点 2　特別活動の特徴と意義を理解している。
評価観点 3　特別活動の実践的展開に必要な基本を理解している。

●受講生へのコメント

「特別活動」という言葉を聞いたことがある学生は意外と少ないのではないでしょうか？「特別活動って何？」という素朴な疑問から特別活動の実践に関わることまで、幅広く講義の中で取り上げていきます。一方的な講義だけでなく、グループワークや討論のある授業を行いますが、この講義ではグループづくりの段階から学生の皆さんに体験してもらえる講義を目指しています。実践で使えるテクニックなども伝えていきたいと思っているので、ぜひ積極的に講義に参加して、楽しんでください。

●参考文献・教材

＜テキスト＞
佐々木正昭編著『入門　特別活動』学事出版、2014 年。
その他、適宜、必要な資料を配布します。
＜参考文献＞
文部科学省『中学校学習指導要領』2007 年。
文部科学省『高等学校学習指導要領』2007 年。
文部科学省『生徒指導提要』2010 年。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	KLPED2206	開講期	単位数	標準履修年次
315	**特別活動論 c** Problems on Extra Curriculum Activities c			前火 3	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 添田 晴雄 准教授		

●科目の主題

教員にとって必要な、特別活動に関わる知識・技能・態度を身につける

●到達目標

教育課程における特別活動の位置づけ、特別活動の特徴と意義、特別活動の内容（学級活動・ホームルーム活動、生徒会活動、学校行事、関連する活動として部活動）、道徳、総合的な学習の時間、生徒指導との関連について知り、それに基づき、特別活動の実践的指導について考えることができる。

●授業内容・授業計画

原則として毎回課題を出します。必ず次回授業時までに準備をしてください。授業ではそれを前提にして活動を展開します。毎回の授業開始時に課題に関するレポートを書いてもらいます。また、小グループに分かれての班別課題も出しますので、授業時間以外に班ごとに学習する場面もあります。なお、第 1 回目はオリエンテーションですので、準備の必要はありません。

第 1 回　オリエンテーション、「特別活動」を大づかみにする
第 2 回　特別活動の基礎・基本
第 3 回　特別活動の目標・特質・方法原理、自己を生かす能力
第 4 回　望ましい集団活動と人間関係
第 5 回　学習指導案の書き方
第 6 回　学習指導案づくり（1）
第 7 回　学習指導案づくり（2）
第 8 回　新しい学習指導要領の基本理念と特別活動
第 9 回　全国学力学習状況調査と特別活動
第 10 回　学級活動の目標と指導
第 11 回　学校行事指導の事例研究
第 12 回　いじめ問題の基礎
第 13 回　いじめをなくす生徒会活動
第 14 回　道徳・総合的な学習の時間・教科と特別活動
第 15 回　まとめ

●評価方法

毎回の課題、レポート
評価観点 1　特別活動の今日的課題を理解している。
評価観点 2　特別活動の特徴と意義を理解している。
評価観点 3　特別活動の実践的展開に必要な基本を理解している。

●受講生へのコメント

この授業専用のＡ 4 判のノートを各自用意してください。ルーズリーフではなく、予めページが綴じてあるもの（つまり普通のノート）です。安いもの、薄いものでかまいません。

●参考文献・教材

文部科学省『中学校学習指導要領解説　特別活動編』平成 20（2008）年
日本特別活動学会監修『小学校・中学校・高等学校学習指導要領対応　新訂　キーワードで拓く新しい特別活動』東洋館出版社、平成 22（2010）年

掲載№	授業科目名	科目 NO.	KLPED2207	開講期	単位数	標準履修年次
316	**道徳教育の研究 a,b** Studies of Moral Education a,b			前金 2 ／ 前金 3	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 高松 みどり 非常勤講師		

●科目の主題

本講義では、「道徳とは何か」、また「道徳を教えるということはどういうことか」、さらには「学校で道徳を教えることが可能か」について考える。また、これまでの道徳教育について知識を得ることで、今後の日本に必要な道徳

教育がどのようなものであるかについて考察する。

●到達目標

①毎回、特定のテーマについてコメントを書くなかで、自分の意見を論理だてて主張することができる。
②グループディスカッションの際に、論拠を示した上で、自分の意見を主張することができる。
③授業内レポートという形で、自分の意見を論理だてて主張することができる。

●授業内容・授業計画

本講義では、デューイの「慣習的道徳」及び「反省的道徳」というキーワードを軸とし、今後の道徳の授業のあり方・授業方法について考察する。

第 1 回　導入：本講義について
第 2 回　道徳とは。日常生活に潜むカント・ベンサムの道徳哲学
第 3 回　第一章「道徳教育は必要か」 希望者による章内容の発表①
第 4 回　第三章「道徳教育の歴史」 希望者による章内容の発表②
第 5 回　第九章「応用倫理―生命・環境―」 希望者による章内容の発表③
第 6 回　別文献 「いのちをどう教えるか」 希望者による章内容の発表④
第 7 回　映画 「ブタのいた教室」に見られるいのちの授業①鑑賞
第 8 回　映画 「ブタのいた教室」に見られるいのちの授業②鑑賞
第 9 回　映画 「ブタのいた教室」に見られるいのちの授業③解説
第 10 回　中学校での道徳授業の実践例。ツインバスケットを通した障がい者とのふれあい。一分間スピーチ原稿書き
第 11 回　一分間スピーチ 「私の創る道徳の授業」
第 12 回　一分間スピーチの投票で選ばれた、優秀者 3 人による 20 分間の模擬授業①
第 13 回　一分間スピーチの投票で選ばれた、優秀者 3 人による 20 分間の模擬授業②
第 14 回　まとめ
第 15 回　授業内レポート

●評価方法

出席点：30 点
一分間スピーチ：20 点
章内容の発表、20 分間の模擬授業、授業内レポートのうちのいずれか：50 点
評価観点 1　道徳教育にかかわる基本的知識を有している
評価観点 2　学習指導要領の道徳の項目について知識を有している
評価観点 3　道徳の授業の指導方法について知識を有している

●受講生へのコメント

一分間スピーチは全員必ず行うこと。(時間がとれれば) 第 10 回の授業時間内に「私の創る道徳の授業」というテーマで、自分の構想する道徳の授業について原稿を書いて頂く。第 11 回では、一人一分ずつ、原稿の内容を教壇で発表。全員の発表終了後、全員で投票を行い、優秀者を選んで頂く。投票で選ばれた優秀者（6 名）は、第 12 回、第 13 回でロングバージョンの模擬授業を行って頂く。模擬授業を行った者も、章内容の発表を行った者も、最終試験は免除し、発表内容で評価する。

●参考文献・教材

中戸義雄・岡部美香編『道徳教育の可能性その理論と実践』ナカニシヤ出版、2005 年。

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	KLPED2208	開講期	単位数	標準履修年次
317	**教育相談論 a,b** Counselling in Education a,b			前月 5 ／ 後月 5	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 齊藤 紀子 非常勤講師		

●科目の主題

生徒指導における教師―生徒関係には、いわゆる指示や指導、ガイダンス、非指示的カウンセリング、心理療法の知見を生かした心理学的な介入など、多様な方法が必要とされる。子どもたちが発達の途上において学校や家庭の中で遭遇する通常の発達的課題、および発達課題の達成の失調現象への理解を深めつつ、子どもたちに適切に接することで、より教育効果を高めることを目標とする。

●到達目標

カウンセリングの基礎知識を習得し、教育相談全般の基本的なスタンスを理解することを目標とする。

●授業内容・授業計画

本授業では、教育現場で起こっている不登校やいじめ、非行といった具体的な問題について論じ、既存の知見

や理論を紹介しつつ、相談対応のあり方について考察を進めていく。特に心理学的介入については、ケース・スタディーを通して学生の主体的な関心を喚起しながら、基本的なスタンスの重要性を伝達する。

第 1 回　『教育相談論』の沿革と大枠
第 2 回　生徒指導の理論と方法
第 3 回　様々な相談形態
第 4 回　学校教育におけるカウンセリング理論の活用と教育相談
第 5 回　発達を理解した相談の必要性①発達課題
第 6 回　発達を理解した相談の必要性②発達の失調現象
第 7 回　発達を理解した相談の必要性③問題行動への理解
第 8 回　特別な支援を必要とする相談対応①不登校
第 9 回　特別な支援を必要とする相談対応②神経症的問題
第 10 回　特別な支援を必要とする相談対応③非行
第 11 回　特別な支援を必要とする相談対応④いじめ
第 12 回　相談を生かす環境調整①校内の相談体系の構築
第 13 回　相談をいかす環境調整②保護者への援助
第 14 回　相談を生かす環境調整③専門機関との連携
第 15 回　総括

●評価方法

定期試験（90%）と小レポート（10%）で評価します。
評価観点 1　生徒指導における教育相談の意義や役割について理解している。
評価観点 2　カウンセリング理論の基礎知識を理解している。
評価観点 3　生徒の抱えるさまざまな問題への相談対応のあり方を理解している。

●受講生へのコメント

第 1 回目の授業で、授業の進め方、評価等についてのガイダンスを行いますので、必ず出席してください。

●参考文献・教材

資料を適時配布します。
参考文献
『学校教育相談論』　一丸藤太郎・菅野信夫編集　2011 年初版第 11 刷発行　ミネルバ書房
『学校カウンセリング』長尾博著　2010 年第 3 販 1 刷発行　ナカニシヤ出版

掲載№	授業科目名	科目 NO.	KLPED2209	開講期	単位数	標準履修年次
318	**人権・進路指導の研究 a,b** Human Rights Education and Career Guidance a,b			前金 2 ／ 後金 3	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 西田 亜希子 非常勤講師		

●科目の主題

近年、子どもたちの課題が多様化しており、その解決のために進路指導には実践力が求められている。しかし本授業では解決の How To ではなく、問題を引いた視点で捉え、遠回りでも根本的な働きかけはどのようにすればよいのかを探ることを狙いとする。

また学校では教科内容の学びが中心であるはずだが、なぜ進路指導があるのか、またその役割は何なのかを考えることで、「教育」という大きな営みについて再考察をし、教育に携わる自らの姿勢を作っていってもらいたい。

●到達目標

・進路指導とは何かを理解し、現代の意義を、自らの言葉で整理できるようになること。
・教育問題に対して、複眼的視点で考えるようになれること。
・進路指導のための連携組織について理解すること。

●授業内容・授業計画

コメントペーパーに基づき、受講生の関心によって、授業回や内容を適宜変更する可能性がある。

第 1 回　ガイダンス
第 2 回　進路指導とは？
第 3 回　なぜ「指導」が必要なのか？
第 4 回　今、必要とされる進路指導
第 5 回　進路指導における法律事項
第 6 回　マイノリティにとっての進路指導

第 7 回　中間小括
第 8 回　予防・開発的対応
第 9 回　進路指導の変遷
第 10 回　各学校段階における進路指導
第 11 回　職業観・勤労観形成重視の背景
第 12 回　「夢」に基づく進路指導の課題と背景
第 13 回　キャリア教育の進め方
第 14 回　現代社会における生徒指導、進路指導
第 15 回　総括

●評価方法
レポート試験：95%
※単なる授業のまとめ・感想ではなく、授業テーマを踏まえ、書籍などの文献も参照し、考察した論述文を求める。
またインターネットの情報は吟味し用いること。
※参考文献の書き方は途中回にて希望があれば解説を行う。
●受講生へのコメント
考えながら主体的に学んでもらう姿勢を求める。
考えるためのヒント：「なんで？」という疑問や、「そうか？」という違和感を大事に、素朴に考えること。
●参考文献・教材
参考文献など：授業内において適宜指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	KKSEM4401	開講期	単位数	標準履修年次
319	教職実践演習 Practical Seminar on Teaching			後集中	2 単位	4 年
	旧科目名			担当教員名 柏木 敦 教授 ほか		

●科目の主題
教職課程の履修を通じて修得した知識・技能が、教職に求められる基本的な資質能力に照らして充分なものとなっているのかを確認し、補完的な学習、指導を行う。
●到達目標
・教職課程の個々の科目の履修および教職に関するさまざまな経験を振り返る。
・専門的な知識・技能を基に、教員としての使命感や責任感、教育的愛情等を持って、学級や教科を担任しつつ、教科指導、生徒指導等の職務を実践できる資質能力が身に付いているかを確認する。
・教職キャリアを通しての今後の課題を考える。
●授業内容・授業計画
授業の概要　演習を中心として、教職課程履修カルテを利用しつつ教職課程の個々の科目の履修や教職に関するさまざまな経験を振り返り、教職に求められる基本的な資質能力がどれだけ身についているかを確認する。また、授業実践、生徒理解、特別活動、教職員・保護者・地域住民との連携協力、学びつづける教師についてゲストスピーカーによる講義を聴き、それに基づいてグループ・ディスカッションを行う。最後に、再度教職に求められる基本的な資質能力について自己評価を行い、個々人の教職キャリアにおける今後の課題について考える。
授業計画　原則として連続した 2 コマ（90 分× 2）で週 1 回、8 週間のグループ演習を行う。8 週のうち 5 週は、外部講師の講義に続いてグループ演習を行う。
第 1 回　オリエンテーション（本科目の意義、目標、進め方について）
第 2 回　演習　教職カルテを用いた教職に求められる基本的な資質能力についての自己評価
第 3 回　講義「教師に必要とされる資質能力について」（若手教員シンポジウム）
第 4 回　演習「教師に必要とされる資質能力について」
第 5 回　講義「授業実践について」
第 6 回　演習「授業実践について」
第 7 回　講義「生徒理解について」
第 8 回　演習「生徒理解について」
第 9 回　講義「特別活動について」
第 10 回　演習「特別活動について」

第 11 回　講義「教職員・保護者・地域住民との連携協力について」
第 12 回　演習「教職員・保護者・地域住民との連携協力について」
第 13 回　講義「学びつづける教師になるために」
第 14 回　演習「学びつづける教師になるために」
第 15 回　演習　教育実習校からの評価を踏まえた自己評価とまとめ

●評価方法
受講態度 10%、演習レポート（ワークシート）70%、最終レポート 20%
●受講生へのコメント
原則として欠席を認めない。通院等やむを得ない理由の場合、診断書等の提出を求めることがある。
●参考文献・教材
プリント等を授業中に配布する。
参考文献は授業中に指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	KKPRA4401	開講期	単位数	標準履修年次
320	中学校教育実習 Practice in Teaching（Junior High School）			後集中	4 単位	4 年
	旧科目名			担当教員名 柏木 敦 教授／森 久佳 准教授		

●科目の主題
大学の教職科目で履修した教育理論を踏まえて、教育実践を実地に体験することを通して教職に関する実践的指導力の基礎を身につける。教育実習を通して教職への意識をさらに高めることを目的とする。
●到達目標
大学等で学んだ教育理論に基づき、また各学校の方針や担当教諭の方針に従って，様々な教育実践を体験し、教職に関する基礎的で実践的な能力を身につける。
●授業内容・授業計画
各教育実習校の計画にそって行う。
第 1 回　教育実習
第 2 回　教育実習
第 3 回　教育実習
第 4 回　教育実習
第 5 回　教育実習
第 6 回　教育実習
第 7 回　教育実習
第 8 回　教育実習
第 9 回　教育実習
第 10 回　教育実習
第 11 回　教育実習
第 12 回　教育実習
第 13 回　教育実習
第 14 回　教育実習
第 15 回　教育実習
●評価方法
教育実習校の評価を参考にして教育実習担当者会議で評価する。
評価観点 1　教職員と協力し、自らの役割を積極的に果たすことができる。
評価観点 2　生徒の発達段階を考慮し、積極的に関わることができる。
評価観点 3　事前の計画・準備を計画的にし、生徒の反応を生かした教育実践を行うことができる。
●受講生へのコメント
教育実習を希望するものは前年度の教育実習ガイダンスに必ず出席し、教育実習校に対する依頼手続きを進めておかなくてはならない。
●参考文献・教材
大阪市立大学編『教育実習の手引き』

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	KKPRA4402	開講期	単位数	標準履修年次
321	**高等学校教育実習** Practice in Teaching (High School)			後集中	2 単位	4 年
	旧科目名			担当教員名 柏木 敦 教授／森 久佳 准教授		

●科目の主題

大学の教職科目で履修した教育理論を踏まえて、教育実践を実地に体験することを通して教職に関する実践的指導力の基礎を身につける。教育実習を通して教職への意識をさらに高めることを目的とする。

●到達目標

大学等で学んだ教育理論を基づき、また各学校の方針や担当教諭の方針に従って、様々な教育実践を体験し、教職に関する基礎的で実践的な能力を身につける。

●授業内容・授業計画

各教育実習校の計画にそって行う。

第 1 回　教育実習
第 2 回　教育実習
第 3 回　教育実習
第 4 回　教育実習
第 5 回　教育実習
第 6 回　教育実習
第 7 回　教育実習
第 8 回　教育実習
第 9 回　教育実習
第 10 回　教育実習
第 11 回　教育実習
第 12 回　教育実習
第 13 回　教育実習
第 14 回　教育実習
第 15 回　教育実習

●評価方法

教育実習校での評価を参考にして教育実習担当者会議で評価する。
評価観点 1　教職員と協力し、自らの役割を積極的に果たすことができる。
評価観点 2　生徒の発達段階を考慮し、積極的に関わることができる。
評価観点 3　事前の計画・準備を十分にし、生徒の反応を生かした教育実践を行うことができる。

●受講生へのコメント

教育実習を希望するものは前年度の教育実習ガイダンスに必ず出席し、教育実習校に対する依頼手続きを進めておかなくてはならない。

●参考文献・教材

大阪市立大学編『教育実習の手引き』

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	KKLEC4401	開講期	単位数	標準履修年次
322	**教育実習事前事後指導** Guidance in Teaching Practice a,b			前月 5 ／ 後集中	1 単位	4 年
	旧科目名			担当教員名 柏木 敦 教授／森 久佳 准教授		

●科目の主題

教育実習の事前と事後において、実習の準備と振り返りに関する指導を行う。実習の一般的な心構えと教育現場の教育活動に必要とされる知識・態度について理解を深める。実習後には教育実習の反省や考察を少人数による討論によって行う。

●到達目標

(1) 教育実習に必要な具体的事項を知り、教育実習のための準備を行うことができる。
(2) 教育実習に関連する基本的な問題を理解して、教育実習に向けた心構えができる。
(3) 学生の視点からではなく、「教師」の視点から学校教育を見ることができるようになる。

(4) 教育実習の体験を意義づけ、教職に対する理解を深める。

●授業内容・授業計画

教育実習の前後に、以下の内容について行う。

第 1 回　教育実習一般について
第 2 回　教育実習の心構えについて
第 3 回　学校と教育実習の実際について
第 4 回　同和教育・特別支援教育について
第 5 回　特別支援学校参観
第 6 回　なし
第 7 回　教育実習後の経験交流と反省
第 8 回　なし
第 9 回　なし
第 10 回　なし
第 11 回　なし
第 12 回　なし
第 13 回　なし
第 14 回　なし
第 15 回　なし

●評価方法

毎回の講義についてのレポートによる。本科目は、教育実習の評価と連動しているので、教育実習の評価と分割して評価しない。

評価観点 1　教育実習に必要な具体的事項を理解している。
評価観点 2　学生の視点ではなく、教師の視点から学校教育を理解している。
評価観点 3　教育実習の体験を意義づけ、教職をより深く理解している。

●受講生へのコメント

教育実習を行う年次に必ず出席して、教職と教育実習への意識を高めるように心かけること。

●参考文献・教材

大阪市立大学編『教育実習の手引き』

掲載№	授業科目名	科目 NO.	KLJPN2205	開講期	単位数	標準履修年次
323	書道 A Calligraphy A			後月 2	2 単位	2 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 南條 佳代 非常勤講師		

●科目の主題

中学校国語科書写の基礎的理解と教育実践力を養成する。

●到達目標

書写における硬毛筆の用具・用材の扱い方や文字の結構などの基礎知識や技術を講義・実技を通して習得する。

●授業内容・授業計画

書写指導における必要な基礎知識や技術を講義・実技を通して養う。

第 1 回　書写の説明、用具・用材の扱い方
第 2 回　姿勢・執筆法・基本用筆
第 3 回　点画の種類、文字の配置・配列
第 4 回　楷書 ①
第 5 回　楷書 ②
第 6 回　平仮名・片仮名
第 7 回　楷書に調和する平仮名
第 8 回　行書 ①
第 9 回　行書 ②
第 10 回　行書に調和する平仮名
第 11 回　漢字仮名交じりの書
第 12 回　細字・実用書
第 13 回　硬筆

第 14 回　書写の授業の進め方
第 15 回　書写の総括

●評価方法
提出作品（80%）, 出席時数（20%）
●受講生へのコメント
毛筆書写に適した用具・用材を用意すること。
毎回の課題は必ず提出し、欠席の場合も後日提出する。
毛筆に慣れるために、各自授業時間外にも練習し、準備・復習につなげる。
●参考文献・教材
必要に応じて、授業時に資料を配布する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	KLPRA1103	開講期	単位数	標準履修年次
324	教職ボランティア実習Ⅲ			後集中	2 単位	1 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 添田 晴雄 准教授		

●科目の主題
大阪市学校支援学生ボランティア等に参加することにより、学校現場の内側から学校教育の意義と課題について体験的・実践的に考える。また、自らのボランティア体験を踏まえ、生徒のボランティアのあり方についても考察する。
●到達目標
評価観点 1　(1) 学校園においてボランティアを合計 30 時間以上行う。
評価観点 2　(2) ボランティア経験を通して現実の学校園について考察する。
評価観点 3　(3) ボランティア経験を通して自らの教職キャリア形成について考察する。
●授業内容・授業計画
この科目は 1 年間継続するが、履修届では後期集中講義扱いとする。ボランティアは合計 30 時間以上行うこととし、2 回のレポートを課す。Web 上で適宜、ボランティアの進捗状況を確認したり、ボランティア経験を踏まえた意見交換を行う。ボランティアの日程は受け入れ校と受講生が相談の上個々に決めるが、ボランティアのための公認欠席の措置はとらない。具体的な年間計画は、第 1 回の授業で説明する。
第 1 回　オリエンテーション（第 1 回授業は前期に行う→掲示等注意）
第 2 回　ボランティア校の決定
第 3 回　ボランティア校との打ち合わせ
第 4 回　レポート A（ボランティア校決定時に作成）
第 5 回　大阪市の高等学校・中学校・小学校・幼稚園におけるボランティア
第 6 回　大阪市の高等学校・中学校・小学校・幼稚園におけるボランティア
第 7 回　大阪市の高等学校・中学校・小学校・幼稚園におけるボランティア
第 8 回　大阪市の高等学校・中学校・小学校・幼稚園におけるボランティア
第 9 回　大阪市の高等学校・中学校・小学校・幼稚園におけるボランティア
第 10 回　大阪市の高等学校・中学校・小学校・幼稚園におけるボランティア
第 11 回　大阪市の高等学校・中学校・小学校・幼稚園におけるボランティア
第 12 回　大阪市の高等学校・中学校・小学校・幼稚園におけるボランティア
第 13 回　大阪市の高等学校・中学校・小学校・幼稚園におけるボランティア（合計 30 時間以上）
第 14 回　ボランティア体験を踏まえたふりかえり
第 15 回　レポート B（ボランティア終了後に作成）
●評価方法
レポートおよび Web 上の届等の提出状況により評価する。
評価観点 1　(1) 学校園においてボランティアを合計 30 時間以上行う
評価観点 2　(2) ボランティア経験を通して現実の学校園について考察する
評価観点 3　(3) ボランティア経験を通して自らの教職キャリア形成について考察する
●受講生へのコメント
ボランティアの登録の関係上（履修届では後期集中講義扱いではあるが）第 1 回の授業は 4 月に行う。その日程は掲示等で指示する。第 1 回目の授業に万一欠席し、かつ、受講を希望する（またはその可能性がある）者は掲示の指示に従い、所定期間内に添田まで直接申し出ること。
「教職ボランティア実習Ⅰ～Ⅳ」は、〈教科又は教職に関する科目〉で、第 1 年次から履修できる。「教職ボランティ

ア実習Ⅲ」「同Ⅳ」「同Ⅰ」「同Ⅱ」は、それぞれ平成 28、29、30、31 年度に提供される予定であり、希望すれば 4 年間、毎年ボランティアを行うことも可能である。

本科目を通して大阪市立我孫子南中学校でボランティアをする場合は、原則として「教職ボランティア実習Ⅴ」（前期火曜 1 限）も同時履修すること。

学校園におけるボランティア経験は、大学での教職関連科目の学修に深みを持たせ、また、自らの教職適合性を具体的に考える契機となる。もちろん、将来教職につくための実践的な基盤となる。さらに、近年の公立・私学の教員採用選考では、ボランティアなどの現場経験を重視する傾向にある。教職を強く志望している者は、積極的に履修してほしい。

●参考文献・教材

4 月の説明会で「教職ボランティア実習の手引き」を配布する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	KLPRA1105	開講期	単位数	標準履修年次
325	**教職ボランティア実習Ⅴ**			前火 1	2 単位	1 ～ 4 年
	旧科目名			担当教員名 添田 晴雄 准教授		

●科目の主題

学校ボランティアを有意義に行うための準備やふりかえりを行う

●到達目標

（1）大阪市立我孫子南中学校をフィールドにして、学校教育の実態を踏まえ、学校教育支援のあり方を考える。
（2）教職キャリア形成過程における学校支援ボランティアの経験のあり方を考える。
（3）これらを踏まえて、学校支援ボランティアの内容を企画し、実践に向けて準備を行う。

●授業内容・授業計画

並行して履修する「教職ボランティア実習Ⅰ～Ⅳ」（いずれか 1 科目）を通して大阪市立我孫子南中学校において学校ボランティアを行うことを前提とし、同校において意義あるボランティアができるようにするための準備やふりかえり、ボランティアの意義などの考察を行う。

第 1 回　教職ボランティア実習のオリエンテーション（1）
第 2 回　教職ボランティア実習のオリエンテーション（2）
第 3 回　ボランティアとは
第 4 回　我孫子南中学校について知る
第 5 回　我孫子南中学校授業見学（1）
第 6 回　我孫子南中学校授業見学（2）
第 7 回　我孫子南中学校でのボランティアのニーズを知る
第 8 回　試行ボランティアの計画づくり
第 9 回　試行ボランティアの相互見学（1）
第 10 回　試行ボランティアの相互見学（2）
第 11 回　試行ボランティアのふりかえり（1）
第 12 回　試行ボランティアのふりかえり（2）
第 13 回　後期ボランティアの計画づくり（1）
第 14 回　我孫子南中学校担当者からの助言
第 15 回　ふりかえり

●評価方法

平常点およびレポート

●受講生へのコメント

履修する同一年度に、並行して「教職ボランティア実習Ⅰ～Ⅳ」のうちの 1 科目を履修し、かつ、その科目に関わる学校ボランティアを大阪市立我孫子南中学校で行うことを本科目の履修条件とする。

【備考】「教職ボランティア実習Ⅰ～Ⅳ」は、30 時間以上の学校ボランティアを行ってレポートを提出することによって単位を修得するのに対し、「教職ボランティア実習Ⅴ・Ⅵ」は「教職ボランティア実習Ⅰ～Ⅳ」のボランティア実習を前提として、その学校ボランティア実習の質を高めるための学修を行い、ボランティア活動を振り返り、ボランティア内容を計画することを通して単位を修得する。

同年度に「教職ボランティア実習Ⅵ」（後期）も履修することが望ましい。

●参考文献・教材

授業中に配布する

掲載№	授業科目名	科目 NO.	KLPRA1106	開講期	単位数	標準履修年次
326	教職ボランティア実習Ⅵ			後火１	２単位	１～４年
	旧科目名			担当教員名 添田 晴雄 准教授		

●科目の主題

学校ボランティアをより有意義に行うための考察を行う

●到達目標

(1) 大阪市立我孫子南中学校をフィールドにして、学校支援ボランティアの経験を振り返る。
(2) 教職キャリア形成過程における学校支援ボランティアの経験の意義について考える。
(3) これらを踏まえて、学校支援ボランティアの内容の改善を企画する。

●授業内容・授業計画

並行して履修する「教職ボランティア実習Ⅰ～Ⅳ」（いずれか１科目）を通して大阪市立我孫子南中学校において学校ボランティアを行うことを前提とし、同校におけるボランティアのふりかえりやボランティア改善のための考察を行う。

第１回　オリエンテーション
第２回　前期ボランティア報告
第３回　後期ボランティア計画づくり
第４回　我孫子南中学校授業見学（1）
第５回　他校ボランティア報告（1）
第６回　他校ボランティア報告（2）
第７回　ボランティア相互見学（1）
第８回　ボランティア相互見学（2）
第９回　ボランティア相互見学（3）
第10回　我孫子南中学校授業見学（2）
第11回　学生ボランティアに求められるもの（1）
第12回　学生ボランティアに求められるもの（2）
第13回　ボランティアのふりかえり
第14回　次年度ボランティアの計画づくり（1）
第15回　次年度ボランティアの計画づくり（2）

●評価方法

平常点およびレポート

●受講生へのコメント

履修する同一年度に、並行して「教職ボランティア実習Ⅰ～Ⅳ」のうちの１科目を履修し、かつ、その科目に関わる学校ボランティアを大阪市立我孫子南中学校で行うことを本科目の履修条件とする。

【備考】「教職ボランティア実習Ⅰ～Ⅳ」は、30 時間以上の学校ボランティアを行ってレポートを提出することによって単位を修得するのに対し、「教職ボランティア実習Ⅴ・Ⅵ」は「教職ボランティア実習Ⅰ～Ⅳ」のボランティア実習を前提として、その学校ボランティア実習の質を高めるための学修を行い、ボランティア活動を振り返り、ボランティア内容を計画することを通して単位を修得する。

同年度に「教職ボランティア実習Ⅴ」（前期）も履修することが望ましい。

●参考文献・教材

授業中に配布する

博 物 館 に 関 す る 科 目

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	MULEC1101	開講期	単位数	標準履修年次
327	生涯学習概論 Introduction to Lifelong Education			後金 5	2 単位	1・2 年
	旧科目名			担当教員名 赤尾 勝己 非常勤講師		

●科目の主題

本講義では、生涯学習社会の理論と実態を把握し、そのあり方について考えることを目標とする。

●到達目標

今日の後期近代社会において生涯学習が必要とされる理由、海外の生涯学習に関する理論的動向、日本に於ける生涯学習政策の展開、生涯学習関連施設における学びについて理解し、これからの日本社会に見合った生涯学習社会のあり方を展望できる力量を身につける。

●授業内容・授業計画

下記の教科書の目次に沿って授業を進める。第 1 部 生涯学習が必要とされる社会的背景（第 1 章～第 3 章）、第 2 部 海外の生涯学習に関する理論と動向（第 4 章～第 6 章）、第 3 部 日本における生涯学習政策の展開（第 7 章～第 9 章）、第 4 部 生涯学習関連施設における学び（第 10 章～第 12 章）。

第 1 回　序章 生涯学習を論じるうえでの諸前提
第 2 回　第 1 章 後期近代社会における生涯学習をとりまく環境
第 3 回　第 2 章 問い直される学力―PISA 型学力から生涯学力へ―
第 4 回　第 3 章「学習する組織」の提唱と学びの意義
第 5 回　第 4 章 ユネスコにおける生涯教育から生涯学習への転換
第 6 回　第 5 章 OECD におけるリカレント教育から生涯学習への転換
第 7 回　第 6 章 アメリカにおける学習社会とその展開
第 8 回　第 7 章 国内の生涯学習政策の展開
第 9 回　第 8 章 地方自治体の生涯学習推進体制
第 10 回　第 9 章 学校教育改革の動向
第 11 回　第 10 章 図書館
第 12 回　第 11 章 博物館
第 13 回　第 12 章 公民館および生涯学習関連施設
第 14 回　終章 生涯学習社会の可能性と課題
第 15 回　まとめ

●評価方法

筆記試験による。前年度の試験問題を公開します。詳細は初回の授業時に説明します。

●受講生へのコメント

本科目は、博物館学芸員の資格取得のための必修科目であるが、受講生の皆さんには、博物館だけでなく、より広く人々の生涯にわたる学習が、どのように国家や行政によって支援・振興・管理されようとしているのかについて、批判的な観点をもちながら学んでほしい。

●参考文献・教材

教科書　赤尾勝己『新しい生涯学習概論―後期近代社会に生きる私たちの学び―』ミネルヴァ書房、2012 年。

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	MULEC1102	開講期	単位数	標準履修年次
328	博物館概論 Introduction to Museology.			前水 5	2 単位	1・2 年
	旧科目名			担当教員名 岸本 直文 教授		

●科目の主題

博物館科目の入口となる科目であり、博物館の学芸員をめざそうという受講生に対し、わが国の博物館が現代にいたるまでどのような歴史的過程を経てきたのか、どのような社会的機能が期待されているのか、といった博物館をめぐる状況全般について基礎的な知識と理解を身につける。

●到達目標

博物館の現況を歴史的側面、現代社会的側面から考え、博物館の意義と抱える課題、今後のあり方について、

学芸員をめざす諸君に考えてほしい。

●授業内容・授業計画

パワーポイントも使いながら、博物館科目の導入として、博物館について知っておくべき事項を概括する。

第 1 回　博物館とはなんだろう
第 2 回　博物館と法律
第 3 回　生涯学習と博物館
第 4 回　世界の博物館の歴史
第 5 回　文化財は誰のものか
第 6 回　日本の博物館の歴史
第 7 回　大阪の博物館
第 8 回　公立博物館の運営
第 9 回　自治体の文化政策
第 10 回　博物館の資料
第 11 回　博物館資料の保存　学芸員の研究
第 12 回　博物館の展示
第 13 回　博物館の教育
第 14 回　博物館の評価
第 15 回　まとめ

●評価方法

試験（50 点）および授業時に指示するレポート等の課題（50%）により評価する。

●受講生へのコメント

博物館の学芸員の仕事は多様でその役割はたいへんであるが、専門性を活かし、資料を扱うプロとして、地域の文化を守り人材を育てる重要な役割を担う職務であることを意識してほしい。

●参考文献・教材

必要な資料を配付する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	MULEC1103	開講期	単位数	標準履修年次
329	博物館経営論 Museum Management			前火 4	2 単位	2・3 年
	旧科目名			担当教員名 澤井 浩一 非常勤講師／渡部 義弥 非常勤講師／高井 健司 非常勤講師		

●科目の主題

博物館施設の組織体制や日常運営の実態等、博物館経営の現状と課題を考える。

●到達目標

歴史・美術・自然史などの幅広い分野の博物館施設の実例を学び、博物館経営に関する基礎的な知識を習得するとともに、博物館が今後社会のなかで果たすべき役割について自分の考えをまとめることができるようにする。

●授業内容・授業計画

博物館の組織体制や日常運営について実例を紹介する。
博物館の使命や計画、評価について、作成や実施の手順を紹介する。
博物館における連携や市民参加といった現在特に注目を集める分野について実例を紹介する。

第 1 回　イントロダクション
第 2 回　ミュージアムマネジメントとわが国の博物館
第 3 回　運営の実態（組織体制・財務・日常運営・設備等）
第 4 回　歴史系博物館の運営
第 5 回　美術館の運営
第 6 回　自然史系博物館の運営
第 7 回　博物館の使命・計画・評価
第 8 回　専門館の運営 1
第 9 回　専門館の運営 2
第 10 回　博物館と倫理
第 11 回　博物館における市民参加
第 12 回　他館・他施設との連携

第 13 回　公共施策や地域との関係
第 14 回　博物館経営の現状と課題
第 15 回　まとめ

●評価方法
試験を基本とし、コミュニケーションカードによる出欠も加味する。
●受講生へのコメント
関心のある分野でかまわないので、日頃から博物館施設の見学や事業への参加をおこない、博物館施設の実際を自分の目で確認しておいてほしい。
●参考文献・教材
講義において指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	MULEC1104	開講期	単位数	標準履修年次
330	博物館資料論 Museum Materials			後水 5	2 単位	2・3 年
	旧科目名			担当教員名 前田 洋子 非常勤講師		

●科目の主題
今日の博物館における基本的な機能と活動が、如何に優秀な博物館資料の収集・整理・保管・管理、及び調査・研究活動によっているかについて確認し、その過程における諸問題を提供しながら現時点での解答を追及してゆく。
●到達目標
博物館資料の収集・整理・保管・管理、及び博物館における資料調査・研究活動に関する理論と実践について学習し、学生個々人が 21 世紀博物館の理想像を構築することを目標とする。
●授業内容・授業計画
博物館学総論における資料論を、他の各論との関わりを重視しつつ、以下の課程により授業を進める。
第 1 回　科目の授業概要説明とグループでの議論（テーマは時宜に応じて提起する）
第 2 回　グループ議論の結果報告・討議の中で、時宜に応じた授業暦を完成
第 3 回　博物館学総論における博物館資料論の位置づけ～博物館の基本的機能と活動～
第 4 回　博物館資料化の過程について
第 5 回　博物館の基本的機能と活動～博物館資料の収集（Ⅰ）
第 6 回　博物館の基本的機能と活動～博物館資料の収集（Ⅱ）
第 7 回　博物館の基本的機能と活動～博物館資料の整理（Ⅰ）
第 8 回　博物館の基本的機能と活動～博物館資料の整理（Ⅱ）
第 9 回　博物館の基本的機能と活動～博物館資料の管理・保管（Ⅰ）
第 10 回　博物館の基本的機能と活動～博物館資料の管理・保管（Ⅱ）
第 11 回　博物館の基本的機能と活動～博物館資料の調査・研究（Ⅰ）
第 12 回　博物館の基本的機能と活動～博物館資料の調査・研究（Ⅱ）
第 13 回　履修生の総意に基く近郊の博物館施設の見学による学外授業
第 14 回　見学による学外授業のグループでの議論・結果報告・討議
第 15 回　まとめ
●評価方法
定期試験（40%）、課題レポート（40%）、及び平常点（20%）により評価。
●受講生へのコメント
博物館概論を履修終了して受講されることを勧める。
●参考文献・教材
授業中に適宜指示、紹介する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	MULEC1105	開講期	単位数	標準履修年次
331	博物館情報・メディア論 Museum Information and Media			前金 2	2 単位	2・3 年
	旧科目名			担当教員名 吉田 健 非常勤講師		

●科目の主題

本講義では、博物館で利用されているメディアに焦点を当て、それらの特性を正しく理解することを目指す。そのためにメディア利用の歴史を振り返る。さらに、様々な情報を、メディアを使って来館者らに的確に伝えられるような方策を考えていく。

●到達目標

博物館の展示や教育普及活動で取り扱う情報にはどの様なものがあるのかを理解し、メディアを活用しながら展示したり情報発信することが可能となるようにする。また、インターネットの利用や新しいデジタルメディアの登場などの変化に対応できるようにすることを目指す。

●授業内容・授業計画

さまざまなメディアについて、その特徴や歴史を概観しながら、博物館における利用を考えていく。

第 1 回　オリエンテーション
第 2 回　コミュニケーションとメディア
第 3 回　博物館と学習
第 4 回　メディアの歴史―言語と文字
第 5 回　メディアの歴史―印刷
第 6 回　メディアの歴史―写真と映像
第 7 回　メディアの歴史―通信
第 8 回　メディアの歴史―マスメディア
第 9 回　メディアを使った教育の歴史
第 10 回　博物館での情報発信―映像展示
第 11 回　博物館での情報発信―コンピュータの活用
第 12 回　博物館での情報発信―携帯型情報端末の活用
第 13 回　博物館からの情報発信―広報紙の作成
第 14 回　博物館からの情報発信―インターネットの活用
第 15 回　まとめ

●評価方法

期末のレポート 60%、授業中の小課題 20%、授業へ取り組む姿勢など平常点 20%。

●受講生へのコメント

多くの博物館や科学館を訪れて、どんな情報があるのか、どの様なメディアを活用しているのかを実際に見てください。そして、自分ならどの様に情報を展示するのか、発信するのか、考えてみてください。

●参考文献・教材

講義の中で紹介する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	MUPRA3301	開講期	単位数	標準履修年次
332	博物館実習 I Practi c al Work in Museum			前後火 5	2 単位	3・4 年
	旧科目名			担当教員名 岸本 直文 教授		

●科目の主題

博物館の実際を見る見学実習、大学に所蔵・保管する考古資料・文書・自然系標本などを扱い調書を取るなどの実務実習、写真撮影を含む資料化、関連資料のスキャニング、それらを用いた絵はがき・チラシ・資料カードなどの作成、そうした基礎的訓練の上に、博物館の展示活動に準じた実習展示を学術情報総合センターを利用して行う。企画立案、展示物の選定、パネルや解説文の作成、リーフレットの作成、そして実際の展示を実施する。

●到達目標

見学実習は、博物館に関する科目の履修を踏まえ、いくつかの観点の項目を定めた上で、博物館を実際に訪れ、施設や展示などについて論評し、改善方策を提案する力量を養う。実務実習は、館園実習の前に、実際に資料にふれ、その取り扱いの基礎を学ぶ。そして、受講者の討論により実習展示企画をまとめ、パネルの作成等の準備、

実際の陳列や解説まで、博物館活動の柱である企画展実施のひととおりのプロセスを経験する。

●授業内容・授業計画

通年で実施する。前期は見学実習と実務実習が中心となり、後期は模擬展示が中心となる。

第 1 回　オリエンテーション通年のスケジュール説明／見学実習の説明／実習展の説明
第 2 回　見学実習（1）
第 3 回　見学実習についてのレポートにもとづく討論（1）
第 4 回　見学実習（2）
第 5 回　見学実習についてのレポートにもとづく討論（2）
第 6 回　見学実習（3）
第 7 回　見学実習についてのレポートにもとづく討論（3）
第 8 回　実務実習①写真撮影
第 9 回　実務実習①考古資料の取り扱い
第 10 回　実務実習②古文書の取り扱い
第 11 回　実務実習③自然系標本の取り扱い
第 12 回　実務実習④大学史資料室の見学と展示業務の講義
第 13 回　展示企画の立案①
第 14 回　展示企画の立案②
第 15 回　館園実習事前指導

●評価方法

第 1 回 館園実習事後指導 実習展の説明
第 2 回 展示研究①企画案の研究 1
第 3 回 展示研究②企画案の研究 2
第 4 回 展示企画企画の最終的な検討出品リスト・パネル・リーフレットの検討
第 5 回 展示準備①
第 6 回 展示準備②
第 7 回 展示準備③
第 8 回 展示（1）設営
第 9 回 この間に実習展（1）の解説
第 10 回 実習展（1）の振り返り
第 11 回 展示（1）撤収／展示（2）設営
第 12 回 実習展報告書の準備／実習展（2）の解説
第 13 回 実習展報告書の仕上げ
第 14 回 実習展（2）撤収
第 15 回 まとめ

出席、レポートおよび討論への参加状況、実習展の企画・準備などの状況を総合的に判断する。

●受講生へのコメント

今年度は、大学市史資料室の展示設計を織り込んでいく予定である。通年科目であり、1 年を通じての出席が必要である。また、博物館見学は、時間割の時間外となる。さらに実習展では、企画や研究などの準備作業が必要であるとともに、一定の到達のために実習時間を越えて進めなければならない場合もありうる。過大な負担にならないようにするが、一方で作り上げることの楽しみを体感できるよう努めたい。受講生にも、通常の講義ではない博物館実習の特性を理解しておいてほしい。

●参考文献・教材

教材必要に応じて資料を配付する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	MUPRA3302	開講期	単位数	標準履修年次
333	**博物館実習Ⅱ** museum practice			前集中	1 単位	3・4 年
	旧科目名			担当教員名 岸本 直文 教授		

●科目の主題

博物館実習Ⅰをふまえ、博物館施設において博物館活動の基本について学ぶ。

●到達目標

博物館施設により扱う資料や実習内容に差はあるが、施設、資料の保管、資料の扱い、展示、普及活動、運営等について、学芸員の方々から博物館の基本的活動について学び、学芸員業務の実際を学習する。

●授業内容・授業計画

4 ～ 5 日の集中講義の形式で、夏休み期間に行う。内容は各館の館園実習メニューによる。

第 1 回　－
第 2 回　－
第 3 回　－
第 4 回　－
第 5 回　－
第 6 回　－
第 7 回　－
第 8 回　－
第 9 回　－
第 10 回　－
第 11 回　－
第 12 回　－
第 13 回　－
第 14 回　－
第 15 回　－

●評価方法

全期間出席することが必須である。また博物館実習Ⅰに組み込んで実施している事前事後指導を受けなければならない。その上で、実習内容について、日々学んだ点を実習レポートにまとめ、全体を通しての反省・自己評価等からなるレポートを提出する。事後指導の討論を含めて総合的に判定する。

●受講生へのコメント

前期の履修登録期間においては、各館の実習期間が決まっていない場合があるが、必ず登録を済ませておくこと。博物館実習Ⅰの初回に博物館実習Ⅱ（館園実習）のガイダンスを、博物館実習Ⅰの前期最終回および後期初回に博物館実習Ⅱ（館園実習）の事前指導と事後指導を実施する。博物館実習Ⅰを履修済みで、博物館実習Ⅱのみの履修者は、これら 3 回に必ず出席すること。

●参考文献・教材

各受け入れ館による。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	MULEC1106	開講期	単位数	標準履修年次
334	博物館資料保存論 Preservation Museum Collection			前金 4	2 単位	2・3 年
	旧科目名			担当教員名 豆谷 浩之 非常勤講師		

●科目の主題

博物館資料の保存・修復について、多分野の博物館の具体例を通じて学ぶ。

●到達目標

博物館において、さまざまな分野の資料を、展示環境や収蔵環境を含めて良好な状態で保存・継承するために必要な基礎的知識や技術を身につけるとともに、資料の修復や科学的分析についても、最新の成果を含めて習得する。

●授業内容・授業計画

考古・歴史・美術・自然史等に関する諸資料について、保存や修復に必要な基礎知識を学ぶ。温湿度や光、虫害等に関する備えについて実例に即して紹介する。資料の修復や処理に関して、保存科学の観点から最新成果等を学ぶ。

第 1 回　イントロダクション
第 2 回　資料の状態調査・現状把握
第 3 回　資料の科学的保存処理
第 4 回　資料の修復・修理（考古）
第 5 回　自然環境の保護（生物多様性・種の保存を含む：陸上生物）
第 6 回　自然環境の保護（生物多様性・種の保存を含む：水生生物）
第 7 回　資料の梱包と輸送
第 8 回　資料の修復・修理（美術・歴史）

第 9 回　資料保存の諸条件とその影響（温湿度、光、振動、大気等）、生物被害とIPM（総合的有害生物管理）
第 10 回　災害の防止と対策（火災、地震、水害、盗難等）
第 11 回　伝統的保存方法　保存論
第 12 回　収蔵の保存環境
第 13 回　展示の保存環境
第 14 回　地域資源・文化財の保存と活用
第 15 回　まとめ

●評価方法
授業毎のコミュニケションカードと出席点により総合的に評価する予定。
●受講生へのコメント
博物館・美術館や文化財保存の仕事に従事する複数の講師による、実例に即した内容の講義です。履修者を60 名までとします。
●参考文献・教材
授業中に適宜指示、紹介する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	MULEC1107	開講期	単位数	標準履修年次
335	博物館展示論 Museum Exhibition			後金 4	2 単位	2・3 年
	旧科目名			担当教員名 川端 清司 非常勤講師		

●科目の主題
博物館機能の中心となる展示について、多分野の博物館の具体例を通じて学ぶ。
●到達目標
博物館の展示について、歴史・美術・自然史など幅広い分野の実践例を通じて、理論や具体的技術・手法を習得し、博物館の展示機能に関する基礎的能力を養う。あわせて、特別展（企画展）等の企画から実施までの具体的手続きについて学ぶ。
●授業内容・授業計画
さまざまな博物館・美術館での展示の実例を学ぶ。資料毎の特性に基づいた展示・解説手法を学ぶ。
展覧会の企画から実施までを実例に即して紹介する。
展示手法や技術について紹介する。
第 6 回・第 7 回の現地見学は、講義の時間とは別枠で、指定する土曜日の 1 日で 2 施設を見学・受講し、2 回分の講義内容とする。第 10 回の現地見学は講義時間内に実施予定。現地見学の日程・時間等は初回の講義やポータルサイトで提示します。
第 1 回　イントロダクション　展示とは
第 2 回　美術資料・文化財の展示手法、展示に関する諸問題
第 3 回　歴史展示に関する諸問題
第 4 回　考古資料の展示、遺跡の利用
第 5 回　建築資料の展示
第 6 回　展示の諸形態 1 東洋陶磁美術館（もしくは大阪市立美術館）の展示（現地見学と講義）
第 7 回　展示の諸形態 2 大阪市立科学館（もしくは歴史博物館）の展示（現地見学と講義）
第 8 回　自然史資料の展示手法
第 9 回　特別展の企画と運営
第 10 回　展示の諸形態 3 自然史博物館の展示（現地見学と講義）
第 11 回　巡回展示の企画と運営
第 12 回　海外資料の展示に関する諸問題
第 13 回　展示技術のいろいろ
第 14 回　観覧者からみた展示
第 15 回　まとめ
●評価方法
授業中のミニレポートと出席点により総合的に評価する予定。
●受講生へのコメント
大阪市立の博物館施設について、3 回分の現地見学、現地講義があります。履修者を 60 名までとします。

それ以外にも、各自機会を見つけて博物館・美術館の見学をしておくと、講義内容の理解が深まるのでお勧めします。

●参考文献・教材

授業中に適宜指示、紹介する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	MULEC1108	開講期	単位数	標準履修年次
336	**博物館教育論** Museum Education			後水 1	3 単位	2・3 年
	旧科目名			担当教員名 井上 敏 非常勤講師		

●科目の主題

博物館における博物館教育の意義と理念について講義を行い、事例の紹介も行います。また博物館教育を企画、実施する際に必要となる視点を習得してもらいます。

●到達目標

博物館の諸機能のうち、博物館教育の重要性を認識し、博物館における教育活動の基盤となる理論や実践に関する知識と方法を習得し、博物館教育を企画、実施するための基礎的能力や必要となる視点を養うことを目標とします。

●授業内容・授業計画

以下の内容の講義を予定しています。但し、まだ変更の余地があり、講義の第 1 回目で改めて告知します。

第 1 回　ガイダンス
第 2 回　人の学びと博物館
第 3 回　博物館教育の意義と理念（1）－コミュニケーションとしての博物館教育
第 4 回　博物館教育の意義と理念（2）－生涯学習の場としての博物館
第 5 回　博物館教育の意義と理念（3）－人材養成の場としての博物館
第 6 回　博物館教育の意義と理念（4）－地域における博物館
第 7 回　博物館教育の意義と理念（5）－博物館リテラシーの涵養
第 8 回　博物館の利用と学び（1）－博物館の利用実態
第 9 回　博物館の利用と学び（2）－博物館体験
第 10 回　博物館の利用と学び（3）－博物館における学びの特性
第 11 回　博物館教育の実際（1）－博物館教育活動の手法（館内）
第 12 回　博物館教育の実際（2）－博物館教育活動の手法（館外）
第 13 回　博物館教育の実際（3）－博物館教育活動の企画と実施
第 14 回　博物館教育の実際（4）－博物館と学校教育
第 15 回　まとめ

●評価方法

試験 70%と受講態度 30%（出席点を含む）で評価する予定です。この点については 1 回目の講義で改めて告知します。

●受講生へのコメント

博物館（ミュージアム）は貴重な博物館資料を後世に残すという使命を持つ一方で、図書館などとともに生涯学習機関として、人の生涯にわたる学びを行う場であり、それをサポートする使命を持っています。そのことをこの講義で認識してもらい、そこから受講生各人が博物館（ミュージアム）の持つポテンシャルをどう引き出すか、博物館（ミュージアム）が生涯学習の面でどのような貢献ができるのか、を考えてほしいと思います。

●参考文献・教材

講義中に指示します。

Appendix

●文学部・文学研究科　教員名簿

●教室見取り図（１号館、全学共通教育棟、法学部棟）

●杉本キャンパスマップ

教 員 名 簿

平成 28 年 4 月 1 日現在

1．氏名の配列は、専修ごとに専任教員、特任教員とし、非常勤講師は五十音順とした。
2．専任教員の氏名の順は、職階別に年齢順とし、非常勤講師の氏名の順は五十音順とした。
3．備考欄には、研究科長、評議員、教務委員、学生担当委員、教室代表および１回生担任を記入した。

氏　　名	職　名	教員研究室 電話番号	メールアドレス	備　　考
哲 学 教 室				
専　任				
仲 原　　孝	教　授	06-6605-2358	JCF05366@nifty.com	教室代表
高 梨 友 宏	教　授	06-6605-2365	takanash@lit.osaka-cu.ac.jp	１回生担任
土 屋 貴 志	准教授	06-6605-2356	tsuchiya@lit.osaka-cu.ac.jp	
佐 金　　武	講　師	06-6605-2361		
日本史学教室				
専　任				
塚 田　　孝	教　授	06-6605-2390	tsukada@lit.osaka-cu.ac.jp	教室代表
仁 木　　宏	教　授	06-6605-2391	niki@lit.osaka-cu.ac.jp	副研究科長
岸 本 直 文	教　授	06-6605-2395	kishimot@lit.osaka-cu.ac.jp	
佐 賀　　朝	教　授	06-6605-2398	a-saga@lit.osaka-cu.ac.jp	
磐 下　　徹	准教授	06-6605-2393	iwashita@lit.osaka-cu.ac.jp	１回生担任
世界史学教室				
専　任				
平 田 茂 樹	教　授	06-6605-2394	hirata@lit.osaka-cu.ac.jp	
野 村 親 義	准教授	06-6605-2396	nomura@lit.osaka-cu.ac.jp	
上 野 雅由樹	講　師	06-6605-2397	mueno@lit.osaka-cu.ac.jp	
大 黒 俊 二	教　授	06-6605-2401	ooguro@lit.osaka-cu.ac.jp	教室代表
北 村 昌 史	教　授	06-6605-2378	kitamasa@lit.osaka-cu.ac.jp	教務委員
草 生 久 嗣	准教授	06-6605-2438	kusabu@lit.osaka-cu.ac.jp	１回生担任
井 上　　徹	教　授	06-6605-2399	inouet@lit.osaka-cu.ac.jp	
（大阪市立大学理事兼副学長）				

氏　　名	職　名	教員研究室 電話番号	メールアドレス	備　　考
社会学教室				
専　任				
進藤雄三	教　授	06-6605-2368	shindou@lit.osaka-cu.ac.jp	教室代表
石田佐恵子	教　授	06-6605-2367	ishita@lit.osaka-cu.ac.jp	教務委員長
伊地知紀子	教　授	06-6605-2370	ijichi@lit.osaka-cu.ac.jp	
川野英二	准教授	06-6605-2366	kawano@lit.osaka-cu.ac.jp	
笹島秀晃	講　師	06-6605-2371	sasajima@lit.osaka-cu.ac.jp	1回生担任
心理学教室				
専　任				
池上知子	教　授	06-6605-2376	ikegami@lit.osaka-cu.ac.jp	
山　祐嗣	教　授	06-6605-2377	yama@lit.osaka-cu.ac.jp	教室代表
川邉光一	准教授	06-6605-2380	kawabe@lit.osaka-cu.ac.jp	
佐伯大輔	准教授	06-6605-2373	saeki@lit.osaka-cu.ac.jp	1回生担任
教育学教室				
専　任				
柏木　敦	教　授	06-6605-2388	kashiwag@lit.osaka-cu.ac.jp	教室代表・教務委員
添田晴雄	准教授	06-6605-2466	soeda@lit.osaka-cu.ac.jp	
森　久佳	准教授	06-6605-2461	hmori@lit.osaka-cu.ac.jp	1回生担任
島田　希	准教授	06-6605-2389		
地理学教室				
専　任				
大場茂明	教　授	06-6605-2402	oba@lit.osaka-cu.ac.jp	教室代表
山﨑孝史	教　授	06-6605-2407	yamataka@lit.osaka-cu.ac.jp	
祖田亮次	准教授	06-6605-2453	soda@lit.osaka-cu.ac.jp	
木村義成	講　師	06-6605-2404	yoshi@lit.osaka-cu.ac.jp	1回生担任
水内俊雄	教　授	06-6605-2406	mizuuchi@lit.osaka-cu.ac.jp	
（大阪市立大学都市研究プラザ教授）				

氏　　名	職　名	教員研究室 電話番号	メールアドレス	備　　考
国語国文学教室				
専　　任				
丹　羽　哲　也	教　授	06-6605-2410	niwa@lit.osaka-cu.ac.jp	教室代表
小　林　直　樹	教　授	06-6605-2409	kobayasn@lit.osaka-cu.ac.jp	
久　堀　裕　朗	准教授	06-6605-2412	kubori@lit.osaka-cu.ac.jp	
奥　野　久美子	准教授	06-6605-2414	okuno@lit.osaka-cu.ac.jp	1回生担任
山　本　真由子	講　師			
中国語中国文学教室				
専　　任				
松　浦　恆　雄	教　授	06-6605-2421	matuura@lit.osaka-cu.ac.jp	教育研究評議会委員
岩　本　真　理	教　授	06-6605-2418	ybzljp@yahoo.co.jp	教室代表
張　　新　民	准教授	06-6605-2415	cho@lit.osaka-cu.ac.jp	1回生担任
大岩本　幸　次	准教授	06-6605-3054	ooiwamot@lit.osaka-cu.ac.jp	
英米言語文化学教室				
専　　任				
杉　井　正　史	教　授	06-6605-2433	sugiim@lit.osaka-cu.ac.jp	
田　中　孝　信	教　授	06-6605-2435	tanakat@lit.osaka-cu.ac.jp	教室代表
イアン・リチャーズ (Ian,RICHARDS)	准教授	06-6605-2436	richard@lit.osaka-cu.ac.jp	
古　賀　哲　男	准教授	06-6605-2437	koga@lit.osaka-cu.ac.jp	1回生担任
豊　田　純　一	准教授	06-6605-2428		
ドイツ語フランス語圏言語文化学教室				
専　　任				
神　竹　道　士	教　授	06-6605-2450	kamitake@lit.osaka-cu.ac.jp	学生担当委員
髙　井　絹　子	准教授	06-6605-2446	takai@lit.osaka-cu.ac.jp	1回生担任
長谷川　健　一	講　師	06-6605-2447	hasek@lit.osaka-cu.ac.jp	
津　川　廣　行	教　授	06-6605-2459	tsugawa@lit.osaka-cu.ac.jp	
福　島　祥　行	教　授	06-6605-2454	fukushim@lit.osaka-cu.ac.jp	教室代表・教務委員
白　田　由　樹	准教授	06-6605-2458	shirata@lit.osaka-cu.ac.jp	
特任教員				
ジモン・エルトレ (Simon,OERTLE)	特任講師			
ロラン・バレイユ (Laurent,BAREILLE)	特任講師			

氏　　名	職　名	教員研究室 電話番号	メールアドレス	備　　考
言語応用学教室				
専　　任				
関　　茂　樹	教　授	06-6605-2422	sekis@lit.osaka-cu.ac.jp	教室代表
井　狩　幸　男	教　授	06-6605-2423	ikari@lit.osaka-cu.ac.jp	1回生担任
山　崎　雅　人	教　授	06-6605-2416	yamazaki@lit.osaka-cu.ac.jp	
田　中　一　彦	教　授	06-6605-2467	tanakak@lit.osaka-cu.ac.jp	
表現文化学教室				
専　　任				
三　上　雅　子	教　授	06-6605-2449	mikamimasako@hotmail.com	学生担当委員
小田中　章　浩	教　授	06-6605-2456	odanaka@lit.osaka-cu.ac.jp	研究科長
野　末　紀　之	教　授	06-6605-2425	nozue@lit.osaka-cu.ac.jp	教室代表
高　島　葉　子	准教授	06-6605-2434	takashim@lit.osaka-cu.ac.jp	1回生担任
海老根　　剛	准教授	06-6605-2386	ebine@lit.osaka-cu.ac.jp	
特　任　教　員				
江　村　　公	特任講師			
アジア都市文化学教室				
専　　任				
中　川　　眞	教　授	06-6605-2374	nakagawa@lit.osaka-cu.ac.jp	
野　崎　充　彦	教　授	06-6605-2465	nozaki@lit.osaka-cu.ac.jp	教室代表
多和田　裕　司	教　授	06-6605-2375	tawada@lit.osaka-cu.ac.jp	
堀　　まどか	准教授	06-6605-2198	horimado@lit.osaka-cu.ac.jp	
増　田　　聡	准教授	06-6605-2457	masuda@lit.osaka-cu.ac.jp	
天　野　景　太	准教授	06-6605-2403	amano@lit.osaka-cu.ac.jp	
全学教職課程特任教員				
藤　原　靖　浩	特任講師			

非 常 勤 講 師

赤　尾　勝　己　　関西大学文学部教授
　　生涯学習論

秋　岡　英　之　　関西学院大学非常勤講師
　　中国語中国文学特講Ⅱ

秋　葉　　淳　　千葉大学文学部准教授
　　世界史特講

有　田　　豊　　大阪市立大学非常勤講師
　　文学部基礎演習

石　川　　優　　大阪市立大学非常勤講師
　　比較表現論演習　文学部基礎演習

稲　垣　　稜　　奈良大学准教授
　　地理学概論Ⅱ

井　上　　敏　　桃山学院大学経営学部准教授
　　博物館教育論

岩　本　賢　治　　元兵庫県中学校教員
　　社会科公民科教育法Ⅰ・Ⅱ

上　田　貴　子　　近畿大学文芸学部准教授
　　東洋史特講Ⅱ

大　坪　亮　介　　神戸松蔭女子学院大学文学部非常勤講師
　　文学部基礎演習

岡　本　真　彦　　大阪府立大学教授
　　発達・学習論b

奥　西　佐智子　　（株）JTB西日本英語ガイド・海外添乗員
　　日本文化発信のための英語

小　倉　博　之　　神戸女学院大学文学部非常勤講師
　　自然地理学概論

小野原　教　子　　兵庫県立大学経営学部准教授
　　表現文化論　比較文化交流論Ⅱ

垣　内　智　之　　近畿大学非常勤講師
　　中国古典語Ⅰ　中国古典語Ⅱ

嘉　数　次　人　　大阪市立科学館事業担当課長代理
　　博物館展示論

川　端　清　司　　大阪市立自然史博物館館長
博物館展示論

菊　地　　暁　　京都大学人文科学研究所助教
民俗学

木　村　雅　則　　大和大学教育学部准教授
国語科教育法Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ

後　藤　雅　知　　立教大学文学部教授
日本史特講Ⅱ

齊　藤　紀　子　　大阪市立大学非常勤講師
教育相談論a・b

酒　井　美　貴　　大阪市立大学非常勤講師
表現文化講読Ⅲ

佐　藤　義　尚　　大阪市立大学非常勤講師
ギリシア語Ⅰ・Ⅱ

佐　野　正　彦　　大阪電機大学教授
教育制度論b・c

澤　井　浩　一　　大阪市博物館協会事業企画課課長代理
博物館経営論

Jeffrey Lynn Sievert　　大阪市立大学非常勤講師
英語コミュニケーションⅡ

塩　　卓　悟　　大阪市立大学文学部都市文化研究センター非常勤研究員
東洋史講読Ⅱ　東洋史演習Ⅲ

島　﨑　未　央　　大阪市立大学都市研究プラザ博士研究員
日本史特講Ⅳ

白波瀬　達　也　　関西学院大学社会学部 准教授
社会学特講Ⅰ

鈴　木　啓　吾　　毎日新聞大阪本社編集局編集委員
マス・コミュニケーション論Ⅱ

高　井　健　司　　大阪市経済戦略局経営形態担当課長
博物館経営論

髙　谷　哲　也　　鹿児島大学准教授
教育学特講Ⅱ

高　松　みどり　　大阪教育大学非常勤講師
道徳教育の研究a・b

滝　沢　　潤　　大阪市立大学非常勤講師
　　教育学概論Ⅱほか

田　端　拓　哉　　大阪市立大学文学部都市文化研究センター非常勤研究員
　　人間行動学データ解析法Ⅲ

田　間　泰　子　　大阪府立大学教授
　　社会学特講Ⅲ

手　取　義　宏　　大阪教育大学准教授
　　社会科地理歴史科教育法Ⅰ

中　　善　則　　花園大学准教授
　　社会科地理歴史科教育法Ⅱ

中　川　紗　江　　日本学術振興会特別研究員
　　心理学実験演習Ⅰ・Ⅱ

中　條　健　志　　大阪市立大学非常勤講師
　　エチュード・フランコフォーヌ

中　谷　功　治　　関西学院大学文学部教授
　　西洋史特講Ⅰ

中　村　艶　子　　同志社大学准教授
　　言語応用特講

七　沢　　潔　　NHK放送文化研究所上級研究員
　　広報情報論

南　條　佳　代　　仏教大学非常勤講師
　　書道A

西　田　亜希子　　大阪市立大学非常勤講師
　　人権・進路指導の研究a・b

西　村　賀　子　　和歌山県立医科大学教授
　　西洋古典学

西　村　正　男　　関西学院大学教授
　　中国語中国文学概論Ⅱ

西　本　有　逸　　京都教育大学教育学部教授
　　外国語科教育法（英語）

野　村　明　宏　　大谷大学文学部准教授
　　社会学特講Ⅱ

早　瀬　　篤　　京都大学非常勤講師
　　哲学史通論Ⅰ

原　　英　一　東京女子大学大学院人間科学研究所教授
　英米文化特講

東　山　篤　規　立命館大学大学院文学研究科教授
　心理学特講Ⅰ

日比野　　啓　成蹊大学文学部教授
　表象文化論特論

廣　瀬　真　琴　鹿児島大学准教授
　教育課程論c

深　見　俊　崇　島根大学准教授
　教育メディア論

福　田　敦　志　大阪教育大学准教授
　特別活動論a　教育方法論

藤　岡　　穣　大阪大学教授
　美術史通論

古　見　文　一　日本学術振興会特別研究員
　発達・学習論a

前　田　洋　子　大阪市立大学非常勤講師
　博物館資料論

松　田　いりあ　大阪市立大学非常勤講師
　国際ジャーナリズム論Ⅰ・Ⅱ

松　本　保　宣　立命館大学教授
　東洋史特講Ⅰ

豆　谷　浩　之　大阪歴史博物館学芸課長代理兼学芸第２係長
　博物館資料保存論

水　谷　　隆　大阪女子短期大学幼児教育科准教授
　国語国文学特論　国語国文学特論演習

南　　直　人　京都橘大学教授
　西洋史特講Ⅱ

宮　橋　小百合　和歌山大学准教授
　教育方法論b

村　井　尚　子　大阪樟蔭大学講師
　教育基礎論a

村　井　良　介　神戸大学地域連携推進室特命講師
　日本史通論

村　田　正　博　　大阪市立大学非常勤講師
　　大阪の地域・文化実践演習

森　谷　義　哉　　兵庫県立大学准教授
　　人間行動学データ解析法Ⅰｂ

山　口　　覚　　関西学院大学文学部 教授
　　地理学特講Ⅱ

山　﨑　洋　子　　福山平成大学教授
　　教育学特講Ⅰ

湯　浅　治　久　　専修大学文学部教授
　　日本史特講Ⅰ

吉　田　　健　　常磐会学園大学国際こども教育学部教授
　　博物館情報・メディア論

吉　村　智　博　　大阪人権博物館学芸員
　　地図学

林　　嵐　娟　　近畿大学非常勤講師
　　言語比較論演習

Raymond G. Langley　　大分大学准教授
　　比較文化交流論Ⅱ

脇　坂　真　弥　　大谷大学文学部准教授
　　哲学特講Ⅱ

渡　辺　拓　也　　大阪市立大学都市文化研究センター研究員
　　文学部基礎演習

渡　部　義　弥　　大阪市立科学館企画広報担当課長
　　博物館経営論

（上方文化講座）

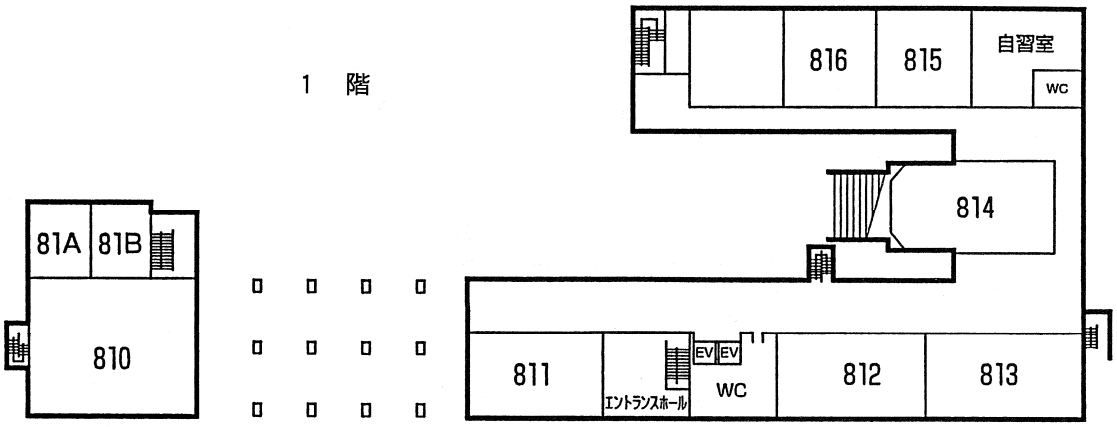
竹本　津駒大夫　　国立文楽劇場技芸員（太夫）

鶴　澤　清　介　　国立文楽劇場技芸員（三味線）

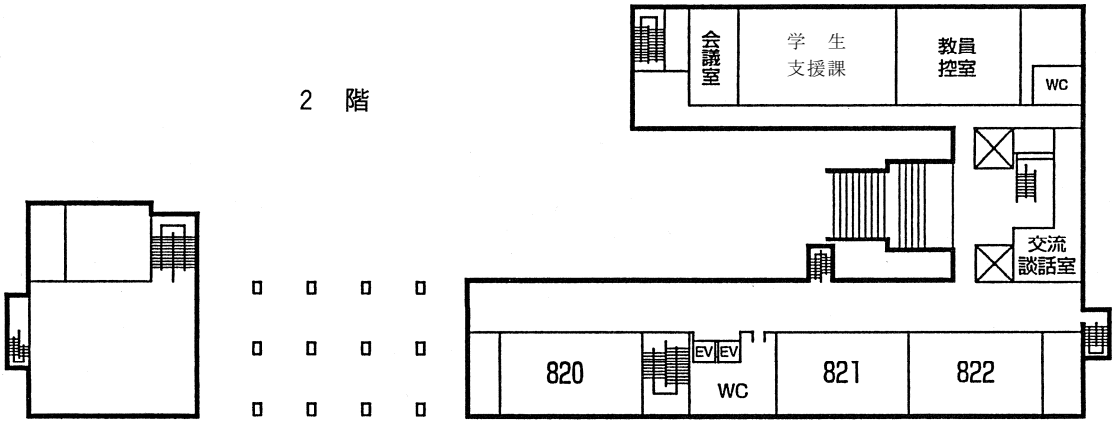
桐　竹　勘十郎　　国立文楽劇場技芸員（人形遣い）

全 学 共 通 教 育 棟

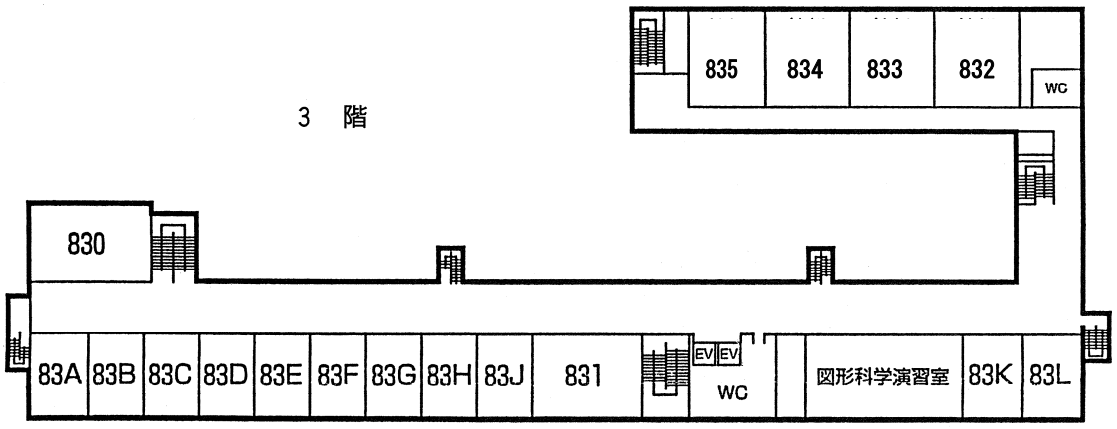
1 階



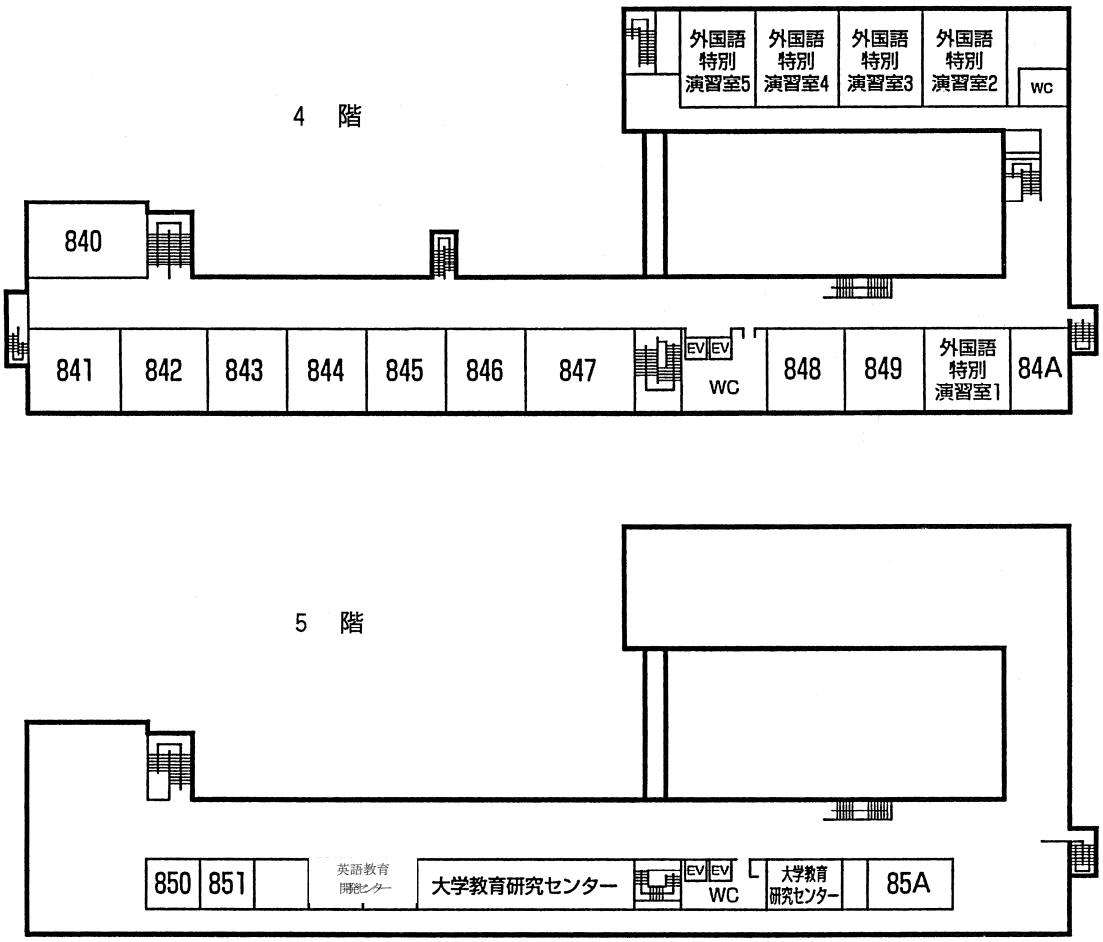
2 階



3 階

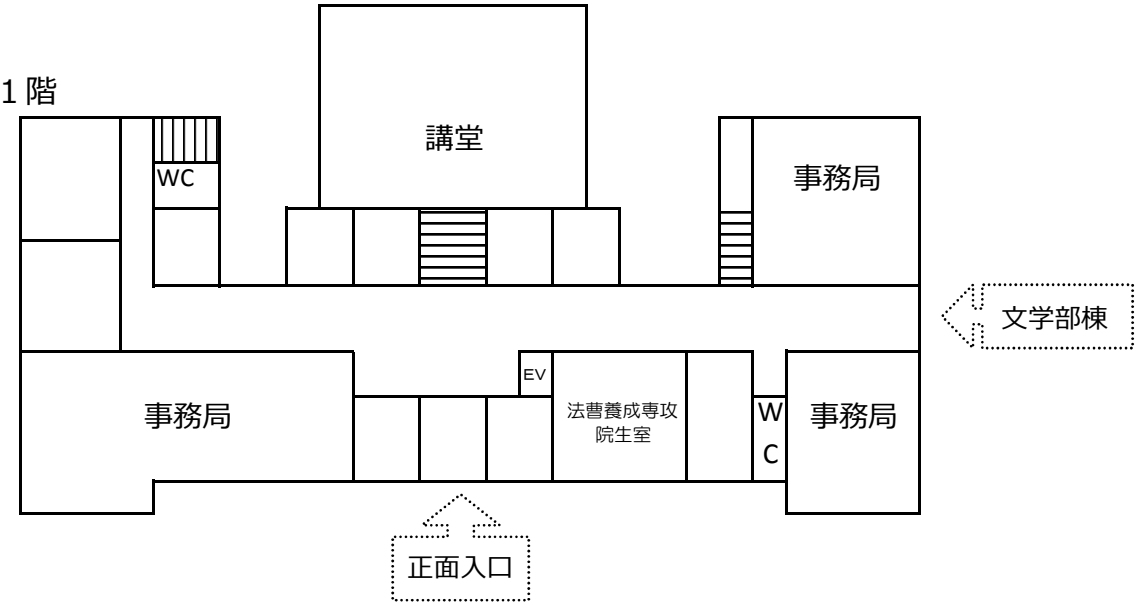


各　教　室　見　取　図

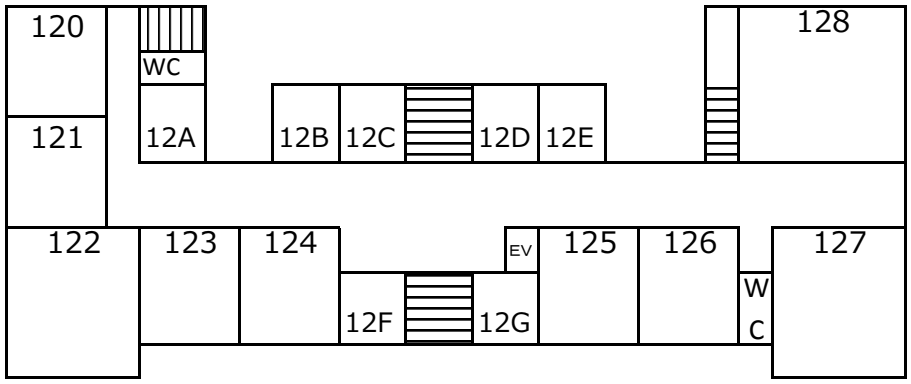

4　階
外国語特別演習室5
外国語特別演習室4
外国語特別演習室3
外国語特別演習室2
WC
840
841
842
843
844
845
846
847
EV
EV
WC
848
849
外国語特別演習室1
84A
5　階
850
851
英語教育開発センター
大学教育研究センター
EV
EV
WC
大学教育研究センター
85A

1号館 教室見取図

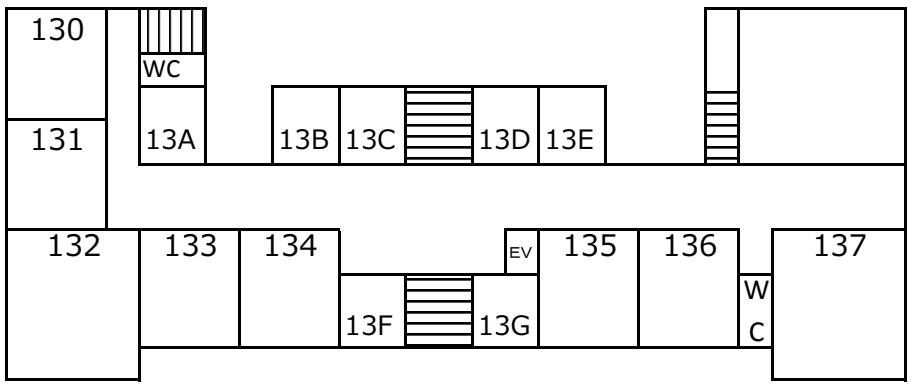
1階



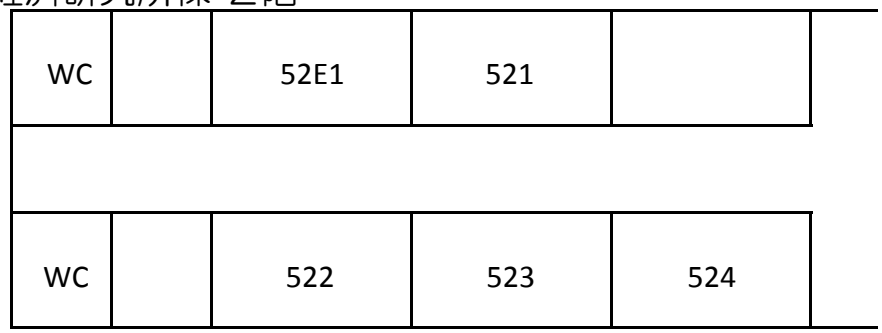
2階



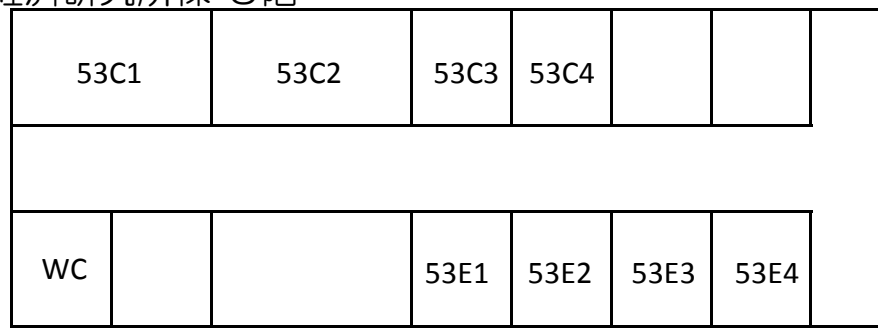
3階



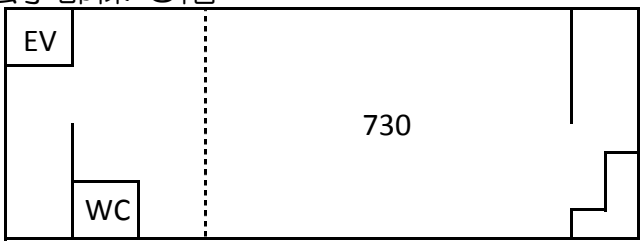
経済研究所棟 ２階



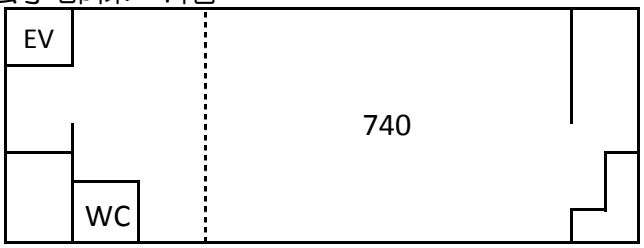
経済研究所棟 ３階



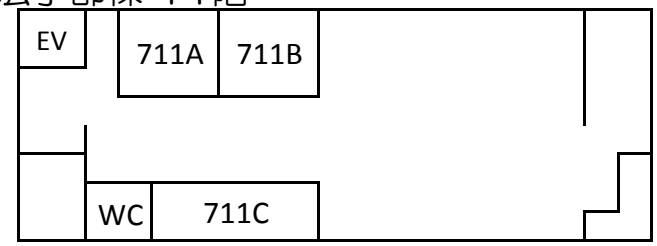
法学部棟 ３階



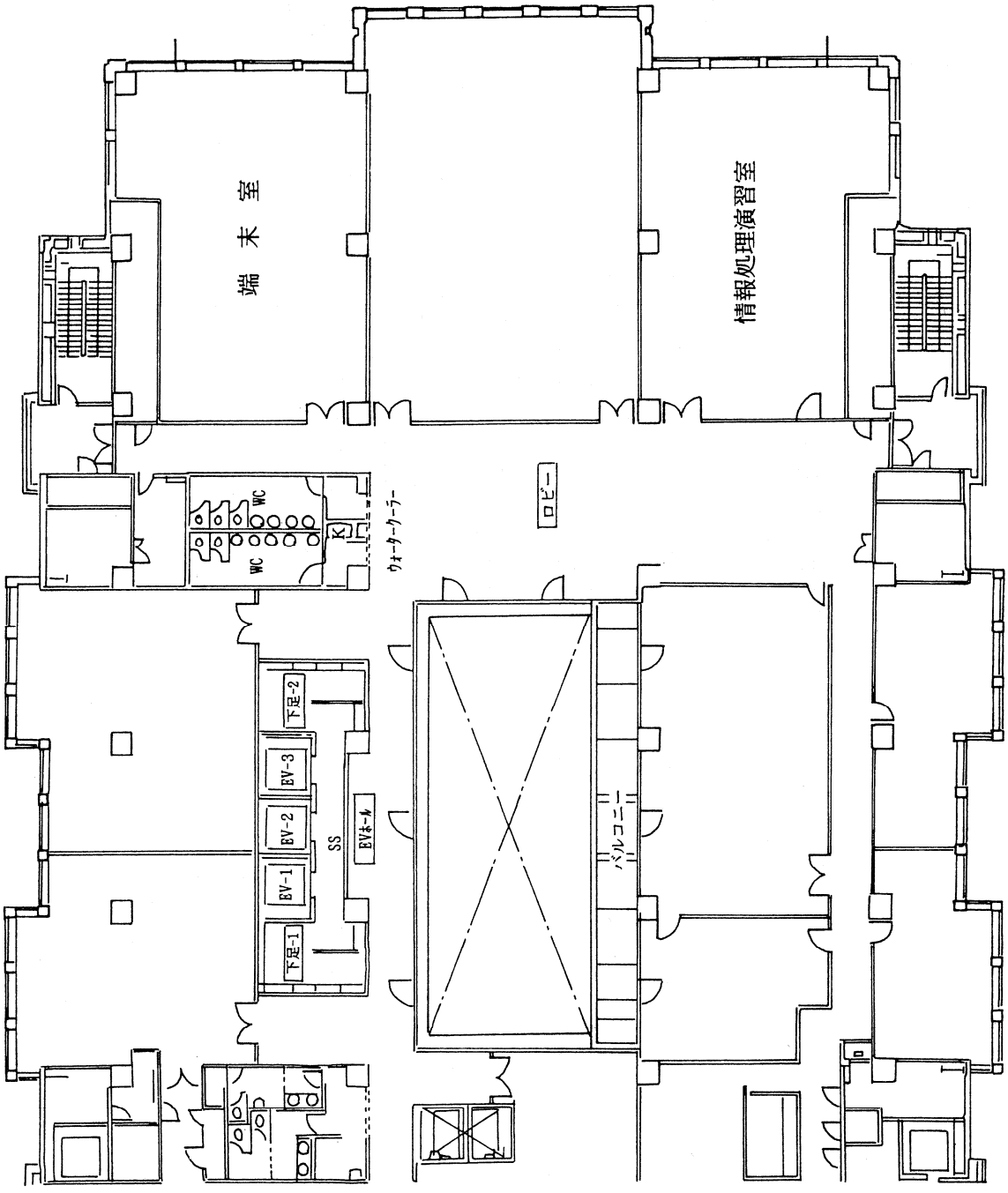
法学部棟 ４階



法学部棟 １１階



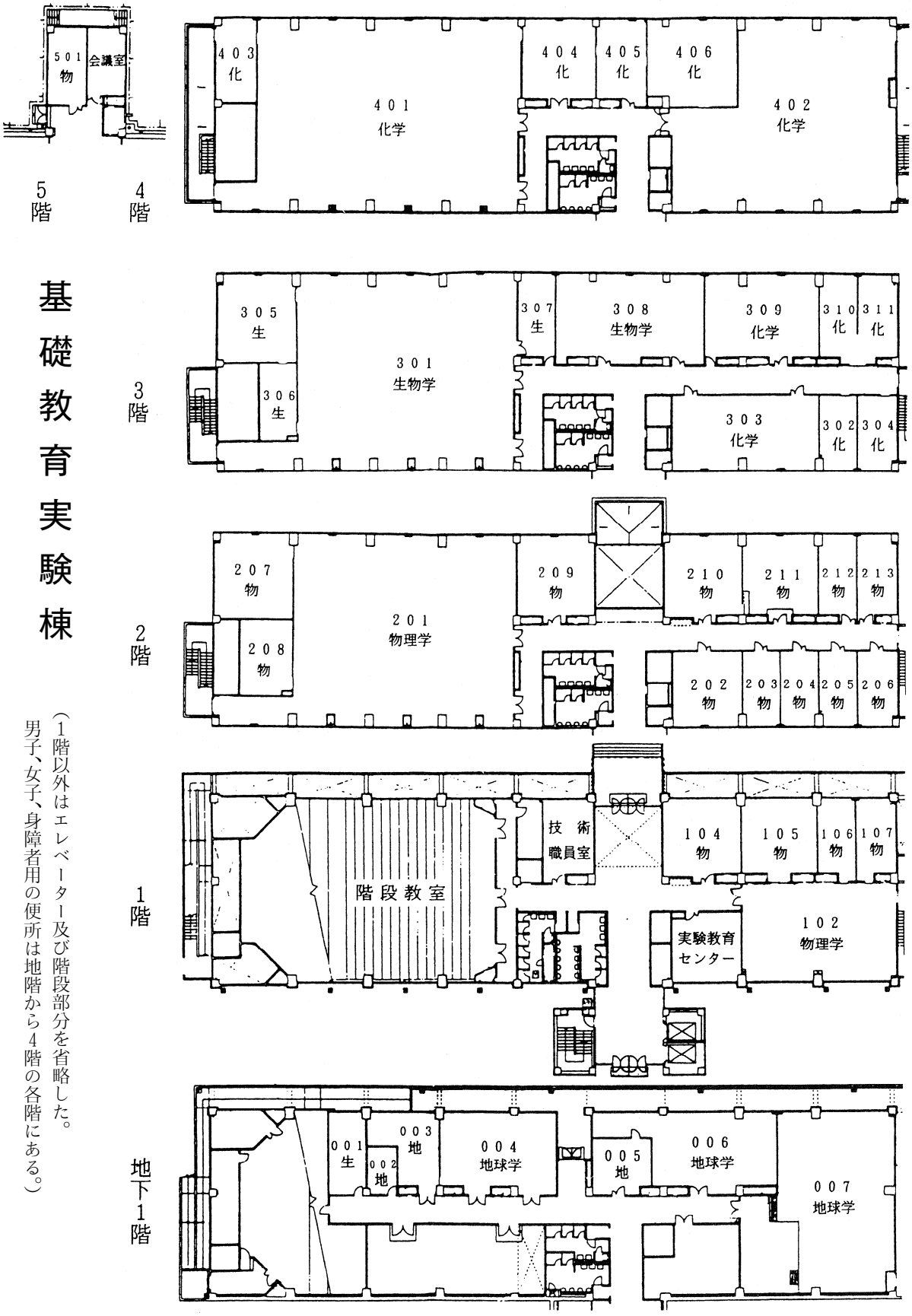
学術情報総合センター　９Ｆ

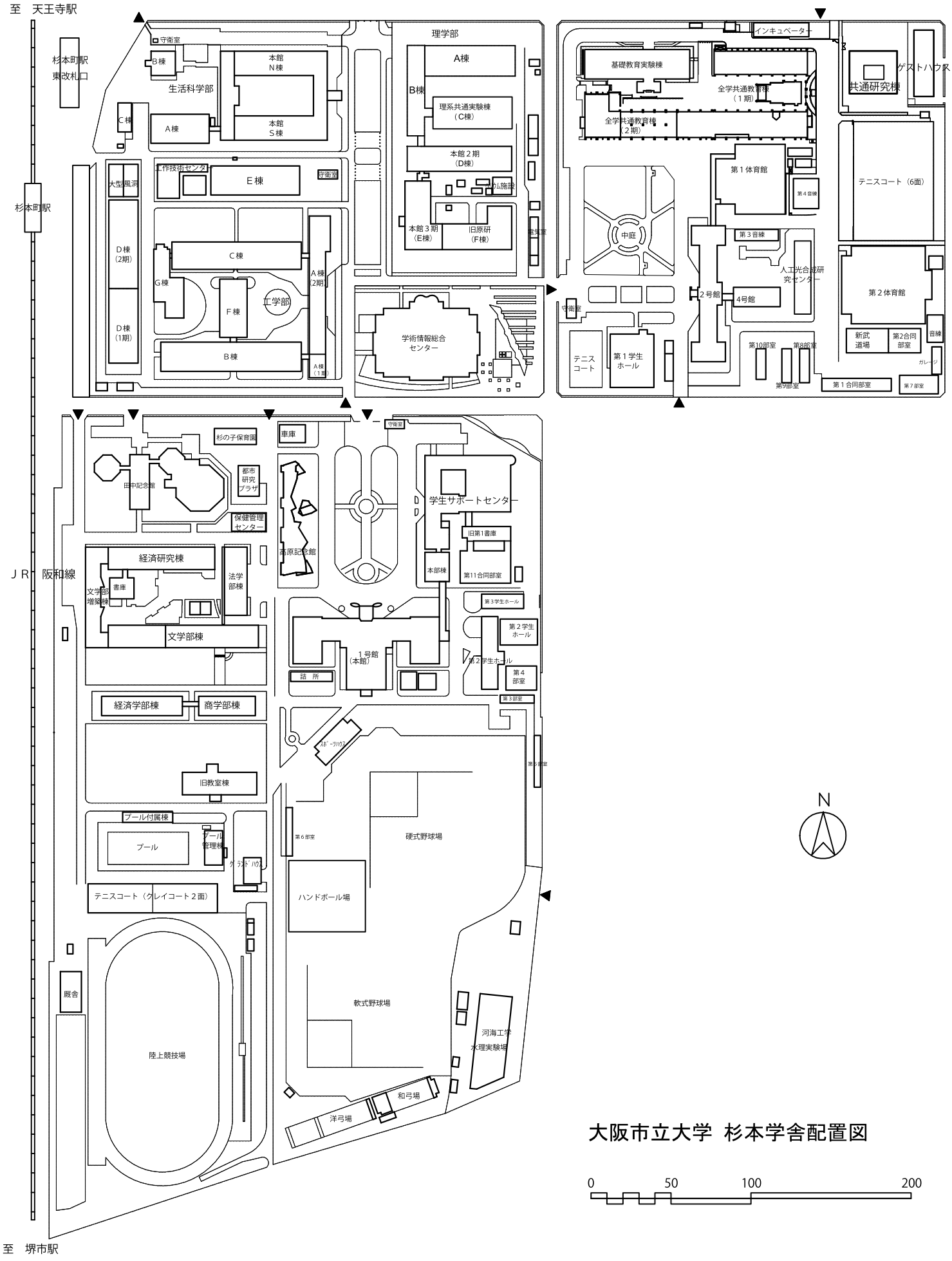


（西側省略）

基礎教育実験棟

（1階以外はエレベーター及び階段部分を省略した。
男子、女子、身障者用の便所は地階から4階の各階にある。）





大阪市立大学　杉本学舎配置図